

学位論文

川西民族走廊・チベット語方言研究

鈴木博之

2007

Étude de la dialectologie tibétaine dans le couloir ethnique à l'ouest du Sichuan, thèse de doctorat, 2007, écrite par Hiroyuki SUZUKI

༡༡།སི་ཁྲིན་རྒྱལ་ཁྲིམས་མི་རིགས་ལུང་པའི་བོད་ཀྱི་ཡུལ་རྒྱུད་ལ་དཔྱད་པ། ༢༠༠༢མེ་པག་ལོ།
 ཆོ་དབང་འགྱུར་མེད་ཀྱིས་བརྩམས།

《川西民族走廊 藏語方言研究》博士論文、2007年、鈴木博之/著

まえがき

本論文は、チベット文化圏の中でもっとも言語間の関係が錯綜している地域の1つである川西民族走廊に分布するチベット語方言について、本格的に地域を単位に取り組むおそらく初めての研究である。

川西民族走廊は数多くの少数言語である川西走廊諸語が分布し、最近になって認知されるようになったものも少なくない。その多くはチベット文化圏に属する地域であり、現在大部分の話者がチベット族に分類されている。最近の研究動向に見る主な関心は、その川西走廊諸語に向けられてきた。同地域におけるチベット語の方言にも多様性が見られることは予測できることであり、それはチベット人の「1つの地方に1つの言語がある」という表現からも分かることである。ところが、予測される方言の複雑さに対して、これまでに具体的にあるいは言語学的に解説され記述されたことは、ないといっても過言ではない。

筆者は、4年という短い間の現地調査において、必然と偶然と幸運と縁によって、チベット語と川西走廊諸語あわせて100地点程度の変種に出会うことができ、程度の差はあれ記述研究に取り組み、資料を収集してきた。チベット語に限ってみれば、これまでのチベット言語学において作り上げられてきた既成の常識的事項に従わない「変わった」方言を多数見出した。考えてみれば、先行研究に与えられてきた方言資料があまりにも貧しいことに由来する見方である。しかし確かに、筆者が記録した方言の中には、特別に際立つ特徴を持っているものがあまりにも多い。

本論文では、このような状況にかんがみ、現地調査に基づいて各種チベット語方言の音声・語彙の情報を提供し、その特徴と分布についての試論を行うことにした。ただし、論じることは少ない。今の問題は、「どんな方言がどこに存在するのか」ということに答えることである。分析には類型的分析・地理的分析・歴史的分析の3点を柱にすえる。その具体的方法には、これまでの研究にあまり見られない言語地図を用いた方言地理学的手法を積極的に導入した。そして、川西走廊諸語とチベット語方言の相互関係にも積極的に触れた。方言資料として、別冊に数種のチベット語方言の語彙を付した。いずれもチベット語方言研究上初めての試みであろう。

川西民族走廊では、チベット語方言もまた川西走廊諸語と同様に危機言語に認定されうるということも、念頭におかなければならない。1方言の記述研究を選択しないのも、このような背景がある。日をおけばチベット語の言語文化が失われてしまい、言語が死滅することは必至である。その流れはたやすく変えられるものではない。ただし、そのような言語を記録することは、今ならできる。

本論文は非常に多くの方言話者の協力によって成り立っている。次に紹介し、感謝の意を表するものである。

調査協力者のみなさん

肖松英さん
肖天玉さん
アドン [A-grong] さん
ティメ ['Chi-med] さん
ヤンジェン・ラモ [dByangs-can Lha-mo] さん
ラモチェ [Lha-mo-skyid] さん
ジャンヤン・ドマ ['Jams-dbyangs sGrol-ma] さん
ツェワン・チュダ [Tshe-dbang Chos-grags] さん
ワンガ [dBang-dga'] さん
ジャンジン ['Jams-dbyangs dBang-can] さん
クンチョ・プンツォ [Kun-chogs Phun-tshogs] さん
ダワ・タシ [Zla-ba bKra-shis] さん
ドンカ [sGrol-dkar] さん
ダシヨン・ワンモ [sGra-dbyangs dBang-mo] さん
ニマ [Nyi-ma] さん
ウジェン・ツェリン [dBu-rgyan Tshe-ring] さん
ケゾン・ナムジェ [sKal-bzang rNam-rgyal] さん
イヒェ・ワンモ [Ye-shes dBang-mo] さん
ショメ [Zho-ming] さん
トー・ズポ [Grwa bZod-pa] さん
ヨンセー [dByangs-gsal] さん
ヤンジン・ドマ [dByangs-can sGrol-ma] さん
ツェリン・ドマ [Tshe-ring sGrol-ma] さん
アド [A-gro] さん
ロゾン [Blo-bzang] さん
ヨンゾン [dByangs-'dzoms] さん
ヨンチェン [dByangs-chen] さん
デシ [bDe-skyid] さん
ツァンラゾン [Tshang-lha-'dzoms] さん
ケゾン・ラモ [sKal-bzang Lha-mo] さん
サマ [Bya-mo] さん
ツェリン・トンドウ [Tshe-ring Don-grub] さん

ドマ [sGrol-ma] さん
ナンセー・ドマ [gNam-gsal sGrol-ma] さん
ツェリン・ツォモ [Tshe-ring mTsho-mo] さん
アチェン・チュンツォ [A-chen Chos-mtsho] さん
ヤンツォ・ドマ [dByangs-mtsho sGrol-ma] さん
アップ・ペマ [Pad-ma] さん
ダワ・ドマ [Zla-ba sGrol-ma] さん
タンヅィン・ザンモ [bTan-'dzin bZang-mo] さん
ジョンツォ・ドマ [rGya-mtsho sGrol-ma] さん
ツェリン・ラモ [Tshe-ring Lha-mo] さん
タシ・ラモ [bKra-shis Lha-mo] さん
ダワ・ドマ [Zla-ba sGrol-ma] さん
タンディンツォ [rTa-mgrin-mtsho] さん
ツェラ [Tshe-lha] さん
ゲンディン [dGe-'dun] さん
ソナム・ラモ [bSod-nams Lha-mo] さん
イエシェムツォ [Ye-shes-mtsho] さん
ジンバ [sByin-pa] さん
クンガ・ペルジェ [Kun-dga' 'Phel-rgyas] さん
ツェラ [Tshe-lha] さん
サンゾムチェ [gSang-'dzom-skyid] さん
カダ [Kha-grags] さん
ルンドウ・パダン [Lhun-grub dPal-ldan] さん
ロゾン・クンダ [Blo-bzang Kun-grags] さん
カゾン [sKal-bzang] さん
トウンモツォ [Drung-mo-mtsho] さん
カルメイ・サムテン・ジェンツェン [mKhar-rme'u bSam-gtan rGyal-mtshan] さん
タシ・ラモ [bKra-shis Lha-mo] さん
ソナンツォ [bSod-nams-mtsho] さん
サンディシヨ [Sangs-'dus-skyabs] さん
ドゥンドウ ['Brul-'brul] さん
タンディンツォ [rTa-mgrin-mtsho] さん
ドマ [sGrol-ma] さん

ノルツェムゼ [Nor-rtse-mdzes] さん
ソナム・ワンジェ [bSod-nams dBang-rgyal] さん
カモチェ [mKha'-mo-skyid] さん
ドルマ・トンドウプ [sGrol-ma Don-grub] さん
ゴンボジェ [mGon-po-rgyas] さん
ルクラ [Rig-lha] さん
ワンダ [dBang-grags] さん
マチン [rMa-skyid] さん
ドマ・ドラ [sGrol-ma sGrol-lha] さん
ノルブ [Nor-bu] さん
ツェランムツ [Tshe-ring-mtsho] さん
ズグロルマ [sGrol-ma] さん
チェムノン・クラシエス [bKra-shis] さん
カルマ [sKar-ma] さん
ムルマン・ツェリ・メト [dMu-sman Tshe-ring Me-tog] さん
アスマン [A-sman] さん
カンド [mKhar-'gro] さん
ソナム・ジャムツォ [bSod-nams rGya-mtsho] さん
ワンモ [dBang-mo] さん
ブンツォ・ドマ [sGrol-ma] さん
パンディ・ツェラン [Tshe-ring] さん
パンディ・ナムカ [Nam-mkha'] さん
ライク・ドルジ [rDo-rje] さん
シャジャ・ケマ [Shwa-brgya sKar-ma] さん
ラモ・ケマ [Lha-mo sKar-ma] さん
ツェリン [Tshe-ring] さん
ドルジェ・ワンモ [rDo-rje dBang-mo] さん
ツェラン [Tshe-ring] さん
ソナム・ザンモ [bSod-nams bZang-mo] さん
ニマ・タモ [Nyi-ma Lha-mo] さん
ドマ・ラモ [sGrol-ma Lha-mo] さん
ロゾン・タンツィン [Blo-bzang bTan-'dzin] さん
ラワジ [Zla-ba-rgyas] さん

肖軍 [Dug-'dug] さん
ソナ・テンドウ [bSod-nams Don-grub] さん
ヤンゾン [dByangs-'dzoms] さん
ノンブ・ツェリン [Nor-bu Tshe-ring] さん
ドマ [sGrol-ma] さん
ドルジ・ラモ [rDo-rje Lha-mo] さん
テンドウ [Don-grub] さん
ジャンツォ [rGya-mtsho] さん

現地協力者のみなさん

タシ・ラツォ [bKra-shis Lha-mtsho] さん
ケサン・ラモ [sKal-bzang Lha-mo] さん
ガロ [Ngag-lo] さん
ジャムツ [rGya-mtsho] さん
ラモ [Lha-mo] さん
黄海英さん
曾曉敏さん
昌興強さん
大川健三さん
敏秀琮さん
タシ・ドマ [bKra-shis sGrol-ma] さん
シェラムツォ [Shel-lha-mtsho] さん
ダワ・ドマ [Zla-ba sGrol-ma] さん
楊素珍さん
ヤンジン・ラモ [dByangs-can Lha-mo] さん
アガ・ツェリン・タシ [A-sngags Tshe-ring bKra-shis] さん
ユンドウンムツォ [gYung-drun-mtsho] さん
ツティン・ジャンツォ [Tshul-khrims rGya-mtsho] さん
ヤンジン・ラモ [dByangs-chen Lha-mo] さん
テンヅィン・プンツォ [bTan-'dzin Phun-tshogs] さん
ケゾン・ジュメ [sKal-bzang 'Gyur-med] さん
文璽さん
Ellen Bartee さん

もくじ

まえがき	i
調査協力者のみなさん	ii
現地協力者のみなさん	v
広域図：中国における川西民族走廊	xxiii
現地調査について	xxiv
調査地点	xxv
表記に関する注意事項	xxvi
第Ⅰ部 概論	1
第1章 チベット言語学の研究方法	3
1.1 チベット語とその言語学的位置	3
1.2 チベット言語学の方法論	3
1.3 チベット語方言学の先行研究	5
1.3.1 記述的研究	6
1.3.2 歴史的研究	8
1.3.3 方言地理学的研究	9
1.3.4 調査言語学の方法：チベット語の現地調査に際して	10
1.4 川西民族走廊における方言研究	11
1.4.1 川西民族走廊に分布する方言の研究の方法	11
1.4.2 本論文の根幹	14
1.4.3 議論の方法と方向性	16
1.4.4 言語地図の作成	18

第2章 地理と分布言語	19
2.1 川西民族走廊	19
2.1.1 地理と地形	19
2.1.2 歴史上の要点	22
2.2 チベット語	22
2.2.1 伝統的地域区分と方言区分	23
2.2.1.1 伝統的地域区分	23
2.2.1.2 方言区分と新しい問題	24
2.2.2 アムドチベット語	26
2.2.3 カムチベット語	27
2.2.4 その他のチベット語方言群	30
2.2.4.1 ヒャルチベット語	31
2.2.4.2 系統不明/保留の方言群	32
2.2.5 筆者の調査とチベット語方言の分布	32
2.3 川西走廊諸語	35
2.3.1 含まれる言語	35
2.3.2 先行研究	39
2.3.3 筆者の調査	40
第3章 音声分析と記述方法	42
3.1 音声分析及び表記の方法論の必要性	42
3.2 従来の問題点とその解決方法	43
3.2.1 問題点の提示	43
3.2.2 子音	44
3.2.2.1 子音の音素設定	44
3.2.2.2 子音連続	45
3.2.3 二重母音	48
3.2.4 声調	48
3.2.4.1 声調とレジスター	49
3.2.4.2 語声調	51
3.3 採用される記述法	53
3.3.1 子音と母音の表記法	54
3.3.2 超分節音素の表記法	55

第Ⅱ部 本論 57

第4章 各方言別・音声分析と記述 59

4.1	概要	59
4.2	Askyirong 方言（若爾蓋県阿西茸郷）	62
4.2.1	音素一覧	63
4.2.2	方言特徴と具体例	64
4.2.2.1	母音	64
4.2.2.2	単子音	64
4.2.2.3	子音連続	65
4.3	Babzo 方言（若爾蓋県包座郷）	68
4.3.1	音素一覧	69
4.3.2	方言特徴と具体例	70
4.3.2.1	母音	70
4.3.2.2	単子音	70
4.3.2.3	子音連続	71
4.4	gTsangtsa 方言（九寨溝県漳扎鎮達基寺村）	74
4.4.1	音素一覧	75
4.4.2	方言特徴と具体例	76
4.4.2.1	特徴的な音素	76
4.4.2.2	子音連続	76
4.5	Phyugtsi 方言（九寨溝県九寨溝内樹正村）	78
4.5.1	音素一覧	79
4.5.2	方言特徴と具体例	80
4.5.2.1	母音	80
4.5.2.2	単子音	80
4.5.2.3	子音連続	81
4.6	sKyangtshang 方言（松潘県山巴郷）	83
4.6.1	音素一覧	84
4.6.2	方言特徴と具体例	85
4.6.2.1	母音	85
4.6.2.2	単子音	85
4.6.2.3	子音連続	86
4.7	Ketshal 方言（松潘県十里回族郷高屯子村）	88
4.7.1	音素一覧	89

4.7.2	方言特徴と具体例	90
4.7.2.1	母音と緊喉レジスターの現れ	90
4.7.2.2	単子音	90
4.7.2.3	子音連続	91
4.8	Thangskya 方言（松潘県十里回族郷大屯村）	95
4.8.1	音素一覧	96
4.8.2	方言特徴と具体例	97
4.8.2.1	母音	97
4.8.2.2	単子音	97
4.8.2.3	子音連続	98
4.9	rNgawa 方言（阿壩県阿壩鎮）	101
4.9.1	音素一覧	102
4.9.2	方言特徴と具体例	103
4.9.2.1	母音	103
4.9.2.2	単子音	103
4.9.2.3	子音連続	104
4.10	dMarthang 方言（紅原県邛溪鎮）	110
4.10.1	音素一覧	111
4.10.2	方言特徴と具体例	112
4.10.2.1	特徴的な音素	112
4.10.2.2	子音連続	112
4.11	sProsnang 方言（丹巴県中路郷）	116
4.11.1	音素一覧	117
4.11.2	方言特徴と具体例	118
4.11.2.1	母音	118
4.11.2.2	単子音	118
4.11.2.3	子音連続	119
4.12	Sogpho 方言（丹巴県梭坡郷）	122
4.12.1	音素一覧	123
4.12.2	方言特徴と具体例	124
4.12.2.1	母音	124
4.12.2.2	単子音	124
4.12.2.3	子音連続	125
4.13	dGudzong 方言（丹巴県格宗郷）	128

4.13.1	音素一覧	129
4.13.2	方言特徴と具体例	130
4.13.2.1	母音	130
4.13.2.2	単子音	130
4.13.2.3	子音連続	131
4.14	Lhagang 方言（康定県塔公郷）	134
4.14.1	音素一覧	135
4.14.2	方言特徴と具体例	136
4.14.2.1	母音	136
4.14.2.2	単子音	136
4.14.2.3	子音連続	137
4.14.3	補足	140
4.15	Rangakha 方言（康定県新都橋鎮）	141
4.15.1	音素一覧	142
4.15.2	方言特徴と具体例	143
4.15.2.1	母音	143
4.15.2.2	単子音	143
4.15.2.3	子音連続	144
4.16	Grongsum 方言（雅江県祝桑郷）	147
4.16.1	音素一覧	148
4.16.2	方言特徴と具体例	149
4.16.2.1	特徴的な音素	149
4.16.2.2	子音連続	149
4.17	nDappa 方言（稻城県金珠鎮）	151
4.17.1	音素一覧	152
4.17.2	方言特徴と具体例	153
4.17.2.1	母音	153
4.17.2.2	単子音	153
4.17.2.3	子音連続	154
4.18	Sagong 方言（郷城県沙貢郷）	156
4.18.1	音素一覧	157
4.18.2	方言特徴と具体例	158
4.18.2.1	母音	158
4.18.2.2	単子音	158

4.18.2.3	子音連続	159
4.19	gDongsum 方言（郷城県洞松郷）	161
4.19.1	音素一覧	162
4.19.2	方言特徴と具体例	163
4.19.2.1	母音	163
4.19.2.2	単子音	163
4.19.2.3	子音連続	164
4.20	Ragwo 方言（郷城県然烏郷）	167
4.20.1	音素一覧	168
4.20.2	方言特徴と具体例	169
4.20.2.1	母音	169
4.20.2.2	単子音	169
4.20.2.3	子音連続	170
4.21	Rwata 方言（郷城県熱打郷）	172
4.21.1	音素一覧	173
4.21.2	方言特徴と具体例	174
4.21.2.1	母音	174
4.21.2.2	単子音	174
4.21.2.3	子音連続	175
4.22	sDerong 方言（得榮県松麦鎮）	177
4.22.1	音素一覧	178
4.22.2	方言特徴と具体例	179
4.22.2.1	特徴的な音素	179
4.22.2.2	子音連続	179
4.23	rGyalthang 方言（香格里拉県大中甸郷）	181
4.23.1	音素一覧	182
4.23.2	方言特徴と具体例	183
4.23.2.1	母音	183
4.23.2.2	単子音	183
4.23.2.3	子音連続	184
4.23.3	補足	186
4.24	Nyishe 方言（香格里拉県尼西郷）	187
4.24.1	音素一覧	188
4.24.2	方言特徴と具体例	189

4.24.2.1	特徴的な音素	189
4.24.2.2	子音連続	189
4.25	Yungling 方言（徳欽県雲嶺郷）	191
4.25.1	音素一覧	192
4.25.2	方言特徴と具体例	193
4.25.2.1	母音	193
4.25.2.2	単子音	193
4.25.2.3	子音連続	194
4.26	Budy 方言（維西県巴迪郷）	196
4.26.1	音素一覧	197
4.26.2	方言特徴と具体例	198
4.26.2.1	母音	198
4.26.2.2	単子音	198
4.26.2.3	子音連続	199
4.26.3	補足	202
第5章	類型的分析と地理的分析	203
5.1	類型的特徴の分析方法	203
5.1.1	主な類型的特徴	203
5.1.2	数詞を用いた事例研究	205
5.1.2.1	蔵文口蓋音字に対応するそり舌音形式	205
5.1.2.2	蔵文足字 y を含む形式	209
5.1.2.3	きりの悪い数字の形態	210
5.1.2.4	蔵文に対応しない形態	211
5.1.2.5	数詞から見る類似点	212
5.2	川西民族走廊のチベット語諸方言の基本的類型特徴	213
5.2.1	子音連続のパターン	213
5.2.2	有声非共鳴音の現れ	214
5.2.3	超分節音素の存在とそのパターン	215
5.3	蔵文から見る類型的特徴の分析とその地理的分布	216
5.3.1	蔵文有声閉鎖音字対応音	216
5.3.1.1	<i>du ba</i> 「煙」	217
5.3.1.2	<i>bod</i> 「チベット人」	218
5.3.1.3	<i>brag</i> 「岩」	219
5.3.1.4	<i>rdo</i> 「石」	220

5.3.2	藏文非共鳴有声音字対応音	221
5.3.2.1	<i>za ma</i> 「ごはん」	221
5.3.2.2	<i>bzang</i> 「美しい/よい」	222
5.3.3	藏文 sh/zh 対応音	223
5.3.3.1	<i>zho</i> 「ヨーグルト」	224
5.3.3.2	<i>bzhi</i> 「4」	225
5.3.3.3	<i>sha</i> 「肉」	226
5.3.3.4	<i>shing</i> 「木、薪」	227
5.3.3.5	論点	228
5.3.4	藏文 P 対応音	229
5.3.4.1	<i>spu</i> 「毛」	230
5.3.4.2	<i>lpags pa</i> 「皮」	230
5.3.4.3	<i>phag</i> 「ぶた」	231
5.3.4.4	<i>'phen</i> 「投げる」	232
5.3.4.5	<i>dbugs</i> 「空気」	232
5.3.4.6	<i>sbal ba</i> 「蛙」	233
5.3.4.7	<i>mi</i> 「人」	234
5.3.4.8	<i>med</i> 「ない」	235
5.3.5	藏文 Py 対応音	236
5.3.5.1	<i>phye</i> 「開ける」	237
5.3.5.2	<i>bya</i> 「鶏」	238
5.3.5.3	<i>spyang ku</i> 「狼」	239
5.3.5.4	<i>sbyong</i> 「学ぶ」	240
5.3.5.5	<i>dpyid ka</i> 「春」	241
5.3.5.6	<i>dbyar kha</i> 「夏」	242
5.3.6	藏文 Ky 対応音	243
5.3.6.1	<i>khyi</i> 「犬」	244
5.3.6.2	<i>rgya</i> 「漢族」	245
5.3.6.3	<i>skyid po</i> 「幸せな」	246
5.3.7	藏文 Pr 対応音	247
5.3.7.1	<i>phrag pa</i> 「肩」	248
5.3.7.2	<i>brang</i> 「胸」	249
5.3.7.3	<i>sprin</i> 「雲」	250
5.3.7.4	<i>sbrul</i> 「蛇」	251

5.3.7.5	<i>dbral</i> 「裂く」	252
5.3.8	藏文 Kr 対応音	253
5.3.8.1	<i>khrag</i> 「血」	254
5.3.8.2	<i>gri</i> 「ナイフ」	255
5.3.8.3	<i>skra</i> 「髪」	256
5.3.9	藏文 C 対応音	257
5.3.9.1	<i>chu</i> 「水」	258
5.3.9.2	<i>ja</i> 「茶」	259
5.3.10	藏文 w 対応音	260
5.3.10.1	<i>wa</i> 「きつね」	260
5.3.10.2	<i>zhwa</i> 「帽子」・ <i>rtswa</i> 「草」	261
5.3.11	藏文 l 対応音	262
5.3.11.1	<i>lag pa</i> 「手」	262
5.3.11.2	<i>gling</i> 「牛」・ <i>rlung</i> 「風」・ <i>bla ma</i> 「ラマ」	263
5.3.11.3	<i>lha</i> 「神」	264
5.3.12	藏文 y 対応音	265
5.3.12.1	<i>yar</i> 「上」	265
5.3.12.2	<i>g.yag</i> 「ヤク」	266
5.3.13	藏文 a(C) 対応音	267
5.3.13.1	<i>sa</i> 「地」	268
5.3.13.2	<i>phag</i> 「ぶた」	269
5.3.13.3	<i>skad</i> 「声」	270
5.3.13.4	<i>khab</i> 「針」	271
5.3.14	藏文 o(C) 対応音	272
5.3.14.1	<i>so</i> 「歯」	273
5.3.14.2	<i>bod</i> 「チベット (人)」	274
5.3.14.3	<i>mgyogs pa</i> 「速い」	275
5.3.15	藏文対応形式を基準にした地図から見る総合的考察	276
5.4	音素から見る類型的特徴の分析とその地理的分布	280
5.4.1	口蓋垂閉鎖音	280
5.4.2	無声唇歯摩擦音	282
5.4.3	無声鼻音	283
5.4.4	硬口蓋閉鎖音 2 種	285
5.4.5	硬口蓋摩擦音 2 種	287

5.4.6	/r/と/z/の共存	289
5.4.7	/r/と/s/の共存	290
5.4.8	後舌半狭非円唇母音/ɤ/	291
5.5	語形式とその地理的分布の考察	292
5.5.1	「米」 <i>'bras</i>	294
5.5.2	「8」 <i>brgyad</i>	295
5.5.3	「橋」 <i>zam pa</i>	296
5.5.4	「雲」 <i>sprin</i>	297
5.5.5	「花」 <i>me tog</i>	298
5.5.6	「葉」 <i>lo ma</i>	300
5.5.7	「11」 <i>bcu gcig</i>	302
5.5.8	「12」 <i>bcu gnyis</i>	303
5.5.9	「16」 <i>bcu drug</i>	304
5.5.10	「目」 <i>mig</i>	305
5.5.11	「うさぎ」 <i>ri bong / yos</i>	306
5.5.12	「猿」 <i>spre'u / spre'l</i>	308
5.5.13	「魚」 <i>nya</i>	309
5.5.14	「靴」 <i>lham</i>	310
5.5.15	「今日」 <i>de ring</i>	312
5.5.16	「昨日」 <i>kha rtsang</i>	313
5.5.17	「明日」 <i>sang nyin</i>	314
5.5.18	「身につける」 <i>gon / gyon</i>	315
5.5.19	「猫」 <i>zhi mi / byi mi / byi la / zhum bu</i>	316
5.5.20	「犬」 <i>khyi</i>	318
5.5.21	「おすぶた」 <i>pho phag / phag pho</i>	319
5.5.22	「子ぶた」 <i>phag phrug</i>	321
5.5.23	「森」 <i>nags</i>	323
5.5.24	「友人」 <i>grog po / rog po / shag po</i>	325
5.5.25	「火」 <i>me</i>	326
5.5.26	「右」 <i>g.yas</i>	327
5.5.27	「よい」 <i>yag po / bzang po</i>	328
5.5.28	「もの」 <i>ca lag</i>	329
5.5.29	「月」 <i>zla ba</i>	330

5.5.30	「黒テント」 <i>sbra</i>	332
5.5.31	「唐辛子」 <i>si pan</i>	333
5.5.32	「とうもろこし」 <i>ma rmog</i>	335
5.5.33	「飛ぶ」 <i>'phur</i>	336
5.5.34	「子供」 <i>phru gu / byis pa</i>	337
5.5.35	「顔」 <i>ngo / kha ngo / gdong</i>	339
5.5.36	「虹」 <i>'ja' / 'ja' tshon</i>	340
5.5.37	「肉まん」 <i>mog mog</i>	341
5.5.38	「青稞（裸麦の一種）」 <i>nas</i>	342
5.5.39	「娘」 <i>bu mo</i>	344
5.5.40	「太陽」 <i>nyi ma</i>	345
5.5.41	語形式を基準にした地図から見る総合的考察	346
5.6	川西走廊諸語におけるチベット語借用語/地域語形式	349
5.6.1	ダバ語	349
5.6.2	スタウ語	352
5.6.3	ゲシツァ語	354
5.6.4	四土ギャロン語	356
5.6.5	ペマ語	357
5.6.6	本節のまとめ	359
5.7	本章のまとめ	360
第 6 章	歴史的分析	362
6.1	歴史的分析の方法	362
6.1.1	丁種本《西番譯語》	363
6.1.2	各種丁種本《西番譯語》の序文	365
6.1.3	丁種本《西番譯語》記録言語の再構の方法	367
6.2	《松潘譯語》	370
6.2.1	《松潘譯語》記録言語が示す音韻特徴	371
6.2.1.1	蔵文 sh/zh 対応音	371
6.2.1.2	音節末の鼻音の現れ	372
6.2.1.3	前鼻音の現れ	373
6.2.2	《松潘譯語》記録言語が示す語彙特徴	373
6.2.3	現代方言における分布	376
6.3	《木坪譯語》	381

6.3.1	《木坪譯語》記録言語が示す音韻特徴	381
6.3.1.1	蔵文-a#/-a' 対応形式	381
6.3.1.2	蔵文 Py 対応形式	382
6.3.1.3	蔵文初頭子音 C 対応形式	382
6.3.1.4	蔵文 sh/zh 対応形式	383
6.3.1.5	蔵文足字 r 対応形式	383
6.3.1.6	蔵文摩擦音字の有声性	384
6.3.1.7	漢字の鼻音声母を用いて表される子音連続	384
6.3.2	《木坪譯語》記録言語が示す語彙特徴	386
6.4	《打箭爐譯語》	389
6.4.1	《打箭爐譯語》記録言語が示す音韻特徴	389
6.4.1.1	前鼻音の現れ	389
6.4.1.2	蔵文足字 r 対応形式	390
6.4.1.3	蔵文 Py 対応形式	390
6.4.1.4	蔵文-ar 対応形式	391
6.4.2	《打箭爐譯語》記録言語が示す語彙特徴	391
6.4.3	現代方言における分布	392
6.5	《木里譯語》	397
6.5.1	《木里譯語》記録言語が示す音韻特徴	397
6.5.1.1	音節末鼻音の現れ	397
6.5.1.2	蔵文足字 y 対応音	398
6.5.1.3	蔵文足字 r 対応音	399
6.5.2	《木里譯語》記録言語が示す語彙特徴	399
6.5.2.1	広範囲の方言で見られる特徴	399
6.5.2.2	特定の方言に限定的に見られる特徴	400
6.5.3	対応形式をもつ方言の分布概要図	402
6.6	本章のまとめ	403
参考文献		405
参考資料		416

地 図 も く じ

1.1	中国側のチベット語方言の調査地点	14
2.1	川西民族走廊	20
2.2	川西民族走廊模式図と「九香線」	21
2.3	チベット語方言の分布地点	33
2.4	川西走廊諸語の記録地点	40
4.1	本章で扱う方言の分布位置	59
4.2	若爾蓋県阿西茸郷の位置	62
4.3	若爾蓋県包座郷の位置	68
4.4	九寨溝県漳扎鎮達基寺村の位置	74
4.5	九寨溝県九寨溝内樹正村の位置	78
4.6	松潘県山巴郷の位置	83
4.7	松潘県十里回族郷高屯子村の位置	88
4.8	松潘県十里回族郷大屯村の位置	95
4.9	阿壩県阿壩鎮の位置	101
4.10	紅原県邛溪鎮の位置	110
4.11	丹巴県中路郷の位置	116
4.12	丹巴県梭坡郷の位置	122
4.13	丹巴県格宗郷の位置	128
4.14	康定県塔公郷の位置	134
4.15	康定県新都橋鎮の位置	141
4.16	雅江県祝桑郷の位置	147
4.17	稻城県金珠鎮の位置	151
4.18	郷城県沙貢郷の位置	156
4.19	郷城県洞松郷の位置	161
4.20	郷城県然烏郷の位置	167
4.21	郷城県熱打郷の位置	172

4.22	得榮県松麦鎮の位置	177
4.23	香格里拉県大中甸郷の位置	181
4.24	香格里拉県尼西郷の位置	187
4.25	徳欽県雲嶺郷の位置	191
4.26	維西県巴迪郷の位置	196
5.1	「4」の初頭子音言語地図	206
5.2	「20」の第2音節初頭子音言語地図	207
5.3	「1」の初頭子音言語地図	208
5.4	「80」の初頭子音言語地図	209
5.5	<i>du ba</i> の初頭子音言語地図	217
5.6	<i>bod</i> の初頭子音言語地図	218
5.7	<i>brag</i> の初頭子音言語地図	219
5.8	<i>rdo</i> の初頭子音言語地図	220
5.9	<i>za ma</i> の初頭子音有声性言語地図	221
5.10	<i>bzang</i> の初頭子音有声性言語地図	222
5.11	<i>zho</i> の初頭子音言語地図	224
5.12	<i>bzhi</i> の初頭子音言語地図 (=図 5.1)	225
5.13	<i>sha</i> の初頭子音言語地図	226
5.14	<i>shing</i> の初頭子音言語地図	227
5.15	<i>spu</i> の初頭子音言語地図	230
5.16	<i>phag</i> の初頭子音言語地図	231
5.17	<i>sbal ba</i> の初頭子音言語地図	233
5.18	<i>mi</i> の初頭子音言語地図	234
5.19	<i>med</i> の初頭子音言語地図	235
5.20	<i>phye</i> の初頭子音言語地図	237
5.21	<i>bya</i> の初頭子音言語地図	238
5.22	<i>spyang ku</i> の初頭子音言語地図	239
5.23	<i>sbyong</i> の初頭子音言語地図	240
5.24	<i>dpyid ka</i> の初頭子音言語地図	241
5.25	<i>dbyar kha</i> の初頭子音言語地図	242
5.26	<i>khyi</i> の初頭子音言語地図	244
5.27	<i>rgya</i> の初頭子音言語地図	245
5.28	<i>skyid po</i> の初頭子音言語地図	246

5.29	<i>phrag pa</i> の初頭子音言語地図	248
5.30	<i>brang</i> の初頭子音言語地図	249
5.31	<i>sprin</i> の初頭子音言語地図	250
5.32	<i>sbrul</i> の初頭子音言語地図	251
5.33	<i>dbral</i> の初頭子音言語地図	252
5.34	<i>khrag</i> の初頭子音言語地図	254
5.35	<i>gri</i> の初頭子音言語地図	255
5.36	<i>skra</i> の初頭子音言語地図	256
5.37	<i>chu</i> の初頭子音言語地図	258
5.38	<i>ja</i> の初頭子音言語地図	259
5.39	<i>wa</i> の初頭子音言語地図	260
5.40	<i>lag pa</i> の初頭子音言語地図	262
5.41	<i>lha</i> の初頭子音言語地図	264
5.42	<i>yar</i> の初頭子音言語地図	265
5.43	<i>g.yag</i> の初頭子音言語地図	266
5.44	<i>sa</i> の母音言語地図	268
5.45	<i>phag</i> の母音言語地図	269
5.46	<i>skad</i> の母音言語地図	270
5.47	<i>khab</i> の母音言語地図	271
5.48	<i>so</i> の母音言語地図	273
5.49	<i>bod</i> の母音言語地図	274
5.50	<i>mgyogs pa</i> の母音言語地図	275
5.51	口蓋垂閉鎖音の有無についての言語地図	280
5.52	唇歯摩擦音の有無の言語地図	282
5.53	無声鼻音の有無の言語地図	283
5.54	硬口蓋閉鎖音の有無の言語地図	285
5.55	硬口蓋摩擦音の有無の言語地図	287
5.56	/ɾ/と/z/共存に関する言語地図	289
5.57	/ɾ/と/ʂ/共存に関する言語地図	290
5.58	母音/ɤ/の有無の言語地図	291
5.59	「米」の語形式言語地図	294
5.60	「8」の語形式言語地図	295
5.61	「橋」の語形式言語地図	296
5.62	「雲」の母音言語地図	297

5.63	「花」の語形式言語地図	298
5.64	「葉」の語形式言語地図	300
5.65	「11」の語形式言語地図	302
5.66	「12」の語形式言語地図	303
5.67	「16」の語形式言語地図	304
5.68	「目」の語形式言語地図	305
5.69	「うさぎ」の語形式言語地図	306
5.70	「猿」の語形式言語地図	308
5.71	「魚」の語形式言語地図	309
5.72	「靴」の初頭子音言語地図	310
5.73	「今日」の語形式言語地図	312
5.74	「昨日」の語形式言語地図	313
5.75	「明日」の語形式言語地図	314
5.76	「身につける」の語形式言語地図	315
5.77	「猫」の語形式言語地図	316
5.78	「犬」の語形式言語地図	318
5.79	「おすぶた」の語形式言語地図	319
5.80	「子ぶた」の語形式言語地図	321
5.81	「森」の語形式言語地図	323
5.82	「友人」の語形式言語地図	325
5.83	「火」の語形式言語地図	326
5.84	「右」の語形式言語地図	327
5.85	「よい」の語形式言語地図	328
5.86	「もの」の語形式言語地図	329
5.87	「月」の語形式言語地図	330
5.88	「黒テント」の初頭子音言語地図	332
5.89	「唐辛子」の語形式言語地図	333
5.90	「とうもろこし」の語形式言語地図	335
5.91	「飛ぶ」の語形式言語地図	336
5.92	「子供」の語形式言語地図	337
5.93	「顔」の語形式言語地図	339
5.94	「虹」の語形式言語地図	340
5.95	「肉まん」の語形式言語地図	341
5.96	「青稞」の語形式言語地図	342

5.97 「娘」の語形式言語地図	344
5.98 「太陽」の語形式言語地図	345
6.1 丁種本《西番譯語》の序文に対応する概略地域	367
6.2 「狼」の語形式の分布図	377
6.3 「4」の語形式の分布図	378
6.4 「帽子」の語形式の分布図	379
6.5 「チベット」の語形式の分布図	380
6.6 「鶏」の語形式言語地図	393
6.7 「狼」の語形式の分布図	394
6.8 「4」の語形式の分布図	395
6.9 「魚」の語形式の分布図	396
6.10 《木里譯語》に記録される語形式の対応形式を持つ方言の分布	403

広域図：中国における川西民族走廊



白井 (2006a:ix) より一部改変

現地調査について

本論文の議論には筆者自身による一次資料収集のための現地調査が不可欠である。現地調査は、実際に方言の使用区域に赴き話者から調査する場合と、任意の場所で方言話者を見つけ、その母語を調査する場合の2通りある。いずれにしても、話者から調査する根本的内容は大きく変わることはない。

調査協力者は若年層（20-30代）である場合が大半で、方言間で比較的年代差が出ないように配慮した。現在の調査状況で、年代差がどの程度明瞭に現れるかは判然としていない。今後の研究の進展を待たなければならない。

調査の内容は、簡潔にまとめると以下の4点になる。

1. 基礎語彙の調査

筆者の現地調査における語彙調査は、基本的には華侃 主編(2002)のものをほぼそのまま利用する。華侃 主編(2002)はチベット語方言に特化した語彙集であり、語数は2121語で、適当な語彙数であると判断した。また、周毛草(2003)などの語彙も参照し、調査語彙を拡充した。調査形式が主に媒介言語（漢語を主とし、場合によりチベット語も利用）を用いて、当該言語の形式を答えてもらう形で行った。

2. 基礎構文の調査

構文の調査は媒介言語（漢語、フランス語など）を用いて筆者が作成したものを用いる。基幹として、馬月華(1987)にある基礎200文を参考にした。

3. 民話など口語テキストの収集

口語の長編資料として民話などの収集を行う。

4. 自然発話の収集

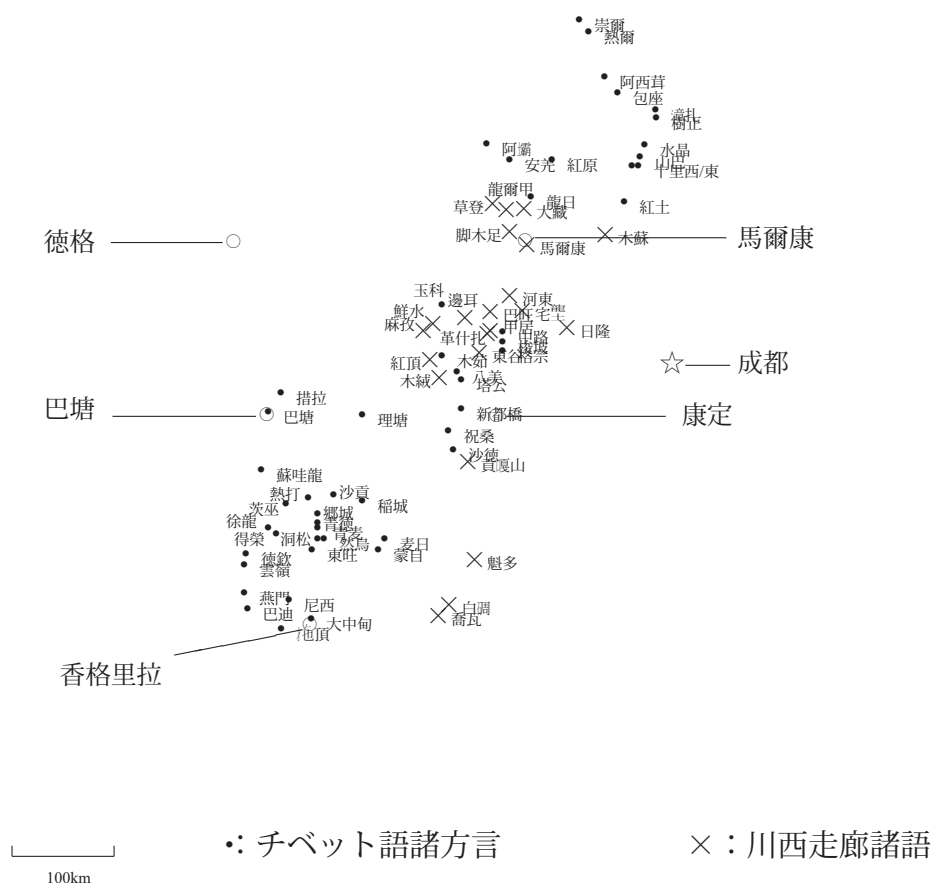
自然発話の観察と記録で、媒介言語を介さない自然な言語の資料である。

本論文では、基本的に利用する資料は語彙情報であり、口語テキストの類は本研究では特に反映されていない。

調査は主に方言が話されている土地で行った。中国での現地調査は2003年7-8月、2004年2-3月、7-9月*、2005年1-2月、7-9月*、10-11月、2006年1-2月、5-6月*、7-9月、10月の計10回行った。そのほか、日本国内での調査も行った。*のついた現地調査については、平成16-20年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者:長野泰彦、課題番号16102001)の援助を受けている。

調査地点

筆者がこれまでに一次資料として収集した、本論文で扱う範囲の川西民族走廊に分布する言語・方言の地理的分布を図示すると、以下ようになる。地図に記載される名称は方言の話される土地の漢語名である。



以上の地図から、川西走廊諸語をはさんでチベット語諸方言の調査地点が南北に分布しているように見える。このことは、川西走廊諸語とチベット語諸方言が重なって用いられる地域について特に調査が不十分であることを意味し、調査地点に濃淡があることによる。玉科を除き全て定住民の言語で、純牧地域の言語は基礎的調査さえ行っていない。

地点の設定は、事前に準備し計画的に選んだものではない。調査地点は意図的に選ばれているのではなく、筆者が実際に赴き調査が可能であった地域に過ぎない。現段階の問題を単純化して述べるならば、未知の状態をより明確にすることが主として扱われなければならない。その文脈において、以上の調査地点は過去の調査地点数に比べれば量的に多いだろう。

表記に関する注意事項

本論文におけるチベット文語つづり（蔵文）の記法

本論文の本文中で蔵文を用いる場合、文字転写には統一して拡張 Wylie 方式を用いる。語や文の形式で引用する場合はイタリックで表示し、特定の蔵文のつづり字形式に言及するときはイタリックにしない（たとえば、「*phag* の *ph*」というような書き方になる）。

先行研究に記載される蔵文形式の言及から引用するときは、これもまた拡張 Wylie 方式に転写しなおし、原文の記法は踏襲しない。

本論文における地名・言語名・方言名表記の方法

本論文では、内容上非常に多くの地名・言語名・方言名が用いられる。本論文では一貫した名称の言及方法を用い、その方針を以下に説明する。

地名の原則的な表記は、定着した読み（たとえば「ラサ」など）が存在しない場合、現時点での中国の行政区分に用いられる名称を漢字表記のまま用いる。原則的には論文末の参考資料の項目に記した各種《地名録》などの資料を用いるが、編纂・出版年代が若干古いため、現在の状況すなわち 2006 年 12 月現在の時点の状況にあわせて書き換える。たとえば改称された「中甸県」はいかなる場合も新名称の「香格里拉県」と書く。また、先行研究に現れる地名と異なりがある場合はそのつど注記する。なお、地名において省名はほとんどの場合省略し、自治州名も略して言及する。たとえば「甘孜藏族自治州」は「甘孜州」などとする。一方、中国の行政区分にはないチベット固有の地域名称については、カナ表記とする。

言語名は原則的にカタカナを用いて表記する。ただし、チベット語を除いて中国の民族名が言語名と等しく用いられる場合は、たとえば羌語、納西語などのように漢字を用いて表記する。また、本論文のいう中国の民族名は、中国の行政上の区分であるものについて述べることを付記しておく。

チベット語方言名の原則的な表記は、すべてローマ字を用いる。読みを限定するカナ表記はつとめて避けた。ローマ字は蔵文に基づきながらも、発音に従って若干の書き換えが行われている。読みはほとんどが一般に知られるものではないから、筆者が規定するのではなく、読者が各自の方法に従って現地音もしくはラサ方言音などで読める余地を残した判断である。また、必要な場合は極力漢語の地名表記を添える場合がある。方言名は原則「鎮/郷」の名称を採用し、必要があるときを除き村の名称は用いない。先行研究が村名を特定している場合でも「鎮/郷」の名称に書き換え、その旨を注記する。本文第 2 章に方言名の一覧があるが、以下参照の簡便の

ため、チベット語方言について、漢語名、ローマ字表記、蔵文を対照して列挙する。

漢語名	方言名	蔵文形式
熱爾	gZari	<i>gza' ri</i>
阿西茸	Askyirong	<i>a skyid rong</i>
包座	Babzo	<i>bab bzo</i>
漳扎	gTsangtsa	<i>gtsang rtsa</i>
樹正	Phyugtsi	<i>phyugs skyid</i>
阿壩	rNgawa	<i>rnga ba</i>
安羌	Anchams	<i>a 'chams</i>
紅原	dMarthang	<i>dmar thang / lung 'dzams</i>
水晶	Amphel	<i>a 'phel</i>
山巴	sKyangtshang	<i>skyang tshang</i>
十里/西	Ketshal	<i>ke tshal</i>
十里/東	Thangskya	<i>thang skya</i>
牟尼	Kusngo	<i>kun sngos</i>
熱務溝	Zhongu	<i>zhong ngu khog</i>
紅土	Hongtu	(漢語名のみ)
玉科	gYokhog	<i>g.yo khog</i>
色爾壩	gSerpa	<i>gser pa</i>
中路	sProsnang	<i>spro snang</i>
梭坡	Sogpho	<i>sog pho</i>
格宗	dGudzung	<i>dgu rdzung</i>
木茹	Morim	<i>mo rims</i>
八美	Bame	<i>ba smad</i>
塔公	Lhagang	<i>lha sgang</i>
新都橋	Rangakha	<i>ra rnga kha</i>
沙德	Sabde	<i>sa bde</i>
祝桑	Grongsum	<i>grong gsum</i>
理塘	Lithang	<i>li thang</i>
巴塘	mBathang	<i>'ba' thang / bya khyung</i>
蘇哇龍	Sowanang	<i>so ba nang</i>
措拉	mTshola	<i>mtsho la</i>
稻城	nDappa	<i>'dab pa / bcings 'grol</i>
蒙自	Mundzin	<i>'bum 'dzin</i>
沙貢	Sagong	<i>sa gong</i>
鄉城	Chaphreng	<i>phyag phreng / sham bha lha</i>
青德	Phrengto	<i>phreng stod</i>
青麥	Phrengme	<i>phreng smad</i>
洞松	gDongsum	<i>gdong gsum</i>

然烏	Ragwo	<i>rag wa</i>
熱打	Rwata	<i>rwa rtags</i>
茨巫	Tsiu	<i>dzi'u</i>
得榮	sDerong	<i>sde rong / sangs smad</i>
徐龍	Zholung	<i>zhol lung</i>
麦日	Muli	<i>mu li / smi li</i>
香格里拉	rGyalthang	<i>sems kyi nyi zla / rgyal thang</i>
大中甸	rGyalthang	<i>rgyal thang</i>
東旺	gTorwa	<i>gtor ba</i>
尼西	Nyishe	<i>nyi shar</i>
巴迪	Budy	<i>dbugs sdod</i>
德欽	nJol	<i>'jol</i>
雲嶺	Yungling	<i>lung gling</i>
燕門	Yanmen	(漢語名のみ)
拖頂	Toding	(漢語名のみ)

第I部

概論

第I部 概論

第1章 チベット言語学の研究方法

第2章 地理と分布言語

第3章 音声分析と記述方法

第1章 チベット言語学の研究方法

1.1 チベット語とその言語学的位置

チベット語は、チベット・ビルマ諸語チベット語支に属する言語である¹。

チベット語はチベット・ビルマ諸語の中でもっとも広範囲に分布し、中国、ネパール、ブータン、インドなどで用いられる。口語としては、このように非常に広く用いられ、また方言差異が大きい。にもかかわらず、その文語はチベット文語（蔵文）という統一的な言語体系を有している。

方言区分は研究者によって一致を見ていない²。中国国内に限って考えると、4種類の方言群を考えることができ、それらは中央、カム、アムド、南部の諸方言である。このうち南部を除いた3種のことを「チベット語3大方言」と呼ぶこともある。しかしながら、「方言」という語をどの意味で用いるかは先行研究によって異なるため、各論文においてその意味を明示的にしておく必要がある。本論文では、先に挙げた「4種類の方言群」というレベルで「方言」という語は用いない。本論文のいう「方言」は、土地の言語に限定して用い、一般的な漢語でいうところの「土語」のことをさす³。先の方言群については、それぞれ中央チベット語、カムチベット語などと呼び、これらは方言群として理解する⁴。

1.2 チベット言語学の方法論

チベット語は、その研究史を概観すると、個別言語としての研究方法が確立しているように見える。その中で、西田(1970:xv)は「チベット言語学」の研究方法を具体的にまとめている。チベット言語学とは、チベット語という言語体系を扱う分野

¹「チベット語支」という区分・名称は西田・孫(1990:277-279)を踏襲している。

²さらに方言と言語についても研究者によって扱いが異なる。ここではこのような問題に深く立ち入ることはしない。

³これは、土語の類を俚言と訳す方がよいという西(1987:184)の言及とは異なった立場である。

⁴このような呼称を用いるとしても、筆者はチベット語の各種方言群が一般的に言及される「チベット語」とは別の言語であるとか、方言群がそれぞれ独立した言語とみなしうるとは考えていない。

である。そして、これと対極的に置かれるのが、チベット語で書かれた文献を対象にするチベット文献学である。

チベット語に関する言語学的研究について、西田(1970:xv)は次の3つを中核的なものとして挙げている。

1. 記述的研究
2. 歴史的研究
3. 比較研究と再構成

現在、チベット言語学は西田(1970)の時代から進歩を遂げ発展を続けているが、以上の観点は変わることなく、研究の中核をなすものである。ただし、その研究方法は劇的に変化があった。かつては不可能に近かったチベット語が用いられる地域での外国人による現地調査がかなりの範囲で容易になり、資料収集を自らの手で行える選択範囲が広がった。それに伴い、各種方言の個人的な記述的研究の可能性が飛躍的に高まった。また、中国国内での調査結果が公開され、提供される情報量も比較にならないほど増加した。かつては先行研究の記述によらなければならなかった点も、現在では可能な範囲で現地調査を行い、一次資料に当たることが可能になっている。そのため、先行研究で扱われることのなかった言語や方言を直接調査を通して知ることができるようになった⁵。

チベット語方言の研究に関しても、それがチベット言語学の研究である限り、以上の研究テーマは変わることがない。現代の方言を研究することは、以上のいずれのテーマにも関わっている。各方言は記述言語学の方法論を通して記述することができ、歴史的研究は過去の多くの研究に見られるように、チベット文語形式との対比を中心として、比較的困難なく行うことができる分野のものである。中には Häsler (1998) のように、記述研究における音声・音韻の記述には口語形式の体系化とともにチベット文語形式との対比も整理するという主張もあり、チベット言語学にとっては、この2種を不可分のものとも考えることもできる。比較研究と再構成は、チベット語に関しては、実際に古期の言語資料を用いる方法論だけでなく、多種多様な現代チベット語諸方言の共時的研究を通時的研究に利用することが、江荻(2002b)をはじめとして広く行われている。

本論文で対象とするチベット語方言に関する研究の場合、格桑居冕・格桑央京(2002: 1-2)は次の3種の言語学的方法論を挙げている。

⁵しかし一方で、過去に記録された方言について、もはやその話者がいなくなってしまったものもある。

1. 描写方言学
2. 歴史方言学
3. 方言地理学

これは方言研究という枠組みの中の方法論に言及したものである。描写方言学とは記述のための方言学、歴史方言学とは比較言語学のための方言学、方言地理学とは地域単位で分析する方言学といえるだろう。より単純に言えば、共時的分析、通時的分析、およびこれら両者の融合、という3点を目指すものと考えられる。格桑居冕・格桑央京(2002)では、3大方言群から1つずつ描写方言学に相当する手法で簡潔な文法記述を行っている。また、各方言群について数種の方言および蔵文を対照することで、歴史的な考察も行っている。ところが一方、方言地理学に相当する分析は見られない。方言地理学的手法がとられているものとしては、江荻(2002b)が指摘するものに瞿靄堂・譚克讓(1983)の研究がある。これによると、方言の分布を地理の観点から見てその歴史を考察するものである。

1.3 チベット語方言学の先行研究

チベット語方言の研究は、先に示した枠組みのいずれも必要とされるが、先行研究を見渡すと、以上に示した方法論でバランスよく研究が進んでいるとは言いがたい状況にある。ここでは、先に述べた方法論に対応するように先行研究をまとめ、かつ問題点を概観する。ここで扱う範囲は、基本的に本論文が議論の対象とする「川西民族走廊⁶」に関係の深いものを中心とし、それ以外のものについては適宜触れるにとどめる。これは、本論文との関わりにおいて現在の研究状況を示すことに留意するためである⁷。当然ながら、本節では最も研究が進んでいるチベット語方言であるラサのチベット語についての研究には必要がない限り触れない。Lhasa 方言の研究と他の方言のものとを平行的に扱うことは適切とはいえないからである⁸。

⁶この詳細は次章で触れる。

⁷全般的な先行研究をよく整理しているものには、西(1986, 1987)やDenwood(1999:21-39)、Zeisler(2004)などがある。

⁸なお、ラサのチベット語が標準語的地位にあるというのは正確な言明ではない。確かに、カムチベット語やアムドチベット語の母語話者にもラサのチベット語を「標準語」や「どこでも通じる」という人は多いが、ラサのチベット語の運用能力のあるカムやアムドのチベット人は極めて限られる。これらの指摘は、ラサがチベットの中心であるという社会的な威信に基づく精神性に由来することであろう。実際の言語運用上は、ラサのチベット語が標準語的機能を果たしているとはいえない。

1.3.1 記述的研究

個別方言の記述研究は、中国国内では1950年代にチベット族の居住地域について広く調査が行われた⁹。この時代の成果として金鵬(1958)が挙げられるが、調査の詳細については全体像が未だ公表されておらず、全容を知り得ない状況となっている。その中で多くの方言に言及する金鵬 主編(1983)、瞿霽堂(1991)や譚克讓(1984)などから、調査地点の概要を知ることができる¹⁰。西(1987)もまた、先行研究の方言資料への言及を整理して、当時知りえた方言の分布地点を図示している。また、1980年代にも再調査が行われているが、チベット語方言は主要な調査対象とはならなかったと思われる。この調査では、かつてチベット語の1方言と考えられていたものが独立した言語として認定され、孫宏開(1983a)をはじめ、西田・孫(1990)や戴慶廈等(1991)などで扱われる、「川西走廊諸語」が言語学の分野に現れ始めた。

各種方言における音声・音韻体系を主として扱うものとしては、1950年代に中国側で行われた大規模な調査研究においてあまり報告されていないものを中心にあげるならば、比較的まとまったものとしてMigot(1957)、Nagano(1980)、Sun(1986)、黃布凡等(1994)、Hongladarom(1996)、Wang Xiaosong(1996)、Lin(2002)、Sun(2003)、海老原(2005b)、更科(2006)、鈴木・イエシエムツオ(2006)、Suzuki(forthcoming)などがあげられる。簡潔なものとしてはさらに多く見られ、Sprigg(1979)、孫宏開・王賢海(1987)、瞿霽堂等(1989)、玉珍(1996)、華侃・尕藏他(1997)、孫天心(2003)、鈴木(2004, 2005b, 2005c, 2006c)、Suzuki(2005a, 2005b)などがある¹¹。最近の研究では、川西民族走廊に分布する方言を中心に、従来の方言区分に合致しないようなものが続々と報告されている。

形態・統語についての文法記述には、さまざまな各論の研究がある。本論文では主として関わらない分野であるため、ここでは触れない。

総合的な文法記述としては、詳細さの程度の差はあるが、Roerich(1958)、金鵬(1958)、Causemann(1989)、Herrmann(1989)、Häsler(1998)、Haller(2000)、格桑居冕・格桑央京(2002)、周毛草(2003)、Haller(2004)などが発表されている。Causemann

⁹中国政府主導の少数民族言語調査に関する事情については、金星華主編(2005)が詳しい。

¹⁰Zhang(1996)は中国国内のチベット語方言の地点と方言区分が整理されてあるが、この資料にあげられる地域はおそらく中国国内で調査された具体的な調査地点と見てよいと考えられる。

¹¹西田(1970:xvi)の中に言及があるが、方言資料は単に数が多いほどよいというのではなく、その利用には記述の信頼性を問題にしなければならないことがあるという。確かにここに挙げたもののほかに、簡潔な方言の描写が各種《県誌》などで行われ、簡単に知ることができるが、それらが本論文の要求する基準に照らして、資料的価値の高いものであるとはいいがたい。ただし、一部のもの、たとえば《中甸県誌》(1997:147-153)や《阿壩県誌》(1998:117-119)の言及には、言語学的に無視できないものも含まれているため、慎重に検討すれば重要な資料になりうる。

(1989)、Herrmann (1989)、Haller (2000, 2004) は、中国国内に分布する諸方言の口語テキスト（物語）を主体とした記述研究である。一方で教科書風の解説をとる文法全般の記述もある。ラサのチベット語に関するものを除く¹²と、馬月華 (1987)、Wang Qingshan (1995)、Kraft & Hu (1998)、Kalsang Norbu (2000)、敏生智・耿顯宗編 (2001)、gNam-lha-rgyal (2003) などがある。ただしこれらは厳密な意味では方言の記述研究ではない。ある 1 つの土地の言語に基づいて編まれていない可能性が高いからである。

語彙集のような資料性の高いものについては、Gō (1954)、孫宏開主編 (1991)、黃布凡主編 (1992)、華侃・龍博甲 (1993)¹³、《雲南省誌》編纂委員會 (1998)、華侃 主編 (2002) のようなものがある。個別方言の研究について語彙集が付されるものもあり、Nagano (1980)、Sun (1986)、Causemann (1989)、Sun (2003)、周毛草 (2003)、Haller (2004)、鈴木 (2005b)、鈴木・イエシエムツォ (2006) などに提供されている。

資料的価値の観点から考えると、1950 年代の中国内での調査が行われる以前に、欧米から来た外交官や宣教師が土地の少数言語を記録・発表しているものがあり、現在でもその資料に関心が向けられる場合もある（池田 (2000)、Ikeda (2006) など）。チベット語方言についての詳細は Denwood (1999:21-36) がまとめている¹⁴。これらの中には中国内での調査で報告されない地域のものも含まれている。これらの資料については、川西民族走廊に分布するものにも関わっているものがあるが、本論文では全面的な文献の追跡調査は行わず、また詳しい言及を行わないため、詳細は同文献を参照とする。そのほか、Samten Karmay & Sagant (1998) のような母語話者によるチベット語方言の語彙の記述が行われているものもある¹⁵。

川西民族走廊周辺に分布するものに限って考えてみると、Häsler (1998) や格桑居冕・格桑央京 (2002)、周毛草 (2003) など例外的なものを除いて詳細な記述文法と呼べるものはほとんど存在しない¹⁶。ただし川西民族走廊での調査研究が行われ始めてから時間がそう長くないため、今後の調査研究の発展からさらに多くの記述研究

¹² およびインドで通用する新共通方言のものも除く。

¹³ これはアムドチベット語の本格的な口語辞典であるが、厳密には 1 方言の口語形式が記録されているわけではない。方言研究の資料としては注意が必要である。

¹⁴ Denwood (1999:289-295) は出版当時の各著者の見解に基づいて方言を分類しているが、これらについては現在の見解と相容れない点が多々あるため、現代の研究状況に基づいた理解が求められる。

¹⁵ ただし Samten Karmay & Sagant (1998) は言語学的な記述ではない。チベット語方言の母語話者が当該方言の言語学的研究に携わっている最近の研究に、Hongladarom et al. (2005a, 2005b) がある。

¹⁶ 特異なものとして、王建民・贊拉・阿旺措成 (1992) のような阿壩州のアムドチベット語とギャロン語との対照研究などが挙げられる。このようなものには、《阿壩州誌》(1994) や贊拉・阿旺措成 (2004b) などもある。

が進展するものと考えられる¹⁷。

1.3.2 歴史的研究

歴史的研究にはさまざま存在する。ここでは方言を主に用いる研究について述べる。

代表的なものとして、多くの方言資料を用いて音韻史を研究する江荻(2002a, 2002b)や瞿霽堂(1991)の著作をあげることができる。この中の議論の一端を担う形で方言資料が用いられている。方言を利用することでチベット語の歴史的研究をどのように考えていくことができるかということは、西田(1987)の概略がある。

このような総合的歴史研究において大きな比重を占めるのは、各種方言の共時的資料における語彙形式と音声・音韻体系であるが、それについては先に述べた。

以上の方法とは異なる角度からの歴史研究としては、西田(1963, 1970, 1973)、西田・孫(1990)のチベット語もしくは川西走廊諸語を記録した文献言語《華夷譯語》の研究があげられる。文献言語の解明のために現代の諸方言の資料を用いるのはいずれの研究も同じだが、西田・孫(1990)は記録言語の分析に本格的に現代の諸方言を導入している。この研究には、現代の諸言語諸方言の資料が大きな役割を果たしている。方言資料の少なさがこれらの研究にも支障を与えていることは明らかで、同様の文献を扱う西田(1970, 1973)や太田(1980, 1986)にも当時の現代語に関する資料的な制約による問題がある。

そして、本格的に取り組まれている研究ではないが将来的に研究されなければならないであろう分野としては、川西民族走廊に分布するチベット語方言とチベット語文献に現れる異体字などとの関連である。異体字は周季文(1992)などに整理されている。蔵文第二次釐定の前後で仏典翻訳のための語彙に変更があったものをまとめたものに sKyogs-ston Rin-chen bKra-shis (1981) のようなものもある。また、敦煌文献などに記される蔵文釐定以前のつづり字との対応関係にも注目できる。語彙にしる音形式にしる、文語の上での約束事と口語形式の対比は詳細に行われるべき課題であろう。また、一般的な記述として《中甸県誌》(1997:147-153)などにも土地の口語形式と敦煌文献におけるつづり字の対応に関する言及が見られる。西田(1987:125)は文語との発展と口語の発展は一応別に考えなければならないと述べているが、方言研究の上では文語形式の変遷についての情報も軽視できないのではないかと考える。

また、最近では音対応や語形式のみならず、文法形式の対応関係から歴史的研究を進める方法も見られる(齊卡佳(2006)など)。

チベット語の歴史を考える上で、非チベット語におけるチベット語由来の借用語

¹⁷川西民族走廊における方言については、Bartee (2005) や Sun (2003b, 2005) などから、以上に紹介した文献に言及のない多くの方言についても調査が行われていることが分かる。

の形式が問題になることもある。それは特に川西走廊諸語に見られる借用語で、川西走廊諸語の1つであるラヴルン語は現在のチベット語どの方言よりも、そして蔵文の構字法よりも複雑な音節構造をしているために、この言語に見られるチベット語由来の借用語が蔵文成立以前のチベット語形式を残していると指摘する研究（黄布凡 2004）もある¹⁸。

1.3.3 方言地理学的研究

方言地理学的研究は、上記2種の研究方法と異なって、チベット語に特化された方法論が整備されていない。おそらく先の研究方法の中で最も立ち遅れているものであろう。

この研究方法に言及する格桑居冕・格桑央京 (2002) では、具体的な事例研究が述べられていない。一方江荻 (2002b) では、方言地理学の例としてチベット自治区阿里地区の諸方言と Lhasa（ラサ）方言の地理的分布から見える言語史を引き合いに出している。確かに地域的連関を説明している点では正しいが、言語地図の作成や利用といった基本項目とも言うべき点の整備までには至っておらず、チベット語における方言地理学は発展途上であることが見て取れる。

このことには、おそらくいくつかの要因が指摘できる。その1つとして、先行研究におけるチベット語方言研究の問題には、たとえば西 (1987) において言及されるように、Lhasa 方言と対比する形で他方言が分析・考察されてきた点がある。これはある方言がチベット語方言であるための他律的關係と考えられているためであるが、Lhasa 方言がチベット語の中で言語学的に中心的・標準的位置を占めることを示した研究は存在しない。この立場はチベットにおけるラサのチベット語の社会的権威性やそれを扱う先行研究の多さによって判断されてきたものであるから、Lhasa 方言を中心に扱うことは言語学的な根拠に欠けている。このような観点が長らく方言研究の中で取られてきたことによって、地域を単位に言語事象を考えることが少なかったように見受けられる。このことは少なからず川西走廊諸語の研究にも影響しているといえる¹⁹。

またもう1つの問題点としては、方言地理学的研究は歴史的研究と並んで、多くの方言資料を必要とすることにある。かつて中国側で行われた大規模な調査研究も、

¹⁸ただし最近のラヴルン語の研究から別の見方もとれることが分かってきた。尹蔚彬 (2006) では、ラヴルン語業隆方言の子音連続の生成過程には、その言語内部で生じる音節構造上の変化が存在するとして、現在進行中の言語の変化を記述している。必ずしも借用語を借用したままの形で保存しているわけではない可能性が出てきたということである。

¹⁹たとえば、白井 (2006a:iv, 189-277) のダパ語の考察において、地域特徴を見出すという文脈を設定しているにもかかわらず、チベット語の例として星 (1997) の Lhasa 方言を主に利用するなど、本来ならばカムチベット語の資料を用いる方がよい箇所を用いるべき先行研究が存在しないという状況を呈している。

調査地点は粗いものであったことから、本格的な方言地理学的研究にたえうるだけの資料がそろっているとはいいがたい²⁰。もちろん、どの程度の方言地理学的考察を加えるかによって調査地点の詳細さは変わってくるけれども、一種の地域研究として見た場合でもチベット語について困難であると考えられるのは、格桑居冕・格桑央京(2002:72)のカムチベット語への言及にもあるように、チベット語の方言というのは地域的差異があまりにも高すぎるものであることも影響しているだろう²¹。

1.3.4 調査言語学の方法：チベット語の現地調査に際して

未調査の言語・方言に関しては、現地調査が不可欠であるが、特にチベット語の調査方法について、いくつかの文献が問題提起を行っている。それをまとめているものに Denwood (1999:38-39) がある。

主な問題点は、口語形式の中にもいくつかの「話し方」による発音の違いがあることである。「話し方」には、「文語読書音」と「口語音」そしてその中間形式があるという。方言資料の場合、「口語音」の収集が到達目標になる。

Denwood (1999:38-39) は Sun (1986:184) などの言及に基づきながら、現地調査において、被調査者にチベット文語形式を見せることはもちろん、語の引用形式を求める方法も避けるよう提案している。チベット文字を介した場合、「文語読書音」と「文語読書音と口語音の中間形式」が現れる可能性が高いからである。

また Denwood (1999:38-39) は、教養のある人の場合、文字を見なくても文語形式を口頭で答える可能性に言及している。このようなことから、調査時には引用形式を答えさせる質問は好ましくないとする。

筆者の調査の場合、すべての調査で以上の注意事項を厳格に守ってはいない。特に、語彙資料は引用形式を主として収集した。筆者が考えるところは、方言資料として以上の差異が同一資料に混入することを避けることができれば、以上の指摘にあるような問題点は重大なものではないと見る。また、「文語読書音」の収集にも一定の価値があると考ええる。そして、筆者の調査の中には、「文語読書音」の収集を意図して行ったものもある。

本論文で用いるのは「口語音」である。ただし、その中に「文語読書音」が紛れている可能性は否定できない。しかし調査時に可能な限り口頭で口語形式であるかを確認めつつ記録を行い、また自然発話の収集などから口語形式を分析しているため、論考に極めて重大な支障をきたす程度ではないと考える。

²⁰詳細は次節を参照。

²¹格桑居冕・格桑央京(2002:72)では、カムチベット語の方言の複雑性について、その原因に歴史上長期にわたる土司による分割統治という社会構造、政治経済の分散、人口の少なさ、地域の広さ、山川など地形による隔たり、交通の不便性などを挙げている。

1.4 川西民族走廊における方言研究

川西民族走廊におけるチベット語方言研究は、それがチベット語方言の研究である限り、その根幹は先に述べた方言研究と大きく変わることはない。すなわち、記述研究、歴史研究、方言地理学的研究を基本とする点に異論はない。

1.4.1 川西民族走廊に分布する方言の研究手法

前節に先行研究の概略は述べたが、川西民族走廊に分布する方言の先行研究は記述研究、歴史研究、方言地理学的研究のいずれについても十分もしくはまったくなされていない。以下に整理する。

記述研究については、記述文法としてすでに出版されているものとしては、Häsler (1998) の Derge (徳格) 方言、周毛草 (2003) の rMachu (瑪曲) 方言のものしかあげることができない²²。また、Migot (1957) は今で言う記述文法の体裁をとってはいないが、Dartsendo (康定) 方言 2 種、dKandze (甘孜) 方言、Derge 方言、rTau (道孚) 方言の蔵文と各種方言の発音の対照を中心とした構成で、扱っている方言の特徴が分かる記述であり、長文資料もついている²³。

歴史研究については、川西民族走廊に分布するチベット語方言が貢献している研究は極めて少ない。Sun (2003a) では、いくつかの川西民族走廊に分布するチベット語方言について声調の発展を考察する材料として取り上げられている。

方言地理学的研究は未見である。

以上の研究状況を踏まえて、チベット語方言研究全体における議論の方向性を付け加えると、次のことがいえるだろう。チベット語方言の先行研究において、多くの方言における形式を対照しつつ考察を進める研究は少なくない。この方法は、特にチベット語全体の音韻史を取り扱う場合は非常に効果的で、瞿霽堂 (1991) や江荻 (2002b) に代表されるような研究がある。特に後者の研究の場合、従来中国国内の方言を中心に上げてきた研究とは対照的に、中国国外のラダック語やゾンカ語にも言及しているなど、チベット文化圏全体における言語資料を用いて考察する点が新しく、チベット語圏全体を議論の射程に入れたチベット語史を対象にしている。このような手法で、従来の大部分の方言研究は成り立ってきている。

筆者は、川西民族走廊に分布する方言の研究手法には、目指す研究は先に述べた

²² 出版が準備されているものとしては、Krisadawan Hongladarom 氏の rGyalthag (香格里拉・古城) 方言のもの、Ellen Bartee 氏の gTorwa (東旺) 方言のものがある (それぞれ個人談話による)。

²³ 音体系の記述研究では、以上のほかにも数例ある。これらについては、先の「記述的研究」の節に述べた。

3つの研究の柱があっても、その中に独自の方法論があってもよいと考える。そのいくつかを具体的に述べるとすれば、以下のようなものをあげることができる。

1. 特殊な語彙形式の抽出
2. 特殊な蔵文対応音の抽出
3. 各種特殊な特徴の地理的分布
4. 近隣に分布する言語に見られるチベット語来源借用語の語彙形式との対照

言語学的研究に注目したとき、以上に述べた特殊な形式について、その来源を探る作業は重要な課題である。その場合、チベット語方言の近隣に分布している言語や同系統であるチベット・ビルマ諸語を見通して考察する必要がある。従来チベット語方言は、チベット・ビルマ諸語全体の枠組みの中で議論されたことが少なく、チベット語は蔵文形式によって代表されている²⁴。口語形式の中に蔵文と一致を見せない特殊な形式を抽出する作業は、チベット語方言学の問題だけでなくチベット・ビルマ諸語全体に関わっている一方で、そのような特殊な形式に与えられるべき説明は、チベット語以外の言語の形式あるいはチベット・ビルマ祖語に再構された形式に求めなければならない場合もあるだろう。

そして、これらの研究成果は言語学の範囲のみならず、民族学や歴史学の観点からも考察を要するものであると考える。明らかになった語彙形式やその分布というものが、決して言語内部の現象として説明されるものではなく、その背景も参照しなければならないという見方である。川西民族走廊はさまざまな分野の学術研究が行われている地域であるが、地域全体を含めた観点からの研究は言語学ではなく他の分野で発展している。たとえば歴史的観点から見た民族間の歴史研究（龔蔭(1992)、雀丹(1995)など）、民俗学的観点から見た文化の比較研究（達瑞根(2005)²⁵、馮敏(2005)、林俊華(2005, 2006)、王懷林(2006)など）などが行われているが、このような広域的視点での言語研究は未だ取り組まれていない。

このような状況の中で本論文が特に重視するものは、地域的視点で方言をとらえるというもので、それを先に述べた3種類の研究方法と比べると、方言地理学的研

²⁴たとえば、チベット・ビルマ祖語を扱う Matisoff(2003)の議論においてチベット語口語形式が用いられる割合は極めて低い。

²⁵達瑞根(2005)はギャロン地域などで特に有名な石積みの塔、いわゆる碉楼の調査とそれをめぐる研究であるが、地域にかかわらず碉楼が分布している地点を全般的に取り上げている。この視点から、ギャロン地域とともにチベット自治区の工布地区も取り上げている。ここで注記する必要があるのは、工布地区で発見された特殊なチベット語方言である Bragsum(巴松)方言を扱う瞿靄堂等(1989)が、この方言の特徴が極めて独特であるということを報告していることである。このような特殊性について知っておく必要があると考える。

究が最も近い。しかし、これは本格的な方言地理学の方法論を導入するということの意味しない。方言地理学の方法論はすでにチベット語以外の言語についてよく整備されているが、それを最初から参考にするわけにはいかない。方言地理学の研究が進展している言語に関する方法論は、対象言語となるチベット語の置かれる言語環境たとえば話者を取り巻く地理的環境、交通路、村落どうしの歴史的関連、方言内の年齢層による差異などについて調査され、資料的な基盤を整備してはじめて応用可能であるかどうかを検討されなければならないからである。本論文における地域的視点で考えるという観点から研究される手法が、地域関係を各個別方言の分析の中で考慮しつつ方言間の相互関係を明確にしていく過程で必要とされるということとを重視しているため、それが以上の3点の研究方法の中で方言地理学的研究という枠組みに入るということを述べているのである。

地域を重視するのには意味がある。方言研究が地点数において進展し、特別だと考えられてきた方言形式（語形式であっても蔵文との音対応であっても）が決して際立つものでなくなったとしても、川西民族走廊に分布する方言群はその他の地域すなわちアムド（青海省など）や中央（チベット自治区など）のチベット語方言と比べると特別であることに変わりはない。そのため、ある（特別な）方言形式の分布数を統計的に分析することには、ほとんど意味がない²⁶。ただ分布地域を通してのみ、その存在の特異性が議論されるべきであって、統計によって一般性が推し量られることには大した意義は与えられない。

方言地理学は広義の歴史研究の一端をなすものとして位置づけられるが、チベット語における方言研究を歴史研究に利用する手法としては、本論文で提示する方法論は極めて異質である。それは先行研究の蓄積が存在しないからである。地理も多少考慮に入れている江荻(2002b)などの研究は、チベット語方言をラサを中心として考える伝統的手法によっているものであり、単に各地点の言語事実を取り上げて音韻史を議論していて、方言間の関係や地域的連関に注目してはいない。なおかつ、後に述べるように、そもそも音声分析の方法論が異なっている。地域性を単位とするものはほとんどのチベット語に関する先行研究で見られない考え方であり、本論文ではその点に着目することになる。このような観点を導入した研究は、将来的にはチベット文化圏全体で取り組まなければならないと考える。決して川西民族走廊に分布する方言だけに適用される方法論ではないのである。

²⁶なお、地点に基づく統計には、調査地点の空間的距離について可能な限り均質にすることが求められる。

1.4.2 本論文の根幹

本論文には基本の大きな目標がある。第1には未記述方言の音声・語彙方面の記述・分析、第2には川西民族走廊におけるチベット語方言の多様性に対する理解を深めるための議論がある。

第1の目標は、筆者の現地調査の成果そのものであるが、その必要性を明確に示すために、1つの例として中国側で1950年代及び1980年代に行われた大規模な少数民族言語の調査において、調査が行われたことが明らかになっている川西民族走廊地域におけるチベット語方言の分布地点を図示する²⁷。

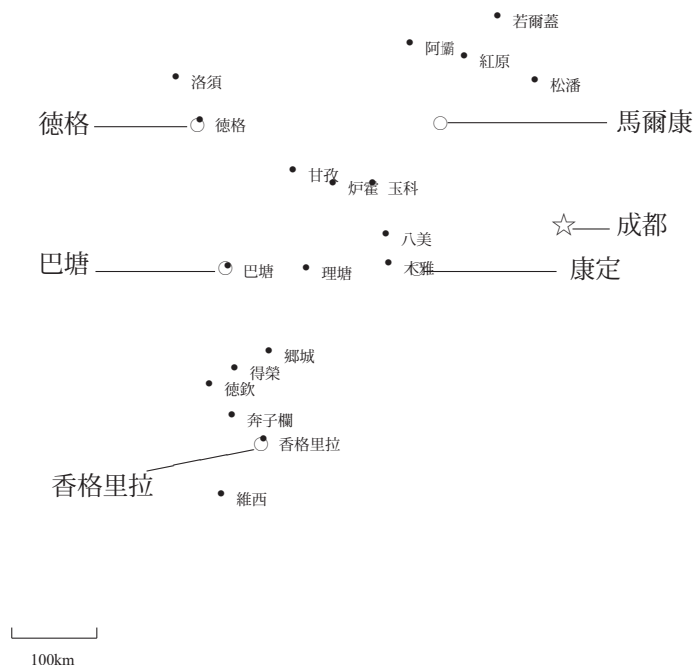


図 1.1: 中国側のチベット語方言の調査地点

もちろん、以上の地点以外でも調査が行われた可能性はあるが、詳細について知ることはできない²⁸。いずれにしても、調査対象の分布密度は薄いものであること

²⁷中国側の調査地点としては、金鵬 主編(1983)、譚克讓(1984)、孫宏開・王賢海(1987)、瞿霽堂(1991)、江荻(2002b)、格桑居冕・格桑央京(2002)に言及される地域について考える。現代の行政区分上四川省甘孜州、阿壩州、涼山州木里県、雲南省迪慶州に限って考える。また、地図上の地名は現代のものに書き換えてある。ただし、これら先行研究に含まれる地点の名称の中には、現在ではすでに地名が変更され、該当地域が推定できなかったものも数種あり、それらは地図上に表示していないことを断っておく。

また、西(1987:186-187)にも当該地域を含むチベット語分布地域全体について、それまでに知られている方言が地図上に示されている。ただし、地点に誤りもあるので注意がいる。

²⁸Zhang(1996)には中国内のチベット語方言について、他の先行研究にはない詳しく地点が記載されており、それらの位置、方言区分(衛藏(=中央)、カム、アムド)が添えて

が指摘できる²⁹。

第2の目標となる根本であるよりよい理解を得るべき問題は、明確に指摘しておかねばならない。簡潔に述べるならば、異なる地域で共通する極めて特徴的な言語現象が確認されたとき、その間に歴史的連関があるのか、それとも互いに独立して変化を起こしたのか、ということになる。

すなわち本論文では、先に述べた独自の研究方法としての特殊な語彙形式の抽出、特殊な蔵文対応音の抽出を中心として、簡単な地図を用いて特殊な特徴の地理的分布を明示することを実践する。そして付加的に、近隣に分布するチベット文化圏下にある言語に見られるチベット語来源借用語の語彙形式との対照を行い、将来的な研究への道筋を示す。

この視点を得る根本は、最近になって知られ始めた川西民族走廊地域の特筆に価するチベット語方言について顕著に指摘できることである。これらの方言群は先行研究で扱われることなく、それゆえチベット語の歴史的研究にほとんど寄与してこなかったものである。しかしそれは、各方言の歴史的発展を考える上で、この地域に分布するものは断続的な言語接触など極めて特殊な状況を経てきているために標準的な音対応を示すとは限らないことによる可能性がある。

本論文では、そもそもの問題意識としてチベット祖語の再構を目的としていない点が従来の研究と異なっていることを強調しておく。それゆえ、川西民族走廊地域のチベット語方言をよりよいチベット語の祖形を得るための対象として見ることはしない。今本質的な問題は、祖形を求めるのではなく、さまざまな特徴をもつ方言群の相互の関連性であり、方言形成の過程を分析することである。ここで扱わなければならないチベット語史は、文献資料を用いるとしても実際の言語資料に基づいて行うことのできる範囲は現在から200-300年間に限定され、チベット語の共通形態としての再構形式を導くための議論ではないのである。川西民族走廊というチベット文化圏の東端の1地域において各種方言の特徴を明らかにしていくことを前提とした上で、方言間に系統的關係がどの程度見られるのかという問題設定に答えられるかどうかを確かめる議論を行うことが、本質的な問題となっている。

一見すれば何の連関もないものが、実際それらの歴史的関係はいかなるものか、というのは極めて興味のある問題である。ところが、それに答えるための言語資料は提供されておらず、現地調査の進展を待たなければならないということがあった。本論文では、その現状を筆者の現地調査で補い、川西民族走廊全体を覆うように、概略把握した個別方言をもとに、その地域的・歴史的関係を議論する。

ある。これがそのまま1950年代及び1980年代の調査地点かどうかは不明である。

²⁹本来的に問題として指摘すべきは、これまでに主として中国で出版されたチベット語方言の先行研究がいかに少数の方言に基づいて行われてきたか、ということである。

1.4.3 議論の方法と方向性

本論文の本論部分で行う具体的な作業を簡潔に述べると、以下のようになる。

- 未記述あるいはほとんど未記述の方言についての音体系の素描
- 上に述べた方言を主とする蔵文対応を中心とした各種方言形式の分布についての地図化
- 上に述べた方言を主とする語義を中心とした語形式の分布の地図化及び簡潔な考察
- 丁種本《西番譯語》に記録される形式と上に述べた方言を主とする現代諸方言の形式との対比から得られる新しい知見の考察

以上に示すように本論文では、先に述べた川西民族走廊におけるチベット語方言研究に対する展望に主眼を置きつつ、細かい分析と深い考察を行うよりも、むしろ新資料の記述と（チベット語を扱う上では）新しい方法による問題点の指摘及びそれに対する注釈を与えることが中心に行われる。それは、方法論の整備と資料の整備が十分になされていないことに起因する。

方法論の整備に関連して、以下のことが指摘できる。特に川西民族走廊に分布するチベット語方言については、その歴史的研究において音韻対応をはじめとする比較言語学的手法が適用しがたい。各方言が個別言語として独自の発展を遂げたものでなく、常に周辺の諸言語の影響を受け続けてきたからである。そのため、基本的にある方言における厳密な意味での音韻対応を得ることは困難であり、そのような資料を比較しても十分な議論を行うことが困難なのは自明である。そのため、音韻対応の把握は各方言を比較するときの基準ではなく、幾重にも折り重なって分布する方言群の層状構造を明確にするものと位置づける。また、チベット語言語史に密接に関わってきている川西走廊諸語との相互関係も、考察の中心的役割を果たすことになる。

このとき、資料の整備の問題点が明確になる。川西民族走廊で続々と報告される新方言群は、多くが単一方言の中での分析にとどまっている。その中にある特質が独自のものなのか別の方言と共通性を持っているものなのか、といったことは次の段階の議論である。筆者の報告した Suzuki (2005a, 2005b) では、川西民族走廊に分布しかつ際立つ特徴を共有する方言群を指摘したが、それがどのような関係にあるかを示すには至らなかった。

このような問題を解決するためには、各種方言の個別の記述研究が進むことが最も理想的であるが、それが多少進展したおかげで類型的に特徴的なものが徐々に発

見され、その地理的分布が注目されることになった。この程度の理解である現状では、まず分布の全体的理解が可能となるような研究が急がれる。川西民族走廊には、伝統的にカムチベット語とアムドチベット語の双方が分布することが知られているが、その詳細な方言特徴が地域的観点からまとめられたことはない。また、前者の方言の多様性は未だ具体的に知られることがない。このような問題に焦点を当てなければならぬ。

すなわち、方言の多様性を理解するに当たって、共通性を見出した場合それが系統的なものなのか地域的なものなのかといった歴史的経緯を分析しなければならない。それが複雑に入り組んでいるのが川西民族走廊であり、いずれの方言も歴史的観点から層状構造をなしていると考えてよいだろう。それを解きほぐす方法論として、地域を単位に扱う方言地理学は極めて有効であると考ええる。また一方、川西走廊諸語におけるチベット語来源借用語の形式も議論の素材になる。チベット語方言が極めて多様な音形式を持っているため、ある方言にのみ見られる特別な形式が当該川西走廊諸語に見られた場合、その相互関係に触れる必要性があるだろう。

ここで、本論文で用いる一次資料の性質について、筆者の考えを述べておく。この地域のチベット語全体に、共通語的機能を持つ方言もしくは変種は存在しない。その代わりに現在では漢語が共通語となっている地域が多い。この点がまず当該地域のチベット語の独自の環境である。各調査地点における音形式は、その土地の形式と理解するが、当然のことながら同一言語コミュニティでも世代差や社会的差異が存在し、議論の中心となる音韻、語彙形式に異なりが生じてくる³⁰。現在、この差異を十分理解できる状況にはない。問題のある地点は今後集中的に研究すべきである。

川西民族走廊は、詳細な方言地理学的研究を行うには、地理的単位として広い部類に入る。ただし、本論文における議論の方向性・目標は、方言間の関係の分析と方言そのものの言語史の解明への寄与である。チベット言語学の伝統的手法の代表例は、蔵文との対照による言語史の考察である。これは先行研究で扱わないものがないと言えるほど正統的な手法であり、得られる結果も信頼性が高い。蔵文を基準にできることは、チベット語方言がチベット語に属するための1つの大きな根拠であり、それだけ方言内部で蔵文との対応関係が非常に多く得られるものである。蔵文は過去の一時期のチベット語の発音を表しているという仮定は、一般に受け入れられているといえ、ここでもその説を踏襲する³¹。

³⁰Lhasa 方言では星(2003)に整理されるように、話者によって4種類の音韻体系の異なりがある。このとき星(2003)では最も多くを弁別するものを選んで表記に用いている。

³¹本論文の採用する蔵文に表される言語の音体系は、格桑居冕・格桑央京(2004:379-390)に準じる。蔵文の音価についての議論は、格桑居冕(1991)や dPa'-ris Sangs-rgyas(1998)、Tshe-dbang Lha-mo(1998)などに見られるが、それらはチベット語伝統文法 *rTags kyi 'jugs-*

1.4.4 言語地図の作成

川西民族走廊の言語状況を考えれば、地図上に分布を表して把握することは極めて有効である。この地域は、方言地理学の要求する言語地図を問題にする前に、言語分布図も十分なものが存在していない。分布の概略を把握できるものはいくつかある（池田(2003)や白井(2002)など）が、それは川西走廊諸語を対象とするものであって、チベット語方言については皆無である。

言語地図は方言地理学の根幹をなす基礎資料である。しかしそれは地図自体に十分な解釈を行えるだけの調査地点、言語データがそろっている場合のことであり、それが不十分である場合、考察も不十分になることは避けられない。

本論文では、試みではあるが、言語地図をほとんど筆者自身の調査記録に基づいて作成し、それを議論に用いる。ただし本論文における言語地図は、完全に資料的価値を追求するものではない。量的にも質的にも不十分であることが明白であるからである。将来の詳細な言語地図作成に向けた、基礎的準備であると考えたい。提示する言語地図によっては、論点を視覚的に明確化することができ、多少なりとも論を補助することができるはずである。

この状況での言語地図の直接的な効用は、本格的な方言地理学的考察にではなく、例外形式とその分布の視覚的理解にある。ある1つの形式を特別であると指摘する場合、周辺言語の情報は当然であるが、離れた地域の情報も同時に参照できる方が望ましく、それらを踏まえて限定的な分布しかないと分析するのがよい。また、極めて特徴的な形式が見られても、何の連関もない地域の方言の形式に酷似するものがあつた場合、それが視覚的に把握できれば理解の点でも考察の点でも非常に有用であると考ええる。また、川西走廊諸語の形式も参考にすることができ、また川西走廊諸語におけるチベット語来源形式とチベット語方言形式を同一の地図上に載せた考察もまた有効である。

pa「字性組織法」の解釈と分析によることが大きい。筆者は伝統文法についての原典として Thon-mi Sam-bho-tra dang dNgul-chu Yab-sras (2000)、注釈として gSer-tog sku-'phreng lnga-pa Blo-bzang Tshul-khrims rGya-mtsho (1957) の版本を参照する。

第2章 地理と分布言語

2.1 川西民族走廊

中国四川省の西部を中心とする、南北に縦断するように複雑な地形の連なる山岳地帯は、その歴史的・民族的な背景から費孝通(1980)によって注目され、孫宏開(1983b)が「川西民族走廊」と呼んでいる¹。

本章では、川西民族走廊という地域の定義、地理と地形、分布言語について述べる。川西民族走廊に分布する言語について、チベット語と川西走廊諸語について説明する。その他の彝語などの言語については言及しない。

2.1.1 地理と地形

川西民族走廊が具体的にどの地域をさすかは、議論に先立ち明確にしておく必要がある。ここでは石碩 主編(2005)および李星星(2006)を参考にして述べる。

これらの文献では、ここでの「川西民族走廊」について、「藏彝走廊」という名称が用いられている。これら2つの名称が同義であるか否かは議論されたことはない。藏彝走廊は、先の2つの文献において明確な地理的範囲を与えられている。李星星(2006)の記述では、おおよそ東経97°-105°、北緯25°-35°の間となっている。一方、川西民族走廊のさす具体的な範囲は、池田(2003)によると、雲南省北部から四川省西部の山岳地帯を中心とする地域ということであるから、これら2つの名称のさす範囲は実際は異なって、互換性のあるものではないと見るほうがよいだろう²。李星星(2006)は特に「藏彝走廊東部」という呼称でもって、池田(2003)のさす地域の東半分をさしているように見える。

本論文では「川西民族走廊」という名称でもって、池田(2003)の述べる範囲よりも限定した地域についてさす名称とする。本論文における重要な概念の1つに「チベット文化圏」というものが挙げられる。池田(2003)のいう「川西民族走廊」は、この点に関して特別な分類を行っていない。「藏彝走廊」という名称にもあるよう

¹最近の研究状況は石碩 主編(2005)や澤波・格勒 主編(2004)参照。

²ただし実際にはどちらも費孝通(1980)の記述に由来する区分であるから、本質的には同一と見てもほとんど差し支えはないかもしれない。

に、この地域における主要な少数民族にはチベット族とともに彝族も存在する。本論文では彝族の言語に注目することはないため、必然的に先行研究で言われる範囲から彝族の文化圏を取り除くことになる。また、李星星(2006)のいう「藏彝走廊東部」よりは本論文で扱う範囲は広い。本論文のいう「川西民族走廊」は、その中心軸として、雲南省迪慶州香格里拉県と四川省阿壩州九寨溝県を結ぶ直線、すなわち「九香線」(鈴木博之 2006)を考える³。

以下は本論文で扱う範囲を中心とした川西民族走廊の地図⁴である。

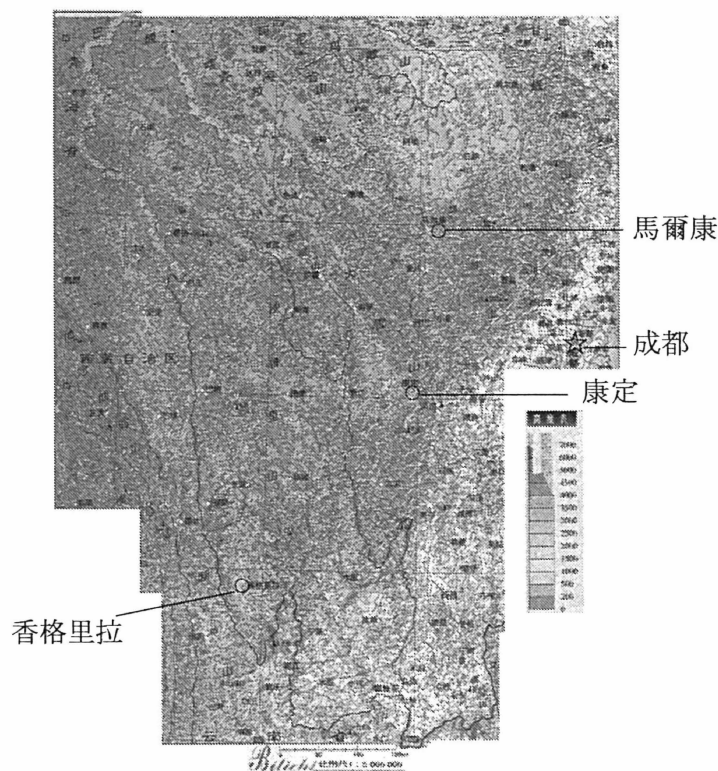


図 2.1: 川西民族走廊

この地域は6つの大河、4つの山系⁵によって構成される。6つの大河は東から順に岷江、大渡河、雅砻江、金沙江、瀾滄江、怒江で、4つの山系は東から順に岷山山脈、邛崃山脈、大雪山脈、沙魯里山脈である。

李星星(2006)によると、川西民族走廊の東部について、以下の3つの基本的地理特徴を挙げている。

³川西民族走廊の東部について、チベット語の分布地域の東端を貫く概念上の線であり、大まかに言って漢語、彝語、納西語などとチベット語の分布域を分かちものになる。

⁴以下の地図は《四川省地図冊》(2004)を用いた。原版に改変を加えている。

⁵澤波・格勒 主編(2004)などではこれらを横断山脈という。

1. 4000m 以上の高山があるが、一般には海拔 900m-2500m の間で、南北に自然の通路が存在する。
2. 山脈地帯と平野地帯の境界線をなす。
3. 高原・高山が自然障壁をなす。

さて、本論文で使用する地図は先に掲げたものを基礎として簡略化した以下のものを用いる。このとき本論文で特に注目する地域は「九香線」という概念によって表され、それもあわせて図示しておく。

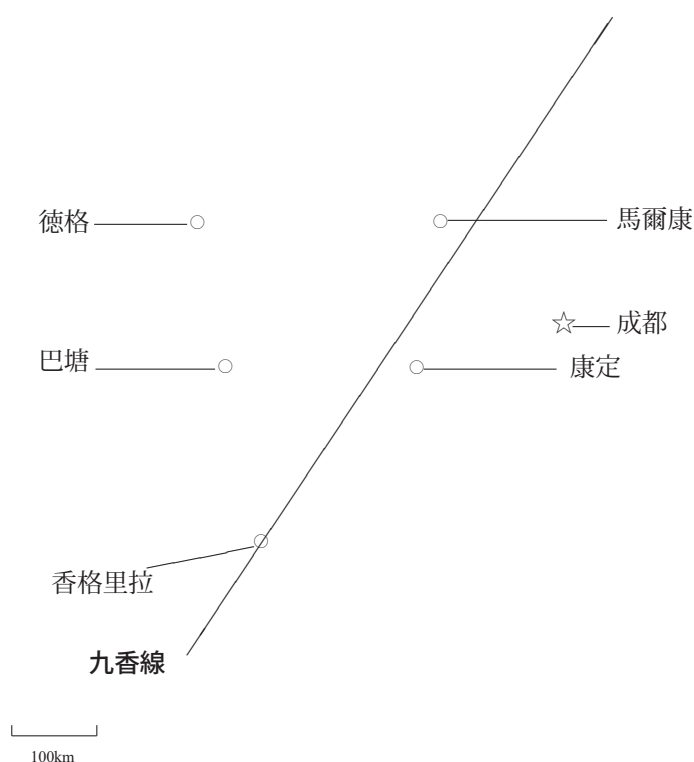


図 2.2: 川西民族走廊模式図と「九香線」

「九香線」はチベット族が居住する地域の東端を南北に貫く概念上の線で、その線より東側には主に漢族や彝族、納西族の居住する地域となっている。

本論文では、言語の話される地点を示すのに、ほとんど現在の漢語による行政区分名を用いる。その地理的關係は地図などによって把握しておく必要があるが、詳しくは《四川省地図冊》(2004)などを参照する必要がある。

2.1.2 歴史上の要点

この地域は、歴史的観点から見ると、広い地域でチベット文化圏に属し、漢文化圏と境界をなしていた地域でもある。李星星(2006)の言及から、歴史的背景について簡潔に整理して以下に述べる。李星星(2006)は4つの歴史的特徴を指摘している。

1. 黄河と長江を結ぶ最も早い交通路の1つ。
2. 古代より平野にあった農耕文明による辺境地域の政治戦略の対象となった地域。
3. 歴史上、民族群の活動がもっとも頻繁かつ複雑に行われた地域。
4. 歴史上の古い文化を今なお残している地域。

また、この地域の一部分は、過去に漢人によって描かれた地図が多くあり、簡単な歴史の変遷をうかがい知ることができる⁶。

現在この地域は、主にチベット族・羌族・彝族が多く居住している。この地域の歴史は、史料が少ないこともあって、極めて不明瞭である。「土司」制度が確立されて以降の、ほとんど漢人の手になる史料であれば、多く記録されている。土司の系譜については、龔蔭(1992)などが整理しているものの、支配地域に関しては未だ理解が乏しい点がある。各種《県誌》類の歴史部分の記述が参考となることもある。この地域に関する全般的な歴史方面の研究には格勒(1984, 2006)などが挙げられ⁷、歴史的観点の詳細は同書などを参照。また、特にギャロン地域を対象とする雀丹(1995)の記述も詳しい。

2.2 チベット語

チベット語における下位方言区分についての議論は、本論文では本質的に関わりがない。しかし、ある程度先行研究の区分法を参考にすることで、主に中国側で行われてきた先行研究で言及される方言を参照しやすくなり、また、先行研究で扱われてこなかった方言の位置づけを明確にすることができると思う。中国側の先行研究における分類の方法は研究者によってやや異なり、Zhang(1996)に各種分類法が整理されている。

⁶ 《松潘県誌》(1999)には清代の松潘県の地図が掲載されている。李冬生編(1997)にも清代に作られた現在の理県にあたる地域の地図が掲載されている。丹珠昂奔(2001)には元、明、清代のチベット全体の地図があり、東端に川西民族走廊も含まれる。

⁷ 一般的にチベットの歴史を扱う場合に、チベット文化圏の東端である川西民族走廊地域は詳細に取り上げられない。それゆえに、チベットの歴史を扱う文献が多いにもかかわらず、当該地域について詳細に記述するものは限られる。これらのまとまった記述のある文献以外にも、各論として石碩(2000)など論文がある。

ここでは、伝統的地域区分に基づく分類法を参考にして諸方言をまとめ、さらに筆者の調査結果から下位区分についての見解を提示する⁸。また、その枠組みで問題となる特別な方言群を示す⁹。

2.2.1 伝統的地域区分と方言区分

チベット語の方言区分は、先行研究間の統一の見解がなく、Denwood (1999:21-36) は各種区分の方法について俯瞰している。筆者は、チベット語の伝統的方言区分として、旧来より存在する地理的区分を流用した名称を用いる。この事情は西 (1987) や海老原 (2005a:15-18) などにまとめられているが、そのもととなる見解は Hermanns (1952) におけるチベット人の地理観と方言区分がかなりの程度で一致することである。これは中国側で行われている方言区分にもよく反映されている。ここでは細かな方言区分に先立って、この伝統的な見方による従来の枠組みのもとに、筆者の意見を加えた分類をあげる。

2.2.1.1 伝統的地域区分

川西民族走廊においてチベット文化圏に属する地域は、伝統的地域区分としてカム、アムド、ギャロンの3つに分けられることが共通理解として見られる。現在の中国の行政区分と対応させると、おおよそ以下ようになる。

1. カム (*Khams*)

甘孜州の大部分、木里県、迪慶州

2. アムド (*A mdo*)

甘南州、阿壩州北部、甘孜州色達県および石渠県¹⁰

3. ギャロン (*rGyal rong*)¹¹

甘孜州丹巴県、阿壩州南西部

⁸西 (1986:865-869) では中国のチベット語方言分類に関する詳細な言語学的基準を設けているけれども、本論文ではこれらについて個別に検討することはせず、主要な音的特徴を軸に地域区分と対比しながら分類を行う。

⁹つまり、本論文での方言分類は、筆者の調査結果に基づいて、少なからず先行研究の分類から変更を加えたものである。よって、瞿靄堂・金效静 (1981) や西 (1987) の見解と一致しない点が見られるが、これらの研究は今後研究の進展によって改められる性格のものである。なお、先行研究には明らかに誤った分類を行っているものがあるが、ここでそれらをまとめて指摘することはせず必要に応じて述べるにとどめる。

¹⁰阿壩州と関係の深い青海省の果洛州を含めてもよいだろう。

¹¹ギャロンの地域の定義は、その基準を何にとるかによって異なってくる。歴史的に考えた場合、ギャロン 18 土司の領地をギャロンと呼ぶことができる。現代の視点からみて文化的なことを考えた場合、より狭い地域を指す。ここでは後者をとる。より詳細な議論は雀丹 (1995)、楊嘉銘 (2004, 2005) などを参照。

地域のみを取り出して考えるとき、一般にアムドに分類される地域からヒャルコフ、テウオ、チョネ、ドウチュ地域を取り出す場合がある¹²。現在の中国の行政区分との対応関係は、以下のようである。

1. ヒャルコフ (*Shar khog*) : 阿壩州松潘県および九寨溝県¹³
2. テウオ (*The bo*) : 阿壩州若爾蓋県鉄布区および甘南州迭部県
3. チョネ (*Co ne*) : 甘南州卓尼県
4. ドウチュ (*'Brug chu*) : 甘南州舟曲県

2.2.1.2 方言区分と新しい問題

以上に述べた地域区分は、チベット語について必ずしも言語区分と合致しない。中国国内のチベット語は中央、カム、アムドの3大方言群に分類されることが広く知られているが、川西民族走廊ではカムチベット語とアムドチベット語が用いられている。また後者は、先に挙げた地域だけでなく、カムやギャロンの牧畜地域のチベット人が話す言語として知られている。

ところが、この3大方言の分類から外れる特徴を持つ方言も少なからず分布しており、特に伝統的にアムドと呼ばれている阿壩州のチベット区域は、最近の研究ではアムドチベット語とは異なる方言が話されていることが報告されている。Sun (2005) はカムとアムドの境界かつギャロンの西端に分布する特殊なチベット語方言を報告し、Suzuki (forthcoming) もまたアムドとヒャルコフと境界に分布する特殊な特徴をもつ方言を報告している。しかし大部分の地域については、カムではカムチベット語が話され、アムドではアムドチベット語が話される。ギャロン地域でも牧畜地域はアムドチベット語が用いられるほか、一部にカムチベット語話者が存在する（鈴木 2005c）。川西走廊諸語はギャロンからカム東端を縦断するように分布している¹⁴。

¹²Gruschke (2001) では Shar-khog (ヒャルコフに相当) という地名を与えた上で、その北方の Thewo (テウオに相当) とともにカムに分類している。周毛草 (2003:1-3) ではテウオ、チョネ、ドウチュ地域の民間伝承から、それらの土地のチベット人は現在のチベット自治区からやってきたと述べている。しかし地域的にはアムドに分類していると考えられる。

¹³ヒャルコフの詳細な解説は Samten Karmay & Sagant (1998) が行っている。同書で扱う地域は松潘県の岷江流域を中心とする地域である。

¹⁴チベット語方言の区分について、伝統的名称の「中央 (ユーツァン)」、「カム」、「アムド」を用いず、「中部」、「北部」、「東部」など分布地域の方角で示すものがある。江荻 (2002b) が示すように、伝統的名称と分布地域は必ずしも対応するものではなくどちらかに統一する方が望ましいとして、同書では方角で分類している。これを川西民族走廊で考えた場合、方角で分類することにはメリットがないといえる。なぜならば、江荻 (2002b) のいう「カム」と「アムド」はそれぞれ「北部」「東部」であって、的確に方言区分を行っていることにならないし、伝統的名称を用いないからといって以上に示した特殊方言の理解が改善されるわ

川西民族走廊の地理とチベット語方言の所属問題は、従来の伝統的地域区分であるカム・アムド・ギャロンの境界とともに問題になる。本来地理的区分であるカム・アムド・ギャロンの3つの地域は、チベット人の言語観とも多くは一致していることから、チベット語方言の分類にも流用されてきた基準である¹⁵。一方、川西民族走廊はこれらの境界を覆うように切り出している地域であるため、以上の先行研究に言及されるいずれの方言群にも分類されがたい特殊なものをいかに考えるかといった問題が生じてくる。このようなことから、川西民族走廊におけるチベット語方言学において、先に述べた伝統的区分は根本的に必要とされない。しかし1つの地理的区分と言語的区分の目安にはなりうる。

また、川西民族走廊には、地方によっては一般的認識とは異なる個別の地域における民間伝承がある。阿壩藏族羌族自治州を例にとって見れば、達爾基・李茂(1998)など多くの文献が「阿壩州（北部）のチベット人は阿里（現在のチベット自治区西端）からやってきた」という旨の民間伝承を残していることに触れている¹⁶。また、甘南藏族自治州卓尼県、舟曲県、迭部県および若爾蓋県鉄布区に居住する本地のチベット人はそれぞれ独自の来源をもつという民間伝承がある¹⁷。

次に、川西民族走廊からいくつかのチベット語方言を取り出してみると、共通の言語的特徴をもつ方言群の分布が線状をなしている。香格里拉・ギャロン・九寨溝周辺に分布するチベット語諸方言に、特殊でありながら共通の音声・音韻要素が見られるというものである。これは Sun (2003b) や Suzuki (2005b) が問題視している。このことが本論文で議論される主要な問題点である。

これはチベット語方言を取り出して考えれば、確かに接点のないものであるが、異なる文化圏と接触していた最前線であるという点では共通しており、Hongladarom (1996) や Bartee (2005) が香格里拉地域について納西族、納西語との関わりによる影

けでもない。さらに付け加えるならば、チベット人のアイデンティティーと彼らの母語はそれを理解する側に密接な関係を持っているため、わざわざ異なる名称を与える必要性はないのである。

¹⁵瞿霽堂・譚克讓(1983)は阿里地区のチベット語方言研究において、チベット人の地理観と言語の特徴に関連性があることを示した点で、地理的区分を言語の大区分に用いるのも決して大きく外れることではないということが分かる。ただしそれが川西民族走廊で通用するかどうかは検討を要する問題である。

また、ギャロンは地域的には区分されるが、チベット語方言分類には関わりが少ない。ギャロンではギャロン語が広く用いられる。

¹⁶筆者の収集した阿壩県の民話の中に、この伝承も含まれている。それによると、現在の阿壩県定住チベット人について、阿里から移住したということである。

¹⁷周毛草(2003:1-3)が言語との関連で簡潔に紹介している。確かに、言語学的に以上の地域のチベット語諸方言は独自の特徴をもっており、卓尼県および舟曲県のチベット語方言はそれぞれカムチベット語に分類するのが現在の見解である。しかしその実態は確認できていないため、断定は避けたい。

なお、民間伝承に基づいて、当地の方言と来源とされる地域の方言の対照研究は未見である。おそらく存在しないだろう。

響を示唆している。その意味では、ギャロンはそもそも非チベット語とチベット語、漢文化圏との境界に位置し、九寨溝もまた白馬人および漢文化圏との境界に位置している。

2.2.2 アムドチベット語

一般的に知られた事実には、下位区分として社会的差異と呼ばれる「農民方言（蔵文 *rong skad*）」、「牧民方言（蔵文 *'brog skad*）」、「半農半牧方言」という3種に分割される¹⁸。これらは本来的には地理的観点とは独立して考えられるが、多傑東智(2004)などは社会的差異と地域的差異をまとめて扱っている。孫宏開・王賢海(1987)では、阿壩州に分布するアムドチベット語は牧民方言であるということが述べられており、紅原県の dMarthang [紅原] 方言を代表と扱っているが、これは華侃 主編(2002)にも踏襲されている。しかし西田・孫(1990)において、阿壩州にも農民方言が存在するとあるが、これについては後に詳しく述べるけれども、筆者はアムドチベット語と考えてはいない。筆者は、川西民族走廊に分布するアムドチベット語は、社会的差異の観点から見ると以下の3種に分けられると考えている。

1. 牧民方言
2. 定住地方言
3. ギャロン地域の方言

ここでいう牧民方言は、先行研究のそれと変わらない。それ以外の2つが、先行研究のいう牧民方言から分離させるべきものである。定住地方言とは、鈴木・イエシエムツォ(2006)が名づけているもので、以前から町を形成している地域に定住して暮らすチベット人が用いる方言であり、特に阿壩県での事例に触れている¹⁹。ギャロン地域の方言とは、瞿靄堂(1996)がアムドチベット語の下位区分として独立させている rTa'u [道孚] 方言²⁰などが該当する。この方言群は広くギャロン地域の牧畜地域で用いられているほか、道孚県などにも分布している。

¹⁸大きく分ける場合、農民方言、牧民方言の2種類とする先行研究もある。また、これらはアムドチベット語を区分する一方で、チベット人のアイデンティティーと密接に関わっている。ただし、現在では必ずしもアイデンティティーの差異が明確に言語の差異に現れない場合がある。具体例は海老原(2005b)の扱う牧民方言と他の先行研究にある牧民方言を対照すると分かる。

¹⁹《阿壩県誌》(1998:117-119)では、これに相当する方言を農民方言と呼んでいるが、話者が農民とは名乗らないので呼称を変えることが望ましいと考える。このことは、Denwood(1999:28-29)においても農民方言は定住地域の方言も含むと考えられていることから、実際的には先行研究における社会的区分と言語区分は必ずしも一致しないことを意味している。

²⁰この名称は川西走廊諸語のスタウ語と紛らわしいため、あまり用いるべきではないと考える。

以上のような分類とは別のものとして、地域による分類も行える。海老原 (2005a: 15-18) に言及されるものや、西 (1987) の地図上に表される方言について言う。本論文では、後に一覧して掲げるように、全ての方言について地域名を与える。

社会的分類と地域的分類の両者は、確かに異なる基準による分類であり、1つの地域方言は先に述べたいずれかの社会的分類による区分に属する²¹。現在では、各地での社会構造の変化や交通の発達などにより、以前のように地域と社会的差異の対応関係が得られにくくなってきており、社会的差異は主に母語話者の意識によって判断しなければならなくなっている。

また、以上に述べたこととはまったく異なって、口語音と文語読書音の差異が非常に大きいのも特徴的である。すなわち、1つの社会的方言もしくは地域方言の中に、さらに口語音と文語読書音の異なりに由来する差異も現れる。このことは更科 (2006) に具体的な例とともに記述されているほか、鈴木 (2004) と遠藤 (2006) の記述する1地域方言²²にもこの差異が見られるようである。

2.2.3 カムチベット語

カムチベット語については、状況が錯綜しており下位区分を明確に行うことは現段階では難しい。先行研究でもその分類は一致を見ない。最も細かく分類を試みている先行研究は、瞿霽堂・金效静 (1981) であると考えられる。筆者は鈴木博之 (2006) において、川西民族走廊に分布するチベット語方言を音体系および語彙の特徴を基準にグループ分けを行って、瞿霽堂・金效静 (1981) より詳細な下位区分を提案した。ここではそれを踏まえて、解説を加えつつ述べる。

川西民族走廊地域に分布するカムチベット語について、仮に大きな方言群として下位分類が可能な範囲で提案できるとすれば、複数の先行研究で見られる以下のようものが認められる。

1. Derge [徳格] 方言群
2. Minyag [木雅] 方言群
3. mBathang [巴塘] 方言群

Derge 方言群は徳格県、石渠県、白玉県、甘孜県などに分布する方言群である。Derge 方言群は標準的カムチベット語として認定され、Derge 方言を代表とする先

²¹なお、牧民方言を指す漢語名に「草地話」や「牛場話」があるが、これは各地点によって若干指す言語が異なっている。

²²青海省共和県切吉郷で話される Chabcha/Cherje 方言で、牧民方言の1つである。

行研究も多い。Minyag 方言群は康定県、雅江県、九龍県などに分布する方言群である²³。先行研究は少ない。Kraft & Hu (1998) の一部に Dartsendo 方言の記述が見られる。mBathang 方言群とは、巴塘県、理塘県および前者に西接する地域に分布する。先行研究には格桑居冕 (1985) などの研究がある。

以上の3種は格桑居冕 (1985) のいう北路次方言、中路次方言、南路次方言にそれぞれ対応関係を得ることができると考えてよい。細部にわたっては、以下に述べるように、異なりが見られる。

以上に述べた方言群に含まれていないものは、現段階では以上のうちのどれとも異なる特徴をもつと考えている。その分類案については鈴木博之 (2006) に示したが、それに解説を加えて示すと以下のようなになる。

1. 迪慶州のカムチベット語

瞿靄堂・金效静 (1981) が下位区分として独立させているが、さらに2種類に分かれる。

(a) Sems-kyi-nyila [香格里拉] 方言群

香格里拉県、維西県塔城郷などのチベット語方言（雲嶺山脈東側）

(b) nJol [徳欽] 方言群

徳欽県、維西県巴迪郷などのチベット語方言（雲嶺山脈西側）

これらの中間部に位置する香格里拉県尼西郷、徳欽県奔子欄鎮の方言は両者の特徴を兼ね備えている²⁴。

2. Chaphreng [郷城] 方言群

郷城県、得榮県茨巫郷などのチベット語方言

瞿靄堂・金效静 (1981) も下位区分として独立させている。郷城県に分布するものを基準に、さらに細かく2種類に大別できる。

(a) 郷城県1・2・3区方言群

郷城県県城付近の中央部および東部に分布するチベット語方言

(b) 郷城県4区方言群

郷城県北西部に分布するチベット語方言、得榮県茨巫郷および香格里拉県東旺郷の方言とも近い

²³同地域に分布する川西走廊諸語の1つであるムニャ語は、Minyag 方言群とチベット文語で同じつづり字に由来する名称だが、ムニャ語と Minyag 方言群は区別されねばならない。

²⁴維西県塔城郷の方言もまた特徴的であり、下位区分を独立させるべきであるかもしれないが、未調査であるため特に見解をここで述べない。

3. nDappa [稲城] 方言群

稲城県、木里県西部などのチベット語方言

下位区分は十分把握できていないが、音体系に基づいて、次の下位方言区分を確認できる。

(a) 稲城県北部方言群

稲城県县城付近に分布するチベット語方言

(b) 稲城県東部方言群

稲城県東部および木里県西部に分布するチベット語方言

(c) 稲城県南部方言群

稲城県南部東義区に分布するチベット語方言、Sun (2003b) に触れてある

4. 丹巴県のカムチベット語「二十四村地脚話」

丹巴県誌 (1996) などに言及されているが、言語学には鈴木 (2006c) がその特徴を明らかにした。音体系に基づいて、さらに細かく 2 種に区分される。

(a) 大渡河東岸方言群

大渡河東岸、小金河沿いの地域に分布するチベット語方言

(b) 大渡河西岸方言群

大渡河西岸、東谷河沿いの地域に分布するチベット語方言

筆者がまったく確認していないもので、先行研究にカムチベット語として言及されるものには、以下のようなものがある。

1. Cone [卓尼] 方言

甘肅省卓尼県のチベット語

瞿靄堂 (1996) などの方言区分でカムチベット語の中の孤立的な下位区分として分類されている。

2. mBrugchu [舟曲] 方言

甘肅省舟曲県のチベット語

瞿靄堂 (1996) などの方言区分でカムチベット語の中の孤立的な下位区分として分類されている。

3. 虎牙方言

平武県虎牙郷のチベット語

劉輝強 (2006) や尚雲川 (2006) による言及で、言語資料はない²⁵。

以上のうち先の2つは、先行研究に記述される語彙形式などの情報から考えて、その特徴を見る限り次節にあげるものと並んで下位区分保留ということも考えられ、カムチベット語であると完全に断定できるとはいえない。

カムチベット語とは相当多くの方言群を擁する巨大なもので、寄せ集めの感を覚えるところもある。現在のチベット語方言研究では、三大方言以外に新しいグループを設定できる可能性もあることから、従来の分類も見直される可能性として存在する。

2.2.4 その他のチベット語方言群

先に掲げた2大方言に分類されない、もしくは分類を保留する諸方言もまた存在する。いくつかの先行研究を挙げると、以下のようになる。

1. Lin (2002) : Thewo [鉄布] 方言 : 阿壩州若爾蓋県鉄布区²⁶
カムチベット語に近いという結論だが、系統分類行わず
2. Sun (2003b) : Zhongu [熱務溝] 方言 : 阿壩州松潘県熱務溝区
新しい方言を仮定
3. 孫天心 (2003) : Chosrje [求吉] 方言 : 阿壩州若爾蓋県巴西区
下位区分保留
4. Sun (2005) : gSerpa [色爾壩] 方言 : 甘孜州色達県
下位区分保留
5. Suzuki (2005a) : Askyirong [阿西茸] 方言 : 阿壩州若爾蓋県巴西区
若爾蓋県東部、松潘県、九寨溝県に分布する方言をまとめて「ヒャルチベット語」方言群を提案
6. Suzuki (forthcoming) : Sharkhog [松潘・九寨溝] 方言 : 阿壩州松潘県・九寨溝県
非アムドチベット語を主張、前項ヒャルチベット語に分類

²⁵この方言については、丁種本《西番譯語》との関連において重要な役割を果たしうると見られる。詳細は第6章を参照。

²⁶この方言は東隣に位置する甘南州迭部県のチベット語方言と共通するというが、迭部県のチベット語方言は一般にカムチベット語として知られ、莫超 (2004) のような迭部県周辺の漢語を専門に扱う文献ではその土地のチベット語をカムチベット語と断定して用いている。

これらには大きく2タイプあり、1つは筆者が「ヒャルチベット語」と呼ぶもの (Suzuki (forthcoming)、鈴木博之 (2006) など)、もう1つは分類にさらなる研究を要するものである。

2.2.4.1 ヒャルチベット語

チベット語の方言分類は、瞿霽堂・金效静 (1981) などが示すように、音韻の類型的特点に基づいて行われることが多い。しかしその典型的類型に当てはまらない場合は、特に問題となる。その詳細は第5章の議論に譲る。

筆者は言語的な特徴を整理することで、阿壩州北東部に分布する方言をまとめて新しい方言群「ヒャルチベット語」を設定することができると考えている。その是非は今後の議論を待たなければならないが、特にチベット語方言の類型的特点からアムドチベット語に分類することに反対を主張すべき方言群がアムド地域に分布していることに注意しなければならない²⁷。このことは鈴木博之 (2006) において明確に主張し、漢語名には「夏爾藏語」を与えた。「ヒャル」という名称は、主に松潘県の岷江流域に居住するチベット人の自称であり、Ketshal [十里/高屯子] 方言の /pʰar wa/ という発音に基づいている。この語は蔵文 *shar ba* に対応する²⁸。

現段階でヒャルチベット語に分類されるのは、松潘県の岷江流域、九寨溝県、若爾蓋県巴西区に分布する方言群である。若爾蓋県鉄布区の Thewo 方言はヒャルチベット語に近い特徴を持っているが、ヒャルチベット語であるかどうか現段階では断定はできない。Sun (2003b) の扱う松潘県の Zhongu [熱務溝] 方言は、おそらくヒャルチベット語ではない²⁹。

²⁷ ヒャルコフ地方すなわち松潘県の岷江流域に分布するチベット語を例に考えると、先行研究によって次の3種類の系統分類が行われている。

1. アムドチベット語：Nagano (1980) や西田・孫 (1990)
2. カムチベット語：華侃・尕藏他 (1997)、劉輝強 (2006) や尚雲川 (2006)
3. ヒャルチベット語：Suzuki (2005a, forthcoming)

²⁸ この蔵文はネパールのシェルパと同一であるが、互いの関係は存在しない。かつて Ketshal 方言のことを Nagano (1980) が Amdo Sherpa と呼んだが、この Sherpa とここでいう「ヒャル」は同一である。ただし、鈴木 (2005b) で述べたように、Sherpa という名称は誤解を招くため用いるべきではない。

なお、これに関してさらに問題を大きくしているのは、西 (1987:175) が Nagano (1980) の扱う言語を甘肅省甘南州の方言と紹介している点である。これは完全な誤りである。

²⁹ 地域区分上はヒャルチベット語の分布する地域に含まれるように見える。しかしこの方言をヒャルチベット語に分類することはおそらくできない。その根拠は、方言区分に関する詳細な言語特徴は第4章で述べてあるが、筆者の調査 (Hongtu [紅土] 方言) によると、この方言は超分節音素が存在しない点でアムドチベット語的特点を備えていることである。しかしその一方でアムドチベット語のように音体系、音節構造が複雑にならないのである。

「ヒャルチベット語」設定上の問題は、この区分がいわゆる3大方言群すなわち中央、カム、アムドと本来的に並ぶ歴史的な位置を占めるものなのかということである。チベット語の祖語からの発展については西田(1987)などの提案があって、相当初期に中央、カム、アムドという分岐が成立していることになっている。これとヒャルの分類が並ぶものであるかどうか、ということになる。この問題に関して、現段階で筆者は結論を保留するが、アムドチベット語と異なることは言語学的類型特徴から否定しておく。それゆえ、中央チベット語もしくはカムチベット語との関連を考察する必要があるが、この問題は歴史学、民族学とも関連する問題であり、本論文の扱う範囲を超えることになる³⁰。

2.2.4.2 系統不明/保留の方言群

系統不明もしくは保留とされる種々の方言が存在する。

Zhongu 方言や gSerpa 方言などは、言語学的研究が提示されているにもかかわらず未だに分類漏れとなっている。このような多様かつ特殊な方言が確かに各地に存在する。

さらに、具体的言語事実に触れずに既定の方言区分に基づいて分類されているものもある。たとえば、先に述べたが、劉輝強(2006)や尚雲川(2006)が述べる平武県の「チベット語」方言などは、詳細がよく分からないが、カムチベット語に分類されている。

2.2.5 筆者の調査とチベット語方言の分布

本論文で取り上げるチベット語方言のうち、主要な方言の分布を以下に示す。

³⁰重要な関連事項は民間伝承と史実との関係である。先にも述べたように、ヒャルチベット語の話される地域の民間伝承では、話者の来源がチベット自治区の阿里であるとするなら、言語学的な先行研究で言及のあるカムチベット語の一種という分類のほかに中央チベット語との関連も考慮が必要であろう。

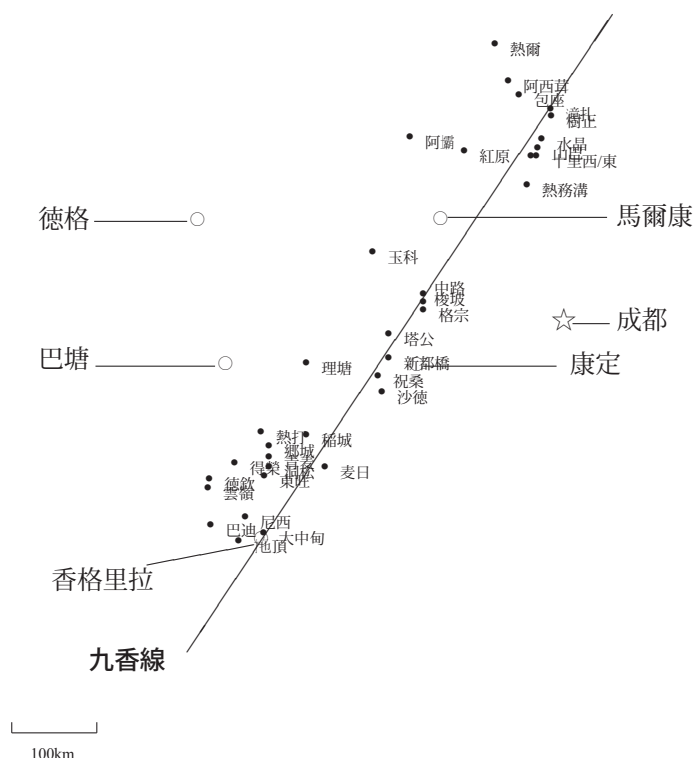


図 2.3: チベット語方言の分布地点

本論文で主として扱われる方言は、先に見た川西民族走廊のうち「九寨溝-香格里拉」を結ぶ「九香線」すなわちチベット文化圏のほぼ東端の主軸上に多くが並んでいる。

以上の地図に示したものは地域名であり、そのままの形で方言名を示していない。本論文で言及する方言名、およびその方言が話される詳細な地域名との対照は以下ようになる。文献を指示していないものは、原則筆者の調査で得た資料を用いる。

地域名	方言名	詳しい県・郷名
熱爾	gZari	若爾蓋県熱爾郷
阿西茸	Askyirong	若爾蓋県阿西茸郷卓藏村
包座	Babzo	若爾蓋県包座郷長薩村
漳扎	gTsangtsa	九寨溝県漳扎鎮達基寺村
樹正	Phyugtsi	九寨溝県漳扎鎮樹正村（九寨溝内）
阿壩	rNgawa	阿壩県阿壩鎮
安羌	Anchams	阿壩県安羌郷日格達村
紅原	dMarthang	紅原県邛溪鎮龍壤村
水晶	Amphel	松潘県水晶郷安壁村

山巴	sKyangtshang	松潘縣山巴鄉山巴村
十里/西	Ketshal	松潘縣十里回族鄉高屯子村（岷江西岸）
十里/東	Thangskya	松潘縣十里回族鄉大屯村（岷江東岸）
熱務溝	Zhongu	松潘縣熱務溝區 [Sun (2003b) による]
紅土	Hongtu	松潘縣紅土鄉卡卡村
玉科	gYokhog	道孚縣甲宗鄉
色爾壩	gSerpa	色達縣色爾壩區 [Sun (2005) による]
中路	sProsnang	丹巴縣中路鄉甲仁依村
梭坡	Sogpho	丹巴縣梭坡鄉莫洛村（大渡河東岸）
格宗	dGudzong	丹巴縣格宗鄉格宗村（大渡河西岸）
木茹	Morim	道孚縣木茹鄉
八美	Bame	道孚縣八美鄉河咂村
塔公	Lhagang	康定縣塔公鄉塔公村
新都橋	Rangakha	康定縣新都橋鎮東俄洛村
沙德	Sabde	康定縣沙德鄉
祝桑	Grongsum	雅江縣祝桑鄉
理塘	Lithang	理塘縣高城鎮
巴塘	mBathang	巴塘縣夏邛鎮
蘇哇龍	Sowanang	巴塘縣蘇哇龍鄉
措拉	mTshola	巴塘縣措拉鄉
稻城	nDappa	稻城縣金珠鎮
蒙自	Mundzin	稻城縣蒙自鄉
沙貢	Sagong	鄉城縣沙貢鄉
鄉城	Chaphreng	鄉城縣香巴拉鎮
青德	Phrengto	鄉城縣青德鄉
青麥	Phrengme	鄉城縣青麥鄉
洞松	gDongsum	鄉城縣洞松鄉
然烏	Ragwo	鄉城縣然烏鄉
熱打	Rwata	鄉城縣熱打鄉
茨巫	Tsiu	得榮縣茨巫鄉
得榮	sDerong	得榮縣松麥鎮
徐龍	Zholung	得榮縣徐龍鄉
麥日	Muli	木里縣麥日鄉
香格里拉	rGyalthag	香格里拉縣建塘鎮
大中甸	rGyalthag	香格里拉縣大中甸鄉從古龍村
東旺	gTorwa	香格里拉縣東旺鄉格魯村
尼西	Nyishe	香格里拉縣尼西鄉湯滿村
巴迪	Budy	維西縣巴迪鄉結義村/洛義村
德欽	nJol	德欽縣升平鎮阿東村

雲嶺	Yungling	徳欽県雲嶺郷佳碧村
燕門	Yanmen	徳欽県燕門郷
拖頂	Toding	徳欽県拖頂郷

本論文では、Derge 方言に代表されるカムチベット語 Derge 方言群（北路次方言）を大きく取り上げることとはしない。筆者は Derge 方言や Loshul（洛須）方言の一次資料を手に行っているが、それ以外の資料がなく、地域的考察に支障を与える可能性があるからである。Derge 方言については先行研究がすでに多数提出されていることから、必要に応じてそれらからの引用を含め、個別に言及することにする。言語地図にこれらの資料は反映されない。

2.3 川西走廊諸語

川西走廊諸語は、現在のところここにまとめられるすべての言語がチベット・ビルマ語派に属していることが知られている³¹。それより細かい下位区分については、さまざまな案が提唱されているが、おおむね孫宏開 (1982, 1983) によって名づけられた「羌語群³²」という分類が通用している³³。ただし、本論文では系統関係を論じることが目的ではなく地域を単位に考察することから、以降も「川西走廊諸語」と呼ぶ。

2.3.1 含まれる言語

川西走廊諸語は、比較的以前から知られていたものと、1980 年代以降に新たに学界で認識されたものに大別することができる³⁴。チベット文化圏に関するものを中心に、話される地域とともに以下に紹介する。

比較的以前から知られていたものには、次のようなものがある。

³¹たとえば石碩 主編 (2005) では、壮語も当該少数言語に加えているが、厳密に言えば川西民族走廊と藏彝走廊は異なる地域であって含まれる言語もまた違って来るけれども、本論文では先に述べた「川西民族走廊」を踏襲し、本論文で扱う範囲内の事柄についてのみ述べる。

³²「羌語支」とも書かれる。

³³先行研究の系統論の多くは類型論的要素も含めた基準による分類を行っており、その一方で、類型論的特徴のみからチベット・ビルマ諸語を分類しようという試みも行われている。この状況はこれまでのチベット・ビルマ諸語の研究における問題点であるかもしれない。ここでは系統論に関わることは取り立てて説明しない。いくつかの説は白井 (2006a:72-77) がまとめている。

また、以下に述べる川西走廊諸語のうち、ペマ語については今なお羌語群に属するのかチベット語群に属するのかもしくはチベット語方言の一種か、具体的な言語事実を通して議論されている (Zhang (1997) や齊卡佳 (2006) など)。

³⁴詳細な情報は楊嘉銘等 (1994)、池田 (2003) 参照。言語分布図は現在のところ白井 (2004) が最も的確である。

1. 羌語³⁵

- (a) 北部羌語³⁶：阿壩州黒水県、茂県、松潘県
- (b) 南部羌語：阿壩州汶川県、理県

2. ギャロン（嘉絨/嘉戎）語

- (a) 四土ギャロン語³⁷：阿壩州馬爾康県、金川県、小金県、理県、黒水県、甘孜州丹巴県など
- (b) 茶堡ギャロン語³⁸：阿壩州馬爾康県大藏区
- (c) 四大壩ギャロン語³⁹：阿壩州馬爾康県日部区、阿壩県茸安郷など

以上のうちギャロン語として知られていたものの中には、以下にあげる言語群のいくつかを含んでいた、いわばギャロン・チベット族の話す言語の総体的名称であった⁴⁰。最近の研究によって独立の言語と認められたものもある⁴¹。

1980年代以降に新たに学界で認識されたものには、次のようなものがある⁴²。

- 1. ペマ（白馬）語：平武県、阿壩州九寨溝県
- 2. スタウ（道孚）語：甘孜州道孚県、新龍県⁴³
- 3. ゲシツァ（革什扎）語⁴⁴：甘孜州丹巴県大桑区、金川区

³⁵羌族自体はチベット文化圏に属するわけではないが、以下に述べる北部羌語の話者の中にはチベット族でチベット文化圏に属する人々が存在する。

³⁶この言語の話者は羌族よりもチベット族のほうが多い。チベット族の場合、文化習慣は他のチベット族と同様で羌族とは異なり、彼らは母語をチベット語方言と考えている。このことは黒水県の多数のチベット族についてあてはまることである。これに関する事情は《黒水県誌》(1993)に詳しい。また、これに該当する言語の詳細な研究は劉光坤(1998)を参照。

³⁷「四土」はギャロン地域のうちの四土司（梭磨、卓克基、松崗、党壩）に由来する名称である。

³⁸名称は Jacques (2004) による。茶堡河という地名に由来する。

³⁹名称は土地のギャロン語名（対応蔵文 *stod pa*）による。Sun (2004) によると、さらに草登 [mTshobdun] ギャロン語とショグ・ギャロン語に分かれる。後者は当該方言話者が自らの特異な言語のことをさす名称に由来する。

⁴⁰「ギャロン」とは言語名として用いられる一方、地域名であって1つの文化圏を形成する広い意味を持つ。文化面での研究は言語よりもはるかに多くなされている。「ギャロン」という名称の定義も諸説ある。楊嘉銘(2004, 2005)など参照。

⁴¹Sun (2000) は「ギャロン語群 (rGyalrongic)」を提唱し、詳しい下位分類があげられている。その中には、以下にあげるスタウ語やゲシツァ語、ラヴルン語なども含まれる。この分類には後に示すように下位区分で問題があると考えられるが、Jacques (2004) などでも踏襲されている。

⁴²本来現地では異なる言語と認知されていたにもかかわらず、チベット文化圏に属することに起因するチベット語来源借用語の多さから、チベット語方言の一種に見られていたものも存在する。

⁴³《新龍県誌》(1992)によると、新龍県のスタウ語の話者はもはやわずかの老年層の人に限られるという。

⁴⁴ゲシツァ語はスタウ語の下位方言という考えもあるが、筆者は異なる言語として扱う。

4. ポシ（蒲西）語⁴⁵：阿壩州壤塘県上寨区
5. ラヴルン（拉塢絨）語：阿壩州金川県観音橋区、馬爾康県木爾宗郷
6. ダパ（扎壩）語：甘孜州道孚県扎壩区、雅江県扎麦区
7. グイチョン（貴涼）語：甘孜州康定県魚通区
8. チョユ（却域）語：甘孜州新龍県、理塘県、雅江県
9. ムニャ（木雅）語：甘孜州康定県沙徳区、九龍県、石棉県
10. アルス（爾蘇）語：甘孜州九龍県、石棉県、涼山州冕寧県、木里県
11. リュズ（呂蘇）語⁴⁶：甘孜州九龍県、涼山州木里県
12. シヒン（史興）語：涼山州木里県
13. ナムジ（納木義）語/ナムズ（納木茲）語：涼山州冕寧県、木里県
14. プリンミ（普米）語：甘孜州九龍県、涼山州木里県⁴⁷

以上の分類および名称は本論文で用いるものであるが、先行研究によって同一言語であるにもかかわらず異なる名称を持つものがあり、中には異なる言語に似た名前が与えられたことがある⁴⁸。利便性のために、比較的知られた先行研究の名称を示すと、以下のような対応となる⁴⁹。

⁴⁵この名称は筆者が作った。Sun (2000) ではスタウ語、ゲシツァ語、ポシ語は同一言語で Horpa-Shangzhai と呼ばれている。しかしここで分割する3言語は似てはいるが言語学的にそれぞれ特徴をもっており、さらに Horpa という名称はチベット語でも多義的であり Shangzhai は壤塘県の1漢語地名「上寨」でしかないなど、Sun (2000) には問題が多い。

また、言語か方言かという議論において、明確な基準があるわけではなく、ここでもまた筆者の立場を支える明確な根拠というものはない。

⁴⁶リュズ語はアルス語西部方言という考えもある（西田・孫 1990:15-16）が、黄布凡・仁増旺姆 (1991) に従って異なる言語として扱う。

⁴⁷分布地域は話者がチベット族である地点に限り、普米族の地点は示していない。以下、プリンミ語について述べるときも同様にチベット族が用いるものの場合にのみ限る。また、これに該当するチベット族を林俊華 (2005) では「普米」と呼んでいる。

⁴⁸もっとも混乱を招きかねない名称は、陸紹尊 (1985) のいう「扎巴語」と黄布凡 (1991b) のいう「扎壩語」である。本論文の名称では前者がチョユ語の1方言で後者がダパ語となる。このことは一応学界で了解済みと考えたい。詳しくは池田 (2003) を参照。

⁴⁹さまざまな意味で不適切な名称のほか、日本語のカナ表記が漢字音に対応して原語音に対応しない点などを修正したのが本論文の表記である。同様のことを行っているものに池田 (2003) があるが、それをそのまま踏襲することはせず、事情に合わせて改変している。原則的に母語話者の自称を言語名とする。その方針は曾維益 (1997) にも示され、漢語名自体もその方針から変えたものがあり、複数の年代に渡る資料を利用するときには注意を要するようになった。

1. 四土ギャロン語：東部ギャロン語⁵⁰
2. 茶堡ギャロン語：東部ギャロン語⁵¹
3. 四大壩ギャロン語：草登ギャロン語・日部ギャロン語
4. スタウ語：ダウ語・アルゲン語・爾龔語
5. ゲシツァ語：アルゲン語・爾龔語・格什扎話・西部ギャロン語
6. ポン語：上寨話
7. ラヴルン語：観音橋話・西部ギャロン語⁵²
8. ダパ語：チャバ語・ジャパ語
9. ナムジ語/ナムズ語：ナムイ語⁵³
10. プリンミ語：プミ語・小西番語

まだこれらの言語が認知されていなかったころは、「地脚話」という一般名称で呼ばれていたものも多い。各種《県誌》類における言語の項目の記述には、未だ川西走廊諸語とチベット語が区別されていないものもある。

また、チベット文化圏と深い関わりを持つものとして、納西語を加えてあげることがある。納西語は西部方言と東部方言すなわちモソ（摩梭）語に分かれる⁵⁴。チベット族と納西族の関わりについては、楊福泉(2005)などの研究がある。言語に関しては Hongladarom (1996) や Barte (2005) に簡単な言及があるが、本格的には考察されていない。

⁵⁰方角による名称は、ギャロンを地域としてみて地理的に東部で話されていることによる。かつての西部ギャロン語は、現在では独立した別の言語と認定されるようになり、「東部」という分類の意義も薄れつつある。

⁵¹かつては四土ギャロン語と同じグループと考えられていたことによる。

⁵²先行研究では、ギャロン語もしくはスタウ語の下位方言という扱いであるものがある。黄布凡(2001)が独立した1言語であると認定した。

⁵³「ナムイ」は漢語名「納木義/納木依」の音訳と見られるが、自称でこのような発音を持っているのは劉輝強(1983)の扱う方言にのみみられる。

⁵⁴なお、後者の一種と考えられるものに、涼山州木里県や塩源县に居住する蒙古族が話す言語が含まれる。この言語は鈴木(2005d)で紹介したもので、ナズ（納汝）語という名称を与え、川西走廊諸語の1つと考えられると述べた。言語の特徴にはやや際立つものがあるが、ここでは詳しく述べない。

2.3.2 先行研究

川西走廊諸語の先行研究は、言語によってその質・量にばらつきがある。ここでは網羅的に述べることはせず、語彙情報が比較的まとまって提示されているものを中心に整理する。

ここではまず、語彙が整理されている言語・方言について、その先行研究とともにまとめる。ただし言及対象はチベット族の話すものに限る。羌語、プリンミ語には他にも資料があることに注意。

言語名	方言名	分布地域	先行研究
北部羌語	Mabho	黒水県麻窩郷	劉光坤 (1998) ほか
四土ギャロン語	bTsanlha	小金県撫辺郷	Mansier (1983)
四土ギャロン語	Cogtse	馬爾康県卓克基郷	黄良榮・孫宏開編 (2002)
四土ギャロン語	Kyomkyo	馬爾康県脚木足郷	長野 (1998)
茶堡ギャロン語	Kamnyo	馬爾康県龍爾甲郷	Jacques (2004)
四大壩ギャロン語	Zbu	馬爾康県日部郷	林向榮 (1993)
ペマ語	白馬	平武県白馬郷	西田・孫 (1990)
スタウ語	Geshe	道孚県格西郷	黄布凡主編 (1992)
ゲシツァ語	Damdo	丹巴県丹東郷	孫宏開主編 (1991)
ゲシツァ語	Geshitsa	丹巴県革什扎郷	多爾吉 (1998)
ラヴルン語	Khroskyab	金川県観音橋鎮	黄布凡 (2003) ほか
ラヴルン語	Rigongri	金川県二崗里郷	林向榮 (1993)
ダパ語	Bratho	道孚県扎拖郷	黄布凡主編 (1992)
グイチョン語	sMepa	康定県麦崩郷	黄布凡主編 (1992)
チョユ語	団結	雅江県団結郷	孫宏開主編 (1991)
チョユ語	Yonglagshis	新龍県尤拉西郷	黄布凡主編 (1992)
ムニャ語	Lugpa	康定県貢嘎山郷	孫宏開主編 (1991) ほか
アルス語	則洛	甘洛県則洛郷	孫宏開主編 (1991)
リュズ語	卡拉	木里県卡拉郷	黄布凡主編 (1992)
シヒン語	Zhoblugs	木里県水洛郷	黄布凡主編 (1992)
ナムジ語	倮波	木里県倮波郷	孫宏開主編 (1991)
プリンミ語	Salngalung	九龍県三岩龍郷	陸紹尊 (2001) ほか
プリンミ語	Tharpa	木里県桃巴郷	陸紹尊 (2001) ほか

また、方言研究が比較的進んでいる言語として、各種羌語、各種ギャロン語、プリンミ語をあげることができ、その詳細な資料は公開されていなくともそれぞれ黄布凡・周發成 (2006)、林向榮 (1993)、陸紹尊 (2001) の言及から分かる。また劉勇等 (2005) では、道孚県に分布するスタウ語の方言調査も広く行われているようである。また、アルス語やシヒン語、ナムジ語、グイチョン語、ペマ語の方言調査も近

年行われている⁵⁵。ダパ語の方言調査も行われている（白井 2006a）。

2.3.3 筆者の調査

本論文では中心的な役割を果たさないけれども、筆者は川西走廊諸語についても 1 次資料を収集しており、折に触れて本論文中でも利用していくため、筆者が調査した川西走廊諸語・方言の分布を以下に図示する。

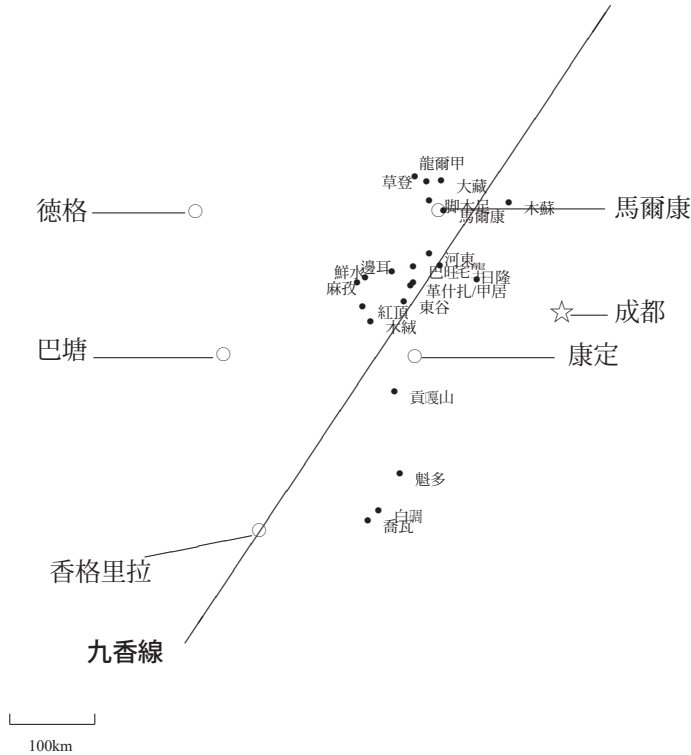


図 2.4: 川西走廊諸語の記録地点

以上の地図に示したものは地域名であり、そのままの形で方言名を示していない。方言名、およびその方言が話される詳細な地域名との対照は以下ようになる。

地域名	言語名	方言名	詳しい県・郷名
大藏	茶堡ギャロン	Datshang	馬爾康県大藏郷徳爾巴村
龍爾甲	茶堡ギャロン	Kamnyo	馬爾康県龍爾甲郷干木鳥村
草登	ショグギャロン	mTshobdun	馬爾康県草登郷沙佐村
脚木足	四土ギャロン	Kyomkyo	馬爾康県脚木足郷石江嘴村
馬爾康	四土ギャロン	mBarkhams	馬爾康県馬爾康鎮査北村
木蘇	北部羌	Musu	黒水県木蘇郷

⁵⁵シヒン語やグイチョン語は話者数が相当数少ないことから、危機言語との関連で調査が行われている（孫宏開・劉光坤 (2006)、宋伶俐 (2006)）。

河東	四土ギャロン	Chuchen-shar	金川県河東郷
巴旺	ゲシツァ	dPawang	丹巴県巴旺郷齊支村
甲居	ゲシツァ	brGyagyud	丹巴県轟呷郷甲居村
革什扎	ゲシツァ	Geshitsa	丹巴県革什扎郷布科村
邊耳	ゲシツァ	Belri	丹巴県邊耳郷二馬村
東谷	四土ギャロン	sTongdgu	丹巴県東谷郷東馬村
宅壩	四土ギャロン	Zilung	小金県宅壩郷
日隆	四土ギャロン	bZhilung	小金県日隆鎮長坪村
鮮水	スタウ	Phyagru	道孚県鮮水鎮一格村
麻孜	スタウ	Mazur	道孚県麻孜郷溝普村
紅頂	ダパ	Ngwirdei	道孚県紅頂郷地茹村
木絨	ダパ	Mowzo	雅江県木絨郷木絨村
貢嘎山	ムニャ	Lugpa	康定県貢嘎山郷城子村
魁多	プリンミ	Kuido	九龍県魁多郷里伍村
喬瓦	プリンミ	Qiaowa	木里県喬瓦鎮
白碉	ナズ	Bediao	木里県白碉郷

本論文で扱っているのは、チベット語来源借用語の形式のみである。

川西走廊諸語の資料は筆者の調査資料とともに、先行研究にある資料もあわせて用いる。

第3章 音声分析と記述方法

3.1 音声分析及び表記の方法論の必要性

音韻表記は、方言学上の議論において語彙情報を提示する上でもっとも根本的であり基幹をなす部分である。それについて、仮に分析対象が同一であるとして、観察者や分析者が異なるという理由で音韻記述に異なりが及んだ場合、その結果をただ利用して議論を構築するならば、出発点から思わぬ誤解を招きかねない。たとえば、表記上の差であるにもかかわらず語彙形式の異なりに歴史的変遷が指摘されると考えるようなことは、避けなければならない。

音声分析の立場というものが複数存在することは、総合的な分析を行う上では、1つの障害を生み出す。大抵の言語資料については音韻表記が採用されているため、音声分析の立場が異なっていれば得られる音韻とその表記法が異なる可能性は否定できない。先行研究の表記が十分詳細でありそれらを整理して新しく表記を定めるならば可能な作業ではあるが、その逆はそもそも不可能である。必要としたい情報がすでに整理されてしまっていて、より細部の観察結果を必要としても提出された先行研究から得ることはできない。記述研究に基づく異なる言語を並列して扱わなければならない場合、その時点で分析にゆがみが生じうるのである¹。

このような事態を避けるためには、ある1つの音声分析についての基盤を採用し、その使用を徹底することによって得られる資料を利用することが必要である。それゆえに、観察、分析基準を自身で設定し、利用する言語について筆者が自ら収集し共通の基盤で分析を行うことが望みうる最高の手段とになるだろう。基準を設定し、音声分析の責任を自身で持つことができれば、その後の方言学上の分析結果の解釈のみに議論の焦点を当てることができる。

チベット語の場合、音声分析は研究者によって大きくずれが出る。また、それを詳細に表記するか否かも分かれ、基礎的な音韻表記に異なりが及んでいる。ここでもっとも研究の進んでいる方言である Lhasa 方言を引き合いに出しても、子音体系

¹筆者は音韻分析の立場が複数存在すること自体に問題があると考えているわけではない。ただし統一的基準がなければ方言地理学のような同時に多数の言語を分析する研究は成立しがたいと考えている。

の考え方、母音の数、声調の弁別特徴などについて、実にさまざまな論が展開されている²。たった1つの方言であるのに体系性や音声実態の記述に大きく差が出るのであるから、本章で述べる筆者による音声分析の方針と規定はこれから行われる筆者の記述において極めて重要なのである。

3.2 従来の問題点とその解決方法

ここでは、具体的な問題点を挙げつつ、それを解決する筆者の方法および約束事を述べる。

3.2.1 問題点の提示

たとえば、前鼻音とは子音連続か前鼻音つき子音という単一の音素か、という違いが見られる。あるいは、前鼻音の聞こえの低さを原因に、機能負担をしていないとの考え方から前鼻音を認定しない考え方もある。子音連続の存在自体に論点があるとき、このような解釈の違いの混入を避けなければならないことは言うまでもないだろう。存在するか否かが問題の焦点になる場合は、機能負担といった概念を重視するのではなく、音声学的に知覚可能であればすべて記述しなければならないのは言うまでもない。

また、同一研究者でも方言によって分析態度が異なる場合がある。Sun (1986) の Byamme 方言では、前鼻音も前気音も単一音素に帰納して考えているが、Sun (2003b) の Zhongu 方言では、前鼻音は単一音素であるが前気音は子音連続と分析する。しかしながら、本論文の趣旨で問題となるのは、前鼻音要素や前気音要素の存在自体であり、その存在の有無が明確であれば、それがどのように音韻解釈を受けようとも関わらないのである。要するに、音韻解釈が分かれることが問題になるのではなく、前鼻音要素などの存在を明示的に表記に示すということであって、それが方言差異を明確にしていると考え（鈴木 2006b）。

本論文における音韻記述の方法論は、その基礎を鈴木 (2005a, 2006b) によることにする。それによると、理想とする分析は、単一言語・方言内部で考えられるべき音韻表記よりも、音声実態に即した全体論的音韻表記を優先するものである。それによって解決される点は、先述の分析の統一以外に、従来の研究において知られることのなかった子音連続の構造の表記への反映である。

²参考として、Hari (1979)、于道泉 (1983)、北村・長野 (1990)、星 (2003) などを挙げておく。それぞれ細部にわたって分析が異なっている。

以下に鈴木 (2005a, 2006b) の議論から具体例を伴う問題を簡潔に整理し、さらにいくつか同論文に述べていない点も加えて、筆者の方法論を提示する。

3.2.2 子音

ここでは、子音の音素設定に関わる問題と子音連続に関わる問題について触れる。

3.2.2.1 子音の音素設定

各種方言の音素体系を考えると、次の観点による統一的な調整が行われている。

1. 音素表記はあくまでも音声特徴に基づいて行われる
2. 漢語に由来する語彙にのみ現れる音韻要素は当該方言の音素と認めない
3. 音韻要素とするならば機能負担が著しく低くなる（1例しか現れないなど）場合であっても、本来語あるいは語源の推定が不可能なものについては、音素として認める

第1の見解は、各方言の音声特徴を生かした表記を行うということであって、たとえばそり舌音が閉鎖音か破擦音かということは、それぞれの方言がもつ異音の現れを総合的に勘案し、音素表記を選択するといったことがあげられる。これ以外に問題になりそうな点は、 $l/ɭ$ の異なり、 $r/ʂ$ の異なりなどがある。また、 $/r/$ とされるものについては、極めて多くの調音点上の音声的変異を含んでいる。この音素表記については、例外的に音声実態に従えないということを断っておく。

第2の見解は、現代の言語環境を考え漢語との2言語併用が広く行われていることから、話者が語彙について頻繁に漢語を用いてしまう傾向を想定し、この場合の漢語は漢語の語彙のチベット語方言への挿入と位置づけ、チベット語方言固有の音体系に従わないことを考慮している。一方で当該方言に定着した漢語は当該方言の音体系に従って、音形式を変化させている場合が多いということも念頭にある。

第3の見解は、複数の方言を同時に扱う際に、機能負担が著しく低い要素が地域特徴として現れる可能性を考慮していることによる。方言地理学では微細な異なりから方言間の歴史を分析できる特徴があるため、どんなに細かい点であっても、1言語体系としての都合（体系性や経済性など）で実際に現れる音声実態を異音と分析することは、資料的価値を著しく損なうものである。

以上の3点について、第4章で具体的に記述される方言の音体系は、チベット語方言を扱う全ての先行研究と十分異なることに注意が必要となり、先行研究との単

純な対照は意味を成さない。いずれにせよ筆者の方針は、表記のための記号として一定の音声情報にかかわる約束事（たとえば IPA や本章での議論）に従って可能な限り音声形式に近いものが選択されるべきということである。

3.2.2.2 子音連続

子音連続には2つの大きな問題点がある。1つは子音連続の構成要素の有無、もう1つは子音連続の記述の方法論である。

子音連続の構成要素の有無

本論文で扱われるチベット語方言（第4章参照）には、先行研究にはほとんど記述されたことのない子音連続が存在する。特に前気音と無声有気音に先行する前鼻音については問題が多い。特に前者は限られた先行研究（Sun (1986, 2003b) など）を除いて言及されることすらなかった。

筆者は、このような差異が生じる原因を、やはり先の子音の記述方法で述べたのと同様に、音声実態と表記との対応関係が異なっていることであると考え。議論のために、先行研究で多少の言及のある無声有気音に先行する前鼻音について先に述べる。

格桑居冕・格桑央京(2002:98)はDerge方言の記述において、無声有気音に先行する前鼻音の取り扱いについて述べている箇所があり、それによると、無声有気音に先行する前鼻音は、調査当時³学識のある老年層の発音には明確に現れるが、若年層では音声学的に現れることは観察できるが、弁別的でないと分析している。しかし、前鼻音の現れる語と現れない語について十分に観察されているのか疑問になる。音声学的に存在するのには何か理由があると考え筆者にとって、一部の語で現れるか現れないかが分かれるからといって記述に反映させないのは事実を正確に把握している態度とはいえず、本論文で行うような議論には差しさわりがある。筆者による現代のDerge方言（若年層）の調査結果では、調音音声学的には極めて短く弱い発音ではあるが、無声有気音に先行する前鼻音は確かに存在している。特に文中における音声実態を観察すれば、より明確な聞こえをもつ。それゆえに、先行研究で無声有気音に先行する前鼻音を無視する分析があるけれども、それは確かに存在しているため、子音連続の組み合わせの一種として記述の対象にしなければならない。

前気音の問題は、より厄介である。ほとんどの研究が取り扱わないからである。確認される限り、Sun (1986, 2003b) のみが認定している。しかしながら、前気音は

³おそらく1950年代である考えられる。

極めて多くの方言に存在することが確認され、前気音をもたない方言の方が際立っていると結論づけることができる (Suzuki (2004)、鈴木 (2006e))。同じく格桑居冕・格桑央京 (2002:197-198) は bLabrang 方言の初頭に h を含む子音連続の音声的な注釈として、h の音声実現は後続の子音よりも微弱であることに特に触れている。つまり、これが前気音に相当する可能性が高いのであるが、これは従来の記述が言う「アムドチベット語」を代表する子音連続の一種に他ならない。それがカムチベット語にも極めて多く現れることは、本論文第 4 章に示すとおりである。前気音が記述に反映されない原因は、おそらく前鼻音を除く他の子音連続と決定的に音声実現が異なるからである。前気音の記述とその他の子音連続では、聞こえの明確さの点で異なっている。それが従来の記述では表すことが不可能であったのではないかと考える。その根拠と区別の方法は、以下の議論に展開される。

子音連続の記述の方法論

子音連続に音声学的観点から見て同じ音素列に対応する例が、その発音様式によって異なることを明確にしたのが鈴木 (2005a) である。たとえば、以下の Khrika 方言⁴のような例は、先行研究では表記上区別されることはほとんどなかった。

[β^odʒE] 「8」と [β^odʒE] 「忘れる」

多くの先行研究では、一般に語頭における複数の子音からなる音素列を「子音連続」として扱っている。しかし先の例のような音声実態を考慮すると、先行研究で一般に「子音連続」とひとくくりにされているものの中に、異なる音声現象が見られることが分かるだろう。その特徴をあげるならば、先に見たような子音連続を構成する子音が等価に発音されない⁵ことや、子音群の連続がそれぞれ密接に発音されないことなどがある。多くの先行研究にはそのような音声実態に対する音声学的な報告や記述はあっても、そのような音声現象が音素配列において区別されていないのが通例であった。

次の例はある 2 つの語の音声学的な差異を明らかにしている⁶。

⁴青海省貴徳県河東郷で用いられるアムドチベット語農民方言の 1 つである。

⁵多くは先行する子音が弱く発音される。

⁶以下に言及する方言は、それぞれ以下の通り。

Cherje：青海省共和県切吉郷のアムドチベット語牧民方言

dMarthang：四川省紅原県邛溪鎮のアムドチベット語牧民方言

rDowi：青海省循化県道幃郷のアムドチベット語農民方言

Mangra：青海省貴南県沙溝郷のアムドチベット語農民方言

方言名 \ 語義	歌	竜王
Khrika	[hɪːʎlɯ]	[hɪːʎlɯ]
Cherje	[qʰlɯ]	[ʰlɯ / kʰlɯ]
dMarthang	[ʎlə]	[ʰlə]
rDowi	[ɸlə]	[ʰlə]
Mangra	[ɸlə]	[ɸlə]

以上のうち、Mangra 方言以外に見られる音声学的差異が音韻表記に反映されなければならないのは言うまでもない。そして、それらを 1 方言の中で解決するのではなく、全ての方言に共通の基盤を持って分析することに妥当性を認めるのが鈴木 (2005a) の主張である。

また、音声現象として、初頭子音が極度に弱化しているものを一般的な子音連続と同等に扱うことは避けなければならないが、先行研究を通覧した場合、適切な書き分けが明確な表記として見られない点もまた問題である。具体的には、前鼻音や前気音についての扱いが問題となってくるが、前鼻音とは子音連続か前鼻音つき子音という単一の音素か、ということは記述者個人の方針やある特定の音韻論の枠組みに依拠するのではなく、実際の言語事実に基づいて分析されなければならない。

最大で考えるならば、鈴木 (2005a) の示すように 5 種類が想定される。わたり音を含まない 2 子音連続の場合を考えて、以下のようになる。

模式化	発音様式についての説明
1 C ^o CV-/CCV-	各子音が明瞭に発音され、かつ調音間に微少な休止がある
2 CCV-	各子音要素が明瞭に発音され、等価な子音連続を構成
3 CCV-/C ^o CV-	等価な子音連続か先行子音の調音が弱く連続を形成しない
4 C ^o CV-/C ^o CV-	先行子音の調音が弱く、かつ調音間に微少な休止がある
5 C ^o CV-	常に先行子音が弱い

以上に述べたことをよりモデル化して、チベット語以外に川西走廊諸語にも拡張できることを述べたものが鈴木 (2006b) である。同論文が述べる例として、次の子音連続のモデルにおける問題がある。/s/ と /k/ からなる子音連続の組を持つ語において、異なる 3 種の言語 A, B, C における以下の例を考える。

	言語 A	言語 B	言語 C
例語 1	[ʰk-]	[ʰk-]	[sk-]
例語 2	[sk-]	[ʰk-]	[sk-]

このとき、言語 A では発音様式の異なりが見て取れ、異なる記述を与えることに問題は生じない。一方、言語 B および言語 C の事例では各言語において発音様式の異なりは見られず、2つの例語は同じ子音連続と分析することが妥当のように見える。

仮にいずれの言語でも/sk/と記述した場合、音韻形式を見ただけでは言語 B と言語 C は同様の形式を持っていると判断されうる。ところがこれは事実でなく、言語 B と言語 C はそれぞれの話者によって異なる発音と認識され、それが言語間の異なりであると考えられている状況が存在するのであるから、ここで問題が生じることになる。

筆者は、本論文で取り上げる言語・方言間で、以上のような問題がたとえ個別言語の記述であっても排除されるべきであることを主張する。1 言語の分析において差異を見出せなければそれを分析の考慮に入れないという態度を否定し、それぞれの発音様式をすべて音韻記述において視覚的に反映させることを一貫して行う。

3.2.3 二重母音

二重母音の問題は、2つの問題を含んでいる。1つは、音声学的観点から見て二重母音が成立しているか否かの問題、もう1つは言語事実の解釈としての二重母音の定義の問題である。

具体的には、前者の問題は意西微薩・阿錯 (2004:13) などが指摘しているように、チベット語方言記述の先行研究において二重母音と呼ばれるものが実際に二重母音として現れず、2音節に分解できるものがあるということである。

後者の具体的な問題は、子音と母音の間に生じるわたり音や、語末子音とも解釈できるわたり音も区別なく理論的な都合によって二重母音とされる例である。たとえば漢語音韻学におけるわたり音相当の位置に来る「介音」は子音扱いではなく母音を含む韻母を構成する一部になっている。筆者はわたり音は子音の一部に数えるため、漢語のような考え方とは相容れない。

また、二重母音と関連して、長母音と重ね母音の取り扱いの問題がある。長母音はたとえば a: と表記でき、重ね母音は aa と表記できる。重ね母音は十分な音声的持続が実現されるが、2音節には分解することができないもので、長母音は短母音とは区別されるが十分な音声的持続が確認できるとは限らない。いずれも1音節扱いであることは共通として、両者は聴覚上の差異として分析が可能である。

3.2.4 声調

声調の問題には2つの種類がある。1つは声調の音声上の弁別特徴に関する問題、もう1つは声調のかかる範囲についての問題である。

3.2.4.1 声調とレジスター

筆者は「声調」という呼称でもって、調値の差異による弁別を行う現象をさす。よって、声調を持つ言語もしくは方言は、その調値について多数の自由変異をもつものであってはならない。

筆者の規定するヒャルチベット語は、以上の音声的特徴とは異なる超分節音素が存在し、それを鈴木 (2005b) において「レジスター」と呼んで区別することを主張した。ここでは鈴木 (2005b) で扱った Ketshal 方言を例に、具体例をあげつつレジスターの音声的特徴を分析する。

調類や調値について自由変異で異なるものが見られる。具体的には以下のようなものである。

[nã^{55/53}] *gnam* 「空、雨」、[nã:^{fi22/33}] *rna* 「耳」、[ni^{?53/44}] *rnyid* 「しおれる」

また、緊喉音が現れる。緊喉音は、しばしば「緊喉母音」として言及される音を含んだものとして考える。緊喉母音とは、母音の発声時に声帯の緊張を伴い、ややきしみ音が聞こえるようなものをさす。ただし「緊喉母音」と呼ばれているものの音価は、言語によって異なる可能性がある。各言語に共通の明確な定義が存在するわけではない。ゆえに、筆者が「緊喉母音」と先行研究で言及されているものの音声学的特徴について参考とするのは、緊喉母音とされる音声実態を実際に聞いたノス彝語（涼山彝語）の事例を念頭においていることを断っておく必要がある。

Ketshal 方言の場合、確かに緊喉性を有する音声実態は存在するが、必ずしも母音のみに現れる要素ではない。比較的多い傾向としては、音節初頭から音節核にかけて緊喉性が生じるものである。しかしながら音声実態としては音節核である母音の緊喉性が際立っている。以下に例を示す。

[nã⁵⁵] *gnam* 「空、雨」

[ja⁵⁴] *g.yag* 「ヤク」

[dɔ¹³ ɣɔ⁴⁴] *rdo zho* 「石灰」

[ni⁵⁵] *mig* 「目」

[tɕi⁵⁵ / ɕi⁵⁵] *gcig* 「1」

[tɕu⁵⁴] *bcu* 「10」

なお、緊喉母音と母音に後続する声門閉鎖音の影響と考えられる母音の緊喉化とは、緊喉化の開始時点の観点から音声学的に明瞭に区別されうる。

そのほか、特に子音について非常に緊喉性の高い音が見られることもある。

[flã⁵⁵] *brla* 「太もも」、[pã⁵⁵ fi^wo⁵⁵] *dpa' bo* 「英雄」

このような例は数少ないが、初頭子音について相対的に明瞭に現れる。

ピッチの差異に注目すると、以下の事実が確認できる。

発音時のピッチは各語について固有にもつものがある。その一方で、特に決まっていなくてもまた存在する。子音連続を持つ語が環境によって初頭子音を脱落させる場合に、特定のピッチに変化することもある。

ここでは、ピッチについてまず一般に声調と同じ分類法を用いて述べる。すなわち、ピッチパターンを調類と調値に分けて現象をとらえることにする。調類とは、ピッチの1音節内での型、たとえば平ら、上昇、下降といったものをさす。調値は実際のピッチの高さの程度について表す。

現れうるピッチパターンは、高平、低平、上昇、下降の4種が大部分を占める。音声的には音節単位で現れるというよりはむしろ、北村・長野(1990)などのLhasa方言に見られる、基本的に語単位でピッチがまとまる語声調に比較的似ている。1音節の場合と2音節の場合について共通の調類が当てはまり、以下のように現れる。代表的な調値とともにまとめる。

	高平	低平	上昇	下降
1 音節	S ^{55/44}	S ^{22/11}	S ^{24/35}	S ^{53/42}
2 音節	S ⁵⁵ S ⁵⁵	S ²² S ²²	S ¹³ S ⁴⁴ / S ²⁴ S ⁵⁵	S ⁵⁵ S ⁴² / S ⁵³ S ¹¹

Ketshal 方言の場合、同一語が単音節例に現れる場合と複音節例に現れる場合とで調値が異なる場合が多い。調類の特徴は、特に2音節語には上昇調、高平調が多くみられる。単音節語は調値も調類も音素列との関連は見つけられない。また、ごく少数の2音節語に限って第1音節が上昇、第2音節が下降というものが見受けられる。

各語のもつ自由変異に注目すると、以下のような事実が確認される。

1. 緊喉・非緊喉の自由変異

緊喉性だけに注目すると緊喉・非緊喉が自由変異で現れる場合がある。ただしこれは後に述べるように、何らかの別の音声特徴、たとえばピッチの変化や子音連続の脱落などとの代償関係を持つことが多いため、この特徴のみを取り出せる例は少ない。

[jɔ̣.¹³ lA⁴⁴ / jọ.¹³ lA⁴⁴] *yol ba* 「カーテン」

[ɲ̥.⁵⁵ / ɲ̥.^{43/53}] *nya* 「魚」

[b̥ɔ̣.⁵⁵ mA⁴⁴ / b̥ɔ̣.¹³ mA⁴⁴] *sbong ma* 「酒かす」

[lɔ̣.⁵⁵ / lɔ̣.²²] *li* 「梨」

このような自由変異を見せる例のほかに、必ず緊喉音が現れる語も必ず非緊喉音が現れる語もあり、出現環境を規定することは非常に難しい。緊喉・非緊喉で対立を形成する例としては、以下のようなものがある。

[nã^{55/53}] *gnam* 「空、雨」と [nã³⁵] *nam* 「いつ」

これらのような例を見ると、緊喉音の出現そのものが Sharkhog 方言を特徴づけているようであり、緊喉音それ自体に特別に扱う必要があると判断できる。

2. 緊喉音・子音連続の自由変異

緊喉音の音声的特徴は、先にも述べたように、母音についてのみ緊喉化しているのではなく、音節初頭から声帯の緊張を伴うことが多い。このために、緊喉音と子音連続の間に何らかの関係が見られても疑問はない。

緊喉音と子音連続の自由変異が見られる例はいくつか確認される。

[tɕã⁵⁵ / ɕtɕã⁵⁵] *lcam* 「垂木」

[kɛ³⁵ tɕ^hA⁵⁵ / ^hkɛ¹³ tɕ^hA⁴⁴] *skad cha* 「話」

[sɛɪ^{l55} wu⁴² / ɣsɛɪ^{l55} wu⁴²] *gsal po* 「輝いている」

自由変異のパターンとしては、上の例にあるように、「緊喉性を伴い子音連続を形成しないもの」と「子音連続を形成し緊喉性を伴わないもの」という変異形になるものが多くを占める。

以上の現象を踏まえ、レジスターとして次の2種が弁別されると考える。

1. 緊張性：高ピッチ、緊喉音、子音連続（主に最初頭が弱い）、完全無声
2. 弛緩性：低ピッチ、息漏れ音

3.2.4.2 語声調

直前に扱った Ketshal 方言でも述べたように、ピッチパターンから音節声調と考えるよりもむしろ語単位でかかる語声調が分析、記述に適していることが分かった。

ここではいわゆる声調言語として考えられる Sogpho 方言を例に、鈴木 (2005c) の記述を参考に述べ、語声調としての現れを明示する。

声調の分析は調類と調値を分けて述べる。調値は5段階表示で音節右上に付す。

1 音節例の場合、ピッチのパターンは以下のように分類できる。

	音節初頭が高め	音節初頭が低め
平	[p ^h _A ²⁵⁵]「ぶた」、[tɕ ^h _ɤ ²⁵⁵]「あなた」	[ŋ ^w _o ²²]「私」、[ɲ ^h _ɹ ²²]「4」
上昇	[j _A ²³⁵]「ヤク」、[do: ³⁵]「～か？」	[mi ¹³]「火」、[lu ²¹³]「綿羊」
下降	[nã ⁵³]「空」、[s ^h ɔ̃ ⁵³]「光」	[mo ³¹]「母」、[n̥ɔ̃ ³¹]「2」

音声的には、高平調、低平調、高上昇調、低上昇調、高下降調、低下降調の6種がある。

いくつかの高上昇調になる語は、自由変異として高下降調にもなる。たとえば [j_A²³⁵ / j_A²⁵³]「ヤク」、[n̥ɔ̃³⁵ / n̥ɔ̃⁵³]「である」など。

次に2音節例では、1音節例よりも限られたパターンで現れる。また、上昇下降のパターンが現れる。

高平調：[p^h_A⁵⁵ ji⁵⁵]「故郷」、[jã⁵⁵ tɕi⁵⁵]「ヤンジェン（人名）」、[ts^h_A⁵⁵ ɕi⁵⁵]「温泉」

下降調：[p̥ɔ̃⁵⁵ tɔ̃⁴²]「草原」、[h^hka⁵⁵ ma⁴²]「星」、[ji⁴⁴ bu⁴²]「村」

上昇調：[ge¹³ ɲi^hgã⁵⁵]「先生」、[ɲi¹³ ɕu⁵⁵]「20」、[tɔ̃¹² rã³⁵]「彼ら2人」

上昇下降調：[ɲi¹³ dɔ̃¹³ ɲi^hda⁴²]「石」、[ja¹³ la⁴²]「家」、[ma¹³ ɲũ⁵²]「油」

「1音節語＋非自立的要素」で2音節を構成する場合も、以上のパターンに当てはまる。

次に3音節以上の例を考える。3音節でまとまる例としては、上昇調の例に [tɔ̃¹² rã³⁴ fiã⁵⁵]「彼ら」などが見られるが、非常に数が少ない。

3音節以上からなる多くの語は、その構成からいくつかの要素に分かつことができ、1音節または2音節ごとにまとまることになる。この場合、それぞれの要素に先述の声調のパターンが現れるものが多い。一方で3音節以降の音節が基本的に低平調[S²²]や[S¹¹S²²]となり、軽く発音されるものも見受けられる。

後者の例としては、[ɲi¹³ ɕu⁵⁵ tɕa¹¹ dʒi²²²]⁷「21」など。

以上の分析から、超分節音素としての声調の弁別特徴をまとめると、以下のようになる。

Sogpho 方言では、ピッチ高さの差異は平らの場合にのみ明確に対立を形成し、上昇下降を伴うものには初頭の高さは音声レベルでの差異が見られるのみと考えられる。また声調の単位は、基本的に語単位で現れる語声調といえる。このとき、初頭音節頭の高さと末尾音節末の高さ、および語中における調値が水平か曲線を描くかによって弁別される。また、第2音節が非自立的要素の場合、その声調は第1音節とともに決定される。

⁷この音声形式は自然発話における通常の発話速度で確認できる。ただしやや丁寧に発音する場合は2音節ごとにまとまって、第3、4音節は上昇声調をとる。

3.3 採用される記述法

以上に見た音声実態の異なりをいかにして音韻記述に反映させるかという実践的問題について、統一した記法を定めることによって、言語事実と表記の乖離と不一致を防ぐ必要がある。ここでは、いわゆる表記の約束事のようなことを中心に述べる。そのための論拠は前節に示した。

音声実態の記述における視覚的な反映は、チベット語方言においては Gō (1954) や Migot (1957)、Roerich (1958) などが行っている。Roerich (1958) は西田 (1970:213-214) において、同一形態素に対応する語彙形式が異なることを指摘されているが、筆者はそのような差異もできる限り記述に反映されている方が望ましいと考える。

以上の議論を貫くのは、音声情報が何らかの歴史的価値を持つ側面を表現しているという仮説が存在することを前提としているためである。現段階で、この仮説がある言語事実に依拠して確実な歴史的証拠となすという形で証明されているとはいえない⁸。その中で鈴木 (2005a) は、蔵文との対照を通じて以上の分析の必要性をチベット語方言の対照の中で見出せることを述べている。そして、本論文のような議論を通してこの仮説の検証が可能であると考え。鈴木 (2006d) は、個別の音韻分析がその個別言語（方言）の研究ではなく複数の方言の対照という研究において議論されうる事柄の内容および結論を縮小させる危険性があることについて述べている。

この見方には、依拠すべき仮説自体に不安定性があるけれども、できる限り多くの個別方言の分析を行い、1 言語としての体系を構成するものとして、音声実態の記述における視覚的な反映を位置づけることで、実際に記述に要求されることを示すことができる。そのために、筆者はこれまでに鈴木 (2004, 2005b, 2005c, 2006b)、鈴木・イエシエムツォ (2006)、Suzuki (2005a, 2005b, forthcoming) などを通じて一連の記述を発表してきた。これを各方言について、理想的には本論文で取り上げる全ての言語について行えばよいことになる。そして本論文で提供する自身の調査によって得られた言語資料はすべてそのように分析されている。その詳細は第 4 章に提示されている。それゆえに、上に掲げた方言間の問題というのはすでに 1 方言の中で解決済みであると考え。

以上の観点に基づくならば、先行研究で記述される資料の利用はかなりの程度で制限がかけられる。多くの先行研究が、以上で述べた情報を記述の際に破棄しているからである。もちろん、音声分析の過程を示してある先行研究も存在するが、その分析が不適切であると考えられるものもあり、そのような研究は資料としての利

⁸ただし子音連続の構造に際しては、孫宏開 (1999, 2005) のように比較言語学の観点から子音連続のパターンを分類しているなどの研究があり、ここに提示する子音連続の扱いが新たな知見につながる事が予見される。

用を断念せざるを得ない。その基準として、批判すべき分析の一例を述べておく。特定の先行研究をあげることは行わないが、方言資料の記述として不適切な態度は次の2点に集約される。一点は音声の観察において確認される細かな音声上を注記するにとどめ表記に残さないこと、もう一点は音韻体系における体系性や各種音韻理論の分析結果と実際の音声実態の観察を天秤にかけ、体系性を重視し観察結果に実直でないことである。これらについては、方言地理学の観点からの言語資料としての利用は断念するという判断を下す必要性がある。

それゆえ筆者は、できるだけ多くの言語資料を収集し共通の視点で音声・音韻分析を行い、その結果に基づいて分析を行う必要性が現段階でのチベット語方言学、特に方言地理学には求められていると考える。特に、表記に音声学側面がよく反映されていることがきわめて重要な意味を持つ。各種方言が独自の表記法を持っていることは決して好ましい状況ではない。その観点から、先行研究において提供される言語資料はよく吟味する必要がある、筆者の分析姿勢に近いものを選定すべきである。そしてそれを厳格に実行しなければ議論を行うための基礎材料の資料的価値が下がることは明白である⁹。そのための筆者の基準が反映された記述法の規定を以下に示す。

3.3.1 子音と母音の表記法

子音と母音については先に述べたように、発音様式の差異をそのまま音韻表記に生かすこととする。

もっとも問題となるのは初頭子音の場合であった。そのため、特別な約束として、初頭子音群の表記方法を定めておく。

先に子音連続には5種類の異なりが音声的に表れることを述べたが、そのうち実際に適用されるのは鈴木 (2005a) の結論である3種類であり、以下のような記述方法をとることにする。

	記述方法	対応する音声実態の説明
1	C.CV-	子音間に若干の休止を含みうる各子音要素が等価な子音連続
2	CCV-	等価な子音連続か先行子音が弱化し連続を形成しない
3	^c CV-	常に先行子音が弱化

⁹この意味では中国側のチベット語方言研究においても統制のとれた音声分析及び音韻表記の共通基盤があるように見え、それらを利用した研究に資料的価値を損なう要素はないといえるだろう。ただし、その共通基盤が適切であるかどうかは問題とすべきことであろう。西 (1986:873) によると、中国側の記述について声調の調値の記述には一種の標準化が加えられていると述べ、その立場を批判する研究もある。

また、先行研究で行われる表記が独自であったとしても、それに対する音声学的解説が十分になされているならば、それを参照しつつ表記を改めて積極的に利用することも、方法としては十分可能であると考えられる。

また、「二重母音・重ね母音・わたり音＋単独母音・単独母音＋末子音」の問題がある。これらについては、いずれも調音方法と音声実態に従い分析され記述される。「わたり音＋単独母音」と分析される場合、わたり音は初頭子音群の1つとして分析されるため、結果的に子音連続の組み合わせ数が増加することになる。わたり音は、たとえその要素が音声学的にきわめて弱くても、他の子音連続とは異なって先行子音と並列して記述される。

以上に示した表記法はわたり音 G を含まない2子音連続の場合であるが、わたり音 G は以上の3タイプの各 CV の間に配置される。また、方言によってさらに複雑な子音連続が許容される場合、各子音構成要素がいかに発音されるかによって、以上の表に示された表記法に従って記述に応用する。

3.3.2 超分節音素の表記法

本論文において扱う言語に関する超分節音素には、音声学的に調値およびそのパターンに反映される声調と、音節の緊張/弛緩という分類で一定の複数にわたる音声学的特徴を持つレジスターの2種類がある。

筆者の分析によって、チベット語方言の場合、声調は音節声調としてではなく語声調として扱うことができるという結果を得ており、本論文を通して語声調としてデータを提示する。この場合、声調は型（調類）が問題となり、調値は問題としない。また、従来の中国側の研究にあるような、「変調」という概念も存在しない。

調類の表記は各方言ごとに異なるが、おおよそ次の5種類の型がある。

ˉ：高平	ˊ：上昇	ˆ：上昇下降
ˉˉ：低平	ˋ：下降	

以上に示した記号を語の前に付加することによって、当該語の声調表記とする。声調記号と型は各方言によって以上のものと異なる場合があるため、詳細は個別方言における記述（第4章）を参照。

また、当然語を構成する音節数が多ければ、その中に声調を担わない音節（第3音節以降および一部の第2音節）も現れるが、それには特別表記を与えない。必要に応じて各事例ごとに注記することにする。1つの語について、以上の表記が与えられないものは、その言語に声調による弁別が行われていないことを示す。それゆえ、以下に述べるレジスターの対立を持つ言語の弛緩性の例であるか無声調言語の例であるかは、言語（方言）名から識別しなければならない。

レジスターの対立の場合、緊張性と弛緩性に分類でき、前者について音節初頭に°を付加して示す。

川西走廊諸語における超分節音の扱いは、先行研究からの引用の場合は先行研究の記法に従う。

第Ⅱ部

本論

第Ⅱ部 本論

第4章 各方言別・音声分析と記述

第5章 類型的分析と地理的分析

第6章 歴史的分析

第4章 各方言別・音声分析と記述

4.1 概要

本章では、川西民族走廊に分布するチベット語方言のうち、概略北から南へ分布する順に、各種地点の方言について音声分析に基づく記述を個別に提示する。

本章で取り上げるチベット語方言分布を中心に以下に図示する。

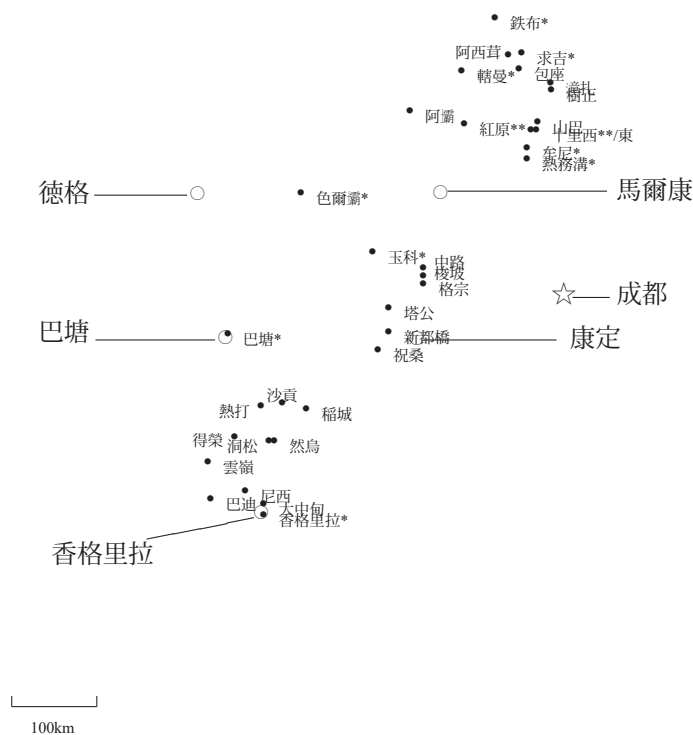


図 4.1: 本章で扱う方言の分布位置

あわせて、筆者以外の手になる先行研究¹において記述された方言も図示した。それについては地名の後ろに*を付して示してある。**を付すものは、筆者のもの以外

¹Nagano (1980)、格桑居冕 (1985)、Sun (1986, 2003b, 2005)、華侃・尕藏他 (1997)、Hongladarom (1996)、Lin (2002)、華侃 主編 (2002)、江荻 (2002b)、孫天心 (2003) とする。Derge 方言や甘肅省に分布する方言などは対象外とする。

の先行研究の分析と記述があるが、筆者による分析をここで提示するものである。
 以上の地域の方言について、地域名、方言名、詳細な地名及び扱う節を整理すると、以下のようになる。

節	地域名	方言名	詳しい県・郷名
*	鉄布	Thewo	若爾蓋県鉄布区
4.2	阿西茸	Askyirong	若爾蓋県阿西茸郷卓藏村
*	求吉	Chosrje	若爾蓋県求吉郷麻藏村
4.3	包座	Babzo	若爾蓋県包座郷長薩村
*	轄曼	Byamme	若爾蓋県轄曼郷河拉村
4.4	漳扎	gTsangtsa	九寨溝県漳扎鎮達基寺村
4.5	樹正	Phyugtsi	九寨溝県漳扎鎮樹正村
4.6	山巴	sKyangtshang	松潘県山巴郷
**4.7	十里/西	Ketshal	松潘県十里回族郷高屯子村（岷江西岸）
4.8	十里/東	Thangskya	松潘県十里回族郷大屯村（岷江東岸）
4.9	阿壩	rNgawa	阿壩県阿壩鎮
**4.10	紅原	dMarthang	紅原県卍溪鎮龍壤村
*	牟尼	Kusngo	松潘県牟尼郷石壩子村
*	熱霧溝	Zhongu	松潘県熱霧溝区紅扎郷、紅土郷など
*	玉科	gYokhog	道孚県甲宗郷
*	色爾壩	gSerpa	色達県翁達鎮根達村
4.11	中路	sProsnang	丹巴県中路郷呷仁依村
4.12	梭坡	Sogpho	丹巴県梭坡郷莫洛村（大渡河東岸）
4.13	格宗	dGudzong	丹巴県格宗郷格宗村（大渡河西岸）
4.14	塔公	Lhagang	康定県塔公郷塔公村
4.15	新都橋	Rangakha	康定県新都橋鎮東俄洛村
4.16	祝桑	Grongsum	雅江県祝桑郷
*	巴塘	mBathang	巴塘県夏卍鎮
4.17	稻城	nDappa	稻城県金珠鎮
4.18	沙貢	Sagong	鄉城県沙貢郷
4.19	洞松	gDongsum	鄉城県洞松郷
4.20	然烏	Ragwo	鄉城県然烏郷
4.21	熱打	Rwata	鄉城県熱打郷
4.22	得榮	sDerong	得榮県松麦鎮
*	香格里拉	rGyalthag	香格里拉県建塘鎮
4.23	大中甸	rGyalthag	香格里拉県大中甸郷從古龍村
4.24	尼西	Nyishe	香格里拉県尼西郷湯滿村
4.25	雲嶺	Yungling	德欽県雲嶺郷佳碧村
4.26	巴迪	Budy	維西県巴迪郷結義村

各方言について、見やすいように、方言ごとにページを改め、それぞれ最初のページには母音、子音、超分節音についての一覧を掲げ、ページを改めて次に特徴的な具体的例語を掲げる。ここでは全ての方言について各音素に対応する具体例を挙げず、いくつかの方言に限った。より多くの例については、別冊の語彙集を参照。調査対象語数が 500-2000 語程度の中で確認されたものについて具体例を挙げるため、記録されていない音素または音素の組み合わせが存在することもありうる。この事情から、各種音素の現れについての制限は特に記述していない。分析対象は語の引用形式とする。また本章では共時的特徴のみを扱い、蔵文との対照という観点からは論じない。

本章の記述は、単一の分析者すなわち筆者によって分析された結果である。前章で述べたように、この手法によって分析する立場の違いをなくことができ、統一された観察、分析結果を提示することができるという考えを実践したものである。本章の分析から、川西民族走廊のチベット語方言について、その多様性を理解することができる。

本章における配列は、基本的に北から南へ分布する順になっている。各節は独立した記述であるため、任意の節を選んで読んでも差し支えはない。

本章で取り上げる 25 方言のうち、第 2 章で述べた方言区分を用いて分類するならば、アムドチベット語 2 種、ヒャルチベット語 7 種、カムチベット語 16 種となっている。アムドチベット語 dMarthang 方言及びヒャルチベット語 Ketshal 方言を除いて、言語学的な記述は筆者によって初めてなされた。本章のうち Ketshal 方言、rNgawa 方言、Sogpho 方言の音声分析はそれぞれ Suzuki (2006)、鈴木・イエシエムツォ(2006)、鈴木 (2005c) にすでに発表された。

4.2 Askyirong 方言（若爾蓋県阿西茸郷）

Askyirong 方言は若爾蓋県巴西区阿西茸郷で話される。分布位置の略図は以下のようである。

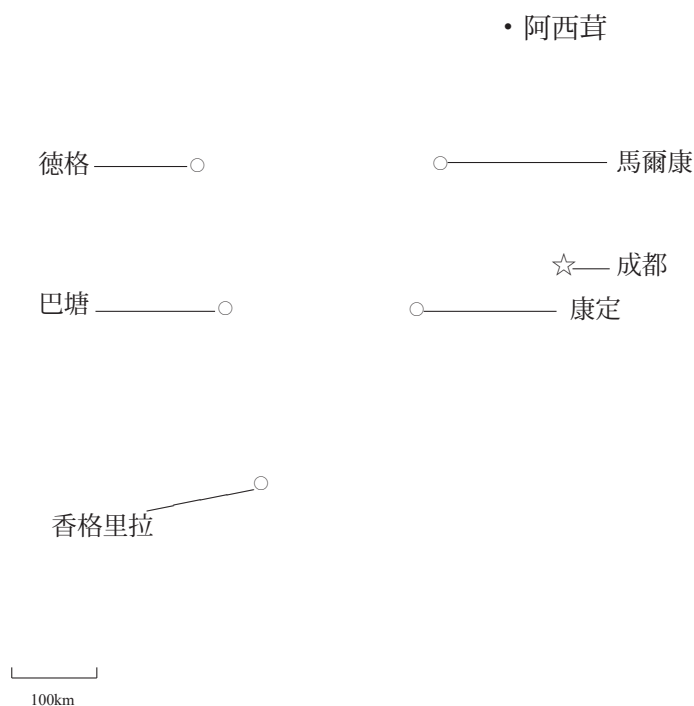


図 4.2: 若爾蓋県阿西茸郷の位置

巴西区は若爾蓋県の東部に位置し、森林の多い地域で農区である。巴西区は主要交通路から少し奥まった地点に位置する。巴西区には4つの郷があり、阿西茸郷は最も西に位置する。若爾蓋県内の牧民との交流は少ないが、現在では巴西区の住民が県城に行くことがしばしばあり、そこでは少なからずアムドチベット語牧民方言に触れることになる。

Suzuki (2005a) の記述がある。

4.2.1 音素一覧

超分節音 レジスター 2 種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性の 2 項対立

母音 長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

i u ʊ u
e ə ə o
ɛ ɔ
a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	t ^h	k ^h	
	無声無気	p	t	t	t	k	ʔ
	有声	b	d	d	d	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無声無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	ɲ ^h / x ^h	
	無声	f	s	ʃ	ç	ɲ / x	h
	有声		z, ʒ		ʒ	ɣ	ʕ / ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音	有声	w			j		

4.2.2 方言特徴と具体例

4.2.2.1 母音

	通常母音例	鼻母音例	長母音例
i	^h ti γu 子馬	^h i nĩ おととい	^h pi: 猿
e	^o ne 火	lẽ 答える	^h e: 金
ɛ	^h tɛ ^h ko 玄関	^h ti nẽ 凶兆	bɛ: 羊毛
a	^o tsa 山	^h gã あれ	^o tsa: 月
ɑ	^o na k ^h ɑ 沼	lã 道	k ^h ɑ: 雪
ɔ	^h pɔ 草地	t ^h ɔ 平原	^o dɔ: 煙
o	^h to 石	^h nõ 油	^h to s ^h o: すす
u	duɸ 6	^h kũ ^h qũ ぶどう	ɲu: 銀
ɯ	tɕ ^h ɯ 水	s ^h ũ tɕɯ 30	tɕ ^h ɯ: 川
ə	mə 人	^h tɕɔ̃ wa 小便	fjə: doɸ 果物
ɯ	du tɕɛ 祭り		^o qɯ: wa ゆるめる
œ	rə mœ 絵	^h sẽ mba 松	^h mẽ lã ⁿ de? 願う

4.2.2.2 単子音

p^h : p^hɑɸ ぶた
p : ^opɛn ma はす
b : be? チベット人
t^h : t^ha mba 旱魃
t :
d : ^odɔ: 煙
t^h : t^hɑɣ 血
t :
ɖ : ɖi lə 騾馬
t^h : t^hɛ: 税金
t :
ɖ : ɖi dõ ナイフ
k^h : k^hah 口
k : ^oka ta リス
g : gɔ: 何
ʔ : ʔa ⁿdo アムド
ts^h : ts^he 寿命

ts : ^otsa mo 簡単な
dz :
tɕ^h : tɕ^hɯ 水
tɕ :
dʒ : dʒa 茶
ɸ :
s^h : s^ha 地
s : se ra 雹
z : ze fia 露
ʂ : ʂo mba 湿った
ʃ : ʃa mo 硬い
ɕ^h : ɕ^ha 髪
ɕ : ɕɔɸ pa こげる
ʐ : ʐi mbo おいしい
ŋ^h : ŋ^haŋ 丸太
x^h : x^he x^he 回族
ŋ : ŋẽ ⁿdo 瓶

x : xam 靴
ɣ : ɣa ne 鉛
h : ha jo アルミ
ʃ : ʃoʃ pa 美しい
fi : ^hse fio 明確な
m : me ne あご
n : ^onã 雨
ŋ : ^ona 魚

ŋ : ɣu: 銀
l : loʃ pa 手
l̥ : lo ^hʃoʃ 南
r : ra: 角
w : war t^hoʃ 距離
j : ʃoʃ pa 美しい

4.2.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 完全前鼻音

^mb : ^m bui 虫	^mp^h : ^m p ^h el wa 発展する
ⁿd : ⁿ də これ	ⁿt^h : ⁿ t ^h o ^m bo 高い
ⁿɖ : ⁿ ɖuʃ 雷	ⁿt^h : ⁿ t ^h oŋ wa 生まれる
ⁿɗ : ⁿ ɗer 変わる	ⁿk^h : ⁿ k ^h i ^h pa 専門家
ⁿg : ⁿ go 頭	ⁿts^h : ⁿ ts ^h e ma 双子
ⁿdz : ⁿ dzo ソ	ⁿtɕ^h : ⁿ tɕ ^h ɔ̃ ^m ba 肝臓
ⁿdʒ : ⁿ dʒafi 虹	

2. 調音点の一致しない前鼻音

^mɲ : ɲam ^m ɲoŋ 経験	^mŋ : ⁿ tuʃ ^m ŋal 苦しみ
--	--

3. 両唇閉鎖音

^pts : la ^p tse: マニ石	^ptɕ : ^p tɕui t ^h ã ^m ba 10
--	---

4. 無声両唇接近音＋無声子音

ɸt^h : ɸt ^h oʃ ʃ ^h a 担ぎ棒	ɸɕ^h : ɸɕ ^h e wa 開ける
ɸt : ɸtu 洗う	ɸɕ : ɸɕe wa 百万
ɸts : ɸtsoŋ 売る	ɸx^h : ɸx ^h ui wa はぐ
ɸtɕ : ^w ɣə ɸtɕui 40	ɸx : ɸxui wa 剥く
ɸs : ^o ɸsil mo 涼しい	

5. 有声両唇接近音＋無声子音

^wt : k^ha °^wta 話

^wt̤ : °^wt̤oŋ k^ha 胸

^wt̤ : °^wt̤i? 8

^wt̤ɕ : °^wt̤ɕe? する

6. 有声両唇接近音＋有声子音

^wd : k^ha ^wdəɣ カタ

^wd̤ : °^wd̤aɕ 洞窟

^wz : ^wzo ϕta 外見

^wɣ : ^wɣom ma 乳牛

^wl : ^wlaɸi 太もも

7. 歯茎流音

l̤t : l̤ti ŋɛ 凶兆

l̤d : l̤de ɸɸiɕ 鍵

8. 無声前気音＋無声子音

^hp : °^hpu 毛

^ht : °^hta 馬

^ht̤ : °^ht̤i? po 幸せな

^hk : ^hki? 言葉

^hts : °^htsa 脈

^ht̤ɕ : °^ht̤ɕiɕ 1

^hs : ^hs^hoɸi bo 生きている

^hɕ : ^hɕa ^hɕa 灰色の

^hx : ɸna ^hxi: 靈魂

^hl̤ : °^hl̤e? pa 脳

9. 無声前気音＋有声子音

^hm : °^hme wa あざ

^hn : ^hnõ 油

^hɸ : °^hɸi °^hɸɕi かわいそうな

^hɸ̤ : °^hɸ̤õ mbo 青い

10. 有声前気音＋無声子音

ɸt : ɸti ɸia 村

ɸt̤ : °ɸt̤o 羽

ɸt̤ : °ɸt̤a wo 王

ɸk : °ɸke ɸkã 教師

ɸts : °ɸtsa: 月

ɸt̤ɕ : °ɸt̤ɕẽ mo 重い

11. 有声前気音＋有声子音

ɸd̤ : ɸda ɸts^hã 天蓋

ɸg : ɸgã あれ

ɸdz : ɸə ɸdze 一生

ɸd̤ɕ : ɸd̤ɕa lo 正月

ɸz : ɸzuɕ 牛

ɸɕ : ɸɕa 編む

^hɣ : ^hɣəfi ni しあさって

^hm : ^ome ruu 赤い

^hn : ^hnafi 耳

^hŋ : ^oŋe ma 穂

^hŋ : ^oŋa mə らくだ

^hl : ^ohlon 風

^hr : ^owla ^hraŋ ラプラン寺

^hw : ^owa wa 蛙

^hj : ^ojaɬ ヤク

12. 声門閉鎖

^ʔŋ : ^ʔŋə lo 夢

^ʔl : ^ʔlo mba ずぶぬれにする

^ʔj : ^ʔjaɬi 鳥

13. わたり音

kw : kwã tō ポット

ɸw : ɸwi ^htɔ^ʔ pa 話す

x^hw : x^hwa ^hdo rə^ʔ 裂く

fw : ŋo fiwa 野生の雁

t^hj : t^hja dza いくつか

4.3 Babzo 方言（若爾蓋県包座鄉）

Babzo 方言は若爾蓋県巴西区包座郷で話される。分布位置の略図は以下のようである。

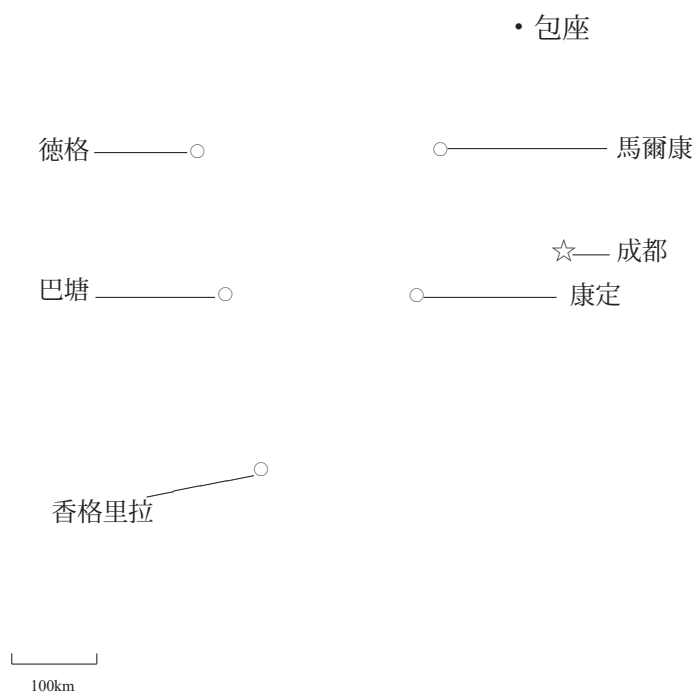


図 4.3: 若爾蓋県包座郷の位置

包座郷は巴西区の中の主要交通路のもっとも奥に位置し、巴西区の南部に位置する。若爾蓋県内のその他と地域との交流は少ない。

4.3.1 音素一覧

超分節音 レジスター 2 種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性の 2 項対立

母音 長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

i u ʊ u
e ə ə o
ɛ ɔ
a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t̚	c	k	q	ʔ
	有聲	b	d	d̚	ɟ	g	ɢ	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有聲		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h / ɟ ^h	x ^h		
	無声	ɸ	s	ʃ	ɕ / ɟ	x		h
	有聲	v	z, ʒ		ʒ	ɣ	ʁ	ɦ / ʕ
鼻音	有聲	m	n		ɲ	ŋ		
流音	有聲		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有聲	w			j			

4.3.2 方言特徴と具体例

4.3.2.1 母音

通常母音例			長母音例	
i	°mi ja	霧	ɲi:	銀
e	°ze ja	露	°ɲe:	火
ɛ	dɛ	裁断する	tʰjɛ:	草木灰
a	°sʰa	土	°hʰtsa: jɛ	布団
ɑ	ʰsa ɲa	よい	na: ɲo	天
ɔ	nɔ ɸa	沼	hʰɔ:	がけ
o	°do wa	煙	°ʰko: ʰma	めす馬
u	°suʔ	命	ru: ʰtu	谷
ɯ	°tɕʰɯ	水	°kʰɯ:	針
ə	ɲə	人	°rə ʰpə:	引っ越す
ɯ	°zi dɯ	鳥	°tɕɯ:	搾り出す
ɵ	rə mɵ	絵	ʰɲɵ: ma	たてがみ

4.3.2.2 単子音

pʰ: °pʰə ʰma	ぬか	ʔ: ʔa ɲga	口バ
p: pu za	息子	tsʰ: °tsʰa	塩
b: °ba ɕõ	クモ	ts: tsə ɣə °re ɸu	中指
tʰ: °tʰa ʰge	外側	dz: ʰke: dzi:	脊椎
t: °to wa:	穀物	tɕʰ: °tɕʰɯ ra	チーズ
d: °de ri:	今日	tɕ: tɕe ze	娘婿
tʰ: °tʰaʔ	血	dʒ: °dʒa:	強盗
t: tɔ: bu	本	Φ:	
d: duʔ	6	v: °se: vo	硫黄
c: ci ɣi: ʰte	振る	sʰ: sʰa ɣo:	種
ʃ: ɕʰo: jo	紙	s: °se: vo	硫黄
kʰ: °kʰa da:	カタ	z: °zoʃ	牛
k: ku	曲がる	ʃ: °ja ra ʃa	取る
g: °go: di	子ぶた	ɕʰ: ɕʰe:	屁
qʰ: qʰa:	雪	ɕ: ɕɯ zo	後
q: qə	刺繍する	ʒ: °zu wa	ねずみ
ɠ:		ʃʰ: °ʃʰə ma	豆

ʃ : ʃe do: いたち

ɕʰ : ɕʰe ʰtɕi: 筋肉

ɕ : ɕa ɲe 兄

xʰ : ʰxʰa: ぶた

x : ʰxo: 靴

ɣ : ɣa 狐

ʙ : ʰa ʙa: 吊りベルト

ʃ : reʃ reʃ 触れる

h : ha jo: アルミ

fi : ʰtʰə fio 細い

m : ʰme doʃ 花

n : nã lo 葉

ɲ : ʰɲe: 火

ŋ : ʰɲa ma 尾

l : ʰlo: 道

l̥ : ʰla 神

r : ra 山羊

j : ʰja ɲe 鉛

w : ʰɕʰi wa 通り

4.3.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

ᵐb : ʰmbu 虫

ᵐd : ʰdoʔ 色

ᵐɖ : ʰɖoʔ 牧区

ᵐg : ʰgo 頭

ᵐŋ : sʰə ʰŋe ライオン

ᵐdz : ʰdzu ɣu 指

ᵐdʒ : ta ʰdʒa: 茶の寄付

ᵐz : ʰza: 朝

ᵐj : ʰɕi: ʰja 松

ᵐpʰ : ʰpʰa ra ジャッカル

ᵐp : ʰpuʔ 吹く

ᵐtʰ : ʰtʰo ʰpo 高い

ᵐt : ʰtaʔ 境界

ᵐtʰ : ʰtʰə ɣu ほくろ

ᵐt̥ : ʰt̥uʷʔ 雷

ᵐkʰ : ʰkʰa ʰpa 腎臓

ᵐk : ʰka: ra 鍛冶屋

ᵐtsʰ : ʰtsʰo 湖

ᵐts : ʰtso mə ゾ

ᵐtɕʰ : ʰtɕʰə ʰmba 肝臓

ᵐtɕ : ʰtɕuʃ ʰta ブーツ

ᵐɕʰ : ʰɕʰi: 拭く

ᵐɕ : ʰɕa tsʰe 虹

2. 有声性の一致する前気音

ʰp : ʰpo: 草原

ʰt : ʰta 馬

ʰk : ʰkeʔ 声

ʰts : ʰtsa 筋肉

ʰtɕ : ʰtɕeʔ 鉄

ʰsʰ : ʰsʰe: おす馬

ʰs : ʰsoʔ ʰpo 生きている

ʰɕʰ : do ʰɕʰoʔ 方角

^hɕ : ^hɕəʔ がけ
^hɕ : ^hɕoʔ pa 羽
^hl : ^hlɛʔ ba 脳
^hb : ^hbɪʔ ma 乳牛
^hd : ^hdeʔ t^ha 剃る
^hɖ : ^hɖaʔ 備中
^hʃ : ^hʃa ɲgo 帽子
^hg : ^hguʔ dʒa 昼食
^hdz : ^hdzaʔ mə けんかする
^hdʒ : ^hdʒəʔ ^hpo 熱い
^hv : ^hva ^hmu 爪

^hz : ^hzəʔ ジャスパー
^hʒ : p^hu ^hʒe 間違う
^hʒ : ^hʒu ru 珊瑚
^hm : ^hɕi ^hmə 酸っぱい
^hn : ^hnaʔ 耳
^hɲ : ^hɲiʔ 目
^hɲ : ^hɲĩ naʔ 汗
^hl : ^hla pa 蒸気
^hr : ^hriʔ 縊る
^hj : ^hjoʔ ^hgə ze 左

3. 有声性の一致しない前気音

^ht : ^hto 石
^ht : ^htaʔ ^htsə s^hə ɲə 仇
^hc : ^hcaʔ gə 背
^hk : ^hkeʔ dziʔ 脊椎骨
^hts : ^htsa ^hka 月
^htɕ : ^htɕu ma 腸

^hs : ^hso wa 仕立て屋
^hɕ : ^hɕə 4
^hm : ^hmẽ ^hba 医者
^hn : ^hnõʔ 存在する
^hɲ : ^hɲi ^hmə 軟らかい
^hɲ : ^hɲə zo 前

4. 両唇音

^pɕ^h : ^pɕ^ha 肉体
^ɸt^h : ^ɸt^hə ɸio 細い
^ɸt : ^ɸta ^hka 肩
^ɸk : ^ɸka bo 命令
^ɸts : ^ɸtsuʔ po 強制する
^ɸtɕ : ^ɸtɕi 洗う
^ɸs : ^ɸsiʔ ɕ^ha raʔ 涼しい
^ɸɕ^h : ^ɸɕ^he 小麦粉

^wɖ : ^wɖaʔ 岩
^wk : ^wko 分かち合う
^wtɕ : ^wtɕeʔ 挙げる
^wʒ : ^wʒa 太もも
^wɕ : ^wɕe 搾る
^wl : ^wlẽ 引いてくる
^wr : ^wriʔ 蛇

5. 歯茎音

^sts : ^stʂa ma 鎖

6. わたり音 (省略)

7. 3子音連続

^ɦkw : ^ɦkwã ^mbu 膀胱

^hkw : ^hkwã ^ɦso: 三脚架

^ɦtj : ^ɦtje: クッション

^ɳt^hj : ^ɳt^hje: 引く

^ɳk^hw : ^ɳk^hwa 家

^htɕw : ^htɕwã ma 柳

^ɦbj : ^ɦbjɛ 引き抜く

^hmj : ^hmje: 薬

^ɸʂw : [°]ɸʂwe: 耐える

4.4 gTsangtsa 方言（九寨溝縣漳扎鎮達基寺村）

gTsangtsa 方言は九寨溝県漳扎鎮で話される方言のうち、達基寺村で用いられるものを特にさす。分布位置の略図は以下のである。

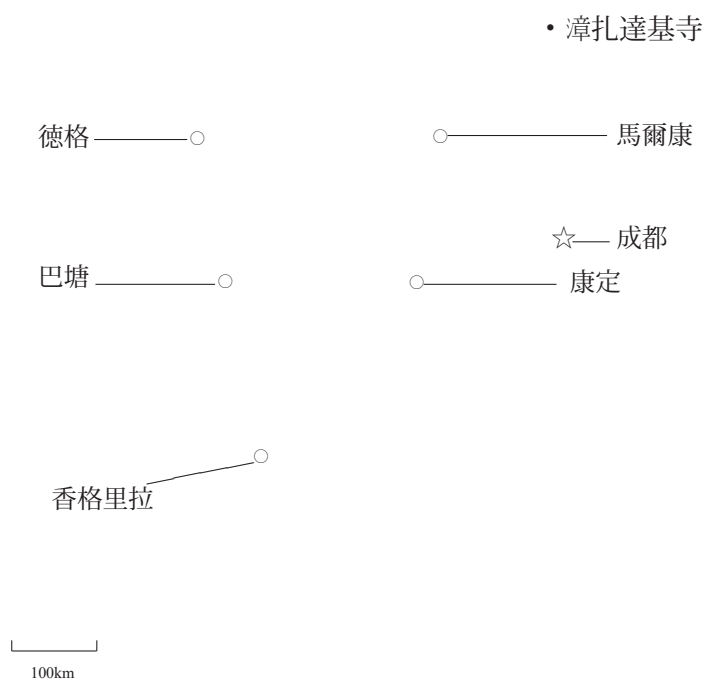


図 4.4: 九寨溝県漳扎鎮達基寺村の位置

漳扎鎮は九寨溝の旅行地区開発に伴って、新たに合併によって大きくなった地域で、旧来はいくつかの郷に分かれていた。達基寺村は現在の主要交通路上に位置し、また古来より民族の移動路であったところの真上にある。

4.4.1 音素一覧

超分節音 レジスター 2 種が認められる
緊張性（°で示す）と弛緩性の 2 項対立

母音 長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

i u ʊ u
e ə ə o
ɛ ɔ
a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h		
	無声無気	p	t	t		k	q	ʔ
	有声	b	d	d		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	x ^h		
	無声	ɸ	s	ʃ	ç	x		h
	有声	v	z		ʒ	ɣ		ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ		
流音	有声		l	r				
	無声		l̥					
半母音	有声	w			j			

4.4.2 方言特徴と具体例

4.4.2.1 特徴的な音素

q : °qa sa re? 引く

v : ne? vuə 黒い

4.4.2.2 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

ⁿd : ⁿdā: 読む

ⁿd : °ⁿdε: 米

ⁿg : °ⁿgo 頭

ⁿdz : ⁿdzɯ γɯ 指

ⁿdz : ⁿdzɔ: 食べる

ᵐpʰ : °ⁿdə ᵐpʰε: 飛ぶ

ᵐp : ᵐpu 虫

ⁿtʰ : °ʔa ⁿtʰɔ wə 美しい

ⁿkʰ : °ⁿkʰε: zə γə 高い

ⁿtsʰ : °ⁿtsʰɔ 湖

ⁿtɕʰ : ⁿtɕʰɔʔ roʔ 氷

ᵐd : °sʰa ᵐdε: 硬い

ᵐn : ᵐnəfi 人

2. 有声性が一致する前気音

ʰp : °ʰpɔ̃ rə 草地

ʰt : °ʰtah 馬

ʰt : °ʰtə̃ 雲

ʰk : °ʰkam ma 星

ʰq : ʰqar ra 丸い

ʰts : ʰtsā̃ mba ツアンパ

ʰtɕ : °ʰtɕaʔ 鉄

ʰsʰ : °ʰsʰεʔ 金

ʰs : ʰsaʔ pa 大便

ʰɕ : °ʰɕa 鳥

ʱd : ʱdɯ tɕi fia 偽の

ʱg : ʱge ʱgě 先生

ʱdz : ʱdza γa 月

ʱdz : ʱdza mbo 軟らかい

ʱz : °ʱza:ʃ ヤク

ʱm : ʱmɛr ruə 赤い

ʱn : °ʰtɕu ʱni: 12

ʱŋ : °ⁿdza °ʱŋě 暗くなる

ʱl : °ʱlu 歌

ʱw : ʱwa zo 一緒に

3. 有声性が一致しない前気音

^ht : ^htu: 木
^ht : ^htə 尋ねる
^hk : ^hke: 背
^hts : ^htsafi 100

^htɕ : ^htɕoŋ ŋgu 青い
^hm : ^hmê mba 医者
^hɲ : ^hɲõ ba 狂人

4. 両唇音

^pt^h : ^pt^həj ju 細い
^pt : ^ptə 書く
^pts : ^ptso: tɯh がんばった
^ps^h : ^ps^hə 1万
^ɸtɕ : ŋa ^ɸtɕu 50

^ɸɕ : ^ɸɕa 肉
^wd : ^wda: 7
^wz : ^wzo wə よい
^wɲ : ^wɲo ts^ha ja 恥ずかしい
^wl : ^wloŋ 風

5. 歯茎音

^lt : ^lta 見る
^ltɕ : ^ltɕa 舌

6. そり舌音

^sts : ^stsa 草

7. わたり音

^ɲj : ^ɲjẽ 火

4.5 Phyugtsi 方言（九寨溝県九寨溝内樹正村）

Phyugtsi 方言は九寨溝県漳扎鎮で話される方言のうち、九寨溝内にある樹正村で用いられるものを特にさす。分布位置の略図は以下のようなものである。

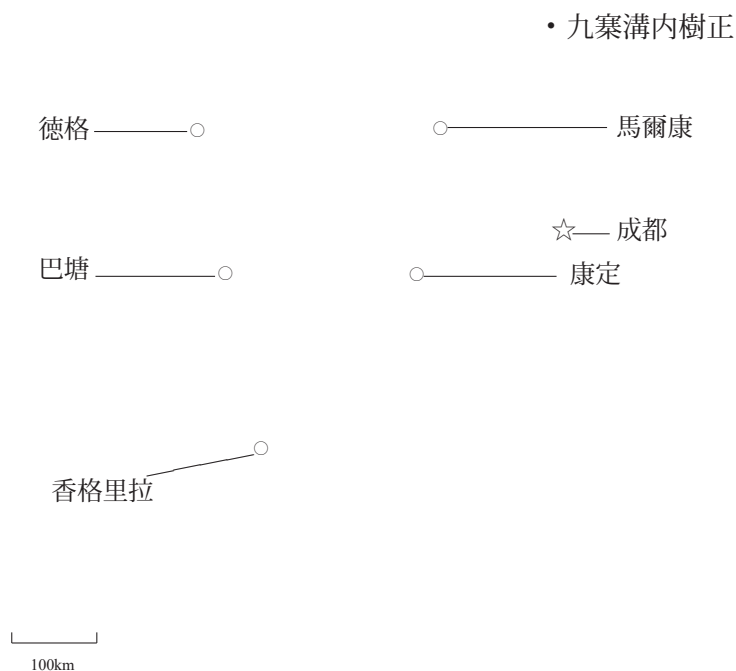


図 4.5: 九寨溝県九寨溝内樹正村の位置

樹正村は九寨溝（風景区）内にある 9 つの村のうち奥から 2 番目の村で、主要交通路からは外れた地点に位置している。

現在では九寨溝風景区の観光開発によって漢化が極めて激しく、Phyugtsi 方言の伝承はほぼ行われておらず、ほぼ中年層以上の世代でなければ自由に操れない状況になっている。

4.5.1 音素一覧

超分節音 レジスター 2 種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性の 2 項対立

母音 長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

i u ʊ u
e ə ə o
ɛ ɔ
a ɐ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無声無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無声無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h		
	無声		s	ʃ	ɕ		h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
流音	有声		l	r			
半母音	有声	w			j		

4.5.2 方言特徴と具体例

4.5.2.1 母音

	通常母音例		長母音例
i	°ni 人	°si:	雲
e	°ne 火	°hse:	金
ɛ	neʔ ^h pa 病人	fiŋɛ:	尾
a	°sha 地	k ^h a:	雪
ɐ	tɐ: 山	°ne:	森
ɔ	hkoŋa ^h ke: ひづめ	jo:	道
o	°fi ^h to fio 石	tɕɐ: ɲo: 梨	
u	°tɕ ^h u 水	tu:	パンダ
ɯ	ɲdzɯ ^h pu 唇	°ŋɯ:	銀
ə	rəɣu うさぎ	zə:	豹
ɯ	°fi ^h tɕ ^h ɯ かゆ	ɲa: ɲɯ: 息子	
ɵ	ɵ fiɵ ねずみ	nɵ:	乳

4.5.2.2 単子音

p^h: °p^hɐ: ぶた

p: pa^htsi: 霜

b:

t^h: t^ho ri 明日

t: °ta ri 最近

d:

t^h: °t^hə 万

t: °tə ラバ

ɖ:

k^h: k^ha ŋo 顔

k: °ka te 何

g:

ʔ: °ʔa lu 猫

ts^h: °ts^hə 犬

ts: °tsə 小麦

dz: dza^hdo: 天蓋

tɕ^h: °tɕ^hu 水

tɕ: °tɕi: 1

dʒ:

s^h: °s^he wa おすぶた

s: °sa 鶏

z: zə: 豹

ɕ^h: °ɕ^ha 肉

ɕ: ɕo^hs^ho: 北

ʒ: ʒi ɲi: しあさって

ʂ: ʂu ma 猿

ɣ: ɣa きつね

h:

fi: fiu wa ふくろう

m: ma: バター

n: °ni: 青稞

ɲ: ɲi^hto 目

ŋ: °ŋa 私

l: lo tɕ^hi 象

r : ru nɛ: ハエ
j : ju 年

w : wo ^htɕa 爪

4.5.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ^mba zɛ: 獵犬
ⁿd : ⁿde ^htɕi: 親指
ⁿɖ : ⁿɖe mo 友人
^ŋg : ^ŋgo 頭
ⁿdz : ⁿdzo 海
ⁿdʒ : ⁿdʒu ^hpu 唇

^mp^h : kə ^hte ^mp^hu ^hɕu: あふれる
ⁿt^h : ^on^hi: ti 引く
^ŋk^h : ^oŋ^hu? ^hti: 持ってくる
ⁿts^h : ⁿts^ho: ^hpa それぞれ
ⁿtɕ^h : ^on^htɕ^hu 粥

2. 有声性の一致する前気音

^hp : ^hpo: 草原
^ht : ^oh^hte: へそ
^ht : ^oh^htə 書く
^hk : ^oh^hka wō 光
^hts : ^oh^htsa: je 親戚
^htɕ : ^oh^htɕa: 鉄
^hs^h : ^oh^hs^he 小麦粉
^hs : ^hsū mo 涼しい
^hɕ^h : ^oh^hɕ^hi? 盛る
^hɕ : ^oh^hɕa: 砂
^hd : ^oh^hdɕ sə p^he ji リス
^hɖ : ^hɖu ^hku 工具

^hg : ^oh^hgɕ ^ŋga 冬
^hdz : ^oh^hdza ɕo ɲi こじぎ
^hdʒ : ^hdʒō ^ŋgu 緑の
^hz : ^hzu sa 未亡人
^hm : ^oh^hmɛ: 軍人
^hn : ^hnɛ: ti 圧力をかける
^hɲ : ^oh^hɲu ^hɲi: 12
^hŋ : ^hŋɛ: 尾
^hl : ^hla ^hko: 太もも
^hr : ^oh^hrə: 蛇
^hj : ^hjə ^hɬə 肺

3. 有声性の一致しない前気音

^hp : ^oh^hpi: 呼ぶ
^ht : ^oh^hto ^hɬo 石
^hk : ^oh^hkɛ ^hpa 背
^hts : ^htsa ^htā: 筋肉

^htɕ : ^htɕū mo 重い
^hm : ^hmɛ̃ ^mba 医者
^hn : ^hnā ^ŋgo 鼻
^hɲ : ^hɲō ^mba 狂う

^hŋ : ^ohŋo 野菜

4. わたり音

tɕw : tɕwo: 野生の口バ

ɕw : ɕwo: かわうそ

ɕ^hw : ^os^hə ɕ^hwe 帰る

jw : jwo ku 拾う

lj : lje ^hko やわらかい

sj : sje: 選ぶ

5. 3子音連続

^mbj : ^mbje ^hto かゆい

4.6 sKyangtshang 方言（松潘県山巴郷）

sKyangtshang 方言は松潘県山巴郷で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

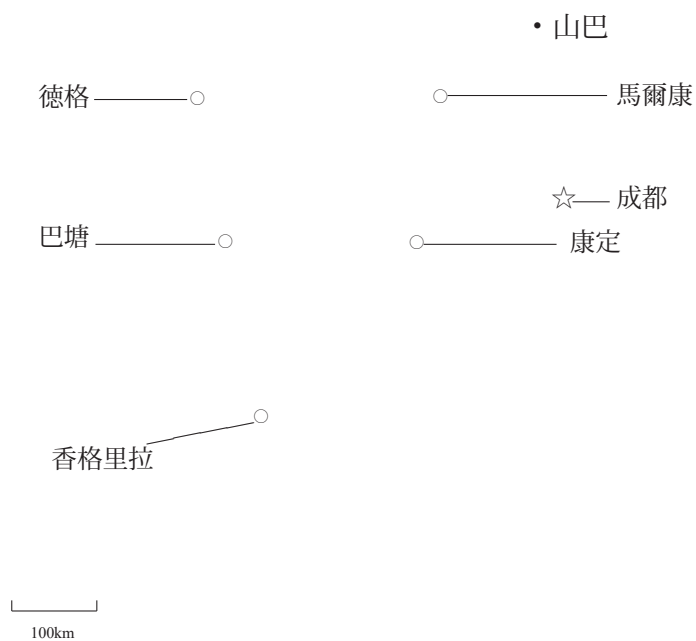


図 4.6: 松潘県山巴郷の位置

山巴郷は岷江流域の東岸に位置する。山巴寺を中心に集落が形成されている。

4.6.1 音素一覧

超分節音 レジスター 2 種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性の 2 項対立

母音 以下の各要素について、長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

i u ʊ u
e ə ə o
ɛ ɔ
a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t̚		k		ʔ
	有聲	b	d	d̚		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有聲		dz		dʑ			
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	ɲ ^h / x ^h		
	無声	ɸ	s	ʃ	ɕ	x	χ	h
	有聲		z		ʑ	ɣ	ʁ	ɦ / ʕ
鼻音	有聲	m	n		ɳ	ŋ		
流音	有聲		l, r					
半母音		w			j			

4.6.2 方言特徴と具体例

4.6.2.1 母音

	通常母音例		鼻母音例
i	li ^h po 体	ẽĩ:	屁
e	°se: ra 雹	°s ^h a xẽ	種
ɛ	° ^h sɛ 金	° ^h tɕ ^h ẽ fioʃ	脇
a	^h ɪdza fia 月	nã:	雨
ɑ	q ^h ɑ: 雪	^h ɪdã: ra ほぼ	
ɔ	°tɔ: タバコ		
o	to wo 煙	° ^h lõ	風
u	^h ɪduʃ 雷		
ɯ	°tɕ ^h ɯ 水	^h gũ ^h ɪdõ	ぶどう
ə	rə ^h gu 谷	° ^h sẽ	雲
ɯ	ju mɛ とうもろこし	° ^h ũ go doʃ	とかげ
ə	wə: 光		

4.6.2.2 単子音

p^h: p^hɑʃ ぶた

p: pe: 羊毛

b:

t^h: t^hɑʃ pa 縄

t: tã 熊

d: de ɲiʃ 鍵

t^h: t^hɑʃ pa 肩

t: tɑʃ 岩

ɖ:

k^h: °k^ha 口

k: kō ^hdze 壺

g: go: mo お金

q^h: q^hɑ: 雪

ʔ: ʔa ɲi: 祖父

ts^h: °ts^ha 塩

ts: °tsẽ dẽ 梅檀

dz:

tɕ^h: tɕ^hi γɯ 犬

tɕ: tɕa 茶

dʒ: °dze tin 明かり

ɸ:

s^h: °s^ha 土

s: soŋ s^ha 友人

z: za ma ごはん

ɕ^h: la ɕ^hi スカーフ

ɕ: ɕə fio ねずみ

ʒ: ʒiʃ 握る

ʂ: ʂẽ ^hdzo 豆

ɲ^h: ɲ^hẽ ^hdu 皿

x^h: °x^hɑ: 鹿

x: xa ra 盲人

γ: °γo ヨーグルト

χ: gẽ χaŋ 町

ʙ: ʙõ tɕa ミルクティー

h :
 fi : fiɔɸ pa 風
 m : me toɸ 花
 n : na lo 葉
 ɲ : ɲa 魚
 ŋ : ŋafi 太鼓

l : luɸ 羊
 r : re fia 蛙
 j : ʰju wa 故郷
 w : wəɪ 光

4.6.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ^mbui 虫
ⁿd : ⁿdafi 弾
^ɲd : ^ɲdu wa 客
^ŋg : ^ŋgo 頭
ⁿdz : ⁿdzã liŋ 世界
^ɲdz : ^ɲdzɔɸ po 速い
^mp^h : ^mp^huʔ 押す
^mp : ^mpuʔ 押す (完了形)

^ɲt^h : ^ɲt^hoŋ 飲む
^ŋt^h : ^ŋt^hə pa 胆嚢
^ŋk^h : ^ŋk^ho wa 家
^ɲts^h : ^ɲts^hẽ ɲe 夜
^ŋtɕ^h : ^ɲtɕ^hoʔ 食べる
^ɲs^h : naɪ ^ɲs^hɛ 森
^mɲ : ^mɲə 人

2. 有声性の一致する前気音

^hp : ^hpui 毛
^ht : ^hta 馬
^ht : ^htɪɪ ラバ
^hk : ^hkui ma 泥棒
^hts : ^htsa 草
^htɕ : ^htɕiɪ ku 中間
^hs^h : ^hɕ^hə ^hs^hoɸ 外側
^hs : ^hsɛɪ ruɪ 黄色い
^hʃ : ^hʃə 雲
^hɕ^h : ^hɕ^hi ^hdza 外国人
^hɕ : ^hɕiɸ ^hdza 嘔吐する
^hx : ^hxoɸ pa 羽

^hd : ^hdoŋ たたく
^hd : ^hdɛ wo 賢い
^hg : ^hge ^hgĩ 先生
^hdz : ^hdza ^ŋgo 山
^hdʒ : ^hdʒa 漢族
^hz : ^hzer くぎ
^hɣ : ^hɣa きつね
^hm : ^hmɛɪ ruɪ 赤い
^hn : ^hna ma 嫁
^hɲ : ^hɲẽ k^hoŋ 地獄
^hŋ : ^hŋo wã 尾
^hl : ^hla jiŋ 歌

^hr : ^hru: 蛇

^hj : °^hjo: ^hke 左

3. 有声性の一致しない前気音

^hm : ^hmĩ: 葉

^hŋ : °^hŋõ ts^he 野菜

^hn : ^hna ^ht^ho 鼻タバコ

^hɲ : ^hɲũ pa 狂人

4. 両唇音

^pts : ^ptsõ 閉じる

ɸ_c : ɸ_ci? 話す

^ptɕ : °^ptɕaŋ ^hk^hõ トイレ

ɸ_x^h : °ɸ_x^haɸ 破く

ɸ_t^h : ɸ_t^ho γu 細い

ɸ_x : °ɸ_xɛj 錫

ɸ_t : ɸ_to 踊り

^wɣ : ^wɣo 搾る

ɸ_{tɕ} : °ɸ_{tɕ}aɸ 挙げる

^wl : ^wlẽ ^mba ばかな

ɸ_ʃ : °ɸ_ʃi: 猿

^wɣ : ^wɣo 搾る (完了形)

5. 歯茎音

^sts : °^stsɔŋ ma 清潔な

6. そり舌音

ʃ_t : ʔa ʃ_ta? 足す

ʃr : ʃrẽ ^hdzo 豆

ʃ_{ts} : °_{tɕ}o ʃ_{tse} テーブル

^rdʒ : °ɸ_{tɕ}o: ^rdʒe? 18

ʃ_{tɕ} : °_{tɕ}ɔŋ 野口バ

7. 軟口蓋音

xɣ : °xɣã 靴

8. わたり音 (省略)

9. 3子音連続

^ht^hj : ^ht^hjẽ 引く

^hkw : ^hkwa: 足

4.7 Ketshal 方言（松潘県十里回族郷高屯子村）

Ketshal 方言は松潘県十里回族郷高屯子村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

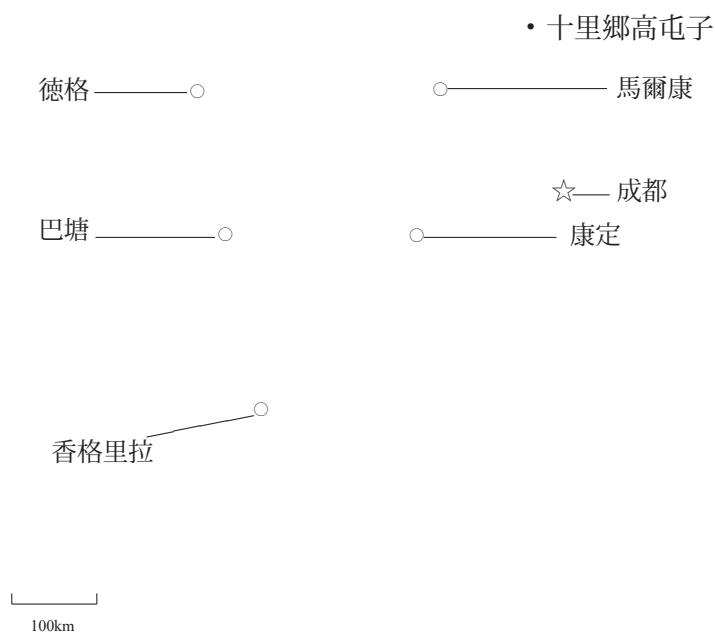


図 4.7: 松潘県十里回族郷高屯子村の位置

十里回族郷は岷江の東西兩岸を含み、高屯子村は西岸に位置する。西岸には松潘県城へ通じる幹線交通路があり、古来より民族の往来も激しかったと考えられる。

Ketshal 方言の記述は鈴木 (2005b) 及び Suzuki (2006) がある。筆者の分析に先行するものとしては、Nagano (1980) がある。

4.7.1 音素一覽

超分節音 レジスター2種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性の2項対立

母音 以下の各要素について、長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

[illegible]

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	齒莖	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t̚ ^h		k ^h		
	無声無気	p	t	t̚		k		ʔ
	有声	b	d	d̚		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʑ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ɕ ^h	ɕ ^h	ɲ ^h / x ^h	χ ^h	
	無声	ɸ	s	ɕ̚	ɕ̚	ɲ / x	χ	h
	有声	β	z		ʐ	ɣ	ʁ	ʕ / ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ		
流音	有声		l, r					
	無声		l̥					
半母音		w			j			

4.7.2 方言特徴と具体例

4.7.2.1 母音と緊喉レジスターの現れ

	通常母音例	鼻母音例	緊喉母音例	緊喉鼻母音例
i	正しい [ˈd̪iɸ]	雲 [sɾĩ]	目 [ɲĩɸ]	[-]
e	火 [ɲe]	7 [ˈd̪ẽ]	花 [m̪e toʔ]	杵 [t̪ẽ ˈdo]
ɛ	光 [ɸɛʔ]	夜 [ˈts̪ẽ mo]	金 [s̪h̪ɛ]	薬 [ˈm̪ẽ]
a	土 [s̪h̪a]	いつ [nã]	5 [ɲa]	空 [nã]
ɑ	雪 [k̪h̪ɑː]	夢 [ɲə lã]	近い [t̪h̪ɑːɸ ɲe]	[-]
ɔ	年 [lɔ]	乳牛 [ɣõ ma]	石灰 [d̪ɔ ɣɔ]	蝙蝠 [p̪h̪a wõ]
o	門 [ˈgo]	パンダ [tõ]	葉 [l̪ɔ ma]	青い [ɲõ ˈbo]
u	足 [ˈku wa]	におう [ˈnũ]	[-]	3 [ˈsũ]
ɯ	毛 [ˈpɯ]	削る [t̪h̪ũ]	10 [t̪ɕɯ]	30 [s̪h̪ũ d̪zɯ]
ə	チベット [pəʔ]	左 [ˈj̪ə]	[-]	羨む [m̪ə]
ə	4 [wɣə]	姉妹 [ˈɕã mo]	梨 [l̪ə]	[-]

4.7.2.2 単子音

	高レジスター	低レジスター
p ^h	ˈp̪h̪aɸ ぶた	p ^{hoo} 胃
p	ˈp̪ɛɛ ma はす	pɯ 息子
b	ˈb̪ɔɲ ma 酒かす	bɯr ˈd̪zɔɸ こぶし
t ^h	ˈt̪h̪ɑɸ riɲ 遠い	t̪h̪ɔɲ t̪h̪ɔɲ 短い
t	ˈte ˈdo 鉱石	te wɔ にわとり
d	ˈd̪ɔ ɣɔ 石灰	do s̪h̪ɔl すす
t̪ ^h	ˈt̪h̪ɔ 精錬鉄	t̪h̪a t̪h̪a 多彩な
t	ˈt̪oo ほどく	t̪uɸ 6
d̪	ˈd̪ɔ 羽毛	d̪oo 皮の袋
k ^h	ˈk̪h̪ɑɑ 雪	k̪h̪ɔɲ wa 家
k		kom ba 着る
g	ˈg̪ɯ ˈd̪ũ ぶどう	gɔ ˈβzɑɲ 美しい
ʔ	ˈʔa raɸ 酒	ʔa ˈdo アムド
ts ^h	ˈts̪h̪aɲ ra 尻	ts̪h̪a wo 孫
ts	ˈts̪a d̪ẽ マット	ts̪ẽ d̪ẽ 梅檀
dz	ˈd̪za ma ポット	
t̪ɕ ^h	ˈt̪ɕh̪ɯ 水	t̪ɕh̪ə ɣə 犬
t̪ɕ	ˈt̪ɕaɸ 鉄	t̪ɕo 小麦
d̪z	ˈd̪za s̪ũ 通り	d̪zɯ ˈh̪kar 大腸
ϕ		

β				
s ^h	°s ^h ah	土	s ^h e ra	雹
s	°seŋ ge	獅子	sũ	閉める
z	°ziɸ	豹	za ɣoɸ	朝
ʂ ^h	°ʂ ^h ɔw	薄くなる		
ʂ	°ʂə	猿	ʂui mo	おば
ɕ ^h	°ɕ ^h ah	髪		
ɕ	°ɕaŋ	北	ɕa	鳥
ʐ				
ɸ ^h	°ɸ ^h ə	死ぬ	ɸ ^h iŋ ^h doŋ	木
x ^h	°x ^h uɸ pa	柏	x ^h a ŋi	兄弟
ɸ			ɸoɸ pa	翼
x	°xã	靴	xa ra	盲目の人
ɣ	°ɣəw ts ^h aɸ	細心の	ɣəŋ fia	農民
ɯ ^h	°ɯ ^h uŋ	豆製の麺		
ɯ				
ʁ			ʁɛʔ	光
h	°ha ^h ko	理解する	haw tɕ ^h i	しゃっくり
ɸ				
fi			fiŋ	来る
m	°me toɸ	花	mar k ^h uɸ	油
n	°nã	天	nafi	耳
ŋ	°ŋe	火	ŋi ma	太陽
ŋ	°ŋuɪ	銀	ŋa	私
l	°lã	道	laa ŋa	腕
l̥	°l̥o	南		
r	°rə taɸ	狩り	rə	山
w	°woɸ	下	wu ^h kar	テント
j	°jaɸ	ヤク	ju mɛ	とうもろこし

4.7.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ^mbaɸ お面

ⁿd : ⁿdɛm ba 暗唱する

^ɳd̥ : ^ɳd̥uɸ 雷

^ŋg : ^ŋgo 頭

ⁿdz : ⁿdzafi ɸtse 親切な

ⁿdʐ : ⁿdʐafi 虹

^mn : ^mnafi toɸ 誓う

^mɳ : ^mɳəfi 人

^mŋ : ^omŋaɸ 派遣する
^mp^h : ^om^hp^huɾ 飛ぶ
ⁿt^h : ^on^t^hem ba 喫煙する
^ŋt^h : ^ŋt^he? 横の
^ŋk^h : ^oŋ^hk^har 町

ⁿts^h : ⁿts^hε? 量る
^ŋtɕ^h : ^oŋ^t^hɕ^haɸ pa 氷
ⁿs : ^on^sã ⁿsã いつか
^ŋɕ : ^ŋɕaɸ 掃く

2. 前気音

^hp : ^oh^hpaŋ 草原
^ht : ^oh^hta 馬
^ht : ^oh^hti ねじる
^hk : ^oh^hkar ma 星
^hts : ^htsa 脈
^htɕ : ^oh^t^hɕim ba ^oʃi 払い戻す
^hs : ^op^hɔ ^hsar 青年
^hʃ : ^hʃa 恐れる
^hɕ : ^oh^hɕa ^hɕa 灰色の
^hx : ^hxiɸ 破壊する
^hm : ^hmẽ 熟れる
^hn : ^oh^hnũ におう
^hŋ : ^oh^hŋo 狂う
^hl : ^hlu 竜王
^hl̥ : ^oh^hl̥u di 据えつける
^hb : ^hbuɸ tɕ^hol シンバル

^hd : ^hdo 石
^hɖ : ^hɖa wo 仇
^hg : ^hgε pɔ 正直な人
^hdz : ^hdzaa 月
^hdʒ : ^hdʒa wo ひげ
^hz : ^hzã ŋa 鉄なべ
^hɣ : ^hɣɔŋ wa 木製の盆
^hm : ^oh^hmafi mo 低い
^hn : ^hnuɾ 這う
^hŋ : ^oh^hŋel 発酵する
^hŋ : ^hŋar mo 甘い
^hl : ^hliŋ pu 竹笛
^hr : ^oh^hra? 足がなえる
^hw : ^hwaŋ 権力
^hj : ^hji 山猫

3. 両唇音（多くが前気音と自由変異）

^ɸt : ^oɸ^tɔ? ra 称える
^ɸt : ^oɸ^tu 洗う
^ɸk : ^oɸ^kauŋ 満ちる
^ɸtɕ : ^oɸ^t^hɕuɸ させる
^ɸs : ^ɸsaŋ お香
^ɸs^h : ^oɸ^s^hu 迎える
^ɸʃ : ^ɸʃə 耐える
^ɸɕ^h : ^oɸ^ɕ^hi? 拭く

^ɸɕ : ^oɸ^ɕε ma 砂
^ɸŋ^h : ^oɸ^ŋ^hεε wa 吹き出す
^ɸʃ : ^oɸ^ʃaɸi 錫
^ɸk : ^oɸ^ka 渋い
^ɸts^h : ^oɸ^t^s^haw 蓄える
^ɸtɕ : ^oɸ^t^hɕaɸ 粉碎する
^ɸz : ^oɸ^zo wa 仕立て屋
^wd : ^wdafi 追う

ʷdz : ʷdza 100

ʷz : ʷzə 酔う

ʷɣ : ʷɣaɸ 放置する

ʷɸ : ʷɸã mbo 幅広い

ʷl : ʷla ma ラマ

ʷr : ʷrɛɛl 引き裂く

wdz : ʰtɕo wdzeʔ 18

wɣ : wɣə 4

wl : wla 魂

4. 歯茎音

ʰtsʰ : ʰtsʰaŋ 完全である

ʰz : ʰzah かゆい

sts : ʰstsɔ 着く

ʰt : ʰtee wa へそ

ʰd : ʰdeʔ ʰdzaɸ 黙想する

5. そり舌音（多くが前気音と自由変異）

ʰk : ʰkah 溝

ʰts : ʰtsa 草

ʰtɕ : ʰtɕe 舌

ʰs : ʰsa wa 根

ʰt : ʰta ba かぶる

ʰk : ʰkẽ あご

ʰts : ʰdzafi ʰtse 親切的な

ʰtɕ : ʰtɕaŋ 野口バ

ʰr : ʰrĩ 雲

ʰd : ʰdoŋ 拍手する

ʰg : ʰgu ʰtɕu 90

ʰdz : ʰdzĩ ma 偽の

ʰrg : ʰhaɸ rgeʔ いのしし

ʰs : ʰrẽ ma 豆

6. 軟口蓋音（多くが前気音と自由変異）

ʰt : ʰge ʰtã 笑い話

ʰk : ʰku wa 足

ʰtsʰ : ʰtsʰafi 塩

ʰtɕ : ʰtɕĩ 尿

ʰs : ʰsõ mba 松

ʰʂ : ʰẽ mo tɕʰe fio 姉

ʰɕ : ʰcaaw 怖がらせる

ʰɸ : ʰɸẽ mba 肉屋

ʰz : ʰzuŋ 捕まえる

ʰɸ : ʰboŋ たての

ʰl : ʰlofi 馬の帯

ʰj : ʰjee ʰĩ ka さきおととい

7. 口蓋垂音（多くが前気音と自由変異）

ʰt : do ʰtẽ 臼

ʰtɕ : ʰtɕeʔ 切る

ʰs : ʰsor 錐

ʰɕ : ʰciɸ 1

ʰɸ : ʰɸe ののしる

ʰk : ʰkaɸ 鋤

^ʱd : ^ʱdin 詰める

^ʱz : ^ʱzer 刺し傷で痛む

^ʱɣ : ^ʱɣu ^hdzaɸ 騒ぐ

^ʱn : ^ʱnθ もむ

^ʱw : ^ʱwuu ヌー

ɸn : ɸaa ɸnθɸ 子供

ɸɣ : ɸɣa 狐

8. 声門音

^ʔm : ^ʔmah 傷

^ʔn : ^ʔɸe ma 穂

^ʔl : ^ʔla wa 編む

ɸɣ : ɸɣo ヨーグルト

ɸɸ : ɸɸa k^ha 水槽

ɸl : ^ʔɸla 太もも

ɸr : ^ʔɸru 蛇

ɸj : ^ʔgo ɸjoɸ だます

9. わたり音

kw : ^ʔkwə dī tɕ^he 感謝

xw : ^ʔxwa ^ʔgo 帽子

ɣw : ɣwar 牛が鳴く

rw : ^hpo rwa 引っ越す

4.8 Thangskya 方言（松潘県十里回族郷大屯村）

Thangskya 方言は松潘県十里回族郷大屯村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

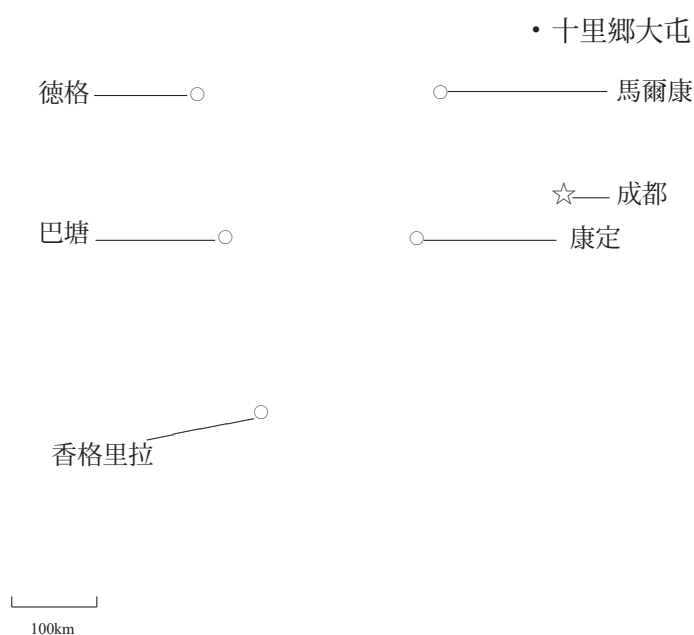


図 4.8: 松潘県十里回族郷大屯村の位置

大屯村は岷江の東岸に位置する。東岸には主要交通路が通っておらず、西岸に比べて民族の往来は激しくなかったと考えられる。

4.8.1 音素一覧

超分節音 レジスター 2 種が認められる

緊張性（°で示す）と弛緩性の 2 項対立

母音 以下の各要素について、長母音、鼻母音および緊喉音も確認される

i u ʊ u
e ə ə o
ɛ ɔ
a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t̚		k	q	ʔ
	有聲	b	d	d̚		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有聲		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	ɰ ^h / x ^h	χ ^h	
	無声	ɸ	s	ʃ	ɕ	ɰ / x	χ	h
	有聲	β	z		ʒ	ɣ	ʁ	ɦ / ʕ
鼻音	有聲	m	n		ɳ	ŋ		
流音	有聲		l, r					
	無声		l̥					
半母音		w			j			

4.8.2 方言特徴と具体例

4.8.2.1 母音

通常母音例			鼻母音例		
i	zi: wa	露	ʃĩ mo		妹
e	°ɲe	火	°sʰẽ: doŋ		爪
ɛ	gɛ: xoŋ	通り	naɸia ɸẽ		聾啞者
a	°sʰa	土	°ɕã ɳgu		狼
ɑ	°hɕɑɸ	鉄	lã		道
ɔ	°tɔ:	煙	tsʰõ mbo		脂肪油
o	fi do fi goŋ	石	?a ɸõ		おじ
u	°ŋu:	銀			
ɯ	°ɕʰɯ	水	mʰbũ: te		千万
ə	mə sʰe:	農民	tsũ mʰbu re: zã		しわ
ɸ	ɕɸ fio	ねずみ			
ɵ			fi dẽ dzɯ		70

4.8.2.2 単子音

pʰ : pʰɑɸ	ぶた	dz : dza wa	命中した
p : pi?	霜	tɕʰ : tɕʰo?	あなた
b : bu ɸ dzoŋ	露	tɕ : tɕa	茶
tʰ : tʰo ri	明日	dʒ : dʒuɯ ma	腸
t : te wɔ	鶏	Φ :	
d : du: tɕʰa	森	sʰ : sʰo:	炭
tʰ : tʰaɸ pa	肩	s : sã fi duɸ	苦しみ
t : tɔŋ hka	胸	z : zuɸ po	体
ɖ :		ɕʰ : °ɕʰə sʰo	外側
kʰ : °kʰa	口	ɕ : ɕe ma	砂
k : kɔ wa ɳgo	足	ʒ : kʰe ʒɯ?	単独の
g : gɔ: wu	膀胱	ʃʰ : ʃʰa n de	硬い
qʰ : qʰã:	雪	ʃ : ʃẽ ma	豆
q : qo zẽ	衣服	ɸʰ : °ɸʰa	肉
? : °?a pa	父	xʰ : xʰu xʰu	紙
tsʰ : °tsʰa	塩	ɸj : ɸi ɸɯ	20
ts : °ka ra tsə re?	曲げる	x : xa tse:	この辺

ɣ : °ɣa きつね
 ɣ^h : ɣ^{hi} ɣ^{hi} 回族
 ɣ : ɣã 靴
 ʙ : ʙɛɪ 光
 h :
 fi : fio kuɪ それから
 m : °maɸ pa 婿
 n : °naɸ mo 妻

ɳ : ɳaɸ ɳõ 子供
 ŋ : ŋaŋ ba ガチヨウ
 l : laʔ pa 手
 l̥ : °la 紙
 r : raɸ kuɪ 酒
 j : je ɣe 文字
 w : ʔk^ho wa 家

4.8.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

m^b : m^bõ m^bõ 凸の
 n^d : n^daɸi 弾
 n^ɖ : n^ɖuɸ 雷
 ŋ^g : ŋgo luɪ 頭
 n^{dz} : n^dza n^dzi 虹
 n^{dz} : n^dzoɸ po 速い
 m^p : m^pu 飛ぶ
 n^t : n^tõ m^bo 高い
 n^t : n^tiʔ 牽引する

ɳ^k : ɳ^ka 町
 n^{ts} : n^{ts}h̃ ɳĩ 夜
 n^{tɕ} : n^{tɕ}hi ʙoɸ 脇
 m^{tɕ} : ma m^{tɕ}uɪ 唇
 n^ɣ : h^{tɕ}aŋ n^ɣoŋ トイレ
 m^ɖ : m^ɖe 鬼
 m^ɳ : °m^ɳə 人

2. 前気音

h^p : °h^puɪ 毛
 h^t : °h^ta h^ka 後方
 h^t : h^to h^{tɕ}i 昼食
 h^k : °h^kam ma 星
 h^q : ʔã nə h^{qa} 手に入れる
 h^{ts} : °h^{ts}a 脈
 h^{tɕ} : °h^{tɕ}aɸ 鉄
 h^s : h^so m̃a 新しい
 h^ɕ : h^ɕe h^{to}ɸ 蒸しパン

h^ɕ : °h^ɕa 髪
 h^x : h^xoɸ pa 羽
 h^ɸ : h^ɸiɸ 壊す
 h^m : °h^muʔ pa 霧
 hⁿ : °hⁿa ŋgo 鼻
 h^ɳ : h^ɳo ɳõ 軟らかい
 h^ŋ : °h^ŋã s^ho 前方
 h^l : °h^leʔ pa 脳
 h^b : °h^buɪɸ 濁った

^hd : ^oh dũ 7
^hd : ^hdo hu ボタン
^hg : ^hdo ^hgoŋ 石
^hdz : ^hdza: 月
^hdʒ : ^hdʒɔʔ ^stsa 背
^hz : ^hzõ s^ha 友人
^hɣ : ^hɣa 切り分ける

^hm : ^hmɛ: rə 赤い
^hn : ^oh na toŋ ŋgo 昔
^hɲ : ^oh ɲiɬ 目
^hŋ : ^oh ŋa 5
^hl : ^oh loɬ 電気
^hw : ^hwam mbo 太い
^hj : ^oh jaŋ gõ 上あご

3. 両唇音

^bd : ^otɕa: ^bde 盆
^bd : ^stɕa: ^bda 飛行機
^ɸt : ^hlo ^ɸto 混ぜる
^ɸt^h : ^ɸt^ha ɣo 細い
^ɸt : ^ɸtõ mbo 緊張した
^ɸk : k^ha ^ɸkõ いっぱいである
^ɸtɕ : ^ow ɣə ^ɸtɕu 40
^ɸɕ^h : ^oɸ ɕ^hə s^ho 外

^ɸɕ : ^oɸ ɕaɬ 錫
^wd : ^wde ^wde 平らな
^wdʒ : ^ot^hə ^wdʒa 100万
^wɣ : ^wɣə 4
^wz : ^wzõ ^ɰk^ho 仕立て屋
^wl : ^ow loŋ 風
^wr : ^ow raɬ ^hto 権力
^wɣ : ^otɕu wɣə 14

4. 歯茎音

^lt : ^ol ta 見る

^ltɕ : ^ol tɕe 舌

5. そり舌音

^st : ^sta: kē 錐
^sk : ^oka lɛ: つらい
^sts : ^stse ^hkə 先端

^stɕ^h : za ^stɕ^ha ごま
^stɕ : ^stɕã ^htĩ 蹄鉄

6. 口蓋音

^xt : ɲiʔ ^xtaɬ 喉仏

^xs : ^ox se: 金

7. 声門音

ʔm : ʔma 傷

fɪr : fɪru: 蛇

8. わたり音

t^hw : t^hwã tɕ^he 遠慮深い

kw : kwo^htse モモ

ɣw : ɣwã^ɰgo 帽子

4.9 rNgawa 方言（阿壩県阿壩鎮）

rNgawa 方言は阿壩県阿壩鎮で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

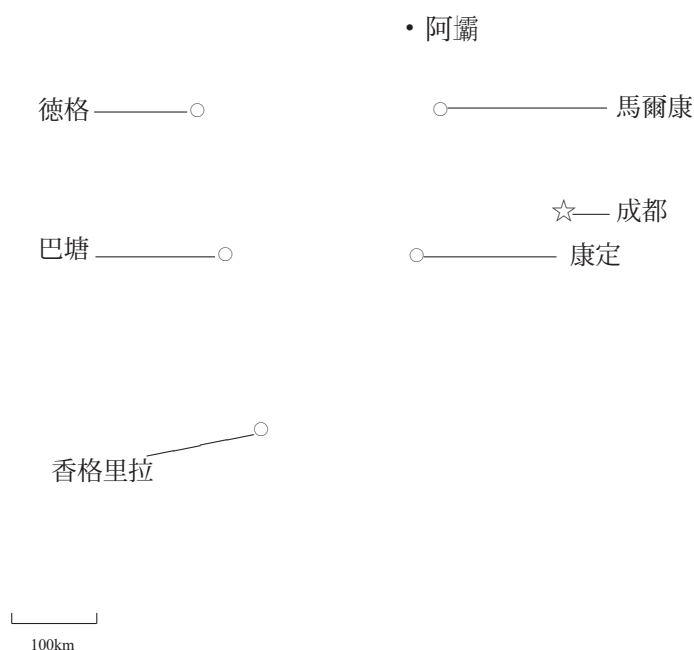


図 4.9: 阿壩県阿壩鎮の位置

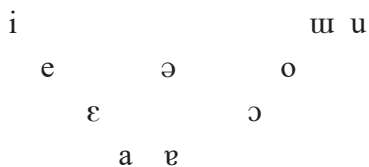
阿壩鎮は青海省および甘肅省それぞれのチベット地域との交通の要所にあり、各地域のチベット人との交流が盛んである。その背景には阿壩鎮周辺に非常に多くの寺院があることが関係している。そのため、当地のチベット人とともに他の地方出身のチベット人も多く、用いられるチベット語方言もアムドチベット語でありながら各地方ごとの方言特徴をもった言語が通用している。また、現在阿壩鎮には相当数のギャロン人が居住しており、彼らもまた、家族・親戚と話すとき以外、普段はアムドチベット語を用いている。ただし、その言語と rNgawa 方言は発音上の異なりが観察される。また当地には回族も多く居住しており、中にはチベット語を十分解する人がいるが、発音上異なる特徴をもっている。

鈴木・イエシエムツォ(2006)の記述がある。

4.9.1 音素一覧

超分節音 なし

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立なし



子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t		k	q	ʔ
	有聲	b	d	d		g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有聲		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気	f ^h	s ^h	ʃ ^h	ç ^h	ɸ ^h / x ^h	χ ^h	
	無声無気	ɸ, f	s	ʃ	ç	x	χ	h
	有聲	β	z		ʒ	ɣ	ʁ	ɦ
鼻音	有聲	m	n		ɳ	ŋ		
	無聲	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥		
流音	有聲		l	r				
	無聲		l̥					
半母音	有聲	w			j			

4.9.2 方言特徴と具体例

4.9.2.1 母音

	例語	語義	例語	語義
i	a ji	祖母	ma ni	あご
e	ʃke le	首	^m ne	火
ɛ	^r ket	声	^m tɕ ^h ɛn joq	脇
a	la	尾根	^ɸ nam	天
ɐ	^{fi} le	編む	ne me	太陽
ɔ	tɔ	煙	ho	腹
o	^r do	石	mo mo	蒸しパン
u	^{fi} dut	住む	^m duk	雷
ɯ	tɕ ^h ɯ	水	luɯ ɣɯ	子ヤギ
ə	^m ne	人	rəŋ	長い

4.9.2.2 単子音

	例語	語義	例語	語義
p^h	p ^h eq	ぶた	p ^h e juɯl	故郷
p	pan ma	はす	^r ga po	老人
b	ɕ ^h əŋ ba la	シャンバラ		
t^h	t ^h əŋ	平原	t ^h uɯk pa	麺
t	tar	氷	tok mo	狭い
d	dep	ノート	da ^l ta	今すぐ
t^h	t ^h ək	血		
t	ti	ラバ	ten	思う
ɖ				
k^h	k ^h a	口	k ^h əŋ ŋa	家
k	ka	柱	keŋ	満ちた
g				
q^h	q ^h ə ŋo	荷駄獣	q ^h e lut	痰
q	qa mo	濃い		
ʔ	ʔa ^p se	綿	ʔa ts ^h e	とても
ts^h	ts ^h e	寿命	ts ^h a	塩
ts	tɕo tsə	机		
dz	dza ⁿ dzən	月食		
tɕ^h	tɕ ^h ɯ	水	tɕ ^h oŋ	小さい
tɕ	tɕoq ma	アリ	tɕok ^h tse	いす
dʒ	dʒa tɕ ^h iŋ	木製椀	dʒi ɕ ^h uɯp	鞆

f^h	f ^h ək	お面		
Φ	φut	下りる	φur tɕ ^h a	性格
β	βut	しびれる		
f	far	引越す	ʷloŋ fa	蒸気
s^h	s ^h a	地	s ^h o ma	新鮮な
s				
z	zim tɕu	果物	za	食べる
ʂ^h	ʂ ^h en ma	豆	ʂ ^h a mo	硬い
ʂ	ʂa wo	薄い		
ɕ^h	ɕ ^h i	知る	ɕ ^h ok	入る
ɕ				
ʐ	ʐəŋ	畑	ʐim bo	おいしい
ʃ^h	ʃ ^h əp	浮く	ʃ ^h ə	死ぬ
x^h	x ^h am	靴	x ^h əŋ βzo	大工
x	xoŋ wo	体		
γ	ᵿdzo γo	ボタン	ᵿt ^h a γu	細い
χ^h	χ ^h u χ ^h u	回族	χ ^h u rəŋ	がんばった
χ	χe tɕə	はさみ	χur	吹く
ʋ	rə ʋoŋ	うさぎ	ʋu ʋaŋ	撃つ
h	hə	おなか	ha pta	土ねずみ
fi	fiəŋ wa	乾燥牛糞	fiə ma	乳
m	me toq	花	mər	バター
m̥	m̥ep	粉にする	m̥o	耕す
n	nor	間違った	na γə	病気である
n̥	n̥uɸ	慕う		
ɳ	ɳa	魚	ɳɛn	聞く
ɳ̥	ɳ̥ət toŋ	落とし穴	ɳ̥o na	狂う
ŋ	ŋa	私	ŋo	顔
ŋ̊	ŋ̊i m̥go	枕		
l	lo	年	li	する
l̥	l̥o	南	l̥a	神
r	rɐ	角 (つの)	re	その通り
w	wo mo	娘	wɐ	羊毛
j	jəq po	美しい	jəŋ pa	広々した

4.9.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 完全前鼻音

^mb : ^mbɯ 虫
ⁿd : ⁿdə これ
ⁿɖ : ⁿɖo 掘る
^ŋg : ʔoŋ ^ŋgo 尻
ⁿdz : ⁿdzən とらえる
ⁿdzɤ : ⁿdzafi 虹
^mp^h : ^mp^hel wa 発展する

ⁿt^h : ⁿt^hək 摘む
^ŋt^h : ^ŋt^hoŋ wa 生まれる
^ŋk^h : ^ŋk^hor jik 近所
ⁿts^h : ⁿts^ho wa 生活
^ŋtɕ^h : ^ŋtɕ^hem 踊る
ⁿh : ⁿhon 投げる

2. 両唇前鼻音

^md : ^mdok na 色
^mɖ : ^mɖɯ 蛇
^mg : ^mgo 頭
^mdz : ^mdzɯp mo 指
^mdzɤ : ^mdzɛr のりづけする
^mʒ : ^mʒəŋ 収穫する
^mn : ^mnafi len 誓う
^mɲ : ^mɲe 火
^mŋ : ^mŋa ro 甘い
^mw : ^mwɯr ^mwɯr 凸の

^mt^h : ^mt^ho ^mbo 高い
^mt^h : ^mt^hi wa 胆嚢
^mk^h : ^mk^har 明ける
^mts^h : ^mts^ho 湖
^mtɕ^h : ^mtɕ^hin ^mba 肝臓
^mɕ^h : ^mɕ^hoq 掃く
^mɖ : ^{fi}dzi mɖə みかん
^mdz : ^mdzɔ ソ
^mɲ : ^mɲem 水平の
^mŋ : ^{fi}du mŋal 苦しみ

3. 両唇閉鎖音

^pt : ^ptɯ fia ついばむ
^pt^h : ^pt^hɯk プル(厚手の民族衣装)
^pt : ^ptək ^{fi}do 岩石
^pk : ^pko wa 方法
^pts : ^ptsɯ 蒸す
^ptɕ : ^ptɕɯ 洗う
^ps : ʔa ^pse 綿
^pʂ : ^pʂoŋ 守る

^pɕ^h : ʂ^hen ^pɕ^hi 豆粉
^pɕ : ^pɕi rə 珊瑚
^pt : ha pta 土ねずみ
^ps^h : tɕ^hɯ pɕ^hoq s^ha 貯水池
^pɕ^h : pɕ^hɯt 鞭打つ
^bd : ɕi ^bda まな板
^bdz : ^bdza k^həŋ キッチン
^bdzɤ : ^bdze la ɕ^hok 翻す

4. 両唇摩擦音

Φt : k^ha Φtək カタ (祝福のスカーフ)

Φt : Φtɯk 乱す

Φk : Φkəŋ 満ちる

Φts : Φtsoŋ 売る

Φtɕ : Φɕ^hi Φtɕit 退く

Φf : Φfu お香

Φs^h : Φs^hɯ 迎える

Φs : Φsam したいと思う

Φɕ^h : Φɕ^he wa 開ける

Φɕ : Φɕe ma 砂

Φt : Φtə 初乳

Φɕ : Φɕik 破壊する

βd : βden t^həq 証明する

βdz : βdzi 交換する

βz : βzə 酔う

βz : βzo ma 乳牛

βl : βle 編む

βr : βri la コート

βdz : ^hkɛ βdzir 叫ぶ

βz : βzo 繕う

βz : βzə 4

βl : βluk 水を引く

5. 両唇接近音

w^ht : ^hka w^hta 話

w^hd : w^hden 頼る

w^hdz : w^hdzɯt 過ぎる

w^hβ : w^hβɯt 大麻

w^hz : w^hzut 耐える

w^hɲ : ^hloq w^hɲɛn 映画

w^hl : w^hla 魂

w^hj : tɕu w^hji 相談する

6. 歯茎流音/摩擦音

l^ht : l^hte へそ

l^hk : l^hkuk pa 口のきけない人

l^hɕ : l^hɕək 鉄

l^hf : l^hfək 皮

l^hd : l^hde m^hɲik 鍵

l^hdz : l^hdzəŋ k^hɯ 緑

l^hŋ : p^htɕo l^hŋa 15

s^hf : ts^hi s^hfa 日

sts : stsap 切り分ける

7. そり舌音

s^ht : s^hta 馬

s^ht : s^htɕok さえずる

s^hk : s^hkot 鷹

s^hts : s^htsa wa 草

s^hɕ : s^hɕa 泳ぐ

s^hɲ : s^hɲo 鋭利な

s^hɲ : s^hɲət わな

s^hŋ : s^hŋul tɕ^hɯ 汗

s^hŋ : s^hŋa moŋ らくだ

s^hk : s^hke le 首

s^hɕ : s^hɕəŋ 腫れる

s^hɲ : s^hɲuɯm 油

ʃŋ : ʃŋa lu 尾

ʃŋ̃ : ʃŋa 太鼓

ʳd : ʳdo 石

ʳg : ʳgun m̥ɕuɸ ぶどう

ʳts : kʰa ʳtsoq 染める

ʳdz : ʳdza ʳdza ついていく

ʳdʒ : ʳdʒu ma 腸

ʳf : kʰa ʳfu あごひげ

ʳm : woŋ ʳma ハエ

ʳw : ru ʳwa 亀

rd : rdu 埃

rk : te rkoŋ 卵

rg : wo rgut 英雄

rts : ʳle rtsə 麝香

rdʒ : p̥t̥so rdʒet 18

rŋ : kʰa rŋin 増える

8. 硬口蓋音

j̥ : j̥en tʰək ペン

9. 軟口蓋音

ʳl : ʳlat pa 脳

10. 口蓋垂音

ʳd : ʳdə 淹れる

ʳt̥ɕ : ʳt̥ɕur 絞る

ʳsʰ : ʳsʰoq 積もる

ʳɕʰ : ʳɕʰik 解剖する

ʳɕ : ʳɕe rdoŋ 打つ

ʳŋ : ʳŋit tʰəp 居眠りをする

ʳl : ʳle rtsə 麝香

ʳr : ʳro 死体

qd : qdun 電源を切る

qt : qtot ほどく

qt̥ɕ : qt̥ɕin 小便

qs : qso 育てる

qʒ : qʒoŋ 弓

ql : qloq 電気

qj : qjer ma 花椒

ʳt : ʳtor ゆるめる

ʳk : ji ʳkər 手紙

ʳts : ʳtsafi さび

ʳt̥ɕ : ʳt̥ɕət 包む

ʳsʰ : ʳsʰəŋ 秘密を守る

ʳs : ʳsa ʳdzur ニュース

ʳɕʰ : h̥jo ʳɕʰiq ʳɕʰiq 真っ青の

ʳɕ : ʳɕip 比べる

ʳl̥ : ʳl̥up なくす

ʳt : ʳtu 船

ʳt̥ɕ : ʳt̥ɕok 角を曲がる

ʳs : ʳsor 錐

ʳz : ʳzoq 牛

ʳʒ : ʳʒə lu 息子

ʳn : ʳnaŋ ʳin あさって

ʳŋ : ʳŋer ba 管家

ʳl : ʳlep 埋める

ʳj : ʳjəp 偏った

ʳd : ʳden 閉める

ɸŋ : ɸŋi 2

ɸl : ɸlo na 赤ん坊

ɸj : ɸjɯ ジャスパー

11. 有声性の一致する前気音

^hp : me ^hpo 祖先

^ht : ^htək 虎

^hʈ : ^hʈot 交付する

^hk : ^hkaŋ ^hnam スボン

^hts : ^htsen mo ^ɸtse 遊ぶ

^htɕ : ^htɕei tsək 中指

^hs : lo ^hs ar 新年

^hɕ^h : ^hɕ^he 成長する

^hɕ : ^hɕit ka 春

^hŋ : ^hŋe 先端

^hɲ : ^hɲik ma 竹

^hl : ^hlap 波

^hd : ^hdut 座る

^hɖ : ^hɖa ja 仇

^hg : ^hgoq ɣwa にんにく

^hdz : ^hdzi mɖə みかん

^hdʒ : ^hdʒip dʒə 砂糖

^hz : ^hzer 刺し傷が痛む

^hʒ : ^hʒuʔ 乗る

^hɣ : ^hɣa 商品

^hʁ : ^hʁit 掘る

^hm : ^hma ro 赤い

^hn : ^hnaɸ tum 物語

^hɲ : ^hɲel wa 地獄

^hŋ : ^hŋu pa 狩人

^hl : ^hle 編む

^hr : ^hre 巻く

^hw : ^hwe wa 蛙

^hj : ^hjoq ɣo 下男

12. 有声前気音＋無声子音

^ht : ^htup たたく

^hʈ : ^hʈoŋ ^ɸɕar より分ける

^hk : ^hkor ^hkor 丸い

^htɕ : ^htɕu mo gor t^hɔq とかけ

13. 声門摩擦音＋

hs : hsap 切り分ける

ɸz : ɸzoŋ 参加する

ɸɣ : ɸɣo ri jak 拭き消す

ɸʁ : ɸʁe きつね

14. わたり音

ɣw : lək ɣwa 手

lw : ze lwo とさか

rw : ^ɾdza rwə ポット

15. わたり音を含む3子音連続

$^m k^h w : ^m k^h wan bu$ 僧院長
 $^p t_{\text{ɕ}} w : ^p t_{\text{ɕ}} wet$ 切ってしまう
 $^{\phi} \text{ɕ} w : ^{\phi} \text{ɕ} we$ むく

$^r g w : ^r g w \text{ɛ} t$ 笑う
 $^{\text{h}} m w : ^{\text{h}} m w o f i$ 呪う
 $^{\text{h}} k j : ^{\text{h}} k j a k^h a$ 単独の

16. わたり音を含まない3子音連続

$^{\text{mp}} t^h : ^{\text{mp}} t^h u l t_{\text{ɕ}}^h i$ 機械
 $^{\text{mp}} t_{\text{ɕ}}^h : ^{\text{mp}} t_{\text{ɕ}}^h i t$ 横の
 $^{\text{wr}} d : ^{\text{wr}} d a t^h o$ 知らせる

$^{\phi} r t s : ^{\phi} r t s a q$ 積み重ねる
 $q^w l : q^w l o ŋ$ 風
 $q^{\text{ɸ}} l : q^{\text{ɸ}} l u$ 歌

4.10 dMarthang 方言（紅原県邛溪鎮）

dMarthang 方言は紅原県邛溪鎮龍壤村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

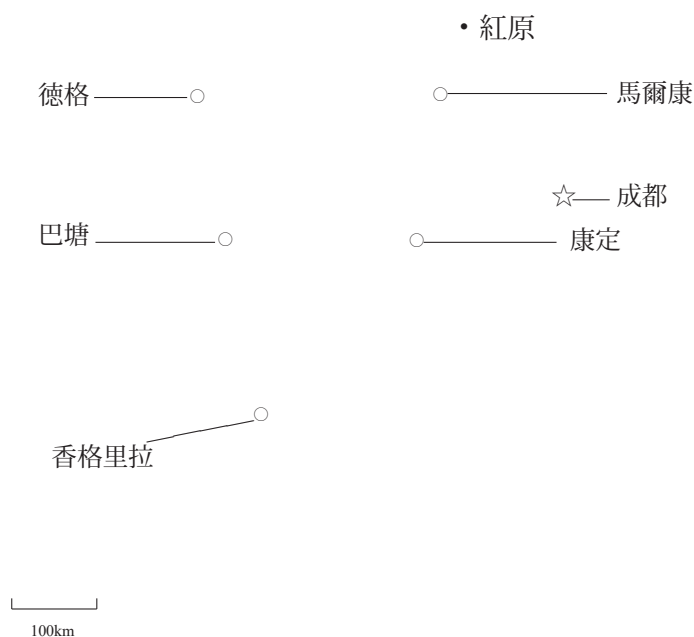


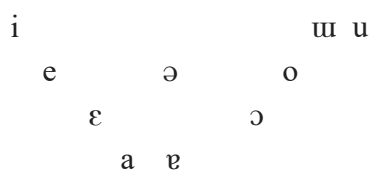
図 4.10: 紅原県邛溪鎮の位置

邛溪鎮は紅原県の県城であり、人工的に発展した地域であるが、龍壤村は以前からの定住チベット人がいた地域である。周辺は草原及び湿原が広がる広大な牧畜区である。

4.10.1 音素一覧

超分節音 なし

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立なし



子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	t ^h	k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t	t	k	q	ʔ
	有聲	b	d	d	d	g		
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有聲		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ç ^h	x ^h	χ ^h	
	無声無気	ɸ, f	s	ʃ	ç	x	χ	h
	有聲	β	z		ʒ	ɣ	ʁ	ɦ
鼻音	有聲	m	n		ɳ	ŋ		
	無聲	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥		
流音	有聲		l	r				
	無聲		l̥					
半母音	有聲	w			j			

4.10.2 方言特徴と具体例

4.10.2.1 特徴的な音素

q^h : q^həŋ 雪
q : qoq 剥げる

χ^h : χ^ha ko 理解する
ʁ : rə ʁoŋ うさぎ

4.10.2.2 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ^mbɯ 虫
ⁿd : ⁿdun 読む
ⁿɖ : ⁿɖəq 正しい
^ŋg : ^ŋgeq 待つ
ⁿdz : ⁿdzən 釣る
ⁿdʒ : ⁿdʒɯq^hta ブーツ
^mp^h : ^mp^hɯr 飛ぶ
ⁿt^h : ⁿt^hə 摘む

^{n̥}t^h : lam ^{n̥}t^hit 引き入れる
^{n̥}t : ^{n̥}tɯq 乱す
^{n̥}t^h : ʁloq ^{n̥}t^hiɖ 稲光が走る
^{n̥}k^h : ^{n̥}k^hor jɯq 近所
^{n̥}k : ^{n̥}kel つるす
^{n̥}ts^h : ^{n̥}ts^hoŋ 売る
^{n̥}tɕ^h : ^{n̥}tɕ^hoq 歪んだ
^{n̥}χ^h : ^{n̥}χ^hen ba 投げる

2. 調音点の一致しない前鼻音類

^md : ^mdoq 身につける
^mɖ : ^mɖoq s^ha 牧区
^mɖ : ^mɖoq qa 速い
^mg : ^mgo 頭
^mdz : ^mdzɯ ɣɯ 指
^mdʒ : ^ɸda ^mdʒɯq 下旬
^mn : ^mna ɾi 誓う
^mɳ : ^mɳa 魚
^mŋ : ^mŋar mo 甘い

^{m̥}t^h : ^{m̥}t^hon bo 高い
^{m̥}t^h : ^{m̥}t^hɯq 掻く
^{m̥}k^h : ^{m̥}k^hi pa 専門家
^{m̥}ts^h : ^{m̥}ts^ho 湖
^{m̥}ts : ^htɕim ^{m̥}tsəq 脇
^{m̥}tɕ^h : ^{m̥}tɕ^hen ʔoq 中指
^{m̥}ɳ : ^{m̥}ɳen ba 狂人
^{m̥}ɳ : ^{m̥}ɳan bo 水平の
^ŋdʒ : ^ŋdʒɯr 変わる

3. 前気音

^hp : ^hpəq pa 皮
^ht : k^hoq ^htot 上半身
^ht : ^htɿ tɕə 昼食
^hk : ^hkət 言葉
^hts : ^htse mo 遊ぶ
^htɕ : ^htɕi 中間
^hf : wu mo ^hfən 姉妹
^hs : mə ^hsər 平民
^hm : ^hm̥uq qwa 霧
^hŋ : s^her ^hna けちな
^hɲ : ^hɲet 探し出す
^hl : ^hl̥oq pa 残される
^hd : ^hda wa 月

^hd : ^hdəq 交わる
^hd : ^hd̥iq 走る
^hg : ^hge rgen 先生
^hdz : ^hdza ɣtɕiq 1 か月
^hdʒ : ^hɲəŋ ^hdʒi かわいそうな
^hz : qɕen ^hzen 猛獣
^hʒ : ^hʒi ɲin さきおととい
^hm : ^hmaq 軍人
^hŋ : ^hŋa pɕu 50
^hl : x^həŋ ^hlep 板
^hr : ^hrom bo 太い
^hw : ʂma ^hwut 腫れ物が大きくなる
^hj : ^hji 右

4. 両唇閉鎖音

^pt^h : ^pt^haq qa 肩
^pt : ^pt̥aq 岩
^pk : ^pkəŋ 満ちる
^pts : ^ptse 煮る
^ptɕ : ^ptɕəq 壊す
^pɕ : ^pɕəŋ 北

^bd : k^ha ^bda おしゃべり
^bg : ^bgo 分かち合う
^bdʒ : ^bdʒet 忘れる
^bdʒ : ^bdʒi 交換する

5. 両唇摩擦/接近音

^ɸt : ^ɸt̥al 破れる
^ɸt : k^ha ^ɸt̥it 口づけする
^ɸtɕ : ^ɸtɕəŋ k^hu 狼
^ɸs : ^ɸsəq ma 砂
^ɸʂ^h : ^ɸʂ^hi 混ぜる
^ɸʂ : ^ɸʂəŋ mo 乞食
^ɸɕ : li ^ɸɕet pa 公務員
^ɸts : ^ɸtsəq 積み重ねる
^ɸɕ^h : m̥qi ^ɸɕ^hi 粥

^βʒ : ^βʒi ^βzo 溶ける
^βr : ^βr̥əl しびれる
^βdʒ : ^βdʒil 8
^wd : ^wdat 座る
^wdʒ : ^wdʒa 100
^wz : ^wzo wa 仕立て屋
^wʒ : ^wzo 搾る
^wl : ^wl̥əŋ 風
^wr : ^wra 牛毛テント

wʒ : wʒə 4

6. 唇齒摩擦音

^fs : ^fsu 毛

7. 齒茎音

^lt : ŋo ^lta 鏡

^lk : ^lkuq qwa 口の聞けない人

^ltʃ : ^ltʃəq 鉄

^ld : ^ldəq なめる

^ldʒ : ^ldʒaŋ k^hu 緑の

8. そり舌音

^ʃt : ^ʃta ^ʃta 灰色の

^ʃk : ^ʃke pa 腰

^ʃts : ^ʃtsa t^həq 草地

^ʃtʃ : ^ʃtʃei 生まれる

^ʃm : ^ʃman ba 医者

^ʃŋ : ^ʃna 鼻

^ʃŋ : rəq pa ^ʃŋo 賢い

^ʃŋ : ^ʃŋu 銀

^ʃt : ^ʃta 馬

^ʃt : mə ʃtə 俗人

^ʃt : ʃtɪt po 幸せな

^ʃk : ʃkuum ma 泥棒

^ʃts : ʃtsam ba ツアンパ

^ʃtʃ : ʃtʃa 髪

^ʃm : ʃman 薬

^ʃŋ : ʃŋə mo 軟らかい

^ʃŋ : ʃŋa 早い

^ʃd : ^ʃdo 石

^ʃd : ŋa ^ʃdil 傲慢な

^ʃg : ^ʃg po 老人

^ʃdz : ^ʃdzo wo 牧人

^ʃdʒ : ^ʃdʒa lo 王

^ʃn : ^ʃna 耳

^ʃŋ : ^ʃŋəp しおれる

rt : rtot 殴る

rd : rdoŋ 衝突する

rʃ : rʃa 泳ぐ

rg : rgo wa 黄羊

9. 軟口蓋音

^ktʃ : ^ktʃo ma 人参果

^ʔʒ : ^ʔʒen ba そのほか

10. 口蓋垂音

ᵛdz : ᵛdza wa 蛙

ᵛn : ᵛnam 天

ᵛl : ᵛloq 電気

ᵛj : ᵛjo ʃtɕa 怠惰な

qɖ : qɖo 羽

qɕ : qɕəŋ wa 伸びる

qz : qzəq 豹

ql : qlu 愚かな

qj : qjiq 投げる

ʔts : ʔtsafi さび

ʔsʰ : lo ʔsʰər 新年

ʔs : ʔser 金

ʔl : ʔləŋ 起きる

χt : tsʰal χtop 切り刻む

χts : χtsəŋ ma 清潔な

χtɕ : χtɕeiq 1

χs : χsot 殺す

ʙz : ʙze ro がけの多い

ʙɕ : ʙzuq 削る

ʙɳ : ʙɳiq 目

ʙj : ʙju 卯年

ʙm : ʙmo 呪う

ʙn : ʙnaŋ ɳin あさって

ʙɳ : ʙɳi 2

ʙj : ʙjer ma 山椒

11. 声門閉鎖音

ʔɳ : ʔɳət sʰɛl 目覚める

12. 声門摩擦音

ɸj : ɸjəq ヤク

ɸl : ɸlɔ 咳をする

13. わたり音

qʷ : ʔuq qwa ふくろう

χʷ : χwon bo 官

mj : mje ʳdo 火打石

βr : ʷla βrəŋ ラプラン寺

14. 3子音連続

ᵛᵇᵈɕ : ᵛᵇᵈɕəŋ 学ぶ

ᵛᵇᵈᵈ : ᵛᵇᵈᵈəŋ 略奪する

ᵛᵇᵈ : ᵛᵇᵈwal 背負う

ᵛᵇr : ᵛᵇrəŋ 茶を入れる

ᵐᵍw : ᵐᵍwar wa 鍛冶屋

ᵝsk : ᵝski 塗る

wᵇw : wᵇwa 狐

wrd : wrdəŋ ぶつ

4.11 sProsnang 方言（丹巴県中路郷）

sProsnang 方言は丹巴県中路郷呷仁依村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

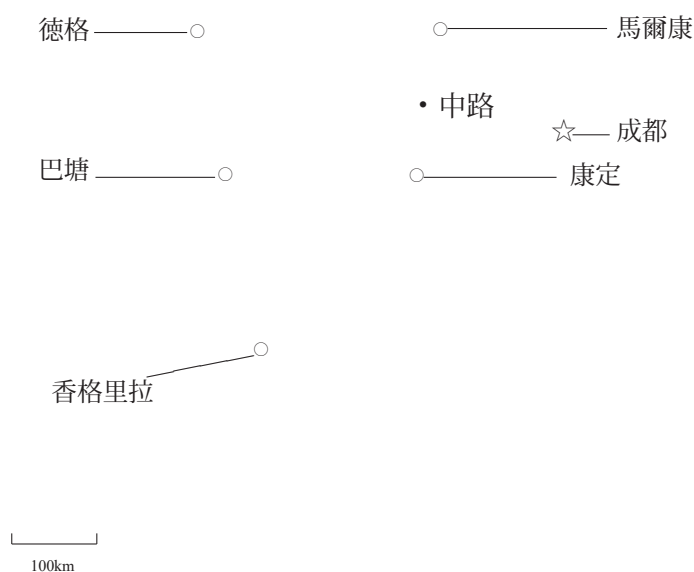


図 4.11: 丹巴県中路郷の位置

丹巴県中路郷は小金川沿いにあり、呷仁依村は標高の高い地域にある。主要交通路とは接続していないが、南方の山を越えて梭坡郷（次節参照）と通じる道があり、村民の往来は長くある。

鈴木 (forthcoming-a) の簡略的な記述がある。

4.11.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 上昇下降

母音 鼻母音/非鼻母音、長/短の対立あり

i	ɯ	ɯ	u
e	ɵ	ə	o
ɛ			ɔ
a			ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h		c ^h	k ^h	
	無気	p	t	t̚	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̚	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	t͡s ^h	t͡ɕ ^h		
	無気		ts	t͡s	t͡ɕ		
	有声		dz	d͡z̚	d͡ʑ̚		
摩擦音	無声有気	ɸ ^h	s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ̚	ɕ̚	x	h
	有声	β	z	ʒ̚	ʑ̚	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.11.2 方言特徴と具体例

4.11.2.1 母音

通常母音例			鼻母音例		
i	[̃] ziʔ	豹	[̃] ɲi:		心臓
e	^h tse	小便	[̃] dẽ:		7
ɛ	[̃] bre:	米			
a	[̃] ka wə	雪	[̃] sã mə		豆
ɑ	[̃] la: βə	霜	[̃] nã:		天
ɔ	[̃] bu rɔ:	砂糖	[̃] kɔ βə		足
o	[̃] so:	命	[̃] tɔ		熊
u	[̃] gu	頭			
ɯ	[̃] tsu:	池			
ə	[̃] rə ^h φə	山			
ɯ	[̃] lu:	綿羊			
ə	[̃] pe: jə:	妹	[̃] sẽ: mbu		生きている

4.11.2.2 単子音

p ^h : [̃] p ^h ɑʔ	ぶた	dz : [̃] ci: dza ^h pɔ:	草地
p : [̃] pɑ wa:	皮	tʂ ^h : [̃] tʂ ^h ɯ	水
b : [̃] bu rɔ:	砂糖	tʂ : [̃] tʂuʔ	6
t ^h : [̃] t ^h ɔ	平原	dʒ : [̃] dʒɔ: [̃] dʒi [̃] mə ro	めちゃく
t : [̃] ta rĩ	今日		ちやの
d : [̃] de ʒiʔ	1	tʂ ^h : [̃] tʂ ^h o: mə	小さい
t : [̃] tɔ: mə	表の	tʂ : [̃] tʂe: mə	押しつける
d :		dʒ : [̃] dʒoʔ ro:	裏の
c ^h :		φ ^h : [̃] φ ^h ɑ: mə	抱きしめる
c : ce	(属格標識)	φ : [̃] la: [̃] gu [̃] tsiʔ φi	中指
ʃ : [̃] jaʔ	壁	β : [̃] βoʔ [̃] go	肛門
k ^h : [̃] k ^h ɑ zɔ	昨日	s ^h : [̃] s ^h eʔ	金
k : [̃] ko: γo:	曲がった	s : [̃] so:	命
g : [̃] ga mu	老婦人	z : [̃] zoʔ [̃] ciʔ	おす牛
ʔ : [̃] ʔa p [̃] ts ^h ə	祖母	ʂ ^h : [̃] la: [̃] gu [̃] ʂ ^h eʔ	小指
tʂ ^h : [̃] tʂ ^h ə	塩	ʂ : [̃] ʂe:	帰る
ts : [̃] tsə lu	猫	ʒ : [̃] de ʒiʔ	1

ʃ^h : ʃ^{hi} h^hu: 木
 ʃ : ʃa ni: 弟
 z_l : ʒe ni しゃさって
 x^h : x^ha h^hko mə 振り返る
 x : ʃa zo とうがらし
 ɣ : ʔkro ɣo 蜘蛛
 h :
 fi : ʔ^hta fie: へそ
 m : ʔmo: mə 多い
 m̥ : m̥ã m^hbu 医者
 n : ʔnõ h^hka 明日

ŋ : ʔ^hna βu: 鼻
 ŋ : ʔ^hne wə 親戚
 ŋ̃ : ʔ^hẽ mo かわいそう
 ŋ : ʔ^hŋə 私
 ŋ̃ : ʔ^hŋẽ ʔts^hoʔ 前
 l : ʔlu 年
 l̥ : ʔlã 当てる
 r : ʔro: 友人
 j : ʔja: ヤク
 w : ʔwə きつね

4.11.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

m^hb : ʔ^hm^hbu lu 虫
 n^hd : ʔme n^hdu 弾
 ŋ^hg : ʔ^hgu 頭
 n^hdz : ʔ^hdzu ソ
 n^hdʒ : ʔ^hdʒoʔ 斧
 n^hdʒ : ʔ^hdʒo: mə 速い

m^hp^h : ʔjeʔ m^hp^hu 挙げる
 n^ht^h : ʔ^ht^hu mə 高い
 ŋ^hk^h : ʔ^hk^hu 世話をする
 n^hts^h : ʔ^hts^hã 夜
 n^htʃ^h : ʔ^htʃ^hu h^hpu あげひげ
 n^htʃ^h : ʔ^htʃ^hu: 凍る

2. 前気音

h^hp : ʔ^hpe: 官
 h^ht : ʔ^htə 馬
 h^hc : ʔ^hce 階段
 h^hk : ʔ^hka mə 星
 h^hts : ʔ^htsu: さび
 h^htʃ : ʔ^htʃu: 鉄
 h^htʃ : ʔ^htʃe: βa 鳥
 h^hʃ^h : ʔ^hʃ^hu すすぶた

h^hʃ^h : ʔ^hʃ^hu 山
 h^hʃ^h : ʔ^hlo h^hʃ^ha 新年
 h^hs : ʔ^hsõ 3
 h^hʃ : ʔ^hʃa h^hʃu 汗
 h^hʃ : ʔ^hʃe:ʔ mə 破壊する
 h^hx^h : ʔ^hdʒe h^hx^hu ʔlã 命中する
 h^hx : ʔ^htʃi h^hxu 中間
 h^hl̥ : ʔ^hl̥u: 鷹

^hb : ʰboʔ x^hu 馬鹿
^hd : ʰdə ʰda 石
^hg : ʰge ʰgã 先生
^hdz : ʰdza wə 月
^hdʒ : ʰdʒo mã 尾
^hdʒ : ʰdʒu mǝ 腸
^hz : ʰziʔ 豹
^hʒ : ʰʒə 4

^hʒ : ʰʒa: rə ʰpɔ: mã 下男
^hm : ʰmə 傷口
^hɲ : ʰɲə 2
^hŋ : ʰŋa pʰsu 50
^hl : ʰlu mə 風
^hr : ʰra: 割れる
^hj : ʰje mə 胡椒

3. 両唇音

^pts^h : ʰts^ha mbo ʰle:ʔ ちょうちょ
^pts : ʰtsə 鶏
^ptʂ^h : ʰtʂ^hiʔ 子供
^ptʂ : ʰtʂoʔ tɕ^ho: 北
^ps : ʰsə sə 平らな
^bdʒ : ʰtʂə bʒe: 打ち倒す

^ɸs : ʰsã: 思う
^ɸʂ : ʰʂaʔ 話す
^wd : ʰwde mbo ʰre mə 正直な
^wʒ : ʰwʒa: 叩く
^wʒ : ʰwʒe: 忘れる
^wl : ʰwla ʰgo: ɲi 太もも

4. 口蓋音

^ktʂ^h : ʰtʂi ʰtɕo: ʰkʰtʂa: 百万
^ktʂ : ʰkʰtʂa: 収獲する

^ktɕ^h : ʰkʰtɕə 犬

5. わたり音 (一部)

^ph^r : ʰp^hriʔ ɕ^hi: 赤ちゃん
^pr : ʰpraʔ ʰɸuʔ 洞窟
^br : ʰtʂ^ha bro: 氷
^tr : ʰtrə 問う
^kh^r : ʰk^hraʔ はやぶさ
^kr : ʰkru 船
^gr : ʰgrə ʰtʂa: 鍵
^βr : ʰpe: βrə 姉妹
^ʃr : ʰʃraʔ ʰpa 湿った

^xr : ʰkru xru 梁
^ɣr : ʰkro ɣro 蜘蛛
^pw : ʰpwo 牛
^{tɕ}h^w : ʰmə tɕ^hwe: mə 負ける
^sh^w : ʰs^hwə 土
^ʃh^w : ʰʃ^hwə 肉
^dj : ʰji: djo: mə 掘り起こす
^zj : ʰɕo: zje 朝食
^rj : ʰpa: rje: スカーフ

6. 3子音連続

^hpr : ^hpri 雲

^{fi}br : ^{fi}brõ mǝ 蜂

^hkr : ^hkrǝ 髪

^{fi}gr : ^{fi}gra 仇

^mbr : ^mbruʔ 雷

^mp^hr : ^ʌm^hraʔ ^{fi}goʔ 雉

^ʌqr : ^ʌqra 噛みつく

^{fi}k^hr : ^{fi}k^hrǝ ^hpǝ 胆嚢

^hkw : ^hkwǝ つらい

^{fi}gw : ^{fi}gwǝ 愛する

^ʉgw : ^ʉgwi do ^ʰkra: 伝染する

^ptsw : ^ʌp^tswǝ 鶏

^{fi}dzw : ^ʰdzwǝ 漢族

^{fi}bj : ^{fi}bje βǝ 蛙

^ʉgj : ^ʉgjẽ 枕

^pts^hj : ^ʰp^ts^hje 小麦粉

^ptsj : ^ʰp^tsje mǝ 裂く

^mbj : ^mbje 燃える

4.12 Sogpho 方言（丹巴県梭坡郷）

Sogpho 方言は丹巴県梭坡郷莫洛村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

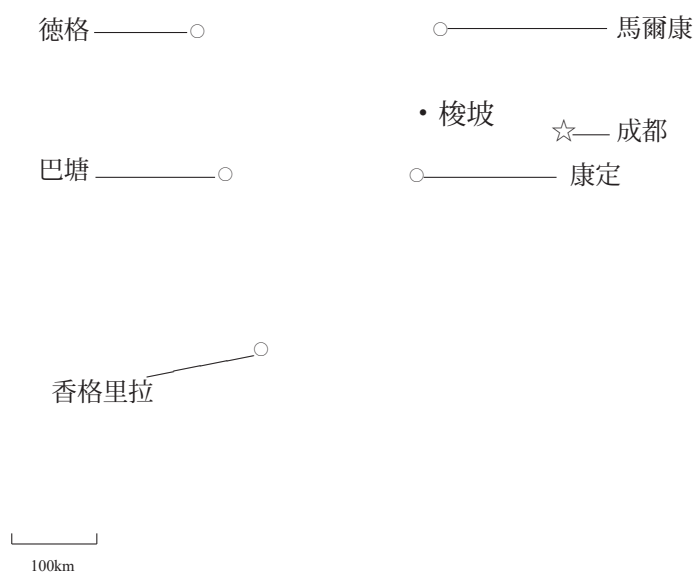


図 4.12: 丹巴県梭坡郷の位置

梭坡郷は大渡河の東岸にあり、主要交通路は通っていない。現在大渡河に橋が架かっており、対岸の交通路と接続しているが、以前は橋がなく、対岸との交流は疎であったという。

鈴木 (2005c, 2006d, forthcoming-a)、Suzuki (2005b) の記述がある。

4.12.1 音素一覧

超分節音 声調で5種が認められる

ˊ: 高平 ˊ: 上昇 ^: 上昇下降
 ˋ: 低平 ˋ: 下降

母音 鼻母音/非鼻母音、長/短の対立あり

ɿ i ʊ u
 e ɵ ə o
 ɛ ɔ
 a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t̪ ^h	c ^h	k ^h	
	無気	p	t	t̪	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̪	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ç ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʝ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.12.2 方言特徴と具体例

4.12.2.1 母音

	通常母音例		鼻母音例		長母音例	
i	文字	'jiʔ	である	'ji	彼	'ti:
e	デルゲ	'de ^{fi} ge	肝臓	' ⁿⁱ tɕ ^h ẽ bu	美しい	' ⁿ dze:
ɛ	ない	'mɛʔ	森	'sõ nẽ	鳥	'tɕɛ: ba
a	あなた	ˉtɕ ^h a	丹巴	ˉtã ba	でない	'ma:
ɑ	傷	'ma	くい	'nã kã	以前	ˉt ^h ɑ: bo
ɔ	チベット	'pɔʔ	盲人	'mĩʔ nõ	苦しみ	'no:
o	5	ˉŋo	3	'sõ	小指	'fio: ze
u	齒	's ^h u	乳房	'ʔa lũ	羽織	ˉɸu: ge:
u	誰	ˉs ^h u	暗くなる	'mũ ⁿ ts ^h ə	必要だ	ˉ ^{fi} gu:
ɿ	水	ˉtɕ ^h ɿ	換える	'zɿ		
ə	湯	ˉtɕ ^h ɿ k ^h əʔ	官	' ^h pə	火薬	' ⁿ dzə:
ə	これ	'nə	2	'nə	なくす	'mə: mə _rɛʔ

4.12.2.2 単子音

	音節初頭が高め		音節初頭が低め	
p ^h	ぶた	ˉp ^h aʔ	故郷	'p ^h ɔ ju
p	頭巾	'pa: rje	娘	'pu mo
b			広い	'bõ
t ^h	継母	ˉt ^h a mu		
t	衣服	'tə p ^h o	今日	ˆta ri
d			顔	'dõ rə
t ^h	血	't ^h aʔ		
t	腹を立てる	'tu lã	小麦	'tə
ɖ	蛇	'ɖi:	鎖	'ɖo ^h tɕaʔ
c ^h				
c	流れ星	'ce		
ʃ	漢族	'jə	尾	'ju ma
k ^h	カタ	ˉk ^h a taʔ	桃	'k ^h ã bu
k	のど	'ko mō	腰帶	'ka ra
g			老人	'ga po
ʔ	兄	'ʔa ^h ko	祖母	'ʔa ts ^h ɿ
ts ^h	ごみ	ˉts ^h a lu	半分	ˆts ^h aʔ ^h ce
ts	やせる	'tsə ru:	砂	'tsə mo
dz			羽毛	'dza ^h pu

tɕ ^h	酒	`tɕ ^h õ		
tɕ	もの	ṽtɕa bo	鳥	ˈtɕo
dʒ	重さを量る	ṽdʒa mo	ギャロン	ˈdʒa rō
ɸ	羽織	ṽɸu: ge:	月の中旬	ṽ ^h da wo ˈ ^h ci ɸu
s ^h	場所	ṽs ^h a ɕ ^h o	露	ˈs ^h i bo
s	ごはん	ṽse	橋	ˈsã bu
z	夏	ˈnõ lu ˈzĩ	月末	ˈzo: mə ˈra
ʂ ^h	知っている	ˈʂ ^h e:		
ʂ	傘	ṽʂo ʰdu?	おいしい	ˈʂõ ˈta: ku
z̥	底	ṽkə z̥o	換える	ˈz̥ĩ
ɕ ^h	木	ˈɕ ^h i p ^h ũ	猟犬	ˈɕ ^h a tɕ ^h ə
ɕ	乳牛	ṽɕũ: bə mə	ミルクティー	ˈɕo ju
ʒ	おとし	ˈʒə ɲĩ du		
x ^h				
x	モモ	ṽʔa xe		
ɣ			友人	ˌɣo:
h	鼻タバコ	ṽha rə	唐辛子	ˈhe zo
fi			彼ら	ˈtə rã fiã
m	目	ˈmĩ	夫	ˈmə
m̥	医者	ˈman ˈmbu		
n	天	ˈnã	そして	ˈnã
ɳ̥	鼻	ˈɳ̥o		
ɳ̥	古い	ṽɳ̥i bo	太陽	ˈɳ̥ə mo
ɳ̥	心臓	ˈɳ̥ĩ		
ɲ	銀	ˈɲĩ	私	ˌɲo
ɲ̥	枕	ṽɲ̥e? ˈɲ̥dʒi?		
l	風	ˈlũ	道	ˈlã
l̥	ラサ	ˈla s ^h u		
r			羊	ˈra
w			雌牛	ˈwə
j	ヤク	ˈja?	じゃがいも	ˈjã ju

4.12.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ˈmbu bõ 虫

ⁿd : ˈndo ダルツェンド

ⁿd̥ : ˈnd̥e 米

ⁿʃ : ˈɲji 震える

^ŋg : ^ŋgo 行く
ⁿdz : ⁿdzu ソ
ⁿdz : ⁿdza ^hxã 靴
^mp^h : ^mp^ho 挙げる
ⁿt^h : ⁿt^hu 高い
ⁿt^h : ⁿt^hə? 牽引する

ⁿc^h : ⁿc^he? 抱きしめる
ⁿk^h : ⁿk^haj 町
ⁿts^h : ⁿts^hã 煙
ⁿtɕ^h : ⁿtɕ^hu ru 唇
ⁿs^h : ⁿs^hõ pu 編む
ⁿx^h : ⁿx^hã 打つ

2. 前気音

^hp : ^hpũ 草原
^ht : ^hta wu 胡桃
^ht : ^htə 髪
^hc : ^hma ^hce あご
^hk : ^hkã dzĩ 山地
^hts : ^htsa ^hkə 根
^htɕ : ^htɕu 盗む
^hs^h : ^hs^hẽ mo 姉
^hs : ^hso? 生命
^hʃ^h : ^hʃ^ha: ma 狩人
^hx : ^hdza ^hxã 靴
^hl : ^hlɔ? 教える
^hb : ^hba? 背負う
^hd : ^hda nō 月(天体)

^hd : ^hdɔ na? ハエ
^hj : ^hje? ^hdza 背中
^hg : ^hgu 9
^hdz : ^hdzõ 学ぶ
^hdz : ^hdzõ p^hũ 柳
^hz : ^hzo ^hzo たくさん
^hz : ^hzɭ 4
^hm : ^hɔ ^hme 水害
^hn : ^hna mo 義理の娘
^hn : ^htɕu ^hnu 12
^hŋ : ^htɕu ^hŋo 15
^hl : ^htõ ^hla? 右
^hj : ^hje ^hla? 左

3. 第1子音が口腔内調音子音

^pt : ^ptɭ 雲
^pts^h : ^pts^hi 開く
^pts : ^ptso 鶏
^ptɕ : ^pja ^ptɕu 50
^pɕ^h : ^pɕ^he? ほとばしる
^ɸt : ^ɸta? 種をまく
^ɸt : ^ɸtɕu 洗う
^ɸk : ^ɸpo? ^ɸko? ^ɸzɭ かぶせる
^ɸtɕ : ^ɸtɕa? 切り分ける

^ɸs : ^ɸsã nō 考え
^ɸɕ^h : ^ɸɕ^ha? 話す
^wd : ^wtɕi ^wdõ 17
^wj : ^wtɕo ^wja? 18
^wz : ^wɕ^hi ^wzu 大工
^wz : ^wtɕu ^wzɭ 14
^wɕ : ^wze: ze 忘れる
^wm : ^wga ^wmo ^hce? po 野牛
^wl : ^wlar gō 太もも

4. わたり音

kw : ʔkwa zu ʔwo 一生懸命な

gw : ʔgwofi 笑う

x^hw : ʔx^hwa ʔk^ho: 振り返る

ɣw : ʔɣwə do 参加する

mj : ʔa mje 祖父

rj : ʔpa: rje 頭巾

5. 3子音連続

^hkw : ʔ^hkwə 疲れている

^{fi}gw : ʔ^{fi}gwə 愛する

4.13 dGudzong 方言（丹巴県格宗郷）

dGudzong 方言は丹巴県格宗郷格宗村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

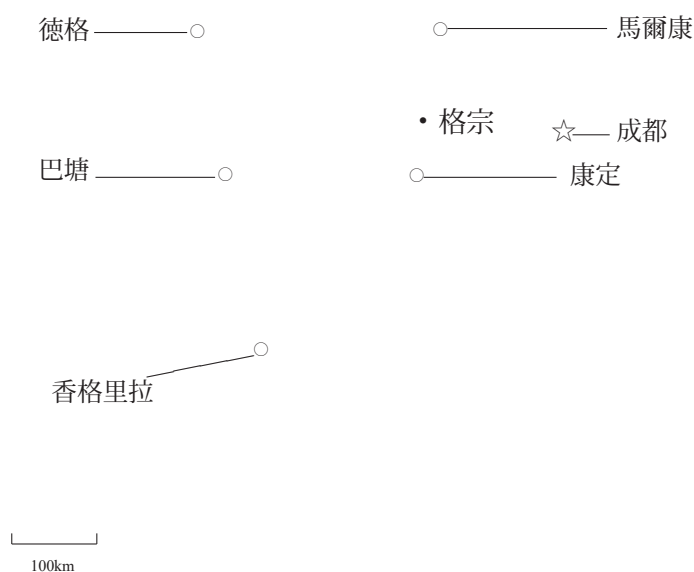


図 4.13: 丹巴県格宗郷の位置

格宗郷は大渡河の西岸にあり、南北に通じる主要交通路が通っている。
鈴木 (forthcoming-a) の簡略的な記述がある。

4.13.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平

ˊ: 上昇

ˋ: 下降

ˆ: 上昇下降

母音 鼻母音/非鼻母音、長/短の対立あり

i	ɯ	ɯ	u
e	ə ə	o	
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	c ^h	k ^h	
	無気	p	t	t	c	k	ʔ
	有声	b	d	d	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ	x	h
	有声	β	z	ʒ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.13.2 方言特徴と具体例

4.13.2.1 母音

通常母音例			鼻母音例		
i	ˈmi	火	ˈnõ ñĩ		あさって
e	ˈteʔ	虎	ˈnẽj sʰoʔ		先端
ɛ	ˈlɛː bo	手	ˈkɛj ˈmoː mə		安い
a	ˈsʰa fio	鹿	ˈŋã ˈmbu		箱
ɑ	ˈnaw	天	ˈrã mə		他の人
ɔ	ˈnɔ	鼻	ˈtõ		引きずる
o	ˈndʒo	虹	ˈpõ		官
u	ˈsʰu	歯	ˈndʒũ		経る
ɯ	ˈtɕʰɯ	水	ˈbũ		太い
ə	ˈtə	雲	ˈnõ		心臓
ɯ	ˈdɯ	小麦			
ø	ˈpø luʔ	ぎょうざ			

4.13.2.2 単子音

pʰ : ˈpʰa ŋga	父	ts : ˈtsõ ˈmbu	しわ
p : ˈpaʔ paʔ	平たい	dz : ˈdzar	貼る
b : ˈbũ	太い	tɕʰ : ˈtɕʰɯ	水
tʰ : ˈtʰa ʒuʔ	とさか	tɕ : ˈtɕa bu	もの
t : ˈta ro	ヨーグルト	dʒ : ˈdʒo wo	鑿
d : ˈdeː mo	丸太	ɸ : ˈɸoʔ kə	かぶせる
tʰ : ˈtʰeʔ	血	β : ˈβe tɕʰə	犬
t : ˈto	髪	sʰ : ˈsʰi gu	炭
d : ˈdɯ	小麦	s : ˈsõ sõ	明かり
cʰ :		z : ˈzi tɕʰə	いぬ年
c :		ɕʰ : ˈɕʰi ɸe	木
ʃ :		ɕ : ˈɕi ɸej	森
kʰ : ˈkʰa fio	雪	ʒ : ˈtsʰe ʒiʔ	1日
k : ˈkə zi	大麦	ɕʰ : ˈɕʰuʔ po ɸe	柏
g : ˈgi ŋga	教師	ʂ : ˈni ʂu	20
ʔ : ˈʔa mi	祖父	ʒ : ˈziː ñĩ	しあさって
tsʰ : ˈtsʰã ˈbu liʔ	とんぼ	xʰ : ˈxʰoʔ	つかむ

x : 'xo^hpo 松明
 γ : 'h_{tə}γi へそ
 h : 'hε zu 唐辛子
 fi : 'fiə puw 伸びる
 m : 'mō めす牛
 m̥ : 'm̥ə 薬
 n : 'naʔ tɕ^hwe 耳
 ŋ : 'ŋə 鼻
 ɲ : 'ɲə 魚

ɲ̥ : 'ɲ̥ə 心臓
 ŋ : 'ŋə 5
 ɲ̥ : 'ŋgo ɲ̥i: 枕
 l : 'la mo 葉
 l̥ : 'l̥əʔ bo 霜
 r : 'rə be うさぎ
 j : 'je s^ho 昨日の晩
 w : 'wo きつね

4.13.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

m̥b : 'm̥bu leʔ 虫
 n̥d : 'n̥da 読む
 n̥d̥ : 'n̥d̥i: 米
 ŋg : 'ŋgo 行く
 n̥dz : 'n̥dzu ソ
 n̥dz̥ : 'n̥dz̥aʔ xā 靴
 ŋγ : 'ŋγə 噛みつく
 m̥p^h : 'm̥p^ha 飛ぶ

n̥t^h : 'n̥t^hu 高い
 n̥t̥^h : 'n̥t̥^he^hpo 胆嚢
 n̥k^h : 'n̥k^ho li 屋根
 n̥ts^h : 'n̥ts^hu 湖
 n̥tɕ^h : 'n̥tɕ^hu^hkuw 口
 n̥x^h : 'ji: n̥x^hā 村
 n̥l̥ : 'n̥l̥aʔ 射る
 m̥ts^h : 'm̥ts^ha mə 拭く

2. 前気音

h̥p : 'h̥pej bo 肩
 h̥t : 'h̥to 馬
 h̥t̥ : 'leʔ h̥t̥əʔ ブレスレット
 h̥c : 'ma^hci あご
 h̥k : 'h̥kuw mo 泥棒
 h̥ts : 'h̥tsə wo 草
 h̥tɕ : 'h̥tɕei 舌
 h̥s^h : 'h̥s^hə 金

h̥s : 'h̥sā 3
 h̥ɕ^h : 'h̥ɕ^ha 生まれる
 h̥ɕ : 'w^hla^hɕo 太もも
 h̥x : 播種する 's^ha^hxā 'rā:
 h̥l̥ : 'h̥l̥eʔ 鷹
 n̥b : 'n̥buʔ d̥e ふいご
 n̥d : 'n̥da wo 月
 n̥d̥ : 'n̥da: mo 松脂

^hj : ^hji? ^hdzu 背

^hg : ^hgu 9

^hdz : ^hdzã: ji mə 偽の

^hdʒ : ^hdzu mo 腸

^hz : ^hzo ^hzo 偏った

^hz̥ : ^hzə 4

^hʒ : ^hzi 交換する

^hm : ^hmɛj 低い

^hn : ^hna fio 黄羊

^hɲ : ^hɲə 2

^hŋ : ^hŋa: mə 甘い

^hl : ^hla? po 脳

^hr : ^hra: wo 牛小屋

^hj : ^hje? ヤク

3. 両唇音

^pt : ^pta: ju なぞなぞ

^pt^h : ^pt^ha ɣa: p^he ポプラ

^pt̥ : ^pt̥o: ^hji? 胸

^pk : ^pki: 背負う

^pts^h : ^pts^he: mo 箒

^pts : ^ptso にわとり

^ptɕ : ^ptɕu 10

4. 両唇摩擦接近音

^ɸt : ^ɸtu: 腫れる

^ɸt̥ : ^ɸbə? ^ɸtu: ほどく

^ɸtɕ : ^ɸtɕö ne bo 12月

^ɸs : ^ɸsã 餌をやる

^wɖ : ^hpuw ^wqã ⁿdo: mi ^rə mə 毛の

色

^wg : ^wgu 分かち合う

^wdʒ : ^wdʒa? 8

^wz̥ : ^ʃsu ^wzu 搾る

^wl : ^wla ^hɕo 太もも

5. 声門閉鎖音

^ʔm : ^ʔma: ^hti 沈む

^ʔn : ^ʔne ^ʔne とがった

^ʔj : ^ʔja: ⁿt^hu 膨張する

6. わたり音 (省略)

7. 3子音連続

^hmw : ^hmwo しみ

^mbw : ^mbwe mə 狂人

^hcw : ^hcwe? しゃもじ

ⁿjw : ⁿjwe? mə 早い

^ɸkw : ^ɸkwe? 剥く

^hkw : ^hkwi mə 手で支える

^pts^hw : ⁿə ^pts^hwe? この辺

^htsw : ^pts^hə fiu ^htswe mə 裏返す

^hgw : ^hgwoʔ 笑う

^hmj : ^hmjeʔ mo 軍人

^hsw : ^hswi 集まる

^hlw : ^hlweʔ 握る

^hk^hw : ^hk^hweʔ 邪魔する

^hdzw : ^hdzweʔ ^hdzweʔ 積み重ねる

^htɕj : ^htɕjeʔ 持ち上げる

^hzw : ^hzweʔ 削る

4.14 Lhagang 方言（康定県塔公郷）

Lhagang 方言は康定県塔公郷塔公村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

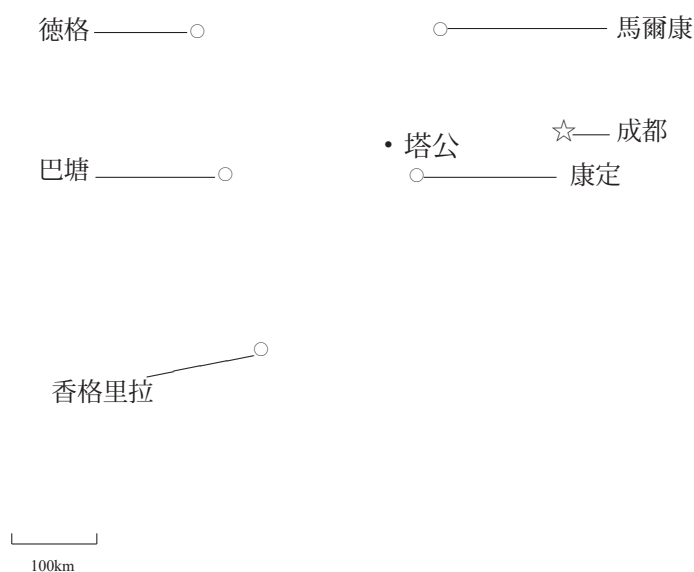


図 4.14: 康定県塔公郷の位置

塔公郷は康定県北西部に位置し、塔公村は塔公寺を中心に形成されている。周辺域は平原が続き、遊牧民が多い。歴史的にこの地域はムニャ[Mi-nyag/木雅]と呼ばれる地域の北部に相当する。北東部はギャロン、北西部はスタウ、南部はムニャという異なる地域の境界にもあたり、チベット人の生活様式も牧区と農区が混合している。一方、塔公寺はこの地域では宗教的に非常に重要なものと考えられ、聖地として多方面から巡礼に来るチベット人が多い。

鈴木 (2006c) の記述と際立つ特徴の考察がある。この方言独特の特徴は補足という形で述べる。

4.14.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平

ˊ: 上昇

ˋ: 下降

ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	ɯ	ɯ	u
e	ə	ə	o
ɛ			ɔ
a			ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	c ^h	k ^h	
	無気	p	t	t̚	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̚	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h		
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ	x	h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.14.2 方言特徴と具体例

4.14.2.1 母音

	通常母音例		鼻母音例
i	ˈni ma 太陽	ˈnẽ jĩ	下腿
e	ˈme 火	ˈge ^{fi} gẽ	教師
ɛ	ˈkɛ:ʔ pa がけ	ˈtʰẽ pa 旱魃	
a	ˈs ^h a 地	ᵛã 靴	
ɑ	ˈp ^h ɑʔ 岩	ˈs ^h e hã hã 真っ黄色の	
ɔ	ᵛdɔ 縫う	ˈjõ ˈzoʔ すべて	
o	ˈko: ze: 衣服	ˈw ^h dõ 砂糖	
u	ˈtu 小麦	ᵛs ^h ũ tɕ ^h u 30	
ʊ	ˈpu zʊ 息子		
ə	ˈrə 山	ˈfiɡõ 箱	
ʊ	ˈm ^h dʊʔ 龍		
ø	ˈfiɡø:ʔ ma めす馬	ˈfi ^h mẽ ^m ŋĩ ˈfi ^h jaʔ 呪う	

4.14.2.2 単子音

p ^h : ˈp ^h ɑʔ ^{fi} gen ぶた	ts ^h : ˈts ^h a 塩
p : ˈpoʔ ba チベット人	ts : ˈtsi ki ねずみ
b :	dz : ˈdza re ˈdzo re めちゃくちゃの
t ^h : ˈtʰɛ: wa ほこり	tɕ ^h : ᵛtɕ ^h u 水
t : ˈtiŋ ^h dʊ ゴマ	tɕ : ˈtɕi ma 砂
d : ˈdõ tɕ ^h u 70	dʒ : ˈdʒa ^h su: ra もみあげ
tʰ : ˈtʰo 鋼	Φ : ˈφu tsa 唐辛子
t : ˈtoʔ ma アリ	s ^h : ˈs ^h a wo 種
d : ˈdɑŋ naʔ ハエ	s : ˈso wa 大麦
c ^h : ˈc ^h oʔ ts ^h o あなたたち	z : ˈzoŋ 鉄なべ
c : ˈcaʔ ke ˈcoʔ ke 曲がりくねった	ɕ ^h : ˈɕ ^h uʔ pa 柏
j : ˈja tɕ ^h u 80	ɕ : ˈɕi: zo 大工
k ^h : ˈk ^h a 口	ʒ : ˈʒiŋ pa 農民
k : ˈka wa 柱	ʂ ^h : ˈʂ ^h əm かろうそ
g : ˈgu ^h tɕu 90	ʂ : ˈʂo ma 幼虫
ʔ : ˈʔa ra 土ねずみ	x :

γ : ʔri γw 子山羊	ɲ : ʔɲɛn po 聞きよい
h : ʔaʔ tɕʰe ʔjaʔ くしゃみする	ŋ : ʔja 私
fi : ʔfiɔ tɕa ミルクティー	ɲ : ʔɲɛ mgo 枕
m : ʔme 火	l : ʔluʔ 羊
m : ʔmɛn ba 医者	l : ʔlã 靴
n : ʔnaʔ wuʔ 森	r : ʔraʔ 黄銅
ɲ : ʔna tu 鼻タバコ	j : ʔja ka 枝
ɲ : ʔna ʰti 股引	w : ʔwa きつね

4.14.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^m b : ʔ ^m ba 抜く	^m pʰ : ʔ ^m pʰur 飛ぶ
ⁿ d : ʔ ⁿ dam baʔ 泥	ⁿ tʰ : ʔ ⁿ tʰor 分ける
ⁿ ɖ : ʔ ⁿ ɖe 混ぜる	ⁿ tʰ : ʔ ⁿ tʰuʔ 乱れた
ⁿ ʃ : ʔ ⁿ sar ʔjur ニュース	ⁿ kʰ : ʔ ⁿ kʰoː lo 車輪
ⁿ g : ʔ ⁿ go 這う	ⁿ tsʰ : ʔ ⁿ tsʰoŋ 売る
ⁿ dz : ʔ ⁿ dza ʔli 世界	ⁿ tɕʰ :
ⁿ dʒ : ʔ ⁿ dʒafi mtsʰo 虹	ⁿ ɕʰ : ʔ ⁿ ɕʰiʔ 拭く

2. 調音点不一致の前鼻音

^m d : ʔa mdo アムド	^m tʰ : ʔ ^m tʰi ʰpa 胆嚢
^m ɖ : ʔ ^m ɖuʔ 龍	^m kʰ : ʔ ^m kʰɛː ma 腎臓
^m ʃ : ʔ ^m joʔ pa 速い	^m tsʰ : ʔ ^m tsʰɛː ma 双子
^m g : ʔ ^m go wo 頭	^m tɕʰ : ʔ ^m tɕʰəm mba 肝臓
^m dz : ʔ ^m dzui ku 指	^m ɕʰ : ʔ ^m ɕʰaʔ 掃く
^m dʒ : ʔ ^m dʒar po 粘つく	^m ɲ : ʔ ^m ɲuʔ ma 竹
^m n : ʔ ^m nafi ma 息子の嫁	ⁿ ɖ : ʔ ⁿ ɖo 行く
^m ɲ : ʔ ^m ɲur tu 今すぐ	ⁿ ʃ : ʔ ⁿ joʔ pa ʔtɕeʔ 悔いる
^m ŋ : ʔ ^m ŋaː bo 甘い	ⁿ tʰ : ʔ ⁿ tʰiʔ 牽引する
^m tʰ : ʔ ^m tʰon mbo 高い	

ʔc^h : ʔc^huʔ 乱す
 ʔtɕ^h : ʔtɕ^huʔ ʔ^hep 結氷する
 md : ʔ^hu mdaŋ たづな

md : ʔmde 鬼
 mdz : ʔtɕi mdzuʔ 中指

3. 前気音

ʰp : ʰpu 毛
 ʰt : ʰta 馬
 ʰt : ʰta 髪
 ʰc : ʰco ma のり
 ʰk : ʰkaŋ ma 星
 ʰts : ʰtsa 脈
 ʰtɕ : ʰtɕuʔ 鉄
 ʰs^h : ʰ^ptə ʰs^ho 影
 ʰs : ʰsə 3
 ʰɕ^h : ʰɕ^huɕ 円寂
 ʰɕ : ʰ^toŋ ʰɕol 鍬
 ʰm : ʰmō 耕す
 ʰŋ : ʰŋu におう
 ʰŋ : ʰŋi mo 軟らかい
 ʰŋ : ʰŋuʔ 呪文

ʰl : ʰlɕp 押しつける
 ʱb : ʱba 牛毛テント
 ʱd : ʱda wa 月
 ʱd : ʱdi 蛇
 ʱj : ʱju ma 腸
 ʱg : ʱgu 9
 ʱdz : ʱdzi wo 池
 ʱdz : ʱdzeʔ 8
 ʱz : ʱzə 瑪瑙
 ʱz : ʱzə 4
 ʱm : ʱma: bo 赤い
 ʱn : ʱnəʔ 靴擦れを起こす
 ʱŋ : ʱŋi pa 古い
 ʱl : ʱlo: wa 肺
 ʱw : ʱwix 押す

4. 両唇閉鎖音

p^t : ʔ^ptaʔ 身につける
 p^t^h : ʔ^pt^hu ku 子供
 p^t : ʔ^ptaʔ ʱdo 岩
 p^c : ʰkoŋ p^cuʔ ʔ^zu 蹴る
 p^k : ʰkaŋ wa 満ちる
 p^{ts} : ʰla p^{ts}i マニ石
 p^{tɕ}^h : ʔ^ptɕ^hə 遅い
 p^{tɕ} : ʔ^ptɕeʔ 切り分ける

b^d : ʔ^bda ʱjaʔ 知らせる
 b^d : ʔ^bduɕ 耐える
 b^j : ʔ^bjuʔ 過ぎる
 b^g : ʔ^bge 渡る
 b^{dz} : ʔ^bdzə 踏む
 b^z : ʔ^bzu 溶かす

5. 両唇摩擦接近音

ʔts : ʔtsu 囲い込む

ʔtɕ : ʔtɕol 預ける

ʔsʰ : ʔsʰam pa 精神

ʔɕʰ : ʔɕʰiŋ pa 毛布

ʔɕ : ʔɕu ru 珊瑚

wɖ : ʷwɖõ 砂糖

wʃ : ʷwʃar 貼る

wz : ʷwzoʰta 外見

wʒ : ʷwʒun pa 乳牛

wl : ʷwlõ 風

6. 歯茎音

ʎt : ʎta 見る

ʎtɕ : ʎtɕoŋ tsã ʎɕiʔ うなづく

ʎh : ʎha 編む

ʎd : ʎarʎdiŋ 浮く

ʎdʒ : ʎdʒoŋ kʰu 緑の

7. 軟口蓋音

kʰtʰ : ʰkʰtʰaʔ 血

kʰt : ʰkʰtu mu ひじ

kɕ : ʰkɕar ほとばしる

ɕd : ʰɕdi 巻く

ʰts : ʰtsafi さび

ʰsʰ : ʰsʰe 金

ʰs : ʰsəŋ wa 秘密にする

ʰl : ʰlɔ 龍王

ʰʒ : ʰʒoʔ 裂ける

8. 声門閉鎖音

ʔm : ʔmə lã 夢

ʔn : ʔnam ɕʰi 靈魂

ʔɳ : ʔɳə わな

ʔŋ : ʔŋa ma 尾

ʔl : ʔloʔ 稻光

ʔj : ʔjaʔ ヤク

9. わたり音 (省略)

10. 3子音連続

mpʰtʰ : ʰmpʰtʰoʔ 略奪する

mpʰt : ʰmpʰteʔ pa 横の

hpʰt : ʰhpʰtaŋ ku 狼

hkʰt : ʰhkʰtaʔ 怖がる

ʰbɖʒ : ʰbɖʒin pa 布施

ʰgɖd : ʰgɖdoŋʰtam 物語

4.14.3 補足

鈴木 (2006c) に基づいて、Lhagang 方言に特徴的な、自由変異のように交替する特定の音声について簡潔に触れておく。

p - w

たとえば、以下のような例に見られる。

語彙形式	語義
^poʔ, ^woʔ	チベット
^puu, ^wu	息子

この両者の形式が特別な環境を指定せずまったくの自由変異として個人の発話において現れるのは、チベット語方言の中でも大変まれな現象である。

これは、p-で始まるものはカムチベット語の形式、w-で始まるのはアムドチベット語の形式というように由来を異にし、それらが混在していると見ることができる。

l - t̪

この交替は現在のところわずかの例に限られる。その1つが「塔公」という固有名詞であり、Lhagang 方言において $\text{^la}^{\text{h}}\text{gã}$ と記述できるが、実際の発音は $[\text{la}^{55\text{h}}\text{gã}^{55}]$ のほかに $[\text{t̪a}^{55\text{h}}\text{gã}^{55}]$ といった発音も見受けられる。

この特徴は、隣接地域で話されるスタウ語と共通性が見られる。

4.15 Rangakha 方言（康定県新都橋鎮）

Rangakha 方言は康定県新都橋鎮東俄洛村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

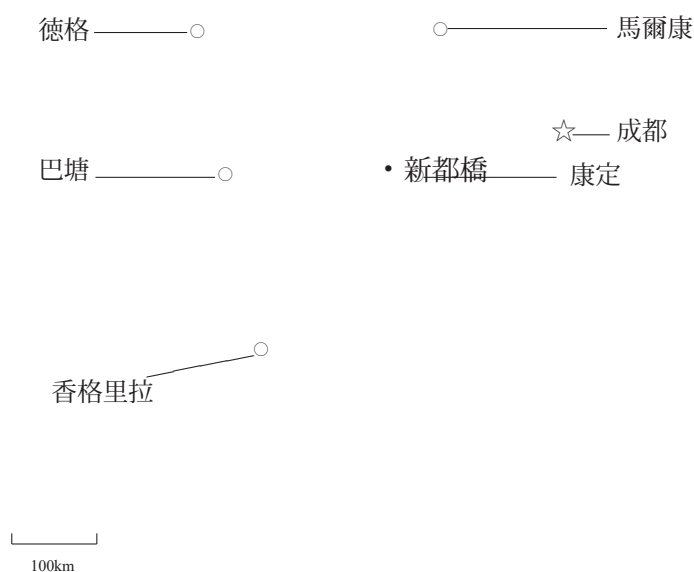


図 4.15: 康定県新都橋鎮の位置

新都橋鎮は營官区と東俄洛郷の行政中心地を併合してできたもので、東俄洛村は後者に対応する地域である。東俄洛村は川藏公路の分岐点に村の中心地が存在する。すなわちダルツェンド（康定）と徳格方面及び巴塘方面のいずれも通じる交通の要所である。古来よりムニャと呼ばれた地域の中央部に当たる。

4.15.1 音素一覧

超分節音 声調で2種が認められる

ˊ: 高

ˋ: 低

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i		ɯ	u
e	ə	θ	o
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t		k	q	ʔ
	有聲	b	d	d		g	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h			
	無声無気		ts		tɕ			
	有聲		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気	f ^h	s ^h	ʃ ^h	ç ^h	x ^h		
	無声無気		s	ʃ	ç	x		h
	有聲		z		ʒ	ɣ		ɦ
鼻音	有聲	m	n		ɳ	ŋ	ɴ	
	無聲	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥		
流音	有聲		l	r				
	無聲		l̥					
半母音	有聲	w			j			

4.15.2 方言特徴と具体例

4.15.2.1 母音

	通常母音例		長母音例
i	ˈni ma 太陽	ˌtɕi:	小便
e	ˌme 火	ˌhse:	金
ɛ	ˌtʰɛ pa 旱魃	ˌɕa ˌnɛ:	肌
a	ˌkʰa wa 雪	ˌma:	バター
ɑ	ˌhke ra ベルト	ˌla: pa 手	
ɔ	ˌlo pa 空気		
o	ˌto ko 洞窟	ˌpo:	チベット人
u	ˌmu pa 霧	ˌŋu:	銀
ɯ	ˌtɕʰɯ 水	ˌhɯ:	ガソリン
ə	ˌrə 山	ˌdɕə:	み年
ɵ	ˌpɛn bo ボン教		

4.15.2.2 単子音

pʰ : ˌpʰaʔ ぶた	tɕʰ : ˌtɕʰə 犬
p : ˌpɛi ma はすの花	tɕ : ˌhɕe: po 涼しい
b : ˌbõ ˌmbo 太い	dʒ : ˌdʒɯ ˌtsʰɛ: 原因
tʰ : ˌtʰa: ri: 遠い	ɸ : ˌɸu tsa どうがらし
t : ˌtoŋ 熊	sʰ : ˌsʰa: ma 硬い
d : ˌda fia 月	s : ˌsa 地
tʰ : ˌtʰõ 鋼	z : ˌzĩ: めのう
t : ˌtõ kʰu 狼	ɕʰ : ˌɕʰɯʔ po 裕福な
ɖ : ˌɖu ku ボタン	ɕ : ˌɕa wa 鹿
kʰ : ˌkʰõ ba 家	ʒ : ˌʒa 帽子
k : ˌkõ tɕi すずめ	ʂʰ :
g : ˌgo: 震える	ʂ : ˌkõ ʂu 靴下
qʰ : ˌqʰa ta カラス	xʰ :
q : ˌqã kʰo: 窓	x : ˌxã ˌzo ˌkʰɛ: 靴屋
ʔ : ˌʔo ʔo: 喉	ɣ : ˌʔo ɣo ˌpi sa 錐
tsʰ : ˌtsʰa 塩	h : ˌha ko 理解する
ts : ˌtsũm 閉じる	fi : ˌda fia 月
dʒ : ˌdze mo ˌdʒa: けんかする	m : ˌmə 人

m : ˈme fia あざ
n : ˈna wo 森
ŋ : ˈna tɕʰu 鼻水
ɲ : ˈna 魚
ɲ : ˈɲiː 心臓
ŋ : ˈŋaŋ ba がちょう
ɲ : ˈɲa mo 朝

n : ˈNaɪ 派遣する
l : ˈlo toʔ 穀物
l : ˈloʔ ta 学校
r : ˈru pa 骨
j : ˈjuː ジャスパー
w : ˈwa きつね

4.15.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

m : ˈmbu 虫
n : ˈndo po 醜い
ɲ : ˈɲdã mba ほほ
ŋ : ˈŋgo 頭
ɲ : ˈɲGaɪ 邪魔する
ɲ : ˈɲdzɯː ku 指
ɲ : ˈɲdzaː 虹
ɲ : ˈsʰoː ɲle のこぎり
ɲ : ˈɲpʰa ra ジャッカル
ɲ : ˈɲpuː 刺す

ɲ : ˈɲtʰõ 高い
ɲ : ˈɲteː 追いかける
ɲ : ˈɲtʰeː 横の
ɲ : ˈɲtẽ kə 適切な
ɲ : ˈɲkʰɛː ma 腎臓
ɲ : ˈɲtsʰe ma 双子
ɲ : ˈɲtɕʰũ 唇
ɲ : ˈɲsʰẽː 混ぜる
ɲ : ˈlaʔ ɲɕʰə 毛皮ジャケット
ɲ : ˈɲdõ mɕʰu 70

2. 前気音

h : ˈhpõː 草原
h : ˈhta 馬
h : ˈhta 髪
h : ˈhkõ mba 足
h : ˈhqaː 邪魔させる
h : ˈhtsa wa 草
h : ˈhtɕaː 鉄
h : ˈhseː 金

h : ˈhɕɛː 裂く
h : ˈhɕʰə la 外側
h : ˈhɕoː pa 羽
h : ˈhɲa 鼻
h : ˈhlaʔ はやぶさ
h : ˈhba lã 波
h : ˈhdõ pu 幹
h : ˈhdõː 羽毛

^hg : ʔgoʔ 鷹
^hdz : ʔdza mo がけ
^hdʒ : ʔdʒa: 背
^hz : ʔzẽ 豹
^hʒ : ʔʒə 4
^hm : ʔma ʔma 低い

^hn : ʔna 耳
^hɲ : ʔɲi: pa ひづめ
^hŋ : ʔŋu: tɕʰu 汗
^hl : ʔlɛ: pa 脳
^hr : ʔa ʔra 土ねずみ
^hj : ʔjar kʰa 夏

3. 両唇音

^ptɕ : ʔtɕa 鶏
^ɸt : ʔta: 検査する
^ɸt : ʔte wa 忙しい
^ɸk : ʔkaŋ ŋgo ʔce: 禁止する
^ɸq : ʔqa: かぶせる
^ɸts : ʔtsu: 挿入する

^ɸtɕʰ : ʔtɕʰaŋ ʔtsʰa: 拝む
^ɸtɕ : ʔtɕu 10
^ɸs : ʔsu 迎える
^wdʒ : ʔdʒɛ: 8
^wʒ : ʔtɕu: wze 14
^wl : ʔla ɕa 太もも

4. そり舌音

ʔt : ʔtɕʰo ʔte: 白塔

5. 軟口蓋音

^kt : ʔtõ mba 町

6. 声門閉鎖音

ʔɲ : ʔɲɛ: ci: くびき

ʔŋ : ʔŋõ le: シャツ

7. わたり音 (一部)

^{tʰ}r : ʔlam ʔri: 道案内する

^tr : ʔrĩ 雲

8. 3子音連続

$\overset{5}{\mathfrak{k}}\mathbf{h}\mathbf{r} : \overset{7}{\mathfrak{k}}\mathbf{h}\mathbf{ri} : \text{pa}$ 肝臟

$\mathbf{w}\mathbf{d}\mathbf{r} : \mathbf{w}\mathbf{d}\mathbf{ri} :$ 蛇

4.16 Grongsum 方言（雅江県祝桑郷）

Grongsum 方言は雅江県祝桑郷で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

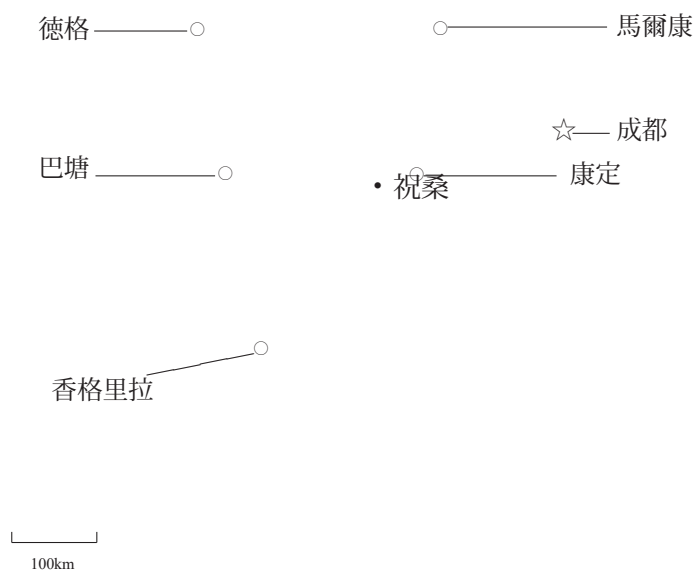


図 4.16: 雅江県祝桑郷の位置

祝桑郷は主要交通路から奥まった地域にあり、集落が広い地域に点在する。周辺は牧区であるが、地形は山がちである。

4.16.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	ɯ	ɯ	u
e	ə	ə	ɤ
ɛ			ɔ
a	ɐ		

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h , ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.16.2 方言特徴と具体例

4.16.2.1 特徴的な音素

ɣ : ʼlɣ 年

ɕʰ : ʼɕʰa 肉

ɕ : ʼɕa ni 妹

4.16.2.2 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

ᵐb : ʼᵐbu 虫

ᵐd : ʼᵐdə これ

ᵐd : ʼᵐdɛ 米

ᵐg : ʼᵐga ra 鍛冶屋

ᵐdz : ʼᵐdzu 指

ᵐdz : ʼᵐdzafi 虹

ᵐtʰ : ʼᵐtʰə bo 高い

ᵐkʰ : ʼᵐɕjã ᵐkʰu 狼

ᵐtsʰ : ʼᵐtsʰɣ 湖

ᵐtɕʰ : ʼᵐtɕʰa: rō 氷

ᵐɕʰ : ʼᵐɕʰɛ ma 箒

2. 前気音

ᵕp : ʼᵕpu 毛

ᵕt : ʼᵕta 馬

ᵕt : ʼᵕtɕj 雲

ᵕk : ʼᵕkeʔ 声

ᵕts : ʼᵕtsã pa ツアンパ

ᵕtɕ : ʼᵕtɕaʔ 鉄

ᵕs : ʼᵕsã mo きつい

ᵕɕ : ʼᵕɕi bo 酸っぱい

ᵕb : ʼᵕbɛ: ba 蛙

ᵕd : ʼᵕde 石

ᵕg : ʼᵕgu ni しあさって

ᵕdz : ʼᵕkə ᵕdzu 拳

ᵕdz : ʼra ᵕdzɣ つの

ᵕp : ʼᵕpᵕũ 子供

ᵕŋ : ʼᵕŋo 炒める

ᵕj : ʼᵕja 借りる

3. そり舌音

ʳdz : ʼwo ʳdzə 猫

4. わたり音 (一部)

ɕʰj : ɕʰja 鹿

ɕj : ʰɕja 鶏

mj : ˈmjǎ あざ

5. 3子音連続

ʷgɣ : ɳgɣɐ 頭

4.17 nDappa 方言（稻城県金珠鎮）

nDappa 方言は稻城県金珠鎮で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

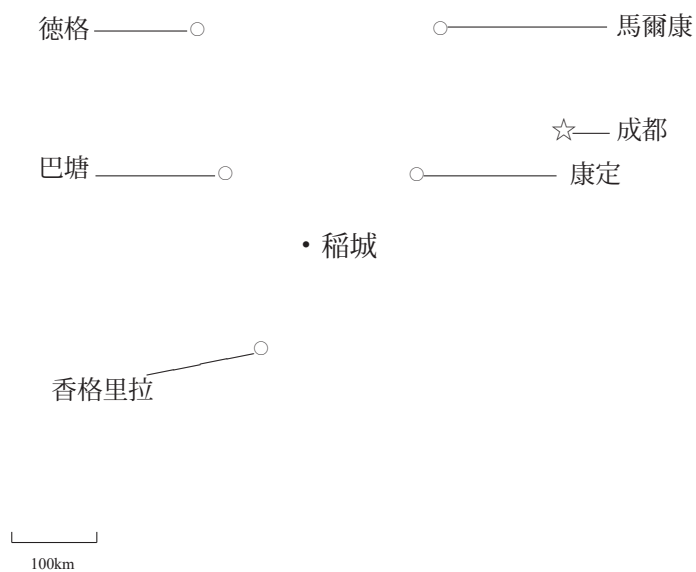


図 4.17: 稻城県金珠鎮の位置

交通路は通じているが、幹線道路（理塘-香格里拉）からは少し奥まった地域にある。

4.17.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	ɯ	ɯ	u
e	ə θ	ɤ	o
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	t ^h	k ^h	
	無気	p	t	t	t	k	ʔ
	有声	b	d	d	d	g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h , ɕ ^h	x ^h	
	無気		s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.17.2.1 母音

4.17.2.2 单子音

153

x^h : $\bar{x}^h o$ 肉
 x : $'x\gamma ru$ 以下
 γ : $'r\alpha \gamma \tilde{x}$ うさぎ
 h :
 f : $'f\gamma u: g\tilde{i}$ 鷹
 m : $'ma:$ バター
 m : $'mu?$ 霧
 n : $'n\tilde{a} ru?$ 森
 n : $'n\tilde{a}$ 鼻

η : $'\eta\alpha m\tilde{o}$ 太陽
 η : $'\eta\tilde{o}:$ 竹
 η : $\bar{\eta}u:$ 銀
 η : $\bar{\eta}\tilde{e}:$ 枕
 l : $'l\epsilon: ka$ 事情
 l : $\bar{l}o mo$ 女神
 r : $'r\alpha$ 山
 j : $'ju?$ 羊
 w : $'wo$ きつね

4.17.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

mb : $\bar{m}bu$ 虫
 nd : $'nda fio$ 月
 nd : $\bar{n}d\alpha$ めすヤク
 nd : $'nd\alpha:$ 虹
 ng : $\bar{n}gu$ 頭
 ndz : $'ndz\tilde{x}:$ ソ
 ndz : $\bar{n}e \bar{n}dz\alpha:$ 粘つく

$^mp^h$: $\bar{m}p^hi$ 捧げる
 $^nt^h$: $\bar{n}t^ho fu$ 高い
 $^nt^h$: $\bar{n}t^hi: po$ 胆嚢
 $^nt^h$: $'nt^ha: r\tilde{o}$ 氷
 $^nk^h$: $'nk^ha: nd\alpha$ しわ
 $^nts^h$: $\bar{n}ts^hi:$ 夜
 $^nt\epsilon^h$: $'nt\epsilon^ha? ta$ 寒い

2. 前気音

hp : $\bar{h}p\gamma w$ 皮
 ht : $\bar{h}to:$ 馬
 ht : $\bar{h}t\tilde{i}:$ 雲
 ht : $'ht\alpha?$ 鉄
 hk : $\bar{h}ka m\tilde{o}$ 星
 hts : $\bar{h}tso:$ 根
 $^ht\epsilon$: $\bar{h}t\epsilon\alpha: k^h\tilde{o}$ トイレ
 $^hs^h$: $\bar{h}s^he:$ 金
 hs : $'hsu?$ 生命

hb : $\bar{h}bu? bo$ ふいご
 hd : $\bar{h}du$ 石
 hd : $'hd\alpha:$ 仇
 hd : $\bar{h}d\tilde{a}: k^hu$ 緑の
 hg : $'hge hge:$ 先生
 hdz : $'hdz\tilde{a}: d\alpha$ 夕食
 hdz : $\bar{h}dz\alpha: po$ 筋肉
 hz : $'hzo fu$ 牧人
 hz : $'hz\alpha:$ 貼る

^hɣ : ^hɣi mi ki そのほか

^hm : ^hmō 傷口

^hn : ^hna 天

^hɲ : ^hɲiʔ 目

^hɲ : ^hɲu ts^ho 汗

^hl : ^hlū: 風

^hr : ^htə ^hri 孤児

^hw : ^hwi dzĩ 頭巾

^hj : ^hzō sa: ^hjoʔ 火葬

3. そり舌音

sx : ^hsxiʔ 木

4. わたり音 (一部)

ɣj : ^hɣjə 4

5. 3子音連続

^htj : ^htjo: へそ

^hgw : ^hgwā 卵

^hlj : ^hljā mbo 湿った

^ht^hj : ^ht^hjē 以上

^hkw : ^hkwā t^hā 歩行

4.18 Sagong 方言（郷城県沙貢郷）

Sagong 方言は郷城県沙貢郷で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

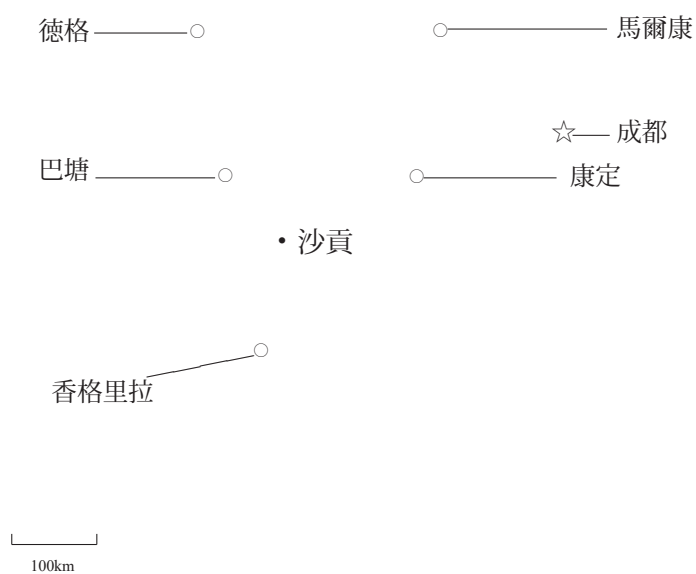


図 4.18: 郷城県沙貢郷の位置

沙貢郷は郷城県北部、理塘と香格里拉を結ぶ主要交通路上にある。
鈴木 (forthcoming-b) に概略の記述がある。

4.18.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	u	ɯ	u
e	ə	ɤ	o
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.18.2 方言特徴と具体例

4.18.2.1 母音

	通常母音例	鼻母音例
i	ᵐki zə 首	ˈnĩ 大麦
e	ˈreː 布	ˈsʰẽː 種
ɛ	ˈjaː kwɛ ブレスレット	ˈma ɕẽ のりづけする
a	ᵐna 天	ˈkə rã 家
ɑ	ˈtɑʔ 岩石	ᵐçã 靴
ɔ	ˈkʰɔː 雪	ˈwõː 乳
o	ᵐroʔ お供	ᵐlõ 風
u	ˈɕu ヨーグルト	ˈnũ ʰbo 凶悪な
ɯ	ˈsə ru 珊瑚	
ə	ˈrə 山	ˈmõ mɔ 多い
ʉ	ˈlʉ ʰpu 体	ᵐsũː 瑪瑙
ɵ	ᵐgɵʔ 鷹	ᵐõ 穂
ɤ	ᵐbɤ 虫	

4.18.2.2 単子音

pʰ : ᵐpʰaʔ ぶた	tɕʰ : ᵐtɕʰu 水
p : ˈpɤ 息子	tɕ : ˈtɕu 小麦
b : ᵐbã lĩ 竹笛	dʒ : ˈdʒa bu 王
tʰ : ᵐtʰuʔ 食糧	ɸ : ˈwoʔ ɸu ふくろう
t : ᵐte mɔ 担保	sʰ : ᵐsʰɔ 地
d : ˈdu 石	s : ˈsɔː 鶏
tʰ : ᵐtʰə 万	z : ᵐzaʔ ヤク
t : ˈtõ ʱgo 胸	ɕʰ : ᵐɕʰĩ 丸太
ɖ : ˈɖõː ハエ	ɕ : ˈɕu ヨーグルト
kʰ : ᵐkʰɔ 口	ʒ : ᵐʒeː 民謡
k : ˈka soʔ 裂け目	ʂʰ : ᵐʂʰĩ zu 大工
g : ˈgu rɔ 庭	ʂ : ᵐʂi mō 木
ʔ : ˈʔa ɖɔː リス	ɕ : ᵐçã 靴
tsʰ : ᵐtsʰiʔ 関節	xʰ : ᵐpʰaː xʰo ぶたの餌
ts : ᵐtsə 犬	x : ᵐxẽ sʰoʔ 以上
dʒ : ᵐdʒə guː ˈtɕʰõ アリ	ɣ : ᵐʔuʔ ɣəʔ 穴

h :	ṡ : ṡō mo 狂人
fi : ʼfiu ^h pa ガチヨウ	ŋ : ʼŋo 私
m : ʼmo wa めすぶた	ṡ : ṡi me 枕
m : ʼme jo あざ	l : ʼlaʔ pa 水平の
n : ʼna jĩ 耳	l : ʼluʔ 南
ṡ : ṡō 鼻	r : ʼro ヤギ
ŋ : ʼno mo: ʼmə ŋi とんぼ	j : ʼjoʔ 綿羊
ṡ : ʼṡō: 魚	w : ʼwu li 猫

4.18.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

ṡb : ʼṡbɣ 虫	ṡt : ʼgo ṡtō むかずく
ṡd : ʼda ke: 月	ṡtʰ : ʼtʰo te 横の
ṡd : ʼdoʔ 龍	ṡkʰ : ʼkʰe: pa 専門家
ṡg : ʼgō ṡgō gwe 曲がった	ṡtsʰ : ʼtsʰu 湖
ṡdz : ʼdzɛ: 指	ṡtʰeʰ : ʼtʰeʰi: po 肝臓
ṡdz : ʼdzɔ 虹	ṡsʰ : ʼsʰa mō 箒
ṡpʰ : ʼpʰo 派遣する	ṡdz : ʼdze: ma 美しい
ṡtʰ : ʼtʰɣ mō 高い	

2. 鼻音子音

mb : ʼmbɛ ʼfiō 燃える	ŋg : ʼna ŋgo 高いところ
nd : ʼndã ma ページ	ṡdz : ʼdzɔ: 握る
ŋd : ʼŋdɛ: 流れる	

3. 前気音

ṡp : ʼpɣ 毛	ṡts : ʼtsi mō 筋肉
ṡt : ʼti: 子馬	ṡtʰe : ʼtʰeō mō 柳
ṡt : ʼtĩ 雲	ṡsʰ : ʼsʰi 開ける
ṡk : ʼkafi fiō 星	ṡs : ʼse: 金

^hɕ : ʰɕeː mǎ 縦の
^hɕ : ʰɕɔ 編む
^hl : ʰlɔʔ fiə だます
^hl : ʰluʔ 竜神
^hb : ʰbǎ mǔ 太い
^hd : ʰdǔ 顔
^hq : ʰqɥ wɔ のみ

^hg : ʰgǔ ハリネズミ
^hdz : ʰdzǐ 池
^hʒ : ʰʒe 遅い
^hm : ʰma ʰdzi 傷
^hn : ʰnǔ はやぶさ
^hl : ʰlǔ 風
^hj : ʰjɥ fiə 肺

4. 両唇音

ʰs : ʰsǔ 狼

5. 声門閉鎖音

^ʔz : ʔza lǐ ʔza lǐ ju 再来年
^ʔn : ʔnǐ / ʔnǔ 夢

ʔj : ʔjaː tiʔ 左

6. わたり音（省略）

7. 3子音連続

^hgw : ʰgwɔ 頭
^hq̥w : ʰq̥wǎ mbo ほぼ
^hgw : ʰgwǎ 卵
^hmbj : ʰmbje ぬか

^hkw : ʰkwɔfi 疲れる
^hdj : ʰzǔ ʰdjeː つなぐ
^hdʒj : ʰdʒjǐ ʰno paː 粉をひく

4.19 gDongsum 方言（郷城県洞松郷）

gDongsum 方言は郷城県洞松郷で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

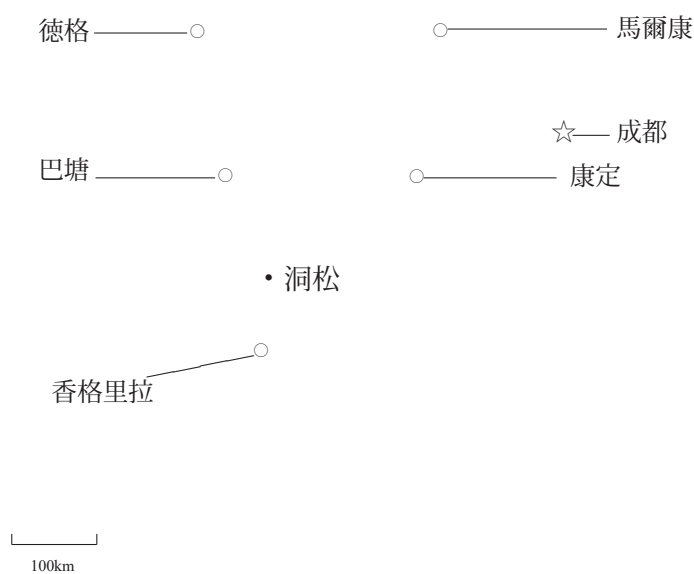


図 4.19: 郷城県洞松郷の位置

洞松郷は郷城県南部、理塘と香格里拉を結ぶ主要交通路からやや奥まったところにある。

鈴木 (forthcoming-b) に概略の記述がある。

4.19.1 音素一覧

超分節音 声調で5種が認められる

ˊ: 高平 ˈ: 上昇 ^: 上昇下降
 ˋ: 低平 ˋ: 下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i u
 e ə θ ɤ o
 ɛ ɔ
 a ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	l̥, r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.19.2 方言特徴と具体例

4.19.2.1 母音

通常母音例			鼻母音例	
i	ˈniʔ	火	ˈɕiŋ	畑
e	ˈme ɲge	あご	ˈsə dẽ	瑪瑙
ɛ	ˈtʰɛ ka	草木灰	ˈjã tẽ	学問
a	ˈnla wa	月	ˌnã	天
ɑ	ˈtɑʔ	岩	ˌnãʔ	鼻水
ɔ	ˌsʰɔ	地	ˌŋgõ	脊椎
o	ˈto:	煙	ˈpõ riʔ	少女
u	ˈjuʔ mɔ	がけ	ˈmũ ɲtʰu	黄銅
ui	ˌɲui:	銀	ˌnũ	油
ə	ˈsə tɕʰa	露	ˌtʰõŋ	雲
ɯ	ˌdɯ:	蛇	ˈtʰə ma tʰiʔ ˈkũ	伝承する
ø	ˈʔøʔ	光	ˌʔõ	敷く
ɤ	ˈbɔ lɤʔ	波	ˌmĩ mĩ	おじ

4.19.2.2 単子音

pʰ: ˌpʰaʔ	ぶた	tɕʰ: ˈtɕʰa rō	氷
p: ˈpi:	子牛	tɕ: ˌtɕi	小便
b: ˈbu:	牛毛テント	dʒ: ˈdʒa ru	経験
tʰ: ˈtʰiʔ	チーズケーキ	ɸ: ˈwoʔ ɸu	ふくろう
t: ˈte dɔ	鉄なべ	sʰ: ˌsʰe:	屁
d: ˈda: pa	主人	s: ˈsi:	鳥
tʰ: ˈtʰa ʰkə	細い	z: ˌzẽ	花椒
t: ˌtɔ:	髪	ɕʰ: ˌɕʰi	丸太
d: ˈdɔŋ	ハエ	ɕ: ˈɕɔ:	鹿
kʰ: ˌkʰɔ	口	ʒ: ˌzɛ:	民謡
k: ˌkə rə	青靱	ʂʰ: ˌʂʰoʔ	来る
g: ˈgõ dɯ	以下	ʂ: ˈʂi mō	木
ʔ: ˈʔoʔ roʔ	洞穴	ɕ: ˌɕɔ	神
tsʰ: ˈtsʰiʔ	関節	xʰ: ˌɲdɛ: xʰō	宿屋
ts: ˌtsə	犬	x: ˈxa ru	一生
dz: ˈdzə: pɔ	筋肉	ɣ: ˌtɕʰu ta ɣo	落花生

h : 'ha tɕ^he くしゃみする
 fi : 'fio ne このような
 m : m̄aŋi m̄o 低い
 m̄ : m̄ē 薬
 n : 'nĩ 大麦
 n̄ : n̄o 鼻
 n̄ : 'ni? 目
 n̄ : n̄ĩ 心臓

ŋ : 'ŋo 私
 ŋ̄ : ŋ̄i^hge 枕
 l : l̄o 魂
 l̄ : l̄u: m̄o にせの
 r : 'rɔ 山羊
 j : 'jã 道
 w : 'wo きつね

4.19.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : m̄bã 結ぶ
ⁿd : n̄do 弓
ⁿɖ : n̄do? 雷
^ŋg : t̄c̄ē ŋgo 生姜
ⁿdz : 'ndzə m̄o 橋
ⁿdz̄ : n̄dz̄o 虹
ⁿl : 'nla wa 月
ⁿɭ : 'nĩ n̄la? 発酵する
^mp : m̄po? 降る
ⁿt^h : 'n̄t^ha ma 高い
ⁿt : n̄la 'n̄tē 追いかける

^{n̄}t^h : ^n̄t^hu: n̄t̄c^ho: 機械
^{n̄}k^h : n̄k^he 氷が張る
^{n̄}ts^h : n̄ts^hə rə 双子
^{n̄}ts : n̄tsə? 植える
^{n̄}t̄c^h : 'n̄t̄c^hō mb̄o 肝臓
^{n̄}s^h : 'n̄t̄c^ha: 'n̄s^hɛ po 適当な
^{n̄}ɕ^h : 'h̄kɛ: n̄ɕ^hu 声
^{n̄}l̄ : n̄l̄a 'n̄tē 追いかける
^mdz : 'm̄dze: ma 美しい

2. 鼻音子音

^mb : m̄ba? 背
ⁿd : n̄do? k̄o 色
ⁿɖ : 'n̄ɖu po 牧区

ⁿdz : n̄ndza: zə 粘つく
^{n̄}dz̄ : n̄ndz̄ə 握る

3. 前気音

^hp : t̄pɕ 毛
^ht : t̄to: 馬

^ht : t̄to: 怖がらせる
^hk : t̄ki: zə 首

^hts : ^htsa zə 根
^htɕ : ^htɕi? 1
^hs^h : ^hs^hi 開ける
^hs : ^hso: ma 涼しい
^hɕ : ^hɕa? 叩き切る
^hl : ^hlo? 倒す
^hb : ^hbō ma 太い
^hd : ^hde ニュース
^hɖ : ^hɖə s^ho? 外
^hg : ^hgo fio にんにく

^hdz : ^hdza wō ポット
^hz : ^hzu k^hɔŋ 工場
^hʒ : ^hʒu: 擦る
^hm : ^hma k^hɔ 傷口
^hɲ : ^hɲə? gu s̄ā 眠たい
^hl : ^hlō 風
^hr : ^htə ^hri 孤児
^hw : ^hmə: ^hwi: 腹が張る

4. 両唇音

^ɸts : ^ɸtsɛ: 探す
^ɸtɕ : ^ɸtɕɯ 洗う

^wʒ : ^wʒɛ 剃る

5. 軟口蓋音

^ktɕ : ^ktɕa ナイフ

6. 声門閉鎖音

^ʔn : ^ʔna gwaj イヤリング
^ʔɲ : ^ʔɲō 夢

^ʔj : ^ʔjō se po みかん

7. わたり音

^{tw} : ^ʔlu two 穀物
^{kw} : ^ʔsu kwa 酢
^{gw} : ^ʔta: gwɔ 胡桃
^{xw} : ^ʔxwa 咲く
^{mw} : ^ʔsə mwō ka le? ちょうちょ
^{nw} : ^ʔnə nwa: jō 集合する

^{lw} : ^ʔbɛ lwa 蛙
^{zj} : ^ʔzjē 袈裟
^{mj} : ^ʔmje: s^hō 傷つける
^{ɲj} : ^ʔɲjɛ: ma 甘い

8. 3子音連続

^ɳgw : ^ʔgwa 頭
^ɳgw : ^ʔɲō ɳgwa 曲がる
^hbw : ^ʔa ^hdʒe? ^hbwə カメムシ

^hdʒw : ^ʔdʒwo: 蚤
^hkw : ^ʔzə ^hkwa: 縮む

^htsw : [¬]h^tswo 草

ⁿdzj : [¬]dzje: 小麦粉

^hgw : ^hgwã 卵

^hkj : ^hkjeʔ 声

ⁿdj : ^hndjeʔ 伝染する

^hnj : ^hhə ^hnjẽ 押さえる

4.20 Ragwo 方言（郷城県然烏郷）

Ragwo 方言は郷城県然烏郷で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

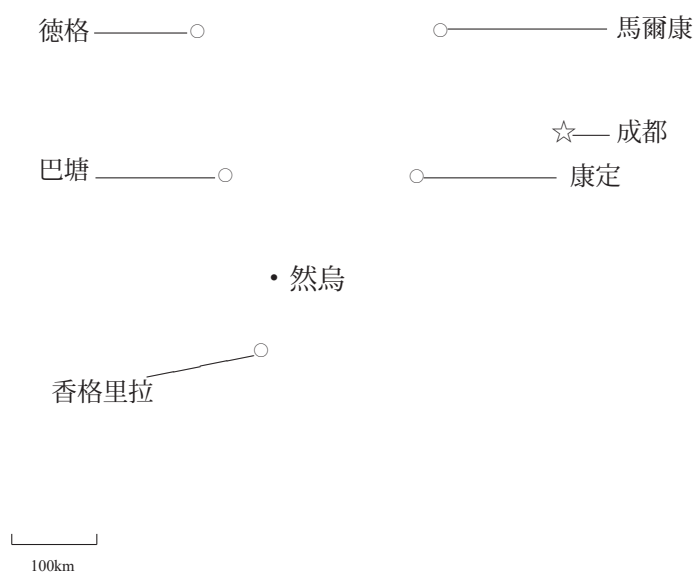


図 4.20: 郷城県然烏郷の位置

然烏郷は郷城県南部、理塘と香格里拉を結ぶ主要交通路上にある。
鈴木 (forthcoming-b) に概略の記述がある。

4.20.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	u	ɯ	u
e	ə	θ	ɤ
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h		
	無気	ɸ	s	ɬ	ɕ, ɕ		h
	有声		z		ʑ		ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音		w			j		

4.20.2 方言特徴と具体例

4.20.2.1 母音

通常母音例		鼻母音例	
i	ˈni	火	ˈdzĩ 湖
e	ˈsʰe:	光	ˈtɕʰu tʰẽ 湯
ɛ	ˈsɛ:	金	ˈŋɛj tɕi 朝食
a	ˈtɕʰa wɔ	雨	ˈŋgwã 卵
ɑ	ˈna raʔ	森	ˈtʰã 平原
ɔ	ˈsʰɔ	泥	ˈwɔ: 乳
o	ˈto wɔ	煙	ˈdzõ 町
u	ˈmuʔ	霜	ˈũ 2
u	ˈnu	天	
ə	ˈlɔ ka	月	ˈtɕ 雲
ɤ	ˈna wa ˈtu: nɔ	上旬	ˈnũ: 耳
ø	ˈçøʔ çøʔ	ゆるい	ˈsʰø: 種
ɤ	ˈpɤ	毛	

4.20.2.2 単子音

pʰ: ˈpʰaʔ ぶた	tɕʰ: ˈtɕʰu 水
p: ˈpøʔ チベット人	tɕ: ˈtɕũ ロバ
b: ˈbuʔ 空気	dz: ˈdzo li ボタン
tʰ: ˈtʰoʔ 食料	ɸ: ˈwoʔ ɸu ふくろう
t: ˈtõ qa 千	sʰ: ˈsʰa pa モンゴル族
d: ˈdu 石	s: ˈso fiã 砂
tʰ: ˈtʰa fiã 細い	z: ˈze jõ 花椒
t: ˈtu tɕʰo: 大麦	ɕʰ: ˈɕʰɔ 肉
ɖ: ˈɖu: 蛇	ɕ: ˈɕu: rɔ 下の方
kʰ: ˈkʰa: ma 桃	ʒ: ˈʒi: fiã 遅い
k: ˈkə tsoʔ 近い	ʃ:
g: ˈgõ ˈdzə 背	ç: ˈçaʔ 鷹
ʔ: ˈʔu raʔ 洞穴	h:
tsʰ: ˈtsʰũ: 孫娘	fi: ˈfiu: zo がちょう
ts: ˈtsõ ˈdo 尻	m: ˈme: バター
dz: ˈdza mõ ズボン	m: ˈmuʔ wa 霧

n : 'nə ba 宝石

n̥ : n̥o 鼻

n̥ : n̥i? 目

n̥ : n̥ĩ 心臓

ŋ : 'ŋo 私

ŋ̊ : 'ŋ̊ō 緑の

l : 'li: tsə 襟

l̥ : l̥u zo? 南

r : 'rə 山

r̥ : r̥ə tʰu 肩

j : 'jo fia 手

w : 'wo? φu ふくろう

4.20.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ^mbɤ 虫

ⁿd : ⁿda ŋā 葉

ⁿd̥ : ⁿd̥o? pa 牧区

^ŋg : ^ŋgo me? はげた

ⁿdz : ⁿdzɯ? 親指

ⁿdz̥ : ⁿdz̥a 虹

ⁿl : ⁿlə ka 月

ⁿtʰ : ⁿtʰa wə 厚い

ⁿtsʰ : ⁿtsʰu 湖

ⁿtɕʰ : ⁿtɕʰə mō 胃

2. 前気音

^hp : ^hpa fiu 英雄

^ht : ^htə 馬

^ht̥ : ^ht̥ō 雲

^hk : ^hkə: wō 星

^hts : ^htsa ^hdzɯ 根

^htɕ : ^htɕə? 鉄

^hl : ^hlə ma やせた

^hb : ^hbə lu? 波

^hd : ^hdĩ 7

^hg : ^hgũ ŋə 冬

^hdz : ^hdzĩ 池

^hdz̥ : ^hma ^hdze しみ

^hm : ^hma ^hdze しみ

^hl̥ : ^hl̥ə? po 脳

^hj : ^hja kə 夏

3. 両唇音

^wl : ^wlō 風

4. わたり音 (省略)

5. 3子音連続

^hkw : ^hkwɔː 溝

^ŋgw : ^ŋgwã 卵

^ŋgw : ^ŋgwa 頭

^ŋtʰj : ^ŋtʰjə ɸo 高い

4.21 Rwata 方言（郷城県熱打郷）

Rwata 方言は郷城県熱打郷で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

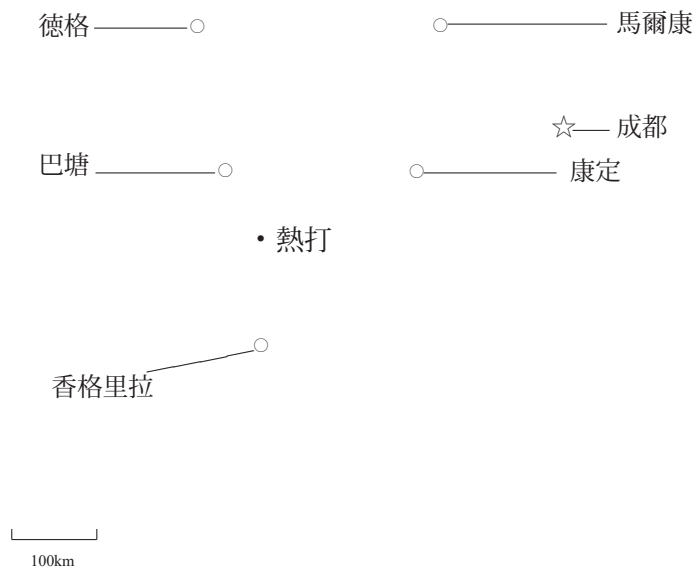


図 4.21: 郷城県熱打郷の位置

熱打郷は郷城県北西部、郷城県県城と得榮県県城を結ぶ交通路上にある。
鈴木 (forthcoming-b) に概略の記述がある。

4.21.1 音素一覧

超分節音 声調で5種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˆ: 上昇下降
 ˋ: 低平 ˋ: 下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	u	ɯ	u
e	ə	ə	ɤ
ɛ			ɔ
a			ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有気	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有気		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h		
	無気	ɸ, f	s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有気		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有気	m	n	ɳ	ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有気		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.21.2 方言特徴と具体例

4.21.2.1 母音

通常母音例			鼻母音例	
i	`ŋi?	目	ĩ	銀
e	ˈpe:?	チベット	ˈtẽ ⁿ dzə	ずる賢い
ɛ	ĩjɛ: fiõ	甘い	ĩmẽ ^m bɔ	医者
a	ĩd̥a	さび	ĩnã	天
ɑ	ˈra?	銅	ˈpã za	霜
ɔ	ĩzɔ	流星	ˈh̥l̥ɔ pɔ	蒸気
o	ˈhso?	命	ˈtõ	村
u	ˈgu rɔ	庭	ˈjũ ^m bɔ	谷
ʊ	ˈzu fiɔ	農区	ˈzũ ba:?	担ぐ
ə	ˈrə	山	ˈnõ	火
ʉ	ˈlʉ: pɔ	体	ˈn̥d̥ũ ^m bɔ	牛皮繩
ø	ˈwø?	光	ˈs̥h̥õ:	種
ɤ	ˈpɤ	息子		

4.21.2.2 単子音

p ^h : p ^h ɑ?	ぶた	tɕ ^h : ˈtɕ ^h ɛ fiõ	雨
p : ˈpo fiɔ	めす牛	tɕ : t̥ɕu:	口バ
b : ˈbi: wɔ	蛙	dʒ : ˈdʒi? pɤ	重い
t ^h : ˈt ^h o nõ	短い	Φ :	
t : ˈtõ	熊	f :	
d : ˈdʉ tɕ ^h ẽ:	祭り	s ^h : ˈs̥h̥ʉ ta	炭
t̥ ^h : t̥ ^h ɑ?	血	s : ˈsu wã	砂
t : ˈtʉ:	ラバ	z : ˈzi?	豹
d̥ : d̥ʉ:	蛇	ɕ ^h : ɕ ^h ĩ	薪
k ^h : ˈk̥ɤ?	針	ɕ : ɕu:	紙
k : ˈke fiõ	窓	ʒ : ˈʒu?	方向
g : ˈgĩ	ぶどう	ʂ ^h : ˈʂ ^h ə dõ n̥ə	死んだ
? : ˈʔa rĩ	今日	ʂ : ˈʂu	混ぜる
ts ^h : ˈts̥h̥a wu	孫	ɕ : ˈɕø? fie	ゆるい
ts : ˈtsə	犬	x : ɕ ^h i? xi?	整列する
dz : ˈdzɔ kɔ rɔ	クモ	γ :	

h : ʰa ko 理解する

fi : ʱjɛ: fið 甘い

m : ʰmɤ 虫

m : ʰmẽ 薬

n : ʰnã 森

n : ʱnõ 鼻

ŋ : ʰŋə ndo 弾

ŋ : ʰŋĩ wõ 魚

ŋ : ʱnõ: 竹

ŋ : ʰŋo 私

ŋ : ʰŋẽ mbi 枕

l : ʰle? le? 平たい

l : ʰle? 着く

r : ʰrə ku 山羊

j : ʰjo? 綿羊

w : ʱwõ tɕʰo 権力

4.21.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

mb : ʰmbe: 抜く

nd : ʰnda wõ 月

nd : ʱndi: 米

ng : ʰgo re: スカーフ

dz : ʰdzə mbo 橋

dz : ʱdzə mō つるつるの

l : ʰla ma 葉

pʰ : ʱpʰe mʰe ji 凸の

tʰ : ʰtʰu mã 高い

tʰ : ʰtʰu tɕʰo: 機械

kʰ : ʰkʰẽ la 腎臓

tsʰ : ʰtsʰu 湖

tɕʰ : ʰtɕʰa? qõ ki 氷

sʰ : ʰsʰa mō 箒

2. 鼻音子音

mb : ʱmbẽ 的

nd : ʰŋə ndo 弾

3. 前気音

pʰ : ʰpʰe: 琥珀

tʰ : ʰtʰõ ʱgo 秋

tʰ : ʰtʰẽj 雲

kʰ : ʰke? 声

tsʰ : ʰtsẽ 裁断する

tɕʰ : ʰtɕa? 鉄

sʰ : ʰso? 命

ɕʰ : ʰɕo 織る

lʰ : ʰlõ po 蒸気

bʰ : ʰbũ 抱く

dʰ : ʰdũ: 愛する

dʰ : ʰda さび

^hg : ^hgõ 夕食

^hdz : ^hdzeʔ 8

^hdʒ : ^hdʒəwɔ 蚤

^hn : ^hna jo イヤリング

^hj : ^hjɣ mo 肺

4. 口腔内調音子音

^ht : ^htaʔ がけ

^hz : ^hgo ^hzu 仕立て屋

^hl : ^hla mō ラマ

^hɕ : ^hɕi: 掘る

^hf : ^hfi: 孵る

5. 声門閉鎖音

^hj : ^hja: ^hdzoʔ dzo 左

6. わたり音

^hk^hw : ^hk^hwɔ 口

^hg^hw : ^hg^hwō 背

^htɕ^hw : ^hsu ji tɕ^hwa 雀

^hɕ^hw : ^hɕwɔ 鹿

^hɣ^hw : ^hs^hə t^ha ɣwɔ 落花生

^hŋ^hw : ^hŋwɔ 5

^hrw : ^hrwɔ 角 (つの)

7. 3 子音連続

^hg^hw : ^hg^hwɔ 頭

^ht^hw : ^ht^hwɔ 髪

^hdʒ^hj : ^hdʒ^hjē 小麦粉

^ht^hj : ^ht^hjē 引く

^htj : ^htje: 与える

^hlw : ^hlwɔ 靈魂

^hg^hw : ^hg^hwɔʔ 笑う

4.22 sDerong 方言（得榮県松麦鎮）

sDerong 方言は得榮県松麦鎮で用いられる。分布位置の略図は以下のようなものである。

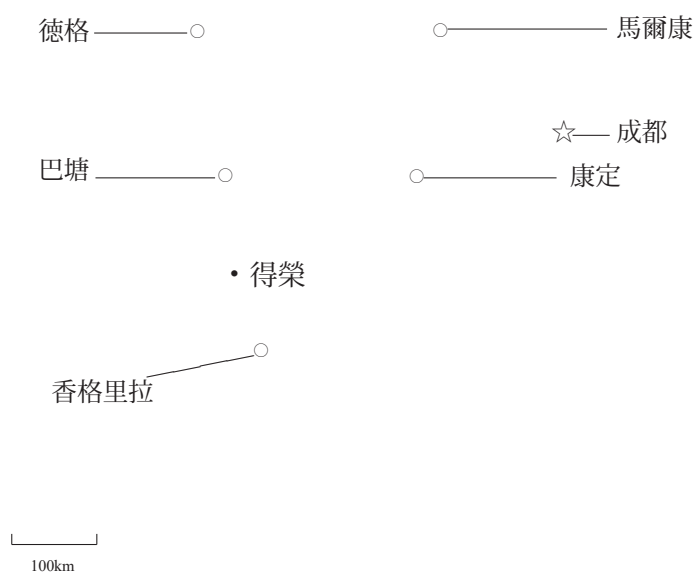


図 4.22: 得榮県松麦鎮の位置

得榮県は甘孜州に属しているが迪慶州とのつながりが深く、現在の交流は東に位置する郷城県とよりも多い。県北部は以前は巴塘県に属していたが、松麦鎮はそこに含まれていない。

4.22.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	ɯ	ɯ	u
e	ə θ	ɤ	o
ɛ		ɔ	
a		ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ	x	h
	有声		z		ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.22.2 方言特徴と具体例

4.22.2.1 特徴的な音素

特別に見られる音素なし

4.22.2.2 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

${}^m\mathbf{b}$: ${}^m\mathbf{bu}$ 虫	${}^n\mathbf{t}^h$: ${}^n\mathbf{t}^h\mathfrak{o} \mathfrak{t}\mathfrak{c}^h\mathfrak{e}$: 親指
${}^n\mathbf{d}$: ${}^h\mathbf{ka}$: ${}^n\mathbf{dar}$ 流星	${}^{\hat{n}}\mathbf{t}^h$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{t}^h\mathfrak{o}$: $\mathbf{pa}$ 胆嚢
${}^n\mathbf{d}$: ${}^n\mathbf{d}\mathfrak{o}$ めすヤク	${}^{\hat{n}}\mathbf{k}^h$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{k}^h\mathfrak{e}$ $\mathbf{w\ddot{a}}$ 腎臓
${}^n\mathbf{g}$: ${}^n\mathbf{ga}$: $\mathbf{wa}$ 鍛冶屋	${}^n\mathbf{ts}^h$: ${}^n\mathbf{ts}^h\mathfrak{o}$ $\mathbf{m\ddot{a}}$ 双子
${}^n\mathbf{dz}$: ${}^n\mathbf{dz}\mathfrak{o}$: めすゾ	${}^{\hat{n}}\mathbf{t}\mathfrak{c}^h$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{t}\mathfrak{c}^h\mathbf{u}$ $\mathbf{pa}$ 唇
${}^n\mathbf{dz}$: ${}^n\mathbf{dza}$ $\mathbf{ts}^h\mathbf{un}$ 虹	$\mathbf{nd}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{nd\ddot{a}n}$ $\mathbf{pa}$ 泥
${}^m\mathbf{p}^h$: ${}^m\mathbf{p}^h\mathbf{ar}$ ジャツカル	

2. 前気音

${}^h\mathbf{p}$: ${}^h\mathbf{pu}$ 毛	${}^{\hat{n}}\mathbf{g}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{g}\mathfrak{a}$: 背
${}^h\mathbf{t}$: ${}^h\mathbf{ta}$ 馬	${}^{\hat{n}}\mathbf{dz}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{dz}\mathfrak{o}$ $\mathbf{m\ddot{a}}$ 眉毛
${}^h\mathbf{t}$: ${}^h\mathbf{t}\mathfrak{a}$ 髪	${}^{\hat{n}}\mathbf{dz}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{m\ddot{a}}$ ${}^{\hat{n}}\mathbf{dz}\mathfrak{i}$ 料理人
${}^h\mathbf{k}$: ${}^h\mathbf{k}\mathfrak{x}$ 首	${}^{\hat{n}}\mathbf{z}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{zo}$ $\mathbf{wu}$ 大工
${}^h\mathbf{ts}$: ${}^h\mathbf{ts}\mathfrak{a}$ 草	${}^{\hat{n}}\mathbf{m}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{m\ddot{a}}$: $\mathbf{k}^h\mathbf{a}$ 傷口
${}^h\mathbf{t}\mathfrak{c}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{t}\mathfrak{c}\mathfrak{a}n$ 野口バ	${}^{\hat{n}}\mathbf{n}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{na}$? 膿
${}^h\mathbf{s}$: ${}^h\mathbf{se}$: 金	${}^{\hat{n}}\mathbf{n}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{a}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{i}$ 子供
${}^h\mathbf{l}$: ${}^h\mathbf{l}\mathfrak{o}$? $\mathbf{re}$: 辜丸	${}^{\hat{n}}\mathbf{n}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{n}\mathfrak{x}$: 銀
${}^{\hat{n}}\mathbf{b}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{bi}$: $\mathbf{pa}$ 蛙	${}^{\hat{n}}\mathbf{l}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{l}\mathfrak{e}$? $\mathbf{pa}$ 脳
${}^{\hat{n}}\mathbf{d}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{d}\mathfrak{x}$: 埃	${}^{\hat{n}}\mathbf{j}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{j}\mathfrak{a}$? ヤク
${}^{\hat{n}}\mathbf{d}$: ${}^{\hat{n}}\mathbf{d}\mathfrak{x}$ 蛇	

3. 両唇音

$\Phi\mathfrak{c}^h$: ${}^h\mathbf{k}^h\mathbf{a}$ $\Phi\mathfrak{c}^h\mathbf{o}$ 口唇裂	$\mathbf{w}\mathbf{l}$: ${}^w\mathbf{la}$ $\mathbf{wa}$ 月
--	--

4. そり舌音

^ʳt : k^ha^ʳta 荷馬

^ʳd : ^ˈte : ^ʳdor 鉾石

^ʳts^h : ^ˈk^hu^ʳts^hu 拳

^ʳts : ^ˈla^ʳtse 麝香

^ʳtɕ : ^ˈpa^ʳtɕaʔ 牛糞

^ʳm : ^ˈŋgo^ʳmɛm 禿げの人

^ʳɲ : ^ˈs^hwo^ʳɲiŋ 齒莖

5. わたり音（省略）

6. 3子音連続

^ˈts^hw : ^ˈts^hwo 湖

^ˈdw : ^ˈdwo 石

^ˈgw : ^ˈgwo 頭

^ˈdzw : ^ˈdzwo ソ

^ˈtɕj : ^ˈtɕje 舌

4.23 rGyalthang 方言（香格里拉県大中甸郷）

rGyalthang 方言は香格里拉県大中甸郷従古龍村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

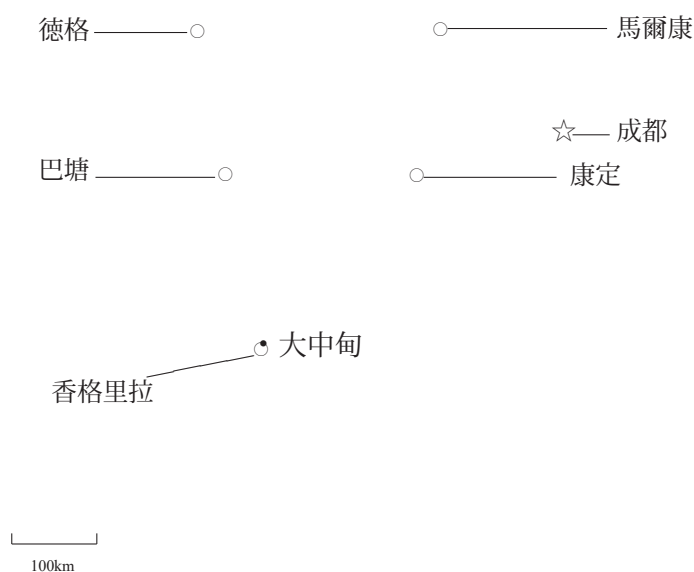


図 4.23: 香格里拉県大中甸郷の位置

従古龍村は香格里拉県県城に程近い地域に位置している。古来よりの香格里拉県の中心地「古城」とはやや異なる村の形成となっている。従古龍村は松贊林寺のふもとにある村で、香格里拉県各地の出身の人々（ラマもしくは巡礼者）との交流が激しい。現在は観光地化され、漢化も進んでいる。

先行研究では「古城」すなわち建塘鎮の言語が扱われ、Hongladarom (1996) や Wang Xiaosong (1996)、《雲南省誌》編纂委員會 (1998) が記述している。この言語と本節で扱う rGyalthang 方言は、その言語特徴から別の変種と見られる。これについては別に検討を要する。

4.23.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

ɭ	i	ɯ	ɯ	u
e	ə	ə	ɤ	o
ɛ			ɔ	
a			ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	c ^h	k ^h	
	無気	p	t	t	c	k	ʔ
	有声	b	d	d	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tɕ ^h	tɕ ^h		
	無気		ts	tɕ	tɕ		
	有声		dz	dʑ	dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ɕ ^h	ɕ ^h		
	無気	ɸ, f	s	ɕ	ɕ	x	h
	有声		z	ʑ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音		w			j		

4.23.2.1 母音

4.23.2.2 单字音

183

ʦʰ : ʦʰõ nə 強盗

ʦ : ʦã nō 乞食

ʦ : ʦuʔ 蛇

ʦʰ : ʦʰə 死ぬ

ʦ : ʦěj 地

ʦ : ʦl 剃る

x : ʰxa ʰdʰ 鬼

ɣ : ʰɣõ 参加する

h : ʰha ko 理解する

fɪ : ʰsa fieʔ 耕す

m : ʰma ja 孔雀

m : ʰmɛ インク

n : ʰna: 青い靛

n : ʰnã 鼻

n : ʰna 魚

n : ʰnĩ 心臓

n : ʰni: 銀

n : ʰñẽ ʰpõ 枕

l : ʰloʔ 羊

l : ʰlã 靴

r : ʰrə gõ うさぎ

r : ʰri: 裂く

j : ʰjo: 眠る

w : ʰwu je 祭り

4.23.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

mʰ : ʰmbu 虫

nʰ : ʰnda wa 月

nʰ : ʰndu 見る

nʰ : ʰgo lu ji はげ頭

nʰ : ʰdzĩ: 指

nʰ : ʰdzoʔ 氷

mʰ : ʰgwa mʰoʔ 穴を開ける

mʰ : ʰpuʔ 吹く

nʰ : ʰtʰoʔ ba 厚い

nʰ : ʰtoʔ 撒く

nʰ : ʰtsʰõ ʰcʰoʔ 商売する

nʰ : ʰkʰu ʰkʰa あの辺

nʰ : ʰtʰsʰu ʰpje 唇

nʰ : ʰtʰsajʔ 噛む

nʰ : ʰtʰcʰũ ruʔ 脇

mʰ : ʰmʰə 火

2. 前気音

hʰ : ʰpu 毛

hʰ : ʰtuʔ 虎

hʰ : ʰka wã 星

hʰ : ʰtsĩ ʰdzĩ: 中指

hʰ : ʰtʰsaʔ 鉄

hʰ : ʰtʰca: 髪

hʰ : ʰsɪ 金

hʰ : ʰcʰə 開ける

hʰ : ʰtʰeo: ʰcʰaʔ 数える

^hl : ^hla 編む
^hb : ^hbõ dã ミツバチ
^hd : ^hde mo 草地
^hq : ^hqi? ba 重い
^hg : ^hgã ru? 背
^hdz : ^hdzõ 町
^hdz : ^hdzɛ: ^hbə 皇帝
^hz : ^hzə ^hpu 眉毛
^hz : ^hzə 4

^hz : ^hzõ 学ぶ
^hm : ^hma? nə 軍人
^hn : ^hnə wã 嫁
^hŋ : ^hŋĩ ma 古い
^hŋ : ^hŋu: ẽĩ 甘い
^hl : ^hlã 風
^hw : ^hbi ^hwa 蛙
^hj : ^hje wã 胡椒

3. 両唇音

^pt : ^pti? 拭く
^pts : ^pʔa ^ptsu ひげ
^ptʂ : ^pŋə ^ptʂu 50
^ptɕ : ^ptɕa? 挙げる
^ɸʂ : ^ɸʂɛ? 話す
^ɸɕ : ^ɸko ^ɸci ^ɸda: po はっきりした
^ɸr : ^ɸri: 裂く

^wdʂ : ^wdʂɛ? 8
^wz : ^wlə ma ラマ
^wz : ^wzõ 学ぶ
^wl : ^wʔtsu: ^wzə 14
^pr : ^pri: 裂く

4. 歯茎音

^hh : ^hnu ^hha 簡単な

5. わたり音 (省略)

6. 3子音連続

ⁿt^hw : ^hgwo ⁿt^hwe t^hi 頭の狂った
^hdw : ^hdwə 石
^hkw : ^hkwə 掘る
^hgw : ^hgwa 溝
ⁿgw : ⁿgwa 頭
^htsw : ^htswa 草
^hsw : ^hswə 飼う
^hpj : ^htʂ^hu ^hpje 唇

^htj : ^htja: へそ
^hdj : ^hdje dʒi: 居住する
^hlj : ^hljo? 教える
^mp^hj : ^mp^hje? 話す
^mbj : ⁿdã ^mbje? 泥
ⁿdj : ^{re} ⁿdje? 成長する

4.23.3 補足

いくつかの注目すべき異音、異形態がある。

1. /c^h, c, ʃ/の自由変異音

広く観察される音価は硬口蓋音 [c] であるが、それと前部硬口蓋音 [tʃ] の両方を自由変異としてもつ話者がいる。

2. tɕ^h - ɕ^h

いくつかの語についてこの変異を有する話者がいる。たとえば「あなた」 tɕ^hoʔ - ɕ^hoʔ など。

3. 初頭子音が両唇音の子音連続は、それぞれ変異として前気音と交替することが許容される。

4.24 Nyishe 方言（香格里拉県尼西郷）

Nyishe 方言は香格里拉県尼西郷湯満村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

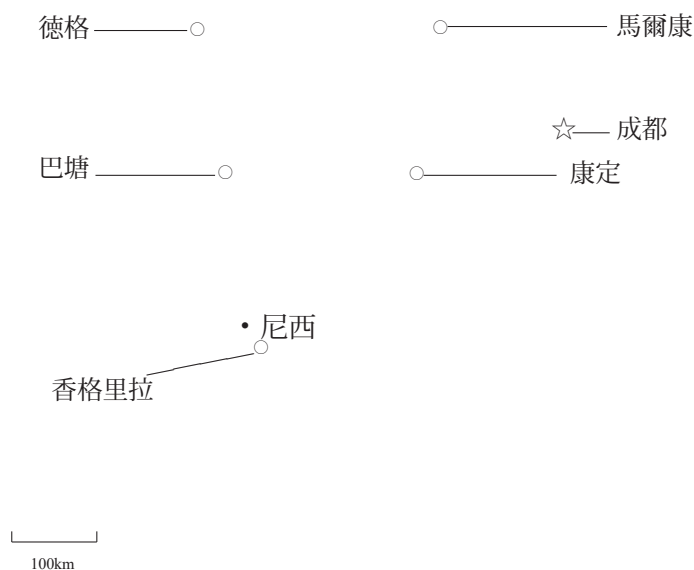


図 4.24: 香格里拉県尼西郷の位置

尼西郷は雲南とチベットを結ぶ滇藏公路上に位置しているが、湯満村はやや奥まった地域にある。

4.24.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平

ˊ: 上昇

ˋ: 下降

ˆ: 上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

ɿ/ʅ	i	ʉ	ɯ	u
	e	ə	ɤ	o
	ɛ		ɔ	
	a	ɑ		

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h		
	無気		ts	tʂ	tɕ		
	有声		dz	dʒ	dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h	x ^h	
	無気	f	s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有声		z	ʒ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音		w			j		

4.24.2 方言特徴と具体例

4.24.2.1 特徴的な音素

ɿ/ʅ : ˉsɿ 金

ʌ : ˈnʌ 氷

ɕ : ˆɕeʔ ɕeʔ 水平の

4.24.2.2 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

^mb : ˈmbʌ lo 車輪

ⁿd : ˈndə zɛː 傲慢な

ⁿdʑ : ˈndʑɛː raʔ 農民

^ŋg : ˈŋgi 米

ⁿdz : ˈndzeː 指

ⁿdʑ : ˈndʑuʔ p^ha 後ろ

ⁿt^h : ˈnt^hoʔ pa 厚い

ⁿk^h : ˈŋiⁿ ʔk^ha 前

ⁿts^h : ˈnts^ho 湖

ⁿtɕ^h : ˈntɕ^hu ˈdu 唇

^mn : ˈʔa naw^m ne 私たち2人

^mɲ : ˈmɲə 火

^mŋ : ˈmŋãn po 甘い

2. 前気音

^hp : ˈhpui 毛

^ht : ˈhtaʔ 虎

^hk : ˈhkũ ma 足

^hts : ˈhtsə ˈdʑu 根

^htɕ : ˈhtɕĩ 小便

^htɕ : ˈhtɕa 髪

^hf : ˈhfaʔ 光

^hs^h : ˈhs^haʔ 熱い

^hɕ : ˈhɕi mã ˈkə lɿ 蝶

^hl : ˈhlǎ 靴

^hb : ˈhbõ ɲt^hẽ 太い

^hd : ˈhduẽ 7

^hd : ˈnõ ˈhda 朝食

^hg : ˈhgẽ wo 祖先

^hdʑ : ˈhtʑoː ˈdʑiʔ 11

^hdʑ : ˈhdʑa 漢族

^hz : ˈhzɕ 4

^hm : ˈhmaː nə 軍人

^hn : ˈte ˈnoʔ 今晚

^hɲ : ˈhɲõj 2

^hŋ : ˈhŋej 銀

^hl : ˈhloŋ 霧

^hw : ˈhwǎ 帰る

^hj : ˈhja 兄

3. 両唇音

wl : ^ˈwlaŋ 風

ptɕ : ^ˈŋə p^ˈtɕɤ 50

ptɕ : ^ˈp^ˈtɕə laʔ もの

4. そり舌音

ʳts : ^ˈk^he ʳtsəŋ 昨日

ʳn : ^ˈk^ha ʳnoʔ 昨晚

5. わたり音

kw : ^ˈloʔ kwa 手

tɕw : ^ˈtɕwəː 好きだ

tɕ^hw : ^ˈtɕ^hweʔ 小麦

ɕw : ^ˈɕwã 帽子

ɕw : ^ˈɕwɑː 炭

rw : ^ˈrwa 角

tj : ^ˈtjẽ naʔ 幅広い

sj : ^ˈsjẽ ごはん

ɕj : ^ˈlo ɕjẽj えと

mj : ^ˈmjẽ ba 医者

lj : ^ˈljã おす牛

rj : ^ˈdʒə rje 腸

6. 3子音連続

^mgw : ^ˈ^mgwa 頭

^wlw : ^ˈ^wlwa 肺

^ŋgw : ^ˈrə ^ŋgwõŋ うさぎ

^ɲgw : ^ˈ^ɲgwõ 上

^hkw : ^ˈ^hkwaʔ 剥ぐ

^ŋlj : ^ˈtɕə ^ŋlja 舌

^ŋdw : ^ˈ^ŋdwə 石

4.25 Yungling 方言（徳欽県雲嶺郷）

Yungling 方言は徳欽県雲嶺郷佳碧村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

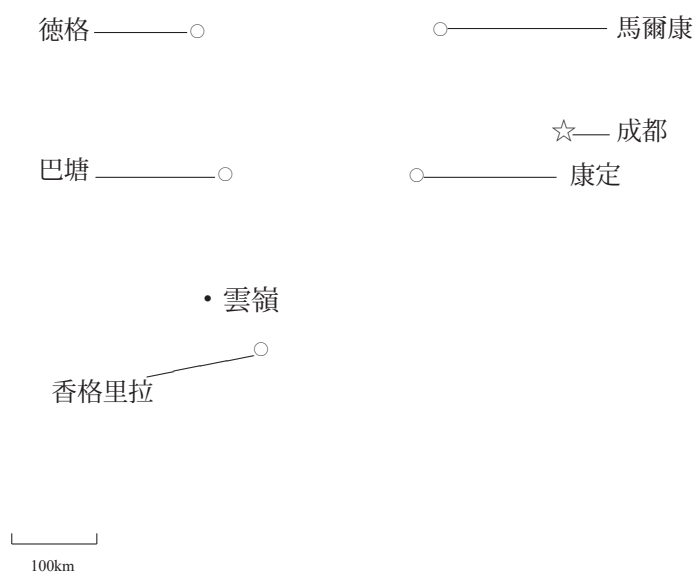


図 4.25: 徳欽県雲嶺郷の位置

雲嶺郷は瀾滄江沿いに位置し、東岸に維西県県城と徳欽県県城を結ぶ交通路がある。佳碧村は東岸の標高の高い位置にあるため、交流は比較的疎である。

4.25.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˉ: 高平 ˊ: 上昇 ˋ: 下降 ˆ: 上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立も存在する。

i	ɯ	ɯ	u
e	ə	ə	ɤ
ɛ			ɔ
a			ɑ

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʑ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ɕ ^h , ɕ ^h	x ^h	
	無気	ɸ	s	ʃ	ɕ, ɕ	x	h
	有声		z	ʒ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

4.25.2 方言特徴と具体例

4.25.2.1 母音

	通常母音例	鼻母音例
i	ʼni: tʰə ベッド	ʼna: lĩ 世界
e	ʼte ka かゆ	ʰdē: 7
ɛ	ʼsɛ: ごはん	ʰdjē 布団
a	ʼla wa 月	ʼnã: 太陽
ɑ	wa: ta 左	nã 天
ɔ	nwɔ: 拝む	ʼsō 銅
o	tʰoʔ 6	n̄dzō 町
u	n̄u ma 狂人	ʰgo lũ 丸い
ʊ	n̄gu 9	
ə	ʼnə 人	ʰt̄ə 雲
ʊ	ʼpu: riʔ チベット人	ʼt̄u 身につける
ə	n̄d̄ə mə 客	
ɤ	ʰpɤ 毛	ʰs̄ɤ 獅子

4.25.2.2 単子音

pʰ: pʰaʔ ぶた	t̄ʰ: ʼt̄ʰa: 雨
p: ʼpə sʰu 象牙	t̄ʰ: t̄ʰu: w̄zə 14
b: ʼbu lĩ 橋	d̄z: ʼd̄zeʔ 8
tʰ: tʰu: pa 額	sʰ: ʼsʰō: 櫛
t: ʼtu wa 煙	s: ʼsəʔ səʔ 鎖
d: ʼdē t̄ʰu 70	z: ʼzəʔ 太もも
t̄ʰ: t̄ʰaʔ 血	ʰ: ʼʰə ma: ʼkə loʔ 蝶
t: t̄a 髪	ʰ: ʼʰa ni アルミ
d̄: ʼʔa d̄ə 姉	z̄: ʼz̄a xa 春夏
kʰ: kʰa 口	ʰ: ʼʰa wa 鹿
k: k̄a ruu 青靛	s̄: s̄aʔ 掃く
g: ʼguʔ ga にんにく	z̄: ʼz̄ə ba 乳牛
ʔ: ʼʔa ruʔ 酒	ʰ: ʼʰĩ 家
tsʰ: tsʰa 地	ʰ: ʼʰã 靴
ts: ts̄ō たまねぎ	xʰ: ʼxʰo xʰo 凹の
dz: ʼdza h̄su: nə 撒き散らす	x: ʼma xa 午後

ɣ : ɫdzi: pu ɣu こうもり
 h : ɬɛ? ma: hɛ? 繕う
 fi : ɸi: fi びざ
 m : ɾmə 虫
 m̥ : ɾm̥ɛ: 葉
 n : ʼno ni 昼食
 ŋ : ɾŋ 鼻
 ŋ : ʼŋə wa 親戚
 ŋ̥ : ʼŋi? 火

ŋ : ɾŋa 5
 ŋ̥ : ɾŋɛ: ɸi 枕
 l : ʼlu ɸpo 体
 l̥ : ɾla mo? ズボン
 r : ʼre: 布
 j : ɾju wa 肺
 w : ʼwa 狐

4.25.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 前鼻音

m̥b : ɾkã m̥bo やせた	nt̥h : ʼnt̥hɛ tɸi 親指
nd : ɾdu na: 前	nt̥h : ɾt̥ha 鷹
nd̥ : ʼnd̥o? 雷	nk̥h : ɾk̥hu lo 車輪
ng : ɾgo? 頭	nts̥h : ɾts̥hɸ 湖
ndz : ʼndzu めすヤク	nt̥ɸh : ʼnt̥ɸhɛ? 霜
ndz̥ : ɾdza 虹	ns̥h : ɾs̥hɔ 売る
nl : ʼnla wa 月	nt̥ɸh : ʼnt̥ɸhɛ: ma ほうき
mp̥h : ɾmp̥hu: 吹く	

2. 鼻音子音

mb : ʼrɔ mbo 長い	ndz : ʼndzu? nt̥ɔ 指輪
nd : ɾna: ɾŋɔ ndə 昔	
nd̥ : ɾnd̥ə mə 客	

3. 前気音

hp : ɾpɸ 毛	hts : ɾtsə htso とがった
ht : ɾtu wa 腹	htɸ : ɾtɸɛ? 鉄
ht̥ : ɾt̥ɔ 雲	hs : ɾsa t̥hɔ 草原
hk̥ : ɾk̥ɔ ma 足	hɸ : ʼdza hɸu: 撒く

^hʃ^h : ʔdzə^hʃ^huʔ 外側
^hʃ : ʰʃaʔ nã くさい
^hb : ʰbõ mə 太い
^hd : ʰdɤ 石
^hq : ʰqɯʔ 蛇
^hg : ʰgõ: 背
^hdz : ʰdzõ 町
^hdʒ : ʔdʒa nãʔ 森
^hz : ʰzaw^hzawʔ 気をつける

^hz : ʰzə 4
^hʒ : ʰzə tɕɯ 40
^hm : ʰma ɲĩ 傷口
^hn : ʰna^htɕuʔ 耳
^hɲ : ʰɲə 2
^hŋ : ʰŋɯɲ 銀
^hl : ʰlõ: 風
^hr : ʰra テント
^hj : ʰjã wo 黄牛

4. 両唇音

^hʃ : ʰʃã 夕食
^wdʒ : ʔtɕu: ʰdʒeʔ 18

^wz : ʔtɕu: ʰzə 14

5. わたり音

^tw : ʰtweʔ 拭く
^kʰw : ʰfiu: k^hwa ふくろう
^kw : ʰkwa: tə 彼ら
^xw : ʔpu: xwa 空気

^tj : ʰtje k^ha 家族
^kj : ʰkje: ts^hiʔ 腰
^mj : ʰts^ha: mjã 旱魃

6. 3子音連続

^htɕw : ʰtɕwaʔ 壊す
^hgw : ʰgwa 肩
^hnw : ʰnwɔ: 拝む
^hpj : ʰpje 着く

^hbj : ʰbje: pa 蛙
^htj : ʰtjeʔ 与える
^hdj : ʰdjẽ クッション

4.26 Budy 方言（維西県巴迪郷）

Budy 方言は維西県巴迪郷結義村で用いられる。分布位置の略図は以下のようである。

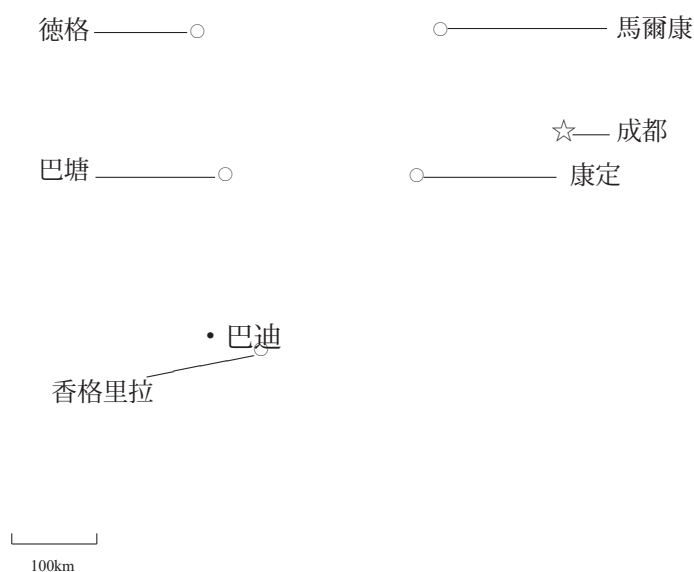


図 4.26: 維西県巴迪郷の位置

巴迪郷は瀾滄江沿いに位置し、東岸に維西県県城と徳欽県県城を結ぶ交通路がある。結義村は東岸にあるが、交通路沿いかそうでないかで言語面で異なりが見られる。本節で扱う記述は標高のやや高いところに位置する地域の変種である。

以下に示すのは結義村のものである。洛義村のものや方言差異については、補足という形で言及する。

4.26.1 音素一覧

超分節音 声調で4種が認められる

ˊ: 高平

ˈ: 上昇

ˋ: 下降

ˆ: 低/上昇下降

母音 長短および鼻母音/非鼻母音の対立がある

i	u	ɯ u
e	ə ə	ɤ o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

子音 子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t		k	q	ʔ
	有声	b	d	d		g		
破擦音	無声有気		ts ^h	tɕ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tɕ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ɕ ^h	ɕ ^h			
	無声	ɸ	s	ɕ	ɕ, ɕ	x		h
	有声	β	z	ʒ	ʒ	ɣ		ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ		
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥		
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w			j			

4.26.2 方言特徴と具体例

4.26.2.1 母音

非鼻母音例			鼻母音例	
	例語	語義	例語	語義
i	^{hi} bi wa	蛙	ⁿⁱ ba	古い
e	^{me} ke	あご	^{zə} ^{ne} lu	おとどし
ɛ	^{mjɛ}	薬	^{ne} pa	病人
a	^{sha}	土	^{ka} ^{sa}	赤ん坊
ɑ	^{phɑ?}	ぶた	^{la}	道
ɔ	^{kɔ?}	針	^{sɔ:}	銅
o	^{do}	石	^{çɔ} ^{kʰɑ?}	狐
u	^{ʃʰu} ^{pʰũ}	木	^{tũ} ^m ba	空の
ɯ	^{ɕju}	鳥	^h ^{kuũ} ma	泥棒
ɤ	^{hpɤ}	毛	^{zɕ} ^ɤ ^g ɤo	後ろ
ə	^{lə} ^{kwa}	手	^h ^{kə} ^m ba	乾いた
ɯ	^{pu?}	チベット		
ɵ	^{shɵ} ^{lu}	種		

4.26.2.2 単子音

	例語	語義	例語	語義
p ^h	^{phɑ?}	ぶた	^{phɤ} ^{sa:}	少年
p	^{pu} ^{mo}	娘	^{pe} ^{me}	僧侶
b	^{bɤ} ^{la?}	衣服		
t ^h	^{tho:} ^{ra?}	森林	^{thɯ}	持っておく
t	^{tɔ}	熊		
d	^{dɤ} ^{tsʰɯ}	日		
t ^h				
t	^{to?}	氷	^{ta}	髪
d	^{də} ^{dze}	近い		
k ^h	^{kɔ?}	針	^{kʰɑ:}	雪
k	^{ka:}	柱	^{kɤ} ^{hi} ^{dzu}	襟
g	^{go} ^{hi} ^{gwa}	幅広い		
q ^h	^{qʰe:} ^{ni:}	彼ら2人	^{qʰe:} ^{rtse}	彼ら
q	^{qa}	辛い		
ʔ	^{ʔa}	鴨	^{ʔa} ^{ri}	今日
ts ^h	^{tsʰə}	犬	^{tsʰə} ^{pu?}	商人
ts	^{tsa} ^{ba}	ツアンパ	^{tsə}	閉める

dz	^ˆ də dze	近い		
tʂ^h	^ˈ tʂ ^h aʔ	血	^ˈ tʂ ^h a	鷹
tʂ	^ˈ tʂo:	レンガ		
dʒ	^ˈ pʰtʂ dzoʔ	16		
tʂ^h	^ˈ tʂ ^h u tʂ ^h uʔ	ベル		
tʂ	^ˈ tʂə rə	どのように		
dʒ	^ˈ dʒa	漢族		
φ				
β	^ˈ βi fio t ^h e fio	傷つく		
s^h	^ˈ s ^h a	地	^ˈ s ^h ə lu	種
s	^ˈ sō	3	^ˈ se	ごはん
z	^ˆ za ^h no	正午		
ʂ^h	^ˈ ʂ ^h i t ^h oʔ	硬い	^ˈ ʂ ^h a	肉
ʂ	^ˆ ʂũ mɤ	おいしい		
z	^ˈ zɤ zu	若い		
ʂ^h	^ˆ ʂ ^h e ^h gu	遅い		
ʂ	^ˈ ʂə wa	ねずみ	^ˈ ʂu ze	朝食
ʒ				
x	^ˈ xã ^ˈ də	鬼		
ɣ	^ˆ ɣu ɣu:	からす		
h	^ˈ ho: ra	深い		
fi	^ˈ fiə ^h tuʔ	渡る		
m	^ˈ moʔ moʔ	モモ	^ˆ ma:	うし年
m̥	^ˈ m̥ɛ ^m ba	医者	^ˈ m̥e	火
n	^ˈ nu ^h ma	ミルク	^ˈ ne:	大麦
n̥	^ˈ na	鼻		
n̥	^ˈ nã:	魚	^ˈ na me	猫
n̥	^ˈ niʔ ma	竹	^ˈ ni k ^h a:	怒る
ŋ	^ˈ ŋa	私	^ˈ ŋɛ	聞く
ŋ̥	^ˈ ŋi: ʂwi	枕	^ˈ ŋo s ^h ɛj	緑の
l	^ˈ lo	年	^ˈ lə ka	月
l̥	^ˈ l̥ã	靴	^ˈ la	神
r	^ˈ re:	布	^ˈ rə gō	うさぎ
r̥	^ˈ me: roʔ	暗くなる		
w	^ˆ wi	移動させる		
j	^ˈ jaʔ	ヤク		

4.26.2.3 子音連続

調査で確認されたものについてその例を掲げる。

1. 完全前鼻音

^m b : ^m beʔ ^ŋ guʔ ^ŋ da おしゃべりする	^ŋ k ^h : ^ŋ k ^h ã ^h a 辛い
ⁿ d : ⁿ duʔ ある	ⁿ q ^h : ^j ã ⁿ q ^h e 撒く
ⁿ ɖ : ⁿ ɖu: po 客	ⁿ ts ^h : ⁿ ts ^h o 湖
ⁿ g : ⁿ go 頭	^ŋ ts ^h : ^ŋ ts ^h oʔ 略奪する
ⁿ dz : ⁿ dzoʔ loʔ 指	^ŋ ts : ^j ε: ^ŋ tsã 踊る
ⁿ dʒ : ^p hə ⁿ dʒuʔ 走る	^ŋ tɕ ^h : ^ŋ tɕ ^h u pa 唇
^m p ^h : ^m p ^h ã ⁿ di まっすぐな	^ŋ tɕ : ^ŋ ã ^ŋ tɕa 早い
ⁿ t ^h : ⁿ t ^h u mo 高い	ⁿ s : ^j ε ⁿ suʔ 迎える

2. 両唇閉鎖音

^p t : ^p tɕ 洗う	^b d : ^b deʔ 賠償する
^p ts : ^p tsaʔ ra トイレ	^b ɖ : ^b ɖu 蛇
^p ts : ^ʔ p ^t so ^p tso 忙しい	^b g : ^b go 分かち合う
^p tɕ ^h : ^p tɕ ^h uʔ 拝む	^b dz : ^k ɕ ^h ə ^b dzea 100万
^p tɕ : ^p tɕu 10	^b dʒ : ^b dʒiʔ 8
^p ɕ ^h : ^ʔ p ^ɕ ha: ra ずぶぬれにする	^b z : ^z a ^j oʔ ^b zoʔ しあさって

3. 両唇摩擦音

^ɸ tɕ : ^k hə ^ɸ tɕa ^ŋ wo 分離する	^ɸ ɕ ^h : ^ɸ ɕ ^h e: s ^h ō 出る
^ɸ s ^h : ^m ã ^ɸ s ^h ẽ 赤い	^ɸ ɕ : ^ɸ ɕaʔ ma ほうき
^ɸ s : ^ɸ se rwa 真珠	^ɸ ɕ : ^w a xɑʔ ^ɸ ɕoʔ 沸く

4. 両唇接近音

^w dʒ : ^h tsɔ: ^w dʒa 筋肉	^w ʒ : ^l ɑʔ ^w ʒō 学ぶ
^w z : ^s e ^w za キッチン	^w l : ^w lo ma 風
^w z : ^w zə ^p tɕu 40	

5. そり舌音

^ʃ t : ^k ɕ ^h ə ^ʃ tea 10万	^r ŋ : ^r ŋa 刈る
^r ts : ^t ɕ ^h eʔ ^r tse あなたたち	

6. 軟口蓋閉鎖音

^kʂ^h : ʼ^kʂ^hə ʂtea 10 万

7. 前気音

^hp : ʼ^hpɤ 毛

^ht : ʼ^hta 馬

^ht : ʼjɛ ^htɔ: 腫れる

^hk : ʼ^hkar ma 星

^hts : ʼ^htsɔ: ^wdza 筋肉

^hts : ʼ^htsɛj 雲

^hts : ʼ^htsɛ̃ 尿

^hʂ^h : ʼ^hʂ^ha: 金

^hs : lo ^hsar 新年

^hʂ^h : ^hʂ^he 成長する

^hʂ : ʼ^hʂoʔ ko 裕福な

^hl : ʼ^hleʔ 読む

^hb : ʼ^hbə ^hloʔ 波

^hd : ʼ^hdə 顔

^hd : ʼ^hdə ^hka きゅうり

^hg : ʼ^hgo: 背

^hdʒ : ʼtuʔ ^hdʒo 逃げる

^hdʒ : ʼ^hdʒoʔ 射る

^hz : ʼ^hzə 晴れる

^hm : ʼ^hme k^hoʔ イヤリング

^hn : ʼ^hnə ma 息子の嫁

^hɲ : ʼ^hɲaʔ はさみで切る

^hŋ : ʼ^hŋã 銀

^hl : ʼ^hlɤ: pa 脳

^hr : ʼ^hra: ^hre つるつるの

^hw : ʼ^hwo 行く

^hj : ʼ^htsaʔ ra: ʼ^hjuʔ

8. 声門閉鎖音

ʔɲ : ʼluʔ kwa: ʼʔɲa 傷つける

ʔw : ʼʔwo: juʔ 口づけする

ʔj : ʼʔjoʔ 落ちる

9. わたり音 (一部)

tw : ʼtwɛ̃ t^huʔ 考え

kw : ʼkwo lje ごみ

tsw : ʼtswoʔ 6

s^hw : ʼs^hwə 指紋

ʂ^hw : ʼʂ^hwa: 鹿

ʂw : ʼʂi: ʂwi 枕

zw : ʼzwə 4

ɕw : ʼɕwa 帽子

rw : ʼko rwo ラバ

ɕj : ʼɕju 鳥

ɲj : ʼɲjɛ̃ 心臓

lj : ʼkwo lje ごみ

10. 3 子音連続

^h kʷ : ʰkwa	囲い込む	^ɦ dzj : ʰtɕa ^ɦ dzje	三脚
^ɦ gʷ : ʰpɤ ^ɦ gwa	電気を消す	ɸsj : ʰpa ɸsjeʔ	言う
^w zʷ : ʰwzwo	太もも		

4.26.3 補足

巴迪郷の結義村の方言と洛義村の方言では、対応する語に関する次のような対応関係が見られる。いずれも母語話者には結義村の方言形式が特別の形式とみなされている。

1. 結義村/q^h/ : 洛義村/k^hw/

語義	結義村	洛義村
彼ら	ʰq ^h e: ʰtse	ʰk ^h wẽ ʰts ^h a

2. 結義村/t/ : 洛義村/(^h)ʃ/

語義	結義村	洛義村
氷	ʰtoʔ	ʰʃoʔ

第5章 類型的分析と地理的分析

5.1 類型的特徴の分析方法

本章で扱う類型的特徴とは、音声・音韻・語彙に関する特徴のみを指している。

チベット語に関して、方言もしくは方言差異を考察するときの基準には、同源の形態素における音対応のパターンが主として選ばれる。すなわち蔵文と各種方言の音韻との対応関係には一定の傾向が見られ、その対応関係が先行研究で確立され、それを流用してきた。このような基準が比較的安定していることから、基準にそぐわない形式を持つ方言があったとき、それを我々は「特徴的な方言」と判断する。しかしながら、先行研究で公開されている方言資料のみからでは、本来的に「特徴的な方言」の特徴づけが不十分であるという懸念がある。与えられた資料から1方言を特徴づけるという方法をとるよりも、まず多くの方言資料を並列することを通して、全体的に特徴をあぶりだすという観点から議論を進めるのが本章である。

類型的特徴を分析するためには、蔵文と諸方言の形式の概略的な共時的対応関係を明らかにし、それらを対照していくことという手順をとることができる。ここでもその方法に則って行うが、網羅的に扱うわけではない。先行研究で示される類型特徴が明確に現れる点を重点的に、かつ扱う対象となる方言群に際立つ点に絞って分析する。その結果から、従来の枠組みで考えられてきた方言群の類型に一致しない点がどのようなものなのかを浮き彫りにすることができると考える。そしてその分布の考察として地理的分析につなげる。

5.1.1 主な類型的特徴

チベット語に関する議論について、各種方言の類型的特徴は、これまでの研究では方言区分すなわち系統分類に利用されてきた。これは Sun (2003b) などの最近のチベット語方言の分析にも用いられ、一定の指針を与えるものとみなすことができる。Sun (2003b) は瞿霽堂・金效静 (1981) の分析を参考にしている。

瞿霽堂・金效静 (1981) が中国に分布するチベット語3大方言群を区分するときの基準とする大まかな特徴は、以下のようである。

言語特徴 \ 方言群	中央	カム	アムド
有声非共鳴音	なし	あり	あり
声調	あり	あり	なし

瞿靄堂 (1996) などではさらに 1 項目加え、子音連続・有声非共鳴音・声調の 3 点で分類できるとする。3 大方言群ならば、以下のように表すことができる。

言語特徴 \ 方言群	中央	カム	アムド
子音連続	なし/少数	少数	多数
有声非共鳴音	なし	あり	あり
声調	あり	あり	なし

上の分類では、「多数の子音連続と声調の共存」を持つ方言群が存在しないことになっている。ところが実際のところ、川西民族走廊に分布するヒャルチベット語には、そのパターンが現れる (Suzuki 2006) ため、ヒャルチベット語は 3 大方言群と異なるものとして扱う¹。ヒャルチベット語の類型を加えて示すと次のようになる。

言語特徴 \ 方言群	中央	カム	アムド	ヒャル
子音連続	なし/少数	少数	多数	多数
有声非共鳴音	なし	あり	あり	あり
声調	あり	あり	なし	あり

さて、瞿靄堂・金效静 (1981) はもう 1 つの特徴として前部硬口蓋破擦音について、3 大方言群が蔵文に対し異なる対応を見せることを述べている。前部硬口蓋破擦音に対応するものが + で表される。

蔵文 \ 方言群	中央	カム	アムド
C (=c-, ch-, j-)	+	+	+
Py- (=py-, phy-, by-)	+	+	+
Ky- (=ky-, khy-, gy-)	-	+	+
Kr- (=kr-, khr-, gr-)	-	-	+

このような分類は、Sun (2003b) が指摘するように、1 つの傾向に過ぎない。特にカムチベット語については、さまざまな方言について、この分類に当てはまらないものが多く存在する。

¹これについて、劉輝強 (2006) や尚雲川 (2006) ではヒャルチベット語である松潘周辺のチベット語についてカムチベット語に属すると考えているが、その具体的根拠は示されていない。

現在のチベット語方言の研究について、大まかすぎる瞿霏堂・金效静(1981)の基準をそのまま適用しつつ議論を行うことは、特異な特徴をもつ方言を評価するに当たって、明らかに問題がある。しかしながら、ここに提供された基準について、本論文において議論の対象となる言語でいかに現れるのかということを分析することには、一定の意義を見出すことができるだろう。

川西民族走廊のチベット語方言の特徴を分析するに当たっては、以上の特徴だけでは十分ではない。以下ではまず数詞の形態に関する分析を行い、その多様性と共通性を明らかにし、類型的分析を行うときに注目すべき現象を示す。

5.1.2 数詞を用いた事例研究

川西民族走廊のチベット語は、各地域によってさまざまな言語と混在して用いられており、地域ごとの方言差異も、チベット語内部の本来的な差異に由来するものとともに、他言語からの影響といった地域性の高い原因に由来するものも当然ある。基礎語彙といっても例外ではない。その中であって数詞は共通の来源に由来する形式が用いられるように見える²。さらに、数詞の蔵文形式はさまざまな点で興味深い類型特徴を示す要素を含んでいる。ここでは、先行研究でも簡単に指摘される特別な方言特徴の共通性を数詞を通して概観し、方言間の類型的特徴の把握を行い、また地図化することを通じてこれからの議論の視座を具体例とともに述べる。

5.1.2.1 蔵文口蓋音字に対応するそり舌音形式

Sun (2003b) における Zhongu 方言の考察において指摘されるものの1つに、蔵文 sh, zh に対応する口語形式がそり舌音になるというものがある。これはチベット語方言の中で相対的に少ない部類の対応であるが、現在報告される限り、すべて川西民族走廊のチベット語方言において見られる。

数詞における例は「4」 bzhi である。以下にいくつかの方言の具体例をあげる。

方言	形式	方言	形式
Askyirong	^w γə	Ketshal	wγə
Zhongu	zə	rNgawa	βzə
Sogpho	^h zɿ	Lhagang	'zə
Phrengme	<u>zə</u>	Rwata	<u>zə</u>
Budy	^h zɿwə	Nyishe	^h zə

²Beyer (1992:7-8) では、チベット語を定義するために「7」に蔵文 *bdun* に対応する語を用いる言語とするという言及がある。それほどにチベット語諸方言の中で数詞は安定し、かつ同系言語と同定できる要素を共有している。

上に挙げた例の中でそり舌音が現れるのは、Zhonggu、Sogpho、Budy、Nysishe の各方言となる。一方で広くチベット語方言に見られる形式は前部硬口蓋摩擦音で、川西民族走廊では Lhagang、Phrengme 各方言のように有声音で現れる。Askvirong、Ketshal 各方言の軟口蓋音の対応形式もある。これらを地図化すると、以下のような分布になっていることが分かる。

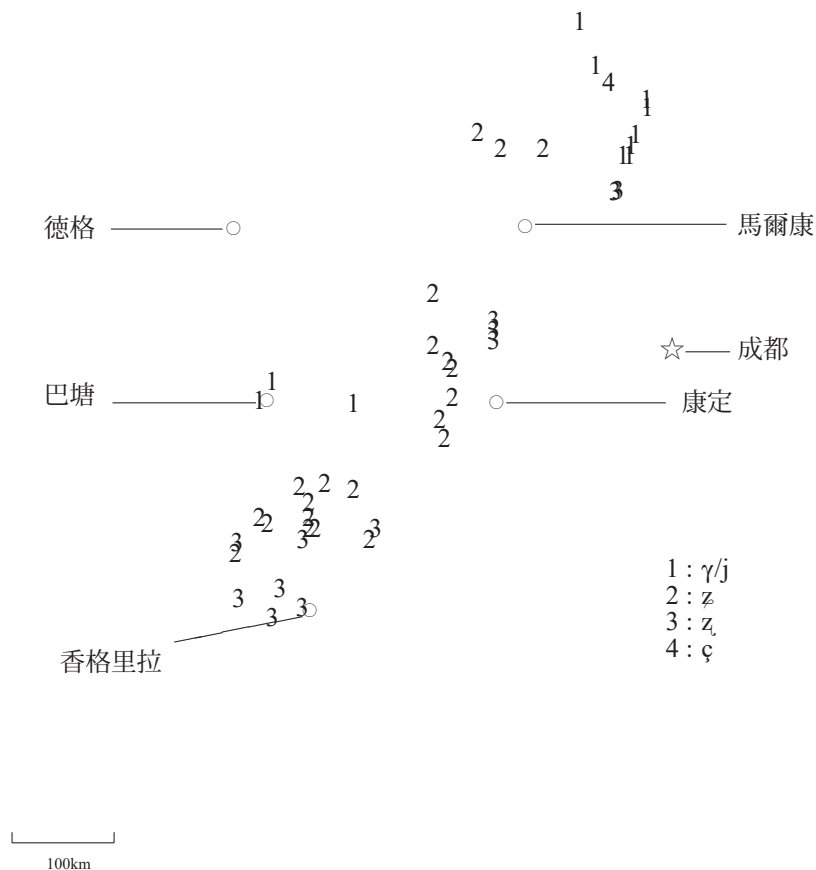


図 5.1: 「4」の初頭子音言語地図

この分布を見ると、辺縁地域に少数の形式が分布し、また注目すべきそり舌音 $ʒ$ をもつものは北部、中部、南部のそれぞれに少量ずつ分布していることが視覚的に理解できるだろう。

藏文 sh については、「4」の例と同様そり舌音として現れる。以下に「20」nyi shu の第 2 音節に注目すると、同様の現象が確認できる。

方言	形式	方言	形式
Askyirong	ŋə x ^h u	Ketshal	ŋə ɬu
Zhongu	ɲə ʂə	rNgawa	ŋə ɕu
Sogpho	ʼniʔ ɕ ^h u	Lhagang	ŋə ɕ ^h u
Phrengme	ʼni: ɕu	gDongsum	ʼŋə ɕu
Budy	ʼŋə hɕɣ	Nyishe	ʼŋe ɕɣ

Sogpho 方言では「4」ではそり舌音で現れるが、「20」ではそり舌音が現れていない³など、一部にのみそり舌音との対応関係を見出せる。また、各方言ごとに現れが蔵文との対応で規則的でないことが分かる。調音点に注目して地図化すると、以下のようなになる。

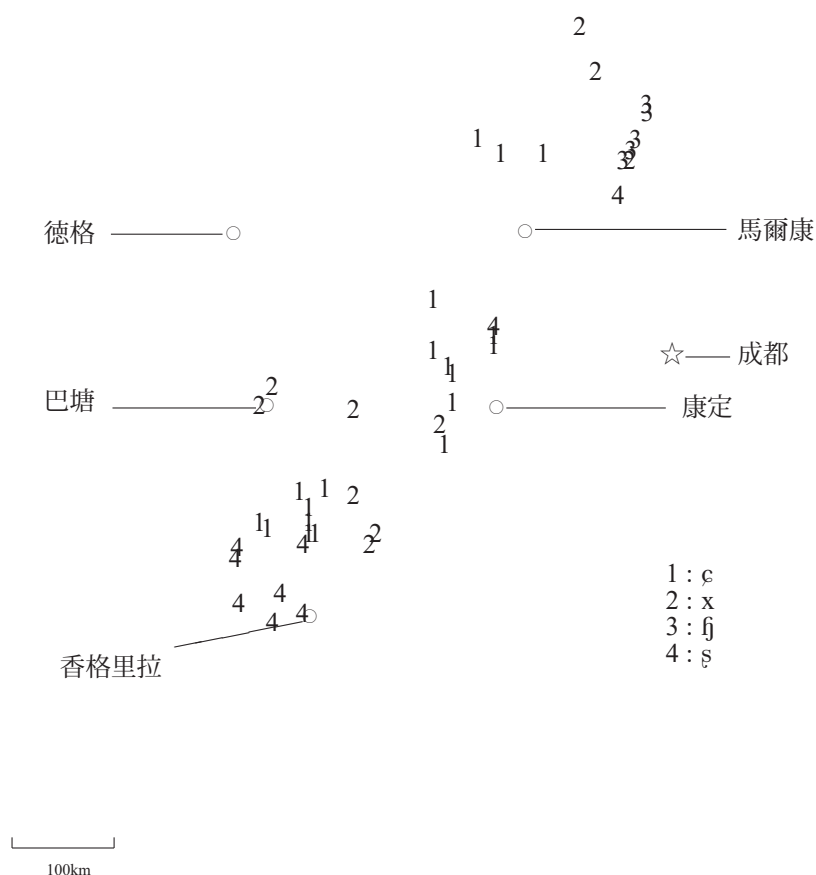


図 5.2: 「20」の第2音節初頭子音言語地図

以上の分布は、Sun (2003b) の示す Zhongu 方言の特殊性が甘孜州南部のチベット語方言との類似を見せるということとも関連があるだろう。

³ただし、Sogpho 方言でもそり舌音を異音にもつʼniʔ ɕ^hlという形式も見られ、不安定である。

Nyishe 方言は蔵文 c, ch, j にもそり舌音が対応する。たとえば「1」 *gcig* がある。

方言	形式	方言	形式
Budy	`tci?	Nyishe	^h tʂi?
Phrengme	̄tci?	Rwata	`tci?
Sogpho	̄tci?	rNgawa	χtʂik
Askyirong	^h tʂiʃ	Ketshal	°tʂiʃ

調音点に着目して地図化すると、Nyishe 方言の周辺方言にも同じ形式が見られる。

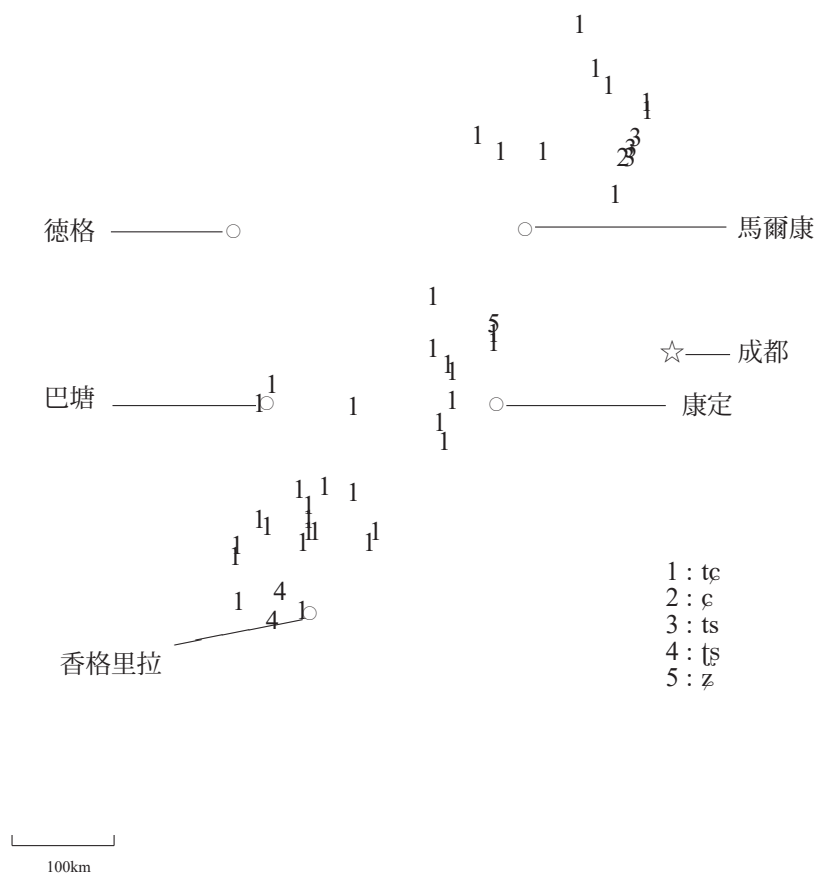


図 5.3: 「1」の初頭子音言語地図

これは、先の指摘とともに Thangskya 方言や sKyangtshang 方言など松潘周辺に限って歯茎破擦音が現れる方言が見られることをも明らかにしている。また Ketshal 方言や sProsnang 方言⁴では摩擦音に対応する例も確認されている。蔵文との対照という観点から考えれば、「1」には蔵文でもいくつかの形態 (*gcig* のほかに *cig* や *zhig* な

⁴sProsnang 方言の「1」の場合、摩擦音で対応していることよりもむしろそり舌音になっていない点にも注目することができる。この方言は蔵文 c, ch, j に対して基本的にそり舌音に対応するからである。このことは rGyalthang 方言についても当てはまる。

ど) があり、完瑠冷智 (2006) の指摘では古蔵文でもゆれのある語で、その中に見られる音に対応関係を求めることもできる。

5.1.2.2 蔵文足字 y を含む形式

蔵文 g に足字 y がつく例として、「80」 *brgyad cu* の形式は以下のようなになる。

方言	形式	方言	形式
Budy	^h b dʒiʔ tɕu	Nyishe	^h dʒje ^h tɕʰ
Phrengme	^h dʒə ja	Rwata	^h dʒə juʔ
Sogpho	^h dʒa tɕu	rNgawa	^h dʒa tɕu
Askylrong	^w tɕeʔ tɕu	Ketshal	dʒee tɕu

Phrengme 方言その他郷城県の方言では、初頭子音が齒茎破擦音に対応する点が目立つ。Askylrong 方言の形式は独自のもので、広く見られるのは前部硬口蓋破擦音の形式である。地図化すると以下のようなになる。

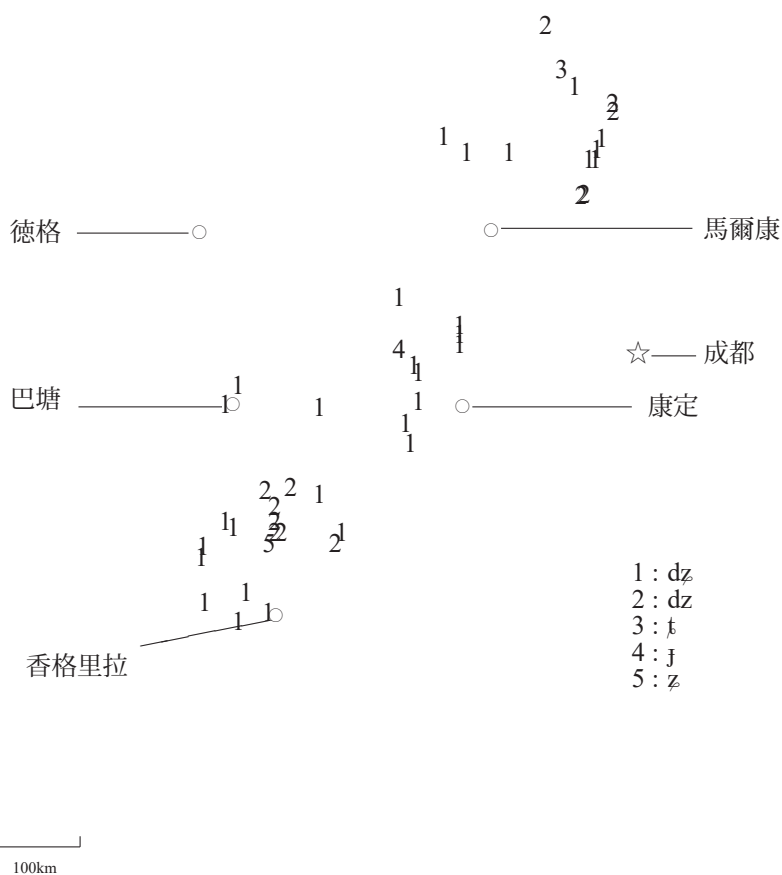


図 5.4: 「80」の初頭子音言語地図

蔵文 b に足字 y がつく例として、「1000000」 *bye ba* があるが、その対応形式が用いられるのは以下のような方言である。

Askyirong 方言 ϕ_{ce} wa、Ketshal 方言 ϕ_{ce} wa、rNgawa 方言 ϕ_{ce} wa、Lhagang 方言 ϕ_{ci} wa、mBathang 方言 ϕ_{x} wa、Sagong 方言 ϕ_{se} fio など。

5.1.2.3 きりの悪い数字の形態

数詞の語形式について、川西民族走廊の北端と南端で似ているものがある。チベット語、特に文語やよく知られている口語⁵では、21～99 のきりの悪い数字の構成について、10 の位の形態（2 音節形式）と 1 の位（1 音節形式）のほかに、10 の位と 1 の位を結ぶ何らかのつなぎの形態素が必要となる。たとえば、以下に掲げる「32」ならば、十の位と一の位をつなぐ形態素に注目する。

方言	形式	方言	形式
Budy	$\bar{s}\bar{o}$ h tsaw mə	Nyishe	$\bar{s}\bar{o}$ tʂɿ h tsa: f nej
Yungling	$\bar{s}\bar{o}$ f ŋə	gTorwa	$\bar{s}^h$ ɿ ŋə
Phrengme	$\bar{s}^h\bar{o}$ dzui h tsa: ŋə	gDongsum	$\bar{s}^h\bar{o}$ h tsa ŋə
Rwata	$\bar{s}^h\bar{o}$ tɕʰui h sʰo: ŋə	Sogpho	$\bar{s}^h\bar{o}$ tɕʰui h so: f ŋə
rNgawa	s^h uim tɕʰui $s^h\bar{o}$ ɸŋi	Askyirong	s^h ũ tɕʰui $s^h\bar{o}$: f ŋã
gZari	$sũ$ tɕʰui $s^h\bar{o}$ ŋi	Thangskya	o s h ũ dzui o tsa ŋi

蔵文では、30 台の場合のつなぎの形態素には *so* もしくは *rtsa* があり、後者は 10 の位の値にかかわらず用いられる。口語形式としては、先行研究でよく知られる方言⁶では多く前者の形式を用いている、という背景を前提とした場合、上表からいくつかの特別な点が確認される。

北端の地域の Thangskya 方言と南端の地域の Nyishe 方言では、蔵文 *rtsa* に対応する形式が用いられている。これが他と比べると特徴的である。

しかしさらに特徴的なものが 2 点ある。1 つは Budy 方言と gDongsum 方言に見られるような全体で 3 音節となる形式である。この 3 音節の形式の来源は定かではないが、形態素に形式に注目すると、10 を示す要素（上表では tɕʰui や dzui など）が脱落しているように見える。もう 1 つは Yungling 方言と gTorwa 方言に見られるような、2 音節の形式である。2 音節で現れるのは実際の口語形式としてまれではなく、つなぎの形態素が蔵文 *so* 対応形式を用いる方言の場合、10 の位を言わない形式が存在する。ところが、Yungling 方言の例を見ると顕著なように、第 1 音節が鼻母音で

⁵Lhasa 方言、Derge 方言、bLabrang 方言など、方言群を問わず共通の事項である。

⁶Lhasa 方言をはじめ、Derge 方言、mBathang 方言、bLabrang 方言などを想定する。

現れている。これは蔵文 *so* 対応形式ではなく *gsum* / *sum* 対応形式である。つまり、4 音節形式の第 2、第 3 音節が脱落している構成をとっている。これは、Yungling 方言で「32」の 4 音節形式を方言形式として容認しないことも関連がある、独自の構成であると考えられる。gTorwa 方言でも、このような事情は同様であるが、第 1 音節が鼻母音で現れていない。これは Rwata 方言の第 1 音節が同様に鼻母音で現れていない形式と関連する可能性もあろう。これらの 2 点の構成の特徴は、先の蔵文 *rtsa* に対応する形式の分布と異なって、「九香線」南部に集中しているという点で異なりがある。

また一方、以上のものと異なった点で特徴的な形式としては、Phyugtsi 方言では 20 台の数詞は全体で 3 音節にはなるものの、つなぎの形態素を用いない。たとえば「21」*nyi shu rtsa gcig* を $\eta u \epsilon^h u^h t\epsilon i?$ という⁷。

5.1.2.4 蔵文に対応しない形態

gDongsum 方言その他郷城県の方言、gTorwa 方言、nDappa 方言及び Sogpho 方言でのみ一致する形式が「11」*bco gcig* に見られる。

方言	形式	方言	形式
Budy	$^p t\epsilon o: t\epsilon i?$	Nyishe	$^h t\epsilon o: ^f d\epsilon i?$
Phrengme	$^t \epsilon u: j i?$	gDongsum	$^h t\epsilon u j i?$
Rwata	$^t \epsilon u: j i?$	Sogpho	$^t \epsilon u: j i$
rNgawa	$p t\epsilon u k t s^h \epsilon k$	gZari	$d\epsilon u^h t s i?$
Askyirong	$p t\epsilon e^o h t s i:$	Ketshal	$^o t\epsilon u f^h t\epsilon i f$

Sogpho 方言などでは第 2 音節の初頭子音が /j/ で現れており、これが特徴的な形式でなおかつ郷城県など他の地域の方言にも見られることに注目できる。ほかにも、dMarthang 方言の「11」 $p t\epsilon i q t s^h \epsilon q$ という形式は、「1」を示す要素すなわち第 2 音節の有気音の現れとともに第 1 音節末に口蓋垂音が現れ、完瑪冷智 (2006) のいう $*g t s^h i k$ という古期の形式が実在したことをうかがうことができる。いずれも、「1」をめぐるのは蔵文が制定される以前の形式に複数存在したことが異体字などで確認されるため、口語形式にもその痕跡が反映されているという見方で理解できる点がある。

ところが、以上のような観点から説明のできない特別な語形式をもつものもあって、たとえば Budy 方言の「12」（蔵文 *bco gnyis*）はその第 2 音節について、蔵文に

⁷若年層では蔵文 *rtsa* に対応する形式をはさんで 4 音節となる $\eta u \epsilon^h u^h t s a^h t\epsilon i?$ という通常の形式も用いられている。また、分布が極めて接近する gTsangtsa 方言では 4 音節形式が広く用いられており、 $\eta i \epsilon^h u^o t s a^h t\epsilon i f$ である。

対応関係が見られない特別の形式を用いる。この形式は村ごとに異なる。特殊な形式を用いるのは結義村の場合である。

方言	形式	方言	形式
Budy (結義)	^ʔ pt̚so: mə	Budy (洛義)	^ʔ pt̚so: n̄ə
Nyishe	^h t̚so: nə	Phrengme	^h t̚so: nə
gDongsum	^h t̚so: nə	Sogpho	^h t̚su: nə
rNgawa	^ʔ t̚ɕu:k ɲi	Askyirong	^ʔ t̚ɕu: ^h ɲã
gZari	d̥zu ɲi	Ketshal	t̚ɕu ɲi

Budy (結義) 方言の形式は、非チベット語来源形式ではないかとさえ疑われるところであるが、現段階では確定的なことは何もいえない⁸。

その一方で、「2」 *gnyis* は蔵文に対応するようにみえる。

方言	形式	方言	形式
Budy (結義)	^h ɲi:	Budy (洛義)	^h ɲi:
Nyishe	^h ɲ̄əj	Phrengme	^h ɲə
gDongsum	^h ɲ̄ũ	Sogpho	^h ɲə
rNgawa	ɲɲi	Askyirong	^h ɲ̄ã
gZari	^h ɲi	Ketshal	^h ɲi

ほかにも、Yanmen 方言の「8」は^hla といい、蔵文 *brgyad* と完全に一致しない別語源の形式がある⁹。

5.1.2.5 数詞から見る類似点

数詞の考察では、ほとんどの点で各方言の音対応の一例を示しているものと考えられる。以上にみた形式の対比から、以下の点において注目できる結果を得られた。

1. 蔵文 sh/zh に対応する形式がそり舌音になる例
2. 蔵文軟口蓋音字 + 足字 y に対応する形式が齒茎摩擦音になる例
3. いくつかの点で特徴的な形式が川西民族走廊の北部と南部の地域で共通する点

これらは、考察対象を他の語に広げるときにも大いに参考となるものである。この点に着目しつつ考察を行うことが、地図を有効に用いることにもつながるだろう。

⁸しいて形式が近似する例をあげられるとするなら、怒語の中部方言の「2」に^hm⁵⁵ がある (孫宏開・劉路 1986)。

⁹チベット・ビルマ諸語の数詞を扱う Matisoff (1997) を参照しても来源は不明である。

5.2 川西民族走廊のチベット語諸方言の基本的類型特徴

ここでは、これまでの研究で方言区分の基準に採用されてきた、子音連続・有声非共鳴音・声調とその関連についての類型的特徴を分析する。

5.2.1 子音連続のパターン

子音連続の形式については、筆者の調査と記述によって、これまでに知られていた方言群の特徴とは大きく異なる分析が与えられた。そのため、これまでに知られていた類型的特徴に当てはまらなくなっている。ここでは、筆者の分析結果に基づいて、新しく整理する。

子音連続の構造は、鈴木(2005a)の分析に基づいて第3章で述べたように、初頭子音について後続子音より弱く発音されるものとそうでないものの2タイプが存在する。子音連続の存在は、まずこの2タイプに従って区分される必要がある。

また、従来の研究では、組み合わせの数に基づいて子音連続の数の多さに言及しているが、これを組み合わせのパターン別、たとえば、前気音や両唇閉鎖音といったものを基準にそれらを持つか持たないかで分類することも可能である。

子音連続の組み合わせというものは、調査語数が500-2000語の範囲では、必ずしも網羅的に挙げられるとは限らない¹⁰。そのため、数そのものを議論することの意義はそもそも薄いと考える。

たとえば、従来カムチベット語では、子音連続が少ない（多くは前鼻音）のに対し、アムドチベット語では多いことで知られていた。筆者の分析によると、カムチベット語でも子音連続の組み合わせの数は、特に前気音が発見されたことによって、数の上では従来の記述になるアムドチベット語の子音連続数を上回るものも現れた。また、先行研究で未記述のカムチベット語の中には、子音連続の組み合わせの類型自体がアムドチベット語より複雑なものもあることが明らかになった。そのような中で、アムドチベット語では、子音連続の構造に2タイプ備えていることが際立つ¹¹一方、カムチベット語では1タイプしかないものが多いという傾向を見出すことができる。また、いくつかのカムチベット語には、鼻音が先行する子音連続について2タイプの構造の差異が存在するものがある。

以上のように、筆者の分析によって記述される各種方言は、単に先行研究と対比させて考察すると、多くの問題点が生じうる。ここで、前章で扱ったいくつかの方言について、子音連続のタイプを一覧してまとめる。

¹⁰たとえば、動詞の活用を調べると新しい子音連続のパターンが現れる可能性は、チベット文語の形態論から容易に予測できるけれども、それについて調査した言語は少ない。

¹¹鈴木(2004)、鈴木・イエシェムツォ(2006)など参照。

方言名	子音連続 の構造	初 頭 子 音 の 特 徴					
		前鼻音	前気音	両唇音	そり舌音	口蓋音	口蓋垂音
		A / B	A / B				
Askyirong	1	+/+	+/+	+	—	—	—
Phyugtsi	1	+/-	+/+	—	—	—	—
Thangskya	2	+/-	+/-	+	+	+	—
rNgawa	2	+/+	+/+	+	+	+	+
sProsnang	1	+/-	+/-	+	—	+	—
Sogpho	1	+/-	+/-	+	—	—	—
Lhagang	1	+/+	+/-	+	—	+	—
Rangakha	1	+/-	+/-	+	—	+	—
Sagong	2	+/-	+/-	+	—	—	—
Nyishe	1	+/+	+/-	+	+	—	—
Yungling	2	+/-	+/-	+	—	—	—
Budy	1	+/-	+/-	+	+	—	—

注：

前鼻音 A：調音点を同じくする前鼻音

前鼻音 B：調音点を同じくしない前鼻音

前気音 A：有声性を同じくする前気音

前気音 B：有声性を同じくしない前気音

以上に示した特徴は各種方言の一部の特徴のみを表しているが、しかしそれでも全体的な概略を見るという観点から眺めれば、各種方言の独自の点や共通点をとらえることができる。子音連続のタイプというものは、それぞれの方言の特徴を代表するものといっても過言ではない。その見通しがあることから、先の第4章では子音連続を中心に具体例を挙げたのである。

5.2.2 有声非共鳴音の現れ

川西民族走廊のチベット語諸方言について、知りうる限り有声非共鳴音はすべての方言に存在することから、ここでは蔵文との対応関係に着目し、どういった場合に有声非共鳴音が現れるかで分類を行うことにする。

まず、有声非共鳴音は大きく閉鎖・破擦音と摩擦音の2つに分けることができ、両者によって現れが異なっている。

閉鎖・破擦音の場合については、蔵文 g, j, d, b を含む字に有声音との対応関係を得ることができる。川西民族走廊のチベット語諸方言の場合、極めて特徴的な対応関係を見せる方言群をのぞいて、多くの方言で有声音が現れる位置は一定している。

特徴的な方言群は、Askyirong 方言、Chosrje 方言など若爾蓋県東部に分布するもの、gTsangtsa 方言、Phyugtsi 方言など九寨溝県に分布するものなど、一部のヒャルチベット語が該当する。これらの方言では、蔵文 g, j, d, b が初頭子音として単独もしくは足字 y, r を伴って現れる場合に有声音が対応し、前接字、頭字を伴うときには無声化する傾向がある。これはチベット語全体を視野に入れたとしても、際立った対応関係を示している。それ以外の諸方言では、先に述べた対応関係とは逆となる。

摩擦音の場合については、主に蔵文 z, zh を含む字¹²に有声音との対応関係を得ることができる。川西民族走廊のチベット語諸方言の場合、大きく 2 つに分類でき、それは蔵文 z, zh が単独で現れた場合に有聲か無聲かどちらが対応するかという点である。前接字がある場合は例外なく有声音が対応する。蔵文 z, zh が単独の場合に有声音が対応する傾向の高い方言は、Askyirong 方言、gTsangtsa 方言など一部のヒャルチベット語、rNgawa 方言など定住地域のアムドチベット語、Sogpho 方言、dGudzung 方言、Lhagang 方言、Rangakha 方言など、最も東部で話されるカムチベット語である。

具体例を用いた考察および分布地図は後述する。

5.2.3 超分節音素の存在とそのパターン

従来の研究では、チベット語の超分節音素としてはピッチの高低に基づく声調が設定されてきた。ところが川西民族走廊のチベット語諸方言のいくつかには、ピッチのみによらない超分節音が対立を形成する場合が明らかにされ、この事例をレジスターによる対立として分析する。このことから、チベット語の超分節音素をひとまとめに声調と扱うことはできないと考えられる。

川西民族走廊のチベット語諸方言には、超分節音素について、その弁別が認められないもの、レジスターによるもの、声調によるものの 3 種類が見られる。

超分節音の弁別が行われない方言はアムドチベット語であり、これは従来よりよく知られるアムドチベット語の特徴に合致する。

レジスターの対立を持つものはヒャルチベット語であり、この特徴がヒャルチベット語のもっとも際立つ特質である。

声調の対立を持つものはカムチベット語であり、これも従来の記述と変わるところはない。ただし、声調を問題にするときは、その調類、調値および声調のかかる単位が問題となる。筆者の分析では、調値を特別な分析対象にせず、調類によって分類することができる。また、声調のかかる単位は語であって、中国側の記述に

¹²蔵文 ' も有声声門摩擦音を表す場合があるが、ここでは除外して考える。

あるような変調を含む音節声調で記述しない¹³。筆者の調査した方言では、調類は語声調で2種から5種の対立を形成する。2種の対立は Rangakha 方言に見られ、これは従来の記述におけるムニャ下位方言群の声調数と一致する。5種の対立は Sogpho 方言、Rwata 方言など少数の方言に見られる。多くは4種の対立を見せる。

声調の現れは、各種方言によってかなり異なり、蔵文との対応関係を得るのは困難である。本論文は声調の対応は議論の対象としない。声調の音声学的観察は、先行研究と比べ粗く、十分な議論の準備が整っていないからである。本論文では超分節音素の類型的特点、すなわち声調か非声調か、また声調の型はどのようなものであるか、それらに言及するにとどまる。しかしその要素が重要な意味を持つときは、積極的に言及する。

5.3 蔵文から見る類型的特点の分析とその地理的分布

ここで行う議論は、先に分析した類型的特点を地域的観点からとらえるということである。方言地理学の手法を参考にし、個別の語の形式を議論の対象にして地図を描き、考察を行う。特に音韻対応の体系性に注意を払うことはせず、ある1つのテーマ、たとえば「蔵文 Py 対応音」というものを基準として、具体例のいくつかを地図化して、その後各種方言がもつ特徴の分析などを行う形をとる。蔵文を基準に扱っても、ある方言にはその方言に本来的な語と異なる方言から借用したものの両方が存在する可能性が高く、対応関係が複数ある可能性を考慮しているからである。

具体的に以下に扱うのは、前節で考察した点よりも、むしろ特に先行研究で特徴的と指摘されているもの、あるいは筆者の調査から特徴的な対応を見せるものについてである。いわゆるプロトタイプの方言特徴に合致しない種々の特徴を把握するときに、現段階の資料で言語地図を用いた考察が有効であると考えられるからである。ここでは、語彙形式を蔵文と対照するという観点から考察するが、これは蔵文との音韻対応を明らかにするというわけではない。

5.3.1 蔵文有声閉鎖音字対応音

蔵文における g, j, d, b, dz などの有声閉鎖音字を語頭に持つ語について、その方言形式について考える。大多数は、先に見たように、無声音化するが、地域によっては有声音として実現する。方言地図を用いてそのことを視覚化してみる。

¹³譚克讓(1984)は2音節語の変調のタイプに方言差が見られるとし、それを2つの型に分類している。この差異は、現段階の筆者の分析には反映されていないが、将来的には検討しなければならない可能性がある。

ここでは言語地図の直接的効用として、「ある特徴の地域的限定的分布」の明確化が行われる。

5.3.1.1 *du ba* 「煙」

藏文 *du ba* 対応形式の第1音節初頭子音として、Askyirong 方言、Babzo 方言など極めて少数の方言において有声音 *d* として現れる。

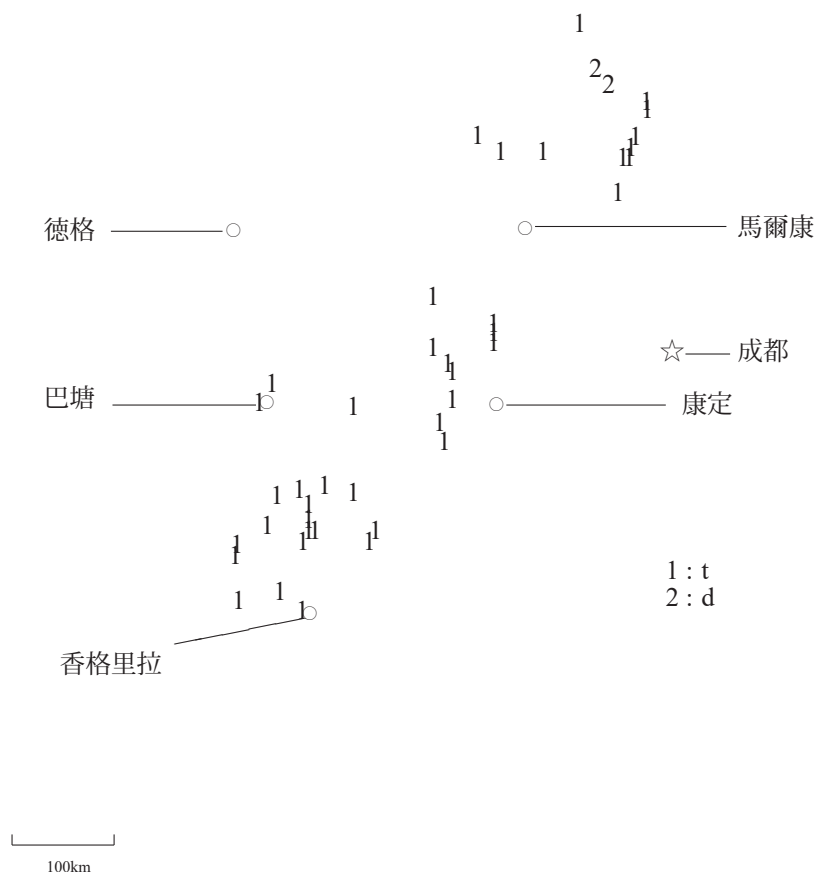


図 5.5: *du ba* の初頭子音言語地図

この地図は若爾蓋県巴西区のチベット語方言¹⁴を除いて無声音で実現することを示している。ただし、音声学的側面に注目すれば、多くの方言が半有声音として実現することを注記しておく必要があるだろう。

いずれにしても、特別注意を払う必要があるのは、若爾蓋県巴西区のチベット語方言が特異な特徴を示している点である。

¹⁴孫天心 (2003) の Chosrje 方言も、同論文に挙げられている例から考えれば、含まれる。

5.3.1.2 *bod* 「チベット人」

藏文 *bod* 対応形式の初頭子音として、直前の「煙」と分布は似ているが、いわゆるアムドチベット語では半母音になり *w* として現れる地点もある。

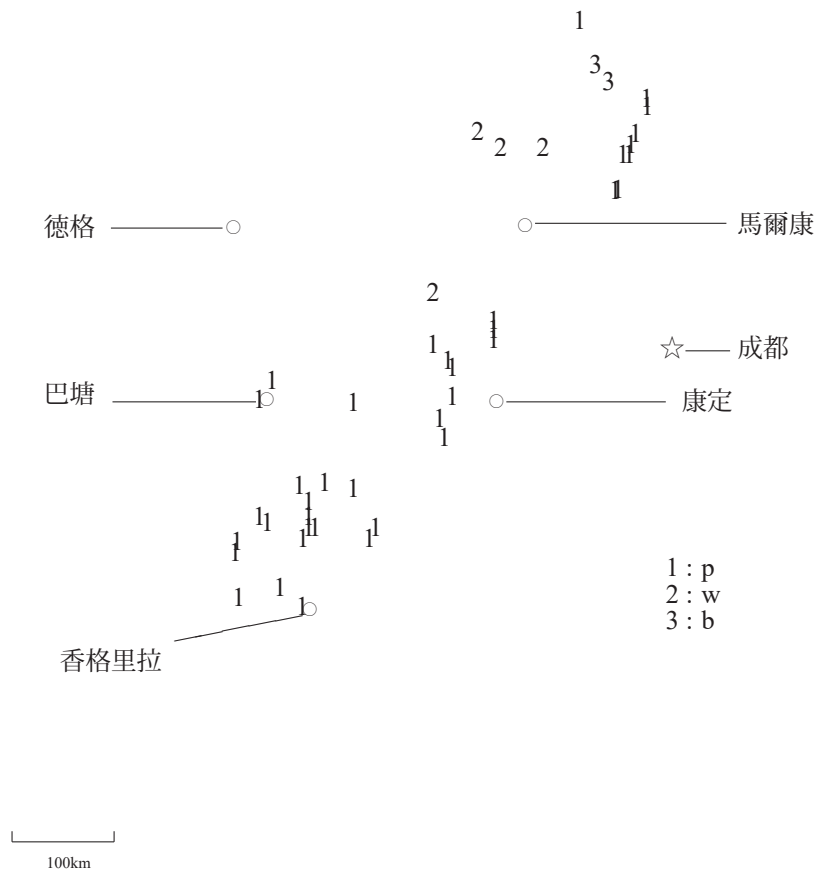


図 5.6: *bod* の初頭子音言語地図

孫宏開(1987)や西田・孫(1990)は松潘・九寨溝地区のチベット語方言では *bod* 対応音に *w* が現れると述べているが、以上の地図から分かるように、土地の方言としては *p* が現れて、事実と異なっている。ただし、筆者の調査において、同地域にも *wot* という形式が存在し、これは「丁寧な言い方」であるという¹⁵。*w* が現れる方言がアムドチベット語であるとする、*w* が現れない方言はアムドチベット語ではないとする考えも決して特異ではない¹⁶。これがヒャルチベット語の分類に通じる点でもある。

¹⁵筆者はこの形式についてアムドチベット語からの借用と理解している。おそらくアムドチベット語が当地の社会的上位言語として考えられていることによるのであろう。それゆえ、上の地図にはヒャルチベット語に *wot* という形式は扱われない。

¹⁶西田(1970:165)にも、「チベット」という語の初頭子音の現れで方言分類の見当をつけられる旨の言及がある。これはおそらく現代の方言分類にも通用する基準であろう。

5.3.1.3 *brag* 「岩」

この語での注目点は、足字を含んだ場合の現れである。蔵文 *brag* 対応形式の *br* というつづりに対応する現れに注目するが、これも先の2つと同様の方言で有声音として現れる。以下の地図は有声音性にのみ注目した結果を示す。

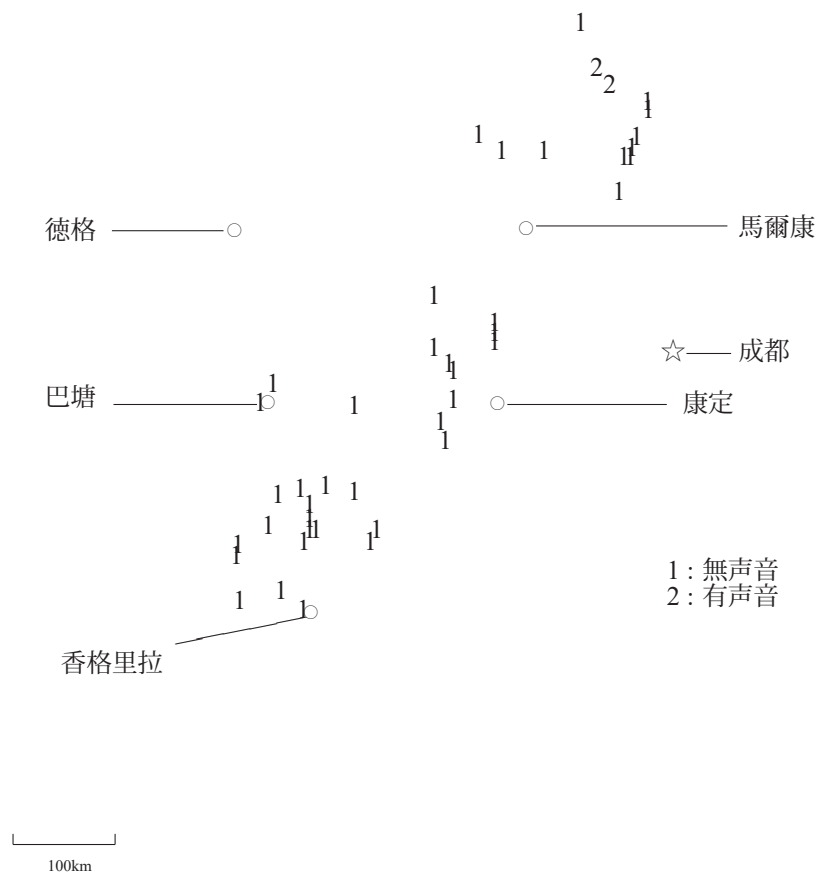


図 5.7: *brag* の初頭子音言語地図

これは先例「煙」と同じ地図となっている。蔵文の基字が有声音字であれば、有声音性に関する対応は若爾蓋県巴西区の方言が特異であることが理解できる。

5.3.1.4 *rdo* 「石」

蔵文において、有声閉鎖音字に先行する子音がある場合は、対応関係が異なってくる。ここでは蔵文 *rdo* の *rd* のつづりについての、各種方言の対応音を地図化して示す。

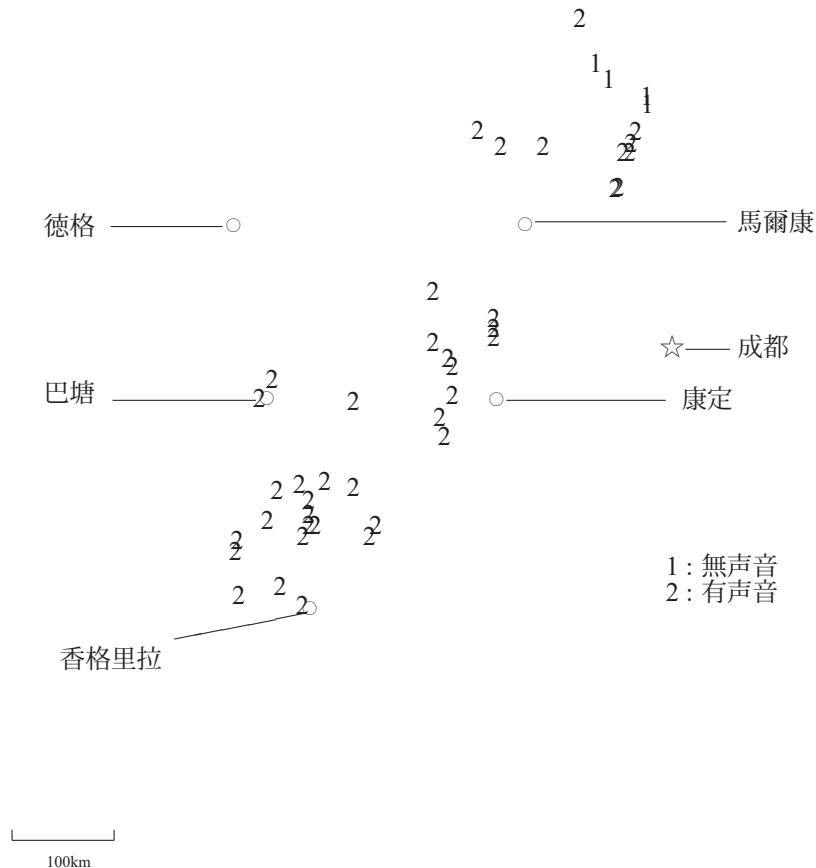


図 5.8: *rdo* の初頭子音言語地図

若爾蓋県巴西区が特異な対応関係を持っているのはこの場合も同じであって、他の方言と逆の対応関係を持っているだけである。ところが、若爾蓋県巴西区に東接する九寨溝県に分布する方言でもまた巴西区の方言と同様の対応をもっている¹⁷。これが特徴的なのは、地図にするとよく理解できることである。

¹⁷ただし単に無声音で実現するのではなく、有声前気音が必ず先行する。

5.3.2 蔵文非共鳴有声音字対応音

先に述べたように、蔵文非共鳴音有声音字 *z*, *zh* の対応音にも地域差異が見られる。それを地図化することを通じて分布を明らかにする。ここでは *z* を例にとって考える。

5.3.2.1 *za ma* 「ごはん」

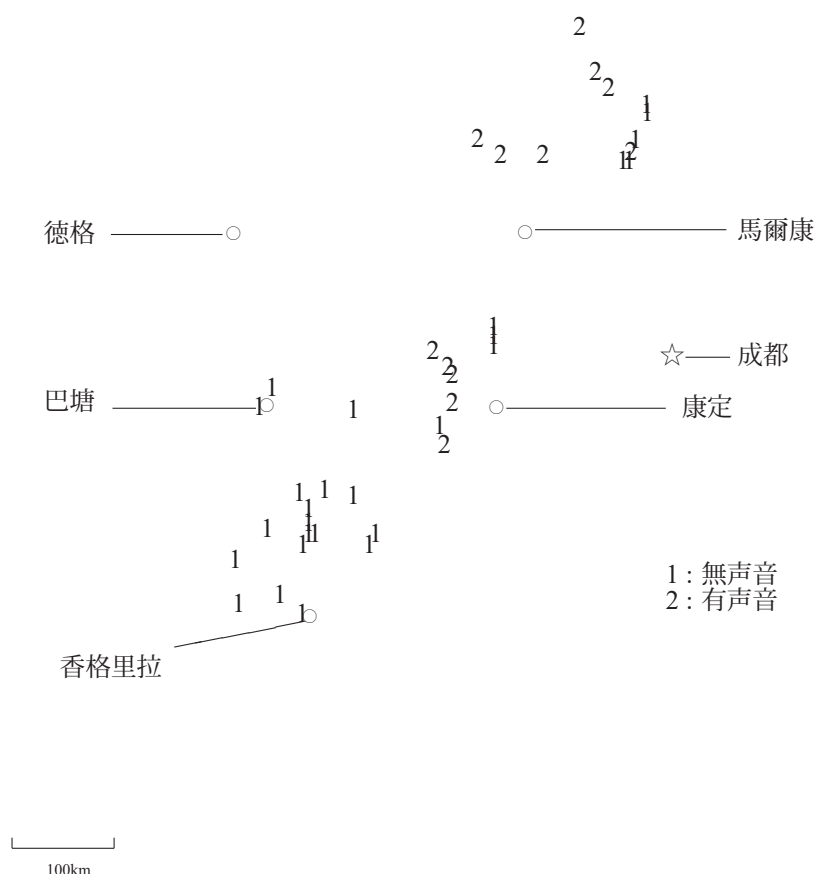


図 5.9: *za ma* の初頭子音有声性言語地図

摩擦音の場合、閉鎖/破擦音と比べて有声音で実現する方言が増えている。「九香線」北部（若爾蓋県巴西区含む）とムニャ方言群が有声音として現れる。

なお、丹巴県や「九香線」南部の方言では、蔵文 *za ma* とそのまま対応する形式を用いていないが、たとえば Sogpho 方言'se、Budy 方言'se は蔵文 *za ma* の第 1 音節と関連があるだろう¹⁸。Sagong 方言'sē や rGyalthang 方言'sē ṽtɕʰaʔ の第 1 音節は

¹⁸ 厳密に語義に忠実である場合、蔵文 *za ma* を「ごはん」という日常語の意味ではなく「食物」といったやや硬い表現が適切になるような使い方をする方言がある。ここでは蔵文対応音を優先して扱っていることを断っておく。

蔵文 *zan* 「食物」の対応形式であると考えられるが、蔵文 *za ma* と同源であるため、特に区別して扱っていない。

5.3.2.2 *bzang* 「美しい/よい」

蔵文非共鳴音有声音字に先行する子音字がある場合を蔵文 *bz* の対応形式で代表させて考える¹⁹。

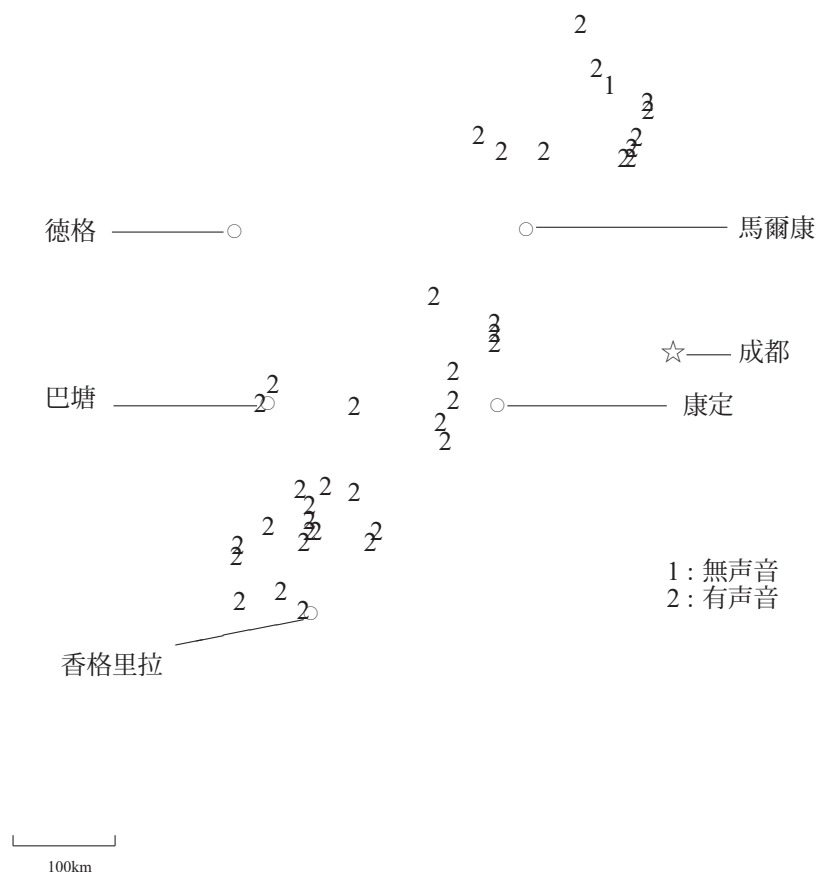


図 5.10: *bzang* の初頭子音有声音性言語地図

地図が明らかにするように、ただ 1 地点を除いてすべて有声音として現れる。無声音で現れるのは Babzo 方言である。

¹⁹*bzang* は地域によって多様な意味をもち、「美しい」や「よい」という意味で用いられない方言も多い。ここでは先の「ごはん」と同様、蔵文との対応を基準として扱っていることを断っておく。

5.3.3 蔵文 sh/zh 対応音

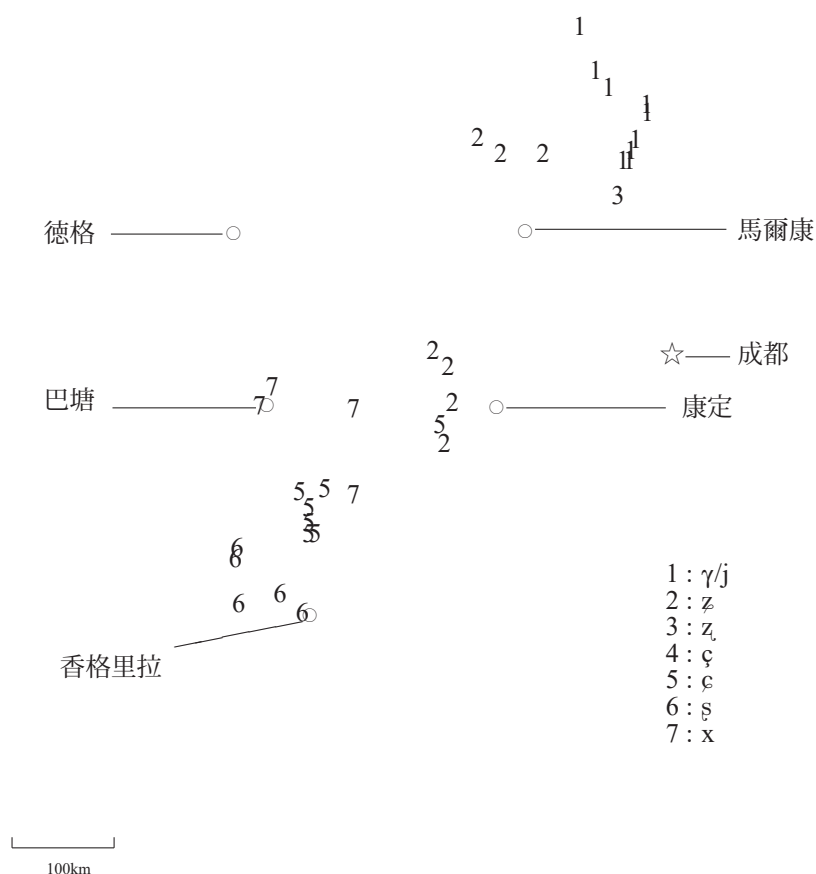
川西民族走廊に分布するチベット語方言について、蔵文 sh/zh に対応する音韻は一定していない。しかしその中にも、いくつかのパターンが見られる。

先に具体的な現れを地図化し、その後いくつかの問題点について特に考察する。

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *zho* 「ヨーグルト」
- *bzhi* 「4」
- *sha* 「肉」
- *shing* 「木、薪」

最後に Sun (2003b) の記述に注目し、蔵文 sh/zh 対応音について他の方言の事例について議論する。



5.3.3.2 bzhi 「4」

ここでは、蔵文 *bzhi* の *bzh* の部分に関する対応音の主子音の現れを地図化して示す。

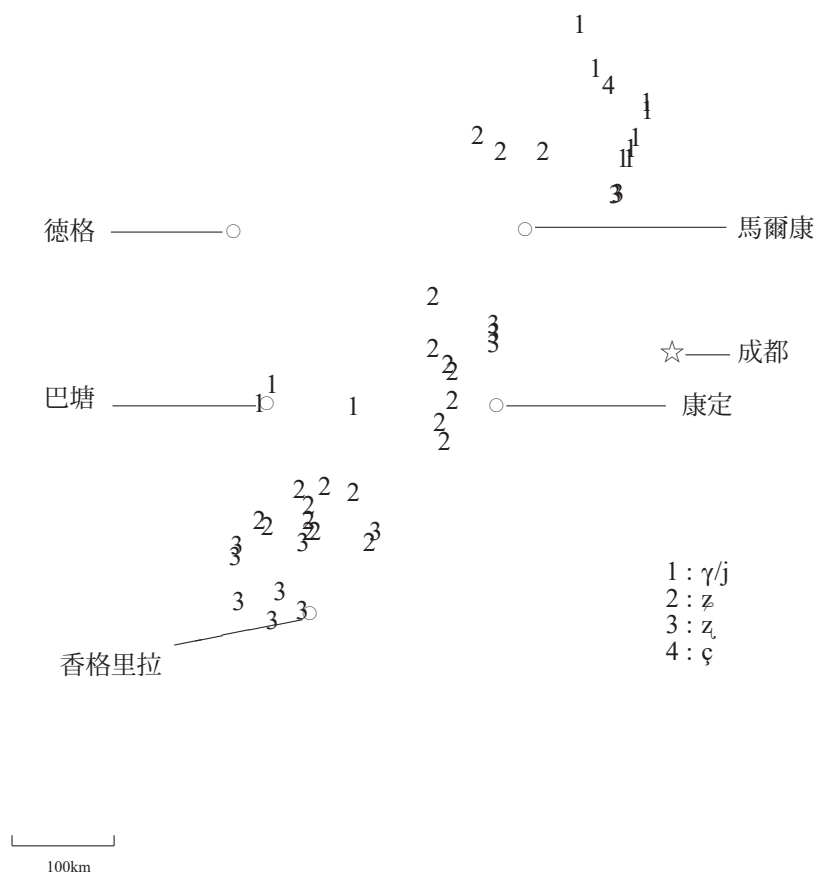


図 5.12: *bzhi* の初頭子音言語地図 (=図 5.1)

この地図では、限定的な地点、具体的には Babzo 方言を除くと有声性の問題は見られず、基本的に有声音で対応する。調音点は、先の「ヨーグルト」の例と大きく変わらない。

5.3.3.3 sha 「肉」

以下に地図化するのは、対応音の調音点に注目したもので、有気性については問わない。

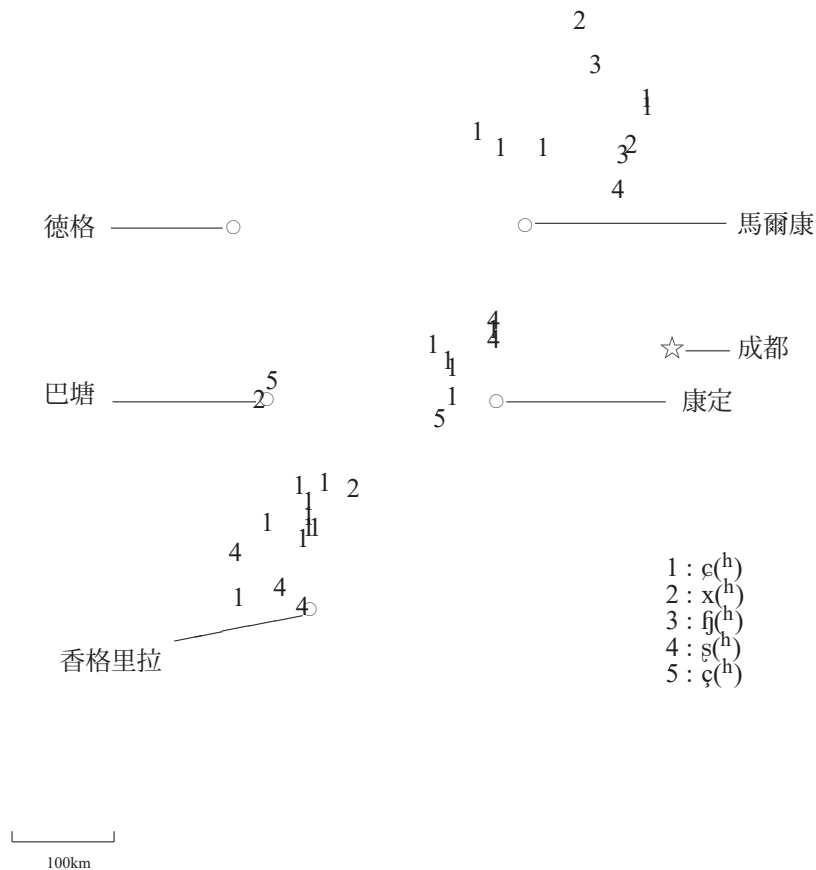


図 5.13: sha の初頭子音言語地図

蔵文 sh 対応形式を考えると、ʃ^(h) の存在が蔵文 zh 対応形式の場合と異なる。ʃ^(h) は調音音声学上 ɕ^(h) と x^(h) を同時調音したような音声実態となるが、これがアムドチベット語とヒャルチベット語の一部に見られる。

そり舌音が現れる方言は、先に見た「ヨーグルト」「4」に比べて少なく、同一方言でも対応関係が一定でないことが分かる。Sogpho 方言では、「4」がそり舌音になるのに、「肉」は前部硬口蓋摩擦音として現れるといった具合になっている。

ただし「肉」の例で蔵文 sh 対応形式がそり舌音でない場合でも、他の語がそり舌音に対応する事例もある。

5.3.3.4 *shing* 「木、薪」

以下に地図化するのは、対応音の調音点に注目したもので、有気性については問わない。

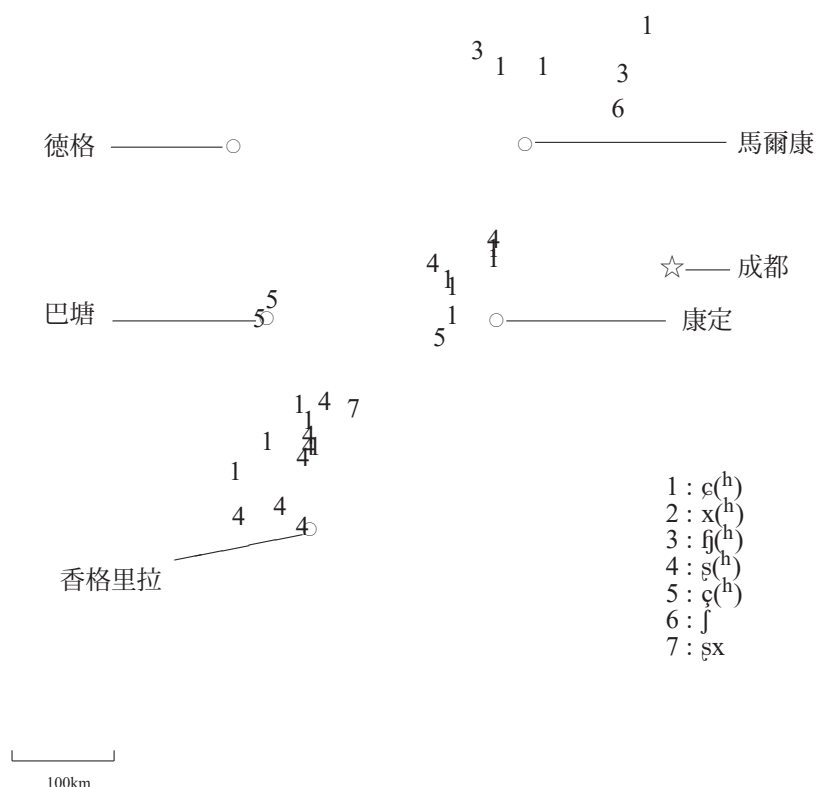


図 5.14: *shing* の初頭子音言語地図

先に見た「肉」と調音点が異なっている地点が多く、藏文 sh に一律の音韻対応が見られるのではないということを多くの方言で示すものである。この点は Sun (2003b) が指摘し、後続の母音の性質と関わっていることを示した。これについてはすぐ後に取り上げる。

「肉」の初頭子音と調音点が異なっている方言は、Sun (2003b) の Zhongu 方言のほか、rNgawa 方言、dGudzong 方言、Morim 方言、Sagong 方言、Phrengme 方言、gDongsum 方言、nDappa 方言、Yungling 方言、Budy 方言など、地域的なカタよりがなく全体に見られる。このうち、議論になるそり舌音と非そり舌音が入れ替わっているのは rNgawa 方言以外すべてである。

5.3.3.5 論点

以上のような対応を示す中で問題とすべきは、Sun (2003b) が明確に指摘しているように、蔵文 sh/zh がそり舌音に対応しているということである。そして、/z/ と /r/ が対立するということである。たとえば Zhongu 方言では、rə 「山」と zə 「4」のようになっている。また Zhongu 方言では、すべての蔵文 sh/zh がそり舌音に対応するわけではなく、母音の性質によって分布に制限があると分析している。特に、現在の音形式で前舌狭母音 i に先行する蔵文 sh/zh 対応音は、それぞれ f/ɣ になり、たとえば ji 「木」 *shing* や zi 「烟」 *zhing* となって現れる。ここではさらに、Zhongu 方言の非そり舌音対応音が周辺に分布する他の方言に見られる軟口蓋音 ŋ/x/ɣ ではないことにも注目できる。

このような事例は、/z/ と /r/ が対立する方言で共通しているわけではない。Nyishe 方言のように、一貫して蔵文 sh/zh がそり舌音に対応するものや、Sogpho 方言のように分布の条件が定められないものがある。実際 Nyishe 方言や sProsnang 方言では、後に扱うように、蔵文 C 対応音までもほぼ一貫してそり舌音として実現される点が他の方言には見られない特徴となっている。

さらに特異な例として、蔵文 zh がそり舌性を帯びる点で調音方法は似ているが、それが /r/ に対応する方言がある。たとえば gDongsum 方言で、rə^htɕu 「40」 *bzhi bcu* がある。このタイプは dGudzung 方言にも見られる。ただし gDongsum 方言に /z/ は存在しないが dGudzung 方言にはそれが存在することが大きな相違である。

蔵文 zh の対応と並行して、蔵文 sh もそり舌音に対応する。この対応も、先にあげたものと同じく、蔵文 zh がそり舌音として現れる方言に確認される。/z/ と /r/ が対立するのと平行して、/z/ と /r/ が対立する方言もある²¹。このような問題は、後の節で音素の分布というテーマで再度地図化して考える。

そり舌音として現れるのは、以上に見てきた方言の分布から地図化すると明確になるように、ほとんどすべてチベット語分布地域の端に分布している。言い換えれば、他の言語文化圏と接している地域ということで共通性が見られる。逆の観点から見ると、チベット語分布地域の端に分布しながら、この対応関係を体系的に見せない方言も存在することになる。「九香線」の上について考えるならば、Chaphreng 方言をはじめ郷城県の方言群、Phyugtsi 方言など九寨溝県の方言群が相当する。ただし、このうち南部の方言について、gDongsum 方言 `ši mō、Phrengme 方言 `ṣhī mū などのように「木」(蔵文 *shing*) の対応音にそり舌音が現れるのは、上に述べた Zhongu 方言 ji の形式についてそり舌音と非そり舌音の対応関係が逆となっている。そのため

²¹ この場合はむしろ /r/ の存在の方が際立っているかもしれない。

Sun (2003b) の分析は Zhongu 方言の個別的な事例について当てはまることを確認することができる。なお、郷城県の方言群などに見られるそり舌音の現れについては、音対応の関係とともにそり舌音を通常の蔵文 sh/zh 対応形式とする rGyalthang 方言など周辺の方言からの借用関係を考える必要がある²²。

5.3.4 蔵文 P 対応音

蔵文 P は、蔵文で両唇音とそれに先行する子音字があるものの組み合わせで、かつ両唇音のすぐ後に母音が来るものをさす。

具体的には蔵文 p, dp, sp, lp, ph, 'ph, b, db, 'b, rb, lb, sb, m, dm, rm, sm があるが、ここでは後の議論とも関連するいくつかについて限定的に取り上げ、各種方言に見られる対応形式に言及する。いくつかの例については地図化しない。対応形式を十分に各種方言で収集できていないことに起因する。

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *spu* 「毛」
- *lpags pa* 「皮」
- *phag* 「ぶた」
- *'phen* 「投げる」
- *dbug* 「空気」
- *sbal ba* 「蛙」
- *mi* 「人」
- *med* 「ない」

²²郷城県の方言群について、蔵文 sh/zh 対応音の例を補っておくと、Phrengme 方言 *'ŋo s^he* 「知り合い」(蔵文 *ngo shes*)、*s^hi?* 「しらみ」(蔵文 *shig*) など、母音が前舌で調音点が高いものが複数ある。

5.3.4.1 *spu* 「毛」

蔵文 *spu* 対応形式は、初頭主子音について以下に地図化して示す。

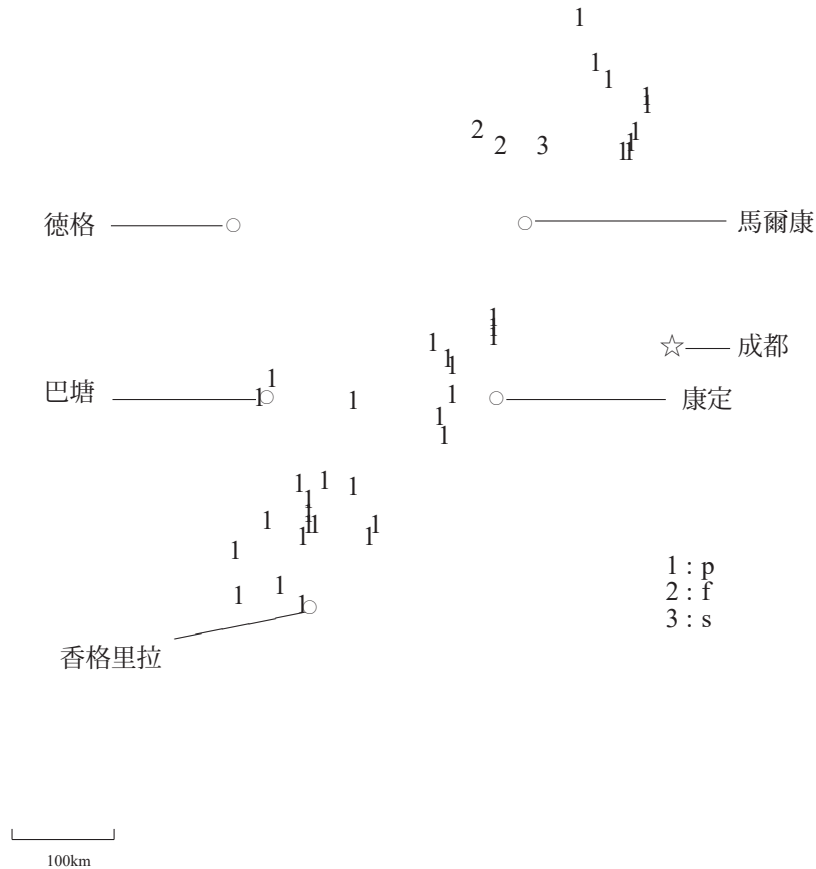


図 5.15: *spu* の初頭子音言語地図

広く両唇閉鎖音で対応する方言が見られるが、アムドチベット語では両唇閉鎖音で現れない。具体的には rNgawa 方言 ^hfui、dMarthang 方言 ^fsui などのように現れる。dMarthang 方言は主子音は歯茎音だが、初頭には唇歯摩擦音を伴う。

5.3.4.2 *lpags pa* 「皮」

「皮」という語には、蔵文 *lpags pa* のほかに初頭子音 l のない *pags pa* も存在する。よってこの語の方言対応形式は、どちらに由来するのか明確に出てこない可能性もある。ここでは、*lpags pa* に来源する特徴的な形式の例をあげる。

rNgawa 方言 ^hfək は蔵文 l に対応することが明示的に発音に現れる。

Askirong 方言 ^hbaʃ pa は有声化して現れる。

5.3.4.3 *phag* 「ぶた」

蔵文 *phag* 対応形式は、初頭主子音について以下に地図化して示す。

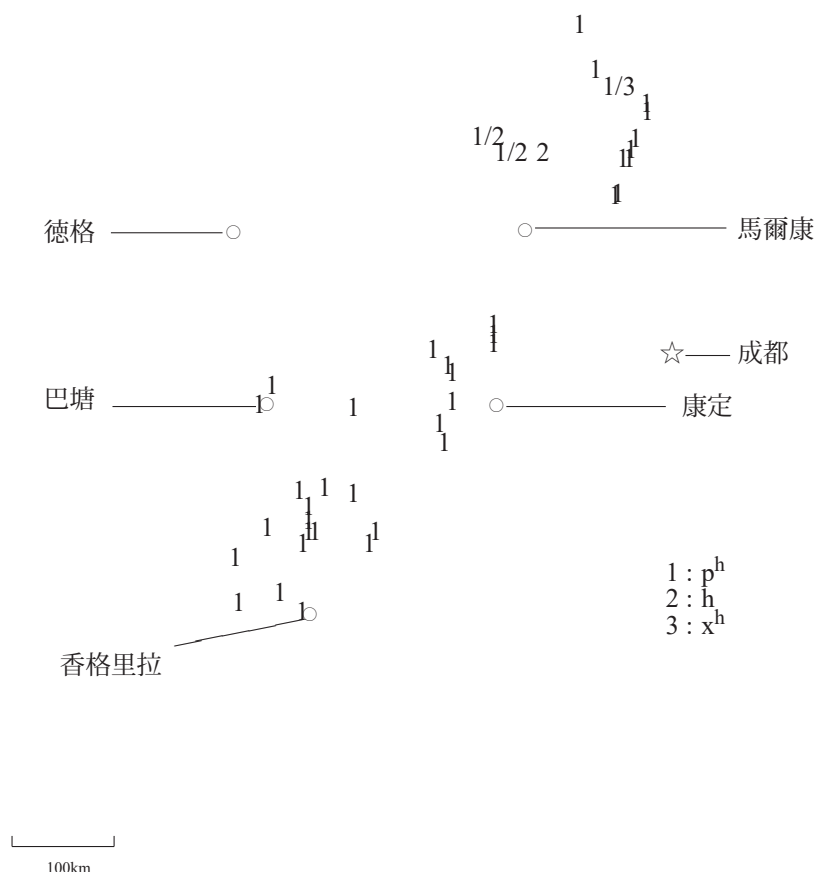


図 5.16: *phag* の初頭子音言語地図

広く両唇閉鎖音で対応する方言が見られるが、アムドチベット語では両唇閉鎖音で現れないものがある。dMarthang 方言では haq のみが現れるが、rNgawa 方言では p^heq と heq が許容される²³。同様の現象は Babzo 方言にも見られ、p^hα: と x^hα: が許容される²⁴。

²³ただし後者の haq は「ぶた年」の意味で用いられることが多い。

²⁴アムドチベット語で蔵文 ph が h や x, ɣ で現れるのは、方言及び語によって異なっていることが華侃 (1983) に報告されている。ただし、1 方言内で語によってゆれがあるかどうかは述べていない。

5.3.4.4 'phen 「投げる」

この形式については、蔵文 ph 対応形式との分布と重なって、極めて特異な次の事例を述べるにとどめる。

rNgawa 方言では蔵文 'phen の対応形式に ^hhən、^hhon、^mp^hen の3種が現れるが、特に先の2種の形態に注目する。蔵文 ph が /h/ に対応するのは「ぶた」の例と共通するが、それに先行する蔵文' が前鼻音に対応し、声門摩擦音に先行する形式になっている。この音声実態は鈴木・イエシエムツォ(2006)に述べたが、^hhən は音声的には [^hhən] となる。このような形式を持つのは、蔵文 ph が /h/ に対応するアムドチベット語に限られる。

5.3.4.5 dbugs 「空気」

この語は収集できた方言が少ないため、地図化は行わない。

「九香線」北部では、Sharkhog 方言 wuʃ、dMarthang 方言 ʔuɪ などのように現れる。

一方で、「九香線」中南部では dGudzong 方言 ʔpuʔ、gDongsum 方言 ʔbuʔ、Sagong 方言 ʔbuʔ、Rwata 方言 ʔbuʔ、Ragwo 方言 ʔbuʔ、Yungling 方言 ʔpuː xwa などのように、両唇閉鎖音で現れるものがある。

蔵文 db 対応音に関しては、川西民族走廊以外の地域のチベット語の情報を参照すると明確になる。Lhasa 方言をはじめ中央チベット語では、蔵文 db は口語形式で脱落して ʔ で対応する傾向がある²⁵。この対応関係は、川西民族走廊でも上にあげた dMarthang 方言 ʔuɪ や mBathang 方言 ʔuʔ などに見られる。

以上のことから、「九香線」中南部の方言が見せる両唇閉鎖音の形式が、極めて特異であるといえる²⁶。

²⁵これについて、ʔ は音声学的に現れるということで音韻に表さないという分析をとる場合には、高声調ではじまる語で初頭が母音の場合は声門閉鎖を伴う、といった分析が与えられている(江荻 2002b:121)。

²⁶西(1986:886)は、蔵文 db 対応形式が両唇閉鎖音となる方言について、迪慶州周辺のチベット語のほか、ゾンカ語を含むチベット語南部方言に限定的に見られることを述べている。そしてここでの考察から、少なくとも九香線上の地域では迪慶州周辺以外の方言で見られないことが確認されたと考える。

5.3.4.6 *sbal ba* 「蛙」

蔵文 *sbal ba* 対応形式は、初頭主子音について以下に地図化して示す。

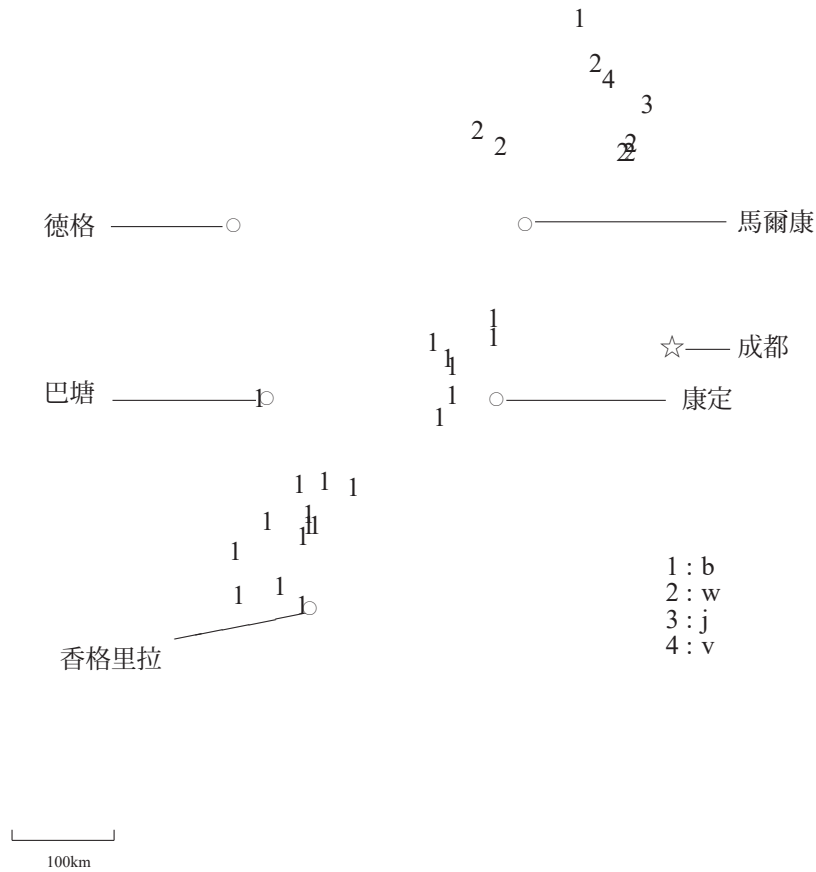


図 5.17: *sbal ba* の初頭子音言語地図

広く両唇閉鎖音で対応する方言が見られるが、ヒャルチベット語では両唇閉鎖音で現れないものがある。たとえば Askyirong 方言²⁷wa wa、Sharkhog 方言 weɛ wa、そして Babzo 方言²⁷vi: ja や Phyugtsi 方言 je wa も蔵文 *sbal ba* の対応形式と考えられる²⁷。

²⁷Phyugtsi 方言 je wa と酷似する形式は格桑居冕・格桑央京 (2002:102) の Derge 方言 jeɽbaɽ (筆者の表記では`je ba) に見られる。

5.3.4.7 *mi* 「人」

蔵文 *mi* 対応形式は、初頭主子音について以下に地図化して示す。

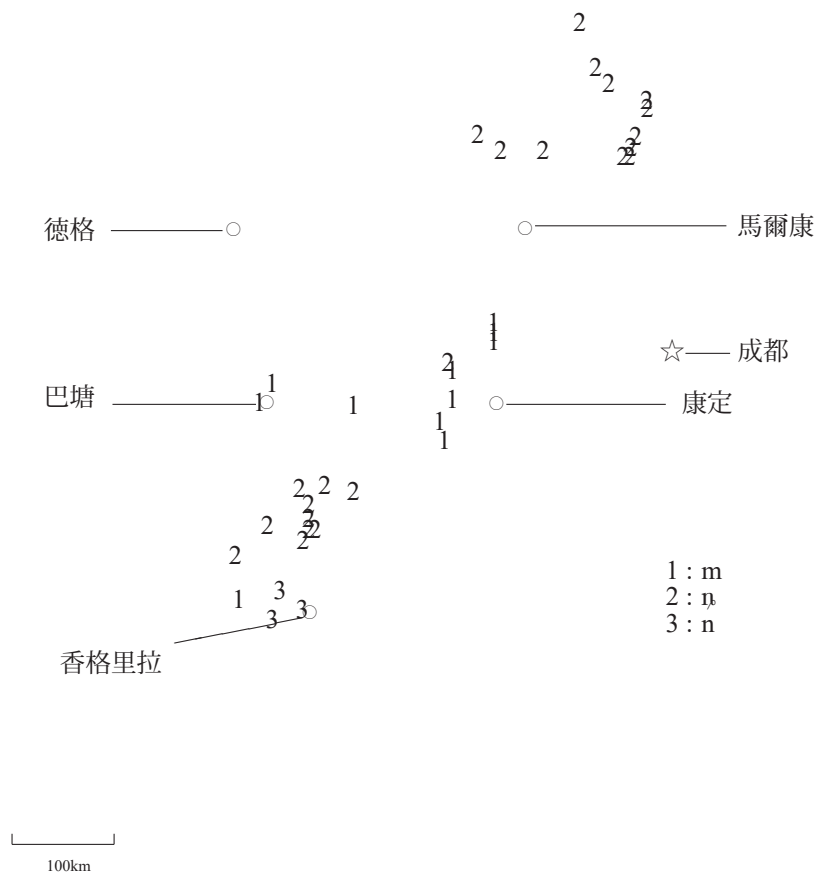


図 5.18: *mi* の初頭子音言語地図

広く見られる形式は、蔵文 *mi* から想定される両唇音ではなく、前部硬口蓋音である。アムドチベット語、ヒャルチベット語は調査した範囲では全ての方言が前部硬口蓋音で現れる。両唇音で現れるのは「九香線」中部が主で、郷城県をはじめその周辺域は、ほとんどが前部硬口蓋音で現れる。香格里拉県の方言は歯茎音で現れるが、これは蔵文 *mi* 対応形式かどうかは断定しがたいけれども、地図には地点を表しておいた。

5.3.4.8 *med* 「ない」

藏文 *med* 対応形式は、初頭主子音について以下に地図化して示す。

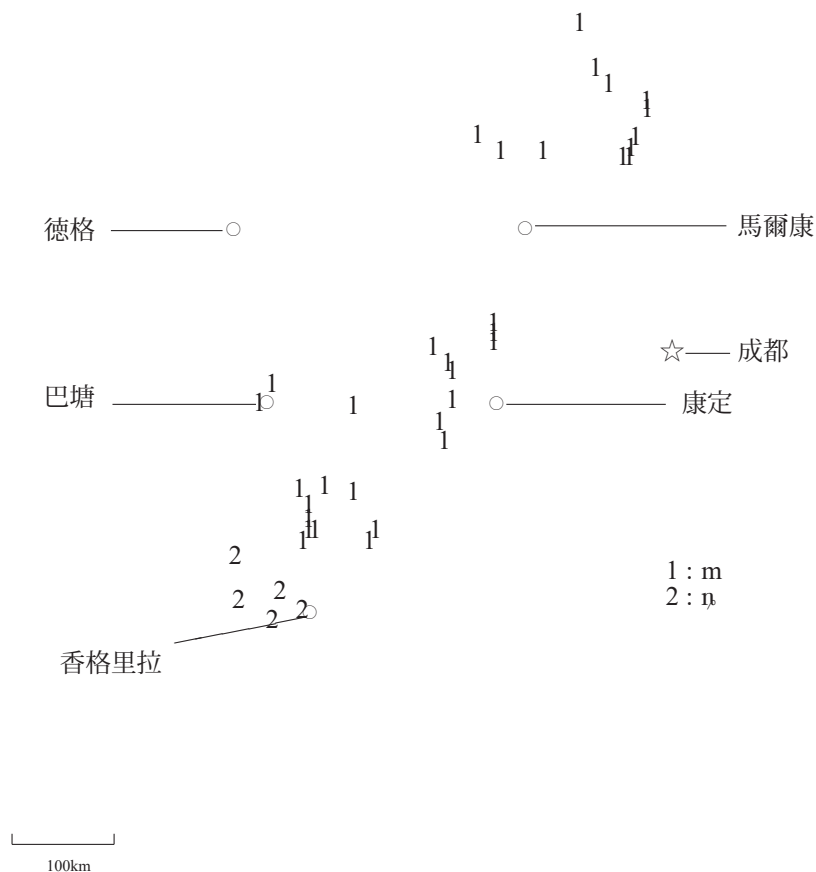


図 5.19: *med* の初頭子音言語地図

広く両唇音で対応する方言が見られるが、迪慶州の方言では基本的に前部硬口蓋音で現れる。前部硬口蓋音での対応は、古藏文 *myed* との対応関係を考える方がよいかも知れない²⁸。

先の「人」と現われの分布がまったく異なっていることが注目できる。このような分布を示す背景には、藏文 *m* と母音の結びつきの強さがあって、前舌高母音が後続する場合は一種の口蓋化現象が広く生じたものと考えられる。

²⁸この点は、後に「火」「目」の語形式を分析する際に取り上げる。

5.3.5 蔵文 Py 対応音

蔵文 Py は、蔵文で両唇閉鎖音と足字 y の結合字を含むすべての形式をさす。そして、問題点是对应する現代語の口腔内での調音方法であり、有声性は考慮に入れない。

それぞれの対応関係は複雑であるから、ここで扱う例は以下のように場合分けができる。

1. 蔵文で一切の前接辞、頭字を伴わない場合、すなわち phy- と by- の対応形式
2. 頭字 s を伴う場合、すなわち spy- と sby- の対応形式
3. 前接辞 d を伴う場合、すなわち dpy- と dby- の対応形式

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *phye* 「開ける」
- *bya* 「鶏」
- *spyang ku* 「狼」
- *sbyong* 「学ぶ」
- *dpyid ka* 「春」
- *dbyar kha* 「夏」

5.3.5.1 *phye* 「開ける」

以下に地図化するのは、対応する初頭主子音の調音点に注目したものである。

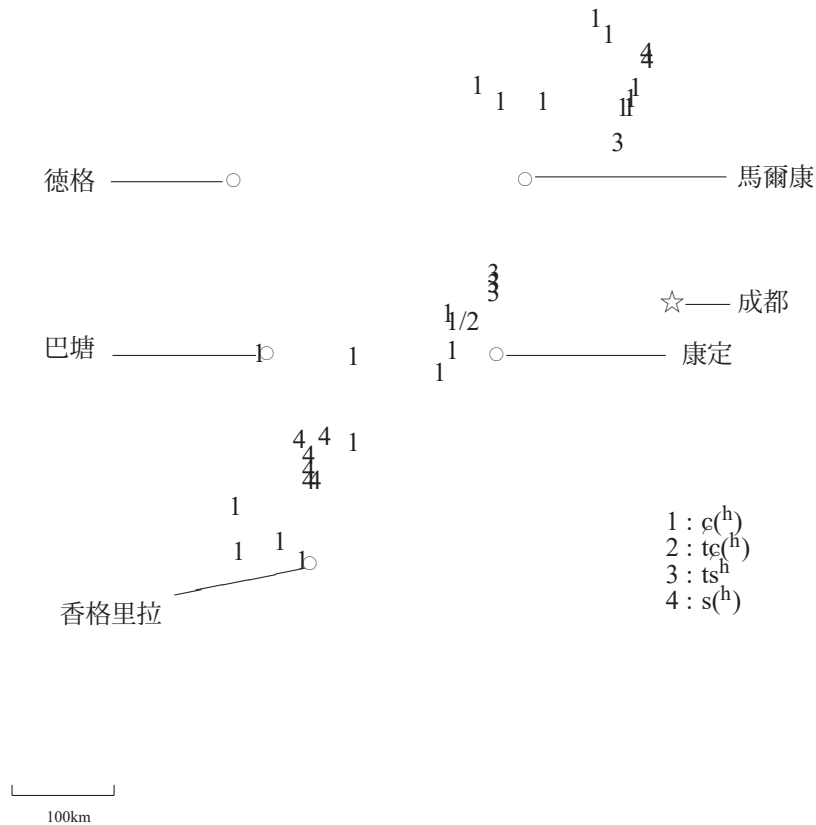


図 5.20: *phye* の初頭子音言語地図

広く見られる対応は前部硬口蓋摩擦音 $\text{ɕ}^{(h)}$ で、場合によっては rNgawa 方言 $\text{ɕ}^h\text{e}$ など、初頭に両唇摩擦音を伴う ɕ^h という形式も見られる。

歯茎破擦音で現れる方言の 1 つは丹巴県のチベット語方言で、同県のすべての方言で両唇閉鎖音を伴う p^hts^h という形式で現れる。ほかに松潘県の Zhongu 方言も歯茎破擦音で対応するが、両唇閉鎖音は伴わない。

そのほか、前部硬口蓋破擦音および歯茎摩擦音で現れる方言も、地域的な限定が見られる。前者はムニャ地域の方言に見られ²⁹、後者は郷城県の方言群および九寨溝県の方言群に見られる。

²⁹ただし Lhagang 方言も Rangakha 方言も前部硬口蓋摩擦音と前部硬口蓋破擦音の 2 種類の形式が並存する。

5.3.5.2 *bya* 「鶏」

以下に地図化するのは、対応する初頭主子音の調音点に注目したものである。

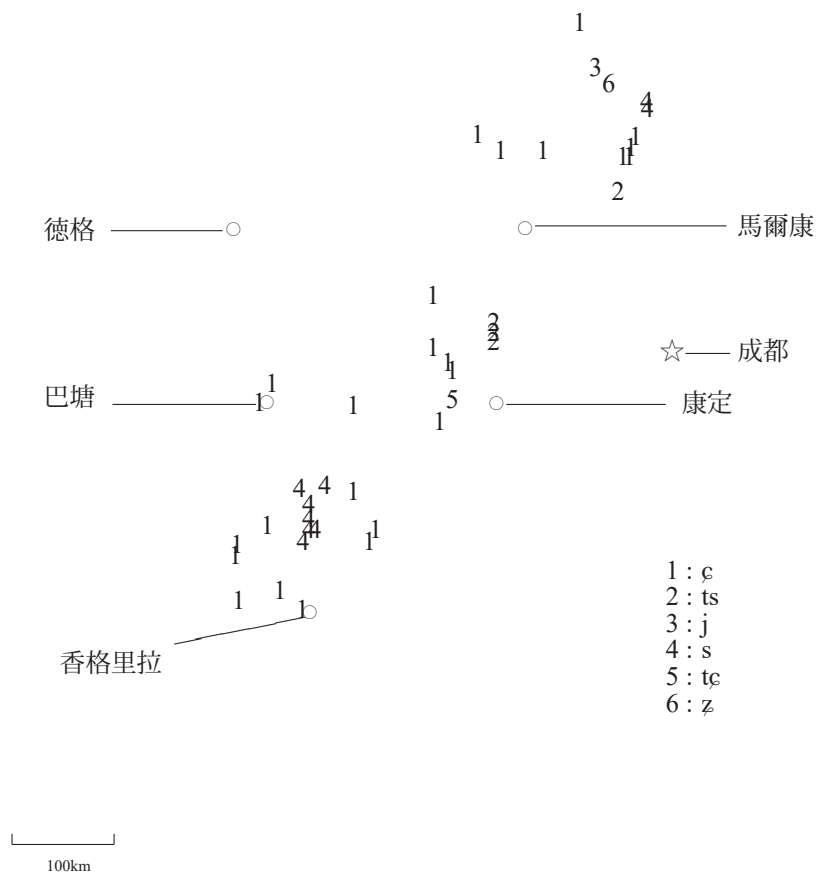


図 5.21: *bya* の初頭子音言語地図

調音点上の差異は蔵文 *phy* の場合と大きく変わらないが、有声性の観点からさらに2分されるため、分布が複雑になっているように見える。ただしムニャ地域の方言の事例は異なり、「鶏」は *Lhagang* 方言では前部硬口蓋摩擦音で、*Rangakha* 方言では前部硬口蓋破擦音で現れていて、「開ける」の事例と摩擦音/破擦音の対応関係に異なりがある。また、調音点ごとの有声音・無声音の対応を考えた場合、ɕ/ʐは両方そろっているが、ほかの調音点のものはペアがない。

この *bya* という要素を第2音節に持つ複合語などでは、対応する調音点の有声音で現れたり、調音点そのものが異なっているものがある³⁰。たとえば *Phrengme* 方言 'so: 「鶏」 に対し p^hɣ zo 「おんどり」 (蔵文 *pho bya*)、*Sagong* 方言 'so: 「鶏」 に対し ɽmu: jo 「孔雀」 (蔵文 *rma bya*) など。

³⁰中には方言間における借用を疑う必要がある例もあろう。

5.3.5.3 *spyang ku* 「狼」

以下に地図化するのは、初頭主子音の対応関係である。

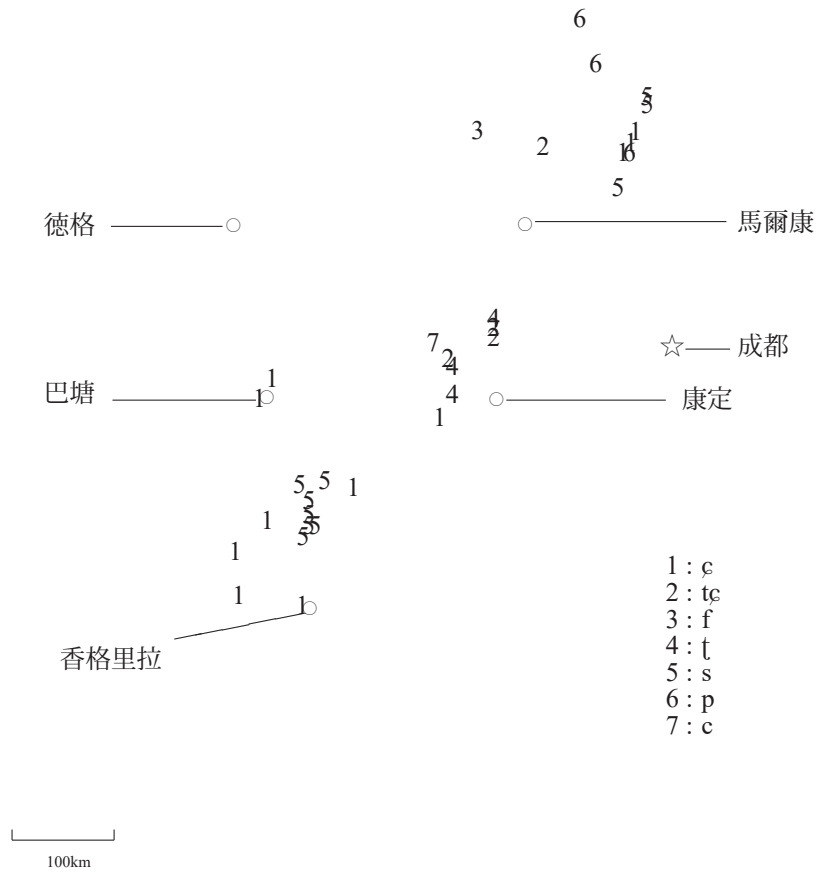


図 5.22: *spyang ku* の初頭子音言語地図

各地でばらばらの対応関係を見せる語の 1 つであることが分かる。ヒャルチベット語や「九香線」南部に ɕ と対応音とする方言群が見られるが、これは地図化されない Derge 方言群とも同様の対応を持ち、実際は比較的広範囲で見られる形式である。

rNgawa 方言に現れる f の音は実際は ϕ f という子音連続を構成し、先に扱った「毛」のような蔵文 sp の対応形式と同じくなる。

九寨溝県および郷城県を中心とする地域に歯茎摩擦音の対応形式を持つ方言が分布し、たとえば Phyugtsi 方言 $^{\circ}s\bar{a} \, \eta gu$ 、gDongsum 方言 $^{\circ}s\bar{a} \, \eta gu$ など。

また、極めて特徴的な対応がある。Rangakha 方言 $^{\circ}t\bar{o} \, k^h u$ や sProsnang 方言 $^{\circ}p\bar{t}\bar{o} \, k^h u$ ではそり舌音が現れる。gZari 方言 $^{\circ}p\bar{a} \, k^h u$ と Askyirong 方言 $^{\circ}h\bar{p}\bar{o} \, k^h u$ では両唇音が現れる³¹。Morim 方言 $^{\circ}h\bar{c}\bar{o} \, \eta k^h u$ は前部硬口蓋閉鎖音をもつ。

³¹ 「狼」がそり舌音や両唇音で対応することは異質であるが、このことが次章で議論する《西番譯語》との関連で重要な意味をもってくる。

5.3.5.4 sbyong 「学ぶ」

以下に地図化するのは、初頭主子音の対応関係である。

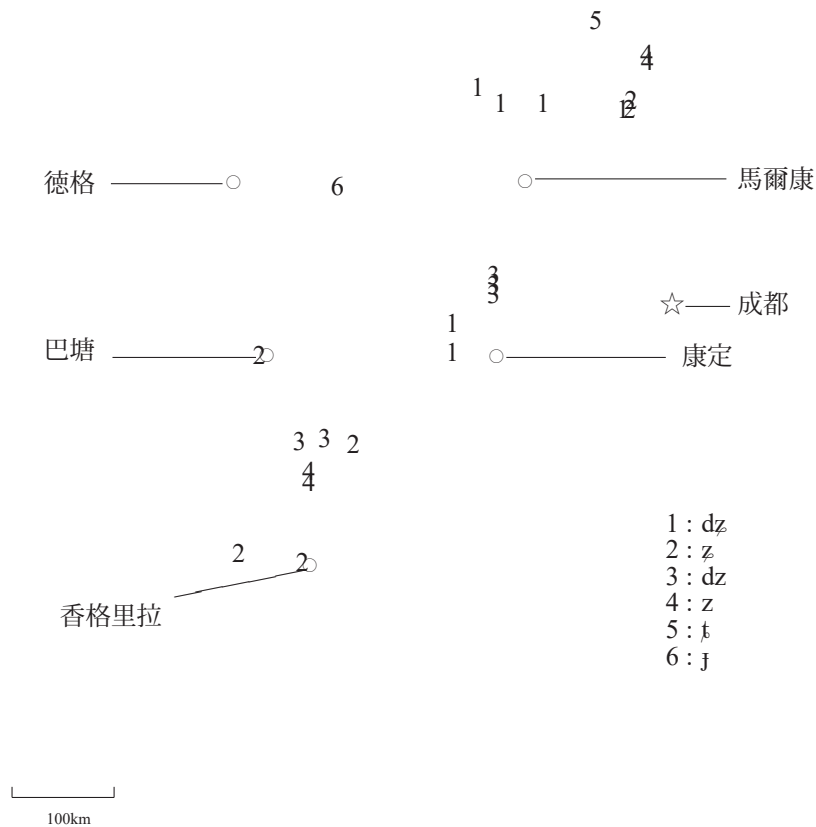


図 5.23: sbyong の初頭子音言語地図

dzとzを対応形式とする方言が広範囲に見られ、また地域的にかたまって異なる調音の対応関係を持つことが見て取れる。一方で、蔵文 spy の形式と基字の有声性が異なっているだけであるが、各種方言における対応形式では必ずしも調音点上の対応関係を示していない³²。

蔵文 spy 対応形式と調音点の対応があり有声性のみが異なっている例としては、九寨溝県および郷城県の一部の方言で、歯茎摩擦音が現れる。郷城県の方言で歯茎摩擦音が現れない方言は歯茎破擦音で対応し、それは丹巴県の方言にも見られる。Askyirong 方言や gSerpa 方言はそれぞれ/t/とʃ/の対応形式をもつが、これらの音素は1つの方言が両者を同時に持たない（後述）ことから、いずれも蔵文 spy 対応形式で現れた/c/音との対応関係が見られ、調音点上は特異な対応ではない。

³² これは単に語彙の問題である可能性も否定できない。

5.3.5.5 dpyid ka 「春」

以下に地図化するのは、初頭主子音の対応関係である。

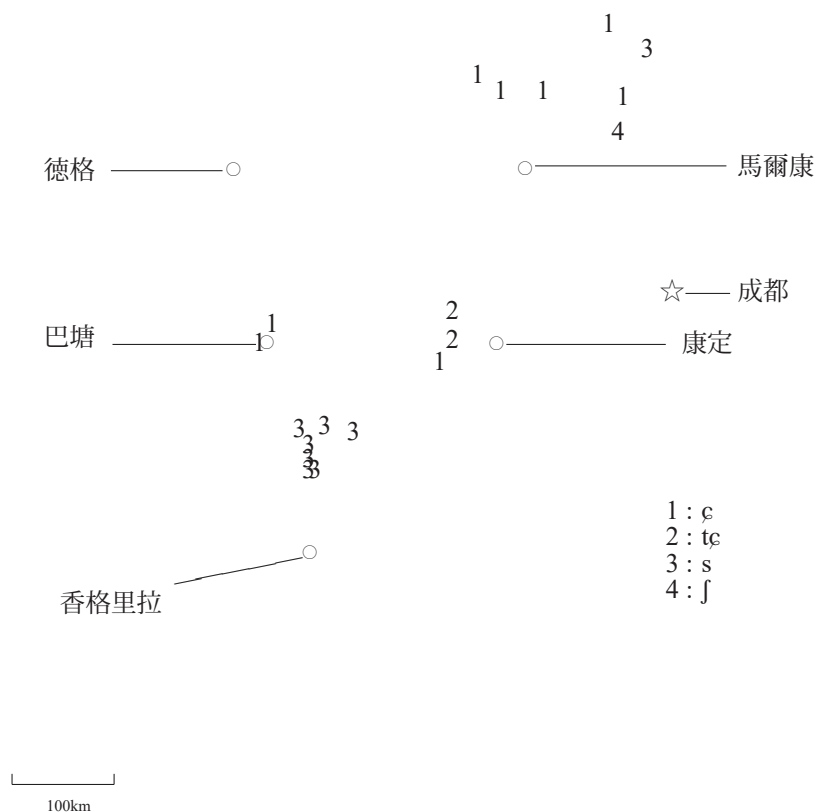


図 5.24: dpyid ka の初頭子音言語地図

この蔵文対応形式を記録できた方言が他の語に比べ少ないため、地点が少なくなっている。

その中で、郷城県および九寨溝県の方言で s が現れる。

5.3.5.6 *dbyar kha* 「夏」

以下に地図化するのは、初頭主子音の対応関係である。

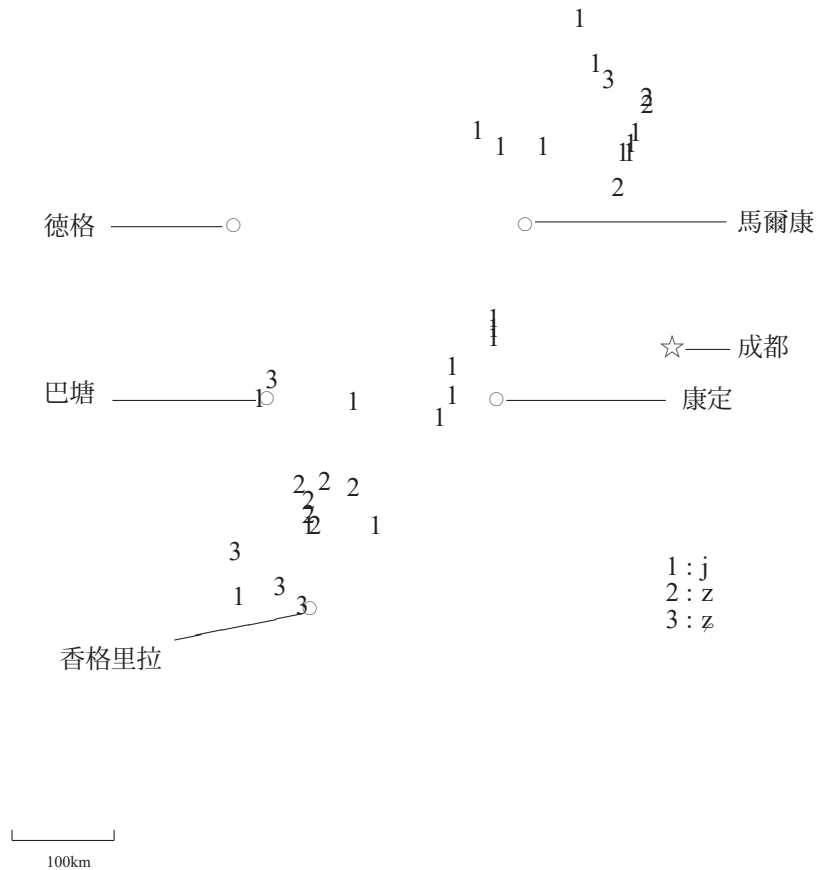


図 5.25: *dbyar kha* の初頭子音言語地図

この語は各種方言で「暑い季節」という意味で用いられるため、先に見た「春」よりも対応語を見出すことができる。

郷城県および九寨溝県の方言などでは *z* が現れ、たとえば Sagong 方言 *zəʔ kə*、Phyugtsi 方言 *za^htsi:* となる。

迪慶州の一部及び若爾蓋県の一部などでは *ʐ* が現れ、たとえば Yungling 方言 *ʐa xa*、Babzo 方言 *zaʔ ka* などである。

蔵文 *dby* 対応音については、先に扱った「空気」の蔵文 *db* 対応形式と同じく、Lhasa 方言をはじめ中央チベット語の蔵文 *dby* が *j*/かつ高声調で対応する傾向がある事例を念頭におくと、郷城県周辺および九寨溝県周辺の方言が極めて特異な対応形式を持っていることがいえる。このことは、後に扱う蔵文 *y* 対応音と関連する。

5.3.6 蔵文 Ky 対応音

蔵文 Ky は、蔵文で軟口蓋閉鎖音と足字 y の結合字を含むすべての形式をさす。そして、問題点是对应する現代語の口腔内での調音方法であり、また蔵文の有声性も考慮することができる。

それぞれの対応関係は複雑であるから、ここで扱うものは以下のように場合分けを行う。

1. 蔵文で一切の前接辞、頭字を伴わない場合、すなわち khy-の対応形式
2. 基字が有声音字で頭字を伴う場合、すなわち rgy-の対応形式
3. 基字が無声音字で頭字を伴う場合、すなわち sky-の対応形式

上の分類にそれぞれ合致する次のような具体例を通して以下に考察する。

- *khyi* 「犬」
- *rgya* 「漢族」
- *skyid po* 「幸せな」

5.3.6.1 *khyi* 「犬」

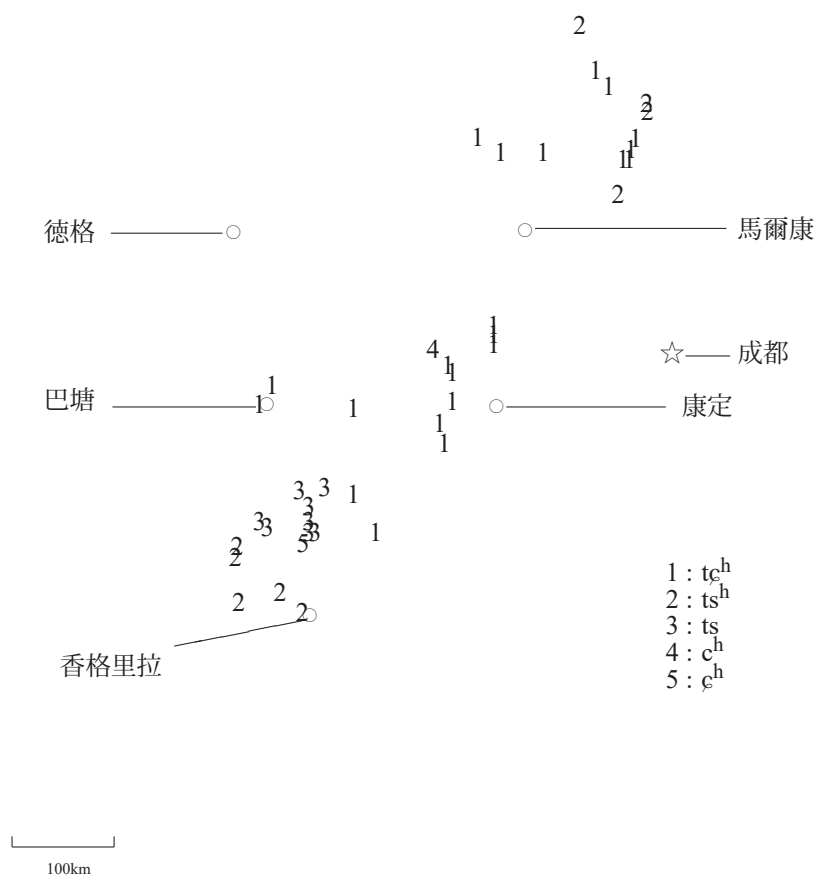


図 5.26: *khyi* の初頭子音言語地図

この語は前部硬口蓋破擦音に対応する方言が多い一方、歯茎破擦音に対応する方言も南部で顕著である。これは先に見た蔵文 Py 対応形式が歯茎摩擦音になる地点にほぼ一致する。

蔵文では有気音字であるが、郷城県の方言を中心に無気音で現れる地点がある³³。

gTorwa 方言 ɕʰə では前部硬口蓋摩擦音が、Morim 方言 tʰə では硬口蓋閉鎖音³⁴がそれぞれ現れ、孤立的分布を示す。

³³この現象は、実際他の地域でも報告されており、シガツェやネパール・中国国境付近に分布するチベット語方言にも見られるようである（西 1987:202）。

³⁴青海省のアムドチベット語牧民方言では硬口蓋閉鎖音に対応する方言が多い。

5.3.6.2 *rgya* 「漢族」

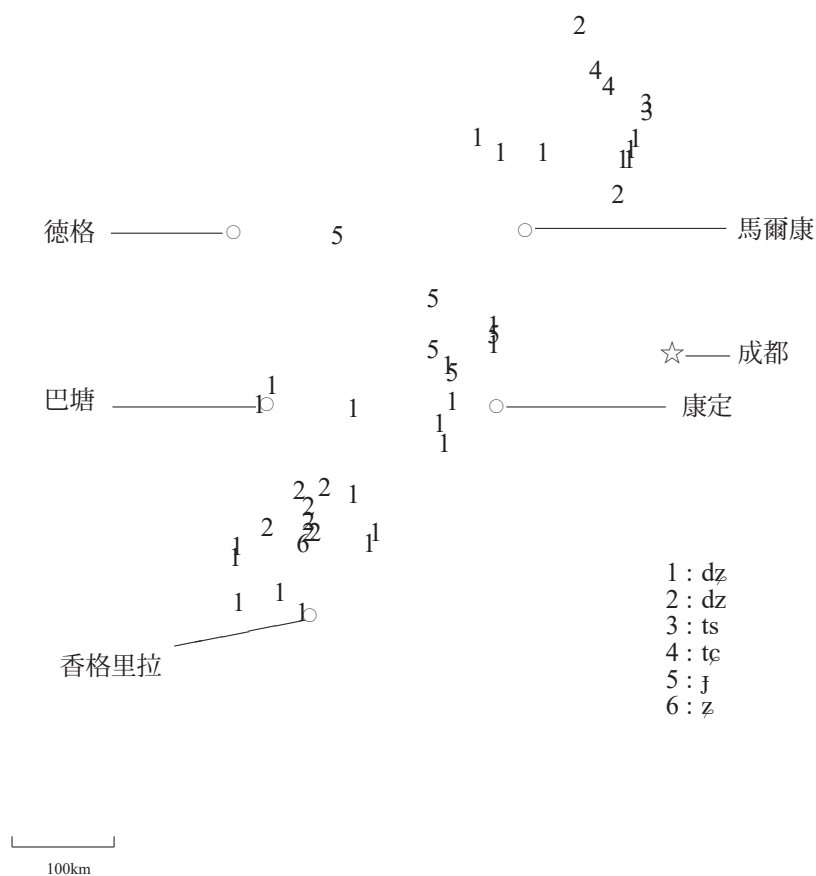


図 5.27: *rgya* の初頭子音言語地図

広く分布しているのは前部硬口蓋破擦音であるが、先に見た蔵文 Py 対応形式が齒茎摩擦音になる地点では対応するように齒茎破擦音で現れている。対応音の有声性の問題は、先に見た蔵文有声音字対応形式の分布にほぼ従っている。

gTorwa 方言¹zɔ では摩擦音になっている点で全体的に見ても特異であるし、分布の面で周辺の齒茎破擦音や前部硬口蓋破擦音との違いが際立っている。

5.3.6.3 skyid po 「幸せな」

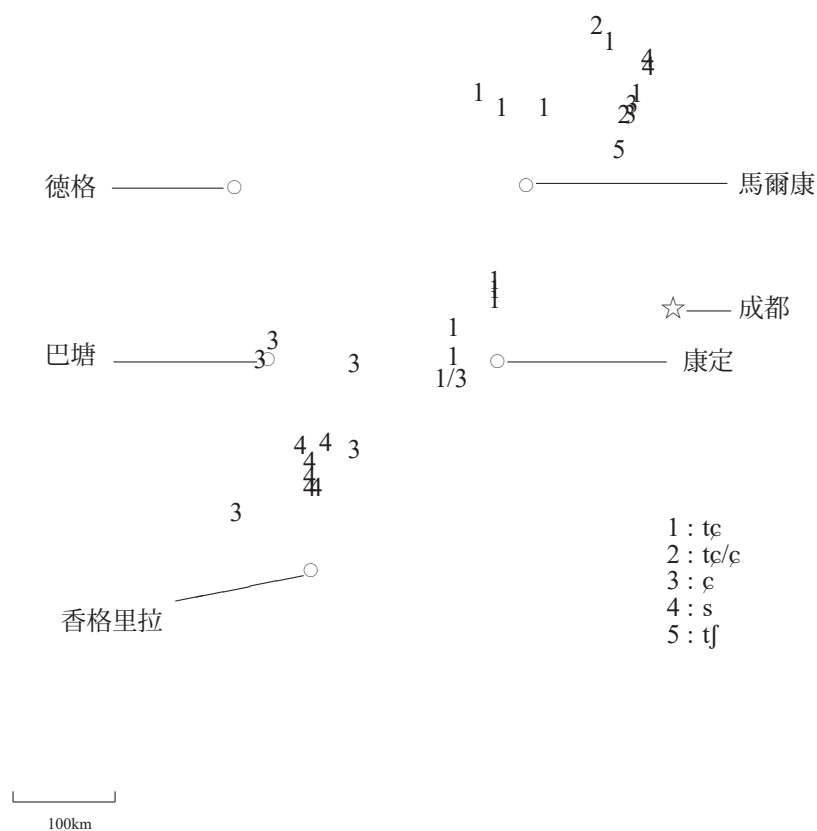


図 5.28: skyid po の初頭子音言語地図

この語は破擦音で現れるか摩擦音で現れるかで大きく二分されている。アムドチベット語および丹巴県とムニャ地域の方言では破擦音が主に現れ、それ以外では摩擦音で現れる。

調音点上の異なりは、先の「漢族」の例で歯茎音に対応する方言で歯茎摩擦音が対応していることが分かる。

5.3.7 蔵文 Pr 対応音

蔵文 Pr は、蔵文で両唇閉鎖音と足字 r の結合字を含むすべての形式をさす。そして、問題点是对应する現代語の口腔内での調音方法であり、有声性は考慮に入れない。ただしそれぞれの対応関係は複雑であるから、以下場合分けを行って議論する。

1. 蔵文で一切の前接辞、頭字を伴わない場合、すなわち phr- と br- の対応形式
2. 頭字 s を伴う場合、すなわち spr- と sbr- の対応形式
3. 前接辞 d を伴う場合、すなわち dbr- の対応形式

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *phrag pa* 「肩」
- *brang* 「胸」
- *sprin* 「雲」
- *sbrul* 「蛇」
- *dbral* 「裂く」

5.3.7.1 *phrag pa* 「肩」

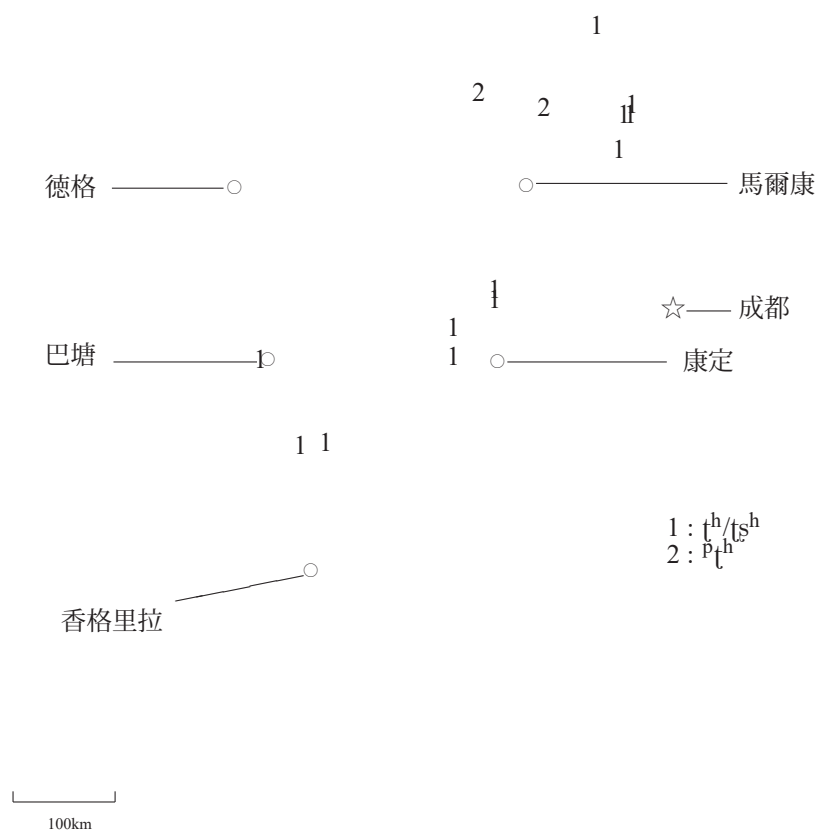


図 5.29: *phrag pa* の初頭子音言語地図

調査したいずれの方言でも無声有気そり舌音の対応形式が見られる。この例では、方言間の違いを示すために、初頭子音に両唇音が現れるかどうかを基準に分類してみた。アムドチベット語では、初頭子音に両唇音を持つことが分かる。

相当な地域で *phrag pa* に対応しない語形をもつため、地図上に表示されていない。

5.3.7.2 *brang* 「胸」

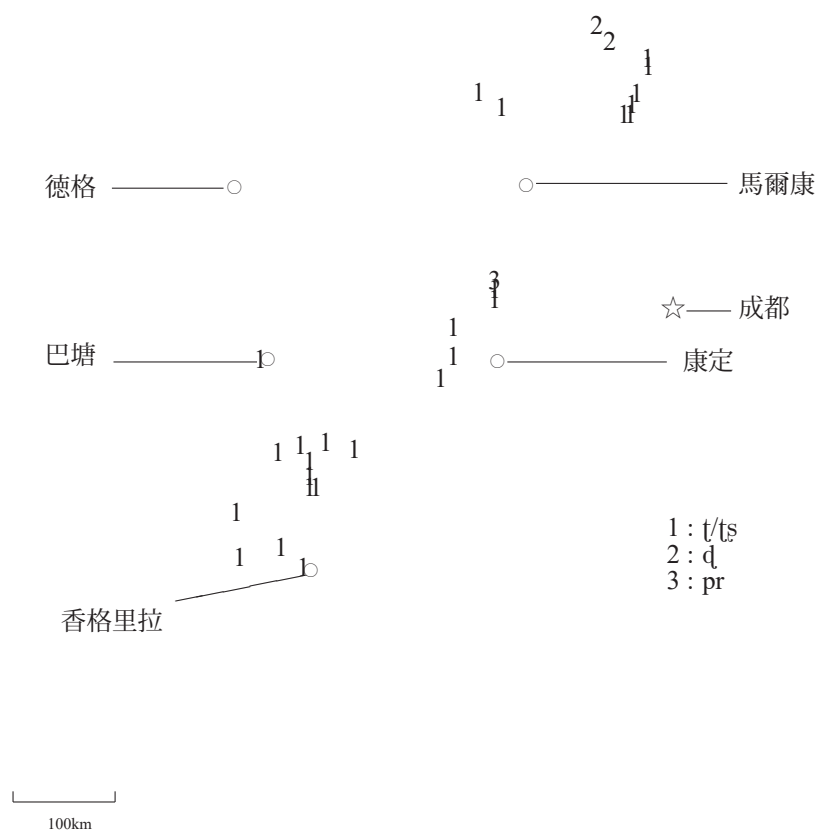


図 5.30: *brang* の初頭子音言語地図

広くそり舌音の対応形式が見られる。この地図には初頭に両唇音を伴うかどうかを反映させていない。そり舌音対応形式の中には Sogpho 方言 $ʔto^{h}jeʔ$ のように初頭に両唇音を伴うものも含まれている。

sProsnang 方言では $ʔproʔ^{h}geʔ$ といい、他の方言でそり舌音に対応する形式が藏文そのままの pr という子音連続になっている。

5.3.7.3 *sprin* 「雲」

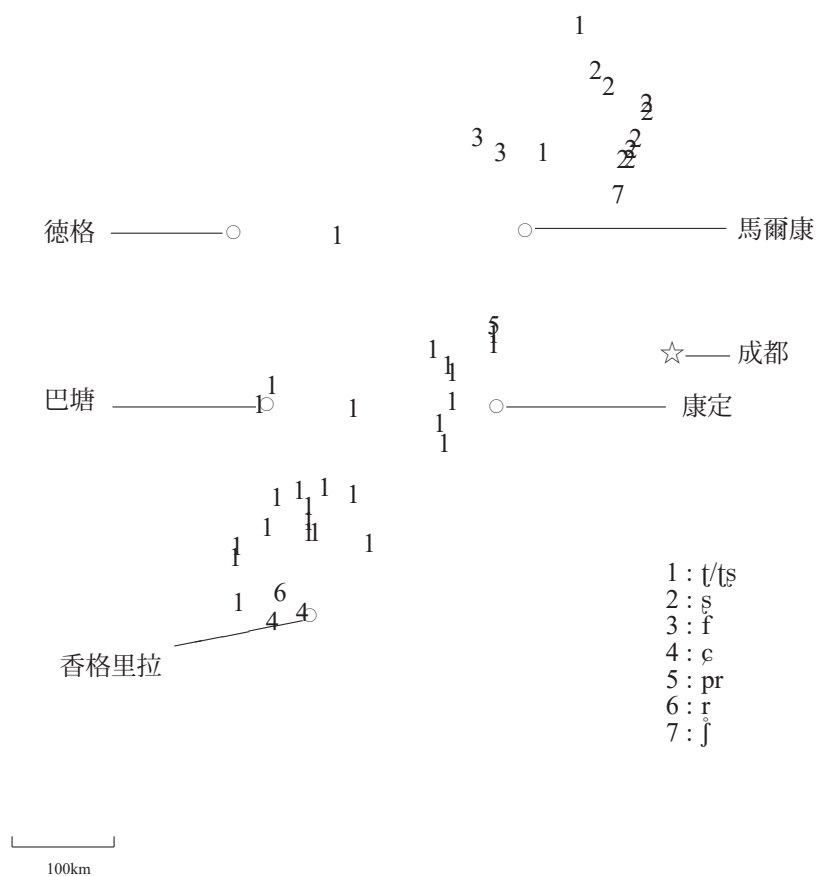


図 5.31: *sprin* の初頭子音言語地図

カムチベット語を中心としてそり舌閉鎖/破擦音で対応する例が多く、周辺部にやや異なる形式のものがあり、たとえば rGyalthang 方言 `cĩ や sProsnang 方言 ^hpri などである。後者の例は、sProsnang 方言の足字 r を含む形式の広く見られる対応として、足字 r が口語形式でわたり音として現れるという対応関係を示している。

ヒャルチベット語ではそり舌摩擦音に対応する。gZari 方言は ^htə となっている。アムドチベット語のうち rNgawa 方言では歯唇摩擦音が現れ、^hfən となっている。

5.3.7.4 *sbrul* 「蛇」

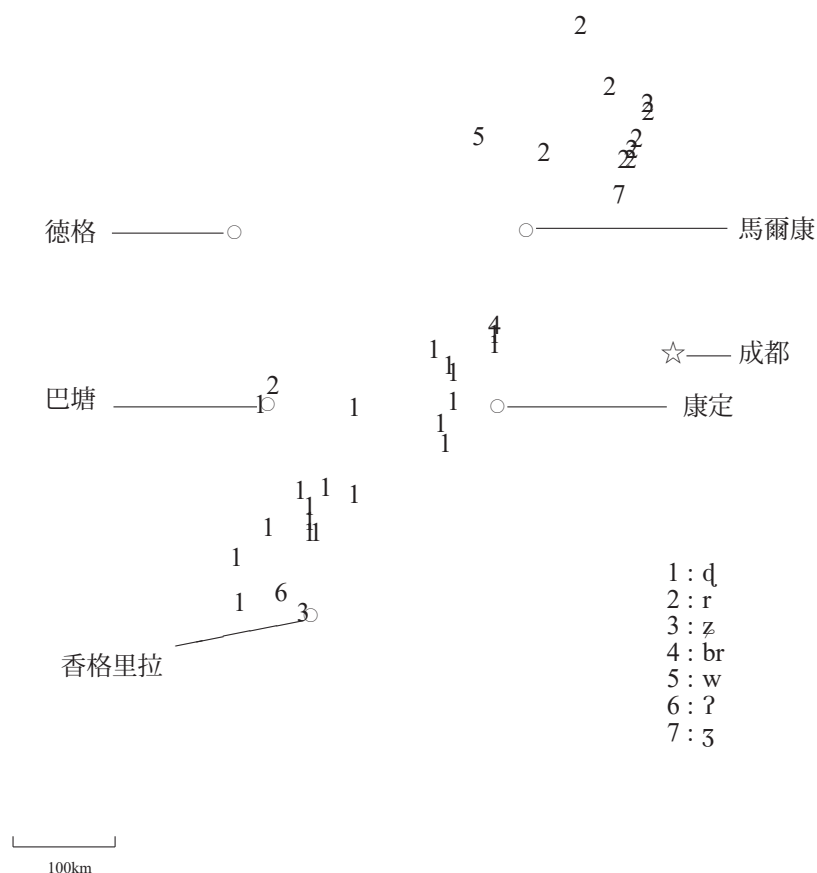


図 5.32: *sbrul* の初頭子音言語地図

調音点について先の「雲」の例とほぼ平行的な対応関係を見せるように見える。有声性が異なっている。

rNgawa 方言には 2 種類の形式があり、地図に示した形式は *wu*³⁵、もう 1 つは *ṃqu* で、後者はやや改まった言い方であるという。後者の例は前鼻音について蔵文と対応していないが、同じ形式を rMachu 方言などに見出せるほか、前鼻音をもつ方言は地図中にある dGudzung 方言 *ṃqi: tɕoʔ* にも見出すことができる。

Nyishe 方言では *ʔu:* となる³⁶。

³⁵*wu* という形式は、蔵文足字 *r* が脱落した可能性がある。蔵文 *sb* 対応形式は、先に見たように、rNgawa 方言では */w/* が現れる。

³⁶Nyishe 方言の蔵文 *sbr* 対応形式は極めて特異で、ほかに *ʔjōŋ naʔ* 「はえ」(蔵文 *sbrang nag*) など見られる。

5.3.7.5 *dbral* 「裂く」

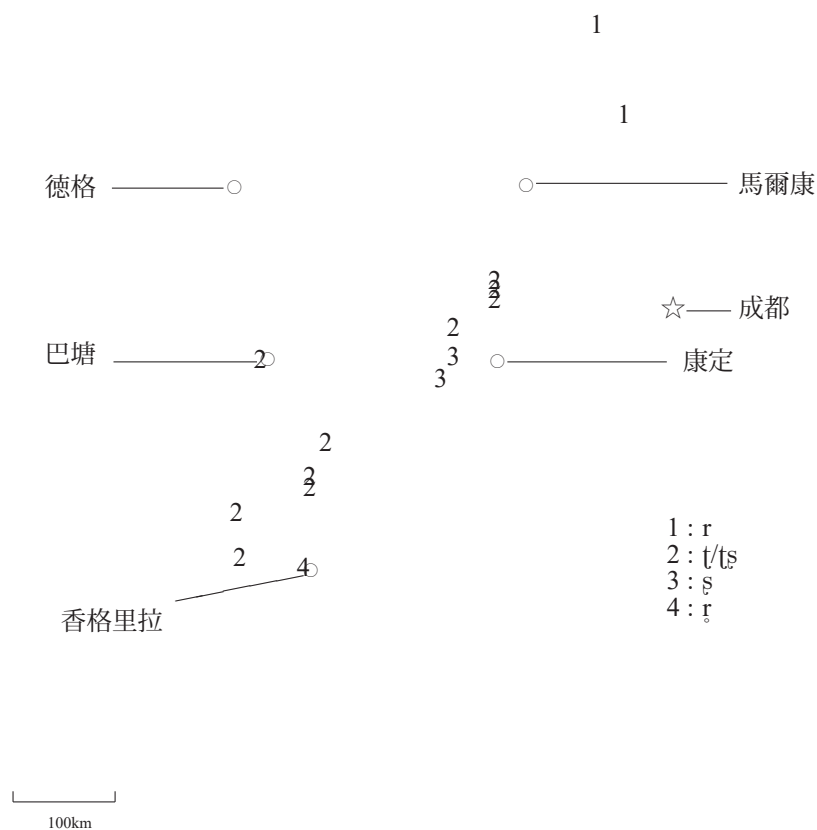


図 5.33: *dbral* の初頭子音言語地図

蔵文 *dbral* に対応する形式を見出せない方言が多く、地図に示すことができる方言がまばらである。

ヒャルチベット語に見られる *r* 音は蔵文足字 *r* と対応する。これは蔵文 *db* 部が脱落するという中央チベット語の対応関係に酷似している。

Rangakha 方言および Grongsum 方言の ʂ と rGyalthang 方言の ʈ は、分布上近隣の方言とは異なっていて特徴的な形式であると考えられる。

5.3.8 蔵文 Kr 対応音

蔵文 Kr は、蔵文で両唇閉鎖音と足字 r の結合字を含むすべての形式をさす。そして、問題点是对应する現代語の口腔内での調音方法であり、有声性は考慮に入れない。ただしそれぞれの対応関係は複雑であるから、以下場合分けを行って議論する。

1. 蔵文で一切の前接辞、頭字を伴わない場合、すなわち *khr-* や *gr-* の対応形式
2. 頭字 *s* を伴う場合、すなわち *skr-* と *sgr-* の対応形式

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *khrag* 「血」
- *gri* 「ナイフ」
- *skra* 「髪」

5.3.8.1 *khrag* 「血」

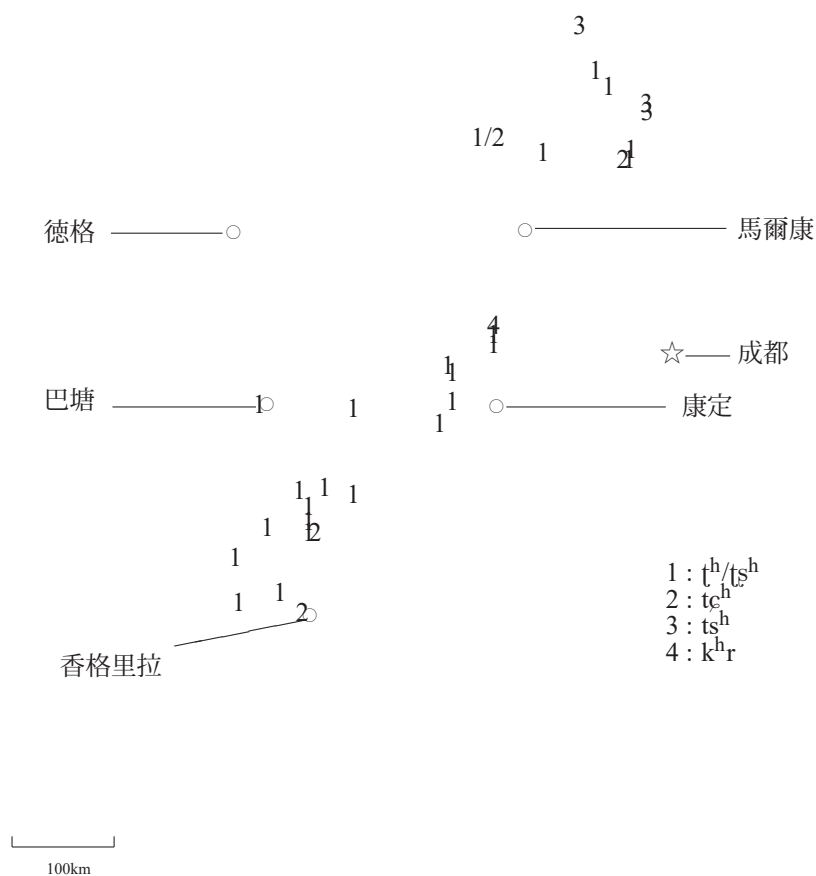


図 5.34: *khrag* の初頭子音言語地図

藏文対応形式としては、そり舌音で現れる方言が多い。

Thewo 方言、Phyugtsi 方言、gTsangtsa 方言など、ヒャルチベット語のいくつかに歯茎破擦音で対応している。

sKyangtshang 方言、rNgawa 方言、Ragwo 方言、rGyalthang 方言などには前部硬口蓋破擦音で対応する。

sProsnang 方言は、藏文 Pr 対応形式と同様、藏文足字 r がそのまま発音に現れる。

5.3.8.2 gri 「ナイフ」

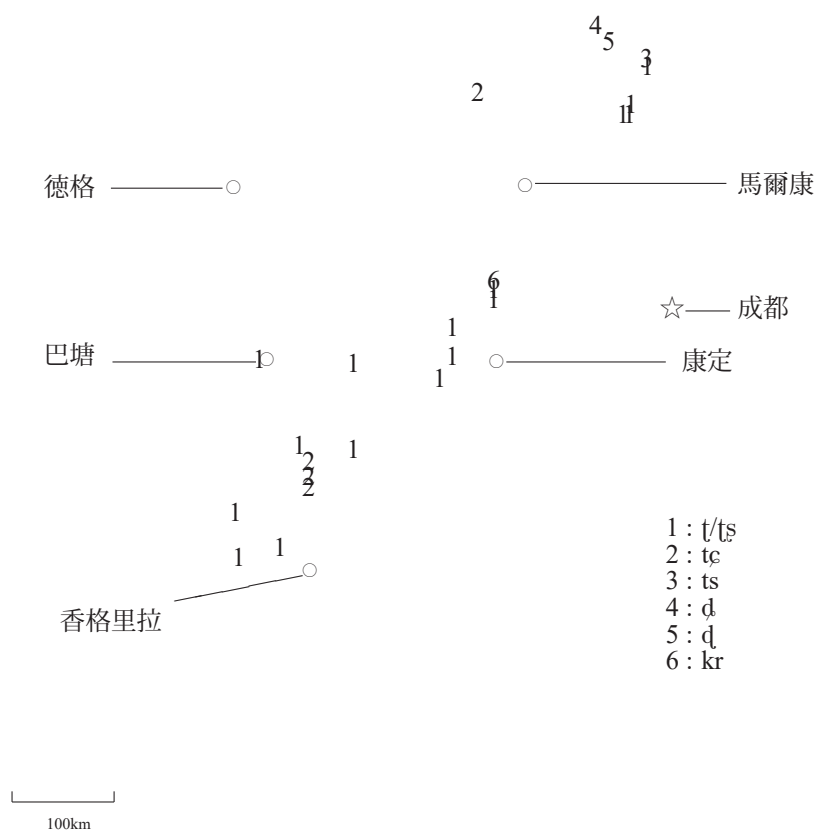


図 5.35: gri の初頭子音言語地図

先の「血」の例より前部硬口蓋破擦音で対応する方言が多い。

5.3.8.3 *skra* 「髪」

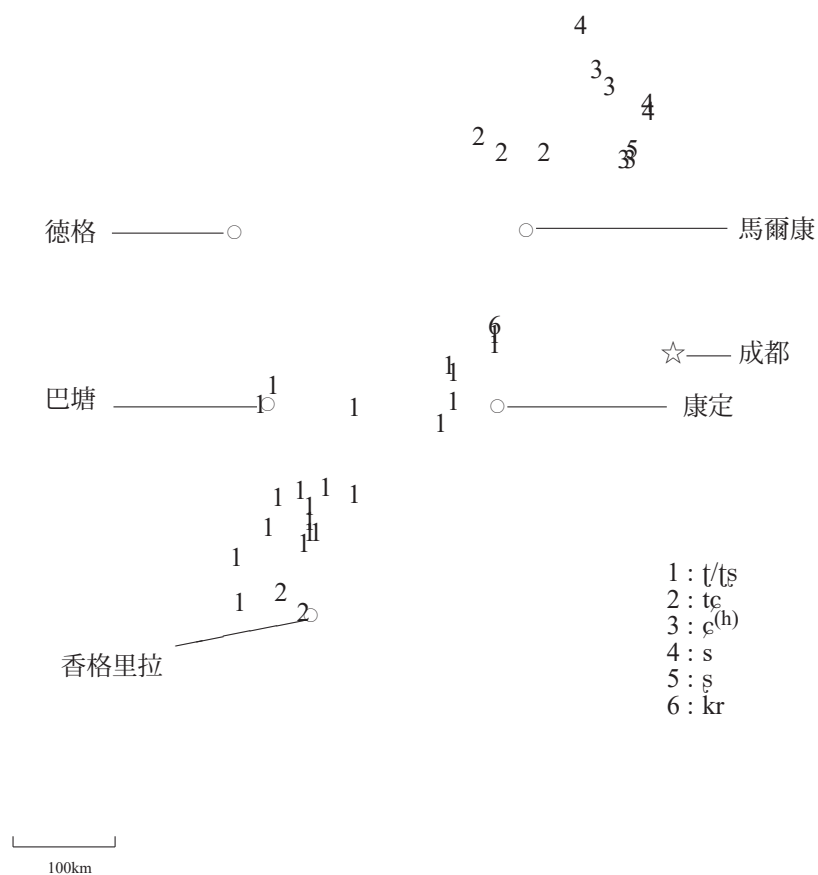


図 5.36: *skra* の初頭子音言語地図

この蔵文対応形式は、そり舌音で現れる方言が多い。ただし「九香線」北部や香格里拉県ではそり舌音に対応する方言が少なく、齒茎音や前部硬口蓋音になっている。

5.3.9 蔵文 C 対応音

ここで扱う蔵文 C とは、蔵文 c, ch, j をまとめてさすものである。蔵文 C 対応音は前部硬口蓋音で比較的安定しているが、一部地域で異なった調音点、調音方法を持つ場合がある。

具体的には、以下の 3 点の特徴の地理的分布について注目する。

- 前部硬口蓋破擦音 /tʃ^h, tʃ, dʒ/
- 前部硬口蓋閉鎖音 /t^h, t, d/
- そり舌音 /t^h, t, d, tʃ^h, tʃ, dʒ/

5.3.9.1 chu 「水」

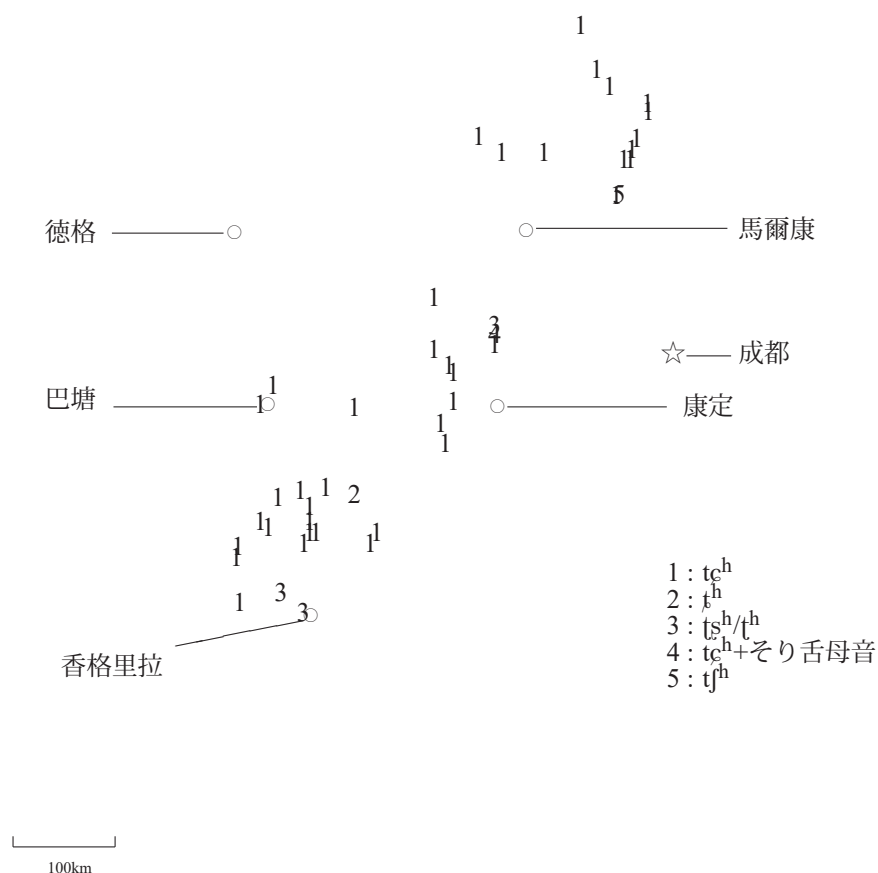


図 5.37: chu の初頭子音言語地図

前部硬口蓋破擦音が大多数を占めることが分かる。この対応関係を持たない形式は特別であると考えてよい。

そり舌音に対応するのは丹巴県と香格里拉県の方言である。丹巴県では sProsnang 方言 tɕʰu に対し Sogpho 方言 tɕʰl となり、dGudzung 方言ではそり舌音ではないというように、対応関係がばらばらである。

前部硬口蓋閉鎖音に対応するのは nDappa 方言のみで、まったく孤立した分布を見せる。この対応関係は、カムチベット語の中では本論文の対象地域外であるが Chamdo (昌都) 方言に一致する (金鵬 1958)。

5.3.9.2 *ja* 「茶」

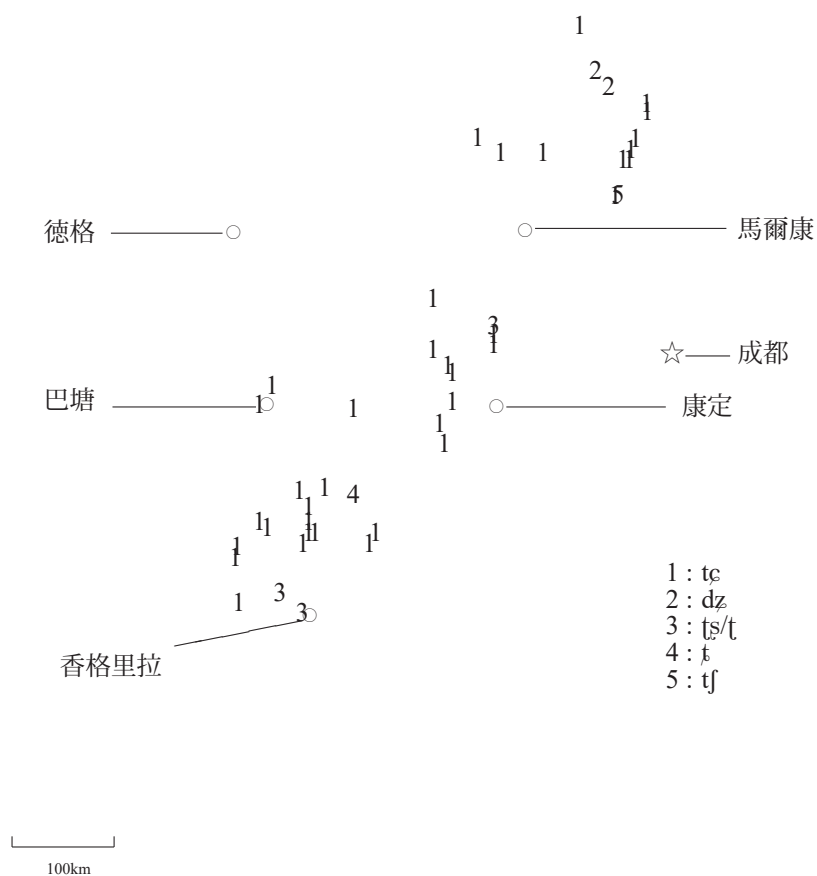


図 5.38: *ja* の初頭子音言語地図

有声性の問題が現れるが、基本的に先の「水」の例と似た分布を示す。

5.3.10 蔵文 w 対応音

ここでは、基字としての w 対応形式と、規定される蔵文に足字 w を持つ語の対応形式を見る。特に「規定される」と述べるのは、阿壩州のいくつかの地域では母語のチベット語方言を書き表すときに、蔵文では規定されない位置に足字 w を書く話者がいる（孫宏開・王賢海 1987）からである。

5.3.10.1 wa 「きつね」

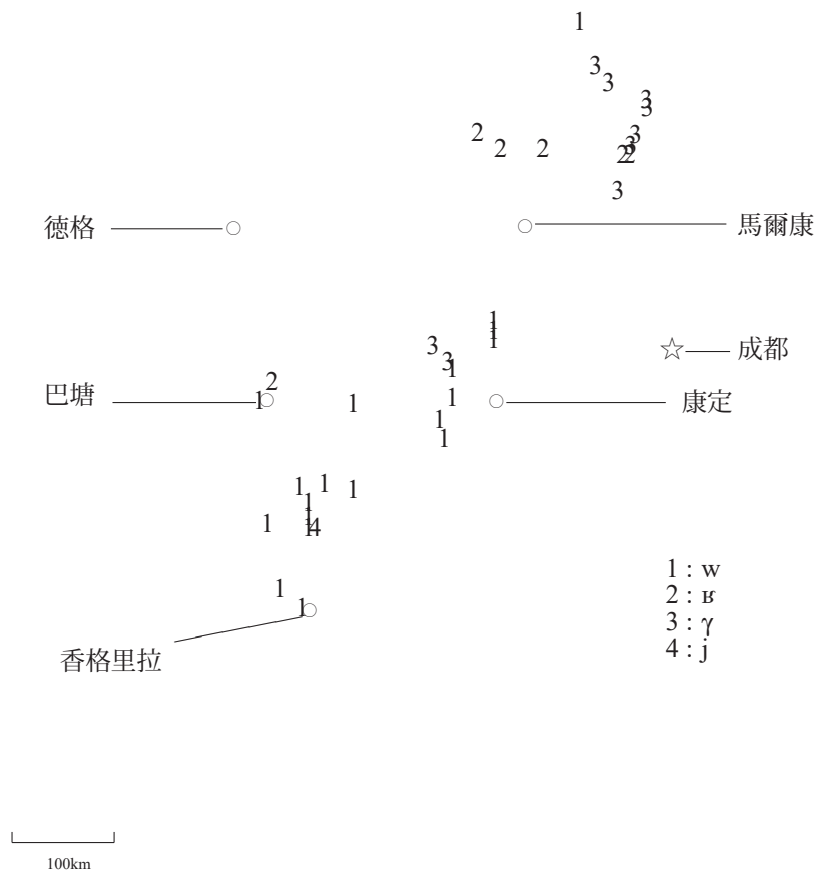


図 5.39: wa の初頭子音言語地図

蔵文で初頭子音が w となり、かつそれに対応する口語形式を持つ語は少なく、「狐」が該当する例の 1 つである。

両唇音を持つ方言は地図上の中部から南部にかけて分布し、北部および中部の一部では軟口蓋や口蓋垂における有声摩擦音として現れる。松潘県のヒャルチベット語では軟口蓋摩擦音と口蓋垂摩擦音の両方が見られるが、軟口蓋摩擦音で現れる方言には口蓋垂系列の音素が存在しないものがある（第 4 章該当方言参照）。

gZari 方言は、分布としては孤立していて、両唇音で現れている。mTshola 方言も孤立的な分布を示しているが、周辺の方言調査が十分進んでいないため、孤立した分布かどうかは判断しかねる。

5.3.10.2 zhwa 「帽子」・rtswa 「草」

「帽子」について、藏文足字 w に対応すると見られる形式を持つのは、Ketshal 方言 xwa ʷgo、rGyalthag 方言 ʃswa など少数であるが存在する。

他に Babzo 方言では ^hja ʷgo という第 1 音節初頭子音についても新しいタイプの対応形式も見られる。

「草」について、rGyalthag 方言や Nyishe 方言ではわたり音 w を含む発音が分布する。この語は足字 w のない「根」rtsa ba と比べると、その異なりがよりいっそう明確になる。いくつかの方言について、「草」と「根」の語形式を対照してみる。

表 5.1: 「草」と「根」の語形式

方言	「草」 rtswa	「根」 rtsa ba
Askyirong	^o h tsa	^o h tseh pa
Ketshal	^o ʃ tsa	^o ʃ sa wa
Sogpho	^h tsə wu	^h tsa ^h kə
Lhagang	^h tsa	^h tsa wa
gDongsum	^h tswo	^h tsa zə
rGyalthag	^h tswa	^h tsə: ^h dʒə
Nyishe	^h tswa	^h tsə ^h dʒu
Budy	^h tswa	^h tsəj ^h dʒa

gDongsum 方言や Nyishe 方言などでは足字 w に対応する形式をもっている³⁷。

以上の具体例から、足字 w いわゆる wa zur の中にも口語形式として存在した方言が存在していることが示された。

³⁷Sogpho 方言の 2 音節形式は足字 w を反映した形式であるかどうかは明確ではない。

5.3.11 蔵文1対応音

蔵文1対応音が問題視されることは極めてまれであるが、西田・孫(1990)や Zhang (1997)などで蔵文1対応音が/j/となる例に触れている。

この対応関係を持つ方言は非常に限られ、九寨溝県、郷城県などのチベット語方言などに見られる。以下に例をあげる。

5.3.11.1 lag pa 「手」

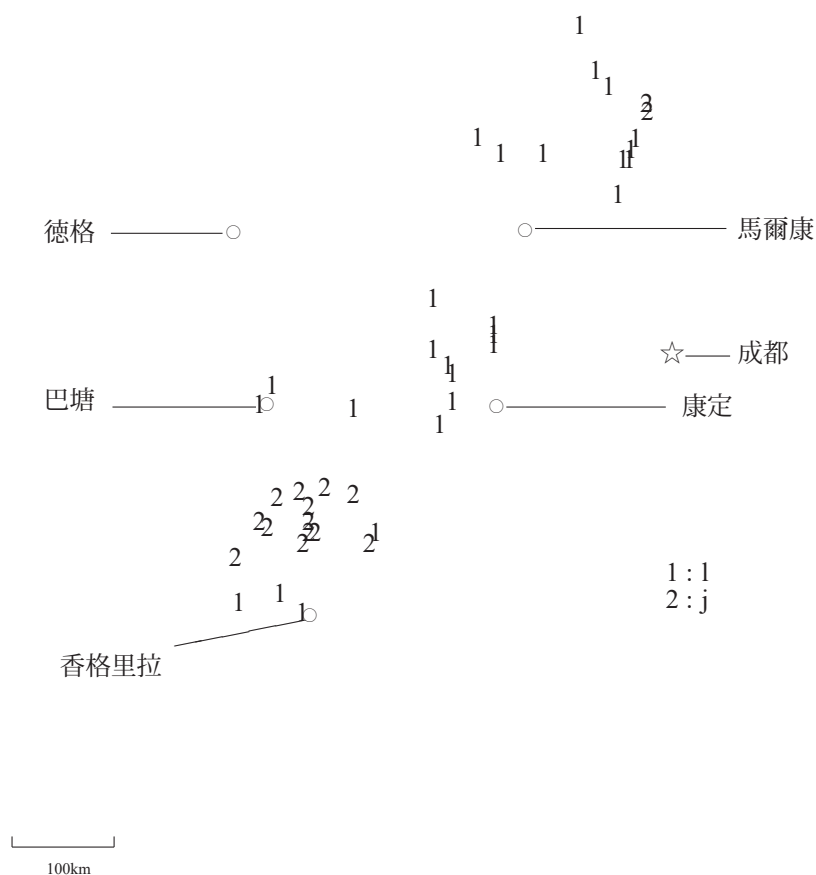


図 5.40: lag pa の初頭子音言語地図

蔵文1に対して/j/が対応する方言に注目する。

九寨溝県の方言が/j/で現れることについて特記することは、その東方に分布するペマ語でも同様の形式が現れることである。九寨溝県の方言とペマ語の関係について検討する必要があるが、詳しくは後述する。

郷城県およびその周辺にも広く/j/で対応する方言がある。香格里拉県の方言および Budy 方言で/l/が対応しているのが逆に際立っている。

5.3.11.2 *gling* 「牛」・*rlung* 「風」・*bla ma* 「ラマ」

ここで問題になるのは、蔵文で足字1をもつ語である。このような語は、広くチベット語で足字である1が口語の発音として現れ、基字の対応形式がほとんど失われている。ここで取り上げる3つの語は、それぞれ基字が異なるものである。

「牛」では、郷城県の方言ではすべて/j/で現れる。たとえば、Sagong 方言では¹jõ、Rwata 方言では¹jöといった具合である。「手」の例では/j/に対応する郷城県の西方で話される sDerong 方言では、¹lāŋ と/l/が現れる。九寨溝県の Phyugtsi 方言でも jo: といったように、/j/が対応している。

「風」の例では、郷城県の方言の方言でも/l/で対応するが、Rwata 方言では¹lōŋ¹dzə と/l/が対応する。九寨溝県の gTsangtsa 方言でも¹loŋ というように/l/で現れる。

「ラマ」の例では、確認している限り全ての方言で/l/が対応する。

以上のような蔵文1と口語形式の間の対応関係が語ごとにばらつきを見せることは、Zhang (1997) でも郷城県、徳欽県、香格里拉県各地点の方言について対照して示している。

5.3.11.3 *lha* 「神」

「神」*lha* の蔵文¹は頭字であるが、現代の方言音では主たる子音に対応する要素が蔵文¹である。

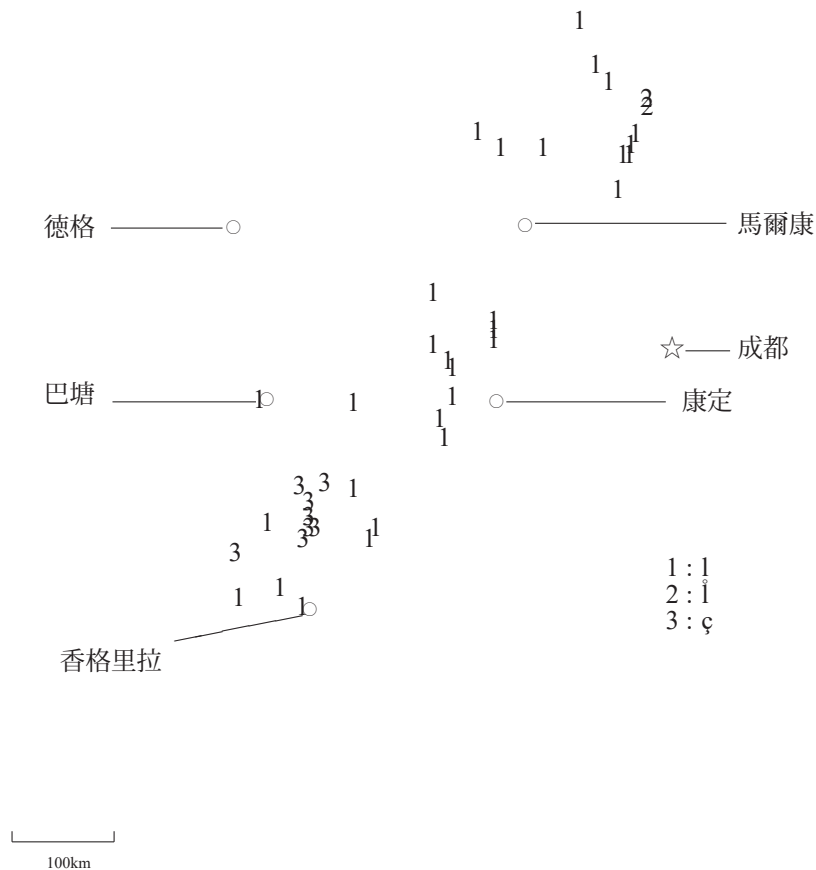


図 5.41: *lha* の初頭子音言語地図

広く無声流音¹/_lに対応しているが、「手」の例で¹/_jに対応する方言を中心に異なった対応関係を見せる。ただし、その要因は一律ではない。

郷城県の方音では¹/_ɕで対応する。これはおそらく蔵文¹が¹/_jになり、そこに蔵文^hが当該音が無声化したものと理解できる。

有声音が現れる九寨溝県の方音では、Phyugtsi 方音はそもそも音素に¹/_lが存在しない。これが有声音で対応を見せる要因と考えられる。

5.3.12 藏文 y 対応音

藏文 y 対応音が問題視されることは極めてまれであるが、/j/以外に対応する場合がある。

5.3.12.1 yar 「上」

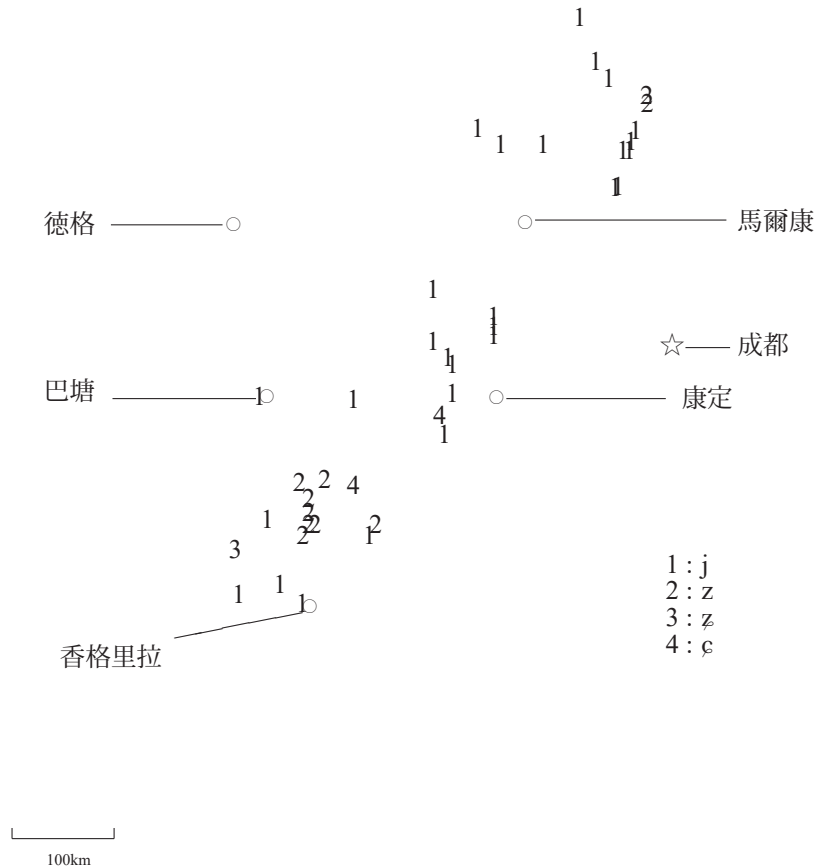


図 5.42: yar の初頭子音言語地図

藏文 y に/j/以外が対応する例が特異であると判断される。そして、その特異な対応が生じている方言では、藏文 l が/j/となることにも注目する必要がある。

具体的には、先に見た藏文 l 対応音の特徴的要素を見せる方言と同じ方言のほか、その周辺の方言にも若干確認され、九寨溝県、郷城県、稻城県、香格里拉県のチベット語方言などに見られる。

藏文 l が特異な対応を示すときに対応する形式がほぼ/j/のみであることを考えると、藏文 y に対する特異な対応は/z, z̥, ɕ/などと多岐にわたって複雑な分布を見せている。

補足的にほかの蔵文 y をもつ語で特異な対応を示す例を挙げると、「本」(蔵文 *yi ge*) について Grongsum 方言 *'ci γə*、nDappa 方言 *'ci γi*、gDongsum 方言 *'ziʔ* などがある。

5.3.12.2 *g.yag* 「ヤク」

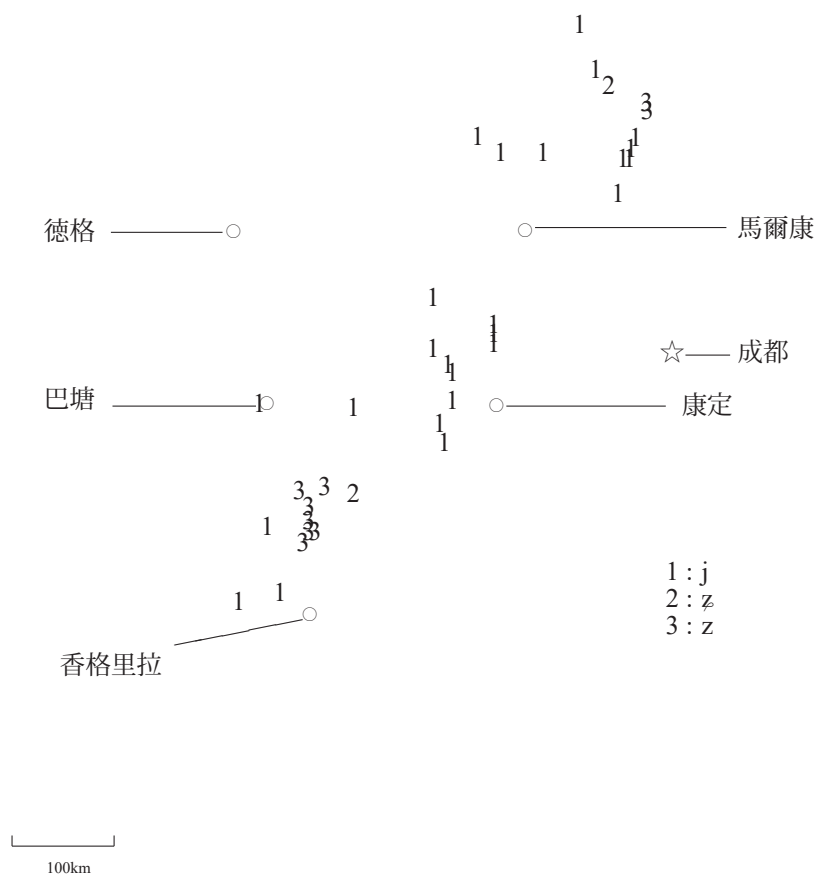


図 5.43: *g.yag* の初頭子音言語地図

先に見た「上」の例と比べて、有声音のみが現れていることに注目すると、蔵文 *j* と蔵文 *g.y* の関係から単純な蔵文有声摩擦音字 *z*, *zh* と同様の対応関係を見せていると考えられる。nDappa 方言がその対応を示している。

このとき特徴的なのが Babzo 方言で、「上」では *j* が対応し、「ヤク」では *ʒaʔ* となっている。

5.3.13 蔵文 a(C) 対応音

ここでは、蔵文の母音 a と末子音の組み合わせについて、各種方言の形式を見る。母音単独含め末子音との組み合わせは、つづり上は 16 種³⁸あるが、ここでは方言ごとの特徴がよく現れる母音単独の例と閉鎖音末子音をもつ例の一部に限定して地図化し、考察を加える。

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *sa* 「地」
- *phag* 「ぶた」
- *skad* 「声」
- *khab* 「針」

³⁸格桑居冕・格桑央京 (2002) による。蔵文'i および'u も組み合わせに含む。

5.3.13.1 sa「地」

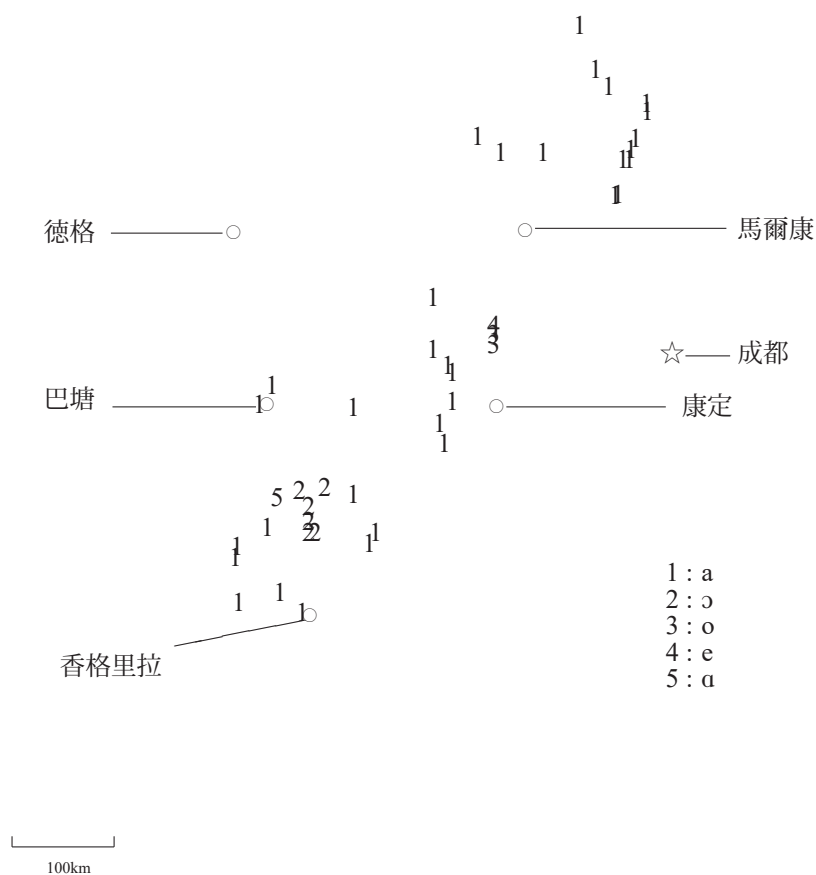


図 5.44: sa の母音言語地図

蔵文で語末子音を伴わない a は基本的に /a/ で対応するが、特定の地域でかたまって、別の対応関係をもつ方言が分布している。

丹巴県では /e, o/ が分布する。このうち /e/ をもつ sProsnang 方言は ^hwe という形式であり、わたり音に両唇音が入っている。いずれも高母音で調音される点が際立っている。

郷城県の方言群では /ɔ/ となっている。音声学的には [ɔ] のほかに [ɑ, ɒ] という変異音を含み、後舌でやや調音点が高い位置になるのが特徴的である。

5.3.13.2 *phag* 「ぶた」

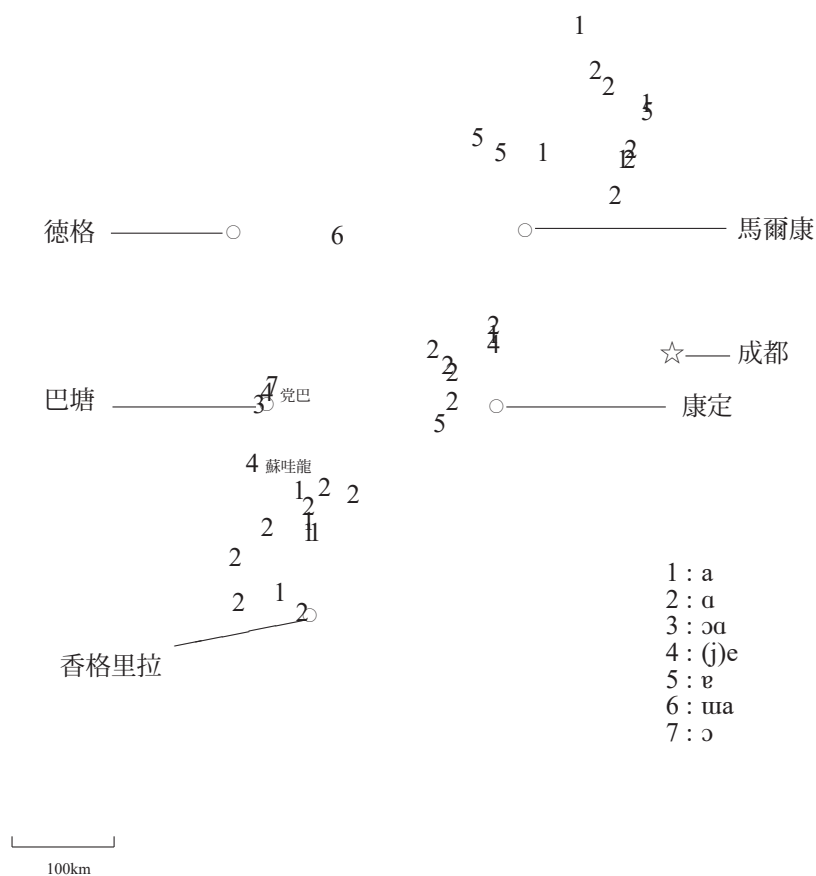


図 5.45: *phag* の母音言語地図

phag が $p^hjeʔ$ となる地域に注目できる。この音対応自体が特徴的な上、分布がばらけているのが分かる。dGudzong 方言と Sowanang 方言では、「ぶた」に限らずほとんどの蔵文 ag 対応形式で $(j)eʔ$, $ɛʔ$ が現れる。

Babzo 方言にも、散発的にこの対応をもつ語がある。

5.3.13.3 *skad* 「声」

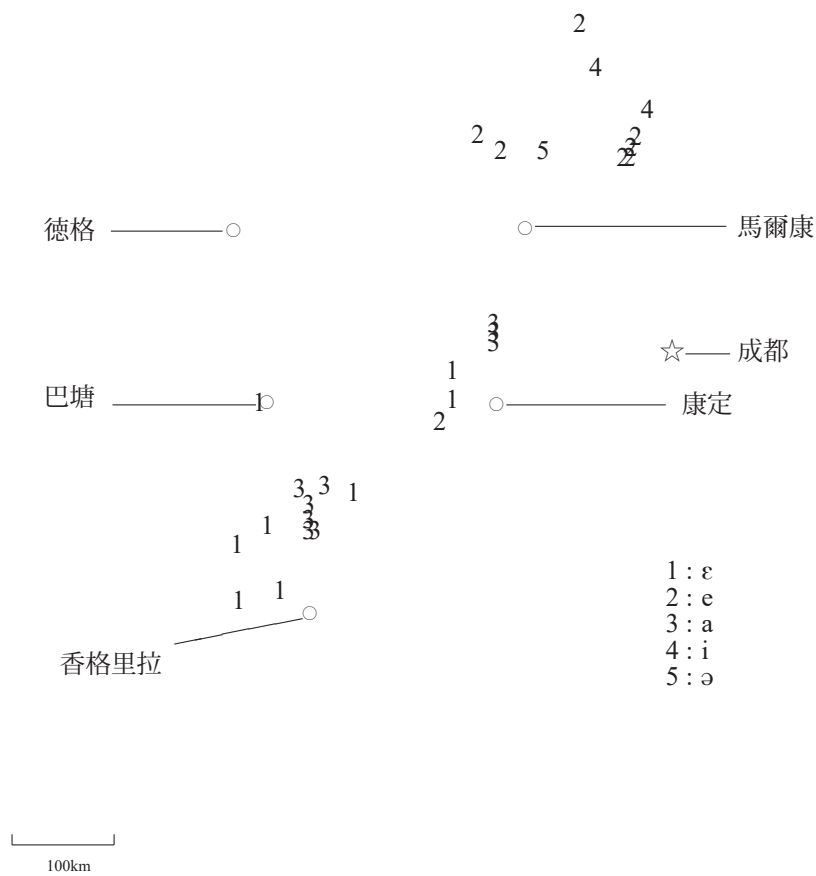


図 5.46: *skad* の母音言語地図

広母音から狭母音まで幅広い対応関係が見られるが、/ə/を除いて前舌である。
 狭母音/i, e/に対応する方言は北部に多い。
 広母音/a/に対応する方言は丹巴県および郷城県に分布する方言である。

5.3.13.4 *khav* 「針」

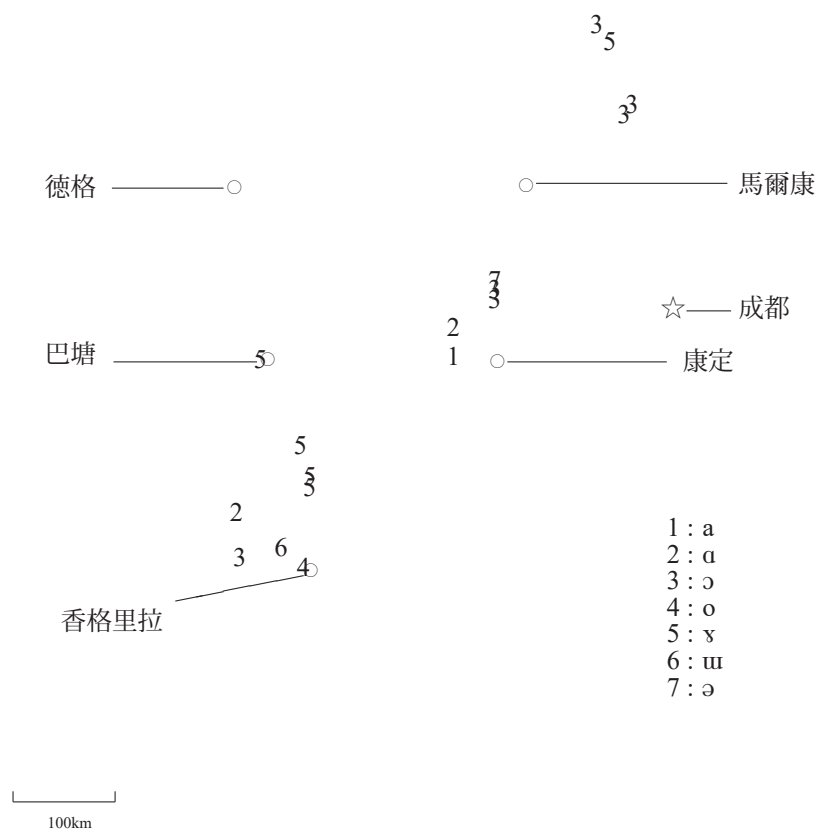


図 5.47: *khav* の母音言語地図

Rangakha 方言と sProsnang 方言を除いて、調音点が多様であるが後舌母音であることには共通性がある。

このうち多くの方言は末子音について声門閉鎖音 ? をもつが、いくつかは両唇接近音が現れる。後者の例としては sProsnang 方言 $k^həw$ 、Askyirong 方言 $k^həw$ などがある。ただしこれらの場合も軽い声門閉鎖が生じる。

5.3.14 蔵文 o(C) 対応音

ここでは、蔵文の母音 o と末子音の組み合わせについて、各種方言の形式を見る。母音単独含め末子音との組み合わせは、つづり上は 15 種³⁹あるが、ここでは方言ごとの特徴がよく現れる母音単独の例と閉鎖音末子音をもつ例の一部に限定して地図化し、考察を加える。

以下に次のような具体例を通して考察する。

- *so* 「齒」
- *bod* 「チベット（人）」
- *mgyogs pa* 「速い」

³⁹格桑居冕・格桑央京 (2002) による。蔵文'i も組み合わせに含む。

5.3.14.1 so 「齒」

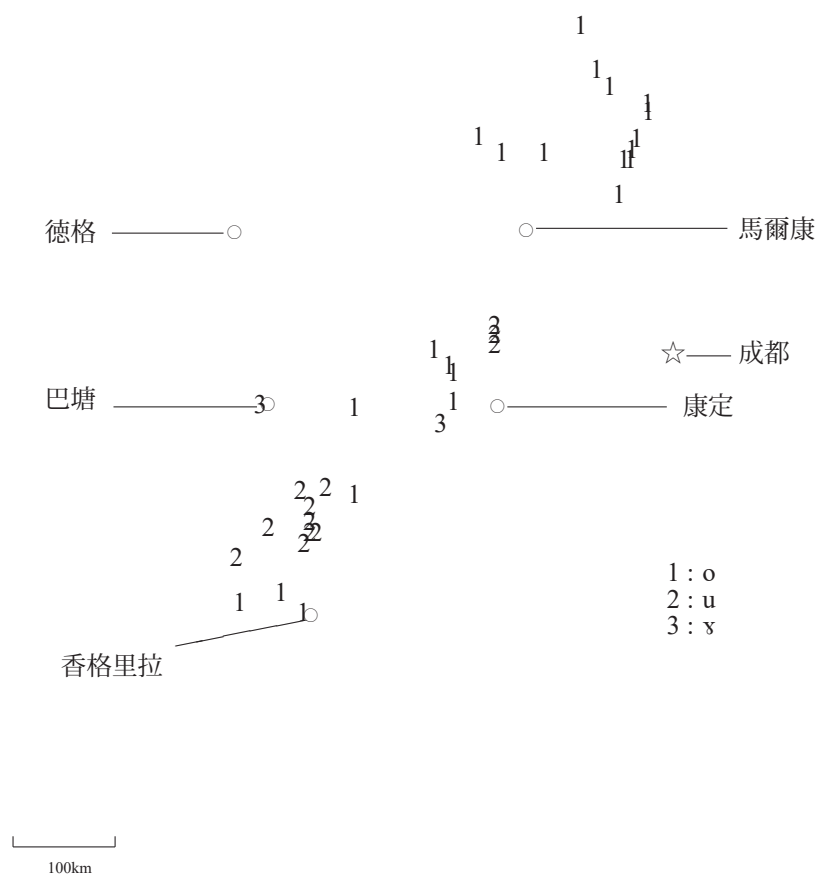


図 5.48: so の母音言語地図

丹巴県と郷城県の方言では、藏文 o#が/u/に対応する。この対応は、先に見た藏文 a#が/a/より狭い母音に対応する方言とほぼ同じ分布を示す。ただし sDerong 方言は藏文 o#が/u/に対応するのみである。

Grongsum 方言や mBathang 方言では、藏文 o#が/ʁ/に対応する。

5.3.14.2 bod「チベット（人）」

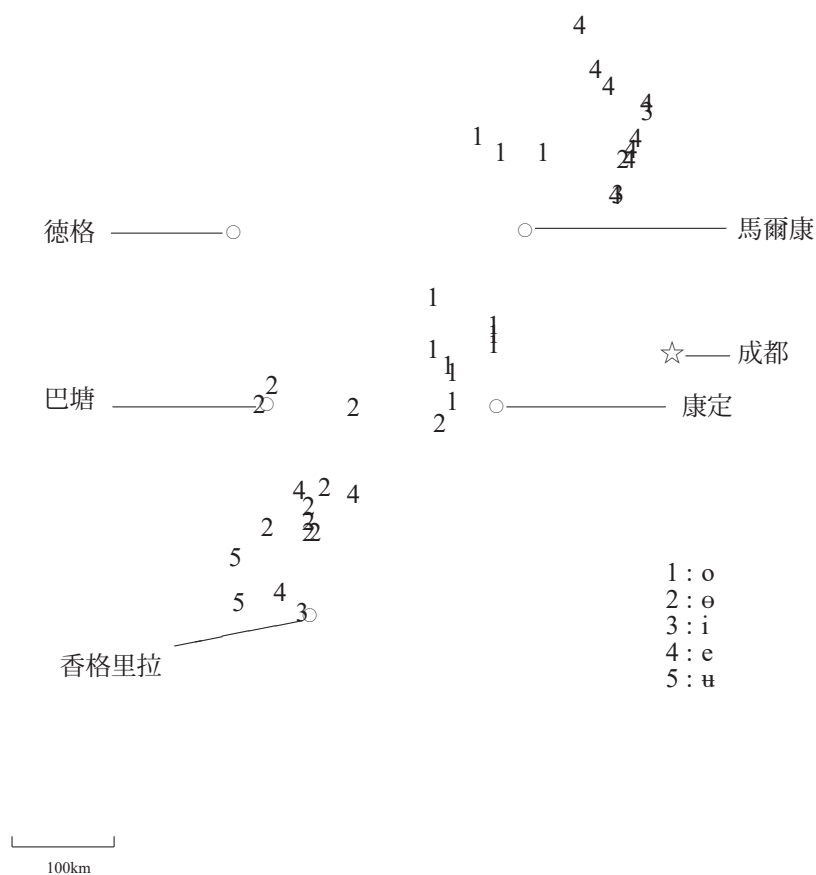


図 5.49: bod の母音言語地図

この対応関係で注目するのは、前舌平唇（半）狭母音の対応形式を持つ方言の存在と分布である。この対応関係を持つのは地域的にかたまっていて、ヒャルチベット語の多くと香格里拉県を中心とした地域の方言になる。

5.3.14.3 *mggyogs pa* 「速い」

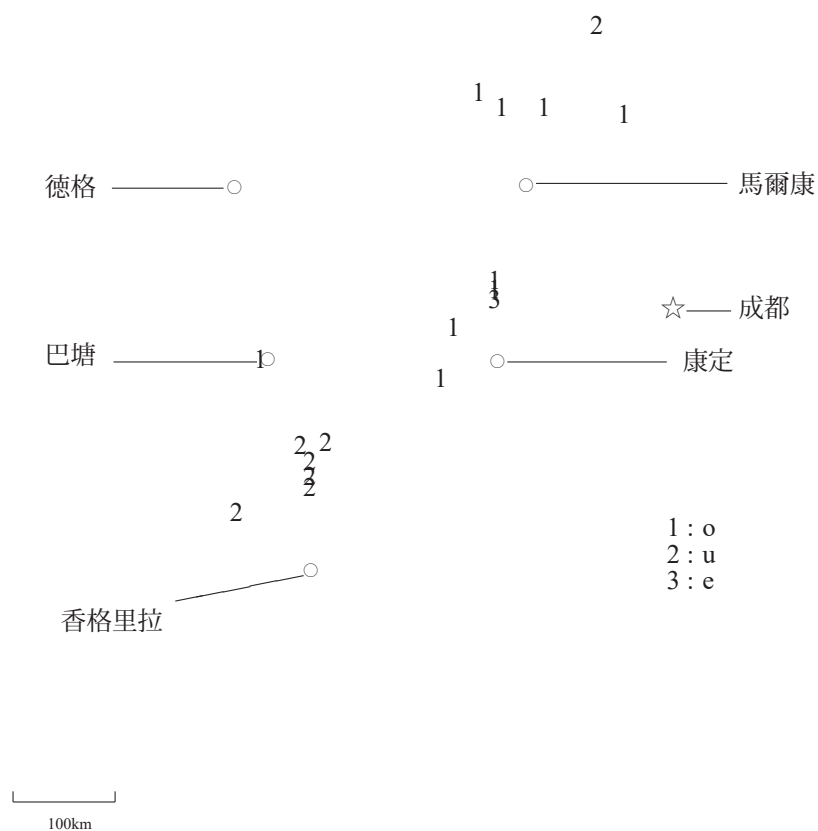


図 5.50: *mggyogs pa* の母音言語地図

dGudzong 方言の/e/での対応が際立っている。

地図南部の諸方言では *mggyogs pa* 対応形式をもつものが少ないため、表示されていない。

5.3.15 蔵文対応形式を基準にした地図から見る総合的考察

本節では、蔵文を基準にしてそのつづり字と現代諸方言の対応関係を扱った。以上に行った考察では、各種特徴を個別に取り上げたものであるため、ここではそれらを総合した観点からまとめることにする。まず、先の議論の順を追って確認された特異性について整理する。

1. 初頭子音の有声性

特異な対応を見せるのはヒャルチベット語で、そのうち若爾蓋県巴西区の方言は特に際立っており、他の方言と有声性が逆転する。中でも Babzo 方言は蔵文で基字が摩擦音の場合でも先行する子音字がある場合は主子音が無声音で現れる。蔵文で基字が有声音閉鎖/破擦音字に先行する子音字がある場合は、一部の語については九寨溝県の方言でも無声音で現れ、その他の全ての方言と対応を異にする。

2. 蔵文 P 対応形式

語によって方言差異、類型特徴が異なる。蔵文 P に何らかの子音字が先行する場合、「九香線」上ではアムドチベット語が特徴的な対応を見せるもの（蔵文 sp, sb 対応形式など）と、「九香線」中南部を中心に特徴的な対応を見せるもの（蔵文 db 対応形式など）分かれる。

3. 蔵文 Py 対応形式

広く見られる形式は前部硬口蓋で調音するものである。摩擦音で現れる方言が比較的多い。九寨溝県の方言と郷城県の方言で歯茎摩擦音という共通する特異な対応関係をほぼ一貫して見せる。丹巴県の方言の対応形式は歯茎破擦音で、他の方言とまったく異にし、共通性がうかがえない。例外的な対応を見せる語もあり、「狼」ではそり舌音が現れるなど対応関係が一部不規則のように見えた。dby-対応形式については、九寨溝県の方言と郷城県の方言は有声歯茎摩擦音で特異に見えるが、丹巴県の方言は大多数に一致する一方、「九香線」南部付近に有声前部硬口蓋摩擦音という異なる際立った対応関係を持つもの、たとえば Nyishe 方言などがある。

4. 蔵文 Ky 対応形式

広く見られる形式は前部硬口蓋で調音するものである。破擦音で現れる方言が比較的多い。九寨溝県の方言と郷城県の方言で歯茎破擦音という共通する特異な対応関係をほぼ一貫して見せる。「犬」は例外的に、「九香線」南部全体の特徴が九寨溝県の方言と共通になり、その一方で郷城県と得榮県の方言が無気音

という特異な形式を示す。また「九香線」中部のいくつかの方言に硬口蓋閉鎖音を持つ形式が見られる。

5. 藏文 Pr 対応形式

広く見られる形式はそり舌音である。ただし sProsnang 方言のみが足字 r にそのまま対応する r を含む子音連続を構成する。藏文で基字 P に先行する子音がある場合、方言ごとに異なりが現れる。この場合、ヒャルチベット語全体と香格里拉県の方言でそれぞれ独立した特異な形式が現れる。両者とも非閉鎖音が現れるが、細部で調音方法が異なっている。

6. 藏文 Kr 対応形式

広く見られる形式はそり舌音である。ただし sProsnang 方言のみが足字 r にそのまま対応する r を含む子音連続を構成する。アムドチベット語や香格里拉県周辺の方言では前部硬口蓋破擦音に対応する例がある。藏文で基字 K に先行する子音がある場合、ヒャルチベット語では摩擦音で対応する。

7. 藏文 C 対応形式

広く見られる形式は前部硬口蓋破擦音である。丹巴県および香格里拉県の方言でそり舌破擦音に対応するほか、nDappa 方言では前部硬口蓋閉鎖音に対応するという特異な例が際立つ。

8. 藏文 w 対応形式

藏文基字 w の対応形式として広く見られる形式は両唇接近音である。「九香線」北部全体およびその他若干地域で軟口蓋・口蓋垂音での対応がある。藏文足字 w の対応形式として、「九香線」南部の方言には対応する両唇接近音を子音連続として持つ例がある。

9. 藏文 l 対応形式

広く見られる形式は歯茎側面音である。九寨溝県の方言と郷城県、稻城県、得榮県、徳欽県の方言で硬口蓋接近音という極めて特異な対応関係を見せる。藏文 l が足字の場合、これらの方言でも硬口蓋接近音に対応する例としない例がある。

10. 藏文 y 対応形式

広く見られる形式は硬口蓋接近音である。九寨溝県の方言と郷県県の方言で、歯茎摩擦音という極めて特異な対応関係を見せる。稻城県、徳欽県などの方言では、硬口蓋摩擦音が現れる例があり、これもまた特異な対応である。

11. 蔵文 a(C) 対応形式

蔵文 a# に対しては、前舌広母音が対応するのが通例であるが、丹巴県および郷城県の方言では中舌もしくは後舌かつ調音点が上昇するのが特異である。蔵文 ag に対しては、dGudzung 方言と Sowanang 方言の川西民族走廊の東西両端で前舌狭母音で対応するのが極めて特異である。蔵文 ad に対しては、通例調音点が上昇するのに対して、丹巴県および郷城県の方言では前舌広母音のまま現れる点の特異である。

12. 蔵文 o(C) 対応形式

蔵文 o# に対しては、後舌半狭母音が対応するのが通例であるが、九寨溝県の方言と郷城県、得榮県の方言では後舌狭母音で現れるのが際立っている。蔵文 od に対しては、もっとも特徴的なのはヒャルチベット語と迪慶州およびその周辺地域の方言で前舌狭・半狭母音で現れるもので、極めて特異な対応関係を示す。そのほか、丹巴県やムニャ地域の方言で調音点が後舌半狭母音で変わらない。蔵文 og に対しては、通例後舌半狭母音で対応するが、郷城県の方言や Askyirong 方言が後舌狭母音で対応する。dGudzung 方言では前舌半狭母音という特異な対応関係を見せる。

以上に整理した特徴について、九寨溝県、丹巴県、郷城県および迪慶州の方言について言及することが多いことが分かる。これらは従来ほとんど未記述であったために知られていない部分が多かったが、いわゆる先行研究の類型的特徴に合わないという点では、やはり先行研究における類型特徴の修正を視野に入れる必要性が指摘できるだろう。本章冒頭で掲げた瞿霽堂・金效静(1981)によるいわゆる類型的特徴については、方言の多様性に関する理解が不十分であって簡潔すぎる区分になっているといえる。たとえば西田(1987)では、チベット語における破擦音の成立によって歴史を分析できるとするが、それに大きく関わる蔵文 Kr, Ky, Pr, Py 対応形式については、特に本節で取り上げた分析にあるように、川西民族走廊では、従来知られていなかったパターンが存在することが分かった。また、今なお足字 r の直接的な対応音を口語形式に残している丹巴県の sProsnang 方言の存在は際立っている。

そしていくつかの特徴については、九寨溝県と郷城県の方言、および丹巴県と郷城県や香格里拉県の方言特徴に共通点を見出すことになり、これらは決して例外的一致ではなく、体系性を見せている。たとえば、蔵文 y 対応形式が特異である九寨溝県と郷城県の方言では、足字 y がある Ky および Py 対応形式も他の方言と異なりが見られ、しかも大部分の例で互いに共通に確認される対応関係を持つ。また、蔵文 y 対応形式が特異であるもののうちのいくつかには、蔵文 l に対する形式もまた

特異であることが分かった。

母音の対応関係については、丹巴県と郷城県の方言が傾向として似ていることがいえるが、九寨溝県のものとは似ていない⁴⁰。ただし、蔵文 od 対応形式は九寨溝県と香格里拉致県の方言で、その対応の特異性が類似している。概して母音については単発的な方言間の一致や、よく知られる対応形式が現れるなどの特徴も持つ。その意味では、母音＋末子音の対応を体系的に扱う瞿靄堂 (1991) にも確認されない蔵文 ag 対応形式の特異性が、分布地域の離れた dGudzong 方言や Sowanang 方言に共通して存在することが明らかになったことは、対応形式の面でも分布の面でも大きな発見といえる。

以上のように、地域として連続しない分布を見せる方言が複数にしかも「九香線」という概念上の線の上に直線上に分布しているのは極めて興味深い事実である。このような非連続的な共通性が目立つ一方で、周辺地域との連続の関係も見過ごすことはできない。たとえば、問題になる九寨溝県のチベット語を中心に考えた場合、閉鎖/破擦音の有声性をめぐっては西隣に分布する若爾蓋県東部の方言群に類似の特徴を見せる点がある。

川西民族走廊に分布する方言は、何らかの形で先行研究においてよく知られる方言とは異なった、そしてその異なり具合もはなはだしいような特徴をもっている。個別方言の分析では一定の特殊性を分析することができるが、それだけでは特殊性について十分に理解できることにはなっていない。方言の評価をする方法は、標準的な基準に合うかずれるかを求めるのではなく、できる限り多くの種類の多様な方言のタイプとその分布位置を見て考察しなければ、単なる例外で済まされてしまいかねない。本節の議論は、分布位置を主軸として方言の特徴を明らかにし、特殊性に一定の評価を与えることができたと考える。

⁴⁰そもそも母音＋末子音の関係は、筆者の観察では一定の傾向が見られるものの、初頭子音よりも同じ蔵文対応形式としては多様に見える。その点について問題があるため、本論文でも体系的に取り扱うことはしなかった。

5.4 音素から見る類型特徴の分析とその地理的分布

あるチベット語方言について見られる特別な音素は、先行研究でも注目されていたものであり、その歴史的発生の観点から研究が行われてきた。ここでは歴史的問題に深く立ち入らず、その際立つ音素の分布について明らかにしていく。ただし、簡潔な蔵文との対応関係には触れておく。本節は、個別事例の分析にとどめ、全体的な視点からの考察は加えない。

5.4.1 口蓋垂閉鎖音

口蓋垂閉鎖音/ $q^h, q(g)$ /の存在は、孫宏開・王賢海(1987)や馬學良主編(2003)などで議論されるように、阿壩州のチベット語方言に見られることに特徴づけられ、その地理的位置から羌語など非チベット語との関連が注目されている。

まず、口蓋垂閉鎖音を音素として持つ方言ともたない方言の分布を地図化して示す。

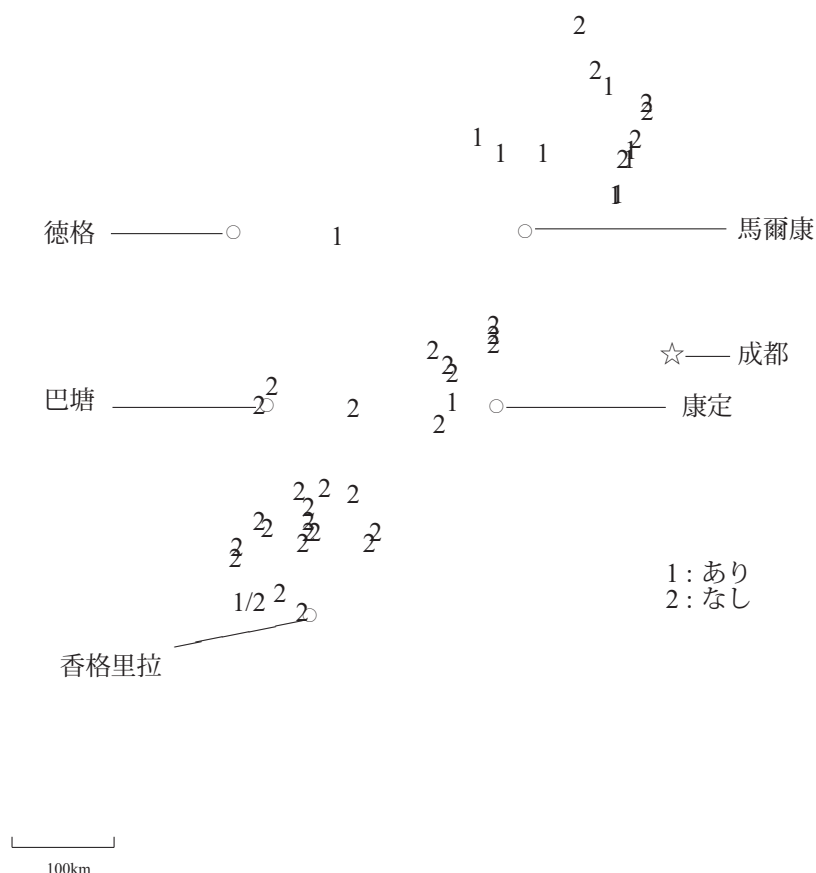


図 5.51: 口蓋垂閉鎖音の有無についての言語地図

次に具体例を見てみる。まず rNgawa 方言に見られる/ q^h, q /の例について挙げる。

/q^h/ : q^hə ɲo 「荷駄獣」、q^hɛ lut 「痰」

/q/ : qa mo 「濃い」

「痰」の例は蔵文 *kha lud* と対応しそうに見えるが、第1音節の *kha* に対応する「口」を意味する語は k^ha であるから、この「痰」という語だけが q 音をもつ。

ほかにも、Babzo 方言や Thangskya 方言で共通の語義に対応する形式に口蓋垂音が現れる例もある。

「雪」 Babzo : q^hɑ:, Thangskya : q^hũ:

この語に対応する蔵文は *kha ba / gangs* で、rNgawa 方言では k^həŋ となり q は現れない。このように方言差異もあれば共通のものもある。

この音素は、これまでの記述で現れなかったムニャ地方の方言にも見られ、Rangakha 方言に存在する。この方言では、子音連続として現れるものも含め、/q^h, q, ɣ, ɲ/がある。

/q^h/ : 'q^hɑ ta 「カラス」

/q/ : ʔq̃ k^ho: 「窓」

/ʎG/ : ʎGɑ: 「邪魔する」

/ɲ/ : ʔɲɑ: 「派遣する」

異なる例として、Budy 方言（結義）で見られるものもある。

/q^h/ : ^q^hɛ: ʔtse 「彼ら」

/q/ : 'qa 「辛い」

「彼ら」については、Budy 方言（洛義）で ^k^hwě ʔts^ha となるため、/q^h/と/k^hw/の対応が見て取れる。

Sun (2005) の gSerpa 方言でも /q^h, q/が見られる。

/q^h/ : a-q^hɛ 「醜い」

/q/ : qap 「隠れる」

5.4.2 無声唇齒摩擦音

/f/の存在は、阿壩州のチベット語方言をはじめ、青海省南東部のチベット語方言に見られることが知られている。

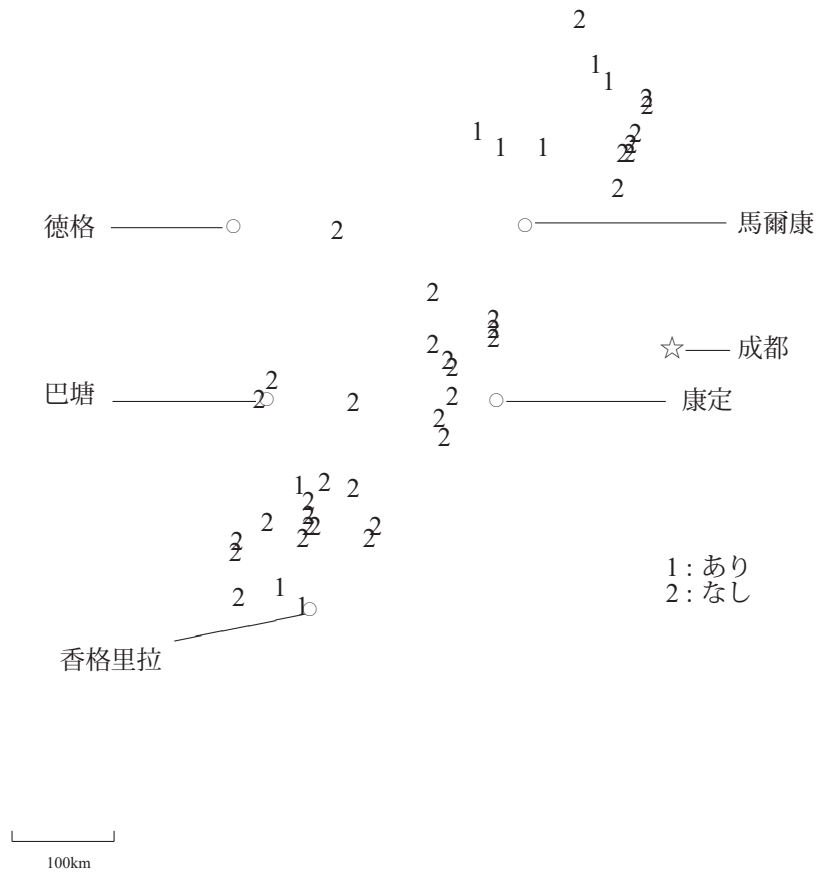


図 5.52: 唇齒摩擦音の有無の言語地図

阿壩州のチベット語方言では、/f/は多く ϕf として現れることが多い。たとえば rNgawa 方言では $\phi fən$ 「雲」(蔵文 *sprin*) や ϕfu 「毛」(蔵文 *spu*)、 $\phi fəŋ k^h u$ 「狼」(蔵文 *spyang ku*) などで、蔵文の *sp(r/y)-* に対応する。そのほかに rNgawa 方言には異なる蔵文との対応形式、たとえば $\phi^h ak$ 「お面」(蔵文 *'bag* に対応か?) に唇齒摩擦音が現れる。

このような例とは異なって、「九香線」南部の Rwata 方言や Nyishe 方言に見られる /f/ は、その由来がはっきりと分らない。たとえば、Rwata 方言の ʰfi 「孵る」や Nyishe 方言の ʰfa 「光、稻光」などである。

5.4.3 無声鼻音

無声鼻音/m, n, ŋ, ɲ/は比較的広く見られる音素だが、見られない方言の分布が問題となる。

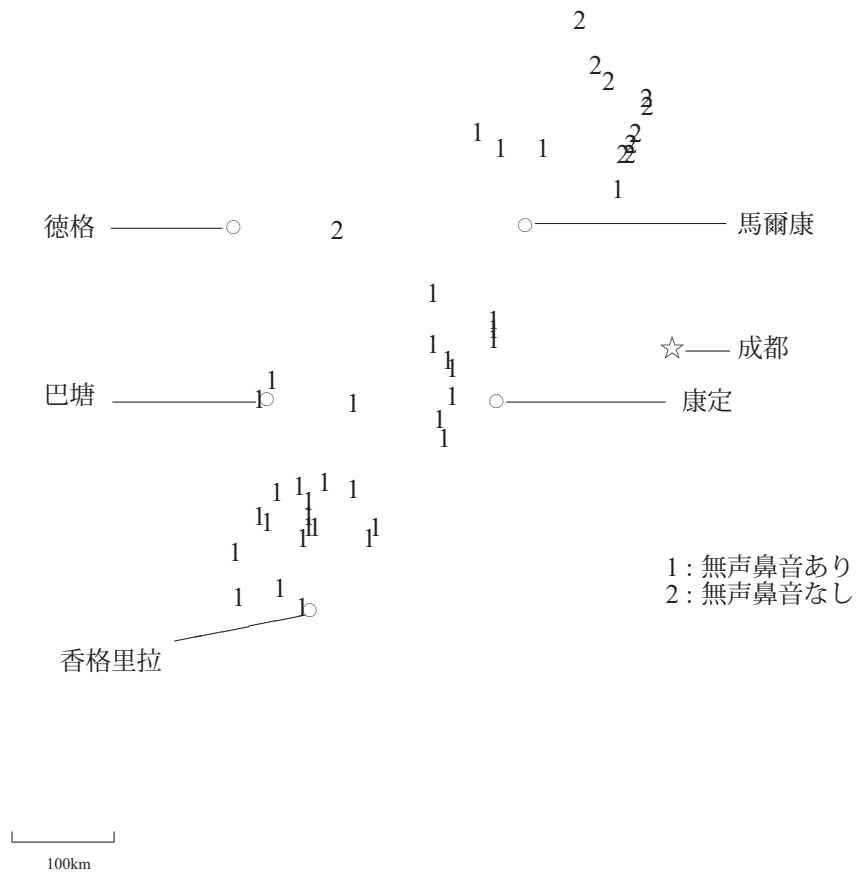


図 5.53: 無声鼻音の有無の言語地図

この地図は、無声鼻音がヒャルチベット語に分類される方言群に一律に存在せず、なおかつヒャルチベット語以外の方言にはすべて備わっているということを明らかにしている。

無声鼻音は比較的蔵文との対応関係が得られやすいもので、それぞれ基字 ng, ny, n, m に頭字 s がついた蔵文形式をもつ語に対応することが多い。簡単に例を挙げれば、以下のようなになる。

語義 藏文	早い <i>snga</i>	心臓 <i>snying</i>	鼻 <i>sna</i>	薬 <i>sman</i>
rNgawa	ʂŋa	ʂŋəŋ	ʂna	ʰmɛn / ʰmən
sProsnang	ʰŋa βə	ʰŋiː	ʰna βuː	ʰmã
Lhagang	ʰŋa mo	ʰŋi / ʰŋi	ʰna	ʰmɛ
Sagong	ŋẽ	ŋĩ	ñõ	mɛʔ
Budy	ʰã ʰtɕa	ʰjẽ	na	mjɛ

rNgawa 方言は「薬」の例からも分かるように、藏文頭字 s が伴っていても必ずしも無声鼻音で現れないなど、やや異なる対応関係を持つこともあり、このことは逆に頭字 r をもつ藏文 *rnga mong* 「らくだ」に ʂŋa moŋ と無声鼻音が現れるなどの例がある。頭字 r をもつ形式では、基本的には無声鼻音で現れないため、この例は注目できる。

それでは、ヒャルチベット語では、以上のような無声鼻音が現れる箇所にもまったく対応関係がないかということ、そうではない。

語義 藏文	鼻 <i>sna</i>	薬 <i>sman</i>	耳 <i>rna</i>	傷 <i>rma</i>
Askyirong	na ⁿ do	ʰmã	ʰnafi	mafi
Phyugtsi	ʰnã ŋgo	meː	na fiaː	ʰma
Ketshal	ʰna	ʰmẽ	nafi	ʰmah

以上の例で見ると、Phyugtsi 方言の「鼻」の例に無声音が存在した痕跡であると考えられる無声の前気音が存在することが分かる。ただし、このような対応がいずれの藏文対応形式にも一貫しては現れないのがヒャルチベット語全体に見られる特徴であるが、わずかな例でもこのような鼻音に先行する無声前気音の存在が確認できる。

5.4.4 硬口蓋閉鎖音 2 種

/c/系列または/ɕ/系列の存在について問題となる。基本的に、この両者の系列が 1 方言に並存することはまれである⁴¹。または、先行研究ではこの 2 種類の記号が混同されて理解されている面がある⁴²。しかしながら、この 2 系列は音声学的に極めて厳密に異なって実現されている。筆者は音声学的観点から見て、/c/系列は硬口蓋閉鎖音、/ɕ/系列は前部硬口蓋閉鎖音に当てて用いている。

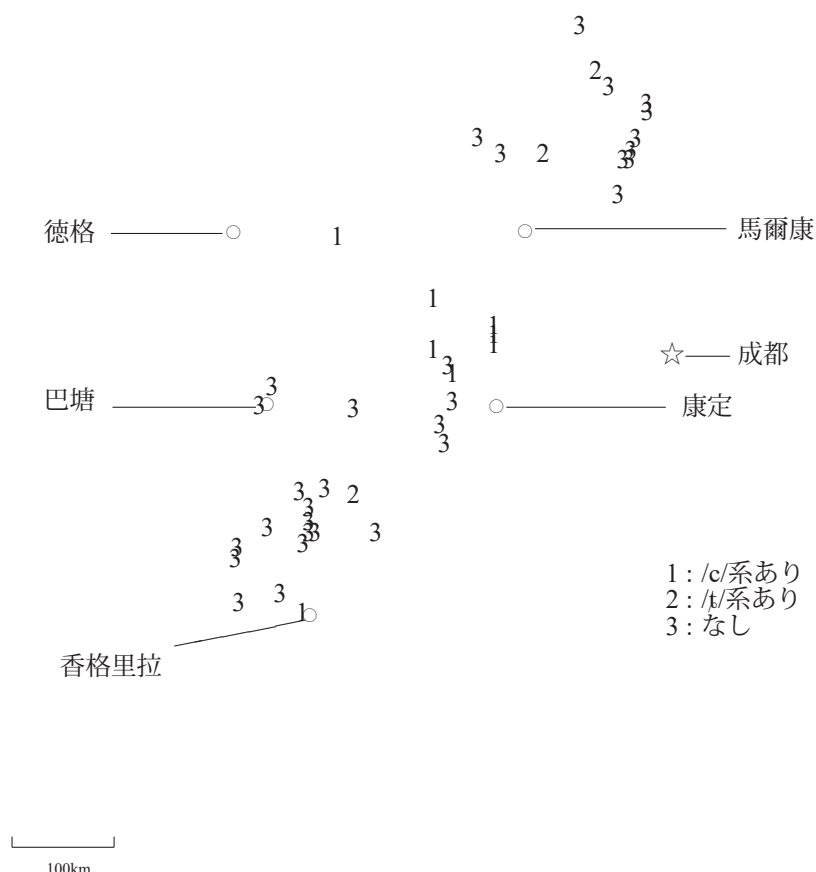


図 5.54: 硬口蓋閉鎖音の有無の言語地図

/c/系列は、一般的にアムドチベット語牧民方言に広く見られるが、それ以外の方言にも見られる。その一方で阿壩州のアムドチベット語牧民方言に属する dMarthang 方言では、/ɕ/系列に対応する。アムドチベット語牧民方言以外にこの系列が見られる方言には、Sogpho 方言、dGudzung 方言、Morim 方言などがある。

⁴¹ ダパ語 Ngwirdei 方言では /c/ 系列と /ɕ/ 系列が並存する。

⁴² 金鵬 (1958) と格桑居冕・格桑央京 (2002) に言及される Chamdo [昌都] 方言の記述では、対応する語形式について、前者に /ɕ/ 系列が、後者に /c/ 系列が用いられる。どちらの資料もおそらく 1950 年代前後の調査に基づいていると考えられるが、実際の音声実態は筆者は未確認のため、何ともいえない。

/t/系列は Askyirong 方言、nDappa 方言、dMarthang 方言などに見られる。ただし同じ蔵文対応形式として現れるのではなく、それぞれ異なりがある。以下にいくつかの方言の具体例を蔵文形式を添えてあげていく。

Askyirong 方言

/tʰ/ : tʰɛ: 「税金」 *khral*

/d/ : d̥i d̥õ 「ナイフ」 *gri chong*

dMarthang 方言

/ʃt/ : ʃt̪u ru 「酸っぱい」 *skyur po*

/ᵐd/ : ᵐd̥oq qa 「速い」 *mggyogs pa*

nDappa 方言

/tʰ/ : tʰu 「水」 *chu*

/ᵐd/ : ᵐd̥o: 「虹」 *’ja’*

Sogpho 方言

/c/ : ce 「～の (属格)」 *kyi*

/ᶠj/ : ʲjo 「100」 *brgya*

Morim 方言

/ʰc/ : ʰc̥õ ᵊkʰu 「狼」 *spyang khu*

/ᶠj/ : ʰje: 「8」 *brgyad*

5.4.5 硬口蓋摩擦音 2 種

/ç/または/ɟ/の存在について問題となる。この両者は互いに独立して存在する。

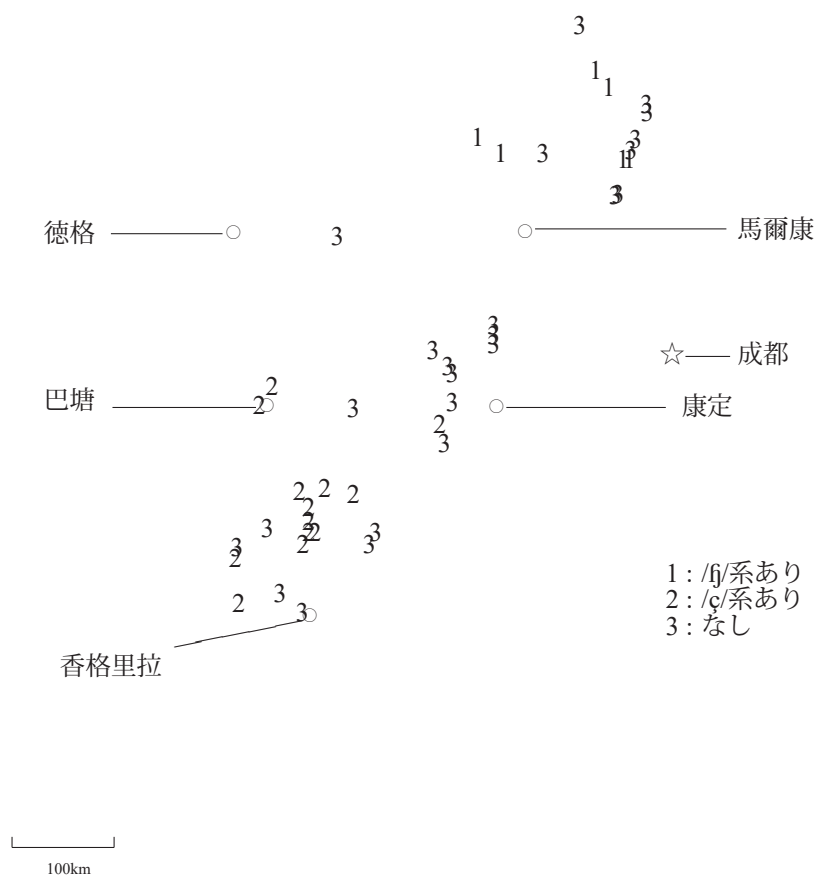


図 5.55: 硬口蓋摩擦音の有無の言語地図

/ç/は Nyishe 方言、Rwata 方言、nDappa 方言などに見られる。

/ɟ/は Ketshal 方言、dMarthang 方言などに見られる。

いずれも調音点の比較的近い硬口蓋摩擦音/x/などと並存する点に特徴がある。

これらの音素をもつ語は方言によって異なりがあるため、以下にいくつかの方言の具体例をあげていく。

Nyishe 方言

/ç/ : ˆçe? çe? 「水平の」 *leb leb*

/x/ : ˈxje? xje? 「ゆがんだ」 *kyog*

nDappa 方言

/ç/ : ˈçã 「靴」 *lham*

/x/ : ˈxʰɿ fiu 「紙」 *shog bu*

Ketshal 方言

/ʃʰ/ : ʃʰaa 「鹿」 *shwa wa*

/xʰ/ : xʰa γi 「あそこ」 *pha gyi*

Askyirong 方言

/ʃʰ/ : ʃʰa 「肉」 *sha*

/xʰ/ : xʰan ʃnaγ 「肌」 *sha gnad*

rNgawa 方言

/ʃʰ/ : ʃʰa mo 「きのこ」 *sha mo*

/xʰ/ : xʰam 「靴」 *lham*

Askyirong 方言や Ketshal 方言などは、蔵文からでは以上のどちらの音素に対応するか分からない。語ごとに異なっているし、地域的な共通点も見出しにくい。

5.4.6 /r/と/z/の共存

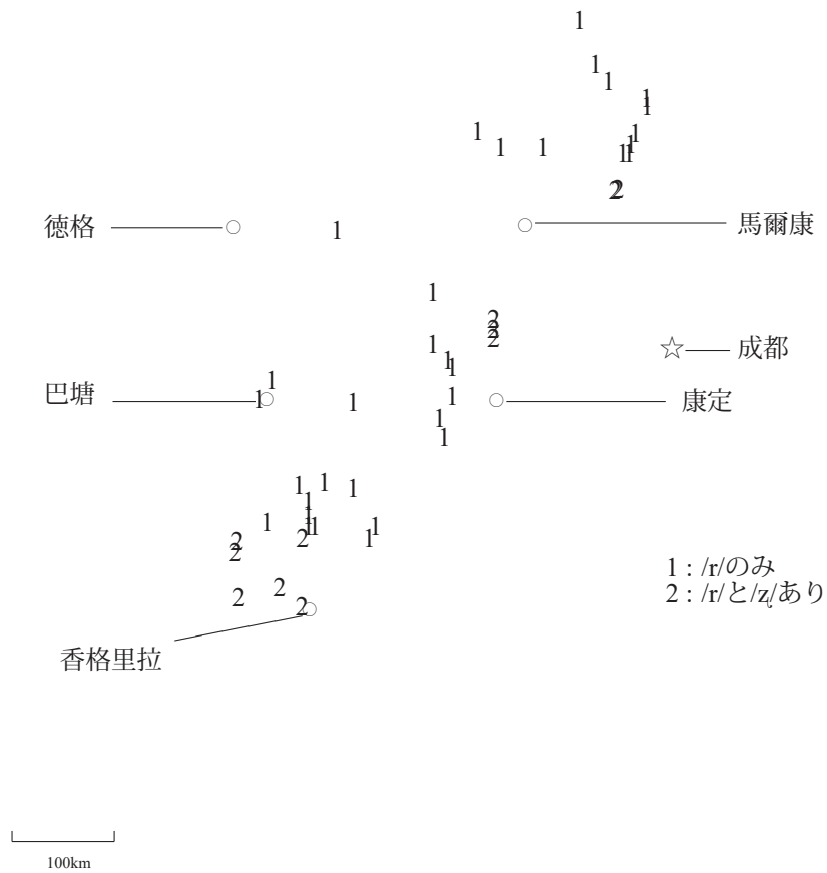


図 5.56: /r/と/z/共存に関する言語地図

/r/と/z/が共存しているのは、「九香線」上の南部および中部（丹巴県）の方言に多く、北部の Zhongu 方言が独立して分布している⁴³。この音素については、数詞「4」の分析の箇所でも触れたとおりである。

⁴³地図上には表していないが、松潘県の Muni（牟尼）方言にも /r/と/z/が共存している。

5.4.7 /r/と/s/の共存

基本的に、多くの方言に/s/は存在するが/r/はそうではない。表記上の理由ではなく音声学的な差異を伴うこれら2種類が対立する方言がどこに存在するか、視覚化して確かめる。

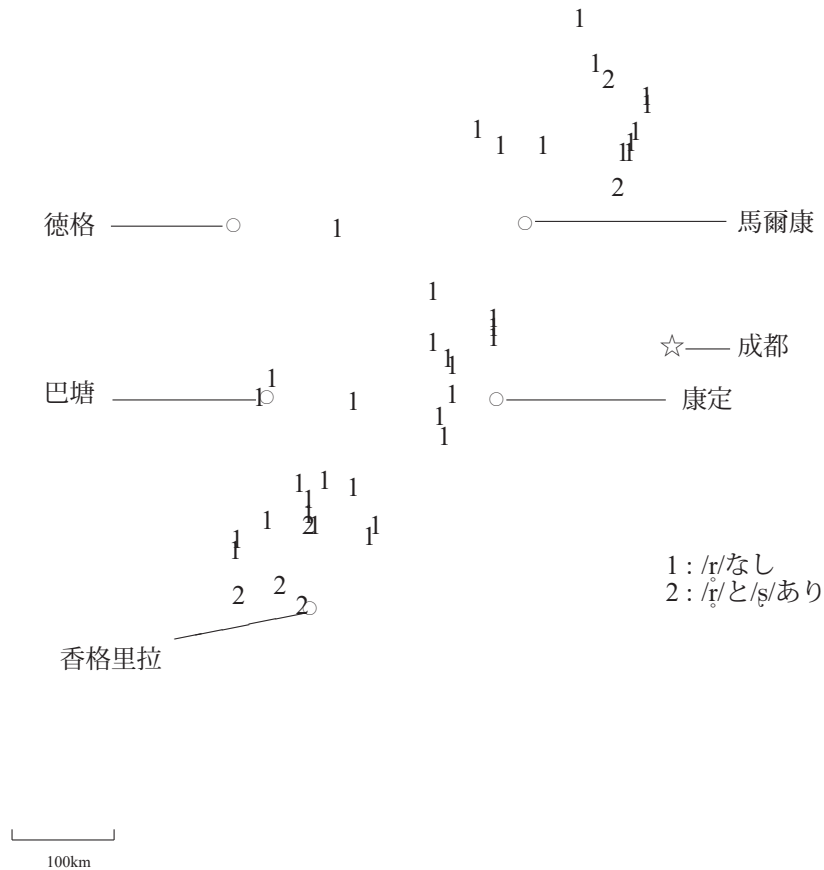


図 5.57: /r/と/s/共存に関する言語地図

/r/と/s/が共存するのは、南部の迪慶州の方言と北部の方言の一部に見られる。/r/は極めて少数の語にしか現れない。

いくつか例を挙げておくと、rGyalthang 方言 r̥i: 「裂く」、Nysishe 方言 r̥i 「雲」、Ragwo 方言 r̥ə t̥u 「肩」などである。

5.4.8 後舌半狭非円唇母音/ɤ/

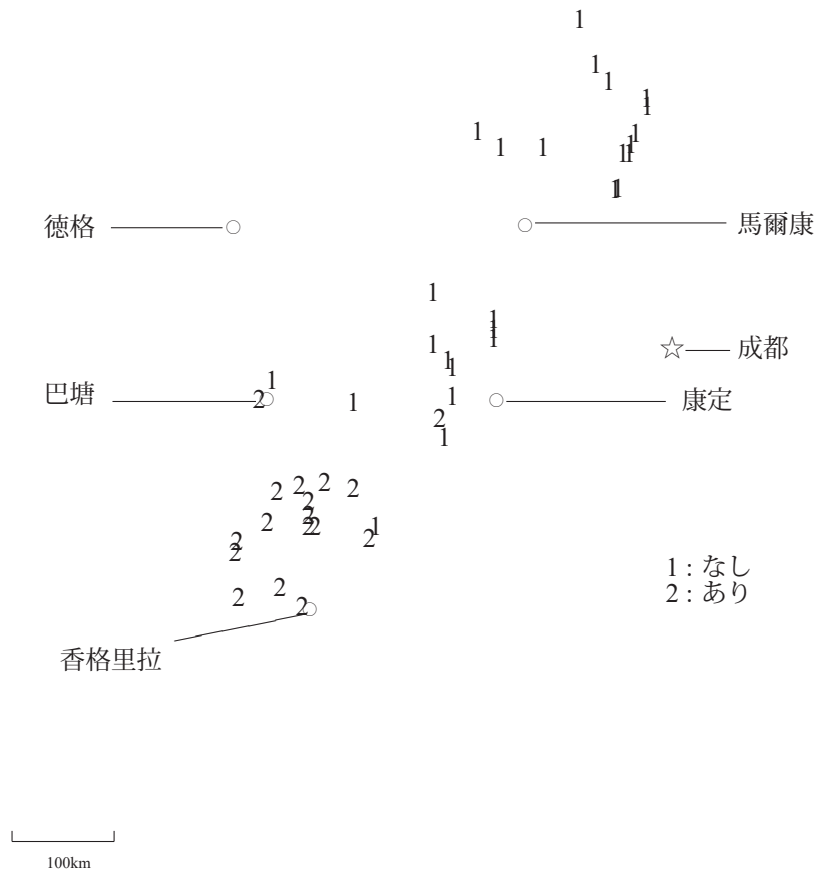


図 5.58: 母音/ɤ/の有無の言語地図

これは甘孜州南部を中心に広く見られる音素である。蔵文との対応関係はかなり分かりやすく、蔵文 o# もしくは u# に対応することが多い。以下に例を挙げる。

語義 蔵文	年 lo	齒 so	虫 'bu	毛 spu
Lhagang	ˈlo	ˈsʰo	ˈmbu	ˈhpui
Grongsum	ˈlɤ	ˈsʰɤ	ˈmbu	ˈhpui
Sagong	ˈju	ˈsʰu	ˈmbɤ	ˈpɤ

ɤのない Lhagang 方言と対照しつつ、Grongsum は蔵文 o# 対応形式に、Sagong 方言は蔵文 u# 対応形式に現れることが分かる。

Nyishe 方言では、複音節語によく現れる。たとえば ˈtɕʰɤ wa 「雨」、ˈɕi mā ˈkə lɤ 「ちょうちょ」など。

5.5 語形式とその地理的分布の考察

本節では、1つの語義を基準に、各種方言でどのような語を用いて表すかを地図化して提示し、考察する。この問題設定がいわば方言地理学の本質的議論になる。ただし、質の高い分析は（地点数の点での）資料の不足が影響し、本論文の範囲では困難である。本節の目標は、従来個別方言の記述の中でとらえられてきた語形式を地図化することによって分布の類型を明らかにし、将来の本格的な方言地理学的分析への見通しを具体例を通して与えることになる。

語形式の分析に際して、明確な1つの基準は蔵文の形式との対応の有無である。蔵文に対応しない形式は、各方言に少なからず存在する。それは大まかには次の3種類に分類できるだろう。

1. 蔵文と関係があるように見えるが、文字通りの対応関係を得られないもの
2. 他言語からの借用形式であることが分かるもの
3. 借用関係が不明瞭なもの、もしくはまったく不明なもの

1.の中には、異体字や古蔵文に一致するものもある。2.には川西走廊諸語やさらにはチベット文化圏周辺に分布する言語についても考察する必要がある。3.にはチベット・ビルマ諸語の祖語にさかのぼることのできる形式が含まれる可能性がある語も存在するかもしれない。

ここで取り上げる語には2タイプあって、1つはある特徴的な形式を用いる方言が極めて限定的であることを地図をもって説明するもの、もう1つは方言によってさまざまな形式が用いられるものについてその分布の共通性と相違性を明らかにする地図を作成して説明するものである。前者のタイプはさらに2通りの結果が想定され、一方は特徴的な形式の唯一性の提示、他方は共通する特徴をもつ語を用いている方言の分布の把握である。地図化する際は、蔵文と対応する方言と対応しない方言を分割することを優先し、分布を明らかにする。

まずはじめに、ここで扱う語とその注目すべき点について簡単にまとめておく。

語義	注目点
米	語形式全体・特殊形式の限定的分布
8	語形式全体・特殊形式の限定的分布
橋	初頭子音・特殊形式の限定的分布
雲	母音/語末の鼻音要素
花	第2音節初頭音
葉	語形式全体

11	第2音節初頭音
12	第2音節初頭音
16	第1音節末子音＋第2音節初頭音
目	初頭子音・古蔵文対応形式
うさぎ	第2音節初頭音・語形式全体
猿	語形式全体
魚	母音/語末の鼻音要素
靴	初頭子音対応形式
今日	第1音節の形式・第2音節の母音/音節末の鼻音要素
昨日	第2音節の初頭子音
明日	語形式全体
身につける	蔵文 g-/gy-対応形式
猫	語形式全体
犬	無声無気音の存在
おすぶた	語形式全体
子ぶた	語形式全体
森	語形式全体
友人	語形式全体
火	初頭子音・古蔵文対応形式
右	初頭子音
よい	語形式全体
もの	語形式全体
月	蔵文 zl-対応音
黒テント	初頭子音
唐辛子	語形式全体・漢語来源借用語の分布範囲
とうもろこし	語形式全体・漢語来源借用語の分布範囲
飛ぶ	語形式全体
子供	語形式全体
顔	語形式全体
虹	語形式全体
肉まん	語形式全体・漢語来源借用語の分布範囲
青裸	語形式全体
娘	音節数
太陽	音節数

以下、地図化する際には、語形式全体が問題とならない限り、「蔵文対応形式」には先に考察した各方言の蔵文対応形式に従うもの全てを含んでいる。たとえば蔵文-a#について、/o/に対応する方言で/o/に対応する限り「蔵文対応形式」に分類する。

5.5.1 「米」 'bras

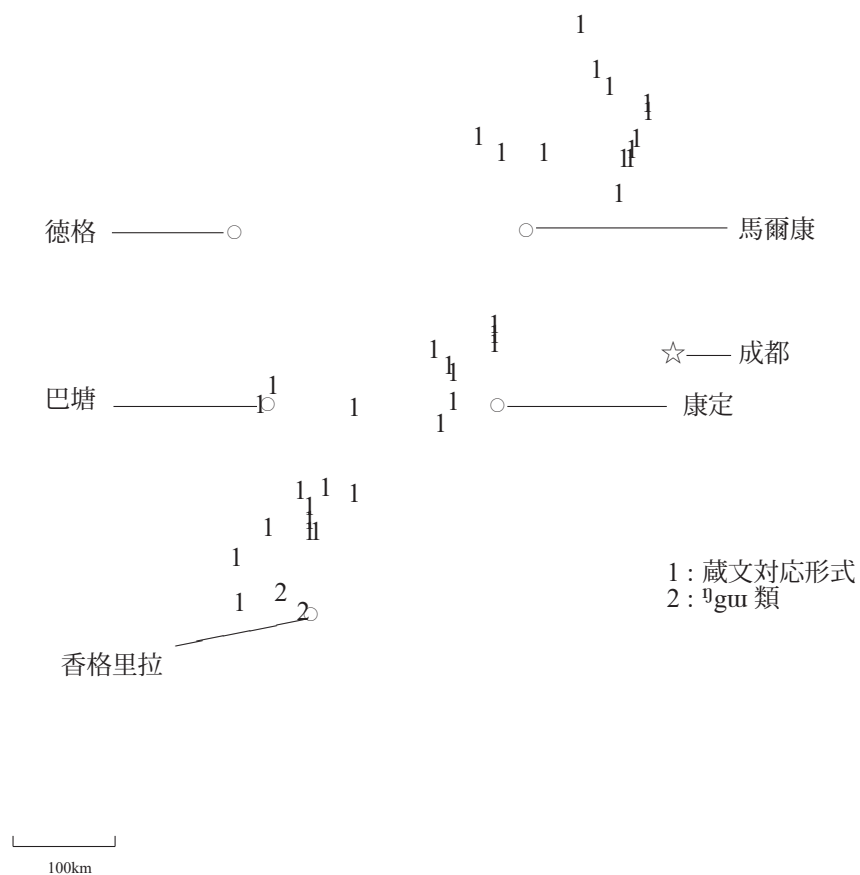


図 5.59: 「米」の語形式言語地図

rGyalthang 方言 'gu: および Nyishe 方言 'gi に独自の形式が用いられる。それ以外の地域は均一的に蔵文 'bras 対応形式が用いられている。この対応形式は食用の「米」全般を指すことができる。

以上 2 方言の形式の来源はまったく分らない。

5.5.2 「8」 *brgyad*

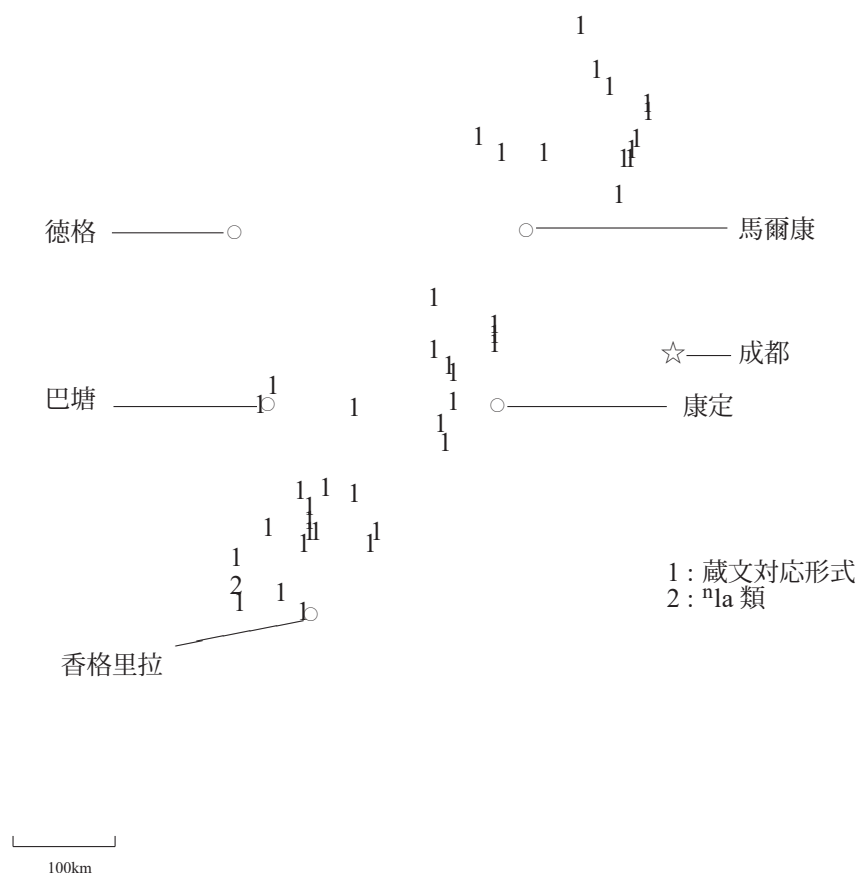


図 5.60: 「8」の語形式言語地図

Yanmen 方言にのみⁿla という形式が用いられる⁴⁴。この形式は Matisoff (1997) を参照しても説明できない、来源不明のものである。

⁴⁴黄布凡主編 (1992) を参照すると、チベット・ビルマ諸語で初頭子音に /l/ を含んでなおかつ Yanmen 方言に比較的近い地域に見られる言語には、ダラン語 *lium*³⁵ やイドゥ語 *i⁵⁵liog³⁵* がある。Yanmen 方言との関連は不明。

5.5.3 「橋」 *zam pa*

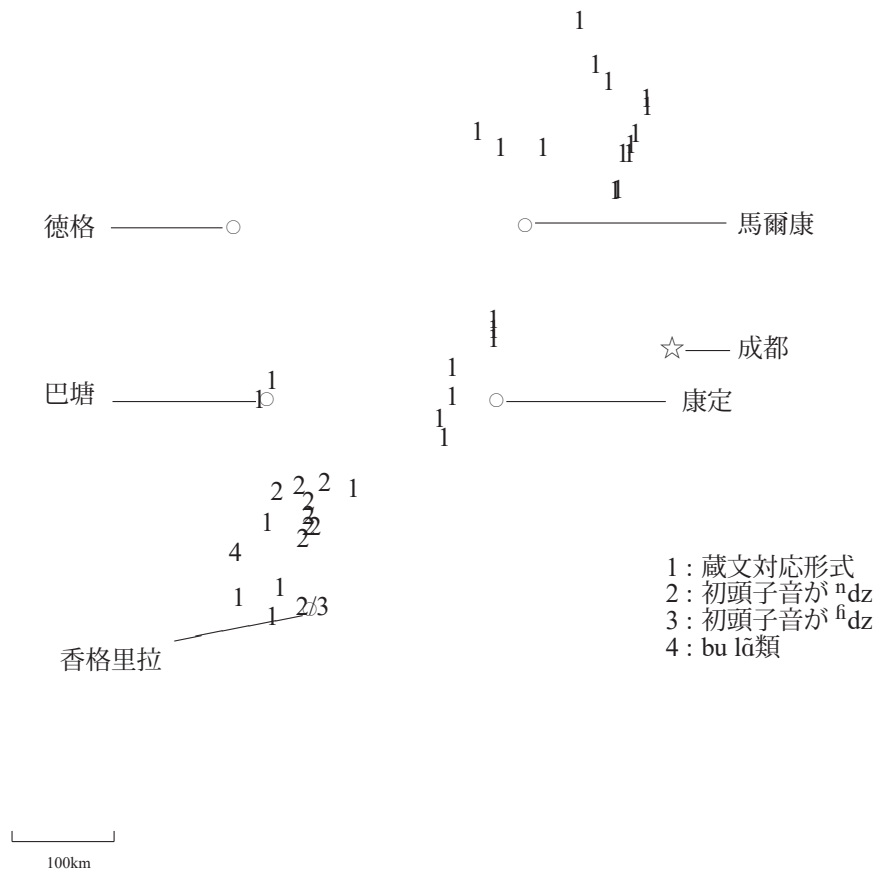


図 5.61: 「橋」の語形式言語地図

郷城県の諸方言を中心に、前鼻音を伴う歯茎破擦音の形式が用いられていることが分かる。gDongsum 方言では^ⁿdzə mɔ といった形式となる⁴⁵。

その南にある rGyalthang 方言では郷城県の諸方言と同じく前鼻音つきの初頭子音をもつ形式とともに、変異形に前鼻音を伴わない歯茎破擦音の形式も用いられ⁴⁶、^ᶠdzā mba となる。この形式は納西語 dzo²¹ (黄布凡主編 1992) との関連が指摘できるかもしれない。

Yungling 方言^{bu lā}は来源不詳である。

⁴⁵参考までに、初頭子音が前鼻音つき歯茎破擦音をもつ言語に、ムニャ語 Lugpa 方言 ndzo²⁴ がある (黄布凡主編 1992)。

⁴⁶おそらく両者に意味的な差異はない。これが話者によって異なるのか、それともほかに使い分けの条件があるのかは不明である。

5.5.4 「雲」 *sprin*

この例では、初頭子音の対応関係は先に見たので、鼻母音を持つか持たないかを議論の焦点にする。

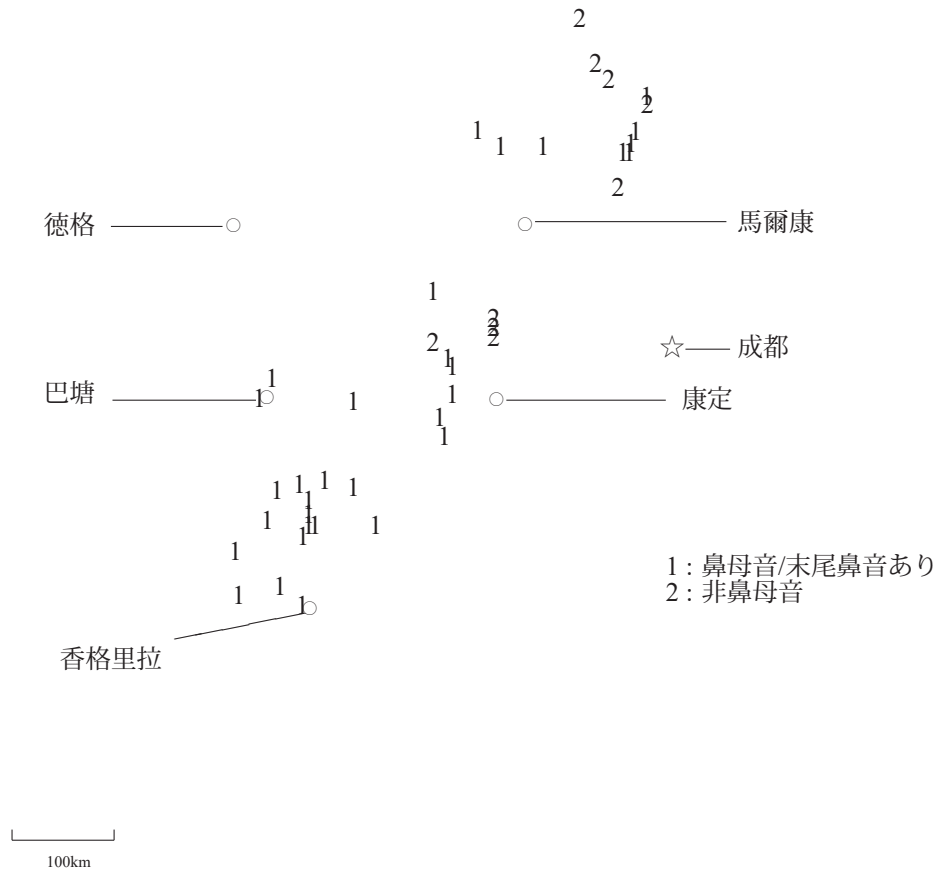


図 5.62: 「雲」の母音言語地図

この対応は、方言の音韻構造が原因で蔵文の末尾にある鼻音要素が脱落している方言（Zhongu 方言など）を除くと、この鼻音が脱落しているように見える対応は注目に値する。このような方言は、若爾蓋県東部を中心とする方言および丹巴県の方言などに見られる。たとえば、Askyirong 方言⁴⁷ $^h\text{ʃa}$ 、Phyugtsi 方言⁴⁸ $^\circ\text{ʃi}$ 、Sogpho 方言⁴⁹ ^ht 、sProsnang 方言⁵⁰ ^hpri 、Morim 方言⁵¹ $^h\text{tə}$ などである⁴⁷。

ここでヒャルチベット語に注目すると、Askyirong 方言やPhyugtsi 方言は語末の鼻音を多くの例で脱落させており、体系的な対応の傾向が見て取れる。ただし上の地図を見ると、そのような方言が幹線道路から外れた地域にかたまり、幹線道路上の方言には鼻音要素を保っていることが多い。これもまた1つの傾向である。

⁴⁷ ギャロン語群 (Sun 2000) の言語でも類似の例がある。「雲」についてギャロン語 Kyomkyo 方言 *zdem*、スタウ語 Mazur 方言 *z.du* で、スタウ語は Morim 方言の近隣に分布する。

5.5.5 「花」 *me tog*

まず、蔵文対応形式と非対応形式の分布を地図化する。

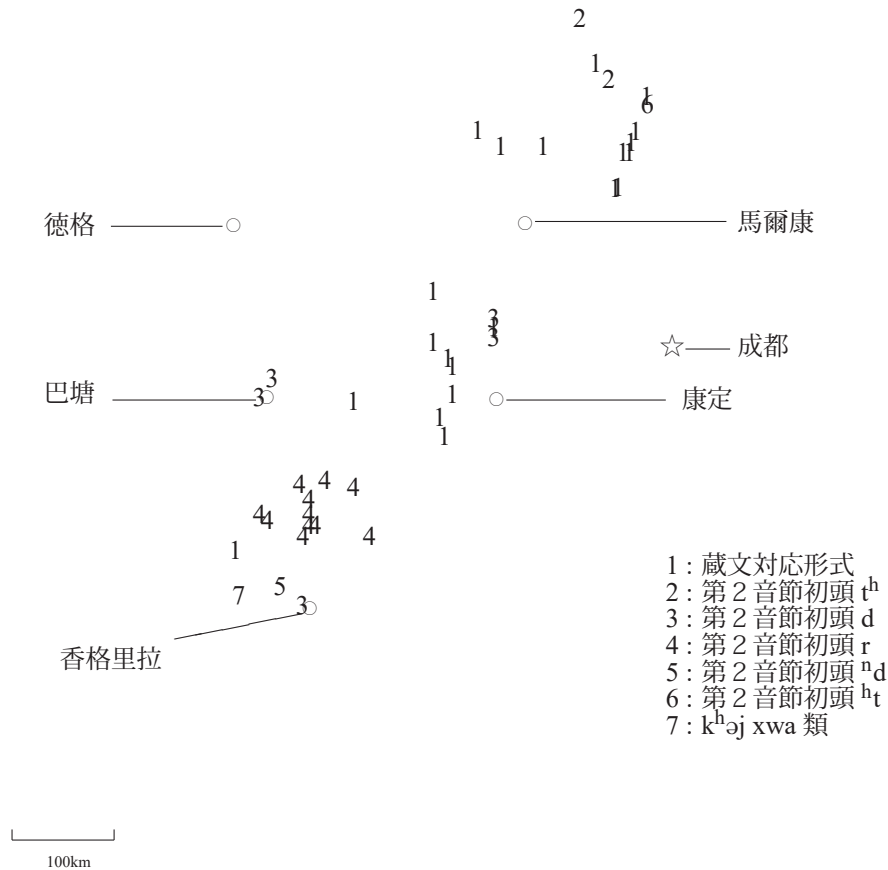


図 5.63: 「花」の語形式言語地図

gZari 方言が単独で第2音節初頭に有気音 ^ht を持っているが、実際はその西方で話される rMachu 方言（甘粛省に分布）にも有気音を持つ形式が見られる（周毛草 2003）から、地域的な特徴とも考えられる⁴⁸。

Nyishe 方言は 'mē ⁿdu? という音節間に鼻音要素が現れる比較的珍しい形式を持つが、これはギャロン語と似ている⁴⁹。

郷城県周辺の方言では第2音節が r となっている点が特徴的である。地点ごとになぜかな違いが見られ、たとえば Sagong 方言、Phrengme 方言、Rwata 方言では 'mə ro?, Dongsum 方言では 'mə ru?, Ragwo 方言では 'me ro?, nDappa 方言では 'me ro? または 'mbe ro?, sDerong 方言では 'me ro? となって現れる。ただし sDerong 方言に

⁴⁸このようなことは、チベット語方言が連続的に分布している地域について、地図を描く範囲を限定して切り出している以上、生じざるを得ない問題である。

⁴⁹Kyomkyo 方言では men tok という。

おける蔵文 *me tog* 対応形式を含む「ひまわり」(蔵文 *nyi ma me tog*⁵⁰) の例では、*ˈnĩ mā ˈme dɔʔ* となり、*d*が現れる。

また、第1音節の母音が *e* か *ə* かも異なりが見られ、郷城県中央部の方言は *ə*、その周辺の方言は *e* である点も注目できる⁵¹。

rGyalthang 方言の *ˈmbə dɜʔ* と dGudzong 方言の *ˈmbuɪ deʔ* は互いに似ているが、ともに第1音節が特殊である。第2音節の母音は蔵文 *og* 対応形式にそっている。

Budy 方言の *ˈkʰəj xwa* という形式は、まったく特別である⁵²。

⁵⁰ これは「太陽 *nyi ma*」と「花 *me tog*」という要素からなる複合語である。

⁵¹ さらに mBathang 方言 *ˈmɜ dɔʔ* でも母音が *e* ではなく *ɜ* になっている。

⁵² 結義村では *ˈkʰəj xwa* 以外の形式は用いないが、洛義村では *ˈme toʔ* も併用するという。

なお、漢語「開花」と音的対応が見られると疑えるが、借用語ではない。また、*xwa* のほかに「開く」という意味と関連するのではないかという母語感覚があり、実際 Budy 方言で「開く」は *ˈwa xwa* という。

また、*xwa* の音形式に近い形式は mBathang 方言 *ˈxʰɔaː* にも見られる。ただしこの形式は蔵文 *shar* に対応する形式である。

5.5.6 「葉」 *lo ma*

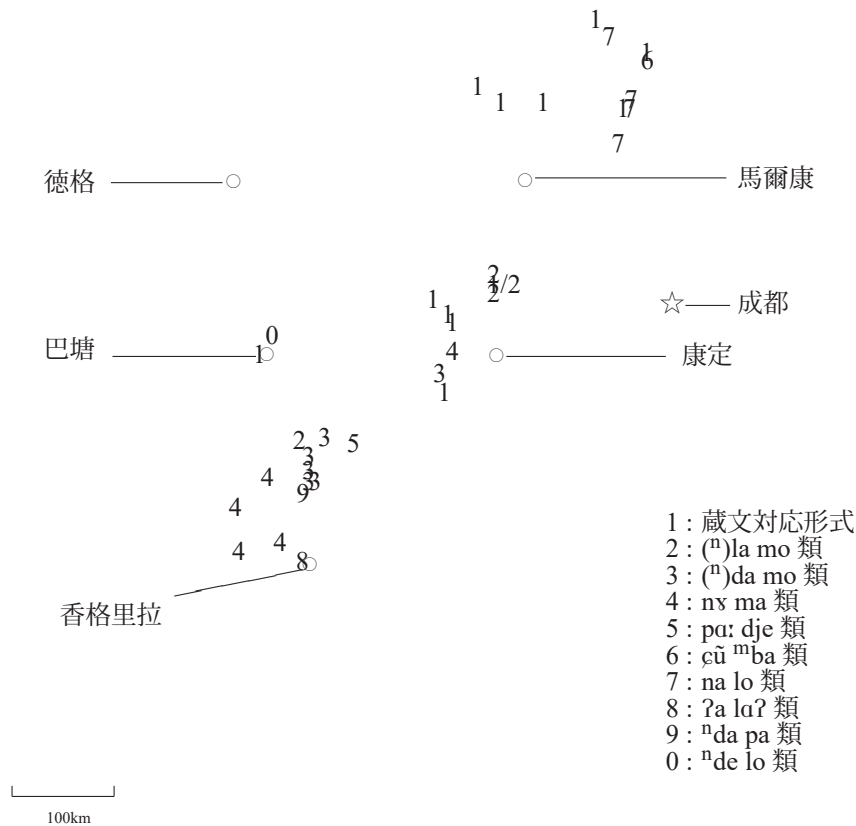


図 5.64: 「葉」の語形式言語地図

藏文 *lo ma* 対応形式は非対応形式との分布があまり明確に線引きできない。rNgawa 方言などアムドチベット語は対応形式を持っている。ヒャルチベット語にしろムニャ地域のチベット語にしろ、近隣に非対応形式が存在する。

Babzo 方言 na lo、sKyangtshang 方言 na lo などがヒャルチベット語内部に複数見られる。ほかの地域では見いだされない形式である。

丹巴県の場合、sProsnang 方言^ˈla mǝ、Sogpho 方言^ˈlɐ mǝ、dGudzong 方言^ˈla mo と少しずつ形式が異なる。藏文とは各音節の初頭子音が一致している。

郷城県の場合も各方言で少しずつ形式が異なっている。Sagong 方言^ˈda mǝʔ、Phrengme 方言^ˈda mǝ、gDongsum 方言^ˈta mǝ、Ragwo 方言^ˈda ŋǝ、Rwata 方言^ˈla ma となっている。これらの形式を見て、仮定として第 1 音節の tⁿdⁿl のそれぞれの音形式が後に分析する「月」の初頭子音との関係に共通性があると考え、これらはいずれも藏文^ˈdab ma 「木の葉、花びら」と関連を見出すことができる。近い形式が Grongsum 方言^ˈde ma にも見られる。これは gDongsum 方言と同様、前鼻音を

持たない。また、以上の第1音節の t/d^md/^ml そして /l/ の相互関連性の仮定を考えると、郷城県の方言に広く見られる語全体の構成は上に述べた丹巴県のタイプのものに酷似している。

迪慶州の方言では、rGyalthang 方言を除くと Nyishe 方言^ʼny ma、Budy 方言[^]ny ma というような形式で現れる。このような例を、たとえば「虫」[^]mu (蔵文^ʼbu) に見られる口語形式と蔵文の対応関係と対比すれば、郷城県の方言と同様に蔵文^ʼdab ma と関連のある形式と考えられなくもない。

Phyugtsi 方言の ɕũ^mba はまったく特別である。

nDappa 方言の^ʼpa: dje もまたまったく特別である⁵³。

⁵³強いて近似の例を挙げられるとするならば、ダパ語 Ngwirdei 方言の -pa la の第1音節がある。

5.5.7 「11」 *bcu gcig*

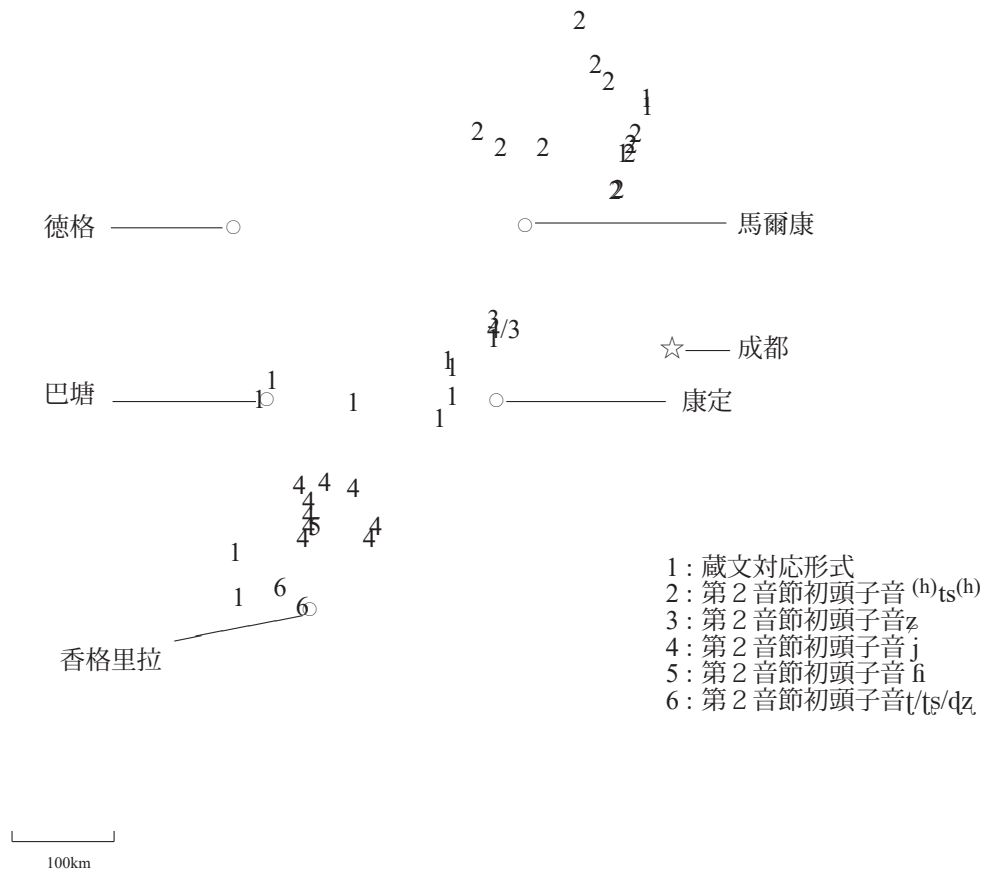


図 5.65: 「11」の語形式言語地図

蔵文 *bcu gcig* の対応形式は、第2音節にくる形態素をめぐって問題となる。

「九香線」北部では、広くアムドチベット語もヒャルチベット語も歯茎破擦音が現れ、そうでないものが際立っている。Sharkhog 方言では $^{\circ}\text{t}\epsilon\text{u}\text{f}^{\text{h}}\text{t}\epsilon\text{i}\text{f}$ 、Phyugtsi 方言では $^{\circ}\text{t}\epsilon\text{u}^{\text{h}}\text{t}\epsilon\text{i}$ となる。

郷城県及びその周辺の地域の方言は第2音節初頭子音に硬口蓋接近音 j をもつ。たとえば Sagong 方言 $^{\circ}\text{t}\epsilon\text{u}:\text{j}\text{i}?$ となる。この形式に共通なのが丹巴県の Sogpho 方言で $^{\circ}\text{t}\epsilon\text{u}:\text{j}\text{i}$ となるが、前部硬口蓋摩擦音に対応する $^{\circ}\text{t}\epsilon\text{u}:\text{z}\text{i}$ も見られる。これは近隣の sProsnang 方言でも $^{\text{h}}\text{t}\text{s}\text{u}:\text{z}\text{i}?$ と同じで、また dGudzung 方言では $^{\circ}\text{t}\epsilon\text{u}^{\text{h}}\text{t}\epsilon\text{i}?$ という蔵文対応形式を持っている。

香格里拉県の方言では、蔵文 C 対応形式がそり舌音であることからそり舌音で対応し、たとえば Nyishe 方言 $^{\text{h}}\text{t}\text{s}\text{o}:\text{d}\text{z}\text{i}?$ のようになる⁵⁴。

⁵⁴この例では、同じく蔵文 C 対応形式がそり舌音に対応する傾向にある sProsnang 方言

5.5.8 「12」 *bcu gnyis*

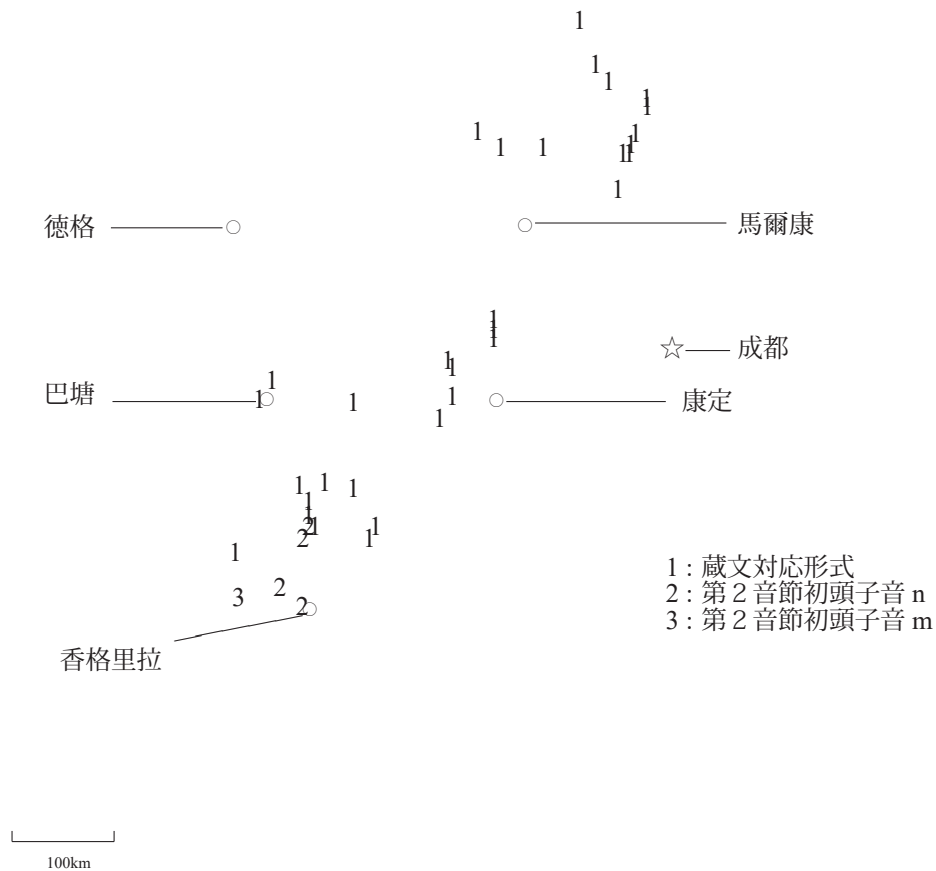


図 5.66: 「12」の語形式言語地図

藏文 *bcu gnyis* の第2音節にくる形態素の対応形式が問題となる。

迪慶州とその付近の方言で際立った対応をもっている。Nyishe 方言 ^htso: nə、gDongsum 方言 ^htso: nəなどは n が現れる⁵⁵。

Budy 方言（結義）の ^hptso: məはまったく特別である⁵⁶。同じ巴迪郷の洛義村では ^hptso: nəで、特別な形式とはいえない。結義村の方言のみが異なっているのである。

⁵⁵ ^htso: zi? の第2音節について、藏文との対応関係としてはそり舌音が期待されるのに現れていないことにも注意する必要がある。実際 sProsang 方言では、「1」（藏文 *gcig*）についても ^hde zi? / ^htci? というように、そり舌音ではない。

⁵⁵ この n はチベット・ビルマ祖語の形式 *g-ni-s/k 「2」（Matisoff 1997:67）の語根 *ni に直接関連がある可能性が指摘できる。

⁵⁶ しいて形式が近似する例をあげられるとするなら、怒語の中部方言の「2」に m⁵⁵ がある（孫宏開・劉路 1986）ということは前にも述べた。

5.5.9 「16」 *bcu drug*

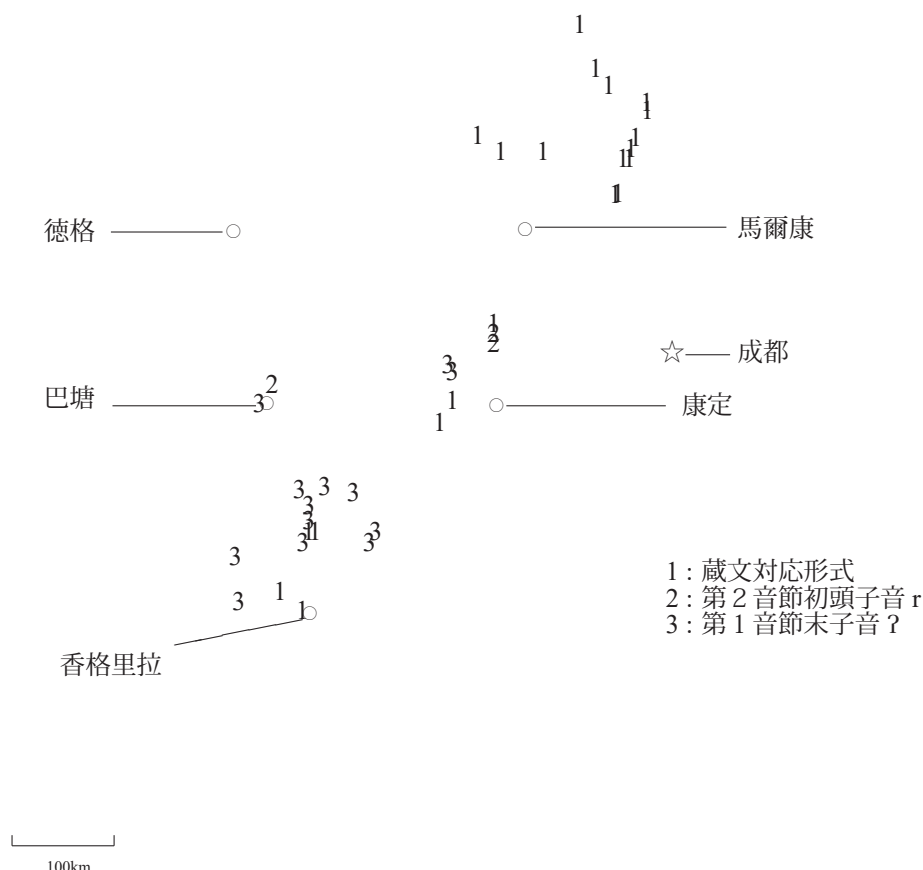


図 5.67: 「16」の語形式言語地図

藏文 *bcu drug* の対応形式は、2 音節語として実現される口語形式の音節間の形式をめぐって問題となる。

「九香線」中部および南部に藏文とやや異なった形式を持つ方言が分布している。丹巴県では、sProsnang 方言を除く Sogpho 方言では *t̪ɕu ruʔ*、dGudzong 方言では *t̪ɕu ruʔ* というように、第2 音節初頭子音がそり舌閉鎖/破擦音で現れない。おそらく藏文 *drug* の第1 子音が脱落した形式に対応すると考えられる。

郷城県と迪慶州では、藏文対応形式と非対応形式が混在しているように見えるが、香格里拉県及びそこに最も近い郷城県南部では藏文対応形式が現れる。それ以外の地域では、他の10 代の数詞では見られない第1 音節（「10」を表す部分）について末子音として声門閉鎖音が現れる。

また、dMarthang 方言は藏文対応形式をもつものに分類したが、*p̪t̪ɕi h̥[ɰuq]* となって第2 音節初頭に前気音が現れる⁵⁷。

⁵⁷ この種の前気音や、上に述べた先行音節末の声門閉鎖音は、Matisoff (2003:611) にある

5.5.10 「目」 *mig*

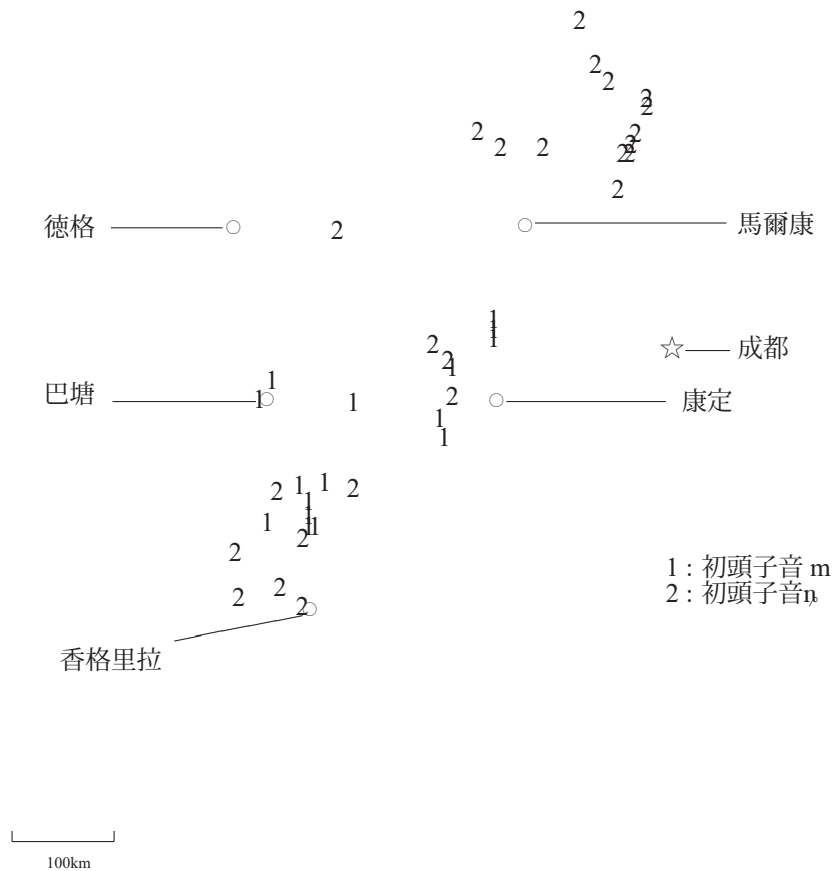


図 5.68: 「目」の語形式言語地図

この語は蔵文対応形式という形で扱うのが難しい。初頭子音について *m/n* のどちらで現れるかを地図化した。どちらの要素も地域的にまとまりを見せているように分布している。「九香線」北部は現在のところ例外なく *n* で現れ⁵⁸、カムチベット語では分布がやや交錯し、全体的に *m* が現れるが、ムニャ地域および「九香線」南部では *n* で現れる。*nDappa* 方言が *n* で現れるのは孤立的分布を見せる。

声調を持つ方言では、例外なく声調が高く始まるパターンをとる。この現象は Lhasa 方言でも確認されることから、早くから蔵文 *mig* ではなく古蔵文 *dmyig* との関連が指摘されていた。以上を示した地図は、音対応の観点から言って、蔵文 *mig* に来源する形式が見当たらないことを示している。

チベット・ビルマ祖語形式 **d-k-ruk* 「6」との関連があるかもしれない。

⁵⁸川西民族走廊以外に分布するアムドチベット語については、華侃 (1983) の指摘があるように、広い範囲に分布する方言で *n* で現れる。筆者の調査したアムドチベット語でも例外なく *n* で現れる。逆に、アムドチベット語で *m* で現れる方言が存在した場合、それに注目しなければならないということになるだろう。

5.5.11 「うさぎ」 *ri bong* / *yos*

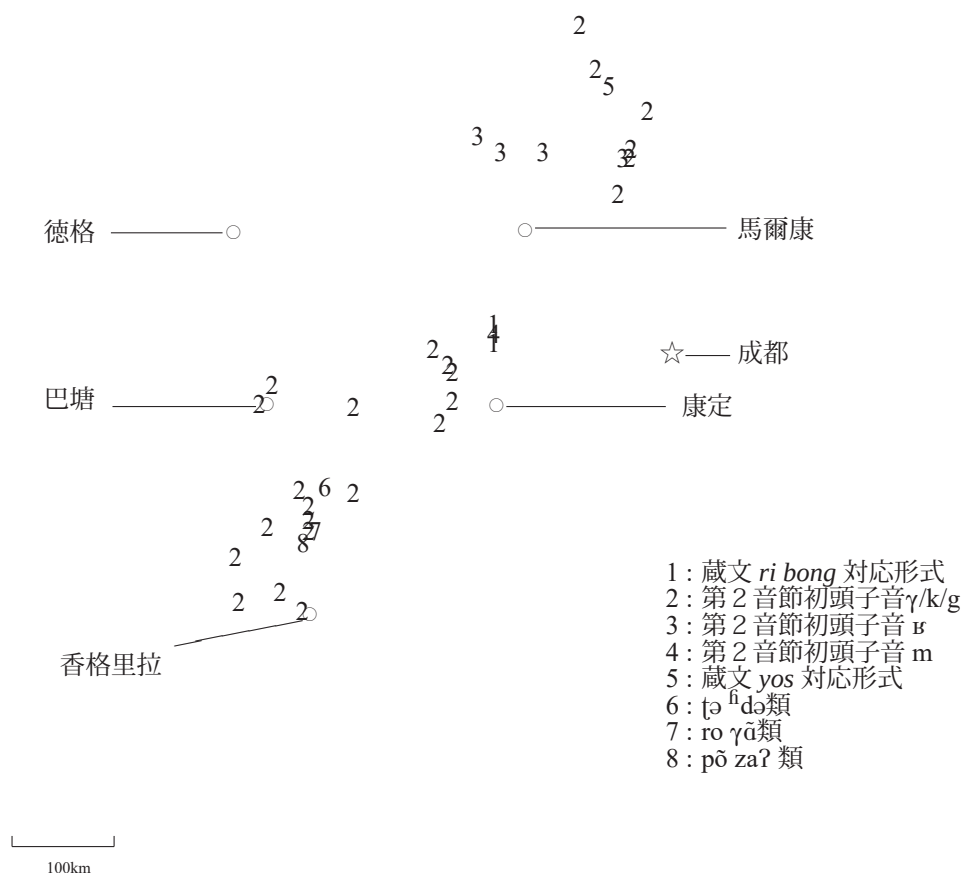


図 5.69: 「うさぎ」の語形式言語地図

ここで示す「うさぎ」は動物名であって、「う年」ではない。第2音節初頭子音に差はあるが、蔵文 *ri bong* 対応形式が広く分布していると考えてよい。蔵文 *yos* 対応形式は Babzo 方言のみで用いられる⁵⁹。

蔵文 *ri bong* 対応形式の第2音節初頭子音は、蔵文とは異なって、軟口蓋音または口蓋垂音で現れる方言が多く、両唇音で現れる方言は限定的で、地図上では丹巴県の方言にのみ分布し、さらに Sogpho 方言 $rə\ m\ddot{o}$ では両唇鼻音で現れる⁶⁰。

口蓋垂音が現れるかどうかは、以上の分布から、方言の音体系によっており口蓋垂音 β を音素にもっている方言では軟口蓋音が現れない傾向にある。口蓋垂音 β が存在する方言でも Zhongu 方言 $rə\ \gamma u$ のように β が現れないものもある。

⁵⁹ 丁種本《西番譯語》の《松潘譯語》には、「うさぎ」の項目に蔵文 *yos* 対応形式が記録されている。このため、現在の分布でも蔵文 *yos* 対応形式が見られることは、口語形式としては異質性があっても、奇妙な現象ではない。

⁶⁰ ムニャ語の「うさぎ」にも、両唇音をもつチベット語来源借用語が見られる。Lugpa 方言で $ri^{33}\beta\ddot{o}^{53}$ となる（黄布凡主編 1992）

郷城県周辺では、Ragwo 方言¹ro γã、Sagong 方言²tə^hdə、gTorwa 方言³põ za? など、蔵文に対応しないものが見られる。そのうち Ragwo 方言の形式はおそらく蔵文 *ri bong* と関連があると考えられ、gTorwa 方言の第 1 音節は蔵文 *ri bong* の第 2 字と対応するかもしれない。それ以外は来源不詳である。

5.5.12 「猿」 *spre'u* / *sprel*

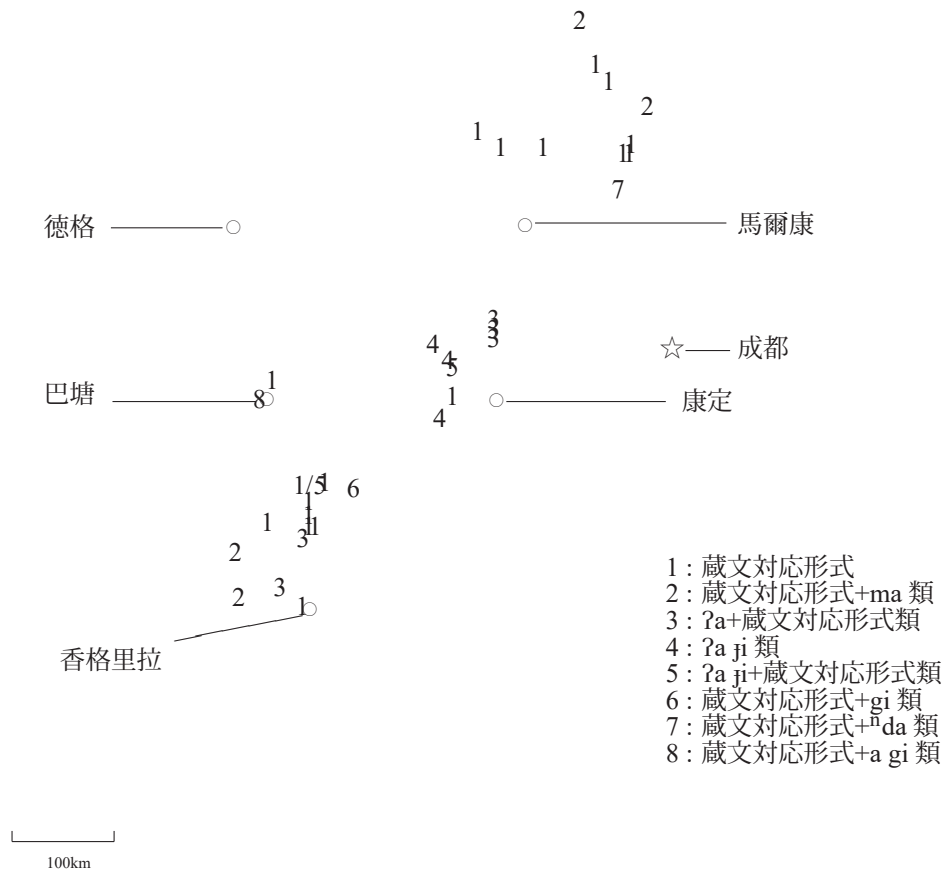


図 5.70: 「猿」の語形式言語地図

藏文対応形式を「猿」という語の中に持っているものと持っていないものに大別できる。

藏文対応形式のみを持つ方言はアムドチベット語および一部のヒャルチベット語、そして郷城県の方言に見られる。

藏文対応形式を持っていないものはムニャ地域に限られる。¹?a¹ji もしくは ¹?a¹gi という形式をとるが、来源は分からない。ところが、この形式を分解すると、多くの方言で藏文対応形式に ¹?a または ¹gi をもつものが見られ、Lhagang 方言 ¹?ə¹ji? ^htui や Rwata 方言 ¹?a gə¹ti というような両者の形態をあわせたものを用いる方言もある。¹?a をもつ方言を見ると、ムニャ地域の方言に加えその東方の丹巴県の方言、そして Nyishe 方言や gTorwa 方言など香格里拉県の一部の方言である。

「九香線」最北端と最南端には、共通した語形成が見られる。gZari 方言 t̪e: mu、Phyugtsi 方言 ʃu ma、Budy 方言 ^htə ma といった形式になる。

5.5.13 「魚」 *nya*

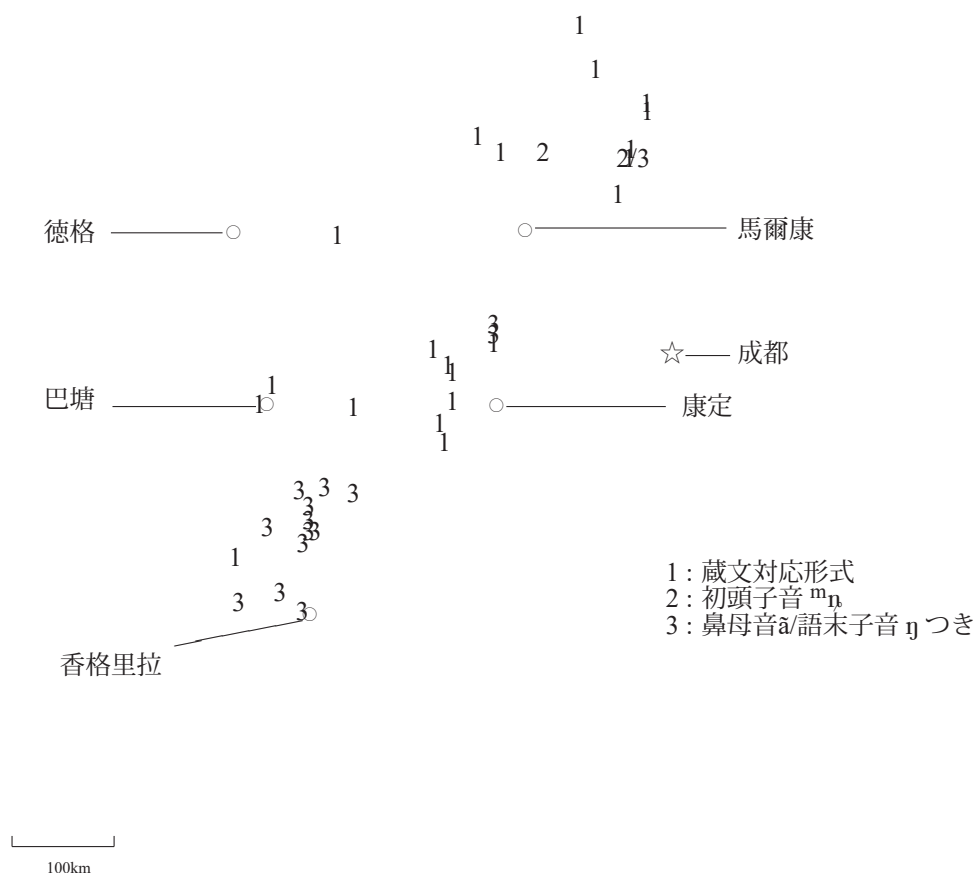


図 5.71: 「魚」の語形式言語地図

この語は初頭子音に両唇音が現れる m_n の形式や母音や語末に鼻音要素が現れる形式が蔵文と一致しない点が問題となる。

前者の形式は孫宏開・王賢海 (1987) が指摘する阿壩州のアムドチベット語に特別に見られるものであるというが、実際は dMarthang 方言 m_{na} と Ketshal 方言 $^m n_{\tilde{a}}$ という形式に見られる。rNgawa 方言では両唇音は現れない。

後者の形式は、たとえば次のような例で現れる。gDongsum 方言 $'n\tilde{o}$ 、Rwata 方言 $'n\tilde{i} w\tilde{o}$ 、Nyishe 方言 $'n_{\tilde{a}}\eta$ 、Sogpho 方言 $'n\tilde{o}$ などである。このような形式は郷城県周辺、丹巴県によく見られる。

5.5.14 「靴」 *lham*

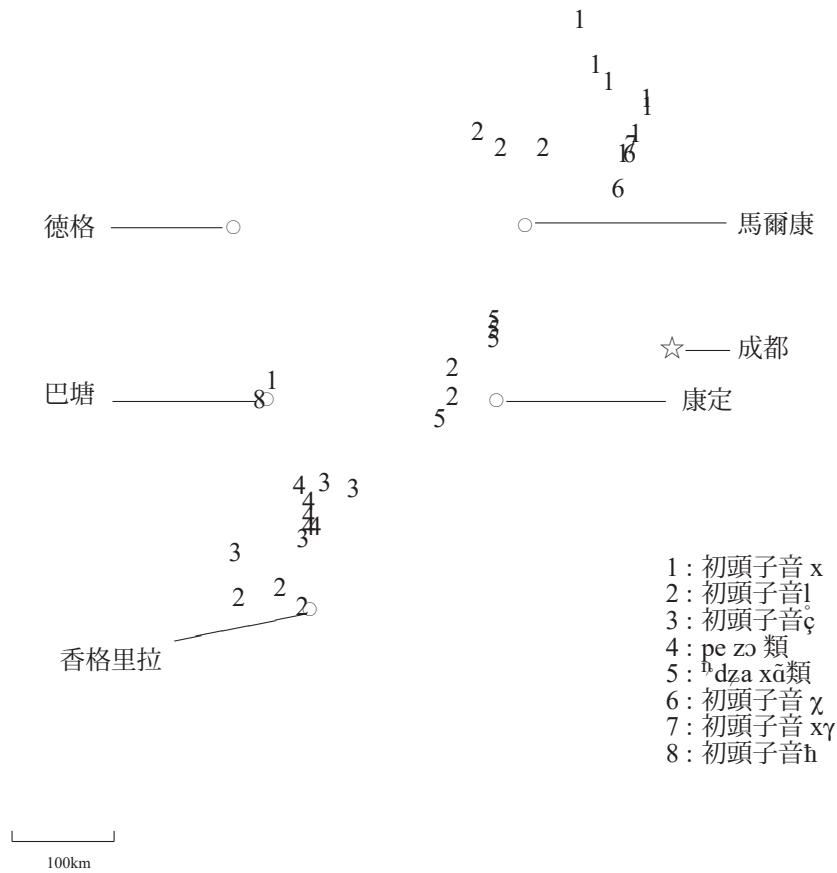


図 5.72: 「靴」の初頭子音言語地図

対応する初頭子音が蔵文対応からもっとも期待される /l/ のほかに、/x, ɕ, ɣ, h/ など現れるが、基本的にこれらはすべて蔵文 *lham* の例外とみなされる対応形式であると考えられる。

ヒャルチベット語では、軟口蓋音や口蓋垂音で現れる。また、蔵文 *lham* 対応要素が複合語になると上の地図に示した対応音と異なって現れる方言がある。Ketshal 方言では「靴」は ^oxā であるが、「靴屋」(*lham bzo ba*) では ^olam ^wzo wa となり、同一の形態素を含んでいるが異なる音形式である⁶¹。

丹巴県の方言に見られるたとえば Sogpho 方言 ^udza ^hxā のような形式のうち、第2要素はおそらく蔵文 *lham* に対応すると考えられるが、そのときは lh に対して ^(h)x/ が対応し、先に見た「神」の lh 対応音 /l/ と異なっている。第1音節の来源はよく分

⁶¹このような異なる音形式を持っている形態素が並列するのは、一方が当該方言の本来語で、他方が借用語であると考えられることができるが、チベット語の場合、文語読書音と本来の口語形式との間に差が生じていることに由来する可能性がある。

からない。

郷城県一帯の方言では、たとえば gDongsum 方言 'pe zo などの形式を共通して用いるが、来源はよく分からない。しいて類似のものが見られるとすれば、納西語 za³³ (黄布凡主編 1992) が第 2 音節と似ている。

5.5.15 「今日」 *de ring*

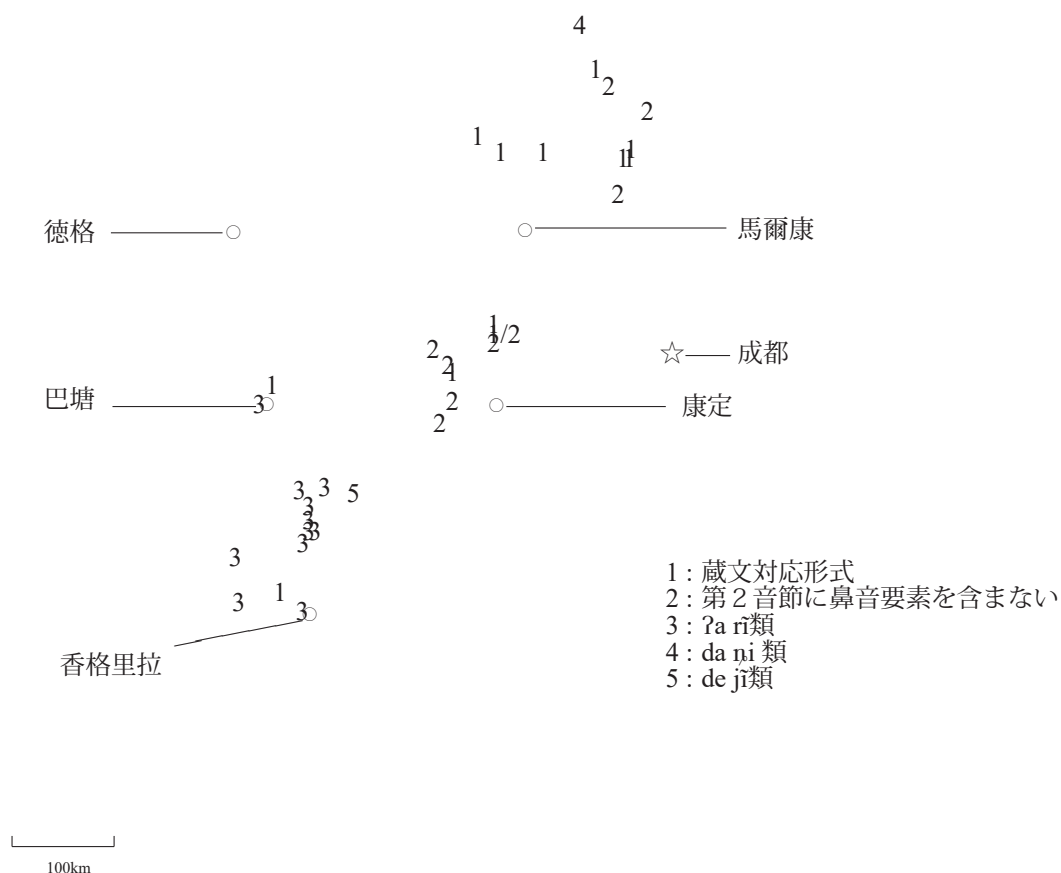


図 5.73: 「今日」の語形式言語地図

蔵文対応形式を用いるのはアムドチベット語および Ketshal 方言など一部のヒャルチベット語、丹巴県の方言、Lhagang 方言などである。これらの地域と重なるように、蔵文には存在する語末の鼻音要素が脱落した形式が見られる。

「九香線」南部では、第1音節がʔaという要素になっている。

nDappa 方言の形式は、おそらく蔵文 *de nyin* という形式に相当し、第 2 音節初頭子音が *j* になるのは後に見る「明日」の箇所を参照。

5.5.16 「昨日」 *kha rtsang*

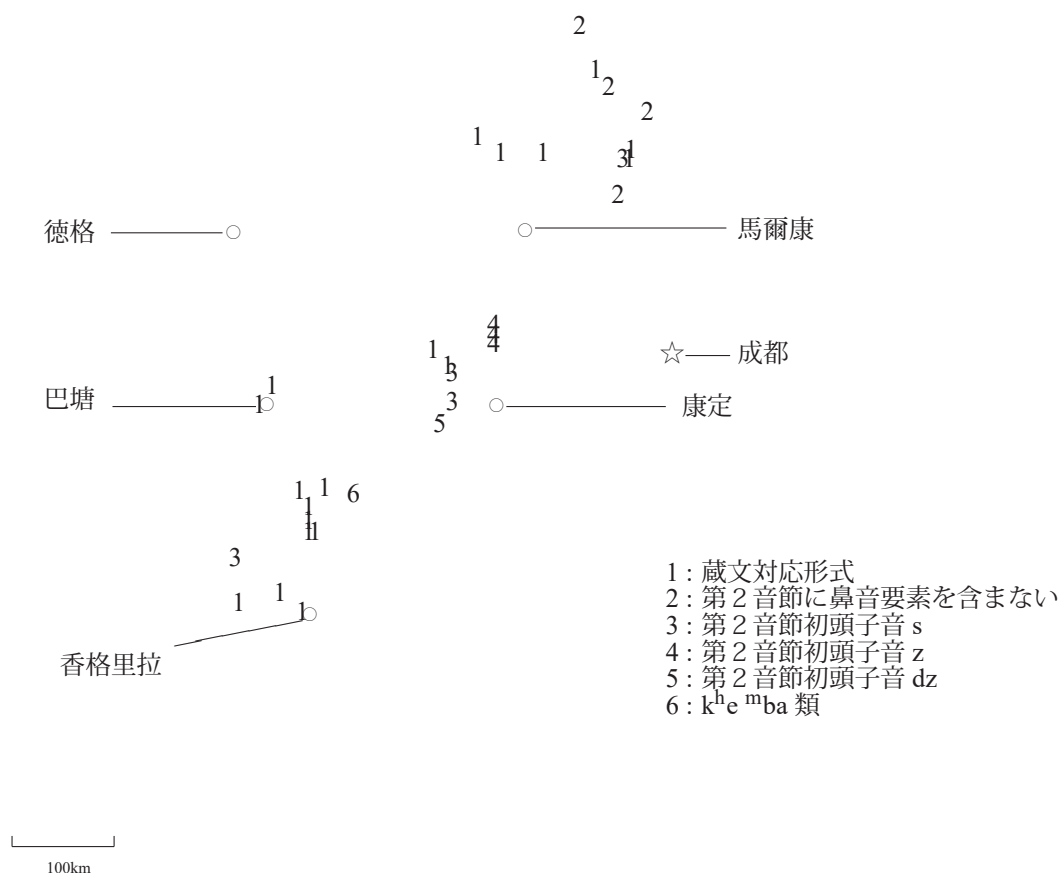


図 5.74: 「昨日」の語形式言語地図

藏文対応形式とは、第1音節母音が a かつ第2音節初頭子音が破擦音である点を判断基準とし、やや厳密な基準とした。地図を見ると、藏文対応形式は各地に分布し、藏文非対応形式も同様に広く分布している。

第2音節に鼻音要素を含まない方言は一部のヒャルチベット語に見られる。これは直前の「今日」と共通する。

第2音節初頭子音が摩擦音になるのは丹巴県の方言、ムニャ地域の一部の方言、Yungling 方言などである。たとえば sProsnang 方言 k^ha zō で、単純に考えれば藏文対応形式に含まれる。

5.5.17 「明日」 *sang nyin*

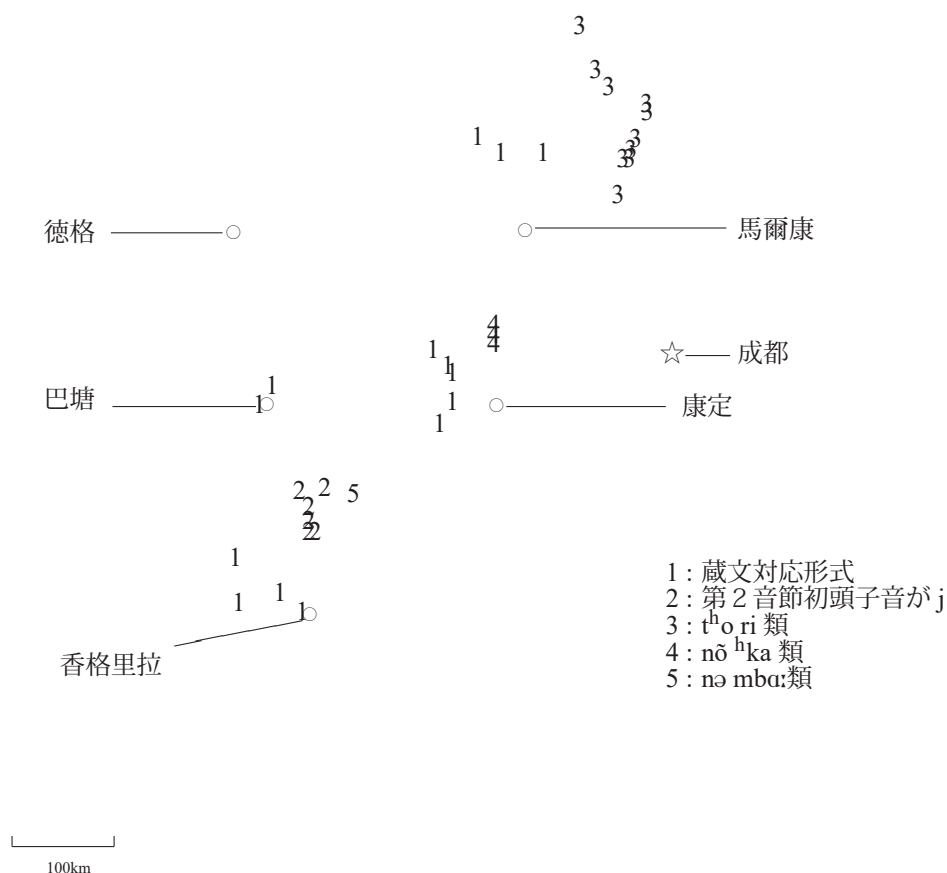


図 5.75: 「明日」の語形式言語地図

tʰo ri 及びそれに類する形式は、藏文 *tho rangs* / *tho rengs* 「夜明け」に対応する可能性がある。この形式はヒャルチベット語に共通で、それ以外の地域で類似のものは見当たらない。この例では Zhongu 方言もヒャルチベット語と共通の形式を用いている⁶²。

nDappa 方言 *nə mba:* はおそらく藏文 *nangs pa* 「朝」に場所格接辞 *-r* がついた *nangs par* ではないかと考えられる。

丹巴県の方言では、sProsnang 方言 *nõ^hka*、Sogpho 方言 *nõ^hka*、dGudzung 方言 *nə ka* となる。これらの形式はいずれも共通の来源を持つと考えられるが、詳細は分からない。

⁶² この形式は《西番譯語》〈川二〉《象鼻高山譯語》にも記録される。ただし〈川一〉《松潘譯語》では別の形式が記録されている。

5.5.18 「身につける」 *gon* / *gyon*

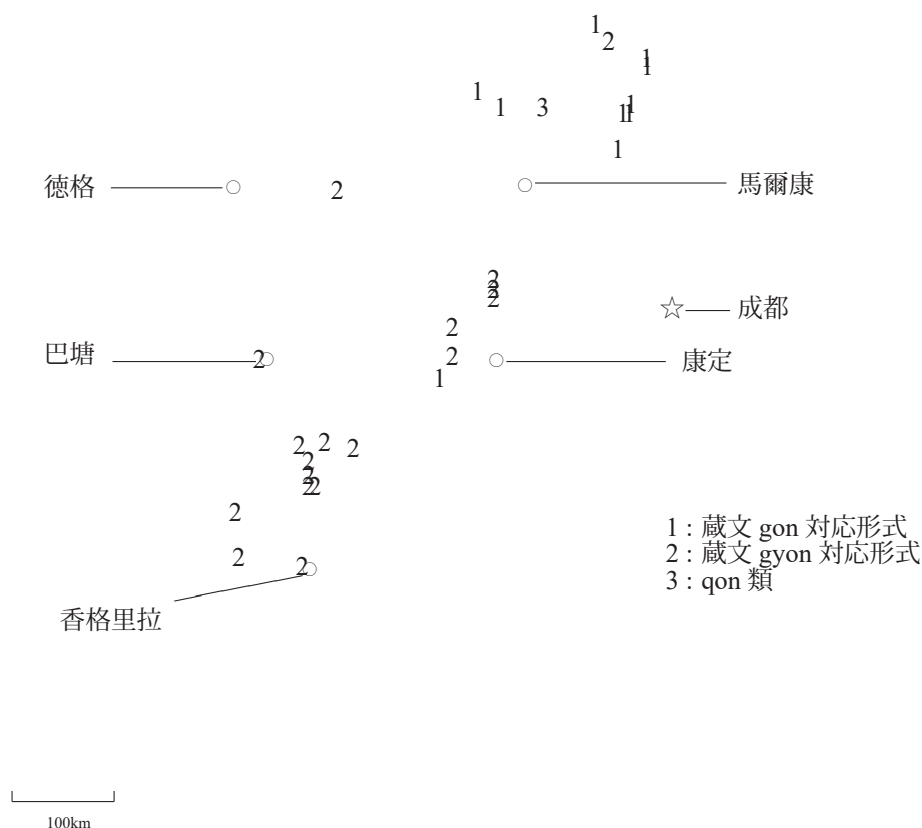


図 5.76: 「身につける」の語形式言語地図

どちらの蔵文に対応しているかは、軟口蓋音で現れるか先に見た Ky 対応音で現れるかという点に基づいて判断する。

「九香線」北部では蔵文 *gon* 対応形式がよく見られるが、その中で Babzo 方言 *t̪ɕo:* と dMarthang 方言 *qon* の分布が目を引く。

また、ヒャルチベット語の一部には、蔵文 *gon* と *gyon* に対応する形式を両方とも持っているものもある。これらの詳細な使い分けはまだ把握できていない。どちらかが借用形式である可能性もある。上に地図に示したのは、「衣服を着る」の意の場合である。この事情は mBathang 方言にも当てはまり、*ˈt̪ɕo:* と *ˈkɕo:* が見られる。「衣服を着る」の意の場合は前者の形式を用いる。

5.5.19 「猫」 *zhi mi / byi mi / byi la / zhum bu*

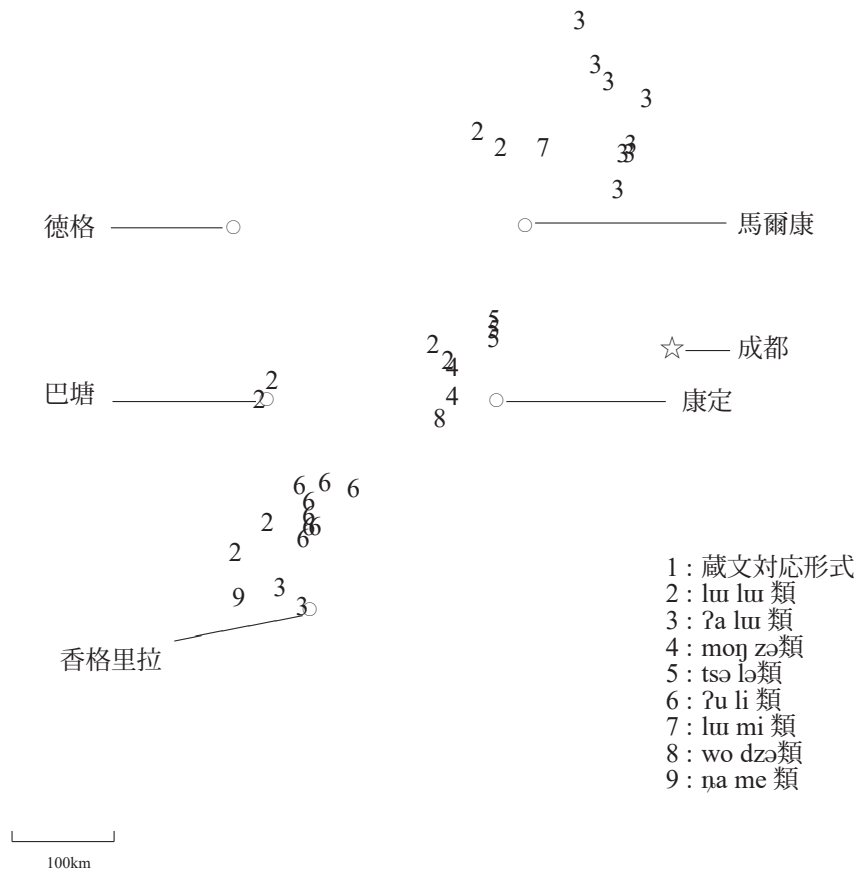


図 5.77: 「猫」の語形式言語地図

この語には蔵文対応形式を持つものが見られない、極めて特異な例である。

蔵文対応形式にやや近いと考えられるのは丹巴県の方言で、sProsnang 方言⁶³ tsə lu、Sogpho 方言⁶⁴ tsə lə、dGudzung 方言⁶⁵ tsə lo / ʔtsə lo となっている。初頭子音に注目すると、先に見たように、丹巴県の方言では Py 対応形式が齒茎破擦音に対応する傾向があり、かつ dGudzung 方言では初頭子音の第 1 要素に両唇音が含まれていることから、蔵文 *byi la* との関連が見えなくもない。丹巴県の方言で見られる形式は、スタウ語やムニャ語にも見られる⁶³。

さて、「猫」の形式を分類するために 1 を含んでいるか否かで分けてみる。すると大多数の方言は lu や lə などの音節を含んでいる。含んでいないのはムニャ地域 Lhagang 方言⁶⁶ moŋ ziʔ、Rangakha 方言⁶⁷ mō ʰdzə、Grongsum 方言⁶⁸ wo ʰdzə、そして維西県の Budy 方言⁶⁹ ɲa me である。ムニャ地域の形式は対応する蔵文が存在しないが、

⁶³ スタウ語 Mazur 方言 tsə la、ムニャ語 Lugpa 方言 tsə⁵⁵lə⁵³ (黄布凡主編 1992) などの例がある。

近隣に分布するダバ語に似た形式が現れる⁶⁴。Budy 方言 $\eta a me$ の来源はまったく不明である⁶⁵。

一方、1を含んでいる形式についてさらに分類することができ、重複形かそうでないかに分けられる。重複形は各地域のもっとも西側に位置する方言に散見される。非重複形はヒャルチベット語、郷城県周辺、香格里拉県の方言に見られ、郷城県周辺では第1音節を ηu とし、それ以外では ηa とする。特にヒャルチベット語では ηa をもつ形式が通用している⁶⁶。

⁶⁴ダバ語 Ngwirdei 方言では $-m\bar{a}^h tsu$ という。詳細は後に扱う。なお、リュズ語でも類似する $mu^{33} ts\bar{u}^{53}$ (黄布凡主編 1992) の例がある。

⁶⁵類似の形式をもつ周辺のチベット・ビルマ諸語に、独龍語 $na^{31} me^{55}$ や怒語 $mu^{33} ne^{31}$ が見られる (黄布凡主編 1992)。これらの言語は Budy 方言の分布地域から直線距離で極めて近いところに分布しているが、その間には2つの大河と険しい山があり、往来はないはずである。

⁶⁶ペマ語も $a^{13} li^{53}$ で、 ηa に類似する形式を有する。

5.5.20 「犬」 *khyi*

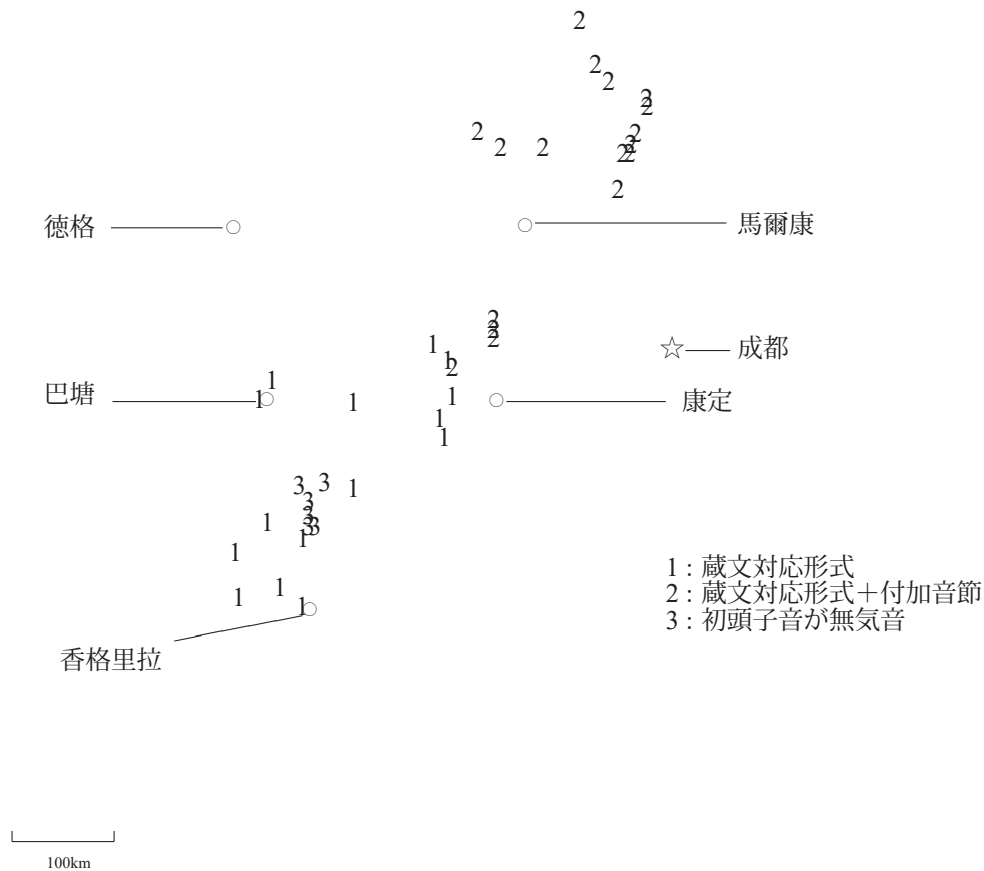


図 5.78: 「犬」の語形式言語地図

蔵文対応形式の初頭子音には 4 タイプ $t\check{c}^h$, ts^h , ch , $\check{c}^h$ が見られ、それは方言内部の蔵文 *khy* 対応音の関係による。

「九香線」北部および丹巴県の方言には付加音節が現れる。付加音節の具体的形式には γw (Askyirong 方言 $t\check{c}^h\check{a}\ \gamma w$)、 $\gamma\check{a}$ (Ketshal 方言 $t\check{c}^h\check{a}\ \gamma\check{a}$, rNgawa 方言 $t\check{c}^h\check{a}\ \gamma\check{a}$) が多いが、 $^h\check{g}\check{e}$ (Lhagang 方言 $^h\check{c}^h\check{a}\ ^h\check{g}\check{e}$) というものもある⁶⁷。

郷城県に分布する方言に限定的に現れるのが初頭子音が無気音の形式である。この形式を持つ「犬」は先に述べたように、シガツェやネパール・中国国境付近に分布するチベット語方言にも見られる⁶⁸。

⁶⁷Lhagang 方言では、 $^h\check{g}\check{e}/^h\check{g}\check{e}n$ は動物の一般名に複数例現れる。「ぶた」 $^h\check{p}a\ ^h\check{g}\check{e}n$ 、「馬」 $^h\check{t}a\ ^h\check{g}\check{e}n$ など。この要素は蔵文 *rgan* に対応する。この形式は bLabrang 方言ではややさげすんだ意味を持つものがあって、華侃・龍博甲編 (1993:236) で「馬」について言及がある。

⁶⁸シガツェを中心とするツァン地区のチベット語方言を見ると、Shigatse (日喀則) 方言では無気音の $c\bar{i}$ (Haller 2000) であるが、Dingri (定日) 方言では有気音の $chita$ (Herrmann 1989) で、方言によって異なる。

5.5.21 「おすぶた」 *pho phag* / *phag pho*

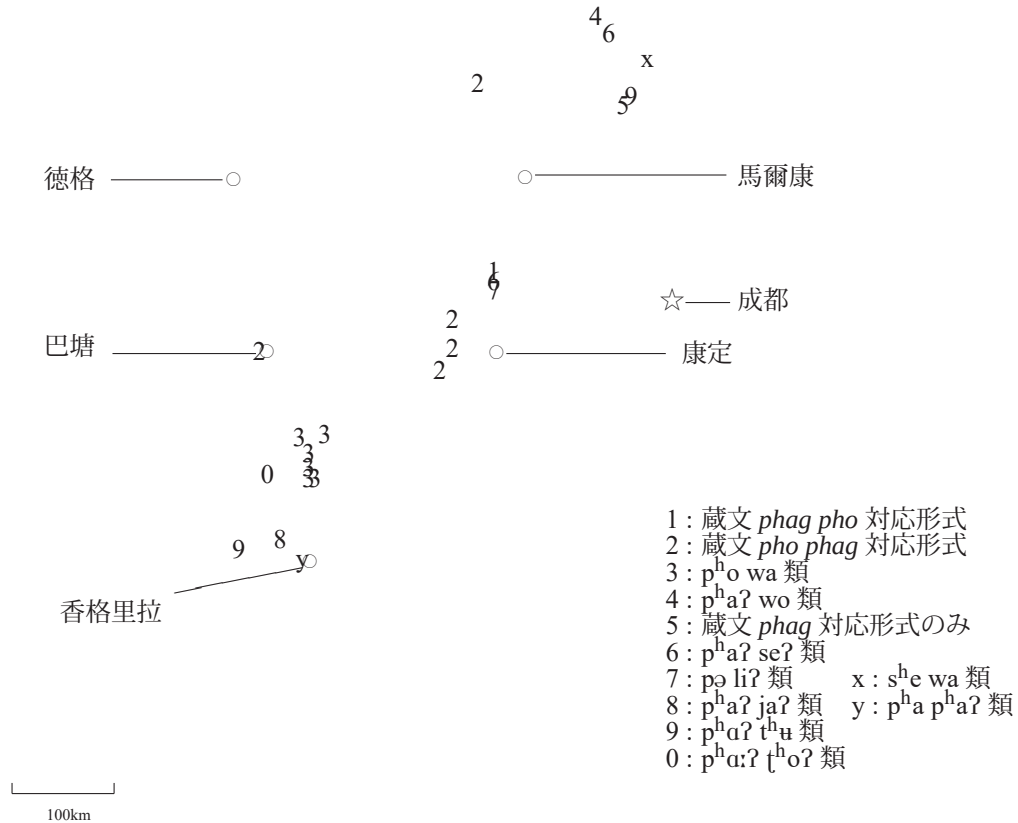


図 5.79: 「おすぶた」の語形式言語地図

この語を記録した方言はもともと少なめであるが、藏文対応形式を使用する方言は比較的少なく、対応しない独自の形式をもつ方言が点在している。独自の形式には2通りあって、「ぶた」に相当する藏文 *phag* 対応形式を含むものと含まないものである。

郷城県の各種方言に見られるものは、たとえば Sagong 方言で *p^ho wa* といった形式を持っているが、直接の語源はよく分からない。ただし、同じ Sagong 方言の「めすぶた」が *mo wa* であることを考慮すると、第1音節 *p^ho* が「おす」を示し第2音節 *wa* が「ぶた」を示している可能性がある。このとき前者は藏文 *pho* と対応するが、後者はチベット語の形式ではなくむしろ川西走廊諸語やロロ・ビルマ諸語の形式に酷似している⁶⁹。ただしどの言語に来源する借用語であるかは判然としない。

第2音節に *se?* がくる Sogpho 方言 *p^ha? ^hse?*、Babzo 方言 *x^ha: ^hs^he:* は藏文 *phag gseb*

⁶⁹たとえばダバ語 Ngwirdei 方言 *-wa*、スタウ語 Mazur 方言 *va* など。

「種豚」に対応する可能性がある⁷⁰。これによく似た形式を第1音節にもつ Phyugtsi 方言 °s^he wa は蔵文 *sos ba* 「繁殖する」に対応する可能性がある⁷¹。

dGudzong 方言のように、無気音から始まる 'pə li? という形式もある。

⁷⁰この蔵文形式は華侃・龍博甲編 (1993:343) に記載されている。本来は bLabrang 方言の形式か。

⁷¹Phyugtsi 方言の近隣に分布するペマ語では、「おすぶた」は p^hα⁵³sə¹³ua³⁵ で、第2、第3音節に共通性が見られなくもない。ペマ語の sə¹³ua³⁵ は p^hα⁵³ 「ぶた」を修飾していると考えられるが、Phyugtsi 方言はそのような構造をとらないため、根本的に異なるかもしれない。

5.5.22 「子ぶた」 *phag phrug*

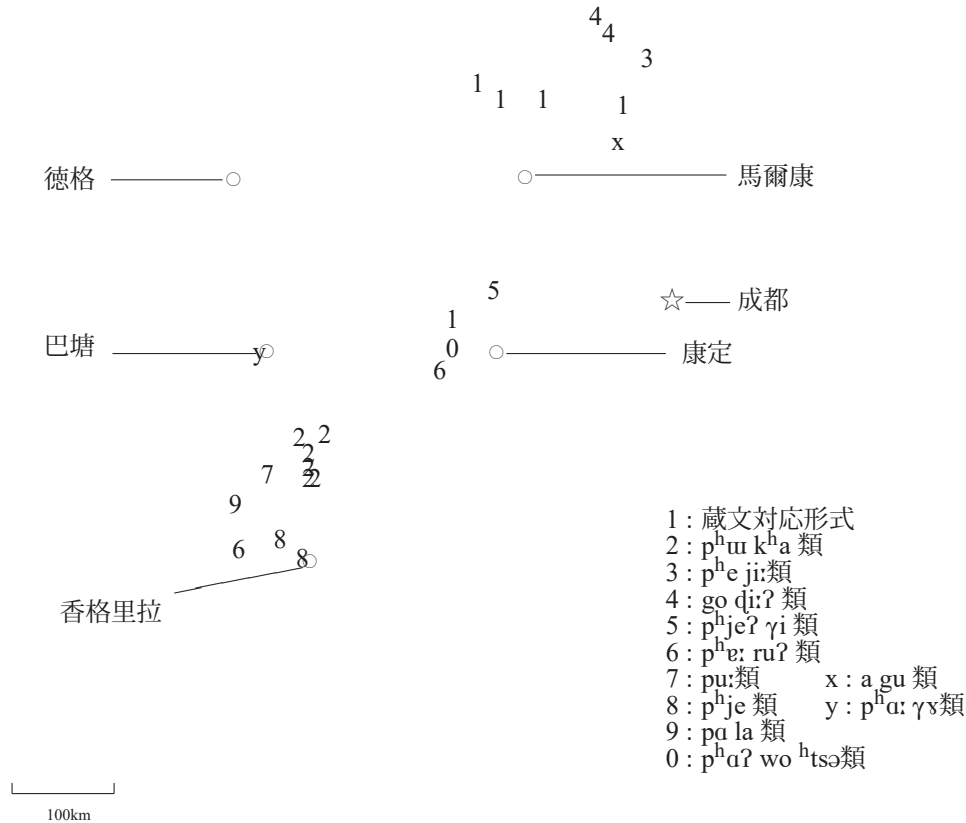


図 5.80: 「子ぶた」の語形式言語地図

先の「おすぶた」と並んで多様な形式がある。

香格里拉県に見られる形式、たとえば Nyishe 方言 p^hje といった形式は、dGudzung 方言などの p^hjeʔ 「ぶた」とは関係がないと考える。後者は蔵文 ag に対応する形式であり、かつ音節末に声門閉鎖音が現れる。

Phyugtsi 方言では p^he ji: と p^he: tu: が併用されるが、第 1 音節は蔵文 *phag* と関係があるとしても直接的な関係ではない。「ぶた」は p^ha: であるからである。

dGudzung 方言 p^hjeʔ γi は、語形成の観点から「子供」 t^ha γi (蔵文 *phru gu*) と同一の構成で、「子ぶた」の蔵文は *phag* 「ぶた」に指小辞 *gu* が付加された形式に対応すると考えられる。この語形成の手続きは、mBathang 方言 p^ha: γs も変わらない。ただし dGudzung 方言では第 1 音節が「ぶた」と変わらないのに対し、mBathang 方言では「ぶた」は p^haʔ で形式が異なる。

Rangakha 方言 p^haʔ wo^htsə の第 3 音節は、その近隣に分布するグイチョン語の動

物の子供を示す形態素 tsi⁵⁵ と似ている⁷²。

無気音が現れる sDerong 方言 'pu:, Yungling 方言 'pa la、また Zhongu 方言の ɐ gu、若爾蓋県巴西区の Askyirong 方言 go qi:ʔ などの来源はまったく分からない。

⁷² ガイチョン語の「子ぶた」は pha⁵⁵tsi⁵⁵tsi⁵⁵ という (黄布凡主編 1992)。

ほかに、ギャロン語 bZhilung 方言 pak tsaʔ、同 Somang 方言の「子ぶた」pak^{55/33}tsa⁵⁵ (厳木初 2006) の第 2 音節の形式などにも共通性が見られる。

5.5.23 「森」 *nags*

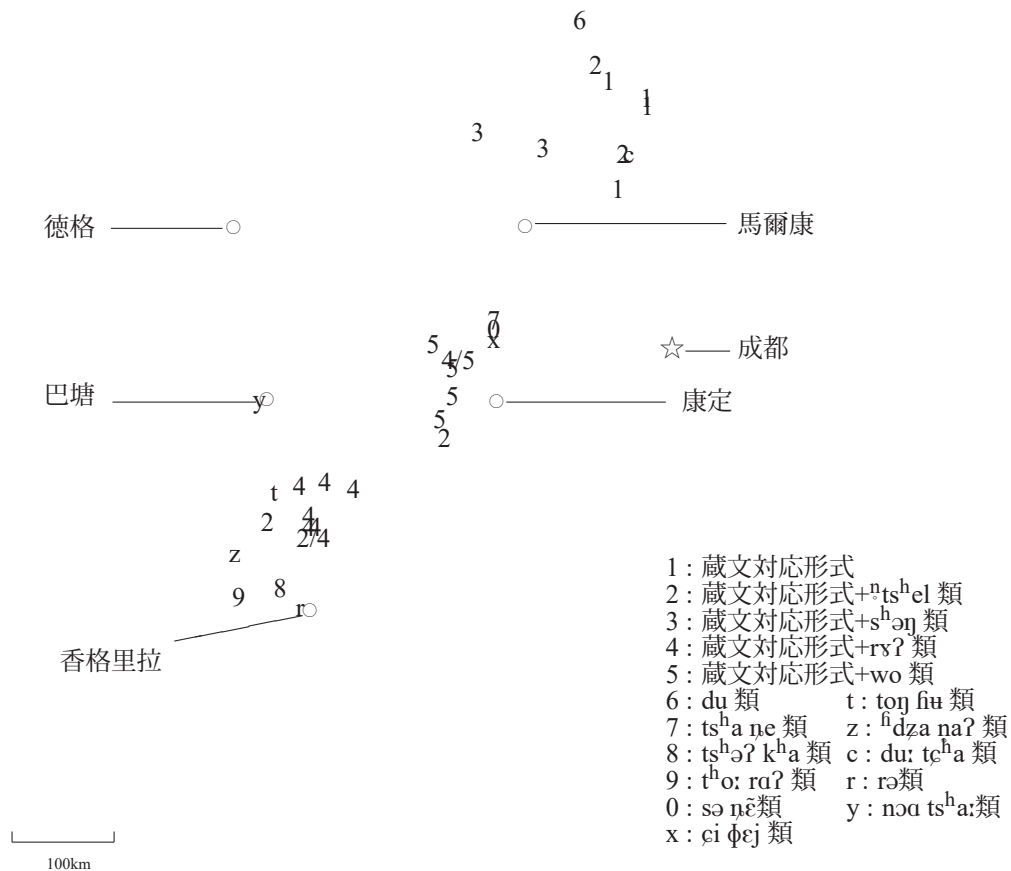


図 5.81: 「森」の語形式言語地図

「森」は非常に多くのタイプの形式がある語の1つといえるが、藏文対応形式を含むか否かで大きく分けることができる。

藏文対応形式を含むものはアムドチベット語、ヒャルチベット語の一部、ムニャ地域の方、郷里県周辺の方などである。そのうち藏文対応形式のみを用いるのはヒャルチベット語の一部の方である。そのほかは基本的に2音節語で、第1音節に藏文対応形式が来るが、第2音節が異なっている。

第2音節にⁿts^helを用いるのは地域的には散発的に見られ、たとえば Askyirong 方言 naʔ ⁿts^hel、Ketshal 方言^onāʔ ⁿts^hel、Sabde 方言^onā ⁿts^hɛ:、sDerong 方言^onā ⁿts^ha のように現れる。おそらくこれらは藏文 *nags tshal* 「森林」に対応する。第2音節初頭に前鼻音が現れるのが注目できるが、地域的連関がなく、まったく散発的ではあるが共通の特異な形式を持っていると考えざるを得ない。そもそも藏文のつづりが口語と異なっているのかもしれない。これに対応するのが mBathang 方言^onɔa ts^ha: であるが、mBathang 方言では無声有気音に前鼻音が先行しないため、藏文 *nags tshal*

に規則的な対応関係が見て取れる。

第2音節初頭子音に s^h をもっているのはアムドチベット語で、dMarthang 方言 $nəq\ s^həm$ 、rNgawa 方言 $nəq\ s^həŋ$ などである。第1音節は蔵文 *nags* と関連するが、第2音節の来源は分からない。

第2音節に r をもっているのは郷城県周辺の方言および Bame 方言で、gDongsum 方言 $'na\ rɣ?$ 、Ragwo 方言 $'na\ ra?$ 、nDappa 方言 $'nā\ ru?$ 、Bame 方言 $'na?\ rə$ のようである。最後の例を見ると、蔵文 *nags ri* 「森のある山」と関連があるように見えるが、それ以外は語末に声門閉鎖音を伴っていて、うまく対応していない。

第2音節に w をもっているのはムニャ地域の方言で、Morim 方言 $'na\ wo$ 、Rangakha 方言 $'na:\ wo$ 、Grongsum 方言 $'ne?\ wu?$ のようである。

gZari 方言 du 、Thangskya 方言 $du:\ tɕ^ha$ の2つに共通して du という形式が含まれるが、来源は分からない。

丹巴県の方言は3種とも異なった形式を用いる。sProsnang 方言 $'ts^ha\ f_{ne}$ 、Sogpho 方言 $'sō\ n̄ɛ$ 、dGudzong 方言 $'ci\ φej$ となっている。sProsnang 方言の第1音節は蔵文 *tshal* と関連すると考えられる。それ以外はよく分からない⁷³。

迪慶州の Nyishe 方言 $'ts^hə?\ k^ha$ 、Budy 方言 $'tho:\ ra?$ などと同様に来源不詳である。rGyalthag 方言 $'rə$ は蔵文 *ri* 「山」に対応し、口語上でも「山」と同じ形式を用いている。Yungling 方言 $'f_{dza}\ na?$ は、第2音節についてはおそらく蔵文 *nags* との対応があると考えられる。

Tsiu 方言 $'toŋ\ f_{u}$ は来源不詳である。

⁷³sProsnang 方言や Sogpho 方言のように $/n/$ をもつ形式には、チョコ語 $rdze^{55}n̄e^{55}$ が見られる。dGudzong 方言の形式とよく似ているものにグイチョン語 $sā^{31}pu^{55}$ がある。いずれも黄布凡主編 (1992) による。

5.5.24 「友人」 *grog po* / *rog po* / *shag po*

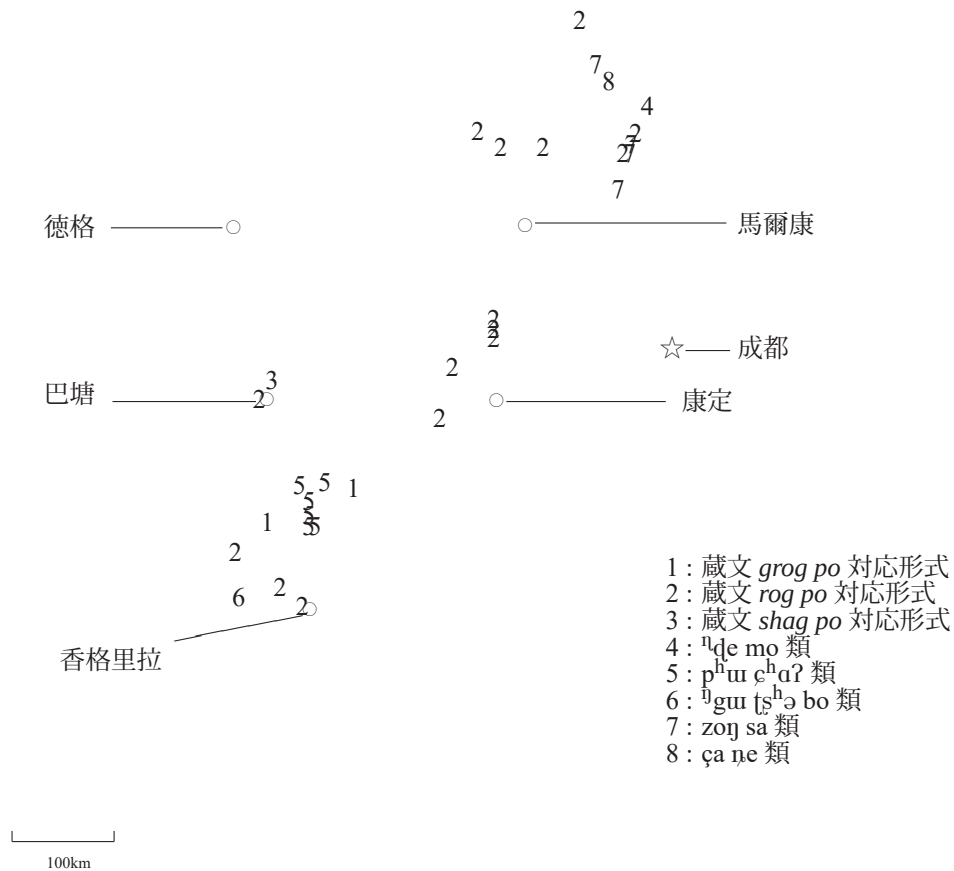


図 5.82: 「友人」の語形式言語地図

藏文対応形式としては、*rog po* に対応するものが多い。

郷城県の方言に見られる $\text{p}^{\text{h}}\text{ui} \text{ } \text{ }^{\text{h}}\text{a}?$ のような形式の第2音節と、mTshola 方言 $\text{ }^{\text{h}}\text{a}:$ *po* および Babzo 方言 *ça ɲe* の第1音節は、音対応の観点から同一の形態素で藏文 *shag po* の第1字に対応関係があると考えられる。

Askylrong 方言 *zoŋ^hsa*、Phyugtsi 方言 ʰde mo などは来源が分からない⁷⁴。前者に類似の形式はいくつかのヒャルチベット語にも見られる。

⁷⁴Sun (2003b) の記述では *zo se* に藏文 *bzang sa* をあて、ほかに *pə ru* という形式も用いられる。意味が細分化しており、前者は「親密な友人」もしくは「異性の友人」、後者は「同性の友人」である。

5.5.25 「火」 *me*

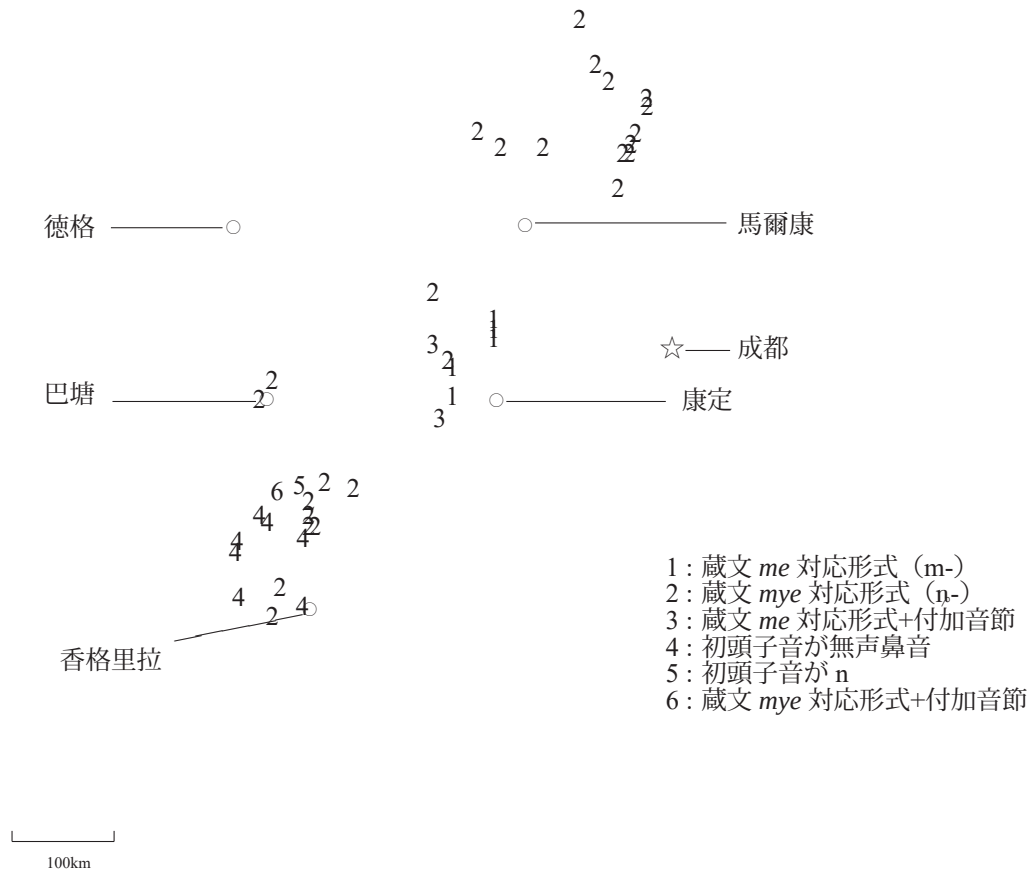


図 5.83: 「火」の語形式言語地図

広く見られる形式は n を初頭子音に持つ。規定される藏文 *me* に対応する形式を残しているのは丹巴県の方言および一部のムニャ地域の方言で、分布地域が狭い。

「九香線」南部、迪慶州および金沙江流域のチベット語方言には、初頭子音が無声鼻音 n で現れる (Nyishe 方言 $\text{m}^{\text{h}}\text{nə}$ 除く)。これは古藏文 *smye* の対応形式と考えることができる。

Bame 方言 $\text{f}^{\text{h}}\text{ne}$ や mTshola 方言 $\text{n}^{\text{h}}\text{e}$ では無声鼻音ではないが前気音が現れたり下降 (高) 声調で現れたりしていて、古藏文 *smye* の頭字 *s* ではなくとも何らかの要素が存在したことをうかがわせる⁷⁵。

付加音節があるのは Morim 方言 $\text{m}^{\text{h}}\text{ə} \text{t}^{\text{h}}\text{ə}$ 、Grongsum 方言 $\text{n}^{\text{h}}\text{ə} \text{t}^{\text{h}}\text{ə}$ 、Tsiu 方言 $\text{f}^{\text{h}}\text{ni} \text{f}^{\text{h}}\text{by}$ などであるが、付加音節自体の来源はよく分からない。

Rwata 方言 $\text{n}^{\text{h}}\text{ə} / \text{n}^{\text{h}}\text{ə} \text{mwe}$ の来源もまた不明である。

⁷⁵これらの方言では、多くの例で藏文において頭字 *s* を伴う鼻音の基字をもつ形式に対応するのが無声鼻音である。

5.5.26 「右」 *g.yas*

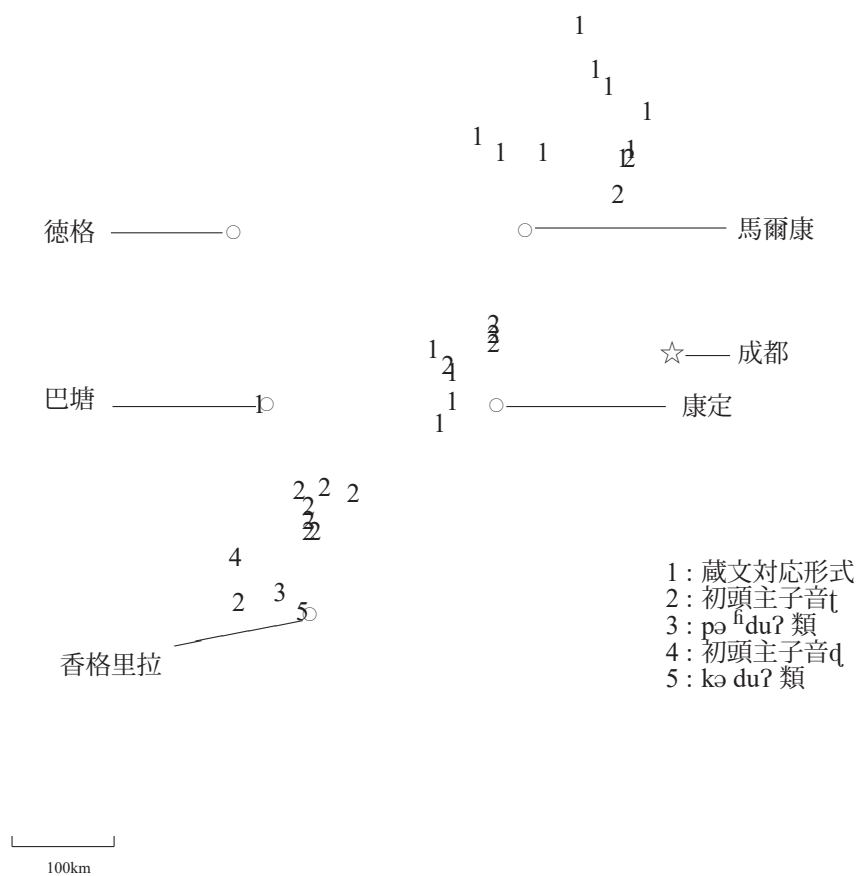


図 5.84: 「右」の語形式言語地図

いくつかの方言に初頭子音が/t/であるものが見られる。たとえば Sogpho 方言 $t̪õ^{h}la?$ 、gDongsum 方言 $t̪o: \eta a$ などである。これは蔵文以前に現在の蔵文に対応する祖形 $*g-y$ における y が r と交替を起こした $*g-r$ に来源を持つ可能性が指摘できる (Benedict 1972:34)。

Nyishe 方言や rGyalthag 方言の形式は来源がよく分からない。

5.5.27 「よい」 *yag po* / *bzang po*

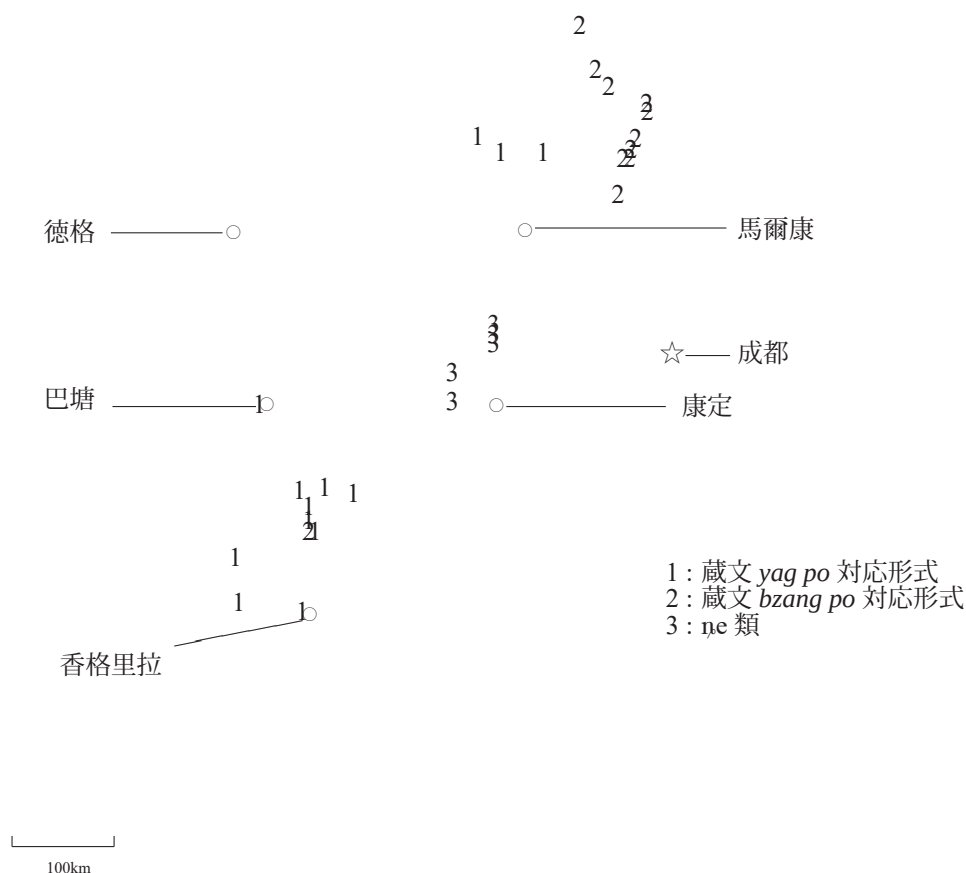


図 5.85: 「よい」の語形式言語地図

「よい」という意味で用いられる蔵文対応形式は大きく 2 系列に分かれ、蔵文 *yag po* と *bzang po* に対応する⁷⁶。

ただし丹巴県とムニャ地域の方言では、来源不詳の*ne* という形式が現れる。たとえば sProsnang 方言 *'ne: mə*、dGudzong 方言 *'ni: mə*、Lhagang 方言 *'hne* などである。蔵文 *nye (po)* 「近い、親密な」と関連があるかもしれない。

また、蔵文 *red* 対応形式をしばしば「よい」という意味で用いる方言が多くある。

⁷⁶ほかにも蔵文では *legs po* という形式に「よい」という意味があるけれども、筆者が調査した方言では、口語形式として *legs po* 対応形式は確認されない。

5.5.28 「もの」 *ca lag*

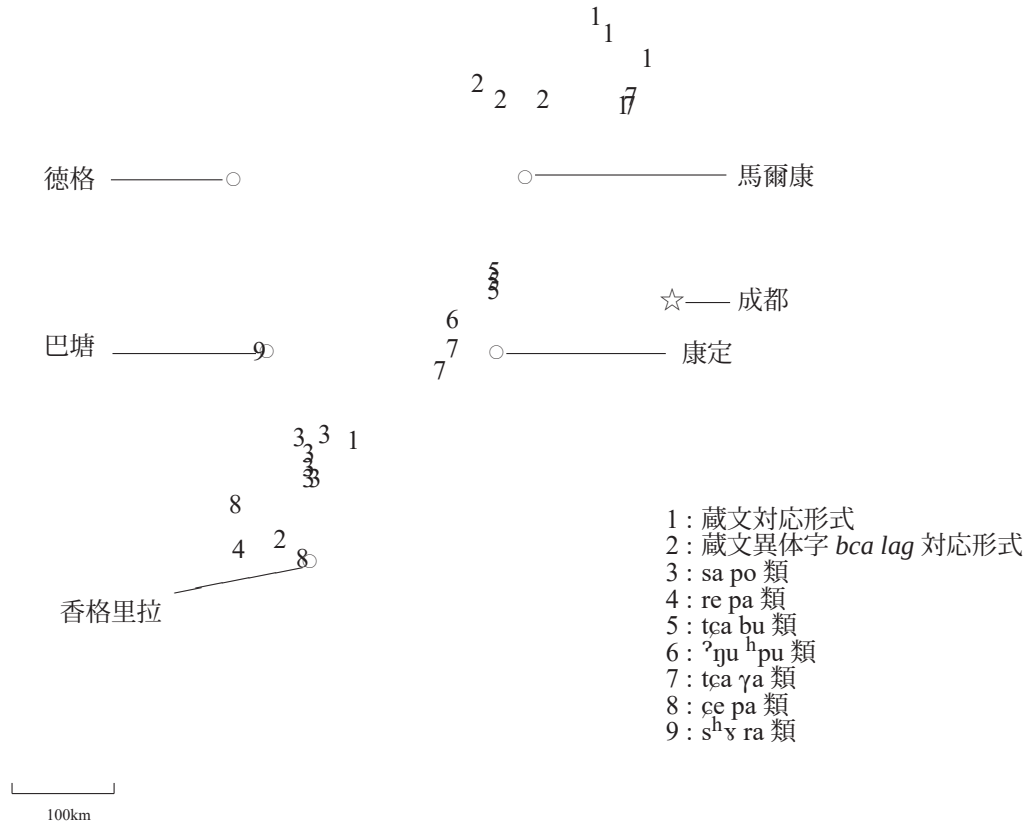


図 5.86: 「もの」の語形式言語地図

蔵文対応形式はヒャルチベット語の一部や nDappa 方言に見られる。

蔵文異体字 *bca lag* に対応する口語形式を持つ方言がアムドチベット語をはじめ Nysishe 方言などに複数存在することが分かる。

形態としては、地域的にかたまって分布しているように見える。丹巴県では sPros-nang 方言 tsaʔ bu、Sogpho 方言および dGudzong 方言 tca bu などのように現れる。これらの方言の形式をもとに、第 1 音節は蔵文 *ca lag* の第 1 音節に相当すると考えられる。郷城県の方言では、たとえば gDongsum 方言 sa po、Phrengme 方言 sɣ po のように現れる。来源はよく分からない。ヒャルチベット語の一部とムニャ地域の方言の一部に共通する形式が見られることは、注目に値する。

mBathang 方言 shɣ ra、Budy 方言 re pa や rGyalthang 方言 ce pa などは、来源がまったく分からない。

5.5.29 「月」 *zla ba*

この事例は本来的には蔵文 *zl-* 対応音として扱うことが適当であるかもしれないが、ここで扱う。現段階の調査結果では、蔵文 *zl-* をもつ語で口語形式として広く用いられているのが「月」に限られるからである。

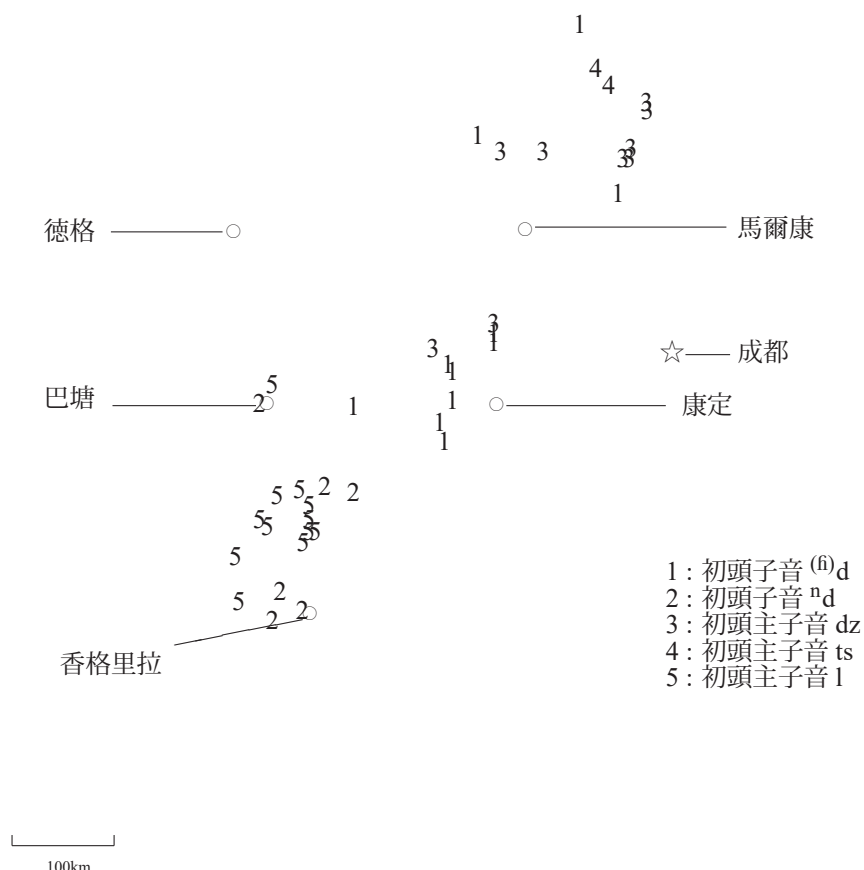


図 5.87: 「月」の語形式言語地図

この語では、どれを蔵文対応形式とするかが問題ではなく、おそらく以上に分類した全ての要素が蔵文と何らかの対応関係をもっていると考えられる。蔵文 *zl-* をもつ語の対応形式を口語で持つ語自体少数であるから、「月」が1つの対応例となりうる。地域的に対応形式にはまとまりがあるように見え、「九香線」北部では歯茎破擦音が、中部では前鼻音を伴わない歯茎閉鎖音が、南部では歯茎流音か前鼻音を伴う歯茎閉鎖音が現れる。

以上の観点から考えると、gZari 方言 ^fda wa や Zhongu 方言 dɛ wɛ、rNgawa 方言 ^fda wa、sProsnang 方言 ^fdza wə、Morim 方言 ^fdza wa、mBathang 方言 ⁿda wa、mTshola 方言 ʎa ɣa⁷⁷、Sagong 方言 ⁿda kɛɿ、nDappa 方言 ⁿda fio などの形式は分布上周辺の方

⁷⁷巴塘県の方言は何が基本的な形式が現段階では不明瞭であるため、ここに並列してあげ

言形式と異なって、際立っている。

また、地図上に反映されていないが、2音節である場合に第2音節の形式にも異なりがある。上の例についてみれば、gZari 方言 ^hda wa などの両唇音を含む形式と mTshola 方言 ^hla γa などの軟口蓋音を含む形式が多い。前者は蔵文 *zla ba* 対応形式、後者は蔵文 *zla dkar* 対応形式である。

蔵文 *zla ba* 対応形式は相対的に多く見られるため、蔵文 *zla dkar* 対応形式が現れる方言をあげてみると、Budy 方言 ^hlō ka、Ragwo 方言 ^hlō ka、Chaphreng 方言 ^hlō kɛː、Sagong 方言 ^hda kɛː、mTshola 方言 ^hla γa、Grongsum 方言 ^hda ^hka、Babzo 方言 ^htɕa ^hka、gTsangtsa 方言 ^hdza γa、Phyugtsi 方言 ^hdza γɛ などがあり、北部と南部に分布している⁷⁸。

Sogpho 方言 ^hda ŋō の第2音節はよく分らない。

また、1音節で現れる方言もあり、Ketshal 方言 ^hdzaa、Askyirong 方言 ^htɕaː などのほか、Babzo 方言 ^htɕaː もある。分布から考えて、蔵文 *zla dkar* の2音節が縮約したものと考えられる。

ておく。

なお、格桑居冕 (1985) の記述する mBathang 方言では「月」は *nda γa* (筆者の記述法では ^hda γa、対応する蔵文は *zla dkar*) が記載されているが、現在の若年層ではこの形式は用いないし聞いて理解もできないという。

⁷⁸ 上注に述べたように、mBathang 方言では蔵文 *zla dkar* に対応する形式を以前は用いていた。分布としては mTshola 方言と並んでいるため特別な形式とみなす必要はないだろう。

5.5.30 「黒テント」 *sbra*

この事例は蔵文 *sbr*-対応音の一例として扱うこともできるかもしれないが、対応関係が特別であるためここで扱う。

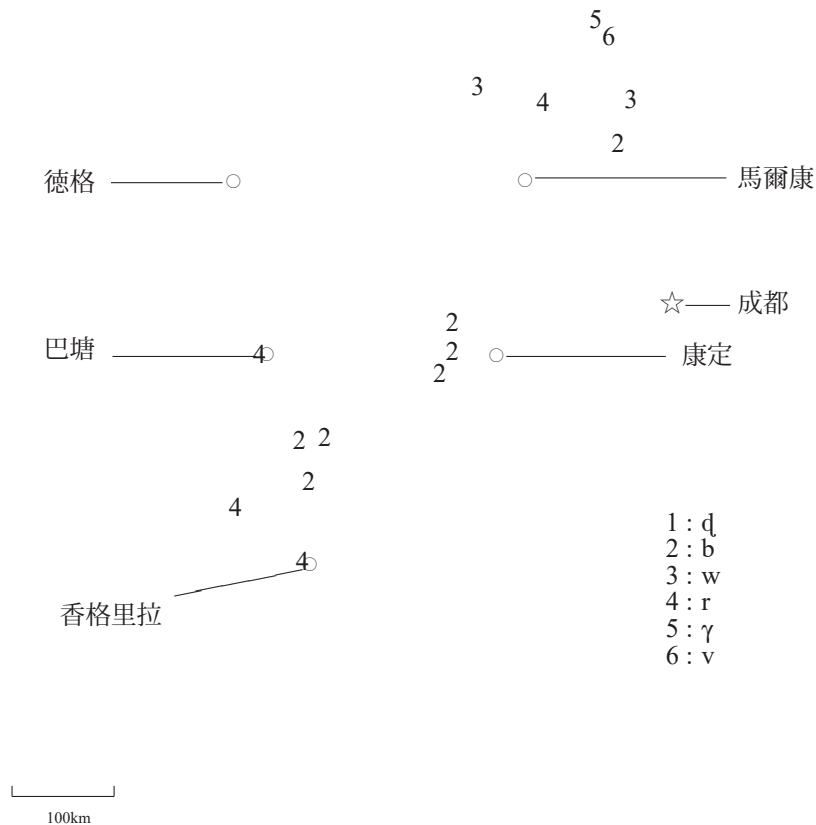


図 5.88: 「黒テント」の初頭子音言語地図

この語でもまた、どれを蔵文対応形式とするかが問題ではなく、おそらく以上に分類した全ての要素が蔵文と何らかの対応関係をもっていると考えられる。これは蔵文対応形式の分析で先に扱った「蛇」と初頭子音連続 *sbr* を共通とするが、対応音の分布が異なっているのは地図を比較すれば明らかである。

この例では、「蛇」の例に多く見られた /q/ の対応形式が未確認であるところが特徴的で、対応形式の多くは蔵文足字 *r* が脱落した形式に対応関係があるように見える。口語形式に *r* が現れる方言では、実際初頭に両唇接近音が現れるものもあって、たとえば *dMarthang* 方言 *wra* となり、蔵文における両唇音字との関連が見出せる⁷⁹。

⁷⁹カムチベット語では、子音連続を構成しない代わりに高声調で実現される例もある。たとえば *mBathang* 方言 *ra* など。

なお、江荻 (2002b:242) に類似の議論が「蛇」(蔵文 *sbrul*) について行われている。

5.5.31 「唐辛子」 *si pan*

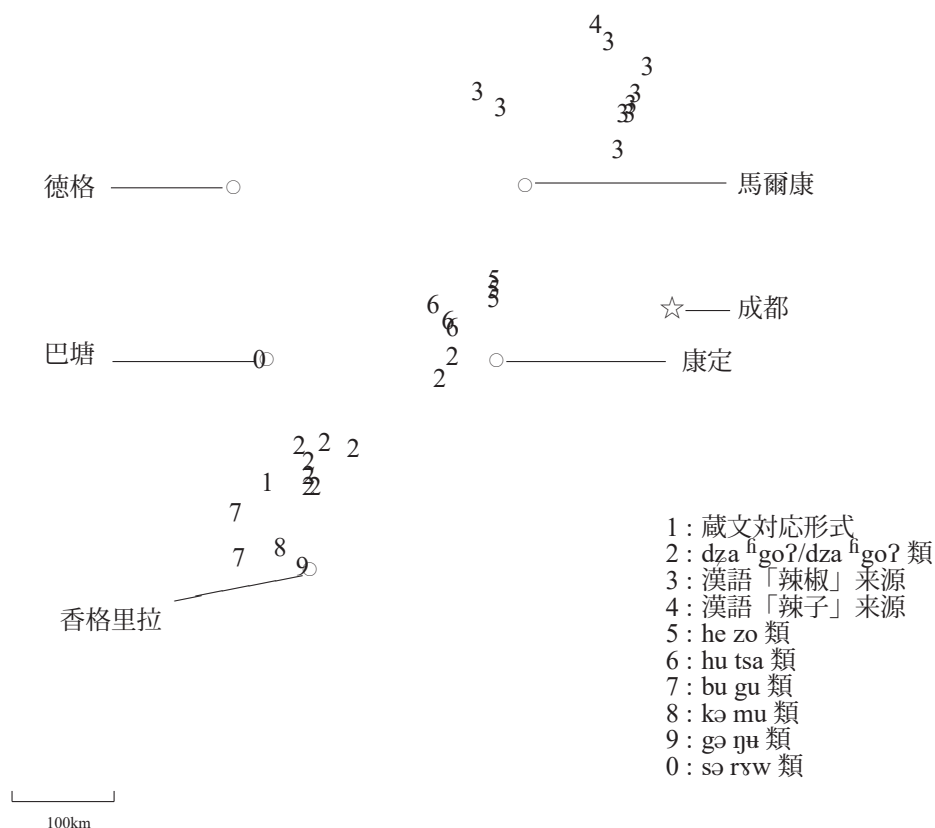


図 5.89: 「唐辛子」の語形式言語地図

藏文対応形式は sDerong 方言 sə pē にのみ確認されている。ただしスタウ語 Mazur 方言 sī pe に存在するため、その近隣の未調査の方言でも用いられている可能性もある。また、藏文対応形式の第 1 音節と mBathang 方言 sə rɣw の第 1 音節も関連があるかもしれない。

Grongsum 方言 $\text{'dza}^{\text{h}}\text{goʔ}$ 、Sagong 方言 $\text{'dzə}^{\text{h}}\text{goʔ}$ 、nDappa 方言 $\text{'dza}^{\text{h}}\text{goʔ}$ などの形式は、比較的広い範囲で用いられているが、確定的な藏文形式は分らない。ただし複数の方言の語形式とそれぞれの方言の藏文対応形式を勘案すると、藏文 *rgya rgod* に対応しているように見える⁸⁰。

「九香線」北部では、ヒャルチベット語もアムドチベット語も漢語からの借用語が用いられているが、地域によってその語形式が異なっている。広く見られるのは「辣椒」に対応する形式で、若爾蓋県の Askyirong 方言では「辣子」に対応する形式

⁸⁰ この形式に類似のものとして、チョコ語 $\text{rdze}^{13}\text{rgo}^{55}$ (黄布凡主編 1992) がある。

が見られる。九寨溝県では、たとえば Phyugtsi 方言 la^htsu: は、第2音節の母音の特徴から見て「辣椒」と関連がある形式と考える。

丹巴県およびムニャ地域北部では、少しずつではあるがよく似た特徴的な形式を用いられる。たとえば丹巴県では sProsnang 方言^hxa zo、Sogpho 方言^hhe zo、dGudzung 方言^hε zu のような形式⁸¹が、ムニャ地域北部では Lhagang 方言^hφu tsa、Bame 方言^hφu ts^ha、Morim 方言^hhu tsa のような形式である。これに近似する形式がダパ語にも見られ、Ngwirdei 方言^hφu tso など。さらに類似の形式がグイチョン語 khu³¹tsa⁵⁵ やシヒン語 ku³³tsi⁵³（黄布凡主編 1992）などもあり、比較的広い範囲に分布する⁸²。

「九香線」南部、瀾滄江沿いに分布する方言では、Budy 方言^hbu gu といった形式があるが、来源は分からない⁸³。rGyalthag 方言の^hgə ŋə、Nyishe 方言の^hkə mu などとも同様に、来源不詳である。

⁸¹これと関連があると見られるのが四土ギャロン語 mBarkhams 方言 haj tso や Kyomkyo 方言 haj tso? である。巖木初 (2006) はこれらの形式に対応する Somang 方言 hai tso が四川漢語「海椒 xai^上tɕiau^{陰平}」（「唐辛子」の意）からの借用であるとする。

⁸²さらに歴史的な資料として、ムニャ地域に近いチベット語を記録したと考えられる丙種本《西番館譯語》に記載される「棚枿」（「胡椒」の意か）に与えられるチベット語の漢字音写の形式は「蒲足」で、[φ^hu tsu] (< p^hu tsu) に近い形式の存在をうかがわせる。

⁸³類似の形式は独龍語 ba³¹ki⁵⁵（黄布凡主編 1992）に見られる。関連は不明。

5.5.32 「とうもろこし」 *ma rmog*

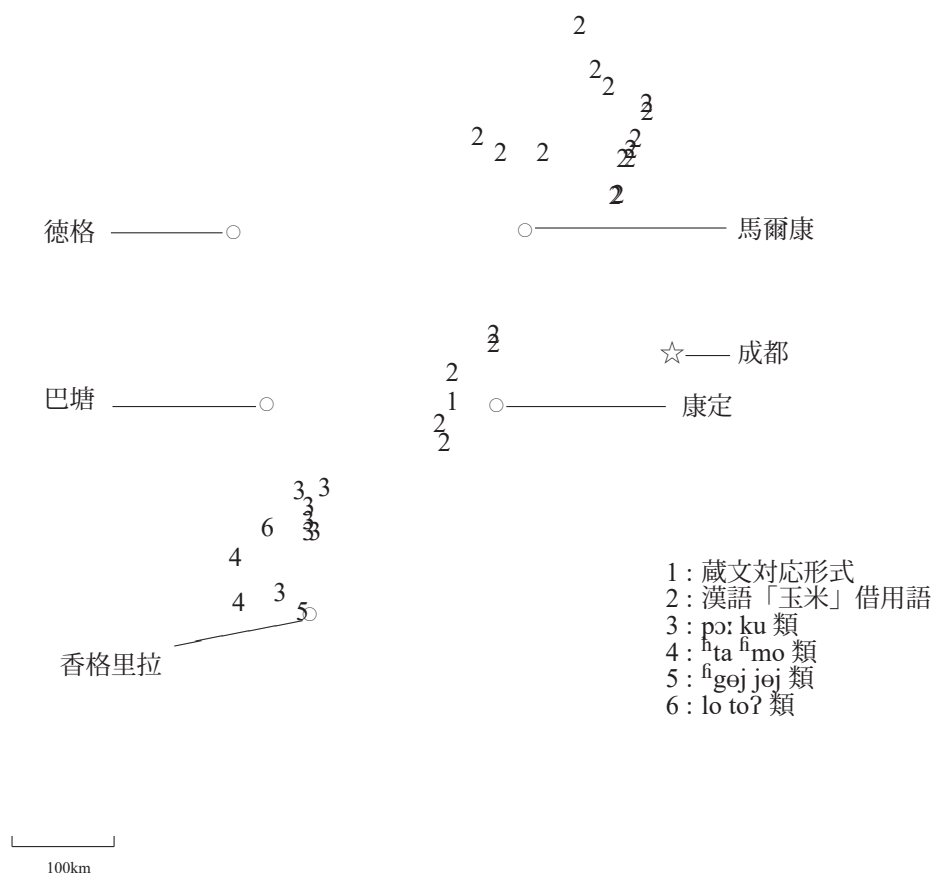


図 5.90: 「とうもろこし」の語形式言語地図

蔵文対応形式がほとんど見られず、「九香線」南部を除いて基本的に漢語借用語が用いられる。

「九香線」南部地域の方言では、蔵文対応形式も漢語「玉米」借用語も用いられない。このうち sDerong 方言¹⁰ lo to? は蔵文 *lo tog* 「穀物」に対応する点を除いては、全て来源がよく分らない。

郷城県の形式、たとえば Sagong 方言 po: ku などは、プリンミ語 Kuido 方言'pu ku のほか、ノス彝語喜徳方言 po³⁴ku³³ (黄布凡主編 1992) との共通性がうかがえる。

瀾滄江沿いの方言、たとえば Budy 方言 ^hta ^hmo の第 2 音節について、近隣に分布する怒語 a³¹mu⁵³ (黄布凡主編 1992) との関連がうかがえる。

5.5.33 「飛ぶ」 *'phur*

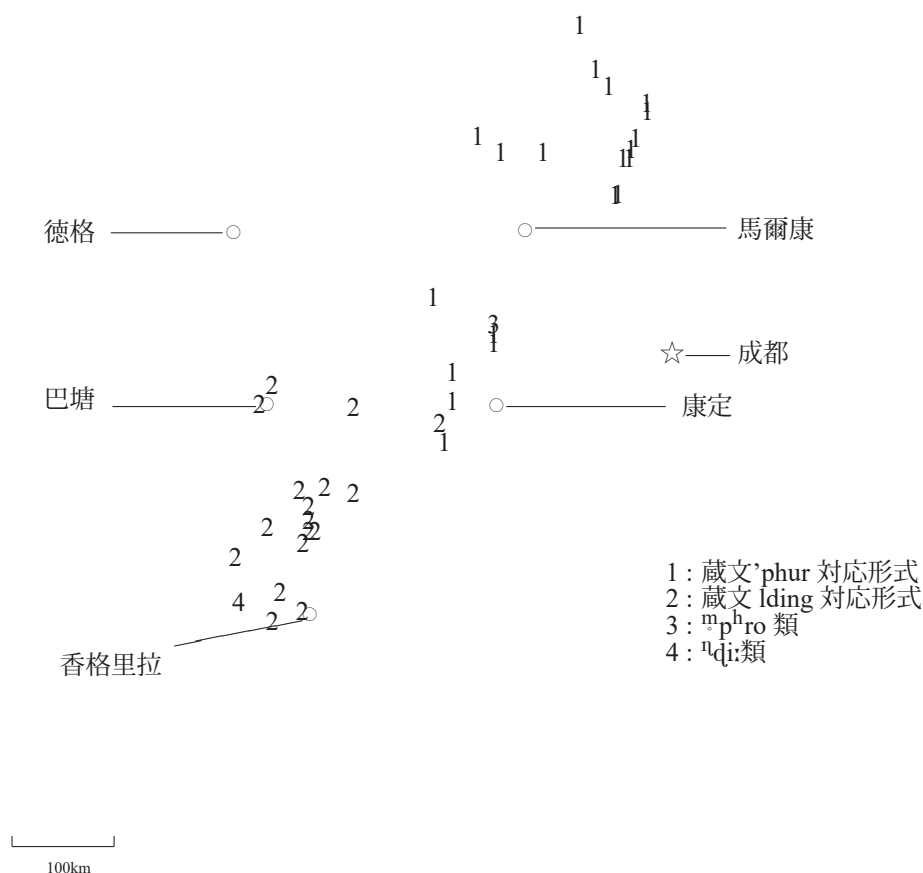


図 5.91: 「飛ぶ」の語形式言語地図

「飛ぶ」という語義に用いられる語は、極めて明瞭に分布が分かれている。

甘孜州南部以南で用いられる形式は、たとえば Sagong 方言¹⁶di̯、Nyishe 方言¹⁷di̯ となり、蔵文 *lding* と対応している形式であると考えられる。*lding* は、文語としては「浮く」の意味である。

単発的に見られる形式として、sProsnang 方言^{m̥pʰro} 及び Budy 方言^{n̥di:}がある。

5.5.34 「子供」 *phru gu* / *byis pa*

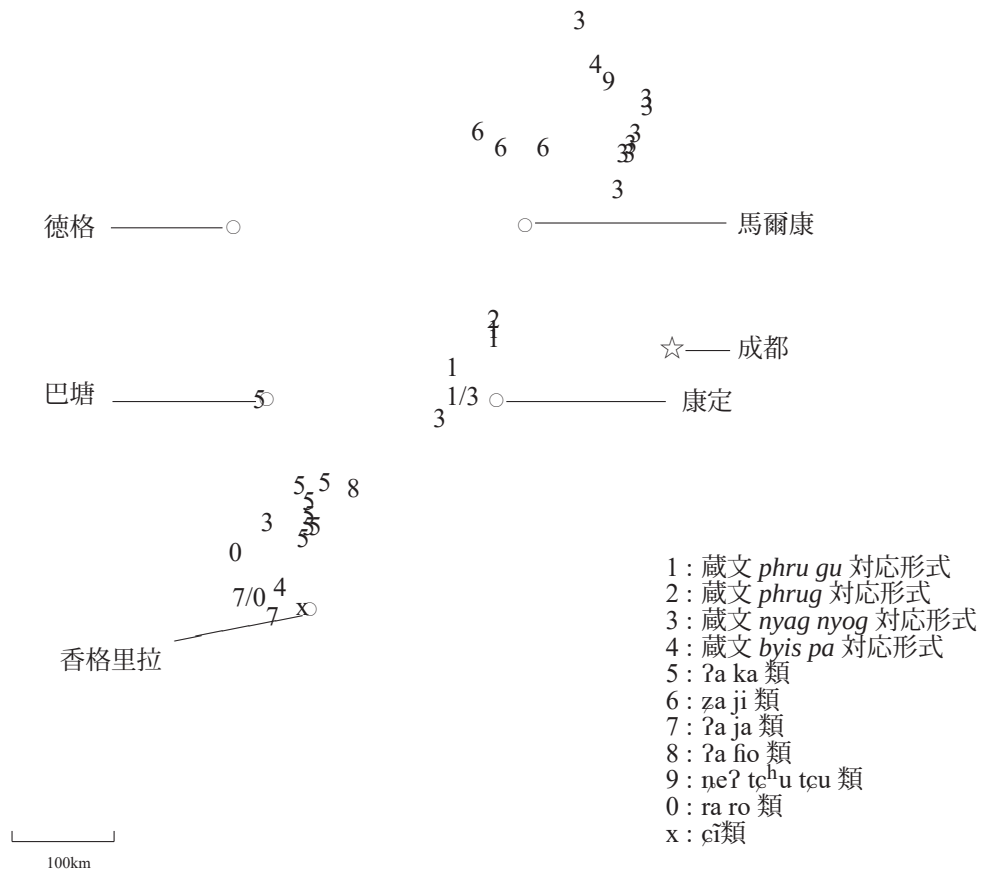


図 5.92: 「子供」の語形式言語地図

藏文 *phru gu* 対応形式は限られた地域に分布し、丹巴県およびムニャ地域の方言で見られる。sProsnang 方言 $\text{p}^{\text{h}}\text{ri?}$ / $\text{p}^{\text{h}}\text{t}^{\text{h}}\text{i?}$ は、藏文では形態素の一部と考えられる *phrug* のみで語として用いられている。

藏文 *nyag nyog* 対応形式が広く見られ、ヒャルチベット語の多くとムニャ地域南部の方言および sDerong 方言にも現れる。Babzo 方言の ne? tɕʰu tɕu の第 1 音節は藏文 *nyag nyog* の第 1 音節と共通と考えられ、残りの音節は藏文 *chung chung* 「小さい」に対応するものと考えられるから、広い意味ではこの形式も藏文 *nyag nyog* 対応形式の 1 つといえる。

藏文 *byis pa* 対応形式は極めて限定的に分布し、Askyirong 方言 ɕih pa および Nyishe 方言 ci がある。分布から見れば、「九香線」南北両端に存在する。

アムドチベット語に見られる形式、たとえば rNgawa 方言 za ji や dMarthang 方言 ca ji は藏文 *zha zhi* と対応関係があると考えられる。

「九香線」南部には、第1音節にʔaをもつ形式がよく見られる。mBathang 方言 ʔa kɔʔ、Sagong 方言 ʔa ka などがあるほか、nDappa 方言 ʔa fio のようなものも見られる。Toding 方言 ʔa ja と Budy 方言（結義）ja: は、おそらく共通の形態素を含んでいると考えられる。

rGyalthang 方言 ʔĩ や Yungling 方言 ʔa ro、Budy 方言（洛義）ʔa ro: の形式は来源不詳である。

5.5.35 「顔」 *ngo* / *kha ngo* / *gdong*

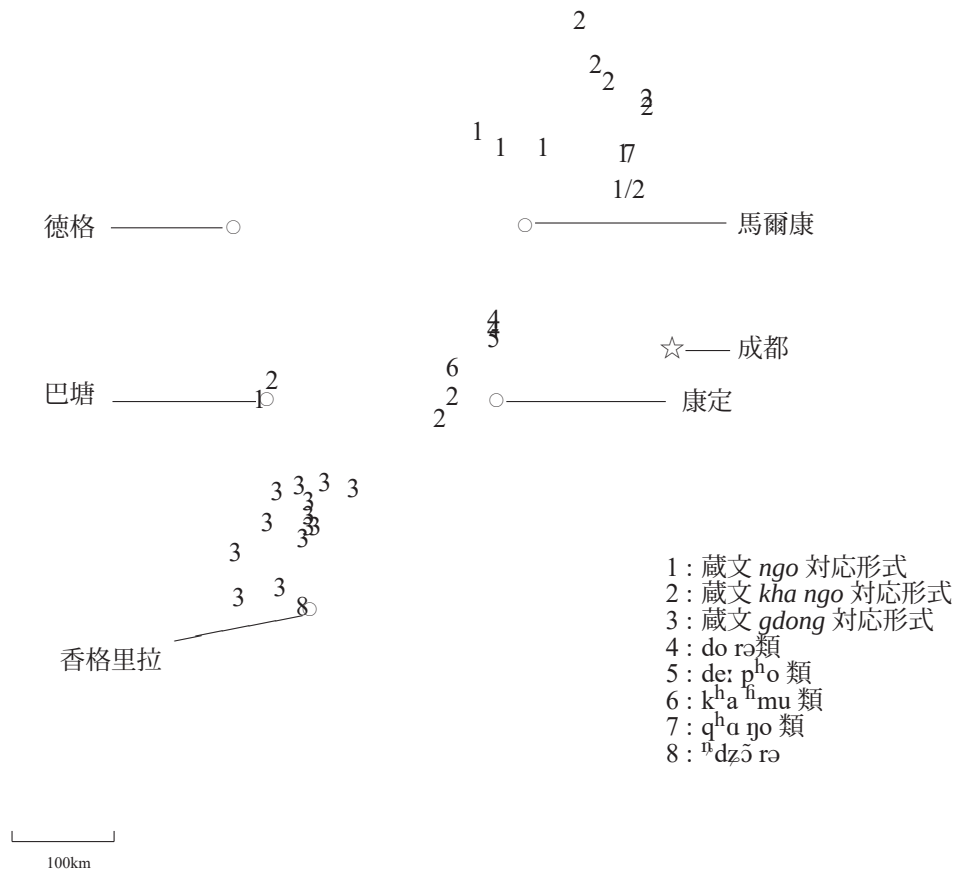


図 5.93: 「顔」の語形式言語地図

藏文 *ngo* 対応形式はアムドチベット語に見られるほか、ヒャルチベット語 Ketshal 方言にも見られる。「九香線」北部地域を中心に分布する。ほかに mBathang 方言 *ŋx* にも見られる。

藏文 *kha ngo* 対応形式はヒャルチベット語の一部とムニャ地域のいくつかの方言に見られる。Thangskyi 方言 *q^ha ŋo* は、藏文 *kha ngo* と対応しているものと考えられるが、藏文 *kha* 「口」に対しては *k^ha* が現れ、「顔」にのみ口蓋垂音が現れている。

「九香線」南部地域は基本的に藏文 *gdong* 対応形式が分布する。rGyalthang 方言 *^ʰdzɔ̃ rə* の形式は孤立した分布を見せ、来源も不詳である。

丹巴県の方言はそれぞれ特徴的な形式を使用し、sProsnang 方言 *^ʰdo: rə*、Sogpho 方言 *ʼdō rə*、dGudzong 方言 *de: p^ho* となる。sProsnang 方言の形式は、Sogpho 方言の形式の第 1 音節を参考にすると藏文 *gdong ris* 「顔つき」と関連があるようにみえるが、よく分らない。

5.5.36 「虹」 'ja' / 'ja' tshon

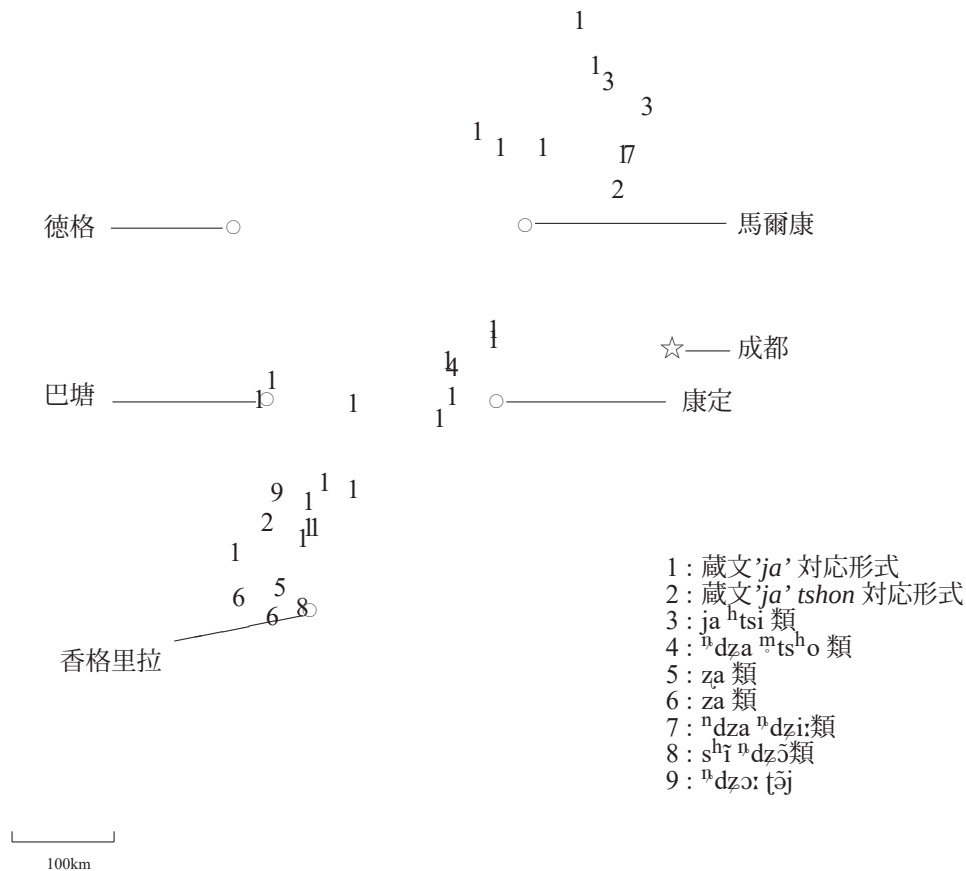


図 5.94: 「虹」の語形式言語地図

広く 1 音節語の藏文 'ja' 対応形式が分布している。2 音節語の藏文 'ja' tshon 対応形式も散発的に分布しており、地域的なまとまりは見られない。

Lhagang 方言 [^]ndza [^]mts^{ho} は藏文 'ja' tshon の対応形式であるが、第 2 音節初頭の両唇前鼻音が現れるのが極めて特徴的である⁸⁴。

Phyugtsi 方言 ja^{htsi} と Babzo 方言 [^]ṇa ts^hε はおそらく同一の来源を持つ形式で、これらの音形式から藏文には存在しないけれども *'zha tshon のような形式が存在したのではないかと疑える。これは「虹」の藏文 'ja' tshon との対応関係を見せる。また、*'zha と関連する可能性として Nyishe 方言 [~]za のそり舌摩擦音の対応がある。

rGyalthag 方言 shi[^] [^]ndzõ の第 2 音節と Tsiu 方言 [^]dzõ: t̚j の第 1 音節は、ともに藏文 'ja' と対応すると考えられる。それぞれもう一方の音節の形式はよく分からない。

Thangskya 方言 [^]ndza [^]ndzi:、Budy 方言 [~]za などは来源不詳である。

⁸⁴ 丁種本《西番譯語》の《木坪譯語》に記録される「虹」の藏文形式に 'ja' mtshon がある。関連があるかもしれない。

5.5.37 「肉まん」 *mog mog*

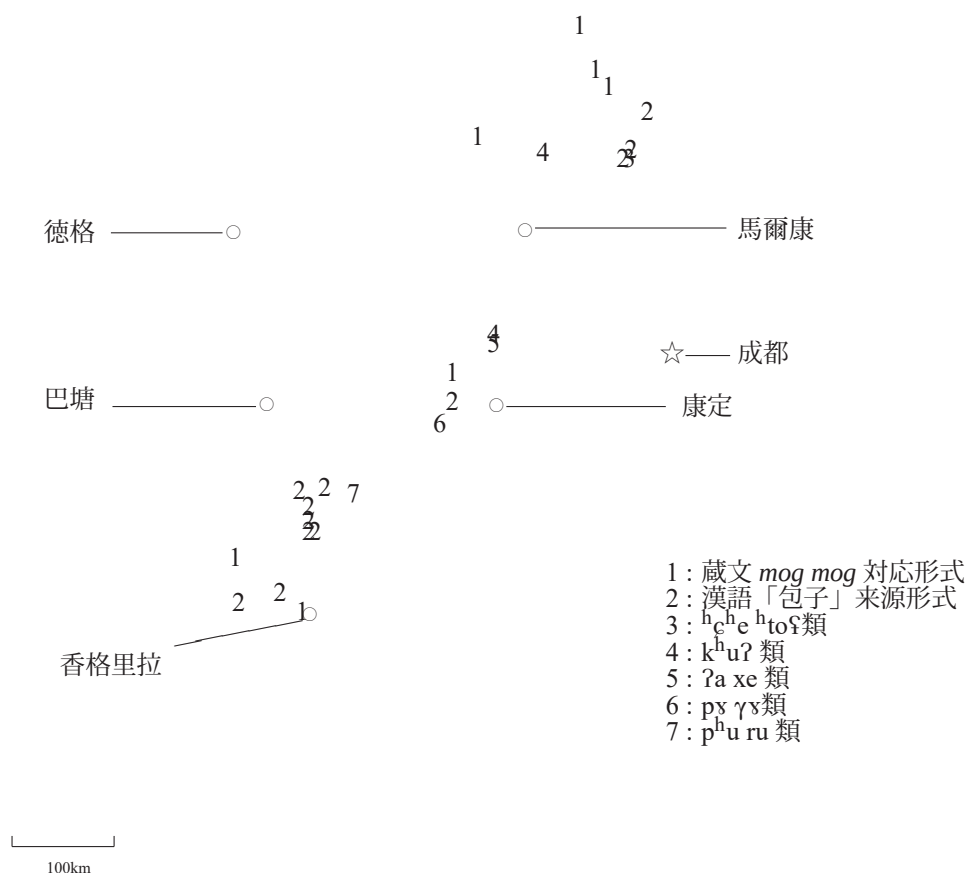


図 5.95: 「肉まん」の語形式言語地図

「肉まん」の蔵文対応形式として *mog mog* を挙げたが、この語自体漢語「饅饅」に由来する借用語である。

上の地図に記載されない複数の地点については、話者が漢語であると自覚しつつ「饅饅」もしくは「饅頭」の土地の発音を使用する。

Thangskya 方言 $h̥e h̥e h̥e toʃ$ が蔵文 *phye thug* と対応する以外は、来源不詳である。

5.5.38 「青稞（裸麦の一種）」 *nas*

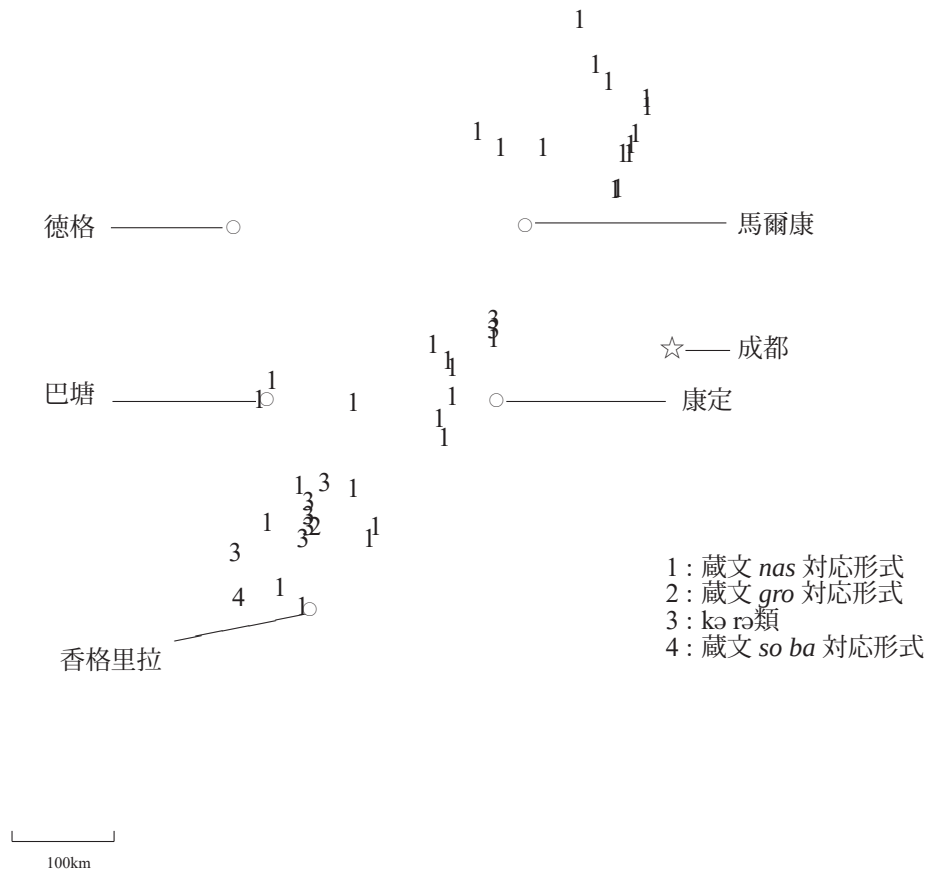


図 5.96: 「青稞」の語形式言語地図

藏文との対応関係が見られない語形式と分布に注目する。丹巴県と郷城県周辺のいくつかの方言に藏文非対応形式が現れる。たとえば gDongsum 方言 *kə rə*、Sogpho 方言 *ṽgə rə*、Yungling 方言 *ka ru* などで、細部に異なりがあるが、基本的な構成要素は近いものと見てよいだろう。語形式としては、口語形式に見られる要素そのままの藏文対応形式は確認できていない。ただし近似のものとしては、江荻 (2002b:253) に *krungs* 「青稞の穂」という古藏文形式についての言及がある⁸⁵が、これと関連するかどうかは確定的なことはいえない。

その他のいくつかの方言で見られる形式としては、チベット文語の語義として、藏文 *gro* は「小麦」、藏文 *so ba* は「大麦」を意味する⁸⁶。なお、この点から考える

⁸⁵ 「青稞の穂」に対応する語形式で軟口蓋音を含む形式を持つチベット・ビルマ諸語は複数ある（黄布凡主編 1992）が、関連は分からない。

⁸⁶ これは方言に見られる意味変化の問題かそれとも調査上の問題かは、今は判断できない。調査時の結果として、小麦と大麦の区別がはっきりしない話者が多かったことを考えると、麦の名称について十分な区別を行えていない可能性もあるだろう。

と、dGudzung 方言の「大麦」は ṽə zi で、この形式がここで扱う「青稞」の蔵文非対応形式と共通性を有すると考えられる⁸⁷。

⁸⁷ 「大麦」に $/z/$ を含むのは各種彝語に見られる（黄布凡主編 1992）。

5.5.39 「娘」 *bu mo*

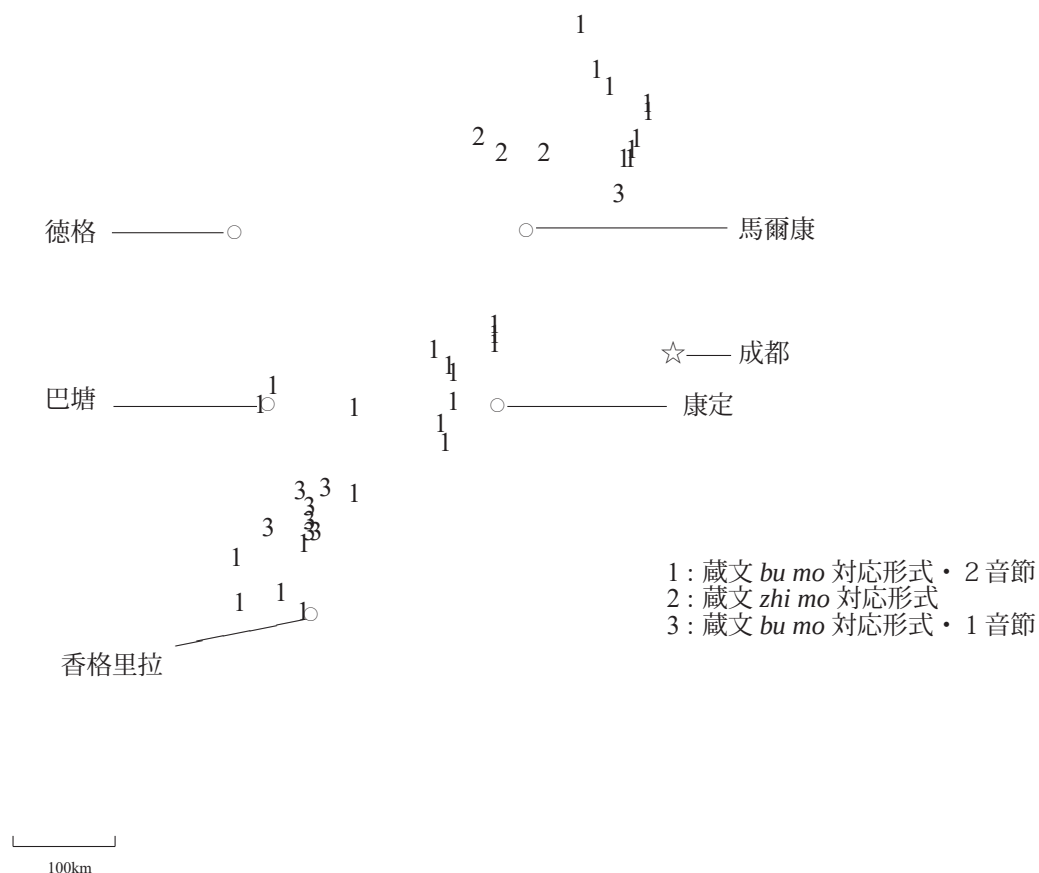


図 5.97: 「娘」の語形式言語地図

アムドチベット語で用いられる藏文 *zhi mo* 対応形式は、青海省のアムドチベット語でも広く用いられているため、地域的な連続性があると考えられる。

1 音節になるのは郷城県や得榮県の方言に見られ、たとえば gDongsum 方言 *põ:* などで、母音は鼻母音で実現される。藏文 *bu mo* に対応する要素の 1 音節への縮約と見られる⁸⁸。

Zhongu 方言の形式は *pu* で 1 音節になっているが、おそらく上記のような郷城県の方言のような形式が生じた後に音節構造上の制限がかかって母音にも音節末にも鼻音要素が現れなくなったと考えられる。

⁸⁸これと酷似の語形成（第 2 音節が藏文 *mo* か *ma* が現れる）で、2 音節語の 1 音節語への縮約という現象は、阿里的 Gar（噶爾）方言にも顕著に見られる（瞿霽堂・譚克讓 1983）。

5.5.40 「太陽」 *nyi ma*

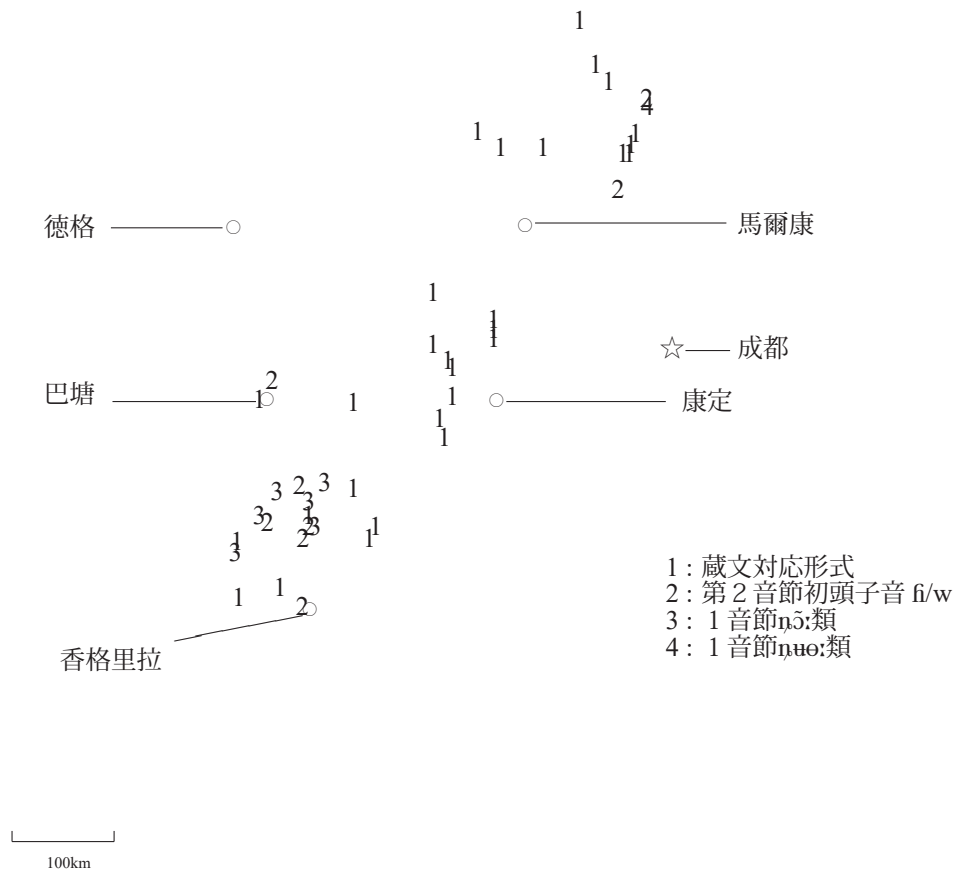


図 5.98: 「太陽」の語形式言語地図

第2音節初頭子音が fi や w となるものは、多くその音節の母音が鼻母音として実現される。それが1音節化した場合に $n̥ɕ$: といった形式になると見られる。郷城県の諸方言では、まさにこの変化が起こっているものと見るができるだろう。

Phyugtsi 方言では $n̥uə$: / $n̥ue$: という。これは蔵文対応形式とは異なり、ペマ語の形式 $n̥ye$ ³⁵ と近い。これを借用語と判断するかどうかについては、さらに精査する必要がある。というのも、この方言の近隣の方言を見ると、gTsangtsa 方言 $n̥ə fia$ で、加えて、上の地図には示していないが、gTsangtsa 方言の話される地域から南に位置する漳扎鎮干海子村の方言は $n̥i fiā$ 、さらに南に位置する地域で話される sKyangtshang 方言 $n̥ə ma$ を考えると、交通路沿いに徐々に蔵文 *nyi ma* 対応形式から1音節形式へと移行しつつあるような分布を見せ、郷城県周辺の方言の分布とやや共通性を見せているようにうかがえる。

5.5.41 語形式を基準にした地図から見る総合的考察

以上 40 の語について、語義を中心に地図を作成し、蔵文との対応関係と来源を異にする形式の分布について個別に考察を行った。ここでは、それらの分布状況をまとめるという観点で考察する。

まず、最初の「米」「8」の地図では、例外形式の分布の限定性を明らかにしたものである。これは地図化する点では、もっとも効率が悪く得られる情報は極めて少ない。しかし、ある形式がまったくの独立形式であるということを示すには、効果的であることは確かである。また、このようにただ 1 地点でのみ異なるという例は相対的に多くはないが、本節で取り上げた 2 つの語がチベット語にとって基礎語彙に数えられるものであることに注目する必要がある。

上の 2 語を除いた残りの 38 語については、各種方言について多様な形式が用いられたり地点の離れた方言について複数確認されるものである。方言の地点の分布が方言地理学に用いる言語地図として考えると広域地図の形式に分類されるであろうから、複数の形式が現れるのがむしろ正常であると考え⁸⁹。ここに扱った 38 語は、決して数として十分であるとはいえないが、分布の具合を対照すると一定の結果が現れている。それを以下にまとめていく。

まず、蔵文対応形式を用いるがそのもととなる蔵文の語が異なる事例について見てみる。たとえば「明日」「飛ぶ」の 2 例について考えると、前者ではヒャルチベット語全体に *tho rengs* 対応形式が用いられ、この形式を「明日」という意味で用いる方言は他の地域には見られない。この形式がヒャルチベット語ではないがその近隣に分布する Zhongu 方言でも用いられているのは、1 つの地域特徴として定着したのかも知れない。後者の「飛ぶ」の例では、極めて明瞭に、甘孜州の川藏公路南路以南では一般的な蔵文形式とは異なる蔵文 *lding* 対応形式を共通して用いている⁹⁰。このような広範な地域において共通に見られ、それがあある地域を境にまったく異なる分布を見せることには十分な注意が必要であり、そのような分布を示す背景についてさらに深く考察を進めなければならない。巨視的な方言区分を行う 1 つの基準となる可能性がある。

以上に述べたタイプのものと、語源がはっきりとしない形式の分布というのは、本節で示した範囲ではやや状況を異にする。蔵文に対応しない形式をもつ語形式を用いる方言は「九香線」南部に顕著であり、郷城県の特異性は十分注目に値する。郷城県およびその周辺地域に見られる特異性と先に述べた蔵文対応形式の極めて明

⁸⁹この意味でも方言間でほとんど変わらない形式をもつ、先に述べた「米」などの語彙は珍しい。

⁹⁰ただし rGyalthang 方言、Budy 方言など迪慶州の一部の方言は例外となる。

確な分布とは、一応区別する必要があるだろう。「橋」「花」「葉」「靴」「猫」「11」「森」「青稞」などを見るとよく理解できるが、実際これらを並べてみると少しずつ特殊形式の分布が異なっていることが分かる。具体的には、次のような点が指摘できる。たとえば「花」と「青稞」の分布を郷城県を中心に見ると、前者の方が郷城県の周辺にも類似の特徴を有した形式が広く分布していることが分かる。「青稞」の特異形式はほぼ郷城県内に限定して見られるが、郷城県でも熱打郷の *Rwata* 方言に現れず、県境に近い位置にある香格里拉県東旺郷の *gTorwa* 方言に現れる。この語は確かにより範囲が狭くなって現れている。この間を取るような分布を見せるのは「猫」「森」で、郷城県内と東旺郷のほかには稻城県でも確認されるが、得榮県には現れない。熱打郷から得榮県にかけての一带の方言は、他の郷城県の地域のものと比べてやや下位区分上の不一致があるのだろう⁹¹。このような分布と各語の意味との関連は把握できるには至っていないが、このような分布を示していることから、郷城県の方言がその中心部にあって、かつ特異な形式を保存していると分析できる。

ヒャルチベット語にあっては、所属方言全てに共通する形式を持つものには「猫」があり、かつ地域的に特徴づけられているように見える。ただしこのような例は少なく、方言ごとにわずかに違う語形式を用いる語の方が多く見られる。たとえば、「身につける」「子供」「うさぎ」「魚」「友人」などは、2、3の地点で異なった形式を用いており、それ以外が共通の形式を持っているというような事例も確認される。一方で「おすぶた」「子ぶた」などは、方言ごとに異なって、一致する形式を使用する方言が少ないものもある。興味深い分布を示すものに、「肉まん」「唐辛子」があって、両者とも漢語来源借用語が関わっているが、地域によって異なる漢語の形式を用いている⁹²。

古蔵文、異体字との関連を見ると、迪慶州西部金沙江、瀾滄江沿いを中心に、対応形式を複数見出せる方言がある。それは「火」「もの」に加え、蔵文対応形式として言及した「ない」（蔵文 *med*）についても確認できる。「ない」の例は、当該地域にのみ古蔵文 *myed* の対応形式が見出せる。「火」の事例では他の地域でも古蔵文 *mye* に対応する形式が多く見られるが、特に当該地域には無声鼻音が現れて⁹³、古蔵文 *smye* に対応する形式が見出せることが特に注目できる。このように、地図化することで問題となる形式が他の地域に存在しないことがより明確になる。「もの」の例では蔵文異体字 *bca lag* に対応する初頭に両唇音が現れる方言が存在する。

⁹¹ このことは話者の母語感覚とも一致し、郷城県内でも熱打郷一帯は他の地域と方言差異が確認されるという（鈴木 forthcoming-b）。

⁹² この場合、社会的上位言語である漢語についても調査が必要であることが示唆される。

⁹³ 無声鼻音が現れなくとも高声調や前気音が現れる方言もあり、*mBathang* 方言 ^hne などでもここで述べていることに関連する可能性がある。

以上に整理したように、語形式を基準とした言語地図はチベット語と他言語の関連を直接的に探れる極めて重要な資料である。ここで扱うような川西民族走廊の広域的な言語地図は、さらに多くの語彙について作成する必要がある。分析対象語数が少なければ、大まかな共通性を把握するにも困難がある。その事実は、実際に地図を作成して初めて確かめられたことである。

また、本格的な方言地理学的考察を行うための微細な言語地図を作る際には、郷城県を中心として周囲の県を含む地域を1つの単位にする必要があることが分かる。また丹巴県の微細な言語地図も語形式の分布と発展を考える上で重要な意味を持つことも分かる。ヒャルチベット語を全て射程に納めた地図についても同様に、同方言群の発展を考える上では極めて重要になるだろう。

5.6 川西走廊諸語におけるチベット語借用語/地域語形式

川西走廊諸語の中で、チベット文化圏で話されている言語については、おびただしい数のチベット語来源借用語が見られる。しかし、これまでに述べてきたように、川西民族走廊に分布するチベット語方言は極めて特異な特徴をもつものが多いことから、川西走廊諸語に見られる借用語の形式が特異な方言のいずれかの形式に一致を見れば、借用経路が明らかになることが期待できる。

ただしこの可能性は川西走廊諸語の側の音体系および音節構造に関する事情も絡んでいる。チベット語から当該語を借用した後に、川西走廊諸語が極めて大きな音体系および音節構造の簡化が起こったもしくはそもそも音体系・音節構造が比較的単純である言語⁹⁴の場合、明確にチベット語の特徴が現れてこない。その一方で蔵文をしのぐ複雑な音体系・音節構造を持ち、それを維持している言語⁹⁵の場合は、むしろ蔵文成立以前のチベット語の形態が残存しているかどうかという問題への興味があり、実際さまざまに議論されている（黄布凡(2004)など）。

また一方で、チベット語と川西走廊諸語に共通して見られる語がいくつか指摘できるかもしれない。これは蔵文との対応関係をもたないが、一方で漢語からの借用語でもない、いわば地域語の一種としてとらえられるものである。そのような語についても取り上げてチベット語の形式と対照することは、語の分布範囲を考える上で重要な情報を与えるものになると位置づけられる。

本節は以上に述べた視点から、川西走廊諸語のうち特異な借用語の分析を行う議論としてダバ語、スタウ語、ゲシツァ語を取り上げ、蔵文との対比を中心に近隣のチベット語方言にも注意を向ける議論として四土ギャロン語、ペマ語を取り上げて議論する。後者の場合、必ずしもチベット語来源借用語であることは保障されないが、蔵文に極めて近似的な形式をもつものに触れることになる。

5.6.1 ダバ語

ダバ語の上位言語としてのチベット語方言は未調査であり、また地域としてもチベット語母語話者の居住地域から離れていることから、ダバ語の中に見られるチベット語来源借用語を通して、借用元がどのようなチベット語方言であったか簡単な考察ができる。

ダバ語分布地域に交通路を通じて近接する地域で用いられる土着のチベット語方言は、Morim 方言（北側）および雅江の方言（南側）である。

⁹⁴ダバ語、ガイチョン語、ムニャ語、アルス語などが当てはまる。

⁹⁵各種ギャロン語、スタウ語、ゲシツァ語、ラヴルン語、北部羌語などが当てはまる。

ダパ語のチベット語来源借用語の対応関係については、鈴木 (2006f) が簡単に扱った。その内容にしたがって、鈴木 (2006f) 執筆以降に得られた方言資料を補充しつつ、以下に議論する。

鈴木 (2006f) が扱う Ngwirdei 方言は、ダパ語の中でもその音素体系と音節構造が複雑なことから、もし現代のチベット語よりも蔵文に近い形で話されていたとするならそれを受け入れられる条件下にあるといえる。

まず、借用語の語義について考察する。言うまでもなく、宗教文化語彙はほとんどチベット語来源借用語を用いる。

「寺」^ʈge mbe : 蔵文 *dgon pa*

「白塔」^mte^ho ste : 蔵文 *mchod rten*

「ラマ」^wle me : 蔵文 *bla ma*

「マニ石」^le pte : 蔵文 *la btsas*

以上の形式にも確認されるように、語末の鼻音が脱落しているのはダパ語の音節構造が語末子音の存在を認めないという制約によると考えられる⁹⁶。

また、一般の動物名と十二支の場合に用いられる動物名との間に語彙的差異があるものもある。差異がある場合、後者にチベット語対応形式を用いている。

「ぶた」-wa

「ぶた年」^pha^hlu : 蔵文 *phag* (ぶた)⁹⁷

次に、語形式の特徴を考察する。もっとも目を引くのは、Ngwirdei 方言の語形式が丹巴県の諸方言すなわち sProsnang 方言、Sogpho 方言、dGudzong 方言の形式にのみ一致する例が存在することである。

「鶏」^bdzja, ^bdzea : Sogpho 方言^ptsa、蔵文 *bya*

「珊瑚」^ptsa rA : sProsnang 方言^ptsə ru、蔵文 *byu ru*

蔵文 Py に対して以上の対応を見せる方言は、丹巴県の諸方言以外に現段階では見出されていない。このため、Ngwirdei 方言の以上の語の借用元は丹巴県のチベット語であるという判断を下さなければならない⁹⁸。ただし、次のように蔵文 Py に tɕ が対応する例もある。

⁹⁶蔵文もしくはチベット語口語の知識がある人の場合、チベット語の発音のように語末に鼻音要素を伴う発音をする人もいと考えられる。それを重視して記述した同じく Ngwirdei 方言の研究が劉勇 等 (2005) にある。

⁹⁷「さる」^zo duj : 「さる年」^zo du^hlu のような例もある。

⁹⁸この判断をためらう最も大きな要因は、地理的な非連続性にある。ダパ語の話される地域と丹巴県は連続ではなく、間にムニャ地域をはさむ。このような状況においていかなる借用関係が持てたかは、極めて興味の大い問題である。

「孔雀」⁹⁹ma p̥t̥ɕa : 蔵文 *rma bya*

これは借用の経路が異なっていると考えられる。

一方で蔵文によく一致しいずれの口語形式にも一致しない形式も存在する。

「狼」¹⁰⁰pja ɰk̚u : 蔵文 *spyang khu*

「もの」¹⁰¹t̥ɕa la : 蔵文異体字 *bca lag*

相当古い借用語かスタウ語経由（Mazur 方言で spjon̩ k̚ə、¹⁰²t̥ɕa la）での借用を考
えることができる。

以上のようなものを除くと、Lhagang 方言に似た形式を持ったものが多い⁹⁹。

「米」¹⁰³m̥d̥ɕe : Lhagang 方言 ¹⁰⁴m̥d̥ɕe、蔵文 *'bras*

「琥珀」¹⁰⁵puj ɕ̥he : Lhagang 方言 ¹⁰⁶hpu: ɕ̥he、蔵文 *spos shel*

先に見たように、語末鼻音が消失するのは確かにダパ語自体の音節構造によるけれども、借用元のチベット語が Lhagang 方言や Grongsum 方言などムニャ地域の方言に属する場合、もともと語末鼻音が脱落していた可能性もある。

また、蔵文に見られない形式が口語形式として酷似する例がある。

「唐辛子」¹⁰⁷ɸu tso : Lhagang 方言 ¹⁰⁸ɸu tsa、Morim 方言 ¹⁰⁹hu tsa

「猫」¹¹⁰-m̥ə h̥tsu : Lhagang 方言 ¹¹¹moŋ ziʔ、Rangakha 方言 ¹¹²m̥ō ʔdzə

「唐辛子」はダパ語分布地域の北部から塔公あたりまで酷似した形式を持つ方言が分布する¹⁰⁰。さらに丹巴県の方言にもやや似た形式が用いられ、たとえば Sogpho 方言では ¹¹³he zo、dGudzong 方言では ¹¹⁴he zu という。その他の地域では、語形式の一部にも一致しない。「猫」は借用語であるかどうかは確定的ではないが、語形式の類似という点で見れば相当近い形式を持っているチベット語方言が存在し、特に語頭に両唇鼻音を持つ例は極めて少数の方言にのみ見られる¹⁰¹。これらの言語間に何らかの関係を認めてもよいだろう。

⁹⁹Lhagang 方言と似ているといえる点は、子音連続の現れによるところが大きい。

¹⁰⁰先の「唐辛子」の地図を参照。

¹⁰¹本論文では議論の対象にしないが、西田(1963)の丙種本《西番館譯語》の「猫」は「奔郎」と音写されて、同論文では両唇鼻音を含む ¹¹⁵*moŋ laŋ が再構されている。

5.6.2 スタウ語

スタウ語の話される地域の上位言語としてのチベット語方言の全体像は未調査であるが、牧区と農区が入り混じり、アムドチベット語話者¹⁰²もカムチベット語話者も並存する。後者は主に八美鎮周辺の出身者が多く、用いられる方言も Bame 方言に近いものと考えられる。Morim 方言は劉勇 等 (2005) ではアムドチベット語とされているが、筆者はカムチベット語であると考えている。

スタウ語分布域は、以上に述べたように言語環境が複雑である。また、スタウ語自体の音節構造は音節末を除いて蔵文の構造より複雑であり、チベット語来源借用語の語形式は蔵文と極めて近いものも多く、現在の方言資料と対比させて借用経路を考えることは、ダパ語の事例よりも難しい。ここでは、わずかに見られるカムチベット語の語形式に近く見える借用語に注目し、考察を行う。スタウ語の例は Mazur 方言を用いる¹⁰³。

まず、蔵文形式が極めて近いが音形式が異なって現れる例を示す。

「龍」^mbru : 蔵文 'brug

「雷」^mbru / ^mdu : 蔵文 'brug

「野牛」^mdoŋ : 蔵文 'brong

この場合、Mazur 方言に「野牛」が借用されたのは相対的に後期ではないかと推定できる。

蔵文とも現代のチベット語形式とも異なるがチベット語来源借用語であると推定できるものがある。

「装飾品」^rjen tɕ^ha : 蔵文 rgyan cha

「珊瑚」^βjo ra : 蔵文 byu ru

「装飾品」は口語との対応関係上問題は生じない。蔵文 Ky-の対応形式に前部硬口蓋破擦音が当たるのは、周辺の gYokhog 方言や Morim 方言に見られるものである。問題は「珊瑚」の対応形式で、蔵文 Py-に対応するのもまた前部硬口蓋破擦音となっている。これがやや問題と考えられるが、周辺に分布する方言を見ると、Morim 方言で蔵文 spyang khu 「狼」に対して^hcō ^hk^hu や、Lhagang 方言で蔵文 sbyar 「貼る」

¹⁰² 先行研究でしばしば言及されるアムドチベット語「道孚」方言で、瞿霽堂 (1996) などが下位区分上独立させている特徴的な方言のことである。

¹⁰³ スタウ語には声調が存在するとの分析 (池田 (2001) や劉勇 等 (2005:242-243)) があるが、筆者の分析でも確認される点があったが声調とは分析していない。筆者はこの超分節音上の特徴は方言差異を分かちものとして分析しているが (鈴木 2006a)、本論文の記述では超分節音にかかわる要素は表記しない。

に対して^wjar となって、ここで扱う対応関係を持っているから、借用経路のいかんによっては以上の対応関係もありうることになる¹⁰⁴。

蔵文 sr-に s^h が対応する例がある。

「かわうそ」 s^ham : 蔵文 sram

「裂け目」 s^huφ : 蔵文 srubs ka

蔵文 sr-対応形式でこの類似の形式を示すのは、Sun (2005) の gSerpa 方言のみに見られ、たとえば「命」蔵文 srog に対し rsua がある。

蔵文 lha を含む複合語の借用語は蔵文に対応するだけでなく、その発音において際立つ特徴をもっている。

「ラサ」 la s^ha : 蔵文 lha sa

「ラモ」 la mo : 蔵文 lha mo

「塔公」 la s^hgoŋ : 蔵文 lha sgang

すべて固有名詞である。スタウ語では l/l̥ が対立し、l̥ は自由変異音として舌端歯閉鎖音 [t̪^h] をもつ。これはチベット語 Lhagang 方言と同一の特徴であるが、この音声的特徴をもつチベット語もまた珍しい。ただし「神」は la といい、l̥ では対応していない。la もまた借用語とするならば、借用経路や借用した時代の差異についてより深く検討する必要性がうかがえる。

初頭子音が蔵文有声閉鎖/破擦音字の場合、その借用語では Mazur 方言で有声音と無声音の両方が見られる。

「ハゲタカ」 bja rgo : 蔵文 bya rgod

「船」 gru : 蔵文 gru

「小麦」 to : 蔵文 gro

現在のスタウ語周辺のチベット語方言を考えると、無声音として借用されているのが借用時期が後期であると判断できる。「小麦」は相対的に先の2例より後期に借用された可能性がある。

蔵文異体字に一致する例がある。

「もの」 t̪ca la : 蔵文異体字 bca lag

¹⁰⁴ただし、Morim 方言で「珊瑚」は ʔcu ruu となっている。同じく蔵文 Py-をもつ「鶏」bya も t̪ca となっていて、前部硬口蓋破擦音に対応する例は確認されていない。Lhagang 方言も似たような状況である。他の方言に見られる可能性も考える必要があろう。

蔵文に対応せず現代の方言形式との対応が見られるものがある。

「猫」 tsə la : Sogpho 方言¹⁰⁵ tsə lə

この形式は、現在の資料では、丹巴県のチベット語方言にのみ一致する¹⁰⁵。

以上に見たように、スタウ語の借用語は明確に借用時期の差が確認され、また古い時期の発音をよく保存していることが分かる。借用の時期を特定するにはまだ検討が必要である。借用の経路については、現代の方言資料を用いることでいくつか判明したものもあるが、地域的な観点から見るとダバ語と同じく複数の方言を考慮しなければならない。

5.6.3 ゲシツァ語

ゲシツァ語の話される地域の上位言語としてのチベット語方言は、現在ではあまり耳にすることがない。ゲシツァ語の分布地域はアムドチベット語牧民方言と重なる部分もあるが、高度の点で異なりがあり、話者の生活環境も生活様式も異なっている。ゲシツァ語の分布地域の近隣にはカムチベット語話者が分布しているがすみわけがなされている。

ゲシツァ語とチベット語の語彙の対照研究は多爾吉(1998)が行っているが、そこではゲシツァ語の系統問題を考察するという目的があって、借用関係という視点から分析を試みているわけではない。ここでは、借用関係が比較的によく分かるものについて検討を加える。

Geshitsa 方言に見られる蔵文対応語のいくつかの例をあげる¹⁰⁶。

蔵文 a# に対応する形式には 2 種類がある。1 つは /a/ で対応する。

「農区」: roŋ wa 蔵文 *rong pa*

「平民」: ²de wa 蔵文 *sde ba*

もう 1 つは /ɛ/ で対応する。

「牧区」: m̥dɔk pe 蔵文 *'brog pa*

「ラサ」: la se 蔵文 *lha sa*

¹⁰⁵ 前節「猫」の言語地図参照。

¹⁰⁶ ゲシツァ語にもスタウ語と同様、超分節音について語に固有の特徴がある。しかしここではやはり表記しない。

この差異は何によるか決定することはできないが、たとえばそれぞれの語における初頭子音に注目すると、/a/で対応する「平民」の初頭子音は蔵文のつづり方とそのまま対応しているが、/ɛ/で対応する「牧区」の初頭子音はすでに蔵文の基字と足字rがそり舌音になった後の形式に一致し、簡化が起きている。これは相対的に後期の借用語である可能性がある。このように考えられるのは、同様の蔵文に由来する「雷」という語の対応形式である。

「雷」：^mbru 蔵文 *'brug*

この語の初頭子音は蔵文のつづり方とそのまま対応しており、Geshitsa 方言はこのような音節構造を許している。

さらにほかの例をいくつかあげる。

「銅」：zaŋ 蔵文 *zang*

「体」：ʔzu po 蔵文 *gzugs po*

「森」：nak tɕ^hɛ 蔵文 *nags tshal*

「銅」の形式から、蔵文#z-が有声音の時代もしくはそのような音対応をもつ方言から借用していると考えられる。「体」は第1音節を見るとチベット語で音節末子音がʔか脱落した形式を借用したとみてよい。「森」はおそらく借用語であると考えられるが、以上の蔵文の形式を口語で用いる方言では、Sabde 方言の^ʔnaʔ ⁿts^heが見られるのみに限るなど、借用経路の問題がある。

さて、チベット語方言の語形式の特徴でも問題となった「猫」と「とうがらし」の形態は、Geshitsa 方言では以下のようになっている。

「猫」：tsə lə

「とうがらし」：hɛ tso

「猫」の形式は、まさに丹巴県のチベット語と同様の形式といえ、ムニャ地域に見られるようなmを含む形式はとっていない。「とうがらし」の形式もまた、丹巴県からムニャ地域全体に広がる来源不詳の形式に酷似する語を用いている。地域的観点から見て、まったくその分布に疑問をもつことはないだろう。

5.6.4 四土ギャロン語

Kin (1949) (金鵬 (2002)/漢語訳) の四土ギャロン語 bKrashiling (雜古腦) 方言の記述には、bKrashiling 方言とチベット語 (藏文と Lhasa 方言) との語彙対照の考察が行われているが、そこでは同源語と借用語の区別がなされていない。ここでは、ギャロン語の周辺に分布するチベット語と対照することで見出せる特徴を拾い上げて考察する¹⁰⁷。

bKrashiling 方言における藏文 sh/zh 対応音は、そり舌音を示すものが多い。

「鹿」*ʂa wiɛ* : 藏文 *shwa ba*

「木」*ʂɿ/ɕi* : 藏文 *shing*

「紙」*ʂag ʂag* : 藏文 *shog bu*

「地」*sagzɿ* : 藏文 *sa gzhi*

「言う」*ka-zɿ* : 藏文 *zhu*

この特徴は、ギャロン語の周辺に分布するチベット語方言としては、sProsnang 方言、Sogpho 方言など丹巴県の諸方言、および松潘県の Zhongu 方言に見られる。

bKrashiling 方言における藏文 j 対応音の中に、/j/ が現れるものがある。

「強盜」*jag pa* : 藏文 *jag pa*

これはチベット語方言について、Babzo 方言の ^hɕa ts^hɛ 「虹」 *'ja' tshon* や Phyugtsi 方言の ^hja tsi: 「虹」 *'ja' tshon* に近似の対応が見られる。

bKrashiling 方言における藏文 -a# 対応音で母音の調音点が高くなっているものが多い。

「鶏」*pie* : 藏文 *bya*

「神」*ɬie* : 藏文 *lha*

「商人」*ts^hoŋ pie* : 藏文 *tshong pa*

藏文 -a# 対応音で母音の調音点が高くなったりわたり音を含んだりするのは、丹巴県の諸方言の特徴によく似ている。sProsnang 方言 ^hptswə 「鶏」、^hlwe 「神」などの例に見られる。

bKrashiling 方言における藏文 -ang 対応音で語末鼻音が脱落しているものがある。

¹⁰⁷bKrashiling 方言の表記は金鵬 (2002) に原則従うが、有気音の *h* は ^h とするなど、筆者の方針に変更できるところは変更する。

「牛」 *ba lie* : 蔵文 *ba glang*

「家」 *k^hoe* : 蔵文 *khang ba*

先に見た「商人」の第1音節など、複音節語の語中では脱落は見られない。金鵬(2002)は語末鼻音が脱落していないものをチベット語からの借用語と考えている。ただし以上の「牛」などは蔵文に酷似しておりなおかつ第2音節の初頭子音字 *g* が口語に反映されていないため、借用語を疑える。なお、チベット語 *sProsnang* 方言や *Askyirong* 方言、*Babzo* 方言では語末の蔵文-*ang* 対応形式で鼻音を脱落させるものもあり、近隣のチベット語にも見られる。たとえば、*Askyirong* 方言 *k^ho fia* 「家」などのようである。

5.6.5 ペマ語

ペマ語には多くのチベット語との対応語彙が見られるが、それが同源語の関係であるか借用語の関係であるかは、まずペマ語の系統問題と絡めて考える必要がある。しかしながら、ここでは系統問題に踏み込まず、単に語形式がチベット語と近似しているものの一部を取り上げて、チベット語方言形式と対照することで、ペマ語の形式を考察する。なお、ペマ語形式は西田・孫(1990)の語彙資料に基づく。

このような問題を扱う背景には、次のようなことがある。西田・孫(1990)における分析では、ペマ語が話される地域の周辺に分布するチベット語について、十分な理解が得られておらず、おそらくアムドチベット語が分布しているということを念頭において、チベット文語との対比を基準に対照が試みられている。それゆえに、チベット文語と近い形式を示していても、ペマ語の本来語と分析する。同様に、Zhang(1997)は西田・孫(1990)の資料に基づいてペマ語形式に対応する蔵文形式を示しながら、その対応関係がいくつかのアムドチベット語やカムチベット語に類似していることを示し、音節構造や声調を持っている特徴からペマ語がカムチベット語に関連のある方言であることを述べている。これらの対照に用いられたチベット語方言はペマ語に部分的に類似の特徴を見せるさまざまな地点のものであって、それだけでは同源語の音韻対応の考察は可能であっても借用語の可能性は最初から排除しているようなもので、得られる結論としてペマ語はチベット語の方言であるということを前提としているように見える。まず対照すべきはペマ語の近隣に分布するチベット語方言すなわちヒャルチベット語で、それらの語彙の特徴を分析する必要がある。従来この点が行われていないのは、おそらくヒャルチベット語がほとんど未調査であったためであろうと推察する。本論文では、ヒャルチベット語は数種類の方言の音体系の記述を第4章で行った。これらはアムドチベット語とは根本的に異なる一

方、ヒャルチベット語に分類した方言群でも相違点が多い。このような事情から、ペマ語については、チベット語来源借用語と断定できなくとも蔵文の形式に近い語を周辺のチベット語方言形式と対照するのは極めて意味のあることである。

語義	ペマ語	蔵文	Phyugtsi 方言	Askyirong 方言	Ketshal 方言
月	dza ¹³	<i>zla ba</i>	^{fi} dza γe	^o fi tsa:	^{fi} dzaa
火	ɲɛ ⁵³	<i>me</i>	^o ɲe	^o ɲe	^o ɲe
手	ia ³⁵	<i>lag pa</i>	jɐ wa	loɸ pa	laɸ pa
牛	no ³⁵	<i>nor</i>	nɯ:	—	—
羊	y ³⁵	<i>lug</i>	^o jɯ:	luɣ	^o luɸ
犬	tɕ ^h i ⁵³	<i>khyi</i>	^o ts ^h ə	tɕ ^h ə γu	tɕ ^h ə γə
魚	ɲɛ ⁵³	<i>nya</i>	^o ɲa	^o ɲa	^o mɲã
海	ndzɐ ³⁴¹	<i>mtsho</i>	^o ndzɐ	dʒa ⁿ ts ^h o	dʒa ⁿ ts ^h oh
お香	pe ⁵³	<i>spos</i>	—	^o pi:	^o phəə
狼	ɕa ⁵³ ngɐ ³⁵	<i>spyang ku</i>	^o sã ^ɳ gu	^o hpɔŋ k ^h u	ɕəŋ ku
心	s ^h e ¹³	<i>sems</i>	s ^h i:	s ^h em	—
蛇	rɿ ³⁴¹	<i>sbrul</i>	^o fi rə:	ru:	fi ruu
家	ngɔ ³⁵	<i>khang ba</i>	^ɳ gɔ:	k ^h ɔ fiə	k ^h ɔŋ wa
血	tɕ ^h a ⁵³	<i>khrag</i>	^o ts ^h a	t ^h aɣ	^o tɕ ^h aɸ
狐	γa ³⁵	<i>wa</i>	γa	^w γa:	ɸγa
鶏	ɕa ⁵³	<i>bya</i>	^o sa	^o ?ja:fi	ɕa
花椒	zɑ ¹³ ma ⁵³	<i>g.yer ma</i>	zafi ^{fi} ma	^o fi jem ma	^o jer ma

以上に示した形式の対比によって、ペマ語の語形式が Phyugtsi 方言に際立つ特徴的な語形式と酷似していることが分かる。たとえば「海」や「家」の前鼻音つき有声閉鎖音や「手」や「羊」において蔵文 l が /l/ で現れないのは、ヒャルチベット語の中でも Phyugtsi 方言など九寨溝県の方言に限って見られる。また、ペマ語の声調で高く始まるものは、ほぼ Phyugtsi 方言の高レジスターに一致する。ただし蔵文 Ky 対応形式はペマ語と一致するのは Askyirong 方言や Ketshal 方言の形式で九寨溝県の方言ではない。「血」「鶏」の形式は Ketshal 方言に限って一致する¹⁰⁸など、ヒャルチベット語のさまざまな方言に一致を見せる。「花椒」は以上に挙げた現代語には一致しないが、実際は Babzo 方言 ze ^{fi}ma とよく対応し、ほとんどの特徴はヒャルチベット語と酷似するのである。

以上のような状況から、以下に地域的に特徴の現れる2つの語「猫」「唐辛子」を対照する。これらは地域的に現れる特徴が異なるものである。

¹⁰⁸厳密には、Sharkhog 方言の「鶏」は別語源の語を用いる。上の表で対照しているのは「鳥」の形式から取ったものである。

語義	ペマ語	蔵文	Phyugtsi 方言	Askirong 方言	Ketshal 方言
猫	a ¹³ li ⁵³	—	°ʔa lu	°ʔa luɣ	°ʔa lə
唐辛子	la ¹³ tɕə ³⁵	—	la ^h tsu:	la ^h tse	laŋ tɕu

「猫」の形式は、ヒャルチベット語などに集中的に見られる形式（ʔaを含む2音節形式）が現れていることから、地域的に見るとまったく自然な形式が用いられていることになる。「唐辛子」もヒャルチベット語によく現れる漢語来源借用語の形式を用い、Ketshal 方言やPhyugtsi 方言も共通とする漢語「辣椒」からの借用形式であることは疑いなく、地域的に見て自然な分布を示している。

このことは逆に、西田・孫(1990)がペマ語の本来語と述べるものの中には、ヒャルチベット語の各種方言に非常によく一致する形式が多く存在するということを示している。そもそも西田・孫(1990)の記述では、ペマ語と対照するチベット語としてアムドチベット語を念頭においていることから生じたことであろう¹⁰⁹。

5.6.6 本節のまとめ

川西走廊諸語におけるチベット語来源借用語もしくはチベット語と形式を共通とする語について、5つの言語について検討してきた。その結果を総括すれば、地域性の高い形式をわずかでも持っていることが明らかにできたと考える。しかし、その語の形式と現在の言語の分布上の関係は、不自然とも見える要素もある。

もっとも注目に値するのは、スタウ語やダパ語に見られるチベット語来源借用語が丹巴県にのみ分布するチベット語の方言形式を示している点である¹¹⁰。現在の分布状況からでは、これらの言語間に直接の接触は考えられにくい。ではなぜこのような現象が起こっているのか、ということは、言語外のたとえば互いの歴史関係の視点から再度分析されなければならない¹¹¹。

これまでの研究では、単に川西走廊諸語（特にギャロン系言語）に見られる形式を蔵文と対照させて対応関係を明らかにする手法が多く見られたが、それはあくま

¹⁰⁹西田・孫(1990)の記述では、ペマ語とアムドチベット語を対照したということは明記されていない。ただし、同書におけるペマ語話者の自称問題を取り上げる箇所から、ヒャルチベット語の存在を確認していないことが示され、鈴木博之(2006)がその問題を取り上げた。

¹¹⁰ここでは扱わなかったが、チベット語について語形式を地図化した前節に挙げた例の中に、ムニャ語における「うさぎ」もまた丹巴県にのみ分布するチベット語方言の形式を示していることを付け加えておく。

逆に見方を変えると、丹巴県のチベット語方言は他の方言と異なっている点が、音声、語彙の面だけでなく、文法に関わる事項にも及んでいるという指摘（鈴木2006d）もあって、これについても川西走廊諸語との対比という文脈のもとで議論する必要がある。

¹¹¹「ギャロン」の定義に立ち返って考えてみると、丹巴県はギャロンの中心地であることから、丹巴県のチベット語がかつては影響力が強かったという仮説は立ちうる。ほか、楊嘉銘(2004, 2005)や王懷林(2006)などの議論なども参考にすることによって考察を進めることができることが示唆される。

でも系統関係を検証する方法論である。各種言語の中に見られる明らかに特異な形式を抽出するには、周辺に分布するチベット語方言について十分に調査をしていなければ難しいということも、先のペマ語の分析で分かった点である。従来ペマ語の分析にヒャルチベット語を用いてこなかったことによって、ペマ語のもつ多くの形式が周辺のチベット語、特に九寨溝の方言とは非常に多くの共通性を持っていることは具体的には不明のままであった。ペマ語がチベット語の影響を強く受けてきた言語として知られてはいたが、その特徴がかなりの範囲でヒャルチベット語と共通することは、ここで明らかになったことの1つである¹¹²。

本論文の議論によって、今現在ある言語事実に対して説明を与えるのに他の分野の研究を必要とする段階まで、言語の形式と分布の面から疑問を提出できたということも1つの結果である。さらに借用語の分析によって、地域単位で言語分布をとらえることについての重要性が具体例を伴って明らかになり、川西走廊諸語の研究におけるチベット語方言の果たす役割が明確になった。

5.7 本章のまとめ

本章では、川西民族走廊に分布するチベット語方言について、蔵文対応形式と語形式という2つの観点から簡単な言語地図を作成し、各地点の方言の個別の特徴と全体的な分布の把握を同時に行った。また、そこで得られた地域的特徴といくつかの川西走廊諸語について、各種言語に見られるチベット語と共通する語形式について、借用をはじめとする関係について考察を加えた。

蔵文対応形式の言語地図と語形式の言語地図とを改めて比べた場合、大きな違いがあることに気がつく。蔵文対応形式は、その対応形式が極めて特異であったとしても、地域的には離れている複数の地点で共通しているものが見出せる。ところが語形式の場合、蔵文に一致しないという意味で特殊な形式は、ある特定の地域の方言にかたまって分布を見せるか唯一の方言という限定的な分布を見せる場合が多く、地域的に離れた地点で共通する形式を見出せるということは少ない。

このことは、特異な蔵文対応形式が類型的に似た傾向を見せる方言が相当近い系統関係を持っているかという予測に対して、否定的な結果が得られたことを示している。系統関係にあれば、その語形式についても特異性が共通に見られることが期待されるが、川西民族走廊全体を視野に入れると実際はそうではない傾向にあることが示された。このことは、本来方言形成上の歴史的要因が深く関わっているにもかかわらず歴史的関係に基づいた考察が行えるだけの準備が整っていなかった

¹¹²ただしペマ語がチベット語とどのような系統関係にあるかは、本論文の扱う範囲を超えており、触れないことにする。

ため、現在断定的な意見を述べることはできないが、特異な蔵文対応形式が何らかの理由によって異なる複数の方言に共通して生じた可能性が高く、それらがそもそも方言上の系統的な近さにあったという可能性よりも受け入れやすいと考えられる。そして、その特異な蔵文対応形式を生じさせた原因についても、これからの研究によって明らかにされなければならない。また、たとえば郷城県と丹巴県の方言に共通する特異な語形式をもつなどの例が見出せるが、このような少ない事例に注目してさらに多くの語について調査・地図化し、詳細に研究する必要性もある。

川西走廊諸語に含まれるチベット語来源借用語や地域共通形式の分析に当たっては、地域性の高い形式を取り入れていることが判明し、一定の借用・流入経路に方向性が見出せる。このことから、語彙の特徴というものは地域的な共通性という観点から見ることができ、今後の言語地図作成について微細な言語地図を作成する際の地域の切り出し方について一定の理解を得ることができた。

本章で行った地図化によって、方言の多様性を一度に理解でき、かつ分布の位置関係を明らかにしえたことが、ここでの結論となる。

第6章 歴史的 분석

6.1 歴史的 분석の方法

川西民族走廊に分布する諸言語について、過去にその言語を記録した文献資料は極めて少なく、諸言語の歴史的発展を跡づける作業は容易ではない。そのような状況の中、筆者は200年程度さかのぼった時期に記録された言語資料、すなわち丁種本《西番譯語》に注目し、それと現代語の関係を探ることを通じて言語の歴史を考えることにする。

《西番譯語》とは、明清代に作成された漢語と周辺域の諸民族の言語を対照した語彙集及び文例からなる《華夷譯語》の1つに数えられるものである。《華夷譯語》はその成立年代によって甲・乙・丙・丁の4種に分類される。そのうち丁種本《西番譯語》は、清朝の會同四譯館の成立（1748年）以後に作成された計740語からなる語彙集である。西田(1973:8-12, 18)によると、作成に必要な臨地調査は北京から派遣された調査員が行ったのではなく、各所轄の機関にアンケート用紙すなわち740語の語彙調査票を配布し、現地の担当者が記入したとされる。丁種本《西番譯語》には少なくとも9種類が存在し、西田・孫(1990)においてそれぞれの概要がつかめる。9種には馮蒸(1981)の分類による番号が与えられている。丁種本《西番譯語》が当時の口語の言語形式をよく伝えていることは、西田・孫(1990)の〈川四〉《白馬譯語》の研究によって明らかにされている。また、口語の形式が記録されること自体極めてまれなことであることから、この言語資料は十分議論の価値がある。

丁種本《西番譯語》にはその序に通用地域と考えられる地名が記されており、それを現代の地域と同定することによって現代の言語分布との対応関係を知ることができる。この対応関係から言語分布と各種《譯語》に記された語形式について、わずかとしても一定の関係が見出せる。ところが先行研究では、現代の諸言語の資料が不足し、十分な理解が得られていない部分もある。《白馬譯語》の研究では、現代のペマ語を出発点として考えている点が少なくない。もし現代チベット語方言の情報が存在すれば、それらが各種《譯語》《白馬譯語》の解明に有用であることは予測できる。そしてその方言資料は本論文に提示された地点について存在するのだから、先行研究より精確な口語との対応関係が明らかになることは十分に期待できる。

6.1.1 丁種本《西番譯語》

丁種本《西番譯語》の9種の名称と記録言語について一覧し、整理する。

番号	名称	記録言語
〈川一〉	《松潘譯語》	チベット語
〈川二〉	《象鼻高山譯語》	ペマ語/チベット語
〈川三〉	《嘉絨譯語》	ギャロン語
〈川四〉	《白馬譯語》	ペマ語
〈川五〉	《呂汝譯語》	リュズ語
〈川六〉	《木坪譯語》	チベット語
〈川七〉	《打箭爐譯語》	チベット語
〈川八〉	《多統譯語》	アルス語（ドス語）
〈川九〉	《木里譯語》	チベット語

以上に掲げた記録言語は、おおよそ細部まで判明しているものもあれば、見解が分かれるものも少なくない。以上の全てに触れている西田・孫(1990)でも、著者ごとに少しずつ見解が異なっている¹。

ここでは、丁種本《西番譯語》9種類のうち、チベット語を記録したと考えられる4つを取り出して考察の対象とする。その4つとは、〈川一〉《松潘譯語》、〈川六〉《木坪譯語》、〈川七〉《打箭爐譯語》、〈川九〉《木里譯語》で²、いずれも川西民族走廊の北から南にかけて分布するチベット語諸方言を記録しているが、詳細は研究されていない。筆者は、記録される言語がチベット語であると断定されることは、それが非チベット語ではないという程度の意味合いしか持っていないと考える。つまり、非チベット語を記録するものは、ペマ語であるとかドス語であるとか言語が特定されるのに比べて、チベット語についてはそれより細かく分類されていないということである。このように考える背景には、現代チベット語方言の多様性が大きく関わっている。丁種本《西番譯語》に記録される諸言語が分布する地域は、だいたい現代の四川省西部にあたる。この地域に分布するチベット語方言は、先の第4章、第5章の議論で明らかなように、他の地域に分布するものに比べて極めて複雑かつ多様である。その方言差異は、音体系と語彙形式をとってみれば、1言語に属することを疑うほどである。そのような多様な方言の一種が記録されていることになるのだから、それがどのチベット語方言に近い、あるいは系統関係にあるかを示さな

¹ 〈川二〉《象鼻高山譯語》はチベット語/非チベット語の間で見解が分かれている。

² 〈川二〉《象鼻高山譯語》は記録される語形式を見る限り、チベット語とペマ語の混交が起こった言語と考えられる。ここでは扱わない。現在、この言語の記録地域ではチベット語が話されているようである（劉輝強 2006）。

ければ、全体像まで解明できなくとも、記録言語が判明したとはいえないと考えるのである³。

これら丁種本《西番譯語》に記載される語の形式は、多かれ少なかれ現代に話される諸方言と関連があると考えられる。それぞれの《西番譯語》記録言語を個別に再構し、その結果をこれまでに議論してきたものとあわせ、言語地図上に示すことによって分布の変遷もしくは記録言語自体の方言特徴を明らかにすることができると考えられる。

ここで簡単に先行研究を整理すると、全般的な西田・孫(1990)では記録形式について踏み込んだ分析を行っているが、同書における議論ではチベット語か川西走廊諸語かといった言語の判別に関する結論を得るにとどまっている。記録言語が現代のどの変種(方言)と対応関係を得るのかといった細部の分析が行えなかったのもっとも大きな要因は、当時の方言に関する資料的な制約と考えられる。近年、各種言語の方言調査が進むにつれて徐々に方言形式と記録言語の対照研究が行われ、Ikeda(2006)の《呂汝譯語》、鈴木(forthcoming-c)の《木坪譯語》、鈴木(forthcoming-d)の《木里譯語》、鈴木博之(2006)の《木坪譯語》と《木里譯語》などが発表されている。これらの研究は、その他の主だった研究とは異なって、全面的な記録言語の再構を扱ってはいない。しかし、記録言語が確かに当時の口語形式を記録したものであって、地域性が現れていると結論されている。現段階での研究状況はこのようであるため、いずれにしてもさらなる研究が必要とされる状況にある。その一方、全体の再構を扱わなくとも見方によっては研究可能であるものと考えることができる。

なお、本論文で議論する丁種本《西番譯語》の底本は西田・孫(1990)の付録である『北京大学図書館本』の写真である。その中で同書の注意書きに、この写真の版には誤写が多いと述べてはいるが、その他の異本については、西田(1970)と西田・孫(1990)などに引用されている例以外は確認していない。全体的な再構や校訂を扱うものではないことから、議論に重大な支障をきたすとは考えていないからである⁴。実質本章での議論は、西田・孫(1990)が提示した特徴的な例の一部について、その再考となる。

³現に《松潘譯語》は西田・孫(1990)の中でも著者ごとに記録されている言語がカムチベット語かアムドチベット語か主張が異なっている。この状況で記録言語が判明したとは言いがたい。

⁴今後は特に『北京大学図書館本』のもととなった故宮本の文献調査を行う必要があり、その結果場合によっては以下に行う議論の細部を修正しなければならない可能性がある。

6.1.2 各種丁種本《西番譯語》の序文

以下に9種類の丁種本《西番譯語》の序文を紹介する。まず、『北京大学図書館本』をもとに原文を掲げる。ただし明らかな誤写などは修正している。

〈川一〉《松潘譯語》

四川松潘鎮松茂道鎮標中左右漳臘疊溪平番南坪等營松潘同知

各所轄包子寺拈右熱霧毛革麥雜蛇灣峩眉喜七布阿思洞泥巴元壩寒盼商巴
祈命口内羊崗大小姓松坪雲昌丟骨呷竹寺口外上下包坐上下勒凹上下作革
川柘谷爾壩雙則崇路谷漠作路生納班佑阿細合壩獨雜轄漫物藏熱當磨下甲
凹阿革鵲箇郎情上中下撒路上中下阿壩上中下郭羅克上中下羊崗上中下阿
樹小阿樹等西番字語皆同照依奉頒字書門類次序譯繕如左

〈川二〉《象鼻高山譯語》

四川松潘鎮松茂道龍安營龍安府

各所轄土知事薛維綱所管象鼻高山西番即吐蕃字語照依奉頒字書門類次序
譯繕如左

〈川三〉《嘉絨譯語》

四川松潘鎮松茂道威茂協右營直隸茂州汶川保縣

各所轄西番內除協標左營管轄茂州屬之靜州隴木岳希牟托沙壩水草坪竹木
坎長寧等處番民有語無字不造外所有協標右營管轄汶保兩縣屬之瓦寺雜谷
梭磨竹克箕大小金川沃日等西番字語皆同照依奉頒字書門類次序譯繕如左

〈川四〉《白馬譯語》

四川松潘鎮松茂道龍安營龍安府

各所轄水泉關土通判王沆并陽地隘長官司王沆分管白馬路一帶西番即吐蕃
字語照依奉頒字書門類次序譯繕如左

〈川五〉《呂汝譯語》

四川泰寧協建昌道協標左營雅州府

各所轄內除協標右營管轄清溪縣屬之大田即黎州松坪所管曲曲烏裸羅有語
無字不造外所有協標左營管轄之沈邊冷邊西番字語均同照依奉頒字書門類
次序譯繕如左

〈川六〉《木坪譯語》

四川泰寧協建昌道黎雅營雅州府

各所轄木坪即董卜韓胡宣慰司堅參囊康所管四十八寨一十八村西番字語均同照依奉頒字書門類次序譯繕如左

〈川七〉《打箭爐譯語》

四川泰寧協建昌道協標阜和營打箭爐同知

各所轄明正長河西魚通寧遠軍民宣慰使堅參德昌所管轄之革什咱綽斯甲巴底巴旺喇滾咱里木噶瓦七俄洛白桑惡熱上下八義少烏石作蘇策八哩籠上中渡他咳索窩籠惡拉上中下渣霸八桑木轆格窪卡甲那工弄吉增卡桑阿籠沙卡拉里八烏籠姆朱普供碟魯密東谷一十六百戶里塘巴塘瓦述十土司霍耳九土司束暑孔撒科則更平東撒德爾格上下革責雜谷嗎竹卡籠霸春科蒙噶結瞻對瓦述谷納林葱上納奪上下臨卡尙里郭宗雲多儀蓋桑隆石上下蘇阿上瞻對下瞻對字語俱與明正司相同照依奉頒字書門類次序譯繕如左

〈川八〉《多統譯語》

四川建昌鎮建昌道鎮標冕山嘉順二營寧遠府屬冕寧縣

各所轄大鹽井酥州苗出架州大村阿西熱郎瓦阿得橋中村三大枝糯白瓦小相嶺及窩卜罷顯擺貼瓦尾木朮凹等處西番語音與打箭爐口外諸番各別字本藏經照依奉頒字書門類次序譯繕如左

〈川九〉《木里譯語》

四川建昌鎮建昌道鎮標會鹽營寧遠府屬鹽源縣

各所轄木里馬喇鹽井衛瓜別古柏樹及中前後左右五所等各西番字語皆同照依奉頒字書門類次序譯繕如左

以上の序文に挙げられる地域の概略を、龔蔭 (1992) や各種《県誌》類を用いて現代の地名と対応する箇所が判明したものから推測し、地図上に範囲を示す。

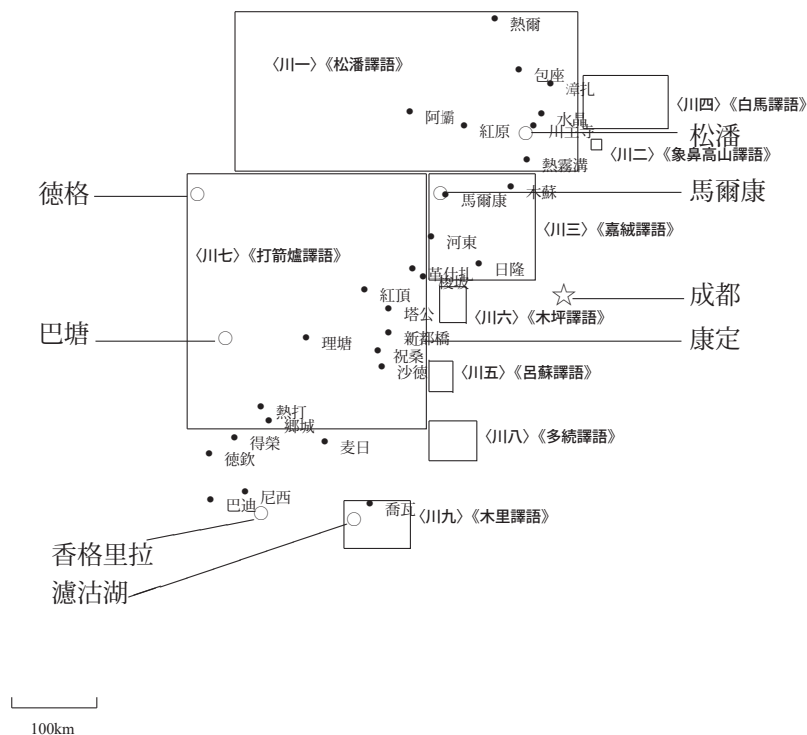


図 6.1: 丁種本《西番譯語》の序文に対応する概略地域

参考までに、現代の地名を添えておいた。

6.1.3 丁種本《西番譯語》記録言語の再構の方法

《西番譯語》の研究方法は、それがどういう目的を持って研究するかによって方法論に違いがあるのは当然であるが、記録される言語の形式を推定することを目的とする場合、《西番譯語》自体に記録される言語は漢字によって音写されたものであるから、これをまず言語資料として分析できる形すなわち当該言語の推定されうる音形式に変換する必要がある。

《西番譯語》の研究方法は、西田(1963)をはじめとし、同氏の一連の《西番譯語》に関する著作において述べられている。まず、記録される言語の再構という作業において、手順を簡潔に整理すると、以下のようになる。

1. 漢字音写に用いられた漢語の漢字音体系の再構
2. 再構した漢字音で記録対象言語の音写から再構形式を推定
3. 記録対象言語の親縁関係にある言語体系から漢字音写の意図を考察

4. 記録される語の再構と記録言語の音素体系の再構

以上に掲げた一連の作業において、丁種本を扱う西田(1973)および西田・孫(1990)は、漢字音体系の再構について漢字音を清代乾隆時代の北京音を用いることを妥当と判断し、便宜的に現代北京音で近似し、その音素体系で読むことを提唱している。

ただし西田・孫(1990)は《白馬譯語》に記録される形式の推定について、必ずしも上に示した一連の手順によらず、現代ペマ語を活用している。その背景には、ペマ語という新発見言語との関連での考察に加え、丁種本《西番譯語》の成立がそれほど時代的に古いものではなく、現代語からさかのぼって考えることに一定の妥当性があるためである⁵と考える。また西田・孫(1990)は、漢字音の推定についても音写漢字音を清代乾隆時代の北京音を用いることを妥当と判断してはいるが、実際のところ丁種本《西番譯語》の全体についての言及について漢字音の推定に現代北京音を用いて行い、また西田(1973)の《多統譯語》の再構作業においても同様の漢字音を推定して行っている。

ところが、先に述べたように、各《譯語》の作成に携わった、すなわちアンケート用紙に漢字を用いて音写を与えたであろう漢人が各管轄の土地の役人に任されているということが事実であったとするならば、漢字音を考える際に北京音を用いるには問題がある。調査が行われた当時、丁種本《西番譯語》が記録されていた地域で話されていた漢語は、おそらく現代の四川省一帯に話される西南官話の一種であろうと考えるのが妥当である。それゆえに、丁種本《西番譯語》に与えられる音写漢字音の音体系は、北京音ではなく当地の漢語すなわち西南官話音のほうがより近似しているはずである⁶。理想的には清代乾隆時代の西南官話音を用いるのがよいけれども、その体系的な資料はおそらく存在しないだろうから、現代西南官話音で近似することが求めうるもっともよい手段の1つになるだろう。

本論文では、漢字音の推定を現代西南官話の音素体系に基づいて行う。また、当該言語の音声実態についても重視し、変異音も考慮に入れる。基礎的な方言資料は、筆者が《西番譯語》に用いられる漢字の単字音について調査⁶したものを扱い、便宜的に表記法として楊時逢(1984)に言及される方言⁷の音韻表記方法を踏襲する。これはあくまでも表記法の問題であって、この方言の記録に基づいて漢字音を読むのではない。漢字音は1箇所の方言に特定するのは難しい上、200年程度のずれがある

⁵西田・孫(1990)においても、いくつかの丁種本《西番譯語》の漢字音写に西南官話音の特徴が見られるという結論を得ているものの、音写漢字の推定音の体系として一貫して北京音を採用している。

⁶ただし漢族を対象として行ったものではなく、チベット族の用いる漢語を調査対象としたものであることを断っておく。調査地点はチベット語方言調査を行った地点と異なるものはない。

⁷松潘方言もしくは懋功方言を基準に用いる。

ことから、漢字音は1つの体系の中で考えることが適切であるとはいえない。本稿では筆者の調査も含め1つの体系によることはせず、さまざまな可能性を想定して考える。ここまでの、上記の1.と2.の作業にあたる。

次に、記録言語であるチベット語の情報についてであるが、一般に蔵文の情報は、それが口語との乖離が激しいため、各《譯語》に記録される口語形式について十分な情報を伝えているとはいえない⁸。そのため、現代チベット語方言の情報がきわめて重要となる。それを本論文で言及してきた範囲のすべての方言資料を活用することになる⁹。要するに、現代語を援用する部分はすべて筆者の調査記録および音声分析に基づいて行われ、その精度は筆者の調査地点数に依存することになる。

また本論文では、依拠すべき漢語方言が不確定であるため、各地域で細かな対応を示す声調に関しては、再構を行うチベット語を含め扱わない。各《譯語》個別の再構の手続きは、《松潘譯語》と《木坪譯語》を例に、別に参考論文として議論したものを参照。以下では、再構の手続きに従って得られた推定形式の特徴の分析を扱う。

以下、《松潘譯語》《木坪譯語》《打箭爐譯語》《木里譯語》の4種について個別に議論していく。これら4つは、原則以上に述べた方法によって記録言語の形式を個別に推定し議論するが、それぞれの記録言語の性格によって細部は異なる。それを簡単に述べておく。

1. 《松潘譯語》

複数の現代の方言をもとに、《松潘譯語》に記録される語の分析と、一致する方言間の関係

2. 《木坪譯語》

《木坪譯語》に記録される漢字音写から記録言語の特徴をつかみ、その言語と現代の方言の関係の考察

3. 《打箭爐譯語》

《打箭爐譯語》に記録される特殊な形式を抽出し、それに相当する形式を現代の方言の中の例から説明

4. 《木里譯語》

《木里譯語》に記録される特殊な形式を抽出し、それに相当する形式を現代の方言の中の例から説明

⁸しかしながら、チベット語方言を対象とした丁種本《西番譯語》における蔵文が非標準的な形式を記録している場合、考察の対象となることもある。本章では、いくつかの語について触れることになる。

⁹場合によっては、川西走廊諸語におけるチベット語来源借用語の事例の活用も要する。また、この点が従来の研究と最も異なるところである。

6.2 《松潘譯語》

《松潘譯語》は鈴木(参考論文 2007)で再構の手順と形式を示した。《松潘譯語》には西田(1970)の研究もあるが、成立年代を乙種本と同時期であると誤ったために、漢字音の推定に時代差が見られるほか、北京音を利用する¹⁰などの問題が見られる。

《松潘譯語》の議論については、先に示した再構の手順によりつつも、独自の問題がある。特に問題の生じない、いわば単純な再構の手続きによって得られた記録言語の特徴が、現代の数種のしかも多様な方言の特徴と一致する点である。

ここで、Ketshal 方言、Zungchu 方言¹¹、Zhongu 方言、Askyirong 方言の特徴の異なる 4 つの方言を選んで、再構例と対照してみる。

蔵文	〈川一〉	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askyirong	語義
'bab	保*bɔ	°mbɔw	mbəp	mbi	mbaʔ	落ちる
zla ba	雜瓦*Tsa wa	fi dzaa	fi dza	dɛ wɛ	°fi tsa:	月
spyang ku	邦谷*pan ku	°htɕaŋ ɲgu	hfaŋ ɲgu	sɛ ŋgə	hpoŋ kʰu	狼
bzhi	日*zə	wɣə	zə	zə	wɣə	4
brgyad	吉*Tɕeʔ	°fi dʒeʔ	fi dʒet	dze	°wɕiʔ	8

《松潘譯語》に記録される形式に対して、現代諸方言に一致するものが多く確認されよう。しかし、譯語の形式はただ 1 つの方言に一致しているわけではない。上の表から、《松潘譯語》の形式に一致する可能性の高いもののみを書き出してみると、より明瞭になる。

蔵文	〈川一〉	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askyirong	語義
'bab	*bɔ	°mbɔw			mbaʔ	落ちる
zla ba	*Tsa wa	fi dzaa	fi dza		°fi tsa:	月
spyang ku	*pan ku				hpoŋ kʰu	狼
bzhi	*zə		zə	zə		4
brgyad	*Tɕeʔ	°fi dʒeʔ	fi dʒet		°wɕiʔ	8

以上に挙げた 4 種類の現代語は使用地点とそれぞれの音韻特徴が決して近いものでないことは本論文第 4 章および第 5 章によって明らかになったが、注意が必要なのはいずれかの母語話者が他の方言を知っていることはむしろまれであるということである。にもかかわらず《松潘譯語》に記録される語形は、それぞれ異なる方言と一致して、現代の方言のいずれかに一致を見ないという状況を呈している。

¹⁰乙種本は北京で四譯館の役人の手によって作成されたと考えられていることに由来する。

¹¹Zungchu 方言は松潘県内において共通語的性格を持つ変種で、アムドチベット語の一種である。この変種を母語（多くはヒャルチベット語）と併用できる話者もいる。

《松潘譯語》18世紀松潘チベット語は、確かに上に記したように語形が複数の方言の形式に対応しており、その立場から見る限り記録言語における方言が現代に伝えられる数種の方言の混交があった可能性を疑わざるを得ない。この点を踏まえつつ、分析していく必要がある。

以下の議論で主として参考にする現代チベット語方言は、Ketshal 方言 (Sh)、Askirong 方言 (As)、Zungchu 方言 (Zu)、Zhongu 方言 (Zh)、Thangskya 方言 (Th)、rNgawa 方言 (rN)、dMarthang 方言 (dM) とする。() 内は以下で用いる略号である。

6.2.1 《松潘譯語》記録言語が示す音韻特徴

6.2.1.1 蔵文 sh/zh 対応音

再構する際に参考とした現代諸方言のうち、その大部分は Sharkhog 方言もしくは Askirong 方言である。その状況の中で、そり舌摩擦音音素については Zungchu 方言もしくは Zhongu 方言の事例が再構の参考になった。この方が漢字音との対応を得やすいからであるが、特にこの音素のみが後者の方言群の事例と一致している。

この音素に対応する形式が各方言でどの程度異なっているか、例をあげると以下のようなものである。

蔵文	〈川一〉	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askirong	語義
sha	殺*ʂa	°fj ^h a	ʂ ^h a	ʂɐ	x ^h a	肉
bzhi	日*zə	wɣə	zə	zə	wɣə	4

「4」の例のように、有声そり舌摩擦音に対応する蔵文は zh で、その Ketshal 方言・Askirong 方言の対応形式は軟口蓋摩擦音となっている。この音声を音写するのに日母の漢字を当てるのは方言音を考慮しても困難であるから、《松潘譯語》の記録形式は確かに Zungchu 方言もしくは Zhongu 方言に類する方言の音形式を記録していると考えられる。

ほかの可能性として、zh 対応音が前部硬口蓋摩擦音であったというのが考えられるが、この音声を持っているのは rNgawa 方言や dMarthang 方言など、松潘から西方に離れた地域に分布するアムドチベット語に見られるだけであるのが問題であろう。ところが、蔵文 sh, zh を持つすべての語がそり舌音として記録されているわけではなく、漢字音で前部硬口蓋摩擦音として記録される例も存在するが、割合としては少数である。たとえば、次のような例がある。

蔵文	〈川一〉	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askirong	語義
zhwa	轄*zə	°xwa ɳgo	za ɳgo	zɐ qo	ɣā ɳgo	帽子
zha nye	押念*zə ɳe	ɣa ɳe	?	zɐ ji	ɣa ɳe	錫・鉛

これらの例は、漢字音から分かるように、そり舌音が音写に現れていないといえる。漢字音に忠実に読んだ場合、この形式は現代 rNgawa 方言や dMarthang 方言の例と似ており、対応する方言としてはやや異例であるが、まったく存在しない形式を示しているわけではない。

しかしここにもう 1 つの理解できる解釈が存在する。蔵文との対応を重視して蔵文 sh, zh にはそり舌音が当たると考えた場合、次の事実を考慮することもできる。以上に示した漢字音で前部硬口蓋摩擦音として記録されるものをよく見ると、母音が -(i)a で終わっている例に限られることが分かる。このとき za という形式に対応する漢字が存在しないことから、実際のチベット語音を正確に音写できず、声母の一致をあきらめ近似音を当てたという可能性である。

6.2.1.2 音節末の鼻音の現れ

《松潘譯語》の漢字音写形式と蔵文を比べたとき、音節末に鼻音を伴うと期待されるところに鼻音韻尾をもたない漢字が当てられ、またその逆も見られる。いずれもある地点の現代の口語形式との一致を見る。

蔵文	〈川一〉/再構	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askirong	語義
nya	良 *ṇan	^{◌m} ṇā	?	ɲe	[◌] ṇa	魚
nags tshal	郎擦 *nan ts ^h a	[◌] nāɬ ts ^h el	?	na ^h tʃe	naɬ [◌] ts ^h el	森

「魚」の例はチベット文語では末尾に鼻音を持たないけれども、漢字音写は Ketshal 方言の例のような鼻母音を反映している可能性が高い。「森」の例は Ketshal 方言とも一致する形式と考えられる¹²。いずれも口語音によく対応している。

以上と逆の例は以下のようなものである。

蔵文	〈川一〉/再構	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askirong	語義
snying rjes	利吉 *ṇi Tce	ṇiɲ [◌] dzi	?	?	^{◌h} ṇi [◌] ɬci	哀れな
sems	色 *se	[◌] ṇi	s ^h ē	se	s ^h em	心

「哀れな」の漢字音写には第 1 音節末に鼻音が現れておらず確かに文語の形式とは一致しないが、Askirong 方言の形式と一致して、やはり口語形式が《松潘譯語》に反映されていると考えてよい。「心」の例は《松潘譯語》全体では「桑」で音写される例が多く、Ketshal 方言でも s^hā という形式がある。以上に掲げたものは例外的

¹² 「森」の場合、カムチベット語でも第 2 音節前に前鼻音が現れるものがある。いずれも蔵文には当てはまらない。

なものであるが、Zhongu 方言に一致すると見える。《松潘譯語》において sen や senj を表せる漢字は存在した¹³。このことから、s^hẽ や s^hem を音写することは可能であったと考える。よって、漢字の誤写などの要因を設定しなくても口語の中に対応例を持っていたと推断する。

藏文の音節末鼻音が脱落するのは、Zhongu 方言では規則的に起こっている一方、Askyirong 方言では部分的に観察される。《松潘譯語》では後者の方言のように、全体ではなく部分的に以上の対応が記録されていることから、脱落に規則性は見られない。この規則性のなさが《松潘譯語》の中にも反映されていると見ることもできる。

6.2.1.3 前鼻音の現れ

現代四川漢語音で、たとえば漢字音 m を [m^b-] と発音しうる状況を反映し、いずれもチベット語の前鼻音を表したと推定できる例がある。

音写漢字	漢字音	推定音	語義	藏文	対応する現代語形式
木耳旦	mo ɤ̃ tā	* ^N bol tan	布団	'bol rtan	?
論	nən	* ^N dən	読む	'don	ⁿ dẽ (Sh)
諾	no	* ^N qo	行く	'gro	ⁿ qo / ⁿ dzo (rN)
惡	ŋo	* ^N go	頭	mgo	^o ŋo (Sh)
利旦	ni tā	* ^N dzi ten	世界	'jig rten	?

漢字音 ŋ については [ŋ^o-] とは読まない人もいるが、筆者の観察では [ŋ^o-] と発音する人もいることから、漢語の中でも数種類の発音上の異音があったものと考えられる。が、m や n の対応音のからの類推と考える。

6.2.2 《松潘譯語》記録言語が示す語彙特徴

《松潘譯語》の中には、松潘周辺に分布する特定の方言にのみ一致する形式が記録されている。

藏文	〈川一〉	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askyirong	語義
spyang ku	邦谷*pan ku	^o htɕaŋ ŋgu	^h faŋ ŋgu	sɛ ⁿ gə	^h poŋ k ^h u	狼
bzhi	日*zə	wɣə	zə	zə	^w ɣə	4
sprin	升*ʂən	^o ʂi	^ɸ fən	ʂe	^o hɕa	雲

また《松潘譯語》の中には、松潘周辺の種々の現代方言の中にも類似の形式を見出しがたいものが現れる。

¹³例えば「生革*sɛn ge：ライオン、藏文 sɛn ge」などがある。

蔵文	〈川一〉	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askyirong	語義
mig	迷*mi?	°niʃ	ᶞnik	ɛɲi	°niʃ	目
wa	瓦*wa	fiʁa	fiʁa	ɣe	wɣa:	狐
skra	𑄧*ta	°ɕʰah	ᶞtɕa	ᶞtʃe ʰpə	ɕʰa	髪

《松潘譯語》の形式は、おおよそ現代松潘周辺のいずれかのチベット語方言と対応しているが、「目」や「狐」「髪」はこれだけでは対応していないように見える。

「目」は同一形態素を含む *mig spu* の Ketshal 方言 °mii ʰpuh の第 1 音節に対応する形式が存在するため、過去に「目」が *mi? であった可能性は確認できる¹⁴。

「狐」の場合、いずれの現代語も漢字で適切に音写できるものではない。/fiʁ-/はアムドチベット語全般に見られる形式であるが、Zhongu 方言や Askyirong 方言の /ɣ-/ を含む形式が見られるので、後者が以前の松潘のチベット語方言の形式であった可能性が高い。しかし一方 dMarthang 方言では wɛwa であり、多分に円唇性を伴っているものである。この場合は、漢字音写の項目との対応を積極的に考えることができる。いずれにしても、/fiʁ-/や/ɣ-/は漢字音では/w-/が近似形式として対応していると推定できるだろう。

《松潘譯語》において、同一形態素と判断できる要素に均一に漢字音写が与えられていないことがある。ここでは形態素を分類基準に、《松潘譯語》記録言語の性格を議論する。

もっとも問題を呈するのは、自称である「チベット」に対応する形態素である。《松潘譯語》には 6 種の項目について、以下のような漢字音写が与えられている¹⁵。

項目	漢字音写	漢字音	仮の推定音	蔵文
番字	播夷	po i	*Po ji	bod jig
生番	白革	pe ke	*Peʔ Keʔ	bod rgod
西番	外密	uei mie	*we mi	bod mi
番僧	白色磨	pe se mo	*Peʔ se mo	bod ser mo
番漢	坡甲	pʰo tɕia	*pʰo Tɕa	bod rgya
番人	坡墨	pʰo me	*pʰo mə	bod mi

語頭という同じ環境において初頭音に /pʰ-, p-, w-/ の 3 形式が並列するのは、チベット語の 1 つの方言としては奇妙である。しかし、松潘の現代諸方言を対照すると、

¹⁴アムドチベット語に一般に見られる /ɲ-/ の形式はおそらく古蔵文 *dmyig* と対応し、*mig* とは異なるものである。/m-/ から /ɲ-/ への変化も想定できるが、語彙形式の方言間での交替というように考えることもできる。

¹⁵以下の 6 つの語の意味は、具体的に何を指しているのか明言しがたい。仮に訳すとすれば、次のようになろうか。「番字」はチベット文字、「番僧」はチベット（仏教）僧、「番漢」はチベット人と漢人、残りの「生番」「西番」「番人」はいずれもチベット人を指していると考えられるが、どのような違いがあるかは分からない。

以下のようになる。

蔵文	Ketshal	Zungchu	Zhongu	Askyirong	rNgawa	dMarthang
<i>bod</i>	<i>pəʔ</i>	<i>wot</i>	<i>pi</i>	<i>beʔ</i>	<i>wot</i>	<i>wot</i>

このように現代諸方言では、以上のように初頭音が *p-* のものと *w-* のものが共存していることが分かる。このことから、**Poʔ* や **Peʔ*、**we* と近似する形式は現代語にも見出せる。しかし期待される再構形 **p^ho* は中央チベット語の特徴を示しており、この地域に存在する方言とは考えられにくい¹⁶。

いずれにしても、ある 1 つの方言形式で処理できないため、方言の混在を考えなければならない。現代語の例を援用して、再構形を再度推定する。

項目	漢字音写	推定音	参考にする方言
番字	播夷	<i>*po ji</i>	<i>pəʔ jiʃ</i> (Sh)
生番	白革	<i>*peʔ geʔ/*beʔ keʔ</i>	<i>peʔ</i> (Th), <i>beʔ</i> (As)
西番	外密	<i>*we mi</i>	<i>wot</i> (rN, Zu)
番僧	白色磨	<i>*peʔ se mo/*beʔ se mo</i>	<i>peʔ</i> (Th), <i>beʔ</i> (As)
番漢	坡甲	<i>*bo tɕa</i>	<i>beʔ</i> [°] <i>tɕa</i> (As)
番人	坡墨	<i>*bo mə</i>	<i>beʔ</i> (As)

以上の例から、現代アムドチベット語の特徴的な形式の 1 つである蔵文初頭子音 *b* に対して *w-* が記録されていることが分かる。そのため《松潘譯語》成立期にすでに **b->w-* の変化を経ていたことが指摘できる。

poʔ と *woʔ* の形式が個人の言語体系の中に並存する方言は、現代で甘孜州康定県塔公郷¹⁷ただ 1 地点ではあるが実例が確認される（鈴木 2006c）。この地点が言語接触の激しい地域であるという点では当時の松潘と似ているため、並存という現象自体は十分可能性がある。これが《松潘譯語》成立期の言語特徴について非常に重要な情報を伝えるものとして理解することができる。

さて、もう 2 例問題となる語「靴」と「1」を示す。

音写漢字	漢字音	推定音	語義	蔵文	対応する現代語形式
項	<i>xaŋ</i>	<i>*xan</i>	靴	<i>lham</i>	[°] <i>xã</i> (Sh)
濫卷	<i>nã tɕyã</i>	<i>*lan TɕON</i>	靴を履く	<i>lham gyon</i>	[°] <i>lam</i> (Sh)
記	<i>tɕi</i>	<i>*tɕi</i>	1	<i>gcig</i>	[°] <i>tɕiʃ</i> (Sh), ^h <i>tɕik</i> (Zu)
納治	<i>na tɕi</i>	<i>*na tsi</i>	1 件	<i>sna gcig</i>	[°] <i>tsiʃ</i> (Ta)

¹⁶まず有気音の漢字が誤写されている可能性がある。これが誤写であるなら、記載される漢字「坡」は字形の類推から「波 *po*」である可能性がある。このときの再構形は **po* と推定できる。また、先に考察したように、有声音の息漏れ音としての性質を音写したということが考えられ、そのときは推定形は **bo* とする。

¹⁷牧区、農区、スタウ、ムニャ、ギャロンの境界に位置する。

「靴」の例では、《松潘譯語》に2種類の形態が記録されていると解さなければ説明できない。まず、「靴」の初頭子音を/x-/といった形式で持つのは、松潘周辺のチベット語方言では広く見られる。ただし、藏文 lh- の対応音は多くが l- となり（例：「神」 *lha* : la、*lho* : lo）、「靴」の形式が例外的対応を見せていることは共時的事実であるから、*laN という形式と混在していた可能性はあるだろう。実際 Ketshal 方言では、上のように「靴」という名詞は /^oxã/ であるが、「靴屋」(*lham bzo ba*) では /^olam ^wzo wa/ となって、第1音節の形態素は文語では共通であるが、口語では異なる形式が対応している。

「1」の場合、松潘周辺のチベット語方言の中でも初頭子音に tɕ を含むものと ts を含むものの両方があり、非常に複雑な分布を見せる。《松潘譯語》のうち「1件」を意味する方に用いられる形式がチベット語としては有標であって、その形式が記録されていることにまず注目できるが、両形式が混在して記録されていることから、何らかの使い分けがなされていたのかは不明であるとしても2形態の並存が確認できる。

6.2.3 現代方言における分布

ここでは、先に見たいいくつかの《松潘譯語》に記録される語形式を中心として、それを取り巻く環境にある地域の現代のチベット語方言形式を第5章で行ったように、地図化して分布を視覚化して示す。

扱う語は以下のものとする。

- 「狼」《松潘譯語》*paN ku
- 「4」《松潘譯語》*zɕ
- 「帽子」《松潘譯語》*ɕa
- 「チベット」《松潘譯語》*po, *pe, *we

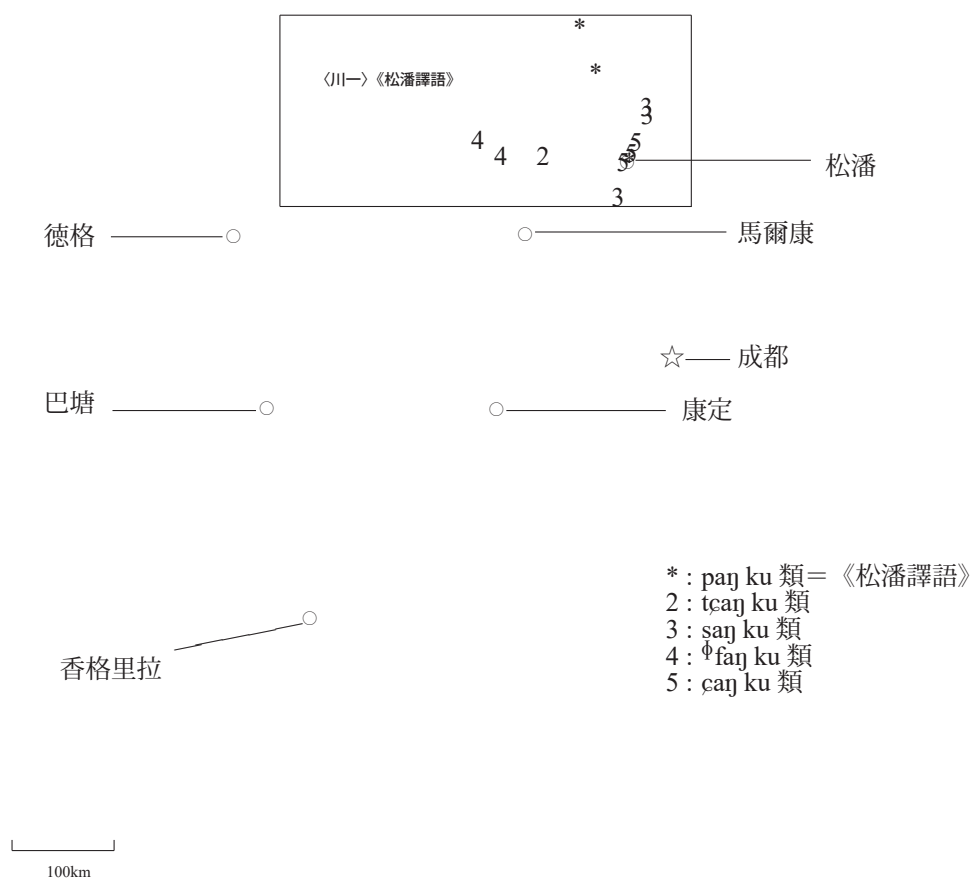


図 6.2: 「狼」の語形式の分布図

《松潘譯語》に一致する形式は、松潘から北に離れた地域に点在するが、松潘の近隣（十里郷大屯村）でも用いる。

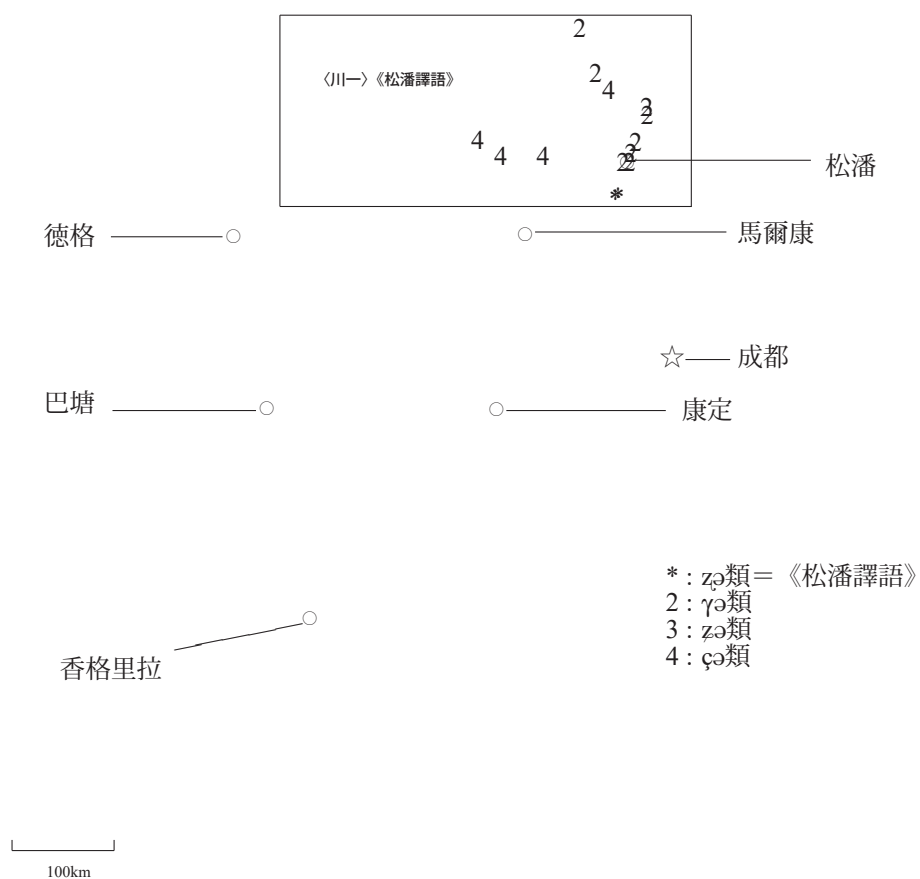


図 6.3: 「4」の語形式の分布図

《松潘譯語》に一致するのは、熱務溝の方言以外確認されない。

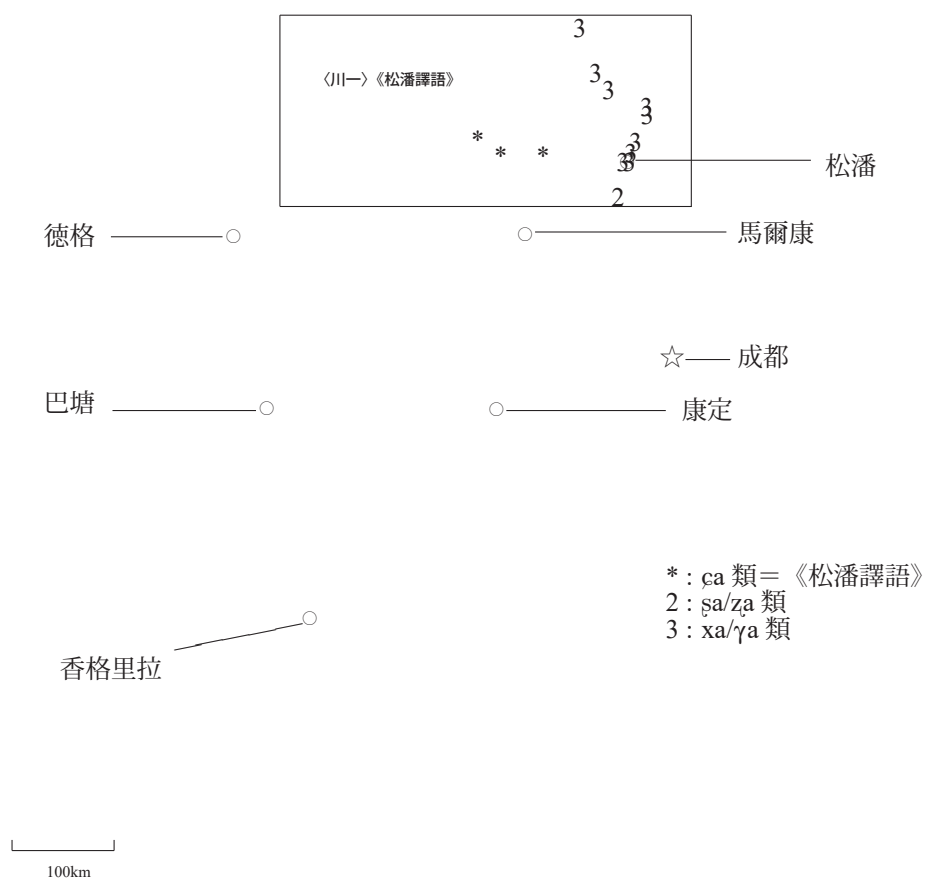


図 6.4: 「帽子」の語形式の分布図

《松潘譯語》に一致するのは、松潘から西に離れた地域に分布するアムドチベット語以外確認されない。

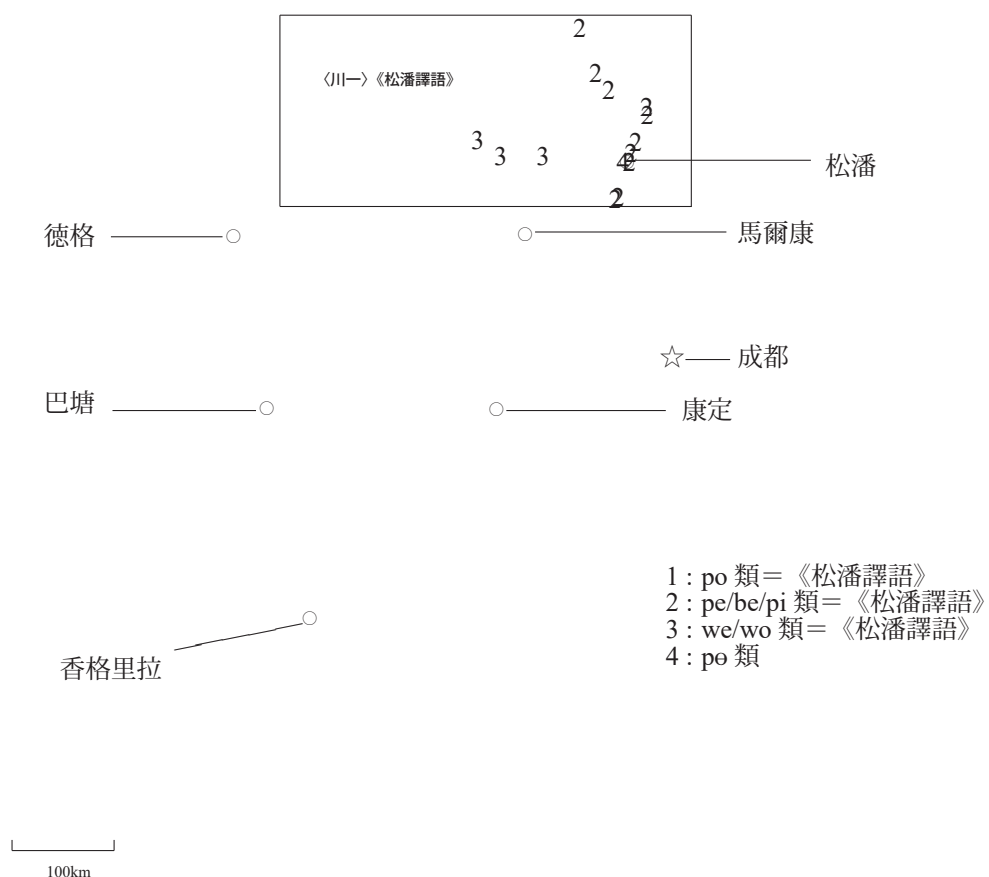


図 6.5: 「チベット」の語形式の分布図

《松潘譯語》に複数の語形式が記録されているが、現代でもなおその複数の形式に一致する方言が分布している。ただし、*po に相当する方言は見当たらない。

6.3 《木坪譯語》

《木坪譯語》は鈴木(参考論文 2007)で再構の手順と形式を示した。本節の内容は鈴木(forthcoming-c)と一部重なる。

ここでは、参考とする現代チベット語方言として、主に sProsnang 方言(sP)、Sogpho 方言(So)、dGudzong 方言(dG)の3種を用いる。

6.3.1 《木坪譯語》記録言語が示す音韻特徴

《木坪譯語》に記録される形式のうち、音写漢字と蔵文の対応関係のみに基づいて再構される形式について、筆者のチベット語方言の一次資料から、方言の特徴が極めてよく現れていると判断できる箇所として以下の点に注目する。

6.3.1.1 蔵文-a#/-a' 対応形式

蔵文-a#または-a'で、かつ語末に来る場合、oで対応するものがある。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
可 k ^h o	kha	*k ^h o	口
灼 t ^ʃ o	skra	*t ^ʃ o	髪
索 so	sa	*so	地
莫 mo	dma'	*mo	低い

《木坪譯語》には蔵文-a#または-a'に対して*-oが再構できる例が複数ある。現代諸方言においてこの対応に類似に対応を見せるのは、「二十四村話」と呼ばれる丹巴県のカムチベット語(Suzuki 2005b)、および郷城県一帯のカムチベット語など、局地的な方言に限定される。丹巴県は《木坪譯語》の序文に記される地域の西隣である。以下に丹巴県のSogpho方言、郷県県のSagong方言、丹巴県の南西に接する地域で用いられるLhagang方言、Rangakha方言から2例対照する。

川六/再構	Sogpho	Sagong	Lhagang	Rangakha	語義
*so	ˈs ^h o	ˉs ^h o	ˈs ^h a	ˉs ^h a	地
*t ^ʃ o	ˈh ^h t ^ʃ o	ˉh ^h t ^ʃ o	ˈh ^h ta	ˈh ^h ta	髪

以上の対応を持つ方言の分布と《木坪譯語》の序文を比べた場合、「二十四村話」に酷似する特徴を記録したといえる。

6.3.1.2 蔵文 Py 対応形式

蔵文 Py に対して、一律の対応関係を得ることはできない。
以下のように、歯茎破擦音に対応する例が複数確認される。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
初補 ts ^h u pu	phyug po	*ts ^h u pu	裕福な
子呂 tsĩ nyi	byu ru	*tsə ru	珊瑚
莫雜 mo tsa	rma bya	*mo tsa	孔雀

異なる対応の例としては、以下のようなものがある。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
別 pie	bya	*pje	鶏
師木 sī mo	byi ma	*sə mo	砂

この形式が、《木坪譯語》に複数記録される歯茎破擦音の形式との対応をもつ現代諸方言は非常に限られ、現在のところ松潘県のチベット語 (Sun 2003b) と丹巴県のカムチベット語においてのみ確認される。たとえば Sogpho 方言で「鶏」'Ptso (蔵文 *bya*)、「開ける」'Ptshĩ (蔵文 *phye*) などがあげられる。

そのほか、ダパ語における一部のチベット語来源借用語がこの対応をする。たとえば、《木坪譯語》の「珊瑚」の再構形式 *tsə ru に近い形式は、ダパ語 Ngwirdei 方言の 'Ptso rΛ に酷似する。

6.3.1.3 蔵文初頭子音 C 対応形式

蔵文 c-, ch-, j-には、多くそり舌音が対応する。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
出 ts ^h o	chu	*t ^h ʁ	水
諸 tsu	bcu	*tʉ	10

漢字ではそり舌閉鎖音と同破擦音は書き分けられない。ここでは便宜的に現代チベット語方言に多く見られるそり舌閉鎖音を再構形式として与える。この蔵文の形式にそり舌音が現れるのは、全体的には香格里拉県のチベット語に見られるが、丹巴県の sProsnang 方言にも対応関係がある。以下に sProsnang 方言、Sogpho 方言、香格里拉県の Nyishe 方言の形式について対比する。

川六/再構	sProsnang	Sogpho	Nyishe	語義
*t ^h ɣ	ṭṣ ^h u	ṭṣ ^h l	ṭṣ ^h u	水
*tu	ṭṣu	ṭṣu	ṭṣə	10

以上の対応を持つ方言の分布と《木坪譯語》の序文を比べた場合、「二十四村話」に酷似する特徴を記録したといえる。

6.3.1.4 蔵文 sh/zh 対応形式

蔵文 sh-, zh-には、多くそり舌音が対応する。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
説 so	shog	*so	来る
日 zṭ	bzhi	*zə	4

この蔵文の形式にそり舌音が現れるのは、全体的には香格里拉県や松潘県のチベット語などに見られるほか、丹巴県のカムチベット語にも一部の語で対応関係がある。以下に Sogpho 方言、香格里拉県の Nyishe 方言、松潘県の Zhongu 方言、Lhagang 方言、Rangakha 方言から 2 例対照する。

川六/再構	Sogpho	Nyishe	Zhongu	Lhagang	Rangakha	語義
*so	ṣ ^h oʔ	ṣ ^h oʔ	xu	ṣ ^h oʔ	ṣ ^h oʔ	来る
*zə	ṣ ^h zṭ	ṣ ^h zə	zə	ṣ ^h zə	ṣ ^h zə	4

以上の対応を持つ方言の分布と《木坪譯語》の序文を比べた場合、「二十四村話」に酷似する特徴を記録したといえる。

6.3.1.5 蔵文足字 r 対応形式

蔵文足字 r 対応形式が、実際に r を含む子音連続を構成していたことを示す例が存在する。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
不里 pu ni	bri	*pri	書く
撥柳午 po niəu u	spre'u	*pru wu	猿
崩耳 pən ə	sprin	*prən	雲

《木坪譯語》では蔵文 Pr-に対して r を含む口語形式が記録されている。このような形式は、現在のところ確認された限り「二十四村話」の sProsnang 方言にのみ見

られる特徴である。他の方言では広くそり舌音が対応し、《木坪譯語》にも蔵文 Pr- の中にもそり舌音で現れている例があり、蔵文 Kr-, Tr-の対応形式は基本的にそり舌音として記録されている。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
紙葛 tʂi ko	bri sku	*tə ky	紙製の像
赤瓦 tʂi ua	phreng ba	*tʰə wa	数珠
主 tʂu	gro	*tu	麦
止 tʂi	'dre	*qi	鬼

蔵文 Pr-に対してそり舌閉鎖音やわたり音に r を含む形式で対応している中で、異なった対応を示している例もある。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義
不嘗 pu tʂʰaŋ	brang	*pʰaŋ	胸

この形式は、現代 Sogpho 方言などが示しているように、初頭子音が子音連続で現れている。その現れの対応と比較することで、この例の漢字音写は明確に初頭に両唇閉鎖音を伴う子音連続を音写していると推定できる。

6.3.1.6 蔵文摩擦音字の有声性

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
攪 tɕyo	zab	*zow	深い	'soʔ / 'mə zoʔ (So)

「深い」の例では、漢字音の声母と韻母の組み合わせの制限から有声歯茎摩擦音を表すのに前部硬口蓋破擦音を用いたと考える¹⁸。現代語では「深い」という意味で蔵文 zab 対応形式を用い、'soʔ というが、否定形（「浅い」の意）では'mə zoʔ のように有声化する。《木坪譯語》の記録言語では常に有声音が現れていたものと推定される。

6.3.1.7 漢字の鼻音声母を用いて表される子音連続

四川漢語の鼻音声母の中で特徴的なのは/n/で、普通話の/l/と/n/の2つが/n/に合流している。そして、当該方言における/n/の音声実現には [n] と [l] の両者が含まれ

¹⁸四川漢語は一般に無声閉鎖/破擦音は有声性の高いものであることが関連していると考えられる。

る。音写漢字との関連で考えると、これらの音声的変異は当然考慮されなければならない。

ここでは、再構されうる《木坪譯語》の記録言語の形式をあげる。再構の詳細な手続きは鈴木(参考論文 2007)を参照。現代諸方言も添えて示す。

まず、前鼻音つきの例をあげる。その際、西田・孫(1990)の示した再構形式を添えられるものは添え、ここでの再構結果との異なりを示す。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫(1990)
訥 ne	'don	* ^N de	読む	^ɳ de: (sP)	
裸 no	mda'	* ^N do	矢	^ɳ do (dG)	*lo
列 nie	'bras	* ^N de	米	^ɳ di: (So)	*re
溜 niəu	'brug	* ^N du	雷	^ɳ duɣ (So)	*riu
莫 mo	'bo	* ^N bo	斗		
俄班 go pan	mgo dpon	* ^N go paN	頭目		
業掌 nie tɕ ^h ən	'ja' mtshon	* ^N dze t ^h ən	虹	^ɳ dzaŋi	
虐 nyo	mgyog	* ^N dzo	急ぐ	^ɳ dzo: (sP)	

以上に与えられた推定形式は、現代チベット語の形式ともよく合うものが多く、妥当性を得られるものと考ええる。西田・孫(1990)では、おそらく北京音を用い現代チベット語の情報がないまま推定を行って特別な形式が見られるとするが、そのような特別な形式を設定する必要性は見られない。

また、以下の例は初頭の3子音連続を示しうる。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫(1990)
木耳 mo ɤ	sbrul	* ^N brə	蛇	^ɳ di: (So)	*mul

この例の第2の漢字「耳」は、可能性として語末の*-lを表した可能性があるが、蔵文との対応関係において、足字rが脱落する例が《木坪譯語》の例の中に見当たらないため、その平行性を重視してわたり音*-r-を再構した。このとき「蛇」の蔵文には前鼻音が存在しないけれども、地域は違うがrMachu方言(周毛草 2003)にmdzəl, rNgawa方言にも^mdu という口語形式が存在するため、複数の方言で前鼻音が存在していることから、《木坪譯語》に記録される方言にも鼻音要素が存在したかも知れない。

ところが、決して前鼻音が期待されないところにも鼻音声母の漢字で音写されている場合がある。たとえば「石」に対して「魯 no」(蔵文 rdo)、「蜂蜜」に対して「洛濟 no tɕi」(蔵文 sbrang rtsi) などである。これらを筆者は以下のように考える。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
魯 no	rdo	* ^H do	石	^ʰ də ^ʰ da (So)
洛濟 no tci	sbrang rtsi	* ^H qo tsi	蜂蜜	^ʰ qō ^h tsə (dG)
龍莫 noŋ mo	sdong po	* ^H doN bo	木	^ʰ çĩ p ^h ũ (So)
業 nie	brgyad	* ^H dze	8	^ʰ dzaʔ (So)

再構形式には前鼻音ではなく、前気音を推定した。現代のカムチベット語では、以上の語の初頭に前気音を伴うものが数多くある。前気音も前鼻音と同様、閉鎖音の前に継続的な声帯振動があり、また、有声音に先行する前鼻音と前気音が入れ替わる現象がいくつかのチベット語方言で確認されている。この点に着目して、2つの可能性が指摘できる。1つは、《木坪譯語》記録言語の側で前気音と前鼻音の発音上の混同が起こったこと、もう1つは音写者の漢語の体系で前気音と前鼻音の弁別ができず、前気音を前鼻音と解釈してしまったことである。いずれにせよ前気音は漢語の音体系で音写できる音声ではないと考えられるから、この推定は蔵文と現代チベット語方言の情報による必要がある。

前気音と前鼻音のゆれについては、以下の例に確認できる。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
喇瓦 na ua	zla ba	(a) * ^N da wa, * ^H da wa	月	^ʰ da ŋō (So)
		(b) * ^l la wa, * ^N la wa		^ʰ la wa (Sagong)

この「月」については、各種方言を見ると多様が形式が現れ、その初頭子音は/d, ^ʰd, ⁿd, l, ⁿl/ であるものが確認されているため、《木坪譯語》に記録される方言の細部まで検討した上でいずれの再構形式が妥当であるか判断しなければならない。なお、Sogpho 方言および dGudzung 方言では、前気音つきの有声閉鎖音が現れている。

6.3.2 《木坪譯語》記録言語が示す語彙特徴

《木坪譯語》に記録される蔵文に一致しない口語形式を反映している形式は、ここで扱う現代チベット語方言に受け継がれている場合はそれが再構の大きな根拠になるが、もはや用いられていない形式の場合、音写で表そうとした形式について、ここでは扱っていない方言での事例など、さまざまな可能性を想定しつつ推定を試みる必要がある。

ここでは、現段階で解決しうるものとして、現代 Sogpho 方言、dGudzung 方言、sProsnang 方言にみられる形式に基づいて再構形式を推定できる例の語彙特徴について述べる。

まず、蔵文に一致する形式が記録されているが語義が一致せず、口語の語義に一致する例である。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
哈巴 xa pa	lhags pa	*la pa	霜	ḷa: βə (sP)

蔵文 *lhags pa* の文語での語義は「風」¹⁹であるが、現代の丹巴県の方言では一律に「霜」という語義で用いられている。《木坪譯語》の形式は語義の面で口語に一致を見せているといえる。

次に示すのは、蔵文と漢字音写の示している語が別のものである。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
乳耳目 zo ʁ zī	gru bzhi	*zʁ zə	四角い	

上例の場合、再構形式の参考にしたのは《木坪譯語》に記録されるものと異なる蔵文形式 *zur bzhi* であったと考える。この蔵文形式を、先に考察した *z- と *z_l- の再構の手続きを参照し、*zʁ zə を推定することができる²⁰。

次の例も、蔵文と漢字音写の示している語が別のものであると見られるが、対応形式がチベット語の口語形式にのみ見られる。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
呢麻納 ni ma na	nyi ma nub	*ni ma la	日が沈む	ʼni mo ʼʔma laʔ (dG)

《木坪譯語》に記録される蔵文は標準的な文語の形式であるが、これと漢字音写は音声的に合わない。しかしながら、現代 dGudzong 方言の形式は漢字音写の特徴に合致する。これを重視する²¹。

次の例の漢字音写に含まれる末尾鼻音は、口語形式に一致する。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
仰 niaŋ	nya	*naŋ	魚	ʼnɔ̃ (So)

¹⁹これは Lhasa 方言でも同じである（于道泉 1983）。

²⁰ただし、現代の丹巴県の方言形式で「四角い」に相当する口語形式は調査で得ることはできなかった。

²¹この例における「沈む」に対応する形式は、方角の「西」と同形で、《木坪譯語》の「西」も漢字「納」で音写されている。ところが、現代 Sogpho 方言および現代 dGudzong 方言には、東西南北という方角を表す語が存在しないため、その語形式は対照できない。ここに推定した結果から考えると、「西」も *la となり、極めて特異な形式を持っていると判断できる。

次の例は先の蔵文対応形式で取り上げたが、漢字2字（＝2音節）でチベット語1音節を表していると考えられる。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
不喘 pu tʂʰaŋ	brang	*pʈaŋ	胸	ʔtʰo ʰjeʔ (So)

この例は、《木坪譯語》では蔵文 Pr-に対してそり舌閉鎖音やわたり音に r を含む形式で対応している中で、唯一異なった対応を示している。この形式は、現代 Sogpho 方言などが示しているように、初頭子音が子音連続で現れている。また、sProsnaŋ 方言では、異なる例ではあるが、「子供」（蔵文 phrug）について口語形式として pʰriʔ と pʈʂʰiʔ の2つを許容する。このような音声実現の対応と比較することで、この例の漢字音写は明確に初頭に両唇閉鎖音を伴う子音連続を音写していると推定できる。

次の例は、蔵文のつづり通りの発音が漢字音写に示され、かつ口語形式が丹巴県の方言に限定的に見られる例である。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
耳奔 ɛ pən	ri bong	*rə pən	うさぎ	ʰrə βu: (sP), ʰrə mō (So)

「うさぎ」という語は、多くの方言では第2音節の初頭子音が軟口蓋音で現れ、以上のような対応を示すのは丹巴県の方言などに限定的に見られる。

次の例は、有気と無気の異なりが表れている。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
濯 tʂo	khyod	*tʰo	あなた	ʈʰaʔ (So)

2人称代名詞がそり舌音で現れるのは、現在の調査状況では Sogpho 方言に限られる。一般に Sogpho 方言の形式では初頭子音は有気音で現れ、ʈʰaʔ となるけれども、しばしば音声的に無気音で現れることが確認されている。

次の例は、これまでに挙げたものとは逆に、《木坪譯語》に記録される蔵文の形式が特異な特徴を示しているものである。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
業掌 nie tʂʰən	ʼjaʼ mtshon	*Ndze ʈʰən	虹	ʰdza (So)

「虹」は蔵文では一般に ʼjaʼ tshon と書かれるが、《木坪譯語》では第2字の初頭に m- を伴っている。これはおそらく音写漢字には反映されていない要素であると判断するが、Sogpho 方言の西方に分布する Lhagang（塔公）方言では、現代でもなお ʰdzafi mʰtʂʰo と発音する（鈴木 2006c）ことから、もしかすると18世紀木坪チベット語にも何らかの対応形式があったのではないかと疑える例である。

6.4 《打箭爐譯語》

《打箭爐譯語》は西田・孫(1990)によると、『北京大学図書館本』において下冊の項目が《木里譯語》と入れ替わっているという。

ここで参考とする現代チベット語方言は、Rangakha 方言 (Ra) と Lhagang 方言 (Lh) を主とするが、sProsnang 方言 (sP) も必要である場合に用いる²²。ほかに、部分的に Sagong 方言 (Sa) にも触れる。

6.4.1 《打箭爐譯語》記録言語が示す音韻特徴

6.4.1.1 前鼻音の現れ

四川漢語に l と n の弁別がないことに注目して、四川漢語で広く見られる自由変異 [n, l, nd, n^d] から、《打箭爐譯語》の漢字音写に鼻音声母を含んでいる例については、具体的な音価の決定にはチベット語方言の情報を参考にしなければならない。

たとえば、次の例は前鼻音つき子音を表している。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例
律 no	'brug	*N ^d qo	龍	' ⁿ dqo? (Lh)

西田・孫(1990)では「龍」は漢字音写「律」の北京語音 ly から *rü と考えている。ところがこの字音は四川漢語懋功方言で no であるから、初頭子音も母音もそれらの推定は適切でない。一方、ダルツェンド周辺のチベット語の場合、多くが Lhagang 方言の 'ⁿdqo? のように前鼻音を伴う有声そり舌閉鎖音で実現する。このとき、漢語の鼻音声母は歯茎音とそり舌音の弁別を行わないため、チベット語の前鼻音つきそり舌音を漢字音 n で音写したと推定することに妥当性があるといえる。

《打箭爐譯語》には、類似の漢字音写から前鼻音を再構できる平行例が複数確認される。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例
洛 no	'gro	*N ^d qo	行く	' ⁿ dqo (Ra)
達楽 ta no	rta 'gro	*ta N ^d qo	馬で行く	^h ta ' ⁿ dqo (Lh)
捏納 nie na	'jang nag	*N ^d dze na	藍	

²²本来的に sProsnang 方言など丹巴県のチベット語方言は、《打箭爐譯語》の序文に示される地域内で用いられる方言であるから、特別に利用に際して差し支えはない。ただし、丹巴県のチベット語方言は前節《木坪譯語》の考察で見た通り、特殊な特徴を備えているため、その点について慎重である必要がある。

6.4.1.2 蔵文足字 r 対応形式

《打箭爐譯語》には、足字 r を含む子音連続を若干ではあるが見出すことができる。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例
不里 pu ni	bri	*pri	書く	'prə (sP)
波郎積 po naŋ tsī	sbram rtsi	*bran tsə	蜜	'fi brö htsə (sP)
本慮 pən nyi	sbrul	*bru	蛇	'fi bru? (sP)

「書く」「蛇²³」の例は、漢字音写では2音節となっているが、蔵文との対応関係から、それを2音節で再構することが適切であるとはいいがたい。「蜜」も同様であるが、最初の2字でチベット語の1音節を示していると考ええる。この推定形式に合致する形式は、sProsnang 方言以外に現代語には確認されない。ただし、Rangakha 方言には r をわたり音に含む子音連続が確認されるため、過去にはまだ sProsnang 方言と同様の子音連続を持っていたと推測することは可能であろう。

6.4.1.3 蔵文 Py 対応形式

西田・孫(1990)は蔵文 Py に対応する形式のいくつかに歯茎破擦音を当てているが、それを傍証する例は《打箭爐譯語》内に見出すことができない。それゆえ、漢字音と現代チベット語の情報から、前部硬口蓋破擦音が推定できる。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫(1990)
且 tɕ ^{hie}	phyi	*tɕ ^{he}	外	ɕ ^{hə} la (Ra)	*tshie
傑嘛 tɕie ma	bye ma	*tɕe ma	砂	'tɕe ma (Ra)	*dzie ma
甲 tɕia	bya	*tɕa	鶏	'pɕa (Ra)	

現代では破擦音ではなく摩擦音で対応する例が多くなってきているが、Rangakha 方言や Lhagang 方言では破擦音が現れるものがある。

上記以外にそり舌音で対応する事例もある。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例
章谷 tɕaŋ ko	spyang ku	*tɕan kɤ	狼	'tɕaŋ k ^h u (Lh)
蛀哇 tɕu ua	byi ba	*tɕu wa	ねずみ	'tɕu fia (Ra)

²³西田・孫(1990:34)の指摘では、神田本では音写漢字が「木慮」(mo nyi)となっている。実際、この例でも dGudzung 方言^ㄒdi: tɕə? や Sogpho 方言^ㄒdi: (「み年」の意)の形式を参照すれば*^Nbru という推定も可能で、どちらが誤写か決めかねる事態になる。

確かに蔵文 Py-に対応する形式にそり舌音が当たるのは極めて珍しいが、前部硬口蓋破擦音に対応する例と同様 Lhagang 方言や Rangakha 方言などに現れる形式がある。これらの形式が土地の方言には存在していたことがうかがえる。

6.4.1.4 蔵文-ar 対応形式

蔵文-ar には、漢字音写の形式から前舌半広母音/ɛ/が見られる。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例
腮爾 sai ər	gsar	*ser	新しい	`se wo (Sa)
愛 ηai	mngar	*ŋɛ	甘い	̃ŋjɛ fiō (Sa)

再構形式が/a/であるとすれば、以上の例で韻母に -ai を用いる必要はないと考えられる。Sagong 方言など郷里県の方言に蔵文-ar 対応形式では/ɛ/のように現れ、これに対応する形式と考える。

6.4.2 《打箭爐譯語》記録言語が示す語彙特徴

西田・孫 (1990:32-35) が指摘する特別な形式に注目すると、やはり現代チベット語方言の中に対応関係を見出すことのできる例がある。

川七/漢字音	川七/蔵文	再構形式	語義	現代語例
念 nian	nywa	*ɲan	魚	ʼɲō (So)
額勒 e ne	ras	*re	布	ʼre: (Lh)

「布」の例に与えられている第1字の漢字音は四川漢語で広く見られる ŋe よりはむしろ e の方が適切である可能性が高い。この漢字音写が意図するところは、与えられる蔵文の形式から推測しても、たとえば Lhagang 方言の「布」ʼre: が [ʰre:¹³] と実現されるように、初頭に母音が挿入される現象を明確に漢字で表記したと考えられる。

次の例は、これまでに挙げたものとは逆に、《打箭爐譯語》に記録される蔵文の形式が特異な特徴を示しているものである。

川六/漢字音	川六/蔵文	再構形式	語義	現代語例
折瓦 tʂe ua	ʼphreng ba	*N̥tʰe wa	数珠	ʼtʰe wa (Ra)

「数珠」は蔵文では一般に *phreng ba* と書かれるが、《打箭爐譯語》では第1字の初頭に'-を伴っている。これはおそらく音写漢字には反映されていない要素であると判断するが、《打箭爐譯語》の序文になる範囲の方言であれば Rangakha 方言、それ以外の方言でもいくつかについては、蔵文で音節末の鼻音があるものについて、末尾鼻音を脱落させその代わりに初頭子音に前鼻音を冠するような対応を見せる。「数珠」については Rangakha 方言がまさにその対応関係を見せている。このことから、もしかすると18世紀打箭爐チベット語にもそれに類する対応形式があったのではないかと疑える例である。

6.4.3 現代方言における分布

ここでは、先に見たいいくつかの《打箭爐譯語》に記録される語形式を中心として、それを取り巻く環境にある地域の現代のチベット語方言形式を第5章で行ったように、地図化して分布を視覚化して示す。

扱う語は以下のものとする。

- 「鶏」《打箭爐譯語》*t̪ɕa
- 「狼」《打箭爐譯語》*t̪aŋ kɣ
- 「4」《打箭爐譯語》*zə
- 「魚」《打箭爐譯語》*ɲaŋ

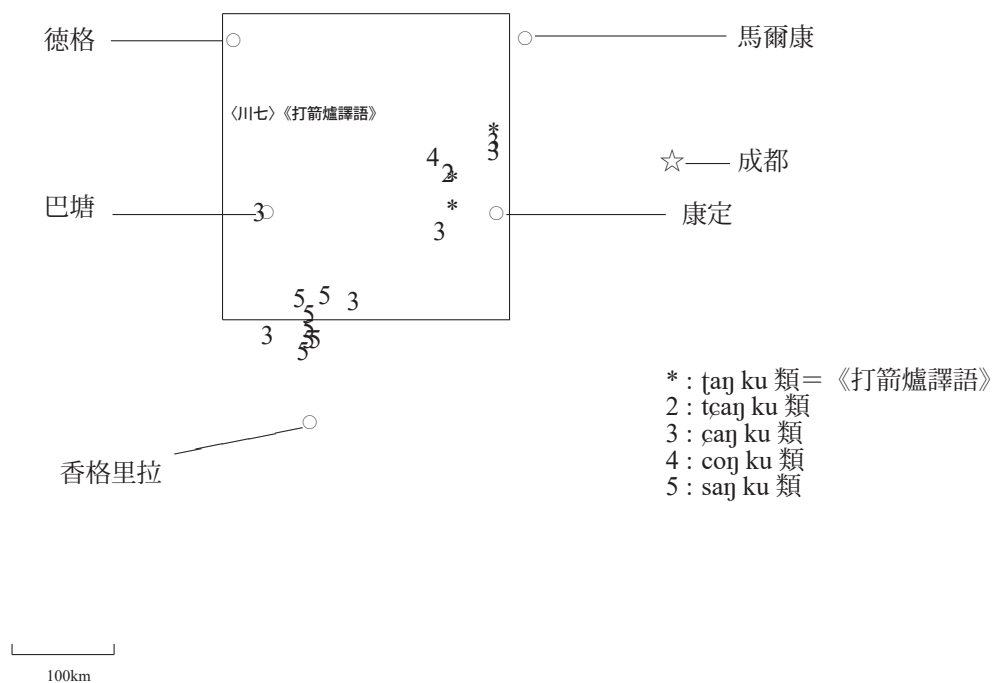


図 6.7: 「狼」の語形式の分布図

現在《打箭爐譯語》の形式と合致するものは、康定を中心とする地域のいくつかの方言で確認される。

6.5 《木里譯語》

《木里譯語》は西田・孫(1990)によると、『北京大学図書館本』において下冊の項目が《打箭爐譯語》と入れ替わっているという。

ここで参考にする現代チベット語方言は、郷城・稻城県および迪慶州の各種方言を用いる。具体的には Sagong 方言 (Sa)、gDongsum 方言 (gD)、Rwata 方言 (Rw)、sDerong 方言 (sD)、nDappa 方言 (nD)、rGyalthag 方言 (rG)、Nyishe 方言 (Ny)、Yungling 方言 (Yu)、Budy 方言 (Bu) などを参考にする。

《木里譯語》における問題は、これまでの《譯語》の事例と異なって、漢字音の問題とチベット語の問題とが交錯する。前者の問題は、音写漢字の性質が先に扱った3種とは異なっていることである²⁴。後者の問題は、《木里譯語》に示される地域には現在チベット語方言が分布しておらず、以下に述べるような多数の方言に散発的に類似の記録形式が一致する点である。

なお、本節の内容は鈴木 (forthcoming-d) と一部重なる。

6.5.1 《木里譯語》記録言語が示す音韻特徴

6.5.1.1 音節末鼻音の現れ

筆者は、《木里譯語》の記録地域から推察して、四川漢語とともに雲南漢語の音声学的特徴を念頭に入れなければならないと見ている。雲南漢語については、《雲南省誌》編纂委員會(1989)が詳しい。しかしこれから述べるような記述は見当たらない。《木里譯語》の漢字音写に見られる具体的な問題点は、以下のようである。

チベット語（蔵文を想定）に期待される末尾鼻音が漢字音に反映されず脱落し、期待されない箇所に鼻音韻尾を伴う漢字が用いられている。以下に具体例を四川漢語、迪慶漢語音²⁵の例、Rwata 方言、Nyishe 方言の例を添えて掲げる。

²⁴西田・孫(1990)の指摘では、これまで扱ったものほとんど同じで、あまり漢字音の問題は考慮されておらず、記録言語側の特殊性に帰着させて説明している。ただし、漢字音に /l/ と /n/ の弁別がなかったであろうことは指摘している。

²⁵雲南省迪慶州の漢語方言で、チベット語母語話者の発話に基づく。声調は表記しない。

川九/漢字/藏文	四川漢語	迪慶漢語音例	Rw	Ny	語義
難 sna	nan	[nã:]	$\bar{n}\tilde{o}$	$\bar{n}a$	鼻
丹 rta	tan	[dã:]	$\bar{h}to:$	$\bar{h}ta$	馬
連 nywa	nian	[niã]	$\acute{n}\tilde{i} w\tilde{o}$	$\acute{n}aŋ$	魚
善 shar	san	[sã:]	$\acute{c}^ha c^ho?$	$\bar{s}^he: c^ho?$	東
禿瓦 thung ba	$t^ho ua$	[$t^ho wa$]	$\acute{t}^ho n\tilde{o}$	$\acute{t}^h\tilde{o} t^h\tilde{o}$	短い
車瓦 'phreng ba	$t\check{s}^he ua$	[$t\check{s}^he: wa$]	$\acute{t}^he w\tilde{u}$		数珠
瓦郎 dbang rno	ua naŋ	[$wa nã^{\tilde{w}}$]	$\bar{t}\tilde{e} dz\tilde{o}$		賢い

確かに蔵文の形式と四川漢語音を取り出せば、末鼻音の現れがまったく逆になっていることが分かる。ところが、まず迪慶漢語音を考えると、初頭子音が鼻音の場合以外は、音韻的に末鼻音/鼻母音化要素が存在しても母音があまり鼻腔共鳴を伴わない。そうであれば、再構形式にも本来的に末鼻音が存在しないものとして推定することができるのか、ということは、Rwata 方言の初頭子音が鼻音の事例を見ると分かるように、一概に妥当とはいえない。

Rwata 方言は、その地理的位置から考えて《木里譯語》の記録言語に系統的に近い可能性がある。また、筆者の現地調査の過程で、かつて木里で話されていたチベット語方言が香格里拉のチベット語に近いことが判明した。

これを重視すると、「鼻」と「魚」の例は蔵文と異なって、 $*nan$, $*n\tilde{a}n$ というように末鼻音（鼻音化要素）が存在すると推定しなければならない²⁶。「短い」の形式は、この例だけでは例証できないが、Rwata 方言の2音節語で第1音節が末鼻音を伴うとき、それが脱落するという現象²⁷が存在することを踏まえると、以上の音写形式は納得でき、 $*t^ho wa$ を得られる。

「賢い」は対応する形式の現代語が不明であるが、漢字音写と蔵文との対応は以上に述べた現象を組み合わせると $*wa nan$ というように、うまく再構できる²⁸。

6.5.1.2 蔵文足字 y 対応音

川九/漢字音	川九/藏文	再構形式	語義	現代語例
七 $t\check{c}^hie$	khyi	$*t\check{c}^hy$	犬	$\bar{t}\check{c}^h\tilde{o} (nD)$
菊播 $t\check{c}ye po$	skyur po	$*t\check{c}y po$	酢	
秋伯 $t\check{c}^hi\tilde{a}u po$	phyug po	$*t\check{c}^hu po$	裕福な	

²⁶逆に「馬」の例では、漢字音のとおり末尾鼻音を再構する必要があるとは断言できない。

²⁷現代語の例を補えば、「太い」は蔵文 *sbom po* に対し、口語形式は $\acute{t}^bo: m\tilde{a}$ となる。この対応は郷城県周辺の方言でも見られる地域性のあるものである。

²⁸西田・孫 (1990) はこの形式に対応する蔵文は *dbang rnon* であるとする。このときは《木里譯語》に記載された蔵文の形式に対して何らかの説明を与えなければならない。

蔵文 Ky-, Py-について《木里譯語》に記録される形式は、ほとんどが漢字音写に現れるように前部硬口蓋破擦音をもっていたと見られる。現代の諸方言では蔵文#Ky-に前部硬口蓋破擦音をもつ方言として nDappa 方言があるが、それ以外の対応形式は異なる調音点、調音法で現れるため一致しない。

6.5.1.3 蔵文足字 r 対応音

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
喳 tʂa	skra	*tʂa	髪	^h tʂɔ: (nD), ^h tʂɔ: (gD)
支 tʂi	'dre	*dʂɤ	鬼	^h dʂɔ (Rw)
朱俄 tʂu o	sprin	*tʂu wo	雲	^h tʂi: (nD)
障 tʂaŋ	brang	*tʂaŋ	胸	'ɕɔ tʂaʔ(Ny), 'to ^h go (gD)

蔵文 Kr-, Pr-について《木里譯語》に記録される形式は、ほとんどが漢字音写に現れるようにそり舌音をもっていたと見られる。それは現代の各種方言とよく一致する。

6.5.2 《木里譯語》記録言語が示す語彙特徴

6.5.2.1 広範囲の方言で見られる特徴

漢字音写が現代の郷城県周辺の方音形式に一致する例がある。

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
歸 kui	sgo	*gwi	門	^h gwə (gD), ^h gwo (Rw), ^h gwo (Ny)
奪 to	bdug	*do	いる	^h doʔ (gD, Ny, Yu)

「門」の漢字音写には、わたり音が含まれることをよく表している。

「いる」の形式は存在を示す状態動詞として、郷城県や迪慶州のカムチベット語に特有の語が記録されていると考えられるが、現代語は蔵文'dug に対応する。

次の例は、いわゆるチベット人の自称を記録しているものであるが、複数の形態をもち、かつ現代の郷城県周辺の方音形式に一致する例がある。

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
北夷 pe i	bod yig	*pe ji	チベット文字	'piʔ jiʔ (rG)
比咩 pi mie	bod mi	*pi me	チベット人	'peʔ (Ny), 'pe: riʔ (nD)
布傑 pu tɕie	bod rgya	*pø dʒe	蔵・漢	^h pøʔ / ^h dʒa (sD), ^h pøʔ (gD)

第1、第2の例に見られる蔵文 *bod* 対応形式と考えられる漢字音写は前舌平唇狭母音を示していると考えられ、この形式を持つのは極めて限定的で、香格里拉県のチベット語方言によく一致している。第3の例は sDerong 方言の蔵文対応形式で考えると、漢字音写によく一致する。このように、自称について形式が分かれるのは《松潘譯語》とよく似た現象であるが、記録される形式は土地のチベット語形式の特徴によく一致する。

6.5.2.2 特定の方言に限定的に見られる特徴

いくつかのきわめて特徴的な単語は、甘孜州南部の各地から迪慶州全体に至るまでの広範囲に分布するチベット語方言について、しかも単発的な一致が見られる。

Nyishe 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
法 fa	'brug	*fa	雷	' ^h faʔ (Ny)
明都 min tu	me tog	*min du	花	'mẽ ⁿ duʔ (Ny)
盛 şən	shing	*şƏN	木	'şĩŋ pəŋ (Ny)

「雷」の例は確かに形式は一致しているが、Nyishe 方言の '^hfaʔ は「稻光」という意味であり、なおかつ形式が何に由来しているかは不明のままである。「花」の音写漢字の第1字には、語中における鼻音要素の存在を表す意図があったと考ええると、そのような形式を持つ方言は、現段階では Nyishe 方言にのみ見られる。「木」の例では、初頭子音について蔵文 sh にそり舌が対応するのは Nyishe 方言や rGyalthang 方言など香格里拉県のチベット語方言によく一致する。

rGyalthang 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
甸 tiā	bdun	*dan	7	^ṽ dā: (rG)

「7」の例では、母音の現れに注目できる。多くのチベット語方言では、「7」の母音は狭母音で現れるが、漢字音写が示すのは広母音であって、これは rGyalthang 方言に一致する特徴である。

Yungling 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
錯播 ts ^h o po	stod pa	*ts ^h o po	モンゴル	ṽts ^h oʔ po (Yu)
擦巴麻 ts ^h a pa ma	sa bar ma	*ts ^h a pa ma	中国	ṽts ^h a (Yu)

Yungling 方言は蔵文の基字 s についていくつかの語が歯茎破擦音として現れる。《木里譯語》の「中国」という形式は、最初頭の音写漢字のみに注目すると、Yungling 方言のṽts^ha「土」（蔵文 sa）によく一致する。

Budy 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
弄扛 noŋ kaŋ	gnam skam	*noŋ kaŋ	旱魃	`nā kā (Bu)

《木里譯語》「旱魃」の形式は「天」と「乾く」という要素で成り立っているが、この語構成が見られるのは確認される限り Budy 方言のみである。

nDappa 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
弄巴耳 noŋ pa ɣ̃	nang bar	*noŋ bar	明日	'nə mba: (nD)
缺 tɕ ^h ye	mchod	*tɕ ^h u	お経	ṽtɕ ^h u: (nD)
奪惹 to zɕ	ldong ra	*do rə	園	'ta: ro (nD)

「明日」の蔵文はおそらく *nangs pa* に接辞-r がついた形式を表していると考えられ、直訳では「朝に」となる。

gDongsum 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
那媽 na ma	na ma	*na ma	妻	ṽnā (gD)

これはおそらく蔵文 *mna' ma*「息子の妻、嫁」に一致する形式であると考えられるが、gDongsum 方言では蔵文 *mna' ma* を1音節に縮約したと考えられる形式が「妻」という語義で用いられる。この点に《木里譯語》の形式が一致する。

Sagong 方言に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
謝拔 cie po	zi lam	*se po	霜	'se: pɑ? (Sa)
列 nie	slebs	*le / *le	来る	le? 'fið (Sa)

「霜」は、《木里譯語》の漢字音写と蔵文の形式が一致していないほか、現代語でもその2種がいずれかの形式が「雹」「霜」「露」に現れ、各種方言で対応関係が混乱している。以上に示した Sagong 方言の形式は「露」のものであるが、音形式としては漢字音写に表されているものにもっとも近い。「来る」は《木里譯語》の蔵文 *slebs* との対応も考えると、Sagong 方言に見られる *le?* 'fið の第1音節を示している可能性がある。ただし蔵文 *slebs* は「到着する」という意味で「来る」という意味ではないが、後者の意味で用いられる形式として Rwata 方言 *le: ɕʰu?* の第1音節や Yungling 方言や Budy 方言などに見られる *le* に対応すると考えると、再構形式としては有声音 *l* が推定できる可能性もある。

Rwata 方言など郷城県のチベット語に特に一致する例

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
撒 sa	bya	*sa	鶏	'so: (Rw)

「鶏」は蔵文 Py-対応音の例外的な形式として西田・孫 (1990) が指摘しているが、郷城県のもっとも標準的な対応関係が以上のように蔵文 Py-に *s* などの摩擦音となる点である。

川九/漢字音	川九/蔵文	再構形式	語義	現代語例
谷慢 ko man	nu ma	*fio man	乳	'fio wɔ̃ (Rw)

「乳」の漢字音写の形式は蔵文 *'o ma* に対応するものと考えられる。第2音節の末尾に鼻音要素が与えられるのは、口語音を反映したか漢字音の問題かは先に言及したとおりよく分らない。

6.5.3 対応形式をもつ方言の分布概要図

さて、以上の対応関係を見た上で、《木里譯語》に記録される特異な形式が現代の方言に一致したものについて、その方言の現在の位置を地図化して確かめると、《木里譯語》の序文に付された地域の近隣地域よりもはるかに広範囲において分布している方言に現れていることが改めてよく理解できる。

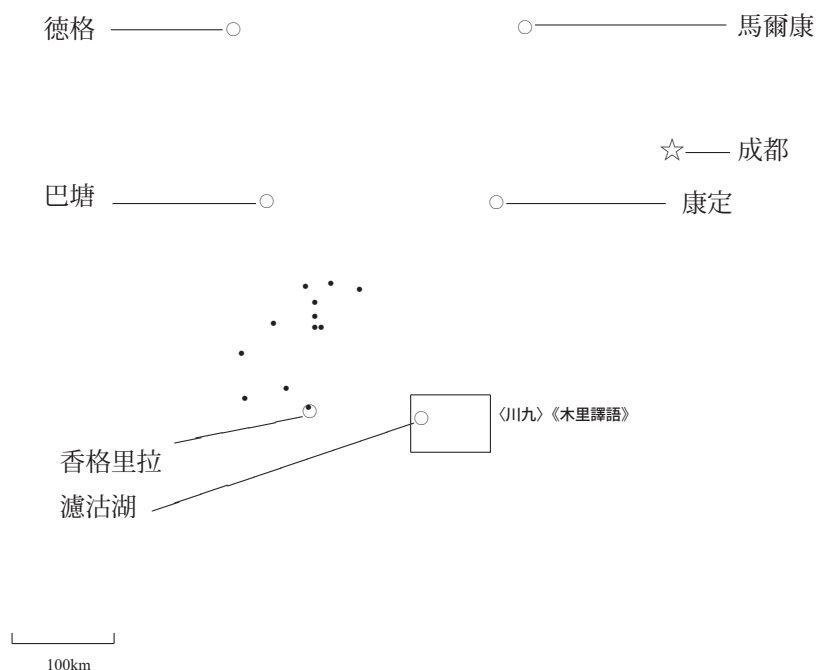


図 6.10: 《木里譯語》に記録される語形式の対応形式を持つ方言の分布

6.6 本章のまとめ

本章では、西田・孫(1990)によって紹介された丁種本《西番譯語》9種のうち、チベット語を記録する《松潘譯語》《木坪譯語》《打箭爐譯語》《木里譯語》の4種を対象に、同書の言及および分析について、本論文の第4章・第5章で扱った現代のチベット語方言に基づいて、問題点を修正し妥当な再構形式を与えるとともに、同書において提示されているいくつかの問題を解明した。このような問題は、現代語の資料が極めて乏しかった当時としては解決される可能性が極めて低かったことである。

まず、西田・孫(1990)が指摘する問題を、漢字音の推定に関する問題と記録されるチベット語形式自体の特異性に関する問題に二分した。前者の問題は、同書の北京音読みを丁種本《西番譯語》の成立事情から西南官話音読みに変え、主に実際の四川漢語音を当てて読むことにより、理解が明確に向上した。後者の問題は、部分的ではあるが、現代チベット語方言に対応関係を見出せるものもあり、それらを利

用することで、各種《西番譯語》に記録されるチベット語が口語形式を反映させるものとしてとらえることによって推定の根拠となした。

これらの作業によって、《松潘譯語》は記録されるチベット語方言が現代の多様な方言形式を複数記録しているものと分析され、《木坪譯語》の記録言語は現代の丹巴県のチベット語と特に関連する方言を記録したものということが判明し、《打箭爐譯語》の特殊形式は現代のムニャ地域をはじめとする地域に分布する方言に当該形式の一部が見出され、《木里譯語》には四川漢語とはやや特徴を異にする漢語方言で音写されており、また現代では甘孜州南部および迪慶州に分布する方言に散らばって分布する形式を記録していることが、それぞれ明らかとなった。

本章ではそれぞれの《西番譯語》が体系的に分析されたわけではない。ただし、特異な形式とみなされていたものが実は特別ではなくそれぞれの地域に分布していたであろう口語形式を確かに記録しているということは、西田・孫(1990)の記述よりも明瞭に理解できるようになった。ここで扱った《西番譯語》に記録される形式には、現在ではもはや用いられていない形式もあり、それらはさらに方言調査が進めば対応形式が明らかになるかもしれないし、歴史上の語彙の変遷と理解して過去の形式であると結論を下さなければならないかもしれない。少なくとも本章の議論の方法が、《西番譯語》に対する資料的価値を高めるものであり、現代語の方言研究が直接的に関与していることを、ドス語(西田 1973)、ペマ語(西田・孫 1990)に続いてチベット語についても示すことができたと考える。

参考文献

和文（五十音順）、欧文、中文（原則 pinyin 順、ただしチベット人は蔵文転写の第 1 字基字のローマ字順、中国人以外は本名のローマ字順）、蔵文の順の配列

和文

池田巧 (2000) 「西暦 1900 年に記録されたナムイ語の語彙— H.R.Davies 著 Yün-nan 所載の西南中国の民族語彙研究 1 」『東方学報』第 72 冊 755-770

—— (2001) 「川西民族走廊のチベット系少数言語」池田巧編『論集：東・東南アジアの少数言語の現地調査』1-13

—— (2003) 「西南中国《川西民族走廊》地域の言語分布」崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』63-114

海老原志穂 (2005a) 『アムド・チベット語共和方言の完了を表す助動詞』東京外国語大学修士論文

—— (2005b) 「アムド・チベット語共和方言の音韻論—農区方言と牧区方言の比較研究—」『日本西藏學會々報』51, 83-98

遠藤光暁 (1983) 「成都方言の声調」『均社論叢』13, 26-38

—— (2006) 「子音連続と単子音の中間段階としての二重調音—青海省共和県・興海県のアムドチベット語と漢語方言を例として—」東ユーラシア言語研究会編『東ユーラシア言語研究』第 1 集 324-333 東京：好文出版

太田斎 (1980) 「尖団小論」『東京都立大学人文学部人文学報』第 140 号 139-153

—— (1986) 「[資料] 丙種本西番館訳語校本（稿）」『内陸アジア言語の研究』II, 157-215

北村甫・長野泰彦 (1990) 『現代チベット語分類辞典』東京：汲古書院

更科慎一 (2006) 「現代アムド・チベット語による『（乙種本）西番館雑字』の朗読に対する音声的分析」『山口大学文学会志』第 56 巻 71-100

白井聡子 (2002) 「ゲシツァ語における動詞の人称表示システムについて」『京都大学言語学研究』第 21 号 275-309

—— (2006a) 『ダパ語における視点表示システムの研究』京都大学博士論文

—— (2006b) 「ダパ語メト方言における音素体系と子音連続の相関」東ユーラシア言語研究会編『東ユーラシア言語研究』第 1 集 307-323 東京：好文出版

- 鈴木博之 (2004) 「アムドチベット語チャプチャ・チェルジェ牧民方言の音声分析」『京都大学言語学研究』第 23 号 145-165
- (2005a) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23
- (2005b) 「チベット語松潘・九寨溝 [Sharkhog] 方言の超分節音素」『アジア・アフリカ文法研究』第 33 号 1-37
- (2005c) 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号 96-104
- (2005d) 「四川省涼山州に暮らす蒙古族の言語」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第 114 号 17-19
- (2006a) 「四川省チベット族の言語を表記する」塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』67-79 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- (2006b) 「川西民族走廊に分布するチベット・ビルマ系言語における子音連続—発音様式から見る子音連続の構造—」東ユーラシア言語研究会編『東ユーラシア言語研究』第 1 集 287-306 東京：好文出版
- (2006c) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号 39-47
- (2006d) 「川西民族走廊・チベット語諸方言における *snang* の意味」第 9 回チベット＝ビルマ言語学研究会発表原稿
- (2006e) 「前気音の類型的分析とサーミ諸語の事例」『ウラリカ』第 14 号 35-46
- (2006f) 「ダバ語紅頂 [Ngwirdei] 方言の音声分析と方言特徴」『京都大学言語学研究』第 25 号 105-129
- (参考論文 2007) 「丁種本《西番譯語》〈川一、川六〉18 世紀チベット語方言の再構の試み」博士論文参考論文
- (forthcoming-a) 「カムチベット語方言の多様性から見る丹巴県チベット語の方言特徴」『人文知の新たな総合に向けて』第 5 回報告書
- (forthcoming-b) 「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第 36 号
- (forthcoming-c) 「丁種本《西番譯語》〈川六〉に記録される木坪チベット語の特徴」『内陸アジア言語の研究』XXII

- (forthcoming-d) 「丁種本《西番譯語》〈川九〉に記録される木里チベット語の特徴」『東ユーラシア言語研究』第2集
- 鈴木博之・イエシェムツォ[Ye-shes-mtsho] (2006) 「チベット語中阿壩[rNgawa]方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第1号 59-88
- 長野泰彦 (1998) 「ギャロン語キョムキョ方言基礎語彙」『チベット文化域におけるポン教文化の研究 科研報告書』215-230
- 長野泰彦・立川武蔵編 (1987) 『チベットの言語と文化』東京：冬樹社
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号 837-900 + 1 地図
- (1987) 「チベット語の方言」長野・立川編 170-203
- 西田龍雄 (1963) 「十六世紀における西康省チベット語天全方言について—漢語・チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館譯語』の研究—」『京都大学文学部研究紀要』第7、85-174
- (1970) 『西番館譯語の研究—チベット言語學序説—』京都：松香堂
- (1973) 『多統譯語の研究—新言語トス語の構造と系統—』京都：松香堂
- (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野・立川編 108-169
- 西田龍雄・孫宏開 (1990) 『白馬譯語の研究 白馬語の構造と系統』京都：松香堂
- 星泉 (1997) 『チベット語ラサ方言における述語の意味の記述的研究』東京大学博士論文
- (2003) 『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

欧文

- Bartee, Ellen (2005) *The Role of Animacy in the Verbal Morphology of Dongwang Tibetan*, unpublished manuscript presented at 38th HLS (Bangkok)
- Benedict, Paul K. (1972) *Sino-Tibetan: A Conspectus*, New York : Cambridge University Printing House
- Beyer, Stephan V. (1992) *The Classical Tibetan Language*, Albany : State University of New York Press

- Causemann, Margret (1989) *Dialekt und Erzählungen der Nangchenpas*, Bonn : VGH Wissenschaftsverlag
- Denwood, Philip (1999) *Tibetan*, Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins Publishing Company
- Gō, Minoru et al. (eds.) (1954) *An Eastern Tibetan Dictionary (revised) And A Study of the Eastern Tibetan Language with Special Reference to the Initial Consonants*, Okayama : Chūgoku Printing Company
- Gruschke, Andreas (2001) *The Cultural Monuments of Tibet's Outer Provinces AMDO, Volume 2. The Gansu and Sichuan Parts of Amdo*, Bangkok : White Lotus Press
- Haller, Felix (2000) *Dialekt und Erzählungen von Shigatse*, Bonn : VGH Wissenschaftsverlag
- (2004) *Dialekt und Erzählungen von Themchen*, Bonn : VGH Wissenschaftsverlag
- Hari, Anna Maria (1979) *An Investigation of the Tones of Lhasa Tibetan*, Summer Institute of Linguistics
- Häsler, Katrin Louise (1999) *A Grammar of the Tibetan Dege ཇེ་དགེ་ (Sde dge) Dialect*, Zürich : Selbstverlag
- Hermanns, Matthias (1952) Tibetische Dialekte von A mdo, in : *Anthropos* 47, 193-202
- Herrmann, Silke (1989) *Erzählungen und Dialekt von Diñri*, Bonn : VGH Wissenschaftsverlag
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a Preliminary Report, in : *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 69-92
- Hongladarom, Krisadawan et al. (2005a) *A Preliminary Analysis of Nangchen Tibetan Texts*, unpublished manuscript presented at 38th ICSTLL (Xiamen)
- (2005b) *Marking Time in Nangchen Tibetan*, unpublished manuscript presented at 11th HLS (Bangkok)
- Ikeda, Takumi (2006) *Some Historical Records on the Lyuzu Language in Southwest China* [呂蘇語 其歷史記錄三種], unpublished manuscript presented at 39th ICSTLL (Seattle)
- Jacques, Guillaume (2004) *Phonologie et morphologie historique de japhug (langue rGyalrong)*, thèse de doctorat, École des hautes études en sciences sociales
- Kalsang Norbu [sKal-bzang Nor-bu] et al. (2000) *Modern Oral Amdo Tibetan*, Lewiston/Queenston/Lampeter : The Edwin Mellen Press

- Karmay, Samten & Philippe Sagant (1998) *Les Neuf Forces de l'Homme : Récits des confins du Tibet*, Nanterre : Société d'ethnologie
- Kin, P'eng (1949) Étude sur le Jyarung, en : *Han Hiue* 3, 211-310
- Kraft, George C. & Tsering Heng Hu [Tshe-ring] (1998) *Tibetan-English Colloquial Primer: Kham Dialect*, Littleton : OMF International
- Lin, Youjing (2002) *Phonological Profile of Thewo Tibetan*, unpublished manuscript presented at 8th HLS (Bern)
- Mansier, Patrick (1983) *Lexique et phonologie du gyarong de Tsenla*, thèse de doctorat, École des hautes études en sciences sociales
- Matisoff, James A. (1997) *Sino-Tibetan numeral systems: prefixes, protoforms and problems*, Canberra : Pacific Linguistics
- (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*, Berkeley/Los Angeles/London : University of California Press
- Migot, André (1957) Recherches sur les dialectes tibétains du Si-K'ang (province de Kham), en : *Bulletin de l'École Française d'extrême-orient* tome XLVIII, 417-562
- Nagano, Yasuhiko (1980) *Amdo Sherpa Dialect: A Material for Tibetan Dialectology*, Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
- Roerich, Georges de (1958) *Le parler de l'Amdo : Étude d'un dialecte archaïque du Tibet*, Roma : Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente
- Sprigg, Richard Keith (1979) The Golok Dialect and Written Tibetan Past-tense Verb Forms, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 42, 53-60
- Sun, Jackson T.-S. (1986) *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: nDzorge Śæme Xyra Dialect*, Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
- (2000) Parallelisms in the Verbal Morphology of Sidaba rGyalrong and Guanyinqiao in rGyalrongic, in : *Language and Linguistics*, 1.1, 161-190
- (2003a) Variegated tonal developments in Tibetan, in : Randy LaPolla et al. (eds.) *Language Variation: Papers on variation and change in the Sinosphere and in the Indosphere in honour of James A. Matisoff*, 35-51
- (2003b) Phonological Profile of Zhongu: A New Tibetan Dialect of Northern Sichuan, in : *Language and Linguistics* 4.4, 769-836
- (2004) Verb-Stem Variations in Showu rGyalrong 林英津他編 269-296

- (2005) *Special Linguistic Features of gSerpa Tibetan*, unpublished manuscript presented at 38th ICSTLL (Xiamen)
- Suzuki, Hiroyuki (2004) *Preaspiration in Tibetan and Qiangic Languages*, unpublished manuscript presented at 37th ICSTLL (Lund)
- (2005a) *Dialectological Particularity of A-skyid-rong [Axirong] Tibetan — Special Reference to Songpan and Aba Tibetan* — [阿西茸藏語的方言特徵—兼述松潘、阿壩藏話], unpublished manuscript presented at 38th ICSTLL (Xiamen)
- (2005b) *Dialectological Subgroup of Sogpho (Danba) Tibetan*, unpublished manuscript presented at 11th HLS (Bangkok)
- (2005c) Einige Bemerkungen über den Ursprung des *creaky* Tons im Tibetischen von Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou], in : *Kyoto University Linguistic Research* 24, 45-57
- (forthcoming) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba — phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou] —, en : *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*
- Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje [gSang-bdag rDo-rje] (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation* [bod kyi spyi skad slob deb], Paris : L'Asiathèque
- Wang, Qingshan (1995) *A Grammar of Spoken Amdo Tibetan*, Chengdu : Sichuan Nationality Publishing House
- Wang, Xiaosong (1997) Prolegomenon to Rgyalthang Tibetan Phonology, in : *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 55-67
- Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages*, Berlin/New York : Mouton de Gruyter
- Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan Dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133
- (1997) Particularités phonétiques du Baima, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 26 (1), 131-153

中文

- 周毛草 [’Brug-mo-mtsho] (2003) 《瑪曲藏語研究》北京：民族出版社
- 陳玉屏主編 (2003) 《民族語言研究》成都：四川民族出版社
- 齊卡佳 [Chilkova, Katia] (2006) 《淺談白馬語情態範疇》第4屆兩岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文

- 達爾基 [Dar-rgyas] · 李茂 (1998) 《阿壩通覽》成都：四川辭書出版社
- 達瑞根, 弗德瑞克 [Darragon, Frederique] (2005) 《喜馬拉雅的神秘古蹟》深圳：深圳報業集團出版社
- 戴慶廈等 (1991) 《藏緬語十五種》北京：北京燕山出版社
- 多爾吉 [rDo-rje] (1998) 《道孚語格什扎話研究》北京：中國藏學出版社
- 多傑東智 [rDo-rje Don-grub] (2004) 〈安多藏語動詞變化的簡化〉《民族語文》第2期：57-60
- 費孝通 (1980) 〈關於我國民族的識別問題〉《中國社會科學》第1期 94-107
- 馮敏 (2005) 〈川西扎巴藏人親屬制度初探〉《康定民族師範高等專科學校學報》第6期 1-7
- 馮蒸 (1981) 〈《華夷譯語》調查記〉《文物》第2期 57-68
- 格勒 [dGe-legs] (1984) 《甘孜藏族自治州史話》成都：四川民族出版社
- (2006) 《藏族早期歷史與文化》北京：商務印書館
- 龔蔭 (1992) 《中國土司制度》昆明：雲南民族出版社
- 賀先棗 (2006) 〈淺析丹巴地方文化資源若干特徵〉《康定民族師範高等專科學校學報》第3期 5-9
- 胡恒 (2003) 〈淺談藏文字母的字性分類及其讀音（康方言）〉陳玉屏主編 72-83
- 胡坦 (2003) 《藏語研究文論》北京：民族出版社
- 華侃 (1983) 〈安多藏語聲母的幾種特殊變化〉《民族語文》第3期 43-46
- (1985) 〈安多藏語（夏河話）中的同音詞〉《民族語文》第4期 24-29
- 華侃 主編 (2002) 《藏語安多方言詞匯》蘭州：甘肅民族出版社
- 華侃 · 龍博甲 [Klu-'bum-rgyal] 編 (1993) 《安多藏語口語詞典 [bod rgya shan sbyar gyi a mdo'i kha skad tshig mdzod]》蘭州：甘肅民族出版社
- 華侃 · 尕藏他 [sKal-bzang-thar] (1997) 〈藏語松潘話的音系和語音的歷史演變〉《中國藏學》第2期 131-150
- 黃布凡 (1991a) 〈道孚語〉戴慶廈等 1-45
- (1991b) 〈扎壩語〉戴慶廈等 64-97
- (2001) 〈觀音橋話語屬問題研究〉*Language and Linguistics* 2.1, 69-92
- (2003) 〈拉塢戎語概況〉《民族語文》第3期 60-80
- (2004) 〈拉塢戎語詞彙中的藏語借詞和同源詞辨析〉林英津他編 239-268
- 黃布凡主編 (1992) 《藏緬語族語言詞匯》北京：中央民族學院出版社
- 黃布凡 · 仁增旺姆 [Rig-'dzin dBang-mo] (1991) 〈呂蘇語〉戴慶廈等 132-152

- 黃布凡・周發成 (2006) 《羌語研究》成都：四川人民出版社
- 黃布凡等 (1994) 〈玉樹藏語的語音特點和歷史演變規律〉《中國藏學》第2期 111-134
- 黃良榮・孫宏開編 (2002) 《漢嘉戎語詞典》成都：四川民族出版社
- 江荻 (2002a) 《漢藏語言演化的歷史音變模型——歷史語言學的理論和方法探索》北京：民族出版社
- (2002b) 《藏語語音史研究》北京：民族出版社
- 金鵬 (1958) 《藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究》北京：科學出版社
- (2002) 〈嘉戎語（雜古腦方言）研究〉《金鵬民族研究論文集》1-95 北京：民族出版社
- 金鵬 主編 (1983) 《藏語簡誌》北京：民族出版社
- 金星華主編 (2005) 《中國民族語文工作》北京：民族出版社
- 噶瑪降村 [sKar-ma rGyal-mtshan] (2005) 《藏族萬年大事記》北京：民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med] (1985) 〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第2期 16-27
- (1991) 〈藏文字性法與古藏語音系〉《民族語文》第6期 12-22
- 格桑居冕・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》北京：民族出版社
- (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》成都：四川民族出版社
- 郎維偉・艾建 [Janet Upton] 主編 (2001) 《大渡河上游丹巴藏族民間文化考察報告》成都：四川省民族研究所
- 李榮 (1998) 《成都方言詞典》南京：江蘇教育出版社
- 李星星 (2006) 〈藏彝走廊東部的地理態勢與人文特點〉袁曉文・李錦 主編 60-64
- 林俊華 (2005) 〈九龍及其周邊地區的普米〉《康定民族師範高等專科學校學報》第1期 13-16
- (2006) 〈扎壩“走婚部落”的歷史與文化〉《康定民族師範高等專科學校學報》第4期 6-15
- 林向榮 (1993) 《嘉戎語研究》成都：四川民族出版社
- 林英津他編 (2004) 《漢藏語研究 龔煌城先生七秩壽慶論文集》台北：中央研究院語言學研究所
- 劉光坤 (1998) 《麻窩羌語研究》成都：四川民族出版社
- 劉輝強 (1983) 〈納木依語概要〉李紹明・童恩正主編《雅砻江下游考察報告》218-241
- (2006) 〈藏彝走廊東部邊緣地區的民族語群 (ethnic language group) 研究〉袁曉文・李錦 主編 212-216

- 劉勇 等 (2005) 《鮮水河畔的道孚藏族多元文化》 成都：四川民族出版社
- 陸紹尊 (1985) 〈扎巴語概況〉《民族語文》第2期 67-76
- (1992) 〈雲南藏語語音和語匯簡介〉《藏學研究論叢 第4輯》拉薩：西藏人民出版社
- (2001) 《普米語方言研究》北京：民族出版社
- 馬月華 (1987) 《基礎藏文課本（康方言）[bod kyi yig-gzhi rtsa'i slob-deb]》成都：西南民族學院
- 馬學良主編 (2003) 《漢藏語概論》北京：民族出版社
- 敏生智·耿顯宗編 (2001) 《安多藏語會話讀本》西寧：青海民族出版社
- 莫超 (2004) 《白龍江流域漢語方言語法研究》北京：中國社會科學出版社
- 嚴木初 [sNying-mo-mtsho] (2006) 〈梭磨話共時語流音變研究〉《民族語文》第5期 30-35
- 完瑪冷智 [Pad-ma Lhun-grub] (2006) 〈藏語數詞的語音變化〉《民族語文》第4期 39-40
- 瞿霽堂 (1991) 《藏語韻母研究》西寧：青海民族出版社
- (1996) 《藏族的語言和文字》北京：中國藏學出版社
- 瞿霽堂·金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76-84
- 瞿霽堂·譚克讓 (1983) 《阿里藏語》北京：中國社會科學出版社
- 瞿霽堂等 (1989) 〈衛藏方言的新土語——記最近發現的巴松話〉《民族語文》第3期 39-61
- 雀丹 (1995) 《嘉絨藏族史誌》北京：民族出版社
- 仁增旺姆 (1987) 〈藏語夏河話語音與藏文的語音對應〉《民族語文》第6期 46-53
- 尚雲川 (2006) 〈平武縣民族語言的使用狀況〉袁曉文·李錦 主編 217-221
- 石碩 (2000) 〈川西民族走廊的歷史變遷與特點〉《天府討論》增刊 90-93
- 石碩 主編 (2005) 《藏彝走廊：歷史與文化》成都：四川人民出版社
- 宋伶俐 (2006) 《瀕危之中的貴涼語》第4屆兩岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文
- 孫宏開 (1982) 〈羌語支屬問題初探〉《民族語文研究文集》189-224
- (1983a) 〈六江流域的民族語言及其系屬分類——兼述嘉陵江上游、雅魯藏布江流域的民族語言〉《民族學報》第3期 99-273
- (1983b) 〈川西民族走廊地區的語言〉李峰銘編《西南民族研究》429-454 成都：四川民族出版社
- (1987) 〈歷史上的氐族和川甘地區的白馬人——白馬人族屬初探〉《白馬人族屬研究文集》34-45
- (1999) 〈藏緬語複輔音研究〉《民族語文論壇專輯》總第1期 32-50

- (2005) 〈原始漢藏語的複輔音問題—關於原始漢藏語音節結構構擬的理論思考之一〉 羅江文等主編《漢藏語系語言研究》17-31 昆明：雲南民族出版社
- 孫宏開主編 (1991)《藏緬語語音和詞匯》北京：中國社會科學出版社
- 孫宏開・劉璐 (1986)《怒族語言簡誌（怒蘇語）》北京：民族出版社
- 孫宏開・劉光坤 (2006)《史興語調查的新收獲》第4屆兩岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文
- 孫宏開・王賢海 (1987)〈阿壩藏語語音中的幾個問題〉《民族語文》第2期 12-21
- 孫天心 (2003)〈求吉藏語的語音特徵〉《民族語文》第6期 1-6
- (2005)〈嘉戎語組語言的音高：兩個個案研究〉《語言研究》第1期 50-59
- 鈴木博之 [Suzuki, Hiroyuki] (2006)《九香線上的藏語方言對比研究》第4屆兩岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文
- 譚克讓 (1984)〈藏語雙音節詞變調類型〉《藏族學術討論會論文集》編寫組編《藏族學術討論會論文集》626-639 拉薩：西藏人民出版社
- 丹珠昂奔 [gTan-grub Ngag-dbang] (2001)《藏族文化發展史（上・下）》蘭州：甘肅教育出版社
- 贊拉・阿旺措成 [bTsan-lha Ngag-dbang Tshul-khrims] (2004a)《贊拉・阿旺措成論文集》成都：四川民族出版社
- (2004b)〈安多話與嘉絨話對比分析〉《贊拉・阿旺措成論文集》246-319
- 王懷林 (2006)〈探秘東女國之都〉《康定民族師範高等專科學校學報》第2期 14-19
- 王建民・贊拉・阿旺措成 (1992)《安多話嘉戎話對比分析》成都：四川民族出版社
- 王天習 (1991)〈却域語〉戴慶廈等 46-63
- 徐君 (2001)〈梭坡藏族田野考察報告〉郎維偉・艾建主編 27-59
- 楊福泉 (2005)《納西族與藏族歷史關係研究》北京：民族出版社
- 楊嘉銘 (2004)《千碉之國——丹巴》成都：巴蜀書社
- (2005)〈解讀“嘉戎”〉《康定民族師範高等專科學校學報》第3期 1-5
- (2006)〈甘孜州非物質文化遺產資源中的亮點——兼談非物質文化遺產保護方面的幾個常識性概念〉《康定民族師範高等專科學校學報》第2期 10-13
- 楊嘉銘等 (1994)《甘孜藏族自治州民族誌》北京：當代中國出版社
- 楊時逢 (1984)《四川方言調查報告》台北：中央研究院歷史語言研究所
- 意西微薩・阿錯 [Ye-shes 'od-gsar A-tshogs] (2004)《倒話研究》北京：民族出版社
- 尹蔚彬 (2006)《業隆話語音系統的特點》第4屆兩岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文

- 于道泉 (1983) 《藏漢對照拉薩口語詞典 [bod rgya shan sbyar gyi lha sa'i kha skad tshig mdzod]》北京：民族出版社
- 袁曉文・李錦 主編 (2006) 《藏彝走廊東部邊緣族群互動与發展》北京：民族出版社
- 玉珍 [gYu-sgron] (1996) 〈現代藏語安多方言（同仁語）語音分析〉《中国藏學研究中心 藏學論文選集 (1986-1996)（上・下）》727-733 北京：中国藏學出版社
- 《雲南省誌》編纂委員會 (1989) 《雲南省誌 卷五十八 漢語方言誌》昆明：雲南民族出版社
- (1998) 《雲南省誌 卷五十九 少数民族語音文字誌》昆明：雲南民族出版社
- 澤波・格勒 [dGe-legs] 主編 (2004) 《橫斷山民族文化走廊—康巴文化名人論壇文集》北京：中国藏學出版社
- 周季文 (1992) 〈藏文異體詞的整理〉《民族語文》第2期 42-50

藏文

- sKyogs-ston Rin-chen bKra-shis (1981) *brDa gsar-rnying gi gzhaq li-shi'i gur khang, Mi-rigs dpe-skrun-khang*
- Thon-mi Sam-bho-tra dang dNgul-chu Yab-sras (2000) *Sum-rtags rtsa-'grel si-tu'i zhal-lung, Mi-rigs dpe-skrun-khang*
- gNam-lha-rgyal (2003) 《安多藏語口語讀本（上・下）*A-mdo kha-skad slob-deb (khag-stod dang khag-smad)*》未公刊
- dPa'-ris Sangs-rgyas (1998) *brDa-sprod gsal-byed ngag-sgron, mTsho-sngon mi-rigs dpe-skrun-khang*
- (1999) *Dag-yig rig-pa'i gab-pa mngon-phyung, mTsho-sngon mi-rigs dpe-skrun-khang*
- Tshe-dbang Lha-mo (1998) *Bod kyi brda-sprod rig-pa'i rnam-bshad sngon-med rig-pa'i 'phrul-shel, Krung-go'i bod-rig-pa dpe-skrun-khang*
- gSer-tog sku-'phreng lnga-pa Blo-bzang Tshul-khrims rGya-mtsho (1957) *gSer-tog sum-rtags, Mi-rigs dpe-skrun-khang*

参考資料

以下の文献を本文中で引用する場合、《書名》(出版年)とする場合がある。各種地名録の場合は《県名＋地名録》(出版年)とする。

地方誌類

- 《阿壩県誌》編纂委員會編 (1998)《阿壩県誌》成都：四川人民出版社
- 阿壩藏族自治州地方誌編纂委員會編 (1994)《阿壩州誌》北京：民族出版社
- 阿壩州地名辦公室編 (1987)《阿壩地名》馬爾康：阿壩藏族自治州地名辦公室
- 《道孚県誌》編纂委員會編 (1998)《道孚県誌》成都：四川人民出版社
- 迭部県誌編纂委員會 (1998)《迭部県誌》蘭州：蘭州大學出版社
- 甘南藏族自治州地方史誌編纂委員會 (1999)《甘南州誌》北京：民族出版社
- 甘孜州誌編纂委員會編 (1997)《甘孜州誌》成都：四川人民出版社
- 果洛藏族自治州地方史誌編纂委員會 (2001)《果洛藏族自治州誌》北京：民族出版社
- 李冬生編 (1997)《保縣誌 汶川縣誌 金川瑣記》馬爾康：阿壩州地方誌編纂委員會
- 《理塘県誌》編纂委員會編 (1996)《理塘県誌》成都：四川人民出版社
- 涼山彝族自治州地方誌編纂委員會 (2002)《涼山彝族自治州誌》北京：方誌出版社
- 《炉霍県誌》編纂委員會編 (2000)《炉霍県誌》成都：四川人民出版社
- 馬爾康県誌編纂委員會編 (1995)《馬爾康県誌》成都：四川人民出版社
- 木里藏族自治县誌編纂委員會編 (出版年なし)《木里藏族自治县誌》(送審稿) 内部
発行資料
- 色達県地方誌編纂委員會編 (1997)《色達県誌》成都：四川人民出版社
- 石渠県誌編纂委員會編 (2000)《石渠県誌》成都：四川人民出版社
- 四川省阿壩藏族自治州黒水県地方誌編纂委員會編 (1993)《黒水県誌》北京：民
族出版社
- 四川省巴塘県誌編纂委員會編 (1993)《巴塘県誌》成都：四川民族出版社
- 四川省宝興県地方誌編纂委員會編 (2000)《宝興県誌》北京：方誌出版社
- 四川省丹巴県誌編纂委員會 (1996)《丹巴県誌》北京：民族出版社

四川省甘孜藏族自治州新龍縣誌編纂委員會編 (1992)《新龍縣誌》成都：四川人民出版社

四川省若爾蓋縣地方誌編纂委員會編 (1996)《若爾蓋縣誌》北京：民族出版社

四川省《塩源縣誌》編纂委員會編 (2000)《塩源縣誌》成都：四川民族出版社

《松潘縣誌》編纂委員會編 (1999)《松潘縣誌》北京：民族出版社

天全縣誌編纂委員會編 (1997)《天全縣誌》成都：四川科學技術出版社

維西傈僳族自治縣概況編寫組編 (1990)《維西傈僳族自治縣概況》昆明：雲南民族出版社

鄉城縣誌編纂委員會編 (1997)《鄉城縣誌》成都：四川大學出版社

雲南省德欽縣誌編纂委員會編 (1997)《德欽縣誌》昆明：雲南民族出版社

雲南省維西傈僳族自治縣誌編纂委員會編 (1999)《維西傈僳族自治縣誌》昆明：雲南民族出版社

雲南省中甸縣地方誌編纂委員會編 (1997)《中甸縣誌》昆明：雲南民族出版社

地名錄

四川省阿壩縣地名領導小組編 (1985)《四川省阿壩藏族自治州阿壩縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠

四川省巴塘縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州巴塘縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠

四川省白玉縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州白玉縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠

四川省丹巴縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州丹巴縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠

四川省稻城縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州稻城縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠

四川省道孚縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州道孚縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠

四川省德格縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州德格縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠

- 四川省得榮縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州得榮縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省甘孜縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州甘孜縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省黑水縣地名領導小組編 (1986)《四川省阿壩藏族自治州黑水縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省紅原縣地名領導小組編 (1986)《四川省阿壩藏族自治州紅原縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省金川縣地名領導小組編 (1985)《四川省阿壩藏族自治州金川縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省九龍縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州九龍縣地名錄》成都：四川新華印刷廠
- 四川省康定縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州康定縣地名錄》雅安：雅安地區印刷廠
- 四川省理縣地名領導小組編 (1985)《四川省阿壩藏族自治州理縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省理塘縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州理塘縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省瀘定縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州瀘定縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省爐霍縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州爐霍縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省馬爾康縣地名領導小組編 (1985)《四川省阿壩藏族自治州馬爾康縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省茂汶羌族自治縣地名領導小組編 (1983)《四川省阿壩藏族自治州茂汶羌族自治縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省冕寧縣地名領導小組編 (1986)《四川省涼山彝族自治州冕寧縣地名錄》冕寧：冕寧縣印刷廠
- 四川省木里藏族自治縣地名普查領導小組編 (1986)《四川省涼山彝族自治州木里藏族自治縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠

- 四川省南坪縣地名普查領導小組編 (1983)《四川省阿壩藏族自治州南坪縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省平武縣地名領導小組編 (1982)《四川省平武縣地名錄》出版地不明
- 四川省壤塘縣地名領導小組編 (1985)《四川省阿壩藏族自治州壤塘縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省若爾蓋縣地名領導小組編 (1986)《四川省阿壩藏族自治州若爾蓋縣地名錄》馬爾康：阿壩藏族自治州印刷廠
- 四川省色達縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州色達縣地名錄》雅安：雅安地區印刷廠
- 四川省石渠縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州石渠縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省松潘縣地名領導小組編 (1983)《四川省阿壩藏族自治州松潘縣地名錄》巴中：巴中縣印刷廠
- 四川省汶川縣地名領導小組編 (1982)《四川省阿壩藏族自治州汶川縣地名錄》巴中：巴中縣印刷廠
- 四川省鄉城縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州鄉城縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省小金縣地名領導小組編 (1985)《四川省阿壩藏族自治州小金縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省新龍縣地名領導小組編 (1986)《四川省甘孜藏族自治州新龍縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省雅江縣地名領導小組編 (1987)《四川省甘孜藏族自治州雅江縣地名錄》成都：西南民族學院印刷廠
- 四川省鹽源縣地名領導小組編 (1985)《四川省涼山彝族自治州鹽源縣地名錄》西昌：涼山日報印刷廠

その他資料文献

- 成都地圖出版社編 (2004)《四川省地圖冊》(5版) 成都：成都地圖出版社
- 李濤・李興友主編 (1995)《嘉絨藏族研究 資料叢編》成都：四川藏學研究所

- 《羌族詞典》編委會編 (2004)《羌族詞典》成都：巴蜀書社
- 青海省編輯編 (1985)《青海省藏族蒙古族社會歷史調查》西寧：青海人民出版社
- 四川省編輯編 (1985a)《四川省阿壩州藏族社會歷史調查》成都：四川省社會科學院出版社
- (1985b)《四川省甘孜州藏族社會歷史調查》成都：四川省社會科學院出版社
- (1986)《羌族社會歷史調查》成都：四川省社會科學院出版社
- 肖堂龍主編 (2004)《稻城亞丁旅游介紹》瀘定：瀘定印刷廠
- 雲南省編輯組編 (1984)《雲南方誌民族民俗資料瑣編》昆明：雲南民族出版社
- 曾維益 (1993)《虎牙藏族》成都：四川省民族研究所
- (1997)《色爾藏族》成都：四川省格薩爾辦公室
- (2000)《龍安土司》成都：四川省民族研究所
- 張輔成 (2005)《神奇的九寨溝與黃龍》四川省創造學會經濟專業委員會・政協九寨溝縣委員會
- 趙心愚・秦和平編 (2003)《清季民国康区藏族文獻輯要（上・下）》成都：四川民族出版社
- (2004)《康区藏族社會歷史調查資料輯要》成都：四川民族出版社
- 趙心愚等 (2006)《康区藏族社會珍稀資料輯要（上・下）》成都：巴蜀書社
- 中国国家地理雜誌社編 (2004)《中国国家地理 第7期 大香格里拉專輯》北京：中国国家地理雜誌社
- 中国人民政治協商會議茂縣委員會主編 (1989)《羌人列國要記》茂縣：茂縣印刷廠
- Krang dByi-sun [張怡蓀] (1993) *bod rgya tshig mdzod chen mo* [藏漢大辭典], Mi-rigs dpe-skrun-khang
- bTsan-lha Ngag-dbang rnam (2003) *rGyal-rong zhib-'jug dpyad-yig phyogs-bsgrigs*, Krung-go'i bod-rig-pa dpe-skrun-khang